

リミテッド・ストラトス

フラワーワークス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

イギリスのIS代表候補生、セシリア・オルコットには幼馴染がいた。

『彼』と振り返るその少年は、彼女の両親と一緒に事故に会い、帰らぬ人となった。

しかし、IS学園で『彼』と瓜二つの少年と出会う。

名前は、一（にのまえ）十三八（とみや）。

通称トミーと呼ばれる彼の乗る機体は、男性でも扱えるように作られたISの模造品であった。

ISもどき、紛い物、レプリカ、デチューン。

人はIS【インフィニット・ストラトス】と比較して、LS【リミテッド・ストラトス】と蔑んだ。

これは、「インフィニット」が変えた女尊男卑の世界で、「リミテッド」の少年が歩む物語。

※インフィニット・ストラトスの二次創作です。

目次

Prologue	記憶の中の小さな騎士	1
異端者の入学		
I	IS学園一年一組	12
II	リミテッドの由来	22
III	闘技場のワルツ	33
IV	織斑一夏は空を飛ぶ	44
Extra		53
V	一三三八の幸運な一日	56
VI	無垢な敵意	67
VII	愛情ランチと課外訓練	75
VIII	最強もどき	86
IX	実験用鼠の命は誰がために	96
X	瞳の奥にあるものは	106
XI	気持ちの名前	119
XII	雨の中のストレンジャー	128
XIII	英雄は求められるから成るわけで	138
XIV	金髪と銀髪の転校生	146
XV	弟は姉のものだとブリュンヒルデは言った	153
XVI	セシリアは見た!	164
XVII	三人寄ればの三人の内訳	175
Extra	世界の中心の組織にて	184
XVIII	何をするかよりも誰がするか	187
XIX	少女は少年の背中に虹を見た	195

XX 雨が降ったあとすぐはぬかるみ

204

親しき切磋琢磨

21. 僕の好きなもの | my favorite thing

s | 216

22. 盤上の戦い | what's your piece? |

225

23. 少女の決意 | Je voudrais | tre | c

▪ t ▪ de toi | 234

24. シェンロンとの戦い | fighting of the

dragon | 238

25. かつてをなぞり未来をのぞむ | Im Liebe fue

r immer | 246

26. 時代遅れ | old fashion | 255

27. 「信じて」という言葉には「試して」という意味もあるらしい

try me | 267

28. 友達がいつもと違って見えるとき | fall in : 278

29. バグ技は本体を痛める恐れがありますので | Guilty

Power | 287

30. 表のハッピーエンド。裏のビターエンド | Othello

Game Over | 299

31. あるモノの心と大人の心 | identity crisis i

s | 307

Extra. ある豪華な建物の会議室にて

Extra | 320

Extra かいせつ! ※31話時点まで

Extra | 325

揺れ動く遠出

三十二話	たそがれ十三八(トミヤ)	332
三十三話	篠ノ之神社は誰でもウエルカム	341
三十四話	生徒会の煩悶	351
三十五話	おいでませルクーゼンブルク	356
三十六話	怪物、襲来	365
三十七話	とある侍女(メイド)の憂鬱	372
三十八話	英国空中戦(バトル・オブ・ブリテン)	380
三十九話	苦勞人さんの愛想笑いでない破顔	388
四十話	忙しい現代人に一本のフレーバーを	397
四十一話	上司はたいいてい嫌われるけど好きで嫌われている訳じゃない	408
四十二話	オルコット航空は快適な空の旅を保証しません	415
四十三話	暗闇の中のボーイ・ミーツ・ガール	422
四十四話	ワンダーランドに迷い込んだお姫様	433
四十五話	掌(てのひら)返しは押さえつけられていたものほど舞い上がる	445
Extra.	どことも知れないラボの中にて	452
Extra.	かいせつ つー!	454

世界を変えたチカラ

46話	入学する若者はいつか卒業する大人にならねばならない	457
47話	安らぎと厳しさと謀略はホームグラウンドだからこそ	467

48話	部活動で先輩が後輩に舐めてかかるのを見ると先生は	
-----	--------------------------	--

プツンしそうになるんです

476

49話 グレートなティーチャーを目の当たりにすると実際困る

487

50話 世界を支配する可能性を秘めた力はごく身近にあるかもしれない

497

51話 福音とはグッドニュースということです。バツドな話も塞翁が馬ということまで

507

52話 ミーティングは参加者が少なくても別個の視点があれば有意義

517

くじけぬ心

53話 剣士の友情

522

54話 素晴らしい環境

531

55話 夏のBeachに悪ノリGirls

538

56話 先輩の視点

549

57話 前夜祭

555

58話 夏のマスカレード

563

59話 青春の夏。陰謀の夏。

573

60話 男と女、面子と情

582

Extra それぞれの舞台裏

592

Extra かいせつさん!

595

お家の事情

六拾壹 伸びるときは一気に伸びる

600

六拾貳 人は自分のことほどわからない

608

六拾参 テストプレイ・レビューアー

618

六十四 憂鬱でない休み明け。大人は別

626

六十伍	生徒会長の直接指導	632
六十六話	執事修行	638
六十七話	渋いお茶と甘いケーキ	647
六十八話	ケンカ相手はたいてい身近	656
六十九話	フランスの雪風	667
70・	口に出せない者たちと、口から噴き出たモノ	677

Prologue 記憶の中の小さな騎士

遠い幼い日、私の両親はとても仲が良かった。名家オルコットの頭首であるお母様は厳しくも公平で、婿養子だったお父様は気が小さいがとても優しくかった。3人でいろんなお国を回ったり、豪華なレストランで美味しい料理を食べたりしたことは、それがお母様の経営する仕事のついでであつても、私にとっては貴重な家族旅行だった。

ただ、旅先でお会いする方々はみんな自分より年上で、同年代との触れ合いが少なかったことだけが、ちよっぴり寂しくもあつた。

だから、ある国で知り合った学者さん夫妻と、両親がビジネスパートナーとして親しくなるよりも早く、同じ年の息子さんとお近づきになれたのは自然な流れだったと思う。

とは言つても、彼にはだいぶわがまを聞いてもらつて、手を焼かせていたことだろう。その頃はひとところに大人しくなんてできなかったものから、お洋服はいつも汚すし、怪我をするのもしよつちゆうだった。心配性なお父様はいつも私を視界の中に置いておかないと落ち着かないご様子で、お母様からは事あるごとにきつくたしなめられていた。

それが、彼と一緒に遊ぶようになってから途端に淑女になつていったものだから、両親は奇異の目で彼を見ていた。

お父様は彼と話す機会があると、

「セシリアは君と出会つてから、喧嘩を一つもしなくなつてね。とっても嬉しいよ。それにしてもいったい、どんなエスコートをしてくれているんだい？」

などと本気で疑問に思っているようだった。

彼は空色の瞳を丸くして、

「セシリアはお嬢様だから、そんな野蛮なことなんてしないんだつて言つてたよ？」

ね、と微笑みかけてきた。

私は顔を紅潮させて、半分口を開けたお父様に向けて精一杯肯定し

てみせた。

白状するならば、同年代の彼に対して、自分が名家の娘であることを利用してうわてに出ていたのは否めない。今ならまだしも、その頃は普段使っていなかったお嬢様口調を無理に作って、身振り手振りも交えた演出なんてしたりもしていた。

そんなおままごとの、お相手の彼は下僕役。ああしなさいこうしなさいという、私の無理難題に律儀に応じてくれていた。私のお相手を務めるならば、もつとお強い騎士でなければなりません。なんて出まかせにも、まともに相手をしてくれた。

「荒事は僕の役割なんだって。でも、僕はてんで弱虫なんだって……。もつと強くなりたくないなあ」

それは心強いわね、と、彼の鉛色のショートヘアを撫でたのは、なんとあの厳しいお母様だった。後で聞いた話だが、彼の両親はとても聡明であるらしく、彼を利用して抱きこみたいという計らいがあったらしい。

そんなことなど知らなかった私にとって、命令をなんでも聞いてくれて、お母様のお眼鏡にも適った彼は、とても便利な小間使い（おともだち）ができたと喜んでいた。

それから、私たち家族と彼の家族はすぐ仲良しになった。お母様の大変な仕事柄、家族ぐるみの仲と呼べる相手は、親族を含めてもほとんどいなかったものだから、周りの大人たちは彼の父親を「大学者（サヴァント）」などと呼んでいた。頭でっかちな変わり者、という皮肉を込めたものだったが、その呼び名を気に入ったのか、私の両親も親しみを込めてそう呼んだ。実際に、彼の父親はお母様の会社のコンサルタントとして目覚ましい実績を上げていたし、同時にその振る舞いは年がら年中春であるように明るく楽しそうで、確かに変わり者に違いないとみんな思っていたからだ。

そんな楽しい日々も、しかし長くは続かなかった。

IS（インフィニット・ストラトス）の登場。

現行のあらゆる兵器を凌駕し、世界のパワーバランスを崩壊させた

無敵の機体。

それが女性にしか扱えない、という明確な理由によって、新しい風は瞬く間に世の中を席卷した。ISの登場前で例えるなら、核兵器や戦闘機や戦艦や戦車、そういった現代軍事関連が女性にしか動かせなくなつたようなもの。古い時代の騎士や侍がいかにも刃を振りかざすうとも、現代兵器に適うはずもない。

男性はか弱く、女性は強い。

世界は女尊男卑へと変わっていったのだ。

それは次第に常識となつて、私の家にも忍び寄ってきた。

真つ先が変わつたのはお父様だった。もともと常識人だった性格が災いしたのか、それとも婿養子という立場故か。男卑という言葉はその身で表しているかのように、お母様にも私にもかしずくようになっていった。

お母様も、そんな男が自分の亭主であることに嫌気がさしたのか、厳しい性格も災いして軽蔑するようになっていった。

大好きなお父様と、大好きなお母様が、私の中で次第に大嫌いになっていく。

「大学者——！」

私は助けを求めた。これまでも、困つたことがあつたら大学者の知恵をかりていたからだ。お母様の仕事で問題が発生したとき、プライベートで詐欺にあつたとき、強欲な親族が無心に来たとき……。

きつと今回も助けてくれる、という期待と共に、親しい彼に会いたい気持ちもあつた。心の中にあるわだかまりを、すべて吐き出させてくれるのは彼しかいないと思つたからだ。

果たしてその思いが通じたのか、お母様は彼の家族を家に呼び寄せた。きつと、仕事上の相談のためだろうが、私は大学者が何か手を打つたのだと思つた。

再開してすぐ、冷たいお母様と、卑屈なお父様は、以前と何ら変わりがなく仲睦まじい大学者夫妻に驚きをもつてなした。お変わりがないようで何よりです、というお母様の挨拶に、大学者夫人は、うちは変わり者ばかりですから、と口に手を当てて微笑んでいた。

「この通り、元気なのが取り柄ですからな。いやはやご無沙汰してしまいました。思えば、世はすっかり女尊男卑。月日と人の心が移り変わるの早いものです」

本当に大学者の言う通りだと思った。前に会った時は、私の家族関係もそれほどギクシヤクしていなかったのに。彼の家族はまるでその頃と変わっていない。大学者はお母様の経営する会社以外にも沢山の企業の相談役を受け持っている。それなら増して女尊男卑の風潮を目の当たりにしているはずだ。

なのに、大学者は奥様と肩を寄せ合って、一つ記念写真をよろしいですか、などとオルコツト家の紋章を背景に携帯端末で自撮りなんてしている。お母様とお父様は目を丸くして顔を見合わせた。すごい。二人が顔を向き合った場面なんて、ここしばらく見ていなかったのに。

私の嬉しそうな表情に気づいたのか、大学者は下手なウインクをこちらに向けてると、わざとらしい咳払いをして見せた。

「ウオツホン。さて、本日は最高のビジネスの種をお持ちしましたぞ。ずばり、女尊男卑活用術というものです！ そう、これからはレディーファーストではなく、ボーイファーストを普及してしまえばよろしい。例えば男性の集まるゴルフ場や遊技場にボーイズデーなどを設けようというアイデアです。だいたいですな、オルコツトさん。これからは好景気が約束されているのですぞ。なぜなら、世の中の消費は女性が握っているのですから！」

通された応接室のソファーに腰掛けるなり、大学者は仕事の話を持ち出した。世の中の変貌に乗ったビジネスだとか、弱い立場になった男性向けのアクションだとか。お母様はソファーに深く腰を下ろして神妙に聞き入っていた。お父様はお飲み物や茶菓子の用意など、相変わらず小間使いに徹しようとしているが、大学者夫人がその手を止めさせて、一緒に座るようにいざなった。

一つのソファーに、両親が二人並んで座っている。

その光景に、私は大学者を呼んでよかったと心から思った。

「さあ、お仕事のお話の邪魔をしないよう、私たちはあちらへ向かいま

しよう」

私は彼の手を引いて家の中庭へと飛び出した。

家族で座ることのなくなった、噴水のそばの西洋風東屋(ガゼボ)に着くと、屋根の下でダンスを踊るようにクルツと身を翻して見せた。今の私は近頃なかつたほどに上機嫌だ。自然とその口も饒舌になる。

だらしなくなつたお父様。冷たくなつたお母様。そうさせてしまった世間の風潮。

とりあえず座ろうよ、と先に腰掛けた彼のなだめも意に介さず、大仰な振りも交えて愚痴は続いた。時折彼の顔を振り返ると、じつと私の話を聞いてくれていた姿に、しかし安堵する以外の感情が込み上げてきた。その姿は以前と変わらず幼いままだつたからだ。成長期は男性よりも女性のほうが早く身体が大きくなるから、いつの間にか私のほうが体格で勝つてしまっていた。それが、女尊男卑が自分と彼を巻き込んでしまっているみたいで、不意にイライラが募ってきた。

そこに、

「ダメだよ、セシリア」

ソプラノがアルトに変わりつつある彼の声が、優しく私の耳に届いた。

「セシリアはお嬢様なんだから、ちゃんと言葉を選ばないと」

困つたように微笑む彼。私は揺れ動き始めた感情の糸が、彼に手を添えられて落ち着いていくように感じた。

「それに、セシリアは、ちゃんと頑張っているよ」

何を頑張っているというのか。

「このあいだ、ヴァイオリンの演奏会で入賞したそうじゃないか。おめでとう。君のパパがとても誇らしく思っているって、僕のところにも連絡が来たよ」

いつの間に……！

私は離れていく両親の気を引こうと、ヴァイオリンやピアノを習っていた。自分に何か優れたことがあれば、それは両親が優れているからだと周囲にアピールすることで、二人の仲を繋ぎ止められるのではないかと思つたのだ。

入賞したときにお父様からお褒めの言葉は貰ったけれど、どうして彼のもとにまでわざわざそんな話をするのか。

彼は、君のパパからは内緒にしてくれって言われたんだけどね、と前置きをして話した。

「セシリアのパパも、ママも、本当は分かっているんだ。このままじゃダメだって。娘に気を使わせる親なんて、最低だって。でもね、もう、変えられないんだって。世の中は変わってしまったから。今さらセシリアのママとパパが仲良しに戻っても、周りはそのを受け入れないだろう、って」

彼はため息を着くと、視線を床のプレートに落とした。

「セシリアのママは、僕のパパと違ってとっても偉い人でしょう？だから、周りの人たちの理想のモデルにならなきゃいけないんだって。それが、高貴なる者の義務（ノブレス・オブリージュ）、っていうの？ なんだって」

「それじゃあ……！」

私は叫んだ。高貴（ノーブル）なんて知らない。オルコット家なんて、欲の皮の突っ張った親族（やつら）にあげちゃえばいいんだ。そうしたら、お父様とお母様は、元の仲良しに戻れるんだから！

そう言うと、彼は初めて怒ったような顔を見せた。

「そんなこと、冗談でも言っちゃダメだよ、セシリア」

彼の視線が、鋭くて痛い。

「君のパパはね、君のママとお家をとっても大切に思っているんだ。だから、男の人が弱い世の中を受け入れたんだ。それはセシリア、君が大人になったとき、君に活躍してほしいからなんだよ。君のママがお仕事を頑張っているのも、君とお家を、本当に大切に思っているからなんだよ。だから、お家をいらさないなんて、絶対に言っちゃダメだ！」

私は寒いお部屋に入れられたみたいに、息をするのが苦しく感じた。目の前の、自分よりも小さな少年に、私が氷の中に落としてしまった大切な宝石を掬い上げて突き返されているようだった。

そう言葉に窮していると、彼はふと、表情を緩めた。

「ゴメン、セシリア。ちよつと言いすぎちゃった。変だよ、男の僕のほうが弱いはずなのに、女のセシリアに怒っちゃうなんて」

しまりが悪そうに頬をかいて、

「僕ね、君に言われてから強くなるために、剣の習い事を始めたんだ。でも、やっぱりでんでダメダメでさ、まだ誰にも適わないんだ……。やっぱり、僕には騎士じゃなくて、執事なんかのほうが合っているんじゃないかなあ」

「そんなことありませんわ!」

私は叫んだ。今日の私は感情が上がったり下がったりだが、これが一番声の通りが良かった。

「私の騎士は、あなた以外にありえせんわ! 剣を習ったんですって? 私もたしなむ程度に身に着けておりますの。強くなりたいのでしたら、今からでもまったく遅くありませんわ。あなたになら、そう——女尊男卑を跳ね返すくらい強くなれますわ!」

「い、いつもながら無茶ぶりが過ぎるよ、セシリア。僕に世の中を変えろって言うの?」

「できます。私が保証します。さあ、そうと決まれば早速稽古を始めましょう。まずは有象無象の下郎どもからなめられないよう礼儀作法についてです。木の枝一つでもあれば剣礼の練習もできますでしょう。さ、お立ちになって」

「相変わらず、押しが強すぎるよ、セシリア……」

彼は苦笑いを浮かべながら、素直に座席から腰を上げた。

彼が不器用なのは知っている。剣を格好良く振るう姿なんて想像もつかなかった。執事のほうが似合っているとも思った。けれど、彼にはお父様のように弱い男を受け入れてほしくはなかった。

自分以外の誰かが、彼を見下すような事が無性に受け入れられなかった。なぜなら、彼は私の大切な、大切な、人なのだから。

私は彼の手を取って、一緒にお辞儀や歩き方の作法を出来るようになるまで繰り返した。相変わらず覚えが悪くて躓いてばかりだが、上手く出来たときは自分のことのように嬉しかった。

指導にも熱がこもってきた。彼は転んで膝を擦りむいても、決して

諦めようとはしなかった。その姿に、なんだかとても愛おしく感じた。

レッスンは東屋（ガゼボ）が作る日影が噴水を覆うほど東に長くなるまで続いた。風が少しひんやりしてきて、汗をかいた肌にちょうどいい。

「……できた！ できたよセシリア、全部できた！」

歩行、礼法、剣礼、全てノーマスでやり通した彼は、私の手を取ってピョンピョン跳ね上がった。私も釣られて飛び上がる。

「当然ですわ。私が指導したのですから」

「うん、ありがとう！ やっぱりセシリアは偉いんだね」

「そうはそうですわ。私はイギリスの名門オルコット家の娘、セシリア・オルコットなのですから！」

自然と、私は笑顔になっていた。教えた内容はその分野の基礎ではないが、私も彼も一つ大人になったように思えた。私はレディに、そして彼は……。

「やあ、ずいぶん楽しくやっておりますなあ」

唐突に、声が二人の間に挟まった。振り返ると、お父様とお母様、そして彼の両親がいた。

私は邪魔をされたように感じて不満顔を作ったが、今にして思えば、私たちを見ていた大人たちの顔は、みんな柔らかい表情だったかもしれない。

「すみません、お召し物を汚してしまいました。ああ、お怪我まで。その……」

お父様の謝罪に、大学者は手をかざして遮った。

「いやいや結構。擦り傷は子供の勲章、土はついてこそ根を広げて大きく育つものですからな。それに、とびつきりのレディと一緒に遊ぶことができたのですから、きつとウチの息子も幸せ者でしょう」

「まあ、お上手ですこと。でも、ウチの娘はまだレディと言えるほどお行儀が良うございませんわ」

お母さまが少し鋭い目つきを向けてくる。そこに、彼が間に入つて、何か言おうと口を開きかけた。

と、その前に彼の父親が饒舌をつづけた。

「何をおっしゃいますやら。どんな宝石も磨かなければ輝きはいたしませんまい。土や石に擦られて綺麗になっていくものでしょうぞ。それに、彼女は今のままでも十分、美しい」

「原石とおっしゃっていただけるのは光栄ですが、石ころに見間違えられるのは宝石にとって酷でしょう」

「いやいや、物を見る目がない愚者を気にして、宝石を金庫にしまっておいては意味がございません。宝石は大事に保管するものではなく、身に着けて輝きを外に放つためにあるのです。『美』というものは人の心を良くするもの。世のため人のために思えばこそ、美しいものは人目にさらすべきでしょう」

「世のため人のためとは、ずいぶん良いようですね。娘は見せ物ではありませんわ」

「いやはや誤解でございます。そんな理由で申したわけではありません。そうですね、ここで一つ価値体系というものをお話しします。人で、これをお聞きになれば納得しましょう。よろしいですか？ 人というものは『心』と『体』で出来ております。『体』にとって重要なのは健康と富。これに異論はないでしょう。そしてここからが大事なことです。『心』にとって大切なことを、多くの皆様はお考えにならないのが残念でならない。よろしいですか、『心』にとって大事なものは、それは——」

「あなた」

大学者の左腕を、ご婦人が叩いた。

「もうそろそろ行きませんと、列車に乗り遅れてしまいます」

「む、もうそんな時間か。むく、いいところでしたが仕方がありません、講義の続きは列車の中でといきましょう」

まったく大学者の話は長つたらしい。それが止まったことに内心ホツとしたが、

「列車にお乗りには？ どちらか、ご予約があるんですの？」

ああ、と彼が思い出したように答えた。

「実は今夜、ロンドンのある会社に行くことになってたんだ。何でも、

僕もお呼ばれされたらしくてね。一緒に行かなきゃならないんだつた」

「まあ、それでしたらこんなになるまでお稽古なんてしなくてもよかつたのに」

「ううん、大丈夫。着替えは持つてきてるし、僕はセシリアと一緒に遊べて楽しかつたよ」

疲れを微塵も見せずに、屈託なく笑う彼。

私はレツスンでたくさん動いたせいか、にわかに関が熱くなつてくるのを感じた。

「セシリア、お母さんも彼らの行く会社にお話があるの。お父さんには荷物を運んで貰わないといけないから、少しだけお留守番して頂けないかしら」

お母様が、私の視線に合わせて話した。お父さん、という言葉その口から聞いたのはとても久しぶりだった。

「ええ、大丈夫ですわ。行つてらっしゃい、お母様、お父様」

「よろしくお願いね。大学生(サヴァント)たちには明日も来てもらうから、今度は貴方の好きなお場所に会場を移しましょう。そのほうが、貴方達も楽しいでしょうし」

「本当ですよ!」

やつた! 私は感情を隠しきれず飛び跳ねた。

彼と一緒にどこへ行く、何をしよう。

お母様たちは腰を落ち着ける場所があれば良いのだから、イートスペースがあれば遊園地でもテーマパークでもきつと大丈夫かもしれない。

ソワソワといろんなことを考えていると、彼がニコニコ顔を覗いてきた。私は一つ咳をして身なりを整えると、弾む気持ちを抑えて精一杯おしやまして見せた。

「また明日ね、セシリア!」

「ええ、また明日。楽しみにしていますわ」

大きく手を振る彼に、我慢して小さく手を振り返した。はしたない姿は彼の前では見せたくない。

ああ、本当に明日が楽しみだった。きっと今夜は楽しい夢が見られるだろう。

私は今までにないほど安らかにベッドに横になった。そして、
ーー待ち望んだ明日は、来なかった。

私の大切な人たちを乗せた列車が、事故にあったのだ。

青ざめた顔の侍女からその話を聞いた時、私は世界が暗転して見えた。

再びベッドの中で目を覚まし、全てが夢だったに違いないと願って、身支度を済ませ外へ顔を出すと、神妙な面持ちで家の使用人に話をする警官達の姿が見えた。

私の姿に気がつくと、警官はとてもすまなそうな表情で、真実を告げる職務を全うした。

「君のお父さんとお母さんが、ご友人方と共に、天に召されました」

私は足元に奈落の穴が開いたように感じて、なすすべも無く崩れ落ちた。

異端者の入学

I IS学園一年一組

IS学園。

ISの搭乗者、及び整備者等の育成機関として世界的な権威のある学舎。IS先進国の一つである日本に設置され、世界中から生徒が集まるこの学校には、国家のIS代表候補生も多く名を連ねる最優秀の教育機関である。

その狭き門を潜った生徒は名実ともにエリートであり、あらゆる期待と誇りを背負わされた次代を担うホープとされていた。

(そう、思っていたのですが……)

その学園の一年一組、後列上段の席に座るセシリア・オルコットは、同じクラスの生徒たちに些か落胆していた。

クラス担任の、第一回IS世界大会モンド・グロツソの優勝者、織斑千冬の姿を見るや、アイドルを目の当たりにしたような黄色い歓声があがる。

さらにその弟、女性にしか扱えないISに、男性でありながら乗ることの出来た稀代の逸材(クラスメイト)、織斑一夏には好奇の視線が集まっている。

(ミーハーな生徒も多いと聞き及んでおりましたが、これほどとは……)

セシリアは自然と頬杖をしそうになったところを慌てて正した。流石に登校初日に教員のいる前ですることではない。

それに、IS搭乗者に羨望が集まるのは無理からぬことだった。ISは兵器として以外にもスポーツとしても運用されている。選手は巷ではアイドルのように扱われ、ファンブックや週刊誌への掲載などもされていた。

そんな訳で、IS学園に通う生徒の中にはアイドル志望と変わらぬいい気持ちの者が少くないのだった。

「俺の名前は織斑一夏です！……以上です！」

珍獸さんの簡潔すぎる自己紹介に同級生が呆れる中、セシリアは彼を含むクラスメイトの殆どに対しても呆れていた。

「いったい、この同級生の中にはIS学園の生徒であることに誇りを持つている者がどれくらいいるのだろうか。自分のように国家代表候補生でなくとも、IS学園に入りたい多くの人を掻き分けのし上がった責任感はあるのだろうか。」

「自己紹介くらいちゃんと出来んのか、馬鹿者が」

織斑先生の出席簿を使った一撃が一夏の脳天に炸裂する。他の生徒たちから笑いが巻き上がった。

あの《ブリュンヒルデ》と呼ばれた織斑千冬先生になれば、きっと自分が期待するものを背負っていることだろう。

（いえ、私の抱えているものは決して彼女に劣るものではありませんわ）

口を結び、手をギュツと握り締める。視線の先には自分の名前が書かれた学生証が机の上に置かれていた。

父親が男性としての誇りを捨てても護ろうとし、母親が精力を込めて磨き上げた”オルコット”の家名。その遺児たるセシリアがただ一人で担う覚悟は常人のそれではないと自負していた。

両親亡き今、金の亡者共から家を守るためにあらゆる策を講じてきた。その中で受けたIS適性試験でA判定を得るや、努力の末にイギリス代表候補生にまで登り、入学試験ではトップに詰めた。

挫けそうになる瞬間もあれど、亡き親友の言葉を励みに歯を食いしばって戦ってきた。

『セシリアは、ちゃんと頑張っているよ』

『セシリアは、偉いんだね』

心の中で響く声の主が、可能ならば隣にいて欲しいと願ったことは数知れない。しかし最早、幼い彼の幻を瞼の裏に空想することしかできなかった。

「次、立って自己紹介をしろ。ちゃんとクラスメイトの方を向けよ」

ザワ、と空気がにわかに変わった。織斑一夏の順番の時と同じようにだ。

そういえば、このクラスには”もう一人”男性でありながらISを動かせる者が配属されたのだ。最前列下段に座る彼が、後ろ同級生たちの方へ向き直る。

ふと、その揺れる髪に既視感があった。

(鉛色のショートヘア……)

彼と同じ髪だ。

しかしそう思うのはもう何度目だろう。これまでも、似たような色の髪を目にした時は自然とその姿を追っていた。

我ながら女々しいと思うが、相手の顔を一瞬で判別出来るようになった。

目の前の彼は眼鏡をかけていた。だいぶ悪いのか、グラスが分厚くて奥が覗けない。額に紋様のような痣がある。しなやかな体格。シワの無い制服。

と、光の加減か眼鏡の奥がチラリと見えた。その瞳の色は、透き通るような空色(スカイブルー)。

「——あなたは!!」

叫び、席を蹴って立ち上がった。彼だ、彼がいる。

周囲がざわめくが知ったことではない。ただ彼だけしか見えなかった。

と、そこに、

「邪魔だ。座れ、オルコット」

織斑先生の有無を言わせぬ言葉に我に返った。

先生は、知り合いか? と彼に尋ねる。私はじつとその口元を見て、

「いえ、会ったことは無いハズです」

失望と自嘲の気持ちと共に、席に付いた。

すみません、知り合いに似ていたもので、とかうじて絞り出した。数瞬の間を置いて、副担任の山田耶麻先生が裏返った声で自己紹介の再開を呼びかけた。場馴れしていないのかぎこちない。

彼は改めてクラス全体を見渡し、

「はじめまして。僕の名前は一(にのまえ)十三八(とみや)といいま

す。僕はみなさんと同い年ですが、少し立場が違っています。IS企業団から出向という形でご一緒させて貰いました。どうかよろしくお願ひします。特に……」

顔を一夏の方に向けて、

「正直、同じ男性の同級生がいたことにとっても嬉しく思っています。たぶん男が僕一人だけだったら挫けていたかもしれないから。他のみなさんも、どうかお手柔らかにお願いします」

にこやかに告げて頭を垂れた。テノールの声音は聞きやすく、トクテンポは絶妙だった。彼の後の順番だった布仏（のほとけ）本音（ほんね）がやけ間延びした話し方なものだから、余計に印象に残った。チラリと十三八を見ると、一夏となにやらアイコンタクトを取っている。四面楚歌に陥った仲間同士のシンパシーだろうか。そういうところは普通の少年に見えた。

当然、自分の知っている彼の名前とは似ても似つかなかった。



十三八のあだ名はトミーに決まった。名付け親は隣席の布仏本音。一字しか違わないが、呼び名がある事で仲間意識が生まれるだろうと喜んでいた。

「それにしても、トミー、と初日から呼んでもらえるなんてコミュニケーション力高いよな。俺にも少し分けてほしいぜ」

休憩時間、借りてきた猫のように自分の机で動けずにいた一夏のもとに十三八、もといトミーが話しかけていた。周囲では女性同士の会話が広がり、チラリちらりと二人の様子を伺っている。

「隣の布仏さんが話しやすい人で助かっただけさ。後は仕事柄もあるかもね。知らない人と会話をキープすることなんてしょっちゅうだったし」

「そーいやあ、企業団からの出向って言うってたけど。どこの会社から来てるんだ？ いや、話せないなら無理にとは言わないけど」

「うーん、それじゃあ、国連関連企業ってことで一つ」

「国連!? それ凄いところじゃないか」

「成り行きだよ。僕は並外れてラッキーなんだ。実は、君のお姉さん

とも面識があるんだよ」

「千冬姉と？　なんだよ、だったら入学前に顔合せして欲しかったぜ。あ、そうだ」

話が弾んで緊張が和らいだのか、一夏は同じクラスにいる自分の知り合いを探し出した。

「箒！　おーい、久しぶりに話そうぜ。トミーのやつ、千冬姉と知り合いらしいんだ」

箒、と呼ばれた少女は、ビックリ、と身を震わせると、おずおずと振り向いた。ポニーテールが特徴的で、自己紹介の時には凛とした印象があった。今は少し大人しそうだが。

「な、なんだ一夏。別に知り合いの知り合いだからといって、親しくなるわけでもないだろう」

不満を口にしつつも一夏の席に近づいてくる。

「ちよつと箒と話すきっかけが欲しかったんだ。6年ぶりに会ったつてのに、顔も合わせてくれないんだから寂しかったんぜ」

「そ、そうか？　そんなに、寂しかったのか？」

「当たり前だろ。お前が中学の時に全日本剣道大会で優勝した事とか、たくさん話したいことがあったんだぜ」

そうなのか、とまごまごする箒に、トミーは何となく彼と彼女の関係について察することができた。はくん、と笑みが浮かんだ。こういういじらしいやり取りは、目の当たりにすると微笑ましく感じるものだ。

織斑一夏が篠ノ之箒と幼馴染だと改まって紹介された時、箒が一瞬目を泳がせたこともあって、ある種確信めいたものを感じた。

「改めてよろしく。篠ノ之さんのことも、名前だけは知っていたよ。と言ってもお姉さんが有名人だから、って理由で複雑かもしれないけれど」

「箒でいい。姉のことは私と関係ない」

断言は鞘から覗く白刃を思わせた。彼女の姉の風聞について知るトミーは、踏み込まないほうが懸命だと思った。

「それじゃあ、僕もトミーと呼んで。こう、気安く呼び合える間柄っ

て、なかなか新鮮な感じだからさ」

「トミーには幼なじみがないのか？」

「残念ながら。特に異性でとなると、まるで出会いが無い環境だったから」

「そっか。まあ、居たら居たらで面倒かもしれないぞ」

「どういう意味だ、一夏」

いや別に、とじゃれあいが始まろうとした矢先、学校の予鈴が響いた。めいめいに机に戻り、最初から自分の席に座っていた一夏は、早速できた友人に幸先良く感じながら見送った。

だから、気が付かなかった。その後ろから三人を見ていた、金髪の少女に。

◆ 入学日の学校についての説明も一段落し、今はお昼休みとなっていた。

IS学園のランチルームは、流石に世界的権威を誇る学園だけあって開放的かつ豪華な作りをしていた。有名カフェのテラスや一流ホテルのラウンジを思わせる空間に、さも当たり前のように入っていく金髪の少女、セシリア・オルコットは、窓際の席で友達とくつろぐ目当ての人物へ歩を進める。

一緒にいる男、一夏はリアクションが大きく、その会話がよく聞いて取れた。

「じゃあ、世界初の男性IS操縦者って、俺じゃなくてトミーだったのか」

隣の筈はポニーテールを揺らし、

「新聞などで見なかったのか？ だいぶ騒がれていたんだぞ」

「いや俺、入学試験の勉強でいっぱいだったからさ。なんだ、それなら世間も俺をそんなに注目しなくなっただって良いのにな」

「いや、そうとは限らないよ、一夏」

トミーが分厚い眼鏡を光らせる。

「僕の場合、ウチの企業が作った試験的なユニットのサポートがあったてこそ出来た訳だからさ。純粹に何の変哲もなくISを起動させた

「一夏とは話が違うんだよ」

「そうなのか？ 動かせられるのは同じだろ」

「サポートユニットがなければ、本当に動かせるだけなんだ。適性試験はC評価。もっと細かく言えばC―だよ。普通落第だ」

「そういうやあ、俺はBって言われたな。それ、凄いのか？」

「……悪かったな、一夏。私だってC評価だ」

「ああ、いや、ゴメン箒！ 別に悪気があった訳じゃないんだ」

「ふん……。まあ、評価なんてただの指標だ。これからいくらでも挽回してみせるさ」

「――その通りですわ」

ソプラノの声が3人の会話の輪に押し入った。

見れば、周囲の調度品に溶け込むような女の子が立っている。何をせずとも、自然と周りの視線を集めていた。

「入学時点の評価なんて目安の内にも入りませんわ。大事なのはこの学園でそれをどう磨いていくか。そうは思わなくて？」

さり気なく自分の胸に手を当てる姿は綺麗な西洋人形を思わせた。

一夏は彼女の名前を思い出そうとし、

「ええと、たしか、トミーの自己紹介の時に割り込んできた……」

「セシリアさん」

「そう！ セシリア、……ええと」

「セシリア・オルコットと申します。貴方も殿方でしたら女性の名前をちゃんと覚えてはどうかしら。お隣の彼のように」

チラ、と流し目を向ける先、自分の名前を言い当てたトミーを見遣った。

近くに立って、やはり似ていると、亡き親友の姿を嫌でも思う。成長していれば丁度このくらい、自分よりも背が高く肩幅も広くなっていたことだろう。

「まあ、僕と似ている人がいるって言ってたから、ちよつと気になってただけなんだけどね」

トミーの言葉にチクリと胸が痛くなった。

「あら、それでは私の名前以外にはご存知無くて？」

「まさか。イギリスのIS代表候補生にして、名家オルコットの御令嬢さまでしよう？ そちらの国の会社さんともツテがあつてね。にしても、同じクラスになれるとは思わなかったよ」

一夏は少しトミーの耳元に近付き、

「なあ、代表候補生って、何だ？」

「オリンピック強化選手みたいなイメージでいいと思うよ」

「つまり、普通より少し凄いつていうことか」

「一夏、その言い方は多くのスポーツマンを敵に回すよ」

「ええ！ ワタクシ、ISに関して少しだけ、凄いというだけですの！」

ヒソヒソ話をぶった切つてセシリアの引き攣った顔が近づいた。

失礼を承知したのか、箒が間に入って詫びを入れる。

「すまない、セシリアさん。一夏はスポーツ、特に剣道に対してストイックだな。トミーの例えが変に空回ってしまったようだ」

「いや俺、別にストイックなんかじゃあ……」

「幼い頃私をボロ負けさせといてよく言うな」

「まだ覚えていたのかよ!？」

「覚えているとも！ そのために剣の修行を積んで全国優勝まで勝ち上がったんだ！ なんなら今からでも再戦といくか!？」

「いや、根に持ちすぎだろう!？ ブランクを考えろよ！」

ぎゃあぎゃあ痴話喧嘩をはじめのお隣から離れて、トミーはあらためてセシリアに向いた。

「あの二人、何でも幼馴染らしくてね。仲の良いのも困ったもんだ。……それで、僕達に何か用があつたの？」

「い、いえ、殿方のISパイロットなんて、とても珍しいでしょう？ どのような方なのか、気になってしまっただけですわ」

「ああ、なるほど。といつても、代表候補生に期待されても何も出ないと思うよ……」

「そうかしら。例えば、貴方が男性でほぼ唯一この学園に入るといふのには、いくら企業の出向とは言え、何か大切な理由があるのではな
く……」

む、とトミーの表情が固まった。

「……流石に初対面の人に話せる内容じゃあ無いかな」

「それでは、今後もお付き合いが続けば打ち明けてくれまして?」

「物好きだなあ。友達になるのに、そんな大層な理由はいら無いと思うけど」

「あら、でしたら、率直に伺えばよろしいのですね」

セシリアは身なりを整えてトミーに向き直った。

「私とお友達になって下さらないかしら。一（にのまえ）、十三八（とみや）さん」

言い、真つ直ぐに手を差し向けた。

初対面の相手にこんな事、周りからは奇妙に映るだろう。

それでもセシリアにはそうするに足る理由があつた。亡き親友の影を追うのではない。決して無い。それは彼への冒涇だ。

これは自分への戒めなのだ。この先どうあれ、彼と瓜二つな十三八とは、少なくとも一年は同じクラスで過ごすことになる。その間、下手な動揺を続けて学業に専念出来なくなるよりも、敢えて近づいて彼への未練を断ち切るために十三八を利用したほうが懸命だと判断しただけだ。

そう、それだけなのだ。

セシリアの大胆な友達申請に、十三八は優しくその手をとり、

「わっ」

「ん?」

「——えっ」

片膝を付き、差し伸べられた手の甲にキスをした。騎士がお姫様にするようす。

見守っていた周囲が、異変に気づいた一夏と箒が、そして思わぬ行動に驚いたセシリアが声を上げた。

時間が止まったように、誰も動かない。

「……あれ、手の甲が上だったから、こうなのかと思っただけど」

キョトンとした十三八に、セシリアは見る見る顔が赤くなった。

「それじゃああらためて、これからよろしくね、セシリアさん」

未練を断ち斬るには、まだまだ時間が掛かりそうだった。

Ⅱ リミテツドの由来

「ねえ、聞いたか？」

「聞いた聞いた。登校初日に、セシリアさんがトミー君に告白したんでしょ？」

「しかもトミー君はセシリアさんの手の甲にキスをしてお受けしたんだってー！」

「何のそのお伽噺」

「爆ぜろ」

「撃滅！」

すでに予鈴が鳴り、みな席に着いて先生の到着を待つ間も、隣近所どうして囁かれる噂話は止むことが無かった。

昨日、昼にランチルームであった出来事は目撃者の過剰な盛り付けもあって、瞬く間に学園内に広まった。ましてやここは女の園。男性生徒は今年入学の二人しかいない。そんな中で起きた恋バナに、うら若い乙女たちが喰いつくのも無理からぬことだった。

その当事者の一人、セシリア・オルコットは自分の席にて、顔の前に手を組み、頭を俯け、どこぞの司令官よろしく表情が窺い知れなかった。

微動だにしない姿に、周囲は困惑の色を浮かべる。やはり、こんな噂話を立たされるのは嫌なのだろう。ひよっとして作り話なのかもしれない。そう遠巻きに様子を見ていた。

だから、俯いた顔の影の奥、見えない口元が不思議の国のチェシャ猫を思わせるほどニタニタしてようとは、誰にも分かるはずが無かった。

(うふ、うふふ、うふふふふ……)

限られた人物にしか知られていないが、セシリアには妄想癖がある。それもひどい。

無論、家や仕事関連については一分の隙も無く完璧にこなしているが、トレンディドラマやラブロマンスの映画を見ると途端に脳がトリップして何処か遠くに飛んで行く。つまり、プライベート関連に於

いて明確な短所があるのだった。

(そんな、彼に、キスして貰うなんて……。しかも、あんなに、たくましく成長されて……)

亡き友とトミーが頭の中でミックスし、ついでに余計な演出も加わって脳内シアターで上映されている。ヒロインは当然自分自身。主人公の騎士が目の前に跪き、恭しく頭を垂れている。自分が差し伸べた手を取り、そして……。

(……って！ いけません、いけませんわ！)

くわっ！ と目を開き、組んだ両手をガシツと握りしめた。

周囲がビクツとおのき立つ。

(これでは亡き彼に合わせる顔がありませんわ！ 何としても、あの瓜二つの赤の他人、トミーこと、一(にのまえ)十三八(とみや)を克服しなければなりません！)

ギロ、と視線が前列下段の席に座るトミーを見下ろした。その先では、知らぬ本人が隣の席、布仏本音と談笑している。

「じゃあ、あの噂はウソなんですか？」

「尾ひれが付きすぎちゃって違う生き物になっちゃってるよ。セシリアさんにはとんだとぼちりをしてしまったなあ」

「オリムーと、箒ちゃんも、お友達なら誤解を解いてあげれば良いのに」

「ああ、うん、アッチはあっちで大変なんだよ……」

昨夜、寮部屋に着いた一夏はシャワーから上がった箒と鉢合わせして一悶着あったらしい。なんで男女が相部屋なんだ、と寮長で姉の織斑千冬に願ったが、一夏の急な入学に対処しきれず、斯様な自体と相成ったようだ。

今朝、箒がプリプリしていて、一夏ががつくりうなだれていたのがトミーの脳裏に浮かんだ。

「せっかくなんだし、トミーもセツシーと同じ部屋になったらどう？」

「何がせっかくなのか知らないけど、僕は教員のラボを間借りさせて貰ってるから間に合ってるよ」

「わあ、先生を買収したんですか？」

「その冗談絶対やめてね。僕のスポンサーの迷惑になるから。単にその教員がウチの会社の研究員さんで、初めから入れ替わりになる手筈だったんだよ」

つままないの、と相変わらず間延びした口調で本音が笑う。

(なにが、つままないんだ！)

クラスメイトたちは前の席で仲良くしている二人と、それを睨みつけるセシリアの様子に戦々恐々としていた。

(まさか、告白をOKした翌日に彼女の目の前で堂々と浮気をするとは……！)

その後、トミーのプレイボーイ疑惑が水面下で広がり、女の敵を成敗せんと立ち上がった連中と、今時珍しい肉食系男子を飼ってしんぜよう、と立ち上がった連中が視線をぶつけたのは別の話。

とりあえず今ある混沌は、教室に入ってきた織斑先生の姿に霧散した。

「みんな、おはよう。入学早々、何やら変な噂話が起きているが節度を保つように。いいな」

はい、と全員の声が揃う。サー、と語尾が着いても似合うほど整然とした返事だった。楽しい世間話より、目の前の織斑先生(アイドル)の方が彼女らにとって優先なのだ。

「よろしい。では、早速だか決めねばならん事がある。クラス代表についてだ。早い話、学級委員長とIS代表選手を兼ねた役割だと思え。大役だが、相応の実入りはあるぞ。自薦、他薦は問わない。どうだ、ある者は挙手しろ」

はい！ とすぐさま手が上がった。下ろしながら推薦先を指差し、指名する。

「トミーく……、いえ、十三八くんが良いと思います！」

来たか。トミーは話から何となくした予感的中したと口を一文字に結んだ。理由の一つは最近話題の的だからだと予想する。

続いて、私も、私もとトミーを指名する声が連なった。人は流れに乗ればいい、とどこかの赤い人が言った気がするが、トミーはマイ

ペースを信条としていた。

「はい、僕は織斑一夏くんを推薦します」

「ちよっ!？」

空気読めよ! と目で訴えるが、道連れだ、と目で返された。だいたい、どちらかが代表になるだろうとトミーは予想していた。稀少価値のある存在を全面に押し出すのは物事の常だからだ。誰だってレアカードは自慢したい。

しかしそこに、はい! と透き通ったソプラノが分け入った。

「私、セシリア・オルコットはクラス代表を志願致します」

おお!? と注目が集まる。流石はイギリス代表候補生! と決まればカッコイイが、現実はたいてい雑色である。

(あ、トミーくんが離れちゃうのが嫌なんだ)

(生徒会室でおねーさん達とよろしくしそうだしね)

(つか、彼を代表にするのって実際ヤバくね?)

(確かに、トラブルをくつつけて来そう)

(じゃあやつぱり一夏くんかセシリアさん?)

(んー、一夏くんはまだフロンティアだし)

(セシリアさんは無難そうだけど)

()

女性のみが持つテレパシーじみた秘術、”女の感”に取り残された男二人は、グループ通信から外された携帯端末が如くフリーズしていた。交わされる視線で肩を抱き合っている姿は、ブルー〇ウースに駆逐された赤外線〇信を思わせた。

嗚呼、女尊男卑ここに極まれり。

「もちろん、私には志願する理由があります」

一旦通信が止まり、セシリアに視線が注目する。

「私はイギリスの代表候補生です。ですから、一夏さんと十三八さん、お二人よりも実力があると自負しています」

む、と一夏の表情が強張った。

「クラス代表は、珍しい者ではなく、相応の実力を持った強い者がなるべきだと思います」

そう、角の立つような話を言い切った。凡人には到底口に出来ない内容だ。それを臆せず言えるところに、セシリアという生徒の深さが垣間見れた。

「……よろしい。では、3名とも、ISの勝負で誰が代表になるか決めるがいい」

成り行きを見ていた織斑先生のお沙汰が下された。否定意見は出なかった。一夏は、ああまで言われちゃあ男が廃る、と気を揉んでいるし、セシリアは静かに精神を研ぎ澄ませている。トミーは素直に頭を下げて首肯した。

「では、授業をはじめます。山田先生、お願いします」

任されました、と副担任が選手交代と教壇に立った。人にもものを教えるのが得意なのか、自己紹介の時のようなぎこちなさはない。生徒たちも熱心にノートを取り、途中挙げられた質問にも丁寧かつ簡潔な回答が返ってきた。教科書の進捗は、他の高校と比較にならないほど進んでいく。

そんな中でただ一人、織斑一夏は授業時間の経過と共に顔を青ざめさせていた。

◆ 放課後、IS学園屋外練習場。

テニスコートほどの広さに区切られたISの鍛錬場は、隣接コートとネットで分けるように不可視のバリアによって区分されていた。見えない壁は上空、IS学園の全天周バリアまで続き、ISを操縦して飛行できるようにされている。ブロックごとに生徒たちが訓練に励んでいる中に、一夏、箒、トミーの3人の姿があった。

「はああ〜〜……」

コートで運動するでもなく、一夏はベンチで突っ伏していた。

「まさか、IS学園からの予習本を見ずに入学して来たとはな」

箒が腰に手を当てて呆れ返っていた。

「試験勉強をしてたつて言つてたけど、それは別の高校のもので、コッチの入学は突発的なものだったなんてねえ」

たはは、とトミーがフォローする。

「だいたい本を無闇に捨てる一夏が悪いのだ。ふむ、これはやはり剣道場に会場を移し、心身を整えてから道着に着替え、稽古にのぞむべきかもしれない」

「いや、箒、ISの練習に剣道場は狭いと思うよ。あと途中から剣道に話移ってる」

トミーのツツコミに、そうか？ と箒が首をかしげた。

「どうする、一夏。やっぱり座学に切り替えようか？」

「……いや、せつかくトミーが練習場を押さええてくれたんだ。ISの実践練習にしよう。俺には体を動かしているほうが性に合っているしな」

一夏は両膝に手を当て、弾みをつけて立ち上がった。

「にしても、よく当日にこの場所を借りれたな。何か手を使ったのか？」

「言つたら、僕は強運なんだつて。丁度キャンセルがあつて空きが出たから滑り込んだのさ」

「へえ！ ひよつとしたら、俺のISが届いたのも、お前の幸運が感染つたのかもな」

手にISのガントレットを呼び出し、握つて開いた。盾のような甲と、黒い爪のような指がガシャガシャ鳴っている。

「それがお前のISか……」

箒がしげしげと見入っている。

「ああ。実は遅れるかもしれないつて言われていたんだけど、無事に期日に間に合つたんだつてさ。これが俺の専用機、名前は【白式】だ！ ……なんだけだ」

グツと作つた拳を空に掲げたが、だらんと力なく下ろされた。

「受取の時に千冬姉とも鉢合わせちゃつてさあ……。予習もしない身で専用機受領とはいいい度胸だな、と説教食らつちまつた」

「ああ、それでこつちに来るのが遅れてグツタリしてたのか」

「トミー、後でISの予習付き合ってくれ……」

「それは構わないけど、でも、こんな大変な状況なのにクラス代表の試合とか、正直辞退した方がいいんじゃないのか？」

いや、と一夏はキツパリと告げた。

「お前の言うことも解る。でも、俺は戦いもせずに負けを認めるのが嫌なんだ。確かに俺はいま、セシリアさんよりも弱いかもしれないけど、だからって戦いから逃げていちゃあ、いつまで経っても強くない」

そう、強く握り締めるガントレットを見る一夏に、トミーと箒は目を見合わせ、苦笑を浮かべた。

(一夏って、やっぱり男の子だよなあ)

それはきつと長所だとトミーは思った。そんな一夏だからこそ、箒も惹かれたのだろう。

「それはそうと、トミーは良いのかよ」

「何が？」

「こうして俺の練習に付き合っていることさ。俺たちだって、今後試合をすることになる訳だろう？ だったら、敵に塩を送るような真似、しなくてもいいんじゃないか」

ふむ、とトミーは思案した。確かにこの助力は男の子の一夏にとつて面白く感じないかもしれない。しかし、かといって友人の苦難を放っておくのも気が引けた。

それに、

「セシリアさんも言ってたけどさ、今の段階の僕達って、まだまだ未熟に違いないだろう？ だから、これは自分を磨くいい機会だと思うんだ。クラス代表は大変だろうけど、千冬さんが言う通り、実入りは大きいからきつと成長につながると思う」

それにね、とトミーは微笑みを向けた。

「クラス代表が一夏になるにしろ、セシリアさんになるにしろ、僕は負けても何か手助けをしたいと思っているんだ。だって、せっかくこうして友達になることができたんだからさ」

ね、と一夏と箒に向かうトミーに、一夏は口元の笑みを深くした。

「ああ！ そうだな、俺も同感だ！ お前が代表でも、セシリアさんが代表でも、何かしてやれることがあるはずだ。な、箒。お前もそう思うだろう」

「巻き込まれた形になるかも知れないが、確かに。私としても、お前たちと一緒にいると鍛錬になるに違いない」

笑い合い、3人は研鑽を誓い合った。近いうちに、きつとセシリアさんも加えよう。3人よりも4人、いやこれからもたくさん仲間を作って、互いに切磋琢磨をしていこう。

それは多分とても素敵なことだろう。青春というのは、ひよつとしたらこういうものなのかもしれない。そう、めいめいが似たような気持ちを抱いた。

◆
一夏が自分の専用機の慣らし運転をする中、ふとした疑問が浮かんだ。そういえば、トミーはどんなISに乗るのだろう。

箒は自分の手を引くように、貸出練習用ISを起動させて付き合ってくれているが、彼は何も着けずにアドバイスをよこしている。

「なあ、お前も自分のISを起動させてみないか？ 流石に訓練場に丸腰でいるのは危ないだろう」

「んー、それはそうだけど、僕のは専用機でデカブツだから、ここじやあ狭苦しくしちゃうと思う」

「別にいいだろう、空はかなり上まで行けるんだから」
何気ない返事に、一夏、と隣の箒が怪訝な表情を浮かべた。

「お前、本当に何も知らないんだな……」
「何がだよ。そういえば、トミーは一時期メディアから騒がれていたって言ってたよな。それと何か関係があるのか？」

「それは、その」
箒が気まずそうにトミーを見遣った。

「知っているなら、話してくれて良いよ。こういうのは、周りの視点から言ってくれたほうが伝わるから」

むう、と口ごもったが、一夏のためだからな、と自分に言い聞かせるようにしてから話した。

「トミーの乗るISは、正確にはIS『もどき』だそうなんだ。基本的には変わらないが、ISの持つ能力が幾つかオミットされてしまっている」

「え、それ、トミーの身体は大丈夫なのか？」

「人体を守るシールドや絶対防御はついていないらしい。だが、そんな不完全なものを開発企業は大々的に売り込んだものだから、IS業界周辺から散々バッシングを受けたんだ。特にクチの悪い記事では……」

と、箒は一旦口を止めて、もう一度トミーを見た。

続けて、どうぞ。と手で促している。

「リミテッド・ストラトス。インフィニット・ストラトスにかけた、皮肉な名前を着けたんだ。略称もISを模してLS。今やその名前が定着しつつある」

パチパチパチ、とトミーの拍手が聞こえた。

「やっぱり第三者の意見って貴重だよ。ウチの会社では擁護論ばかりだから、どうしても良く言っちゃったりしそうになるよ。LSって呼び名も悪くないと思うんだけどなあ」

困ったもんだ、と作る苦笑が、一夏の目には寂しく映った。

「トミー、俺たちに見せてくれないか。その機体が本当にリミテッド(有限)なのか、試してみたい」

「いいけど、流石に慣らし運転に模擬戦はキツくないか？」

「後学のためさ。それに、俺の白式のように、そのLSにも名前があるんだろう？ だったら名乗り合って尋常に勝負とか、してみたいじゃないか」

「また、面白い例えをするね。名前はあるよ。『グレイ・アイデール』っていうんだ」

言うのと、首元からドグダグを取り出した。あれが彼のLSの待機状態なのだろう。

箒はその名前を反芻し、

『『グレイ・アイデール』……、』灰色の理想』という意味か。なんだか物悲しいな」

「グレイには鉛色の意味もあるからね。僕の髪と同じ色だ。だから、このLSには僕自身の理想を込めて名付けているんだ」

そう言うと、ドッグタグを優しく両手で包み込んだ。

彼の理想、と聞いて、一夏はあまりゴテゴテしたイメージが浮かばなかった。きつと繊細な細身の機体だったり、もしくは騎士の甲冑のようなスタイリッシュなフォルムが似合うと思った。

「へえ、何だかロマンチックな話だな」

「一夏に言われると嬉しくないなあ」

「おい、そりやどどういう意味だ」

いや別に、とトミーは笑みを浮かべた。

そして、少しだけ真面目な表情を二人に向けた。

「それじゃあ、一夏と箒に対して、初お披露目といきますか！」

来い、とISの装備を身構える二人。

対する彼は、

「……何をやってるんだ？」

唐突に地面に両手を向け、垂直倒立の姿勢をとった。綺麗に立っているぶん余計に滑稽に見える。

「いやあ、こうしないとまだ上手く呼べないからさ。……んじゃ、いっよ！」

掛け声に、彼のドッグタグが爆光した。

光は彼の全身、特に現在上を向いている腰から下を包み込む。次の瞬間、下半身の光が猛烈に膨張した。

「よっ……っっ」

逆立ちから起き上がり、足らしき部位を地面に着けた彼の顔の位置は、一夏の目線の倍以上に登っていた。その上半身にも光が纏わり、装備が装着されていく。

そして、隠されていた下半身がその立体を顕にした。威圧感を覚えるほど大きかった。昆虫のような節と爪のあるぶっとい四脚、後ろに垂れ下がる長大な尻尾の先には鋭利な鋏が付いている。

その上、トミーの上半身が、両手に得物を持って乗っていた。右手に剣と銃のハイブリット。左手に大型のマシンガン。

その巨体が、一歩足を踏み出し、地面を震わせた。

「それじゃあ、戦(や)ろうか」

顔、彼のかける眼鏡がロボットアニメの登場シーンのように、空色の輝きを放った。

一夏は、怪獣に立ち向かうヒーローの気持ちだが、少しだけ分かった気がした。

Ⅲ 闘技場のワルツ

IS学園附属図書館、メディアルーム。

パソコン利用やシアター上映など、用途に合わせて大小様々な部屋に分けられたその一室に、セシリアはいた。

タイプは機密性のあるカプセル型。正面デスクの上には3つのディスプレイが起動している。中央に、LSに關した特徴の羅列。左に、掲載元の雑誌やメディアのトップ画像。そして右には、これらを調達した赤毛のメイド、セシリアの侍女チエルシー・ブランケットの姿があった。

「これらの情報が事実とすれば、お嬢様の専用機『ブルー・ティアーズ』の相手ではありません」

資料を速読するセシリアの目が止まるタイミングを見計らって、チエルシーは答えた。

「やはり、リミテッドはリミテッド、ということなのでしょうね」

セシリアは一つ息をつく。

対戦相手についてチエルシーに調べさせた結果、まさかLSの情報が雑誌記事などから見つかるとは思わなかったが、その内容は意外と充実していた。記事の表現は、ISの紛い物、レプリカ、もどき、呼び方は様々だが、一様に扱き下ろしたものとなっていた。普段は適当な記事を書くくせに、何かを批判する場合には対象についてよく調べるというメディアの悪癖が、今回は役に立っていた。

「とはいえ、図体と馬力は伊達では無いようです。くれぐれも、接近戦にはご注意ください」

「近づかなければ勝ち、ということですね」

セシリアは目を閉じ、戦闘シーンをシミュレートした。敵の周囲を立体的に飛び、相手の放つ弾幕をすり抜けて、一方的に銃弾を叩き込む。大きい威容は的でしかない。昔、世界最大の戦艦が航空機によってなぶり殺しにされた話を連想した。

セシリアの優秀さの秘訣に、こういった事前準備を怠らないことがある。戦いは始まる以前に勝敗が決まっていると兵法家は断言する

が、それほど準備段取りというのは物事を決する鍵なのだ。

「ありがとう、チエルシー。良くまとまっていますわ。……ところで、私が送った、彼、一十三八の画像は見ましたか？」

「拝見いたしました。確かに、亡きお嬢様の友人が存命ならば、あのよう
に成長されていたと思います」

ええ、とセシリアの顔が曇る。

「まったく、未練たらしい事だと笑い飛ばして下さいまし」

「そうもなりません。御館様がたのご乗車した列車が事故にあつたと、お嬢様にお伝えしたのは私ですよ。あの時の取り乱し様を思えば、軽
虚妄道を謹んただけご立派です」

まあ、そう、ですわね。と主人は目を泳がせるが、侍女は敢えてス
ルーした。

「二（にのまえ）氏とお近づきになるのには賛成です」

「その理由は？」

「紐を断ち斬るならば、間延びした状態ではなく、固く結んで伸ばして
からの方がよく切れます」

「なるほど」

「加えて、近くで見ただけが細かな違いが見えてくるものです。また
色眼鏡を外して見ても、彼は企業団からの出向組ゆえ、コネクション
としても最適かと」

わかりました、とセシリアは満足そうに頷いた。

そうだ、すでに友達としてOKを貰っているのだから、あとは普通
に仲の良い異性となって、十三八の持つ縁故を自分の将来に繋げれば
いい。これまでの貴族付き合いに比べれば、容易いことだ。

そう結論づけ、もう一人の男性IS操縦者に話を移した。

「織斑一夏については、まとまっておりますの？」

「申し訳ありません。彼は日本の倉持技研で造られた専用機持ちだど
は判明しているのですが、機体について詳細は探れませんでした。本
人についても、《ブリュンヒルデ》の弟としか、今のところは……」

「まあ、彼についてはおおいおいと致しましょう。それに彼はISに搭
乗して日も浅いご様子。油断さえしなければ問題はないでしょう」

「とはいえ、姉をうかがうに、血筋は上等です。くれぐれもご注意を」
「分かっています」

目を閉じ、首肯で返した。

セシリアは貴族としての身の上もって、血筋についても配慮していた。

人の能力はその人自身が決めるところがあるが、周囲の環境や人の存在によることもある。世界最強の姉を持てば、弟は嫌でも影響を受けるだろう。七光に使う者もいれば、目標として精進する者もある。その辺は家庭での教育によるものが大きく、故に歴史ある貴族は家庭環境がしっかりしていた。

いつかは、セシリアもどこかの良い血と繋がることになるだろう。

「……ねえ、セシリア」

ふと、チエルシーが侍女としての口調から幼馴染のお姉さんの口調に変わった。

セシリアは意外そうに目を開け首を傾げる。

「せっかく土地を離れて外国の学校で生活しているんだから、少しはキャンパスライフを楽しんでみてはどうかしら？ 貴女がいつも頑張っているのはわかるけど、たまには息抜きも大事だと思うな」

セシリアはチエルシーが年長さんとして話してくれていると理解した。

「それは、そうかもしれませんが。けど、私はイギリスの代表候補としての役割も……」

「その役割や立場に縛られすぎていると思うの。もつと羽を伸ばしてみても良いんじゃないかしら。友達と遊んだり、海や山へ出かけてみたり」

それに、とチエルシーの口元がいじらしく歪んだ。

「貴方もお年頃なんだから、時には恋をしてみたりしても良いと思うわ」

「こっ、ここ、こ、恋なんて……！ だ、だいたいココには二人しか殿方がおりませんわ！」

「あ、いま自然と学園関係者を省いたわね。少しはその二人を意識し

「てるってことかしら？」

「し、知りませんっ！」

頬をふくらませるセシリアに、からかい甲斐がある主人だ、とチエルシーは半分思った。もう半分はからかいではない。

それでは、と侍女モードに少し戻し、

「また何かございましたらなんなりとお申し付け下さい、お嬢様。進展楽しみにしておりますわ」

チエルシーは楽しそうにウインクすると、ディスプレイから通信が途絶えた。ブラツアウトしたモニターに映るセシリアの顔は、恋に恋する少女のようだった。



数日後、クラス代表決定戦の日。会場となったアリーナには予想よりも観客が集まっていた。ただの一年一組の催しだったものが、世にも珍しい男性IS操縦者と、同じく話題を攫ったりミテッド・ストラトスの操縦者、そして一国の代表候補生の戦いとあっては注目も集まる。

同じクラスの同級生だけでなく、別のクラスの子や、耳の聡い上級生、そして一部の大人たちの目が場内に立つ選手を捉えていた。

順番を決めるコイントスの結果、初戦はセシリア対トミーと決まった。それぞれ開始線に立って自分の専用機を起動する。

「……目の当たりにしますと、流石に威圧感を覚えてしまいますわね」

トミーの「グレイ・アイデール」が、一風変わった起動法と、異様な巨体を周囲に晒し、観客にそれぞれの感想を抱かせた。四脚は足場を作っているように地面を叩き、長い尻尾うねらせ、先端の鋏がギチギチと音を立てている。

(あれは、ISではない)

総じた結論は正式なIS操縦者であるセシリアへの応援へと変わった。セシリアの起動所作と、青を基調としたスタイリッシュなフォルムは美しい。翼のように両肩に展開された浮遊ユニットは遠見からだど天使に見紛える。

「トミーー！ 負けんなー！」

一夏の応援が、剣道由来の肺活量と会場に珍しい男性の声とあつてよく響いた。

トミーは笑顔と右腕の剣銃を振って応える。

「前々から思っておりましたが、十三八さんはマイペースな方ですね。緊張もせず、自然体でいらつしやって」

セシリアの表情は硬い。これから戦いが始まるというのだから当たり前だが、相手のトミーは抜けていると思うほど表情は柔らかい。

「試合前はリラックスした方が良いつて教えられたから、これでも無理して作っているんだよ。あと、呼び方はトミーで良いから」

「では、私の名前も呼び捨てで構いませんわ。トミーさん」

「あ、さん付けはするんだ」

「ええ。こちらは立場上不躰ですから」

セシリアは得物、自分の体格ほどの大きさを持つレーザーライフル『スターライトmkⅢ』を両手で構えた。

「貴方の実力、試させてもらいます」

トミーは、いつもの様に素直に首を縦に振った。

『——はじめ！』

監督役の織斑先生の掛け声とともに、セシリアが横、トミーの右側面に跳んだ。

「お受けなさい！」

三発のレーザー弾が変わらず敵の上半身を狙う。一発は顔、表情を消し見開かれた瞳の前に、振り払われた剣銃によって阻まれた。残り二発は足関節をもたげて、格闘技のスネブロックの要領で弾かれる。

「本当に受けた!?!」

観客の驚愕に気を取られることなく、セシリアは飛行軌道を変えて撃ち続ける。今度は左腕、右前足、胴体中央。それらすべてを、トミーは、態勢移動と剣銃で捌き切った。

(間違いない、見えている……!)

銃口の向きや引き金を引くタイミングを見て弾道を計算したのだろう。ハイパーセンサーで人体能力が強化できるISならば出来ない芸当ではない。しかし、可能であることと、実際に行えることの間

には大きな溝がある。

セシリアは相手の後ろを取ろうと急加速し、

「……ッ！」

予測されていたのか尻尾鋏が口を開けていた。大きく後ろにスライドし、辛うじて射程外とへ逃れる。

「……尻尾鋏『ペンチ・ヒッター』はフレキシブル、なれど射程に欠く」

「——？」

セシリアはトミーの眩きをISで強化された聴覚で捉えた。確かめるため、今度は遠巻きにライフルを撃つ。当然の様に剣銃で捌かれた。

「……剣銃『グローリー・シーカー』は有用なり」

再び眩きが聞こえた。やはり、と次の行動に移ろうとする瞬間、トミーの左腕の重銃が火を吹いた。回避軌道を描いて振り切ろうとする、が、しつこく追ってくる。

「……重銃『グラウンド・ブレイカー』は緩慢なり」

「——テストパイロットの真似事ですよ！」

軌道をトミーの左、剣銃で捌かれない方へ加速した。狙いは左手のマシンガン。ダメージソースを減らすのが目的だ。しかし死角、敵の右前後二脚が浮いている事に気付くのが遅れた。

軌道先、引き金を引く絶好の位置に向け「グレイ・アイティール」の巨体が出た。先程の右脚に加え左脚、全四脚と胴体に付いたPIC（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）が唸りを上げて轟進してくる。

「くう……っ！」

セシリアもPIC を吹かし後に跳ぶ、が、敵の方がダッシュが早かった。さらに馬力の違いを見せつけるように巨体が迫る。

「悪いけどー！」

トミーの詫びと共に体当たりが決まった。このまま会場外壁へぶつける気だ。向かう先の客席に座る観客が逃げ出した。

「まだ……です！」

セシリアはライフルを下へ発砲した。その衝撃で身体が瞬間浮き

上がる。そのまま相手の巨体に沿って身を流し、LSの上に逃れた。
「……！」

そこに、トミーの両手の火器と尻尾鋏が待ち構えていた。セシリアは背中に冷たいものを流し込まれたような悪寒を感じ、本能のままに動き回った。

両肩の浮遊ユニットを本来の用途として使うことなく盾として弾幕と鋏を防ぎ、後はひたすらに上空へ逃げた。

◇
「……決まりだな」

監督席に立つ織斑千冬の発言に、隣の山田先生は可愛らしい声で疑問符を投げた。

「オルコットの勝ちだ」

え？ と訳の分からない回答に、千冬と会場を交互に見た。

千冬は腕を組んだまま動かず、会場の二人も上空と地上に別れ、銃を向け合ったまま微動だにしない。

「あれ？」

なぜ、セシリアさんと十三八さんは動かないのでしょうか。その疑問に、千冬の明確な答えが返ってきた。

「リミテッド・ストラトスは、飛べないんだ」

◇
セシリアは動かない。

「ブルー・ティアーズ」は『スターライトmkⅢ』を構えたまま、スコープでトミーの顔を伺っている。

「グレイ・アイディール」の尻尾鋏『ペンチ・ヒッター』は遥かに届かず、剣銃『グローリー・シーカー』も重銃『グラウンド・ブレイカー』も、正面からなら避けられる自信があった。相手の銃撃に合わせ、回避軌道を取りつつ『スターライトmkⅢ』で反撃すれば、いかに防がれようとじわじわ「グレイ・アイディール」のシールドを削りきって、勝ちだ。

「はじめから、そうすれば良かったのに」

トミーが寂しげに微笑む姿が、スコープ越しによく見えた。

(勝利は最早揺るがない。だというのに、この物悲しさは何なのでしよう)

もともと、チエルシーからの報告の元に組んだ戦術を実行すれば勝利は確実だった。なにせ、相手は飛べないのだから。空の彼方(インフィニット・ストラトス)からの攻撃を、地上の虫(リミテッド・ストラトス)はもがき蠢いて逃げ惑うしかない。

最初、相手のフィールドで戦ったのは、自分で言った通りトミーの実力を試すため。それがなかなか手強いとみるや、空に逃げてこのザマだ。

「ダメ……、ですな」

結局のところ、自分自身が、自分の誇りが、この勝利を受け入れられなかった。

では、どうするのか。まさかそれを理由に降伏をするのか。冗談ではない。それではトミーが浮かばれない。会場の観客達も、そんな結果を認めないだろう。

セシリアは逡巡し、何かを諦めたように息を吐くと、ライフルを上に向けて地上に降りた。

「――セシリア？」

無防備に降りてくるセシリアに、トミーは攻撃を躊躇った。

そのまま【ブルー・ティアーズ】は地上に降り立ち、【グレイ・アイデール】の巨体を見上げている。武器は手に持ったまま、告げた。

「さあ、試合を続けましょう」

セシリアの告白に、トミーは目を丸くした。

「続けましょう、って、……いや、これは、僕はどう捉えたらいいのかな」

トミーの瞳が非難めいたようにセシリアを射抜く。

絶対勝利の状態から、相手の土俵に立って仕切り直しの再試合など、トミーなりに真剣に戦った試合として受け入れられなかった。

セシリアは、初めて見たトミーの不満顔に、クスリ、と笑みを浮かべた。

「私がこうしたいのです。貴方と正面から向かい合って、地上で戦いたいのです。それでは、いけませんか？」

そう言うと、手で優雅な弧を描いて、トミーに向けて差し出した。ランチルムのとくと同じように。手の甲は下を向けているが。

対するトミーは、真剣な表情でセシリアの瞳を見ていた。地上でのまま戦えば、勝利は自分のものとなるだろう。しかしそれは、ハンデを付けた上での勝利であって、セシリアのためにも自分のためにもならないと思った。

かといって、彼女の申し出を断り、決められた結末を迎えるならば、それは彼女の決意を貶してしまうようにも感じた。

トミーは悩んだ。彼女の差し出す手を取ることは出来ない。彼女の思いを無下にもできない。ならば、どうすればいい……！

その時、ふいに目元が眩しくなった。右手の剣銃『グロリー・シーカー』の刃が光を反射させていたのだった。それを見て、トミーは一つの結論に到達した。

意を決したように、剣銃を振り上げた。対するセシリアは身構えるが、刃は振り下ろされず、脇を締めて腰から垂直に天に捧げた。

(なんだ……?)

トミーの動きに、観客が疑念を向ける。

それに構わず、トミーは剣銃を顔の前に立て、刃を横にした。その白刃にセシリアの驚く顔が映った。

剣は、顔の前から斜め右下に振り下ろされ、そして手のスナップを効かせて垂直に持ち直した。

「……何をしているんでしょうか？」

山田麻耶は織斑千冬に問いかける。今日の試合は教員の自分にもわからないことばかりだ。

千冬は、ふん、と鼻を鳴らすと、

「あいつはあいつなりに、ちゃんと躡けられているんですよ」

口元に微かな笑みを浮かべた。

立场上様々な式典に立つ千冬には、トミーの動作の意味が分った。

トミーは右下で剣を垂直に立てたまま、再び脇を締めて腰元に当

て、そして顔の前で天に捧げた。先ほどと同じ、横にした刃にセシリアが映った。

その一連の動作に対して、セシリアは心の中にこみ上げてくるものを感じた。遠く、過去の記憶が脳裏に蘇る。オルコット家の中庭で、在りし日の彼と練習をした、

(剣札……！)

その姿が、トミーの顔が、幼き日の親友の顔と重なって見えた。目に涙が零れ落ちそうなほど溢れてきたからかも知れない。

トミーは、剣を鞘にしまうような動きをすると、展開していたLSを解除した。

正面、セシリアと視線を合わせ、

「僕に出来ることは、ここまでだよ」

そう苦笑しながら両手をバンザイと上にあげた。敬意を払い切った後の降参の表明だった。

セシリアは、笑みを浮かべて頷いた。その頬に、一筋の雫が伝っていた。

「いいえ、素敵な、戦いでした」



アリーナの展覧席にて、トミーとセシリアの試合を見届ける影があった。

一人は、扇を手で遊ばせる青い髪の少女だった。トントンと、閉じた扇を掌に叩いている。

その隣に侍るように、眼鏡をかけた理知的な少女が立っていた。視線を落とし、思案に耽っている。

(トミーはねえ、とおっても面白そうな人だったよ)

妹の間延びした説明を思い出し、次いで会場内で起きた結末を連想した。なるほど、確かに面白そうなやつだと思った。妹の表現はいつも曖昧で模糊としたものなのだが、それで不思議と的を得ていた。

「いかなさいます、お嬢様」

顔を上げ、青い髪の少女に問いかける。返答はだいたい予想がつくが。

それに応えるように振り返る顔には、楽しそうな目と、扇が口元を隠して開かれていた。

その扇は大きく、上物、と書かれていた。

IV 織斑一夏は空を飛ぶ

織斑一夏は自立したかった。

中学時代、幼少時に慣らした剣道部へ入らずにバイト三昧の日々を送ったことや、進学先に就職率の高い藍越学園を志望していたことは、ひとえに姉の織斑千冬を助けたいというためだった。

小さい頃に両親から捨てられ、千冬が一人で育ててくれたことに対し、一夏は負い目と恩義を抱いていた。早く一人前になって、姉に楽をさせてあげたい。その思いで、幼いながらに出来ることをやって来た。

ずっと守られてばかりだった一夏は、いつしか自分が誰かを守りたいという思いを抱くようになった。それは家事であり、甲斐性であり、もしくは力強さであった。

(強くなりたい……)

大切な人を、大切なものを、守り通すことができる強さを。

(千冬姉のように……)

果たして、その思いを叶えるための一步を、偶然にも踏み出すことができた。IS操縦者。男性でほぼ唯一の、自分にあった可能性。

織斑一夏はIS学園に入学した。それは周囲に流されたような部分もあつたが、自分の決断に変わりはなく、決して後悔はしたくない。そしていま、クラス代表決定戦、目の前には怪物が立っている。

普段は捉えどころの無い、自分を幸運児だとうそぶくやつで、情けも容赦もある友人だ。

しかし、いざ戦いの場では、手加減は相手への侮辱と捉える、気持ちの良い戦士だった。

一夏は怪物に吹き飛ばされ、アリーナの壁にぶち空けられた穴から、よろめきながらも立ち上がった。肩で息をし、剣『雪片式型』を杖に立ち、自分のISの状態を確認する。

すでにシールドは過半を切り、攻める糸口は見つからない。もはや力の差は歴然だ。

それでも諦めはしなかった。

俺はこの学園でひとり立ちし、この仲間たちと強くなる。そう誓ったのだから――。

◇ クラス代表決定戦、第二試合。

その一夏とトミーの戦いを、二人の友人である箒は見守っていた。戦いはトミーが圧倒していた。それはISの搭乗時間の違いもあるが、相性が決定的だった。

一夏は専用機乗りであるが、その機体の武器は一振りの剣しかなかったのだ。いかに優秀な機体といえど、接近戦しかできないのであれば、空を飛べないトミーにとって飛んで火にいる夏の虫。

一夏はフェイントやカウンターを駆使して何とか食らいつこうとするが、相手は剣のほか鞭のような尻尾鋏に銃火器も用意とあって、全くスキを見せなかった。

今しがたトミーの巨体からぶちかましを受け、一夏の身体が外壁に突っ込む姿に、箒は息を呑んで両腕を抱いた。

「頑張れ、一夏……！」

箒は呻くように口にした。両腕を抱く手に力がこもる。そうしなければ、自分が飛び出していつてしまいそうだった。

「負けるな、一夏!!」

◇ 箒は腹の底から声を上げて、幼馴染の名を叫んだ。

（聞こえているよ、箒……）

一夏は戦いの前にかけられた言葉を、再び呼びかける箒の声に、口元に笑みを作った。

（大丈夫だ、箒。俺はまだ負けていない）

いかに痛めつけられようと、圧倒的に不利であろうと、まだ試合は終わっていない。自分はまだ折れていない。

それにトミーとの練習の段階で、試合運びがこうなることはすでに承知していたはずだ。対策に立てた戦術が、まるで通用していないだけ。残った作戦はただ一つ、気持ちで勝負することだ。

一夏は立ち上がり、胸を張って叫んだ。

「どうした、トミー！ 俺はまだ戦えるぞ！」

こちらの様子を伺う相手に呼び掛ける。

『グロリー・シーカー』はどうした！ 『グラウンド・ブレイカー』は弾切れか？ 今のスキ見逃すなんて、この勝負をバカにする気か！」

トミーは戦いでは容赦しない。それが礼儀だと捉えているからだ。そのことを知る一夏にとって、スキを見逃したトミーに憤りを覚えていた。

その一夏の叱責に、トミーは武器を上に向けて攻撃の意思が無いことを示した。一夏はさらに声を上げようとすると、

「——飛ぶんだ、一夏」

トミーは答えた。

「飛べ、一夏！ 地上での戦いでは、僕と『グレイ・アイディール』は負けはしない！」

トミーは声を荒げた。らしくない姿だった。普段はそんな強い言葉を使うようなやつではないのに。

「言ってくれませ……！」

それが自分の弱点を指摘していることを、一夏は理解していた。

一夏は飛ぶことが苦手だった。

大地を踏みしめ、翔るように疾走して戦うほうが性にあっていた。空は、あまりにも空虚すぎて怖いように感じた。遊園地のアトラクションで、足場のない絶叫マシンが苦手なようなものだった。

だが、もうそんな事など言っていられない。正直このまま戦っても勝ち目は無いし、苦手を克服しなければ次の段階に進めないと思った。

それに、

(センパイのアドバイスだからな)

一夏にとって、トミーは同じ部活のセンパイのように見ていた。同級生でも経験が違うのだから、その指示には大人しく従った方がいい。下手に意固地になる奴はいつまでたっても強くなれない。そう幼少時の剣道で経験していた。

「やってやる、やってみるさ！」

一夏は意を決し、真っ直ぐに上空へと飛んだ。視界の中に青が飛び込んでくる。よく晴れた4月の春の空だった。陽光が心地良く自分を照らしていた。

そのままどこまでも行けるような気がして、ぐんぐん上昇していつて、

「いてっ」

途中で見えない何かにぶつかかった。学園の全天周バリアにぶつかかったのだ。これ以上は諦めて後ろの地上を振り返ると、会場が両腕に入るほど小さかった。

あれほど目の前で威圧感を示していたトミーのLSも、まるで消しゴムのカスのようなだった。あまりの小ささに、自分が苦戦していた先程までの戦いが、途端にちっぽけなものに感じた。

人は高いところから地上を見ると、悩みや苦しみが矮小化されるという。それを目の当たりにしているようだった。

「……いくぜ、トミー」

一夏は眩き、剣を構えて勢い良くダイブした。一直線に地上へ堕ち、視界の建物が拡大してくる。恐怖は歯を食いしばって堪えた。

ある高さから、トミーの対空射撃が始まった。あんなに脅威だった銃撃が、豆鉄砲のように緩慢に見えた。

一夏は身体を捻って回避していく。教えられた回避軌道のそれではない、滅茶苦茶な動きだった。だいたい、

(サツ、とやって、スススツと動くんだ！)

などと言う、箒の指導など解るはずがないのだから！

「うおおおおおおお!!」

対空射撃の火線からそれ、トミーの姿を完全に捉えた。剣を打ち放つ、その瞬間、

「——ツ！」

トミーの姿が右にズレるや、その背後から尻尾鋏『ペンチ・ヒッター』が飛び出してきた。巨体に隠れて動きや間合を推し量れなかったため、為すすべがなかった。剣道という、脇構えを連想し、見事に

一本取られたように感じた。

「がはあっ！」

鍔が一夏の身体を啜え込む。シールドゲージがみるみる減少していった。ISでなければ、容易く両断されていただろう。

「このっ、はなせー！」

尻尾に向けて剣を振るう。しかし腕だけで振るった太刀ではあまりにも力不足だった。

シールドゲージがもはやレッドゾーンに近づいている。

(負ける……!?)

一夏は始めて敗北を意識した。気持ちという、最後の武器が折れかかっていた。

ダメだ。俺は、箒に……、

「諦めるなっ、一夏あああっ！」

箒の声が聞こえる。

そうだ、俺は、最後まで諦めないと言ったのだ。

男に、二言はあつてはならない……！

「諦めて……、たまるかあああああ！」

勇気を取り戻したその瞬間、一夏のIS“白式”が輝いた。

なんだ、と光を腕でかざすトミーの前で、煌めく剣が振り落とされた。先程までビクともしなかった尻尾鍔『ペンチ・ヒッター』が、容易く切り払われていた。

「『ペンチ・ヒッター』が!？」

トミーの驚愕をよそに、一夏は空へと間合を取った。

見上げると、そこには新たな鎧を身にまとう、織斑一夏の姿があった。

「まさか、一次移行（ファースト・シフト）？　今まで初期状態でやっていたのか!？」

トミーは、道理で動きが鈍いわけだ、という理由と、それでこれだけ動けたのか、という思いが、驚愕と嬉しき、そして未恐ろしさの混ざった感情となって、一夏に向けていた。

◇

一夏は怪物の持つ鍬を退け、再び空へと舞い戻った。

その光景に、観客席の一人は見惚れるような目を向けていた。毛先が内側に跳ねた青色の髪に、ちよこんと二つのヘッドギアを載せ、眼鏡をかけた少女だった。

「カッコイイ……」

先程まで、怪物に痛めつけられていた姿に目を覆ったり、小さな悲鳴を上げていたのが、光と共に蘇って剣を一撃するその姿に、物語のヒーローを目の当たりにしたような吐息を漏らしていた。

「あれが、織斑一夏……!」

彼女は一夏に対して因縁がある。自分のために作られるはずの専用機が、男性IS操縦者の登場という降って湧いた事態に対し、会社は新たな専用機を作ることとなり、開発の人手がそちらに割かれて遅れることになってしまったのだ。

当初は恨みを抱いていた。しかし最近になって、開発元の倉持技研に余裕が生まれたということで、近いうちに再開したいと連絡を寄こして来たのだ。

そして、今まじまじと見る彼の姿に、少女はこれまでの想いが一転、憧れを抱くようになっていた。

「ガンバレ、一夏……」

テレビの向こうに映る正義の味方を応援するように、少女は小さな声で声援を送っていた。

◇

上空、白い鎧を身に纏い、輝く剣を構える一夏は、地上、鉛色の異様を纏い、無骨な得物を構えるトミーと、剣先を向けあつて対峙していた。

「なんだか知らないが、諦めないもんだな」

一夏は歯を見せて笑う。勝負はここからだ、と気合を入れていた。

「よく似合っているよ、一夏」

トミーは目を細めて答えた。一夏が太陽を背にしているだけではない。

「この【白式】の装備がか？」

「いや、空に、だよ」

トミーは思う。やはり一夏は、インフィニット・ストラトスは、空を翔ける姿がよく似合う。地上を這うような動きなど、翼を無駄にするようなものだ。

一夏は答えず、歯を見せた笑みのまま、剣先を相手の目に向けて正眼の構えを取った。

トミーは、重銃『グラウンド・ブレイカー』を量子化し、剣銃『グロリー・シーカー』を両手で持った。顔の前に直立して略式の剣札を捧げる。一振りの剣だけでここまで戦った、一夏に対する礼儀だった。流れるように右手側に寄せ、バツティングフォームのような八相の構えを取った。

一瞬の静寂の後、一夏は虚空を踏み出した。気合を吐いてまっしぐらに。その表情が鬼気迫る。

トミーはお腹の底に力をためた。ぐつ、と大地に沈むように。顎を引いて目がギラつく。

「おおおおおおお!!」

「——ッアア!!」

一夏の放つ裂帛の気迫と、トミーの貯めに貯めた底知れぬ気合が、刃と共にぶつかりあった。



闘技場の端の選手控え席にある、アンティーク調の豪華なベンチに、トミーは肩にタオルをかけて背もたれに体重を預けていた。

ほけー、つと見つめる視線の先で、一夏とセシリアの試合が始まるうとしていた。

胸元に下がるドッグタグを右手でなぞり、何度めかのため息をつく。

「あーあ……」

にへら、と口元が歪む。

セシリアとの試合は、空に逃げられるまでは健闘できたし、一夏との試合も、白式がファースト・シフトするまでは圧倒していた。礼儀も払い切ったし、見事な戦いぶりだったと我ながら思った。

(でも、結局全敗かあ……)

一夏の剣『雪片式型』は、トミーを剣銃『グローリー・シーカー』ごと切り裂いて見せた。絶対防御が働いてトミーの身体に傷はないが、正直死を意識した。それほど【白式】の、一夏の単一仕様能力(ワンオフ・アビリティ)《零落白夜》は必殺だった。

格闘ゲームでいえば、ゲージギリギリまで追い詰めたのに、超必殺技を食らって逆転負けしたような気分だった。

思い出して、また、ため息が口から出そうになったが、頬に当てられた冷たさに引っ込んだ。見れば、箒が微笑を浮かべて、スポーツドリンクの缶を向けている。

「お疲れ様、トミー。見事な試合だったぞ」

見惚れるほど凛々しい笑みを浮かべて労ってきた。もしトミーが女性だったら惚れてしまいそうな顔付きだった。残念ながら彼は男だ。

サンキュ、と手で受け取る。よく冷えていた。間もなく一夏の試合が始まるというのに、急いで買って来たのだろう。器量の良い子だな、とトミーは思った。

箒が視線を会場に向けると同時、試合が始まった。二人とも空を飛んでいる。一夏は空への苦手意識を克服したようだった。

「一夏つてき」

トミーのつぶやきに、箒は顔を向けずに、ん？ と、返した。「強いよな」

苦笑と一緒に漏れた言葉に、なんだ、と箒も笑みを浮かべた。

「当たり前だ。一夏は私の幼馴染なのだからな」

自信満々に彼女は言う。

「そういうもんかな？」

「そういうものだとも」

うむ、と一人納得していた。

試合では、射撃主体のセシリアに不利を悟ったのか、一夏は剣を輝かせて突っ込んだ。直線的すぎるな、とトミーは思った。今後の課題にして、練習で克服していこう、と思い遣った。

それにしても、

「綺麗な剣だなあ……」

とトミーは口にした。

煌めく剣は眩しくて、空を翔る一夏の姿はとてもカッコよく見えた。

相手先のセシリアも、青い機体と優雅な飛び方は、なんて素敵なんだろう、と思った。

本当に、空を飛ぶインフィニット・ストラトスは、息を呑むほどに美しい。

「……あれ？」

その視界が、急に歪んだ。

目元に手をやると、濡れているのだと分かった。いつの間にか涙を流していたのだ。

「変だな？」

きつと一夏の剣の光が眩しくて目にキタのだろう。そそくさと肩のタオルで拭き取った。

それにしても、こんな人のいる場所で涙を流すなんて、と少し気恥ずかしさを覚えた。

とはいえ、隣の筈は一夏の応援を頑張っているし、観客の視線も空で戦う二人を見ていて、誰も自分を気に留めやしないだろう。そう思うと、少し安心してゆっくりと涙を拭えた。

「あー……、だめだ」

しかし、涙はいつこうに止まらなかった。しょうがないから、タオルで頭を隠して前かがみの姿勢になった。涙がいくつもいくつも地面に落ちた。

「わー……、とまんない……」

一夏とセシリアが戦う空は、今日はとても良く澄み渡っていた。日差しは心地良く、風は遠く、青はどこまでも続いていた。

トミーの座る選手控え席は、日の傾きで日陰になっていて、まだ少し肌寒さが残っていた。

春のうらかな日の午後のことだった。

Extra

—』

』

『……少しお行儀よく躰けすぎたのではないかな』

『確かに潔すぎはしますが』

『強いだけでは意味がないとおっしゃられたのはどちら様でしたっけ？』

『蛮勇を振るうのは逆効果だからな』

『勝てねば意味があるまい』

『今の段階で勝てるものか』

『追い詰めたではないか』

『試されただけでしょう』

『我が国と致しましては彼の姿勢を評価します』

『そりゃあそちらは上手く勝てたからな』

『とはいえ公式戦ではありません』

『それにまだ一年生です』

『焦らずノウハウを蓄積していくのが懸命か』

『データ採取は？』

『つつがなく』

『一夏くんも良くやっています』

『倉持には便宜を凶って正解でした』

『なぜ織斑一夏は飛べるのだ』

『製作者に伺って下さい』

『承服しかねる』

『彼はあの無様な姿で戦っておるのだぞ』

『機能を優先したまです』

『飛べぬ機体でISと戦えと言われればああもなりましょう』

『不憫とは思わんのか』

『今更ですな』

『すべての男児にそう思っております』

『歯がゆいな』
『他に男性パイロットは見つからんのか？』
『未だ』
『随時テストを行っております』
『話題づくりにはなりそうですな』
『阿漕な輩が食いつきそうです』
『それで世論が動くとは思えん』
『戯れの玩具に成り下がらただけでしょう』
『苦々しい』
『今しばらく彼には頑張って貰わねば』
『名は何だったかな』
『被検体No. 11038号です』
『そうだった』
『名前はつけない約束だったな』
『情が移りますからね』
『随分と犠牲を生んでしまいました』
『供養塔でも建てますかな』
『悲願成就の暁にはな』
『No. 11038は優秀です』
『一夏くんとは仲が良いそうで』
『あの環境ならそうもなろう』
『天災の妹とも仲の良いうで』
『保険にはなるか』
『しかし嗅ぎつけている者もおられるとか』
『なに？』
『暗部か』
『抜け目ないな』
『直接仕掛けて来ることはないでしょうが』
『後ろが判断すれば危ういか』
『それは甚だ迷惑』
『具合が悪ければウサギ小屋に戻しては？』

『よく懐いていたな』
『いや一匹送ろう』
『目くらましにはなるやもしれん』
『しかし飼育員へは息がかかっておりません』
『それゆえ怪しまれにくい』
『動かせられますかな？』
『学園に恩師が居ると知れば飛び付こう』
『なるほど』
『くれぐれも慎重に』
『我らは弱者なのですから』
『わかっておる』
『いずれ再興させるさ』
『せめて孫が物心付くまでには』
『男孫ですか』
『娘の結婚式では除け者にされてね』
『せがれの結婚式は哀れだった』
『お察しします』
『忌々しき女尊男卑よ』
『男たちに栄光あれ』

——とある端末のログより

V 一十三八の幸運な一日

自室に使っている研究室のベッドの中で睡眠から覚醒した一（にのまえ）十三八（とみや）は、まどろみにもたげることなく半身を起こした。呼吸を深く確かめるように行い、胸に手を当てると脈が正常に打っている。

（ああ、今日も目を覚ますことができた）

ほ、と口元に笑みを浮かべ、ささやかな幸運を噛みしめた。

（起きられたのは自分だけ、なんてこともあったからなあ）

身支度を進めながら、過ぎた日々を思い出す。合宿所のような施設で暮らした、同じ境遇の仲間たちとの共同生活。

よく訓練で一緒になった隣席の赤髪の男の子は、人懐っこい笑顔が特徴的だったが、ある朝冷たくなったまま硬いベットの上から起きてこなかった。その隣の黒髪の男の子も、その隣の浅黒い肌の男の子も、昨夜まで語らっていたはずなのに、朝、急に電池が切れたかのようにピクリとも動かなくなった。

ついに部屋で寝泊まりする者は自分一人になってしまっただけで、大人たちになぜそうなったのかと尋ねると、それは運だと答えられた。

「僕はとても運がいいから、お前とも仲良く出来ているんだよなあ」
身だしなみを整え、首に待機状態のLSのドッグタグを下げる。
トンと叩くとくすぐったがるようにゆらゆら揺れた。

その上にジャージを羽織り、朝の外へと走り出す。日課のジョギングだ。

よく晴れた春の朝は、冬の名残りのように寒いが空気はとても澄んでいた。次第に明るさが増す太陽は頬に温もりを感じさせる。

（施設の人口灯とは全然違う）

屋内でいつも浴びていた明かるいだけの冷たい光と違い、お日様の明かりは生き物に活力を与えてくれる。日が登るに連れ、あたりの動物たちも動き出した。

前方、頭の上の電線には数羽の小鳥が止まってさええずついていた。練習中なのかでんでバラバラだったが、一羽の親鳥らしい大ききの鳥が

チーチチ、チーチチ、と歌うと、子供の鳥たちもそれに習うようにさえずりが纏まっていった。

(こういうのに感動できるって、ありがたいことだよねえ)

施設の訓練生の中には、心を無くしてしまった子もたくさんいたのに、自分はこうして心を動かすことが出来ている。

あの小鳥たちのような親子の絆というものは、自分は持っていないからこそ、よけいに尊いものに感じた。

(そういえば)

と、十三八は小鳥たちを走り見ながら思う。

(僕はその施設に入る前、一体どこに居たんだろう)

ある日目覚めるといろんな男の子たちと合宿していた。お前たちはISに乗るために命を与えられたのだ、と言われ、その指示のまま訓練し、生きてきてきた。

だから、その前のことは何も知らなかった。ひよっとすると、自分はその施設で生まれたのかも知れない。もしくは両親に捨てられたのか、保健所から任されたのか。

(僕にも、あんなふうには、親や兄弟がいたのかなあ)

小鳥たちの止まっていた電線に近づくと、さえずりは止み、一斉に東の空へ飛び去った。十三八の走って行く方向だが、とても追いつける速さでも、高さでもなかった。

はたと、トミーは一人立ち止まった。まだ息が切れるほど走ってはいない。疲労もない。ただ、朝の寒さが急に身に沁みたように感じたのだ。

朝日が雲間に隠れてしまったからかもしれない。そう空を見上げると、

「トミーく〜ん！」

と後ろから呼びかけられた。

声の方を向くと、活発そうなボーイッシュの女の子が十三八、もといトミーのもとに走りよってくる。おはよう！ と挨拶してくるのは、

「おはよう、お清(きよ)さん。朝から元気だね」

同級生の相川清香(きよか)。トミーの隣席の布仏本音と仲がよく、その繋がりで親しくなった子だ。

「あはは、そのお清さんって、なんだか女将さんみたいな古風な呼び方だなあ」

「ああ、ゴメン。別の呼び名の方が良かった?」

「んくん、せっかくトミーくんが付けてくれたんだからいゝの。独特のセンスを感じる、ってやつ?」

「気を遣わなくてもいいからね。言い出しっぺは本音、もとい本ぢやんなんたから」

「トミー君が呼び名を考えて、ってフリだったもんね。大丈夫。トミーくんからの呼ばれ方、結構気に入ってるから」

それは良かった、とトミーは清香のジョギングに足並みを揃えた。トミーの方が上背はあるが、清香の方が足が早い。

「お清さん、ハンドボール部に入ったんだってね。このジョギングも朝練なの?」

「んくん、単なる趣味。私、身体を動かすの好きだから」

「それでこんな走るペースが早いんだ。そんなに運動出来るんなら、ISにも直ぐに乗りこなせそうだね」

「どうかなあ。セシリアさんとか、あんまりスポーツに熱心そうじゃなくても適性高いでしょ? 私もあんなふうに飛べたらなって思ってるんだけど、まだぎこちなくなってるさあ」

「セシリアの飛び方は綺麗だもんね。お清さんも、直に空を走れるようになるよ」

「早くそうになりたいなあ」

空を見上げながらぐんぐん走っていると、ところでさあ、と、清香が面白そうに訪ねた。

「トミーくんがセシリアさんに惹かれたのって、飛び方が綺麗なことも関係あるの?」

「……なんの話?」

「付き合ってる疑惑のおはなし」

「昨夜のクラス代表決定記念パーティーでも話したけど、別に僕とセ

シリアは付き合っていないよ」

「うん、聞いている。でも、トミーくんがそう言ったときのセシリアさんの表情知ってる？」

「なんかジト目だったね。もっと早く釈明して貰いたかったんだと思うよ」

「あ、そう捉えちゃったか。ちよつと脈アリだったかもしか、思ったりしないの？」

「ほぼ女性しかいない環境で疑惑を持たれちゃうのって、セシリアは正直嫌だったと思うよ」

「たは、トミーくんは冷めてるなあ」

「そうかなあ、とトミーは首を傾げた。

「じゃあお清さんは、もし男子校に一人で入学したとしても、恋愛したいと思う？」

「うわ、それはキツイ。っていうか怖い」

「でしょう？ 解って貰えて何よりだよ」

「んん、でも、もし好きな人ができたらどうなっちゃうかなあ。やっぱり、学校の外かどこかで一緒に居たいって思うんじゃないかな？」

「それは……、そうかも、しれないね」

「でしょ？ 結局、好きな人が出来ちゃったら冷静になんていられないよ」

「だから、と清香はトミーの鼻先に人差し指を向けた。

「トミーくんも周りを気にして自分の気持ちを抑える必要ないと思うな。別にガツガツしろってことじゃなくて、変に縮こまらないでもっとオープンでも良いってこと」

「僕は今でも充分伸び伸びやってるよ」

「そうなの？」

「うん。いい仲間達に出会えたからね」

清香の目を見ながらトミーはそう言った。

自分の過去はともかく、今はとても恵まれていると思っっている。目の前にいる少女も含めて、ここに来て良い出会いがたくさんあった。それはとても幸運なことだろう。

「そつか……。うん、トミーくんがそう思っているなら良いけどね！
んじゃ、ラスト、校門まで競争しよ！」

「いいね。それじゃあ、ヨーイ……」

ドン、と二人で疾走していった。

朝日は明るくあたりを照らし、寒さが次第に和らいでいく。

先に校門に着いたのは、ぶつちぎりで清香だった。

◆

「生徒会に？」

「そく。お昼休み、なんとか代わりに行ってもらえないかな？」

教室、朝のホームルームが始まる前に、トミーは隣の本音から頭を下げられた。

聞けば、本音は生徒会の書記を任せられているらしい。今回は用事があつて行けないから、トミーに代役になって欲しいそうだ。

「別に構わないけど、本ちゃん生徒会に入ったんだ。一年生なのに偉いね」

「ちよつとしたコネがあつただけだよ。それにお仕事あんまりやってないから偉くなんてないのだ」

「いや、それはちよつとどうなんだろう……。別に僕が代わりに行かなくても大丈夫じゃない？」

「そう言わずにく。出席人数が一定数揃わないといけない、とか、生徒会の決まりがあるかもしれないし」

「あるかも、って確認はしていないんだ。でも、確かに有り得そうな話だけ」

「でしよ？ じゃあ、よろしくお願い……」

「ちよつとお待ちなつて頂けます？」

本音が押し切ろうとした間際、セシリアが間に割ってきた。眉をひそめた表情から、話の流れに批判的なようだ。

「布仏さん、大切な生徒会の役割を、役職のない一般の生徒に代わって頂くというのは如何なものでしょう。もし代役を建てるのでしたら、生徒会に近い方、例えばクラス代表の一夏さんが適任ではなくて？」

次にトミーに視線を向け、

「貴方も、簡単に人のお断いを請け負いすぎです。今朝は相川さんのジョギングにわざわざ付き合っただけ。もつと主体性というのを持つべきですわ」

「あ、いや、別にお清さんとは今朝たまたま一緒になっただけ。っていうか何で知ってるの?」

「相川さんが先程、楽・し・そ・う・に、貴方と一緒に走られたと仰ってましたので」

「笑顔で強調されると怖いんだけど……」

「別によろしいのですよ? あだ名で呼び合うほどの間柄なのですから・ね」

あれ、と本音がちゃちゃを入れた。

「セツ、何でそんなにご機嫌ナナメなの?」

「不機嫌ではありません」

「自分はトミーにあだ名を付けて貰えていないから、とか」

「思っています」

「じゃあ、付き合ってる疑惑を晴らされたから、とか」

「余計なお世話です!」

とにかく、と本音の話を遮って、

「生徒会の代役は別を当てること。よろしいですね」

「え」

「え、ではありません!」

「まあまあ、セシリア」

何ですの、とセシリアは相変わらず不機嫌そうにトミーを見た。

「他ならぬ本ちゃんの頼みなんだから、僕としても断りたくないよ。もしセシリアが言うように生徒会に近い人の方がよかったって向こうで言われたら、今度からそうするからさ」

「おお、トミー愛してる」

「ゲンキな愛だなあ」

ムス、とふくれっ面なセシリアは、では、と前口上を置いて、

「私もトミーさんにお付き合いしますわ」

「へっ」

「微妙な反応ですね。私が一緒ではご迷惑でしたか？」

「いや、そうじゃないけど……」

「ぶく、セツシクには頼んでないよ」

「私も頼まれておりません。トミーさんの付き添いという形です。大切な生徒会のお話ですし、構いませんわね？」

「しょうがないなく、と本音は不承不承頷いた。

トミーは不思議そうにセシリアを見ると、何か目配せをしているのに気がついた。その意図を計りかね、どうしたの、と口に出そうとしたところで、担任の織斑先生が到着し、この場はお流れとなった。



「一緒に来てくれてありがとう。でも、わざわざ付き添いだなんて、何か生徒会に思うところでもあったの？」

昼休み、手短に昼食を済ませた二人は足早に廊下を歩いていた。先を行くセシリアの歩みが早いためだ。

「どことなく、違和感を覚えたからです」

「違和感？」

「IS学園では、生徒会長が好きに生徒会役員を選ぶことが出来るそうです。恐らく布仏さんもそれで一年生ながら選出されたのでしよう」

「そういえば、コネがあるんだって本ちゃん言ってたね」

「ええ。であるなら、布仏さんは生徒会長から息のかかった生徒と言えなくもありません。とすれば、今回トミーさんを代役に選んだのは何か裏があるのではと思っただのです」

「うくん、そんなに穿った話かなあ」

「貴方は不用心すぎですわ。一夏さんと並ぶ希少な男性IS操縦者ですもの、良きにつけ悪きにつけ注目されて然るべきです。その点、一夏さんはクラス代表になりましたから、立場もありますし表立っておかしなアプローチをされにくいでしょう」

「ひよっとして、セシリアがクラス代表辞退したのってそこまで見越してたの？」

「一夏さんがクラス代表に相応しいと思ったのは本当です。諦めない

姿勢や、誰かを守りたいという想いは賞賛に値します。でも、もしそう思わなかったとしたら、貴方をクラス代表に推していたでしょうね」

顔だけ振り返るセシリアの表情は柔らかい。彼女がクラス代表決定戦で全勝していたにも関わらず、代表を辞退した事に後悔は無いようだ。

それは、別の言い方をすれば、彼女に認められたということだろうか。こうして自分のことを案じてくれていることも。先日友達になつて欲しいと手を差し出されたことより、そのほうが嬉しいと思つた。

「ありがとう、セシリア」

「べ、別に、貴方が危なっかしくて放っておけなかっただけですわ。さ、着きましたわよ」

生徒会室の前で足を止めた。背の高い両開きの立派なドアだ。立札が無ければ学園長室か何かと見間違えたかもしれない。

自然と、生唾を飲んで一息を着いた。

ノックは三回。重くて固い音が扉の分厚いことを示していた。どうぞ、という中からの声も小さく低い。

「いらつしやうい」

が、中の人物の声は明るくて高かった。

「失礼します。布仏本音の代役で来ました、一三三八といいます。それと」

「セシリア・オルコットと申します。この度は十三八さんの付き添いで参りました」

「話は本音から聞いているわ。十三八くんだけ呼ぶと言つてただけで、特別にセシリアちゃんも許可しましょう」

内側にはねた青い髪の生徒会長は、社長デスクのような会長机の上に腰を預けて言った。

「生徒会長の更識楯無よ。あなたたちのクラス代表決定戦、見てたわよ。イギリス代表候補生と、リミテッド・ストラトスの操縦者さん」

天晴、という文字が開かれた扇子の上で踊った。

明るく、しかしどこか値踏みしているような視線は、捉え所の無い表情で演技なのか素なのか掴みづらい。

セシリアは視線を動かすと、

「……失礼ですが、生徒会長以外には誰もいらっしやらないのですね。はじめからトミーさんを呼ぶつもりだったのではないですか？」

「そんな怖い顔をしないでよセシリアちゃん。私がLS操縦者を直々に呼んだというのを、マズイと見る人もいるってことよ。そうね、まだるっこしいのは無しにして、単刀直入に言うわ」

更識の顔付きが真面目なものに変わる。

「生徒会に入りなさい、一十三八くん。それがあなたのためよ」

「……えっと、理由をお教え願いますか？」

「そうね、それを伝える前に聞きたいのだけど、IS学園屋外アリーナの天井バリアについて、何か知ってる？」

トミーは首を傾げ、セシリアは眉間にシワを寄せた。

「……本来でしたら、アリーナ上空にはバリアが展開され、内外の移動が出来なくなるハズ。しかも外から突入されようものなら、観客席はシールドで守られるようになってる。しかし、私達のクラス代表決定戦では上空のバリアが張られておりませんでした。私も後から知った話ですが……」

「何故だと思う？」

「まさか、僕、いや、LSに関係が？」

「そうよ。IS学園側はLSが勝利を掴まないよう、空を開放したの。特にセシリアさんは勝てるようにね。一夏くんは男性だからどうでも良かったみたいだけど」

「そうまでして、なぜLSを嫌うようなマネをするのです？」

「本当に嫌いな人がいるのよ。もし男性が乗るLSが、女性の乗るISに勝利してみなさい、世の中の常識が脅かされることになるわ。それを良しとしない連中が、この学園の管理側にもいるって訳」

「なんて勝手な……！ トミーさんはあんなに矜持を持った戦いをいたしましたのに」

「その辺については少し見直されているみたいだけど、微々たるもの

よ。でも、だからって私はあなたが、この学園の生徒が変な危害を受けるのを黙って見逃すつもりは無いの。私はこの学園の生徒会長だから、ね」

「それで、僕が生徒会にいたほうが、更識さんからは守りやすい、と」
「そ。一夏くんも男性操縦者という点で目をつけられているけど、彼はクラス代表という生徒会に近い立場だから目が届きやすいわ。でも、あなたはそうじゃないでしょう？ どう？ あなたにとって、悪い話では無いと思うのだけど」

確かにそうだ、とトミーは思った。

自分の預かり知らぬところで自分を快く思わない人がいる。しかも裏で手を回して嫌がらせもしている。それを良しとしない、という楯無の話はとても頼もしく聞こえた。

しかし、

「せっかくだすけど、ご遠慮いたします」

「あら、知らないお姉さんのお誘いは不信に思っちゃった？」

「いえ、そうじゃないです。楯無さんが僕のことを案じてくれるのは嬉しいですよ。でも」

セシリアを一瞥して、

「僕の近くにも、僕のこと気に気を遣ってくれる優しい友達がいいます。だから、この先何があっても、きつと大丈夫です」

今こうして、一緒についてきてくれる世話好きの友人がいる。こんなに頼もしい人が身近に居るのだから、わざわざ生徒会長の手を煩わせることは無い。

それに、自分の事くらい自分で対処したいという、ちよつとした男の子的な考えもあった。

「あら、なるほどね。お姉さん、余計なことをしちやっただかしら。ゴメンナサイね、セシリアちゃん♪」

「そ、そ、そうですわねっ。生徒自身の自主性を尊重するのも、生徒会長を務めかと思えますわっ」

「上ずってる上ずってる☒」

「喉の調子が悪いだけですっ！」

そういうことにおきましようか、と楯無はケラケラ笑った。口元を隠す扇子には青春と書かれている。トミーには文字のチヨイスが解りかねた。

「それなら安心だわ。正直、十三八くんが女の子だらけの環境に馴染めているか心配だったのもあるから」

「幸運にも一夏という同士もいますから、それなりにやっていますよ」
「よろしい。それじゃあ、人間関係を良くやっているあなたに、一つ野暮用をお願いできるかしら」

「何なりと」

楯無は一枚の紙を差し出した。簡単なプロフィールのようだ。添付されている写真には、元気そうなツインテールの女の子が写っている。

「実は今日の放課後、転校生がここに到着することになったの。クラスは一年二組、名前は凰鈴音。中国の代表候補生よ。学園に不慣れな彼女の案内をしてもらいたいの」

「あら、中国の代表候補生、ですか」

セシリアは不敵な笑みを浮かべた。

「構いませんよ。同級生ですし、僕みたいに早く学園に馴染んで貰いたいですからね」

「ふふん♪ 頼もしい後輩が出来て嬉しいわ。それじゃあ、よろしく頼むわね」

楯無の扇子には謝謝と記されていた。

VI 無垢な敵意

「アタシ、アンタのこと嫌いだから」

放課後、IS学園校門前で出迎えた転校生、凰鈴音の放った言葉に、学園の案内役を任されたトミーは口を開けたままフリーズした。

「……、ええつと、僕、凰さんと初対面なんだけど、何か気に触ったことしたかな？」

「こうして出迎えた相手に随分な物言いですね。中国の代表候補生さんは」

一歩後ずさったトミーの隣、彼に付き添ったセシリアは一歩踏み出して抗議した。

「ハンツ、代表候補生とか、そんなの関係ないから。私の転校が遅れたの、アンタのせいなんだからね」

「ええっ!？」

「知らないの？ LSの操縦者さん。アンタのスポンサー、中国からIS技術者をゴツソリ引き抜いたのよ、日本の倉持技研に。お陰で中国のIS関連は急ブレーキ。私も今まで待ちぼうけを喰らったってワケ」

「それだと、僕じゃなくて僕のスポンサーが悪いってことじゃあ……」

「ないのよ、アンタのがIS学園へ入る為の便宜でそうだったんだから。コツチはとんだとぼっちり」

「アチャー」

頭痛を庇うように額に手をかざしながら、さてどうやって彼女の不満を鎮めようかと思案した。

「ちなみに、それだけじゃないから」

「まだあるの!？」

鈴がトミーの顔に真っ直ぐ指差す。

「アンタのせいで最初の男性IS操縦者は一夏じゃなくなってしまった。それもLSなんて不名誉なモノなんかで！ だからアタシはアンタが嫌い。一夏が得るはずだったモノを搔っ攫ったアンタが！」

「ちよ、ちよつとお待ちになって！ 貴方、一夏さんのお知り合いでし

たの?」

「そりやあそうよ。アタシは一夏の幼馴染なんだから」

え? とトミーとセシリアは顔を合わせる。

「一夏の幼馴染って、箒の他にもいたってこと?」

「しかも、日本ではなく中国に、ということになりますわね」

「誰よ? その箒ってヤツは」

「知らないんですの?」

「一夏のやつ、どういう交友関係をしているんだ?」

「コツチが聞きたいわよ! だいたい何、アンタ達も一夏と知り合いなワケ?」

「まあ、同じクラスだし」

「練習もご一緒しておりますし」

「ズルい! 1組ズルい! アタシは何で2組なのよ!?! ハッ、まさかコレもアンタの差し金!?!」

「いや違うから! 僕にそんな権力無いから!」

「あくもう、ムカつくわ。アンタ、早いとこ一夏のとこに案内しなさい! どうせアタシの荷物なんてこれだけしかないんだから」

そう言うと、小柄な体格に合わない大きさのボストンバックを軽々と肩に担いだ。

これを凶器に暴れられたらたまらない。

一夏には悪いが、ともかく周囲の安全のためにも風鈴音の言うとおりにすることにした。



「で、ああなったわけか、トミー」

「いや、まさかああまでなるとは想定していなかった。予想が甘かったよ。ゴメン、一夏」

夜。すでに学食が終了し、電気が落とされたランチルーム内。月に照らされた窓際の席で、ホットレモンティーの入ったマグカップを片手に一夏とトミーはため息を付いた。

「で、今夜の一夏の部屋は結局どうなるんだ」

「箒と鈴に明け渡した。ドアが失くなった部屋でどやされたら、声が

廊下に響いてまた野次馬が集まってしまふからな」

思い出すのも嫌そうにマグカップをテーブル置いた。

鈴が一夏と再開するや、一緒にいた箒について言及が始まり、『どう
いうこと(だ)!!』の腹式ボイスデュエット。

さらに箒と一夏が同じ部屋に戻ろうとしたタイミングもあって、鈴
のボルテージがヒートアップ。籠城のドアをぶち破り、喧騒を聞いた
あたりの住人が集まって、寮母である織斑千冬のカミナリが落ちた、
と相成った。

「あの千冬さんがよく許したね」

「経緯報告書とドアの修理要望書を明日朝イチで提出しろって言われ
たよ。あと解決策も同時につてさ……」

「うわ、また無理難題を出されたなあ」

「トミー、何とか知恵を貸してくれ」

「うくん……。とりあえず、嵐さんについてももう少し詳しく教えてく
れない？」

解決策を練ろうにも、トミーは鈴をよく知らない。どういう人なの
かについて教えて貰えれば、何か妙案が思いつくかもしれない。たぶ
ん。

「真っ直ぐな子だっというのは良くわかったけどさ」

「ああ。裏表のない真っ直ぐなやつだ。昔、よく弾……。ああ、俺の男幼
なじみな、と三人でワイワイやっていたよ」

「箒が転校した後に嵐さんと出会って、一昨年……。中学二年まで一緒
にいたんだっけか」

「ああ。家庭の事情で故郷の中国に帰っちまったんだ。それから、
たった二年でISの代表候補生になるなんてな」

「二年で物凄い急成長だね。ひよっとして嵐さんって天才肌なの
？」

「うくん、別に天才とかそういう部類じゃないと思うぞ。千冬姉とか、
箒のお姉さんの束さんとか見てるから、ハードルが高いせいかもしれ
ないけどさ」

ホットレモンティーを少しすすって、

「あらためて見ると、箒は天才東さんの妹で剣道全日本優勝者、セシリアはイギリス貴族で大富豪の上に代表候補生、トミーは国連スポンサー企業に所属する世界唯一のLS操縦者、なんか俺の周りって凄いやつらばっかりだな」

「一夏だって、世界最強のブリュンヒルデの弟で世界唯一の男性IS操縦者。十分凄い部類に入ると思うよ」

「男性IS操縦者なら、お前だって……」

「僕はIS『もどき』のLS操縦者さ。普通のISは動かせるだけ」

トミーはマグカップの温もりを両手で感じながら、

「あくまで比較的だけど、凰さんって結構普通な環境なんだね。それなのに、わずか二年で国家代表候補生になるなんて、よっぽどのことがあつたんじゃないかなあ。一夏と一緒にいた時は何か思い当たること無かつたの?」

「いやあ、特にはなかつたな。だいたい一緒について言っても遊んでただけで、……いや、まさか」

「なに?」

「ああ、実は鈴のやつ、料理の腕が上がったら俺に毎日酢豚を作ってくれるって言ってたんだよ」

「へえ……ええっ!? い、一夏? それってまさか……」

「ああ。鈴はきつと、料理人になるために代表候補生になつたんだ!」
「なんでそっち!?!」

「鈴が目標とか夢を語ったことなんて、それくらいだからな。それにIS操縦者って肉体的に結構ハードだろ? それを満足させる料理を作るようになれば料理人として箔もつく。そのために、まずは相手を知らるために自分でIS操縦者になつたんだと思うんだ。どうだ?」

トミーはすっかり冷めたマグカップの中身を一気に飲み干した。

「……つぶは。一夏、解決策は決まったよ。君が凰さんをいたわることだ」

「な、なんでだよ!? コッチは怒鳴り散らされた上に部屋のドアを壊されてるんだぞ!」

「それじゃあ、もう夜も冷えてきたし、お休みなさい」

「いや聞けよ!?　つか、今晚お前の部屋に泊めさせてくれないか？」

今夜は寒くって寝床がないのはさすがに辛い」

「やだ。僕の部屋はウチの研究員室の間借りなんだから、部外者は立ち入り禁止」

「は、薄情者〜！　親友を見捨てる気かよ〜！」

「今夜くらいお姉さんと家族水入らずで過ごしなよ。さっきの解決策を手土産にすれば断られることはないと思う」

「うう……。明日、朝イチでまたココな」

「ジョギングが終わったらね」

トミーは後ろ手に振りながらその場を立ち去った。

(それにしても)

と、トミーは思う。

(好きな人のために、異国に行っても再会を誓って非凡な努力をするなんて。お清さんが恋を勧めるのもわかる気がするなあ)

耳年増なだけで、いまだ恋を知らない少年は、澄んだ空気の春の夜にそう思うのだった。



「はあ……」

セシリアは何度めかわからないため息をついた。

(成り行きといえ、箒さんと鈴さんの取り成しを任されるなんて、ツイてませんわ……)

一夏と箒の住む1025号室。今はドアが壊されて鈴のポストンバックで塞いだだけの……むしろそれほど大きいバックを鈴は軽々と使っていた……暖房があまりきかないのに暑苦しい部屋の中で、セシリアは二人の喧騒を見遣った。

「ドアを壊しこのような事態を招いたお前なんぞに、一夏の幼なじみの称号はやれないな！」

「アンタがISを部分展開した余波でこうなったんでしようが！　承認はそのイギリス代表候補生！　いいわよね？」

「セシリア、という名前がありますよ。凰さん」

「鈴でいいわ。名字呼びなんてむず痒くなるから」

「名前の通りやかましいヤツだ」

「ハンッ！ 箒なんていうよりモツプのほうがグダグダして合ってるんじゃない？」

「なんだとー」

ほら、また始まった。

一夏さんの幼なじみはどちらが相応しいか。相部屋の相手はどちらが望ましいか。議論の中身はそんなところで、議論に相応しくない人格攻撃が応酬しているから、話は一向に進まない。

(まあ、正直わからなくもない部分もありますけれど)

セシリアも、幼い頃の親友の『彼』に他の女がいたと知ったらどうなっていたことが。

あのときはまだお転婆だったから、たぶん、こんな感じになったかもしれない。

とはいえ、それはそれ。これはこれ。

「箒さん、鈴さん、お二人ともいい加減にしなさいな。結局は、一夏さんに決めて頂くしかない話でしょう？」

「む、まあ、セシリアの言うとおりでな。アイツが私以外を選ぶなどありえんが」

「言うじゃない。その余裕顔、いつまでもつかしらね。って、そういえば、セシリアの方は災難だったわね」

あら、

「鈴さん、わかってくださいますのね」

「そりゃあね。あのトミーっていうLS操縦者と一緒に出迎えさせられるなんて、ホントツイてないわね」

「……はい？」

「だってそうでしょ？ 紛い物の出来損ないISを動かした程度で良い気になって、男性IS操縦者爆誕！ だなんて。まるでピエロよね。しかも所詮企業のイヌに過ぎないのにIS学園に入学って！ アイツのせいで入れなかつた受験生が可愛そうだわ」

「……鈴さ」

「ふん、何も知らない部外者らしい偏見に満ちた物言いだな」

セシリアが低く小さな声で呼びかけようとした矢先、箒の言葉が覆いかぶさった。

「はあ？ 何よアンタ、まさかLS操縦者にたぶらかされたの？」

「まさか会って間もない相手の悪口を言い出すとは、やはり一夏の幼なじみは私しかいないな」

「知ろうなんてこれっぽっちも思わないわよ！」

「……なぜですか」

セシリアの鋭い視線に、鈴が少し怯んだ。

「な、なによ、セシリアまで」

「なぜ、トミーさんのことをそうまで悪く言えるのですか。いえ、それほどまでに、一夏さんをお慕いなさっているのですか」

「セシリア!?!」

「そうよ」

鈴は顎を引いて、上目遣いに睨みつけた。

「アタシは一夏が好き。一夏にまた会うために、今日まで頑張つて、ここまで来たの。一夏が褒められたらアタシも嬉しいし、一夏が疎まれたらアタシも怒る。でも、トミーとかいうやつのおかげで一夏に当たるはずのスポットライトは奪われた。きつと一夏が光に当たっていたなら、もつと一夏は輝いていたはずなのに……!」

拳を震わせ、全身から放つ気が怒りを表している。

箒は閉口した。鈴の言い分がわからないこともないからだ。

（しかし、トミーがいたから、男性IS操縦者へ向けられた敵意と悪意は一夏に注がれていないのだぞ）

篠ノ之束という、あらゆる悪意と敵意を向けられる姉を持つ箒は、その恐ろしさを身近に感じていた。束が女尊男卑の象徴であるISの発明者故、多くは男性から向けられたものだった。一夏とトミーはその真逆。しかし同じ嫌な注目が一夏から逸れることが出来ているのは、トミーには悪いが幼馴染である以上正直ホツとしていた。

そう口に出そうとしたが、今の鈴に伝わるとは思えなかった。

それに、

(セシリア、明らかに不満そうだな)

うつむき加減で顔色がわからないが、雰囲気からそう察せられた。セシリアがそれとなくトミーを気にしているのは箒も知っている。彼がセシリアの知り合いと似ていたから、という話だけでは片付かない、まごまごとした微妙な距離感は、クラス代表決定戦以降さらちぐはぐな間隔となっていた。

「わかりました」

セシリアが告げた。

「では、一度トミーさんとお手合わせしてみてはいかがですか？　そうすれば鈴さんの鬱憤も晴れるでしょうし、同時に相手を理解できるかもしれないでしょう？」

「へえ、いい事言うじゃない。まあ理解するつもりなんてないけど、訓練と称してブツ飛ばせるなんてステキだわ」

「では、三日後の放課後に屋内IS訓練所ではどうでしょう。セツティングはコチラでしておきますので」

「上等。箒と違って、セシリアみたいな子と出会えて良かったわ」

箒はムツと口から出そうになった買言葉呑み込み、セシリアの顔色を伺った。一見たおやかそうだが、仮面だということは目を見ればすぐにわかった。

(セシリア、どうして……?)

セシリアの瞳のは箒を捉えず、鈴の軽口を仮面で受け流して、双眸だけで敵意を向けていた。

VII 愛情ランチと課外訓練

IS学園寮1025号室。一夏と箒の暮らす部屋のドアは無事に修理が済んでいた。担当した業者のおじさんは、

「何か爆弾テロでもあったんですかい？」

とドアの惨状を称したが、鈴の登場はまさに彗星の如く現れた。主に墜ちた被害という面で。

輝きという面でも、鈴が入った1年2組はとても明るくなった。ランチルームの賑わいが増したりした。すでに決まっていた2組のクラス代表も、その変化をみて快く鈴へ譲ったようだ。とこれは鈴の談であり、真相は不明である。

そして鈴が転校して来てから三日後の昼休み、屋上で昼食を広げていた一夏、トミー、箒、セシリアの前に、鈴は意気揚々と現れた。

「やつほく、一夏！ こくんな天気の良い日なんだから外でランチしたいわよね。つてことで、作ってきたのよ酢豚！ さ、食べてみてちょうだい」

「お、おう。悪いな鈴。でも、今日はセシリアがランチを作って来てくれたそうだから、あとからでもいいか？」

セシリアの持ち寄ったバスケットの中には、サンドイッチにミートパイ、ウエルシユケーキといったイギリス料理が実に見栄え良く並んでいた。

「だめよ。アンタたち同じクラスなんだから、家庭科の授業なんかでいつでもできるでしょ。……うわ、自分で言つて切なくなってきた。とにかく食べなさい！ それにアタシとの約束、まさか忘れたとは言わないわよね？」

「あ、ああ。もちろんだぜ鈴。それで、料理の腕は上がったのか？」

「そんなの食べてみればわかるでしょ。はい、あくん」

「ええっ!? ちょっと……」

一夏が助けを求めてあたりを見渡すも、全員半目で返された。それでも必死に目で訴える。

(と、トミー！ ヘルプミー！)

(やだ。なんか凰さん僕に風当たり強いし。それに凰さんをちやんとねぎらえって言ったよね)

(ほ、箒……！)

(ふん。せっかくなんだ、食べればいいだろう。私が作ってきた唐揚げは他の皆で頂くとしよう)

(せ、セシリア……)

「はい、トミーさん、あくん」

「あくん」

(みんなの薄情者……！)

一夏は一人でこの赤い彗星を受け止めなければならぬのかと戦慄した。別に鈴の料理が悪いとは思わない。鈴の食べさせる勢いが通常の三倍で自分だけでは抑えられないと思ったのだ。記憶が確かなら辛口こつてり酢豚が得意だったハズ。しまった、胃薬の貯蔵が全く無い。

(え〜い、ままよ！)

と一口すると、

「……ん？ 美味しい！ 口当たりも滑らかで、味付けも丁度いい。出来るようになったじゃないか、鈴！」

「そ、そう？ やだ、そんなにハッキリ言われると、照れちゃうじゃない……」

「いやあ、本当に美味んだからしようがないじゃないか。トミー、お前も食べてみる……」

よ、と言い終える前に、セシリアの手から料理を口にしたらトミーの体が妙に固まっていることに気がついた。灰色に塗れば石像に見えるかもしれない。

「いかがでしょう、トミーさん。お口に合いましたかしら」

おやおずたずねるセシリアに、トミーは引き攣ったような笑顔と首で肯定してみせた。

「まあ！ それは良かったわ、まだ沢山ありますからどんどん召し上がってくださいね」

セシリアが次の料理をトミーの口に運ぶ。それをパクリと食べ、セ

シリアに気づかれぬように視線を一夏と箒に向けた。

(これはひどい)

努めて嬉しそうな表情を崩さず青筋を垂らすトミーの顔に、一夏と箒は恐々と仰け反った。

「セシリア、そんなヤツ一人に食べさせるなんて勿体無いわよ。アタシの酢豚と少しトレードしない？」

「いいえ、トミーさんは美味しいとおっしゃっていますので結構ですわ。嬉しそうに召し上がって頂ける方を大切にしたいじゃありませんこと？」

「アンタも物好きねえ。んじゃあ、そのミートパイひとくちだけでいいから頂戴よ。一夏と、まあ箒も、気になるでしょ？」

「え!? えつと……」

「私は、別に……」

トミーは無言でセシリアの料理を胃に流していた。その顔がみるみる青ざめているのが二人には見て取れる。

「あー！ アンタもうこんな食べちゃって、ホントデリカシー無いわね。いいわ、じゃあこれを三等分して……」

残ったセシリアの料理を小皿に取り分ける。それをトミーがなおも無言で止めようとするが、

「なによ、アンタばかり平らげるなんてズルいつて言ってるのよ。はい、二人とも」

「トミーさん、またお作りして差し上げますから、皆さんにもぜひ味わって貰いましょう」

セシリアに静止されるも、トミーは以前として無言で必死に止めようともがいた。しかしその手が届くことはなく、

「まあ、一口くらいなら」

「大丈夫、だろう……」

「んじゃ、いっただつきまーす!」

一夏、箒、鈴の三人は一斉に口にし、見事な3つの石像が出来上がった。



放課後、屋内 I S 訓練場に向かうトミーはお腹をさすりよろけながら歩いていった。

「ねえ、凰さん。お願いだから、今日の訓練延期しようよ……」
隣を歩く鈴もまた足取りが重く顔色も悪い。

「は、はん……。これしきのことです音を上げるなんて、だ、だらしないじゃない……」

「凰さん、口調が暗いよ……」

「余計なお世話よ……」

到着した訓練所の椅子にどちらとも無く座り込み、はああ……。と重たい溜め息を同時についた。

「……つかさあ、アンタ、なんであんなに食べたりしたワケ？ 自殺志願者？」

「……みんなに悪いから」

「自分一人が犠牲になれば良いとか、そんなの全然カツコよくないわよ」

「凰さんは知らないだろうけど、セシリア、前日から頑張っていたんだよ。腕によりをかけて心を込めて作りますね、って。一夏って料理上手いでしょ？ それにあてられたみたいで」

「ああ、なんとなく読めたわ。相変わらず一夏って主夫力高いんだから」

「ちなみに昨日の箒の唐揚げは固かった」

「あ、そ」

はあ、と鈴はまた溜め息を着いた。椅子の背もたれに身を預け、天井を見上げる。

(何だろう……)

鈴は変に苛立つ自分を感じた。

(もつと嫌なヤツだったら良かったのに、なんて思うなんてさ……)

この三日間、一夏の側にいるせいで嫌でも目に入るトミーの姿は、決して想像していたような情けない男子ではなかった。一夏の相談に乗ったり、専用機のない箒のために訓練機を手配したり、セシリアの気持ちを無下にしなかったり。

嫌なヤツだったら、ブツ飛ばして、アタシの方が強いんだから従いなさい、みたいに上手に出れたのに、コレじゃあ調子が狂ってしまう。(ま、一夏が見込んだだけのことはある、か)

あくまで一夏という基準があつてだが、鈴の中でトミーに対する評価が変わりつつあつた。しかし、それを認めるのもまた癩に障る。

「……もう、早いとこ始めちゃって、サツサと終わらせちゃいましょう。アンタだって、早いところ休みたいでしょう?」

「いや、本当に止めにしたくない? こんな状態で訓練したって、きつと身にならないよ」

「そう言ってお流れにしたいワケ? なっさけないわねえ」

「こんな調子で例え勝ったとしても、お互い満足しないでしょう?」

「はあ? アンタ、まさかアタシに勝つ気でのいるの?」

「これでも、ただ突っ立っているほどヤワには出来ていないよ。それに、ココは地下だよ? 空がない」

「だから何よ」

「いくらLSが飛べないからって、甘く見ちゃいけないフィールドだってこと」

「へえ……!」

鈴は椅子から立ち上がった。身長が低くても、座っているトミーを見下すくらいの角度はつくれた。

(面白いじゃない……!)

飛べないISもどきで、この中国代表候補生、凰鈴音に敵うと思つているのか。しかもこのコンディションで。

(上等だわ! ホント、一夏の見込んだだけのことは、あるつてワケね)

「ちよつと、そこの一年生! ここのコート使わないんだつたら貸してくれなくい?」

入口から、格好を見るに上級生らしい生徒の声が聞こえる。

「使うわよ! 今からね。他をあたつてくれないかしら?」

「それじゃあ、すぐ終わると思うから、コートの隅っこ少し借りるね!」

「流れ弾に気をつけなさいよ！」

何か二人で作業を始めている様子だが、そんな見ず知らずの他人には目もくれず、ギラギラとトミーを見つめて返事を返した。

「それじゃあ、始めましょうか。アタシをあんまりガツカリさせないでよね？」

◇

屋内訓練所の二階キャットウォークにて、一夏たちはトミーと鈴の準備を見ていた。体調はお互い良く無さそうだが、結局訓練は始めるらしい。

「それにしても、みなさん急に体調を崩されるなんて、いったいどうなさったのでしょうか？」

セシリアの問いに、一夏と箒はお腹を抑えながら引きつった笑顔で答えた。

「さ、最近の訓練や勉強の疲れが出てしまったんじゃないかな……。ストレスって知らないうちに蓄積するっていうし……。」

「そ、そうだな……。もうすぐ五月だし、五月病が前倒ししたのかもしれない……。」

「あら、疲労や倦怠って、お腹に表れるのですかしら？」

「た、たまたまだろう！　そう、今年の流行はお腹に来るのかもしれないぞ！」

「箒、その話、ちよつと苦しいぞ。腹が苦しいだけに」

「黙れ、一夏。あんまり頭を使えないんだ」

力なく手すりに持たれながら、眼下の二人を見遣る。二人共 I S ……トミーのは I S と呼ばれるが……を起動させた。いよいよ開始するようだ。

「ところでセシリア、どうして鈴を焚き付けるようなマネをしたんだ？　確かに鈴のトミーへの態度は不遜だが、これではトミーのとばかりではないか」

「箒さんの疑念もわかりますが、もちろん理由がありますわ。それも二つ、いえ、三つございます」

セシリアは三本指を立て、順番に折って説明していった。

「二つ目は、鈴さんの戦闘スタイルを観察するためです。なぜかという、来月に開催されるクラス代表戦に活かすためですわ。しつかり録画も撮ってちゃんと対策を練り間違いない勝利を掴み取りましょう。ね、一夏さん」

「お、おう……」

「二つ目は、トミーさんが鈴さんを打ち負かすためですわ。ここは空のない屋内訓練所ですから、飛べないトミーさんにも十分勝機があります。それは直接戦ったわたくしと一夏さんならよくお分かりになるでしょう。嫌いな相手に遅れを取れば、多少は態度もお変わりになるでしょう?」

「な、なるほど……」

「そして三つ目、例えトミーさんが敗れたとしても、鈴さんとして無事では済まないはず。そこをズバズバ突いて未熟を悟らせるのです。散々バカにした相手に苦戦するなんてまだまだですね、と伺えば、鈴さんもトミーさんを無碍にせず精進なさることでしょう」

ウフフ……、と暗く怪しい笑みを浮かべるセシリアに、一夏と箒は一步引き背筋を震わせた。彼女の祖国イギリスは謀略が得意だと噂されるが、これは本当かもしれないと思った。

「さあ、頑張つて、トミーさん。わたくしの愛の籠った手料理をお食べになったのですもの、きつと勝利できますわ」

(いや、それはどうだろう……)

一夏と箒は思考のシンクロ率が最大に上がった。

◇

鈴のIS【甲龍】は小鬼を連想させる姿だった。アンロック・ユニットである肩のスパイクアーマーのせいか、配色が赤みがかっているせいか、獲物が巨大なナタのようなものであるせいか。

なにより、彼女の戦闘スタイルがそう思わせた。守るより攻める。動いたら攻める。とにかく、全ての動作が攻撃に転じている。

「ホラホラー！ 反撃しないと削り負けしちゃうわよー！」

対するトミーのLS【グレイ・アイディール】は守りに徹していた。大型四脚の下半身は小刻みにPIC（パッシブ・イナードシャル・キャ

ンセラ―)を吹かして動き、時折、格闘技のスネガードじみた守りを見せている。尻尾鋏『ペンチヒッター』はフェイントや牽制にウネウネガチガチ動き回っていた。

両手の獲物はまだ使われていない。ひたすらフットワークで巨体を揺らし、鈴の動きをじつと見ている。

(コツチの動きを読もうっていうの？ ナマイキな！)

【甲龍】の肩のスパイクアーマーがスライドし、中心に球体があらわれた。瞬間、光と共に空間が爆ぜた。トミーの大柄なLSがぐらりとよろめくほどの衝撃がはしり、ズシン……！ と地面に膝をつく。

「流石に『龍砲』は防ぎきれなかったようね。見えない砲弾の味はどう？」

「……セシリアの手料理より、万倍マシだよ」

「減らず口は叩けるみたいね！ たぶん本心だろうけど！」

鈴は飛翔し、広くはないコートの中を縦横無尽に飛び回りながら『龍砲』を放った。砲身射角がほぼ無制限な運用を活かし、どのような姿勢や動きからでも主の攻撃命令に應對できた。

初弾に続いて、次弾、三弾も命中。しかしLSの四脚はすぐに体制を立て直した。四発目、スネガード、五発目、体制移動で回避、そして六発目、右手の剣銃『グローリー・シーカー』切り払った。

七発目以降はもはや有効打とはなり得なかった。

(見切ったっていうの?! 見えないのになんで?)

鈴はアクロバットのように飛び回り、相手の守りにくい射角から砲撃するも、ここぞという場所には『ペンチヒッター』の鋏が切り払ってくる。

「目と、砲門の向き。風さんの性格かな、真っ直ぐすぎるよ」

「……ッ！ 余裕かましてんじゃないわよ！」

「しかたないよ。だって——」

トミーの【グレイ・アイディール】の巨体がPICを唸らせるや、爆速で鈴の眼前に迫った。空を飛ぶことはできずとも、跳躍することは可能だ。まして直進加速なら馬力違いが物をいう。鈴は退きながら砲撃するが、全て捌かれ追いつかれる。

「ここは狭すぎるんだから！」

「ちいつ……！」

(相手は跳躍、横にすり抜けてやり過ぎす！)

鈴は即座に左へ躲すが、

「ノルルックで回避しないと掴まっちゃうよ！」

尻尾鋏『ペンチヒッター』が口を開いて食らいついてきた。

「うっさいって言ってるのよ！」

それを大ナタで受け止め、

(——おもっ!?)

体格と出力の違いで、支えきれず地面へ叩きつけられた。上を仰ぎ、トミーの次の動作をみれば、左手の重銃『グラウンド・ブレイカー』が此方を睨んでいる。

「あ……」

「だから言ったでしょ。甘く見るな、って。降参してくれるよね？」

「う……そ……」

「屋内だもん。LSは地上戦では負けはしない。ほら、ジャツジの一夏たちに確認して……」

と、顔を二階のキャットウォークに向けようとしたその時。トミーの顔が爆発に覆われた。

「へ……う？」

鈴が呆然とする目の前で、爆音と衝撃がほとばしった。その直撃を頭部に受けたトミーは眼鏡を粉碎され、あらぬ方向を向いてLSの巨体が宙を泳ぎ、放物線を描いてコート上に墜落した。トミーの身体は投げ捨てられた玩具のように、四肢を投げ出して力なく突っ伏した。

「な、何で……?？」

「あゝあ、誤射っちゃったよ」

とぼけたような声の方を向くと、先程の先輩がた二人がニヤニヤとこちらを見ていた。

何か大きな物がすでに量子変換され消えていく。一瞬しか見えなかったが、大砲のようなものかも知れない。

「あんた何やってんのよ。せつかくコートの隅っこ貸してもらった

のにー」

「しよくがないじゃん、事故だよ、事故。なんか試合に水差しちやつてゴメンネ〜?」

「な……な、なんてことしてくれんのよっ!?!」

「だから、ゴメンって言ってるじゃーん。つーかさあ、あんた何負けそうになってんの? ISがLSに負けるとかマジありえないんだけど」

「確かキミ転校生の子だったよね。サツサともとの学校に戻ったほうがいいよ? LSに負けそうになるとか、センスなさすぎ〜」

キヤハハハ……! と笑う上級生に鈴は激高し、口を開ける。が、そこから言葉が出てこなかった、感情をぶちまけようとするも、突然詰まって出てこない。

(なんで、なんで何も言えないの?! 馬鹿にされてんだよ、アタシ! ……負けなかった、から? え、なに、ホツとしてんの? 嘘でしょ!?! ……やだ、でも、だって、こんな結末……!)

鈴の胸の中で様々な感情がグチャグチャに混ざっていた。外に出されない激情は、涙となって目から溢れる。

(何に対して泣いてんの?! 自分が負けそうになったから? あの先輩共に馬鹿にれたから? アイツが、トミーが、撃たれたから?)

……わかんない。 訳わかんない! アタシ、どうしたいのよ……。 やだよ、助けてよ、一夏——!)

「い……っ、か……。 たす……けてよ……、いち……かあ……!」

「うわ、あの子泣いてるんだけど」

「やっぱりIS学園に裏口入学でもしたんじゃない?」

「いやそれを言うなら裏口転校でしょ」

「アツハハ! そうだね、ほくと傑作! ……ん?」

笑い終えた間際、モゾリと、LSが動いた。顔が、トミーの顔がこちらを見ていた。爆発で眼鏡をなくし、あらわになった空色の両目がよく見える……否、両目が空色の輝きを放っていた。人間は目が光らないのに。

「え、なに?」

片割れの先輩の問いに返答するように、トミーのLSが再び、ゆつくりと、立ち上がった。四脚はしっかりと地面を踏みしめ、尻尾鋏『ペンチ・ヒッター』が生物のように蠢いている。

そして次の瞬間、トミーの上半身が黒い服を着たように変色した。黒服は形を変え、次第にISの装甲の形を成していく。顔も、寒々しい空色に輝く瞳以外が漆黒の仮面で覆われていった。その姿は、色と性差的部分は違えど、

「ブリュン……ヒルデ……？」

かつてIS世界大会モンドグロツソを制し、最強の称号を手に入れた織斑千冬と愛機【暮桜】。その《ブリュンヒルデ》と称された者の姿に似かよっていた。

黒い鎧を纏ったトミーは、LSの下半身を脱ぐように腰部のパーツが外れ、その大型四脚の上に立ち上がる。

「分離できたの!？」

「いや、そこじゃないでしょ。いや、そこもあるけど。……つか、下半身まで同じって、あいつ、マジで《ブリュンヒルデ》だ」

「ど、どうせLS常套句の『もどき』だよな……っ？」

「うん。でも、あれ、ドイツから来た仲間が言ってた状態にそっくりだ。たしか、名前は……」

「や、やめてよ、それ、もう研究されてないんでしょ？ ありえないんだけど。《ブリュンヒルデ》の、世界最強の『もどき』なんて……!」

トミーがゆっくりと動き出す。剣銃『グロリー・シーカー』もまた【暮桜】の得物『雪片』に姿を変えていた。その姿はまさしく往時の世界最強そのものだった。

先輩の一人が叫ぶ。間違いない、目の前にいるのは、かつて禁忌と呼ばれ、IS条約によって破棄されたはずの、

「VT（ヴァルキリー・トレース）システム!?! なんてこんなヤツが使えんのよ!」

返答は言葉ではなく刃によってもたらされた。

VIII 最強もどき

一夏は階段を飛び降りるように疾走した。

IS 学園屋内訓練所は、屋内とはいえISの飛行を加味した構造となつているため高さがある。そのためキャットウォークの場所が二階表記とされていても、通常の建物の何階分も降りなければコートに到着できなかった。

また、コート周囲にも不可視のバリアが張っているため、出入口以外からは入れない仕組みとなつている。

(セシリアはバリアを撃ち抜いて飛び出そうとしたけどな!)

トミーと鈴の訓練試合の佳境で、トミーを砲撃した先輩方にセシリアはISの武装である『スターライトmkⅢ』の照準を向けていた。一夏だつて鈴が涙を流した姿を見て飛び出そうとし、キャットウォーク前に張られているバリアに防がれたところだった。

(あいつら、誤射とかぬかしやがって……! 完全に故意だったじゃねえかつ!)

上から眺めればコート隅で暗躍している先輩二人が何をしているかよく見て取れた。砲身は短いが口径の大きな大砲を展開し、トミーのスキを伺っていたのは間違いない。

その後の鈴を貶す言動も一夏には我慢がならなかった。そしてさらに、

(トミーのやつ、なんで千冬姉みたいな姿になつたんだ!?)

敬愛する姉が扱っていたIS【暮桜】の姿を模したトミーの変貌にも怒りを覚えた。大切な肉親の勇姿をあんな劣化コピーで再現されるなど、

(絶対にゆるさねえつ! あの先輩共も、トミーも、みんなまとめてぶっ飛ばしてやるっ!)

怒りが全身を駆け巡り、何もかもが敵に見えた。すでにISを展開しているが、その翔る足も遅すぎるように感じて、さらに怒りが増していた。

そして最後の下り階段を半階分飛び降りてやっとコート入口に到

着し、中の様子を確認すると、

「な……!?!」

黒い【暮桜モドキ】を身に包んだトミーが、先輩の片割れの首を右手で締め上げ、左手の刀『雪片』はもう一人の胸に突き立てていた。シールドバリアと絶対防御が辛うじて黒刃を阻んでいるが、キイイイ……! という歯医者でよく聞くような音が次第にオクターブを上げていき、今にもその柔肌へ届かんとしていた。

「ヒッ……イ、ヤアアア……!!」

腰を抜かし半身だけ起こしている先輩が涙と絶叫を響かせる。もう一人の締め上げられている方もバタつく手足の力が次第に無くなっていった。

「やめろおおおおお!!」

瞬時加速（イグニッション・ブースト）で疾風のごとく【暮桜モドキ】に驀進する。それに気づいた敵は右手に持っているものを一夏へ放り投げた。

「くっ……!」

いかに憎い相手とて、気を失った女性を放っておくわけにもいかない。急ブレーキを踏んで飛んできた女性を抱きとめる。そこに、

「一夏っ!!」

鈴の声に敵を見ると、一瞬前にいた場所から消えていた。どこに? という疑問がよぎる前に、足元から地を縫うように迫ってきた刃が光る。

「うおおっ……!」

女性を抱えながら真後ろへ跳躍し、ギリギリで回避した。鈴の声が必要れば二人まとめて切られていただろう。

こんな卑怯なマネを【暮桜】は、織斑千冬は絶対にしない。

「——ふざけるなあああっ!!」

女性を優しく下ろすと、激昂と共に斬りかかった。

踏み込みはバツチリ、間合いは決して悪くない。敵はまともに剣で受けるしかなかった。

一夏のIS【白式】の白い『雪片式型』が、トミーのLSが起こし

た黒い【暮桜モドキ】の『雪片』とぶつかり合う。

怒りで血走る一夏の目が、恐ろしく冷えたトミーの瞳を捉えた。

「——トミー……?」

変わり果てたトミーの姿に、不意に熱いものが急速に冷やされていく。

(これは、トミーなのか? まるで、機械人形じゃないか!)

困惑が剣を鈍らせ、鏢迫り合いが押し負けそうになった。その時、

「一夏を離せ! 化け物!!」

鈴が『龍砲』を放ち、敵の横つ腹を撃ち抜いた。大きくコート端まで飛ばされるが、足で地面にブレーキ痕を残して止まり、剣を持つ構えは緩めない。

鈴は追い撃ちをかけようとするが、

「鈴っ! 後ろだっ!!」

「——えっ?」

巨大な鋏が鈴を啜え込んだ。トミーのLS【グレイ・アイデール】の下半身が尻尾鋏『ペンチ・ヒッター』を振るっているのだ。

その挟力は容赦なく鈴のシールドバリアを削っていく。

「あ、あああああっ!」

「鈴っ!! こいつ、自立起動までするのか!?!」

一夏がその鋏を切り落とそうとするも、【暮桜モドキ】が長い間合いを一瞬で詰めて斬撃をかましてきた。それを辛うじて受け止められたのは、千冬の技をトレースして一夏が見慣れていたからに過ぎない。

(セシリアの『ブルー・ティアーズ』の遠隔操作とは違う。制御に集中して動きを止めることも無く、操作も行動も両方を同時にこなしている……!)

一夏の後ろから【グレイ・アイデール】の下半身が鈴を挟み上げたまま突進してくる。前からは【暮桜もどき】がギリギリと剣を押しってくる。

(マズイ……! やられる……!?!)

そう敗北を意識した一夏の目の前を、金色の髪がたなびいた。青い

IS、セシリアの【ブルー・ティアーズ】が【暮桜モドキ】を抱きかかえてコートに押し倒したのだ。

「トミーさんっ!!」

トミーの空色に輝く目を覗き込み、セシリアが叫ぶ。

「しっかりと下さって下さい! トミーさんっ、私を見てっ!!」

セシリアの声に、トミーは何の反応も示さなかった。瞳は冷たく無機質な色を帯びて何者も映さず、その漆黒の身体は、

(熱っ……!?)

焼けたフライパンのような高温を放っている。

セシリアもISに乗るようになってから数多の機体を見てきたが、こんなことは初めてだった。

異変はそれだけではない。

(トミーさん、呼吸が……)

その呼吸は乱れに乱れていた。木枯らしのようなヒュー、ヒュー、という息が彼の黒い仮面の中から漏れている。よく見れば、瞳も小刻みに震えていた。否、彼の全身が小さく震えているのだ。

黒いISモドキのなかで、彼の身体が異常を来しているのは間違いない。なかった。

それなのに、

「ダメ……! 立っては、ダメです! 動かないでっ!!」

トミーは止まらない。

セシリアを押しつけ、刀を握み、再び立ち上がりとしている。

なおも抑えようとすがるセシリアに、黒い機体は刃を振り上げた。

「やめろー!!」

「逃げて、セシリアー!!」

一夏と鈴の絶叫がコート内に響く。しかし振り下ろされた黒い刃は鈍らない。

「——止まれっ! No. 11038号!」

その、誰の声も聞かなかった黒い機体が、凜とした声にピタリと止まった。

「千冬姉……? 箒……!」

声の方を見れば、織斑千冬と篠ノ之箒の姿がコート入口に現れた。箒は急いで呼んできたのか、膝に手をつけて息を荒げている。

千冬はいつもと変わらない調子で、かつて自分が搭乗していたISのデッドコピーの前に立った。

「No. 11038号、VTシステムの試験は無事に完了した。装備をしまえ」

千冬の呼びかけに、番号で呼ばれた者は素直に展開していたものを解除した。鈴を襲っていたLSの鍔は四脚の下半身と共に量子化し、黒い【暮桜もどき】もその装甲がもとの鉛色のLSに戻り、そして量子化していく。

残ったトミーは、未だに瞳を空色に輝かせ、さらに額の痣が焼き付けたように紅くなっている。

「これにて訓練を終了とする。ご苦勞だった」

千冬の宣言にトミーは見事な敬礼を見せた。そして掲げた手が降りされたとき、彼の身体が膝から崩れ落ち、

「——っ」

セシリアが優しく抱きとめた。その体はなおも高熱を放っている。

「渡せ、オルコット。今すぐにそいつへ処置を施さねばならない。お前の細腕では持って走れまい」

「急いでいるなら、このままISを使って彼を運ばせて下さい。それに、この試合を提案したのはわたくしです。彼への責任も取らせて下さい」

「フン……、良いだろう。処分は追って伝える。他の者達も先ずは保健室に行き体調を確認しろ」

「千冬ね……、織斑先生、俺も仲間を止められなかった罰を受けさせてくれ。トミーの体調を優先したい」

「あ、アタシも、一緒に行かせて下さい。あの先輩たちを同じコートに入れたのは、アタシだから……」

千冬は横目でコート隅に転がっている上級生を見ると、

「篠ノ之、山田先生が到着するまで、あの寝ているバカどもをみていてくれ」

「わかりました。……みんな、トミーを頼んだぞ」

「ありがとう、箒。お前だけが冷静でいてくれて、本当に助かった」
「相変わらず、一夏は仲間のこととなると頭に血が登りやすいのだ。
おかげで私はいつもこんな役回りだ」

「すまない。埋め合わせは必ずする。後でなんでも言ってくれ」

その小さなやり取りに、鈴は胸がチクリと痛くなった。一夏のことを何でも知っていると思っていた自分が、自分の知らない彼を指摘する箒よりも小さいように感じたのだ。

(幼馴染の称号、か)

箒がそう自分を表していたことを思い出す。少なくとも、今この場で最良の行動をとったのは箒だ。その相手を思いやる姿は、自分も見習うべきだと思った。

「おしゃべりはそこまでだ。走るぞ、付いてこい」

声をかけるや、先頭を切る千冬は後ろを置いていってしまうほどの速さで駆け出した。



「なんだよ、これ……」

トミーが自室として使っている研究室の中で、一夏は驚愕をこぼした。

「壁の棚一面、薬品でいっぱいだ……。それに、機材まで。コレじゃあまるで病室じゃないか……!」

「うわ、開封済みのこれ、かなりキツイ薬じゃない? 他のも分かんない名前の物ばかり」

一夏と鈴の言うとおり、トミーの部屋は人の生活する部屋にはおよそ似つかわしくないものだった。

研究室というからには書類や薬品があるのはわかるが、明らかに使用された形跡があるものが少なくない。中には針を使うものまである。それらがキッチンとあるべき場所に収まっているのは部屋の主人の性格だろう。

(俺を泊めさせてくれなかったのは、これを見せないためだったのか?)

鈴と箒にドアを壊されて部屋を明け渡した夜、トミーの部屋に宿を求めたところ「関係者以外立ち入り禁止」と断られたことを思い出した。

「トミーさん、いつたい、どうして……」

セシリアは腕の中でグツタリしている彼を抱きしめた。熱は未だ引かず、うなされていくように呼吸が苦しそうだ。

千冬は彼の使っているベッドの上にブランケットを敷くと指示を飛ばした。

「お前たちも動け。織斑、その奥に赤いボックスがある。持ってきてくれ」

「おう」

「風呂、洗面器に水を汲み、タオルと一緒に持ってきてくれ。タンズはおそらくあれだ」

「わかりました」

「オルコット、お前は（にのまえ）をベットに寝かせ、上半身を脱がしてくれ」

「かしこまり……ええ!？」

「どうした？ 緊急時の羞恥は命に関わるぞ」

千冬はそう言うのと次の作業に移っていた。

セシリアはどぎまぎとトミーをベッドに寝かせる。

（お姫様抱っこでやさしくベッドに寝かせ、服まで脱がせるのは、普通逆だと思うのですが……）

顔を赤らめながらトミーの着る制服のボタンを外していく。中のシャツは汗でぐっしより濡れ、肌につけていた。息は荒く、顔はのぼせ上がっているようにぼうつと火照っている。

（なんとというか、背徳的な感じがしますわ……）

シャツのボタンをゆつくりと上から外し、胸元を開いた。熱に侵された肌は赤くなっていた。薄つすらと湿る汗は、彼の鍛えられた肉体の上を流れ、筋肉を光らせた。

（これは、かなり、クルものがありますわね……!）

ゴクリとつばを飲むセシリアに、

「何をやっている、マセガキめ」

「ひゃあ!？」

千冬にタオルを投げられた。

「これで汗を拭け。できるだけしつかりやれよ。後に関わる」

「は、はい……」

言われたとおりにトミーの身体を拭き始める。

都合上、どうしても肌に触れてしまった。しかもしつかり拭けということは、髪や、首元も拭わなければならない。大人しくタオルを合わせるが、

(興奮するな、という方が酷でしてよ……!)

ウブな少女には刺激が強すぎる作業となった。

それがおおかた拭き終えた所で、一夏が持ってきた赤いボックスが開かれ、中の機材が準備された。その見た目は、医療器具のAEDを思わせた。

「オルコット、一(にのまえ)を横にしろ。織斑、私がよし、と言ったらボタンを押してくれ。嵐、念のためタオルを一枚湿らせて置いてくれ。……いくぞ」

千冬はパッドを両手に持ち、彼の胸に押し当てた。

「……よしー」

一夏がボタンを押すと、バシンツ！ と彼の体が跳ね上がった。一夏は低い声を漏らし、鈴は目を背ける。セシリアは口元に両手を当てたが、目は決して逸らさなかった。

千冬は彼の瞳を開け覗き込むと、

「効果が薄いな。もう一度いくぞ、……よしー」

バシンツ！ と再びトミーの体が跳ねる。セシリアは声こそこぼさなかったが、目尻に涙が浮かんだ。

と、彼の額の痣から黒い体液が流れた。使い古されたオイルのような色だった。それを確認した千冬は、

「よし、成功のようだ。嵐、濡れたタオルをオルコットに渡してやれ。後、ブランケットをもう一枚探してきてくれ。オルコット、彼の額を拭ってやれ。織斑、後片付けだ」

「わかった。けど、千冬ね……織斑先生、今のは一体何だったんだ？それにトミーの額の黒いのは……」

「手を動かしながら聞け。これはヤツの体内にあるナノマシンの活性化作業だ。今のシヨックで肉体の回復機能を促進したんだ。額の黒い液体は、古いナノマシンの残骸だな」

「どうして、トミーさんは、そんなものを宿しているんですか……？」
「アタシも聞きたいんですけど、織斑先生。訓練所のコートでソイツを番号で呼んでましたよね？アタシも番号呼びされる人を見たことありますけど、みんな特殊な事情を抱えた人たちでした。ソイツも、何かあつたりするんですか？」

「……そうだな」

千冬は全員が作業をしながらも自分を見ていることを確かめてから、応えを話した。

「11038、この数字と一（にのまえ）の名前を比べてみる」

「え？一（にのまえ）十三八（とみや）……あ！」

「そう、そいつの名前だ。正確には、被検体N0・11038号。つまり、実験体というわけだ」

「い、いったい何の実験をさせられているんですの!？」

「この学園に居るのが答えだ。男性でもISを運用できること。それを、擬似的であれ達成するために、あらゆる薬物投与やナノマシン付与をされてきた」

「なんで、そんな無茶なことするんですか？大体、ソイツの身体は大丈夫なんですか？」

「大丈夫なはずないだろう。これほど無理を重ねてきたんだ。恐らく、お前たちの半分も生きれまい。目的は、そうだな……」

千冬は少し話を区切り、

「……女尊男卑を良しとしない男たちが、男性の尊厳を復興させるため、といったところか」

「勝手ですわ！そんな人達のために、トミーさんがこんなことをさせられるなんて！」

「そう言ってもな。そんな奴らが居なければ、コイツはすでに死んで

いたかもしれないんだぞ」

「え……う？」

「一（にのまえ）を学園に受け入れる際にスポンサーに聞いたんだが、実験体はみな、怪我や病気などで寿命が短いか、死にそうな奴らを使っているそうさ。戸籍操作が楽だからな。おそろく、一（にのまえ）も何らかの事故にあつたかして、死にそうな所を生き長らえさせられたんだろう。まあ、エゴな話だが……」

「それは！」

セシリアが千冬のもとにすがった。

「それは、ひよつとしてとある経営コンサルタントの息子さんとおっしゃられてはいませんか？ イギリスで数年前にあつた列車事故の犠牲となつた、ある会社から大学者（サヴァント）と呼ばれていた家族の子ではありませんでしたか!？」

「いや、知らんな。それは、お前の知り合いか？」

セシリアは頷きで答えた。

「……調べてみよう。だが、期待はするなよ」

「わかっています」

そう答えるが、セシリアには、きつと目の前の少年は『彼』に違いないと思っていた。そうでなければ、

（この胸にこみ上げてくるものも、鼓動の高鳴りも、懐かしさも、全て、……すべ、て）

何なのだろう。

もし、可哀想な実験体だったトミーが『彼』でなければ、この気持ちには納得がいかないものになるのだろうか？ それとも、自分はトミーを看病したから胸が高鳴っているだけなのだろうか。

それに、本当にトミーが『彼』だったとしても、

（わたくしのことなど、何一つ覚えていないというのに……）

夢の中から掴み取りかけた『彼』の幻が、再び霞と消えていくように感じた。

IX 実験用鼠の命は誰がために

ドイツ国内軍施設。IS 配備特殊部隊シュヴァルツェ・ハーゼ、通称『黒ウサギ隊』が駐屯している官舎に一本の電話が鳴った。ドイツプレイの色は赤、部隊では秘匿回線を意味している。受付の隊員は少し眉をひそめ、低い声で受けた。

「はい、こちらシュヴァルツェ・ハーゼ」

『久しいな、クラリツサ・ハルフォーフ』

「！ お、織斑教官！」

副隊長のクラリツサが放った言葉に、ガタ！ と周囲の隊員が色めき立った。隣の隊員がすぐさまハンズフリーボタンを押し、皆に会話が聞こえるようにする。

『元、教官だ。今は教師なのだからな』

「ハッ！ 失礼いたしました。しかし我ら黒ウサギ隊一同は、貴方にご指導頂いたことを誇りに思っております！」

『相変わらず、律儀なことだ。ラウラ・ボーデヴィツヒはいるか？』

「ハッ、お代わり致します」

言うなり、クラリツサから受話器を渡される前に、銀髪と眼帯が特徴的な少女はひったくるように電話口へ近づいた。

「お、織斑教官っ！ ご無沙汰しております！ ラウラ・ボーデヴィツヒです！」

『ああ、久しいな、ボーデヴィツヒ。お前たちの中で私は相変わらず教官なのだ。まあ良い。お前が近々IS 学園へ転入することになったことは聞いているな？』

「ハッ！ 教官と再会できる日を一日千秋と待ちわびております！」

『学校では先生だ。呼び方に気をつけるよ』

「了解です！」

いいなく、と隊員の声が漏れるが、クラリツサはすぐに、シツ！ と唇の前に人差し指を立てて静粛にさせた。

『うむ。さて、せつかくだがお前に聞きたいことがある』

「なんなりとおっしゃってください！」

『ああ、——VTシステムについてだ』

！ という声にならない、息を呑む動きが周囲に巻き起こった。

「VT、システムについて、でありますか」

『……なにか知っているな？ 話してくれ』

「はい、存じております。なにせ、私の義姉弟が運用テストを行ったのですから」

『きょうだい？』

「トミヤのことです」

ラウラははにかむように口角を僅かに上げた。

「私もトミヤも、人為的に作られた存在です。それに、日本では同じ釜の飯を食べた仲間を釜姉弟と呼ぶという、素晴らしい風習があると伺いました。ですので、私とトミヤは釜姉弟の契を交わしたのです」

『……その話をたれ込んだのはハルフォーフか？』

「そうですが。な、何か間違っておりますか？」

「すぐるようなラウラの言い方に、

『ん、あ、いや、まあ、いいのではないか。プライベートな事だしな』

「そ、そうですか。良かった。私も、教官のように弟を持てば強くなれるかと思ひまして」

『……そういえば言ったな、そんなこと』

「はい。教官に強さの秘訣を伺った際に、弟がいることだとおっしゃっていました」

『だからとは言え、義姉弟とはな。相変わらず一（にのまえ）に入れ込んでいるな。確か、私がお前たちの教官になる前から、IS学園に入るまで一緒にいたのだったか』

「そうです。私が出来損ないと呼ばれていた頃も、変わらず側に居てくれました」

『なるほど。その義弟に、VTシステムのテストを、掟破りをさせたのか。大した義姉だな』

う、とラウラは痛みに堪えるような声で呻いた。

「……上からの命令でした。トミヤの乗る機体は、正式にはISとして扱われていないという理由で、IS条約には適用されない、と」

『なるほど、理屈だな』

「はい、言い訳です。……他にも、トミヤには幾つも負担の大きい試験をさせてしまいました。あいつの目が悪いのも、ヴォーダン・オージエ、いわゆるＩＳ適合性向上手術の弊害です。その失敗を踏まえることで、以降問題が発生することはなくなりましたが」

『ドイツ軍は、一三三八を実験用鼠と扱った訳か』

「はい……。織斑教官、お願いします！　どうか、私をトミヤと同じクラスへ入れて下さい！　今度こそ、私に義弟を守らせて下さいっ！」
『泣き言を言うな。勘違いをするな。姉が弟を守るといふのは、その程度のものではない！』

千冬のピシヤリとした物言いに、ラウラだけでなく、聞いていた黒ウサギ隊の全員が首を竦めた。

『お前がＩＳ学園に転入してくるまでまだ時間がある。それまで義弟とは、家族とはどういうものか、よく考えておくのだな』
「はい……」

『よろしい。では、他の黒ウサギたちへ、人の話に聞き耳を立てる暇があれば自分の仕事をさっさとやれ、と伝えておけ。以上だ』

そう通話が途切れると同時に、ひええ、と隊員達の声があがった。ハンズフリーにしていたの気付いていたのかな、という、怪訝な会話がなされる中、ラウラは呆然と受話器を手にしたままだった。

「家族、か……」

そう口にする言葉に、ラウラは胸がほのかに暖かくなるのを感じた。その温もりは、これまでトミヤにしでかしてきたことを思い出して、急に締め付けられるような痛みが変わった。

◇

ＩＳ学園生徒会室。普段は生徒会長が座る席に千冬は腰掛け、立派な机に設置された電話機の受話器を置いた。

「さて、お前たち、今話をどう思う？」

机の向こう側に立つ生徒会長の更識楯無と、生徒会会計の布仏虚に話しかける。

楯無は神妙な面持ちで、そうですね、と前置きをして、

「釜姉弟という表現はマズイと思います」

「そこを拾うな馬鹿者。向こうの履き違えだ」

「では、織斑先生はやはりブラコン……」

「忘れる更織。それ以上言うとか口を縫い合わすぞ」

「あ、ラウラちゃんのプロフィール写真を見ましたが、彼女の銀髪とトミーくんの髪の色、結構似ていますので義姉弟と言われても馴染むかもしれませんね」

「ボーデヴィツヒの方が透き通った色だ。ああ、もういい。くだらん話はここまでにするぞ」

千冬は椅子の上で足を組み、背もたれにもたれかかって少し見下ろす姿勢で生徒会二人を見た。

「どうやら、一（にのまえ）のVTシステムはドイツ軍の関与があったらしいな。これでLSというイレギュラーに対するウィークポイントを掴めたわけだ。暗部の面目躍如と言ったところか。良かったな、更織？」

「織斑先生、今回の件については全て私、布仏虚が勝手にしでかしたことです。生徒会長には何の落ち度もありません」

沈黙が続いていた虚が口火を切り、楯無をかばうように前に立つ。が、その肩を楯無が掴んで抑えた。

「いいのよ、虚。私の監督不行届に変わりはないわ」

「そんなことはありません！ 私がLSを快く思わない者達に訓練について誑し込んだ結果です。お嬢様の責任ではありません！」

「あなたの気持ちはよく伝わっているわ。それで十分よ」

「気持ちではなく、責任についてです！」

「それも含めて、よ」

楯無には分かっていた。

おそらく、暗部である自分の家、更識家の中でLSに対してよからぬ意見があがったのだろう。それに対して自分へ直接話を通る前に、忖度した虚が先に動いたのだ。仕官である布仏が、主人の更識の手を汚さないように。

（いつものことだけど、今回だけはちよっと手際が悪すぎるわね）

しかし、まさかL S否定派を扇動し、十三八に対して凶行に及ばせたのはいただけない。ましてや先日、楯無は十三八の身を案じて目の届く場所へ置く意味で生徒会へ誘っているのだ。いくら虚が楯無のためを思っているとはいえ、楯無以外の生徒についてこの扱いでは生徒会長として見過ごせない。

「茶番は済んだか？」

そういったやり取りを全く意に介さず、千冬は冷たい目で楯無達を見た。

「織斑先生、十三八くんの件について、生徒会長である自分が問題の責任を負います。何なりと申して下さい」

「いいだろう。では、近く転入してくるドイツのI S代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒを一（にのまえ）と同じクラスとすることを認めろ」

は？ と生徒会の二人は目を丸くし顔を合わせた。

「それは一向に構いませんが、そのようなものでよろしいのですか？」
「ああ。ボーデヴィツヒは一（にのまえ）と繋がりがあり、保護者を自称している。近くに置けば今回のような問題は防げるだろう。とはいえ、ボーデヴィツヒはドイツの代表候補生で専用機持ちだ。一組に入れば人選的に偏りが出来てしまう。その弊害を許容してほしい」

「確かに、代表候補生の偏りはクラス対抗イベントに差し支えが生じます。なる程、分かりました。今回の責任として、生徒会としても一組を特別クラスとして捉えるように致しましょう」

「話が早くて助かる。では、そのようにしてくれ」

そう言うと、千冬は席を立てて生徒会室から出ていった。

それを見送った後、虚は、

「オルコット嬢は彼を守りきれなかったようですね」

ぬけぬけとそう言った。

「わざわざ付き添いと称して彼と行動を共にしていましたが、イザというときその手が届きませんでしたか」

「虚、あなた私を怒らせたいの？ あなたが変なことをしなければ起きなかつた話よ」

「怒って下さい、お嬢様。私はオルコット嬢が彼を守ると踏んでいました。イギリス代表候補生である彼女がそうすれば、暗部としてもイギリスと事を構えないためにしばらく静観するだろう、と」
パシン、と楯無の手が虚の頬を叩いた。

「お望み通り怒ってあげたわ。人を試すような真似はよしなさい。今のセシリアさんの気持ちを察することができないの？」

「ありがとうございます。ですが、私としては、影で溜まっていた膿達の方が気にかかりました。彼女たちが暴発する前にガス抜きをしようとしたのですが、思いの外凝縮されていたようです」

「まったく。そう先走るのはあなたの悪い癖よ。何か気がついたら、まずは私に相談なさい。もっといい解決策を出してあげるから」

「申し訳ありません、お嬢様。自分の不出来を恥じるばかりです」

虚はそう言うのと深々と頭を下げた。

それが形式的なものであることは、長い付き合いから楯無には分かった。

(ひよつとすると、虚自身も、LSを容認していないのかしら?)

楯無は懐から扇子を取り出し、口元に当てて思案にふけた。

以前、トミーを生徒会室に呼び出したとき、虚が席を外していたのは別件があるからと聞いていた。だが、彼女の妹の本音にはトミー一人で召し出すよう言いつけていたと聞く。

(セツシーがどうしてもって聞かなくて)

本音は申し訳なさそうに詫言っていた。しかしなぜ、一人で、だったのだろう。セシリアが付き添っていないければ、虚も生徒会室に控えていたかもしれない。彼に直接問いただすことがあったのだろうか。

楯無は無地の扇を閉じ、虚に目を向けた。

「虚、教えてちょうだい。あなたはトミーくんの何を疑っているの?」
「お答えします、お嬢様。私は、一三三八が亡国機業(ファントム・タスク)の差し金であり、周囲に危害を及ぼすのではないかと踏んでいるのです」

虚の口から飛び出してきた単語に、楯無は目をしばたかせた。

「まさか、ね。その考えに至った理由はなに?」

「彼のスポンサーです。企業連の中に亡国機業（ファントム・タスク）との繋がりが噂される名前もありました。事実とすれば、彼をネズミとしてこの学園に潜らせたと考えることもできます。それに」

「それに？」

虚は眼鏡をかけなおし、周囲に誰もいないことを確かめてから告げた。

「VTシステムの研究を続けていたとされる施設が、何者かに襲撃されて破壊されたと聞きました」

「へえ……。その何者かが、今後トミーくんのもとに現れるかもしれない、と？」

「恐らくは。彼が亡国機業（ファントム・タスク）の差し金であれ、VTシステム運用者であれ、この学園に害をなす恐れがあることに変わりはありません。ですので、私としては早々に退学させるべきかと」

「……」

トミーくんは不憫な子だな、と楯無は思った。

実験用に扱われて、スパイに疑われて、ISもどき運用者だと蔑まれて。

そういう星のもとに生まれたのだろうか。あんなに明るそうで、友達思いの良い子なのに。

しかし、そういうところが、

（なくんか、お姉さん、守ってあげなくなっちゃうなあ）

笑みを浮かべて自分の気持ちに従った。

「あなたの話はよくわかったわ。特に、亡国機業（ファントム・タスク）への対策は望むところ。仮にトミーくんがネズミだったとしても、逆にこちら側へ着かせることが出来たら、面白いと思わない？」

「それは危険です、お嬢様」

「いつものことじゃない。それに、織斑先生も彼のガードを固めようとしてくれているし、その織斑先生自身もこちら側にいる。危機感を持つのは大事だけど、悲観的になる必要はないと思うわ」

楯無は扇を広げた。虎視眈々、と、可愛い虎の顔と一緒に書かれていた。

「まずは餌付けといきましょう。この学園での生活を堪能させて、よく馴染ませてあげるの。彼の友達がドライだったら、今度は無理にでも生徒会に入れて散々接待してみようかしら。まあ、あの子たちが悪い子でないのはお姉さんにもわかるから、心配はしていないけどね」

「何か起きたら、いかがしますか？」

「それこそ待つてましたって所よ。生徒の暴発だったら風紀の乱れの払拭。亡国機業（フアントム・タスク）の関与だったら彼を泳がせて尻尾を掴む。VTシステム関連だったらその正体を解明する。いざとなったら織斑先生に出張してもらおう。簡単な話よ」

楯無はクスクスと扇の奥で笑った。

「だいたい、こんな可愛らしいネズミさん、放って置くわけないじゃない。私がチエシヤ猫って呼ばれていること、あなたも知っているでしょう？」



トミーは目を覚ました。眼が悪くぼんやりとだが見覚えのある天井で、背中の感触はいつもの硬いベッドの上で寝ていると実感した。

ただ、かけられているのが普段使わないブランケットで、その裾を掴んで頭を載せているのは、

「……セシリア？」

一際目を引くブロンドの髪は視界が悪くても目に止まった。半身を起こしてあたりを確かめる。自分の部屋だ。なのに、自分のベッドの隣に椅子を置いて、セシリアが寝息を立てている。

「ずっとアンタについていたのよ」

声の方、流しのある付近を見ると、ツイントールか動いていた。

「その声、鳳さん？」

「鈴でいいわよ。はい、お水」

コップに入ったミネラルウォーターを渡してきた。距離感を間違えて落ときないよう、両手でしっかりと受け取った。

「薬もあったほうがいいのかしら？」

「……全部見ちゃったの？」

「見たわよ。色々あって、アンタをここに運んだ時に千冬先生に教え

てもらったわ。アンタの名前の由来もね」

「そっか……」

トミーはコップの水を一口含んだ。

「柵の一番右下にある錠剤を貰える？ ボトルのやつ」

「コレね。因みにどういう薬なの？」

「簡単に言うと、覚せい剤」

「ちよつと!？」

「冗談だよ」

クツクツ、と笑うトミーに、鈴は錠剤をぶん投げようとして、フォームの途中からゆっくりになった。

「それ、笑えないから止めなさい。縁起でもない」

「ゴメン。それで、僕がここにいるってことは、VTシステムでも暴走させた？」

「なによ、わかってたの？」

「頭が、すごく、痛いんだ。前も似たような事があったから覚えてるよ」

ザラザラと錠剤を出すと、一気に口に含んで水で流し込んだ。一見、鈴には危険な量ではないかと危ぶんだ。

「そう……。あ、一夏は箒と一緒に事情聴取を受けているわ。一応、訓練中の事故ってことで、済ませることになったみたい」

「うん、わかった。二人にありがとうって、伝えておいて。鈴も、ありがとう。助けてくれて」

「わ、私は、別に。問題の原因を招き入れた事もあっただけだし」

「うん。わかっているよ。セシリアにも、起きたらちゃんと一言わなくちゃ」

言うのと、トミーは再びベッドに横になった。

「ゴメン…、もう少し…、眠るよ。薬が…、痛みを消してくれるから」
「ちゃんと休みなさい。今度は模擬戦以外の訓練も付き合っつてよね」

「うん…。おやすみ、鈴。それと」

ベッドに半身を預けて眠っているセシリアの手を取って言った。

「おやすみ、セシリア……」

トミーはすぐに寝息を立てた。

その安らかさに、しかし鈴は顔色が優れない。

(まる三日寝込んでいたなんて、言えないわよね)

セシリアは、授業が終わるとすぐに看病に来ていた。鈴がどうしてそこまでするのかと尋ねると、

(大切な友達だから、つて、ちよつとそれだけじゃない気もするけどな)

自分も一夏がトミーのようになつたらセシリアのようにするだろう。つまり、そういうことではないかと鈴は思った。

(早く元気になってよね。みんな心配してるんだから)

トミーとセシリアを残し、静かに部屋を後にした。ここの薬品の匂いは、何度来ても慣れなかった。

X 瞳の奥にあるものは

「あら、おはようござ…、ヒツ……………」

「あつ、おはようトミーくん！ やつと復帰出来、たん…だ…」

「おおく、トミーくんおっは〜！ ……なんかグレた？」

訓練事故から復帰したトミーは、すれ違う学生達から奇異の目で見られていた。

「おはよう、トミー！ もう体の調子は大丈夫…、つて怖!? 目付き悪いな？」

「ああ、おはよう一夏。なんだかすれ違う人達から顔を見るなり引かれちゃうんだけど、どうしたんだろう？」

「そりゃあ、その目付きで睨みつけられたらおっかないと思われざるで」「別に睨んでなんかいないよ。眼鏡壊れちゃって、誰なのかよく見えないんだもん……………」

そう、普段かけている眼鏡を壊してしまったせいで藪睨みになっているのだ。

今更であるが、トミーは学園では眼鏡キャラとして位置づけされている。分厚く度の強い眼鏡は光の加減がなければその奥を映さず、そのせいでなんとなく不審がられたり、地味な印象を持たれていた。

その眼鏡がないということは、トミーの空色の瞳が晒されることであり、そして、

(目つきが超怖い…………)

少しでもよく物を見るための藪睨みが、何だかガンを飛ばしているように見えて周囲から引かれることになってしまった。

「予備の眼鏡は持っていないかったのか？ そのままだと授業受けるの大変だろう」

「あるんだけど、僕のは少しデリケートな品物でね。ちゃんとした場所ので保管してないとダメなんだ。いま送ってくれって頼んでいるんだけど、少し時間が掛かるって言われて」

「ちなみに、どれくらい掛かるんだ？」

「早くて五日だってさ。特殊な調整する手間があるから、しょうがな

「いんだって」

「五日かあ。それじゃあ、明後日のクラス代表戦、ちゃんと見てもらえそうにないんだな」

「そうなんだよね。一夏と鈴の試合、楽しみにしてたのに」

「しようがないさ。それで、授業の方はどうするんだ？」

「うーん。一夏、悪いんだけど、眼鏡のないあいだ授業を教えて貰えな
いかな？」

「いいぜ。俺がお前に教えるなんて、なんか普段と立場が逆で新鮮だ
な」

「ありがとう。頼りになる友人がいてくれて嬉しいよ」

「お安い御用だが、……その流し目はやめてくれ。なんと言うか、色っ
ぽい」

「……やっぱり、眼鏡がないと不便だなあ」

そうため息を着いて廊下を歩いていると、後から呼び止める声がか
た。

「トミーさんっ！」

「あ、セシリア」

見返る視線は大雑把だが、声をかけ小走りに近づいて来た相手は言
い当てた。

「おはようございます。もうお体は大丈夫なんですか？ 授業にはつ
いて行けそうですか？」

「おはようセシリア。おかげさまで、このとおり復調したよ。授業も、
セシリアから休んでいたあいだのノートを貸して貰えたり、付いてい
けそうだ。ありがとう」

「本当に具合は悪くないのですか？ 頭の痛みや、吐き気などはござ
いませんか？」

「もうだいぶ良くなったから大丈夫だって。そんなに心配しないで」
「心配もします！ 貴方はいつもご無理をなさっているのですから、
これくらいのごことはさせて下さい」

トミーの部屋を訪れ、彼の事情を知ってからというものの、セシリア
からの配慮は重たいくらいに親身になった。

きっと先日の訓練試合に責任を負っているのと、薬を服用していることなどがばれたせいだろうとトミーは思った。

「や、本当に大丈夫だから。それにほら、今日はセシリアが日直だつて、昨日ノートを見せてくれた時に言ってたじゃない。早く準備しておかないと、また織斑先生にどやされちゃうよ」

「んもう、このような時に日直なんて、ついてませんわ。トミーさん、くれぐれも無理はしないで。何かあったらすぐに私に教えてくださいね」

言うのと、セシリアは風のように去っていった。

心配性だなあ、とトミーは苦笑する。

そんな二人のやり取りに、一夏はトミーとセシリアのある変化に気がついた。

「セシリアのやつ、眼鏡をしていないお前に違和感を持たないんだな」
「ずっと看病してくれてたから、見慣れたんじゃないかな。彼女には感謝してもしきれないよ」

「お前はセシリアの顔がよく見えなくても、声で当てられるんだな」

「そりやあ声も話し方も特徴的だからね」

「目つきも、鋭い感じがしなかったぞ」

「そうなの？ 意識していなかったけど、普段よく一緒にいるからじゃないかなあ」

「俺には目つき鋭いんだが」

「え」

トミーは目の周りをペタペタとなで、こめかみを少しもみほぐした。

「……………」

「うん、まったく変わらん」

「ええ、僕、別に一夏のこと嫌いじゃないよ？」

「いや、それはわかってるんだが、なんだろう、お前ひよつとして……」

一夏は少し間をおいて、

「…いや、いい。やっぱり止めた」

「え、なに、すごく気になるんだけど」

「こういうのは、自分で気付くべきだと思うんだ。さあ、俺たちも早いところ教室へ行こうぜ。軽く予習をしておこう」

「あ、うん……」

先を行く一夏に、トミーは首を傾げた。

(いつも唐変木な一夏が気付いて、僕は気付けないなんて、本当に普段と立場が逆だなあ)

きつと眼鏡がないせいだ、と自分に言い聞かせ、視覚不良に映る一夏の背中に付いていった。

◆ 結局、トミーはその日衆人環視の中で過ごすこととなった。

本人は気付いていないが、授業中となりの布仏本音と席をくっつけ顔を近付けて懸命に内容をまとめたり、休憩時間は目を閉じて頭の中で授業を復習したり、不意に首をもたげ、窓の外を眺める姿は、(な、なんだか今日のトミーは感じが違うよ……)

本音がそう感想を持つように、クラスメイトから興味の視線を向けられていた。

人の見た目の第一印象を決める上で重要な顔のパーツは、実に九割が目であるという。特にぱっちりとした大きな瞳や整ったまつ毛は、華やかさや愛らしさを持たれるらしい。

それに適ったトミーの瞳は、眉間にシワを寄せた目つきはともかく、ふと見せる艶やかな目元も相まって好奇の視線を集めていた。

「や、やあ、トミーくん。今朝ぶりだね」

「ん……、その声と、ショートヘアは、お清さん？」

「せ、正解！ でもその険しい目はやめてほしいな……」

「ああ、ゴメン」

トミーの席を訪ねてきた相川清香に向ける視線はやはりキツイ。名前を間違えないために頑張つて見ているせいだった。

隣の席の本音は間延びした口調で、

「あく、お清ちゃんを睨みつけるなんて、トミーくんたら悪いんだ〜」

「別に睨んでないよ。こうしないとよく見えないだけで」

「言い訳は聞きませ〜ん。ちゃあ〜んとまあ〜つすぐ見つけてあげて

くださ〜い」

「ええっ!? ちよ、本音!」

「それだとぼんやりとしか見えないんだけど」

「輪郭と声で相手を判断する訓練だよ。しばらく眼鏡届かないんでしよ〜?」

「あれ、その話、本ちゃんにしたっけ?」

「細かいことはい〜のだよ〜」

さあさあ、と手で促す本音に、トミーは気が進まないながらも従った。確かに目はしばらくこの調子になってしまおうし、睨みつけずに相手を把握できるならそれに越したことはない。

トミーは眉間を軽く揉みほぐすと、

「じゃあ、見るよ?」

確認を一言入れて、清香の顔を見つめた。

その瞳に、清香は吸い込まれるような感覚を抱いた。

ぱっちりとした大きな瞳は快晴の青空を映した湖面のように澄み渡っていて、しかしその奥に沈む見通せない湖底のような深淵は、見るものをいざなっているようだった。

清香は彼の上澄みの底に深い暗闇が潜んでいるように見えた。背中がゾワゾワする感覚と、瞳の奥に飛び込んでいきたいような衝動を覚えて、

「……なんだか、お清さんの顔、だんだん近づいて来てない?」

「わあ! ……あ、あの、違うんだよ。明日の朝、また一緒にジョギングしたいなって、思つて、声をかけに来ただけなのに。な、なにしてくださるうね、私。それじゃっ!」

逃げるようにその場を去っていく清香の背中は、運動好きならではの俊敏で一瞬で教室の外に消えた。

呆気にとられたトミーは、

「お清さん、教科書持っていなかったけど、次の授業は研究室なのわかってるのかな?」

「ん〜、すっかり忘れて遅れてくるに一票〜」

「それ清くない一票だよ。すぐに呼び戻さなきゃ」

「それじゃ〜私がお清ちゃんの教科書用意しとくから、トミーは探しに行つて来て〜」

「わかった。もし遅れたら先生に……なんて言えばいいんだろう？
とりあえず、誤魔化しといて」

「らじやく。二人で駆け落ちしたつて言つとくね〜」

「言わないでね!？」

ツツコミを残し、トミーは清香の名前を呼びながら後を追つていった。

◇

清香は心臓の鼓動が高鳴っていることを自覚した。いまこうして廊下を走っているからではない、別の要因であると理解していた。

脳裏に浮かぶのはジョギング仲間の、トミーの瞳だ。

（ヤバイヤバイ！ あんな目で見つめられちゃったら、私じゃなくたつて動揺しちゃうよ！）

頭を振つて脳内映像を掻き消すが、なかなかうまくいかなかった。深く書いた鉛筆の絵が消しゴムで消しても残つてしまうように、どうしてもさつきのトミーが離れない。

あんなに綺麗で、透明で、澄んだ瞳なのに、

（なんで、こんなに怖いんだろう……！）

彼の中にある、見てはいけない深淵を覗き込んでしまったようで、自分もその深淵に見られているような恐怖を覚えていた。

その恐れを自覚すると、冷たい汗が流れてきた。幽霊番組もお化け屋敷も大丈夫なのに、リアルな友達の陰影はそれらと違った怖さを感じさせた。

「廊下を走るな！ バカ者がっ！」

目の前で怖い顔をしている担任の織斑先生の声でようやく我に返り、足を止める。どんなに走っても元気な足が、今はおかしいように笑っていた。

「お、織斑せんせえ……」

その清香の変わりように、織斑先生は振り上げていた出席簿を止めた。

「どうした、相川？ 元気が有り余っているようには見えんが」

「あの、その、と、トミーくんって、何か事情があったりするんですか？」

「なんの話だ？」

「実は、その、目が……」

「お清さくん」

清香を探しているトミーの声に、ヒツ、と身をすくめてとっさに織斑先生の背中に隠れた。

なんなんだ、と思いつつも、先生は風紀を守る職務を遂行する。

「廊下を走るなっ！ 一（にのまえ）！」

「わっ、織斑先生、すみません。実はお清さん……清香を探していました。次の授業、移動教室なのに準備もせずに飛び出しちゃって」

「あ、そ、そうだった」

「お清さん！ ……なんで織斑先生の後ろにいるの？」

「私も事情がさっぱり分からん。一（にのまえ）、お前相川に何をしたんだ？ あと目つき悪すぎだ」

「ええと、この目のせいみたいなんです。本ちゃん……本音に言われて、目つき悪いからちゃんと言っ直ぐ相手を見るようにしなさいってやってみたら、急に逃げ出しちゃって」

「なんだそれは。お前の目は邪眼の能力でも持っているのか」

「あつたら僕もビックリです。こんな感じで見たんですけど、別に變じやないですよ？」

「どれ」

トミーは先程と同じように織斑先生を見た。その目を覗かれるなり、目つきが鋭くなって、ふん、と鼻を鳴らされた。

「……早いところ眼鏡を調達しろ。そうでなければサングラスをかけろ。お前の目は危険だ」

「ええ!？」

「そうですよね!」

「ああ！ お清さんまで!？」

トミーはショックにおののき、顔を手で覆い隠した。

「僕の目、そんなに酷いんですか……?」

「人の目は何を見たかで変わるといふ。お前は一見綺麗な目をしてるが、その奥は人に見せるな。それに、自分でも見ないほうがいい」「見れませんか。鏡を見るのもぼやけちゃうんですから」

「ならいい。ホラ、相川も。コイツは普通にしていれば問題はない。そんなに怖がることはないだろう」

「そりゃあ、普段はイヤツですけど。何ていうか、その目を見ちゃうと、仮面をしているみたいに思っちゃって」

「わく……、友達からの信用が暴落してる……」

「わわ! そういうことじゃ、……あるような言い方だったけど!」

織斑先生は出席簿を手で叩いて話を区切らせた。

「くだらん痴話喧嘩はその辺にしておけ。授業がもうすぐ始まるぞ。さっさと移動しろ。迎えも来たぞ」

「迎え、ですか?」

「あ、セシリア」

教室の方から来る金髪ロングに、トミーはその名前を言い当てた。

「あら、皆さんおそろいでしたのね。日直としてお二人を確認に来ました。さあ、間もなく始業のベルも鳴りますし、研究室まで急ぎましょう」

「確認って、本ちゃんから聞いたの?」

「三人のやりとりが目の端に映っていましたので、それとなく、ですわ」

「それとなく、ねえ……」

「なんですの? 相川さん」

「いやー。トミーくん目がよく見えないのに、セシリアさんはちゃんと当てられるんだなあって」

「そ、そうなんですの?」

「一夏にも言われたけど、そうみたい。セシリアは特徴的だからじゃないかな。さ、早く行こう」

「え、ええ」

先生の手前、走らず小急ぎで向かおうとする三人に、

「オルコット、放課後私の部屋まで来い」

織斑千冬が静かにセシリアの耳元で囁いた。

「お前の気にしていた、一（にのまえ）の過去がわかった」

「！……わかりましたわ」

セシリアは動揺を押し殺し、普段と変わらぬ振る舞いで移動教室先の研究室へと向かった。周りには気づかれない程度に、胸を抑える姿勢を取っていた。



放課後、学生寮のある部屋の前。

ノックを三回、入れ、と許可を得て、セシリアは織斑千冬の寮長室へと入室した。一見、なかなかに散らばっている光景が目についた。一人暮らしのOLが仕事に没頭して他に手が回らないような部屋みたいだ、と思った。

「オルコット、いま失礼ことを考えていなかったか？」

「め、滅相もないですわー！」

「ふん、どうせだらしのないOLの部屋みたいだとも思ったのだろう。お前たちの考えることぐらいお見通しだ」

（自覚はしておられるのですね……）「いつも大変な激務をなさっているのですから、プライベートでは羽をのばすのも必要ですわ」

「たまに織斑が片付けてくれるから問題ない」

（年頃の弟を持つ姉として問題があるのでは……）「出来の良い弟がいって羨ましいですわね」

「……なんだか無性に腹が立ってきたな。一杯貰うぞ。どうせ今日は仕事上がりだ」

（まだ明るい時間なのですが……）「どうぞ、お気遣いなく」

セシリアの許可を聞くまでもなく、冷蔵庫から500ml缶ビールを取り出して蓋を開けた。喉を鳴らし一気に半分近く飲み干して、ぷはーっ、と実に美味しそうな声を零す担任の先生の姿は、

（お姉様と敬愛している生徒たちに見せられる姿ではありませんかね）

あくまで表情に出さず「先生、お疲れ様です」とねぎらうセシリア

は社交慣れスキルを遺憾なく発揮して千冬か落ち着くのを待った。

「……つたく、たまにはこうして飲みたくなることもある。一（にのまえ）のスポンサーにVTシステムの暴走の件を問い合わせたら何と言われたと思う？ そういえば、仕様書に記載しておりませんでしたね、だとさ！ なんだ、仕様書とは！」

（たまには？）「トミーさんは、本当に実験体としか見られていないのですね」

「立场上、一（にのまえ）のような奴には何度か会ったことがあるが、上官としてならともかく、教員として任されるのはたまったものではないな」

「……それで、トミーさんの経歴は、如何なものだったのですか？」

「ああ、そうだったな。先方ヘクレームついでに聞いたんだが、結論から言えば、一（にのまえ）の身体はお前の知人に間違いないそうだ」

「!!」

セシリアは息を呑んだ。口元を両手で抑え、懸命に動揺を抑える。が、瞳は揺れ、足の力が抜け、しゃがみこんで身を震わせた。

（生きていた……!）

そう胸の中で反芻すると、ああ、と全身を駆け巡るものがあつた。胸の中にあつた微かな希望が、眩しく輝き始めたように感じた。

脳裏に幼い日の『彼』とのシーンがフィルムのように流れる。色褪せてセピア色になっていたフォトが、鮮やかな色を取り戻していく。

「……感動の手前悪いが、同じなのはガワだけだそうだ」

「……どういう、ことなのですか？」

涙をいっぱいに溜めた目で千冬を見上げた。

「中身は別物、……いや、はつきりと言おう。やつの記憶は完全に塗りつぶされている。もはや一（にのまえ）の中にお前の知人は存在しない」

セシリアの瞳から一筋の雫が流れた。

「やつの目を見てハッキリとした。一見、綺麗な瞳だったよ。きつとお前の知る彼はそんな目をしていたのだろう。だが、その奥が底なしの闇だった。地獄を見てきた兵士のような深淵だ」

千冬は缶ビールを一口含み、喉を潤した。

「二十三八という人格で蓋をして、受けてきた実験の記憶は心の奥底に圧縮したのだろう。マインドコントロールでよくある話だ。もし、その記憶にふれようものなら……」

「どうなるというのですか!」

セシリアは千冬の肩に掴みかかった。

「わたくしの大切な『彼』に触れようとしたら、いったいどうなるというのですか! 訳の分からない者達のために『彼』は滅茶苦茶にされたのに! 救ってさし上げること、手を差し伸ばすこともできないのですかっ!?!」

「落ち着け、オルコット」

「落ち着けるはずがないでしょう!? こんな、残酷なこと、許せるはずがないでしょう!!」

千冬は涙で汚れるセシリアの顔に、自分の顔を近付けた。

「もし過去の記憶に触れれば、二十三八は壊れてしまっぞ」

冷たい千冬の瞳が、見開かれたセシリアの瞳を射抜いた。

「今のやつはイカれた圧縮ファイルを別のデータで蓋をしたパソコンのようなものだ。表面上は問題ないが、圧縮ファイルに何かをすれば、途端に立ち行かなくなるだろう」

セシリアは千冬の肩から両手を離れた。

「当初はサイレントキラー……ああ、特殊な暗殺者のことだ。それを考えたが、先方のスポークスマンに笑顔で否定されたよ。そんなことをして我らになんの得があるのですか、とな。この間のVTシステムがまさにそれではないかと指摘すると、あれは単なる事故であり遺憾に堪えません、ということだ」

千冬の手の缶が震えた。残ったビールを一気に飲み干すと、グシャリと潰してゴミ箱へ投げた。勢いが良すぎて壁にあたって入らなかった。

「オルコット、お前がその幼馴染をどう思っているのかは分からなくてもない。だがな」

「——嫌です」

「オルコット」

「嫌です。イヤだ……、いやなの。やだよ、やだ……」

身を震わせて自分の腕を抱くように縮こまった。

ヤダ、の言葉が次第に嗚咽に変わっていく。

「駄々をこねるな。いったい何が嫌なのだ」

「わかりません……。でも、ヤ、なんです……」

それつきり、肩を叩いても頭をなでても、顔を上げずに泣いていた。セシリア自身、何が嫌なのかわからないのだろう。

千冬はヤレヤレと携帯端末を取り出した。

◇

一三三八はなぜ織斑千冬に呼び出されたのかと動揺していた。

（お清さん、そんなに嫌だったのかな？ それとも、欠席が多すぎて補修かな？ まさか、スポンサーからクレームとか？）

色々と思いついたことはあるが、とりあえず確かめないことには始まらない。寮長室のドアにノックをして、確認を取って失礼しますと中に入ると、

「セシリア？ え、うずくまってどうしたの？ 織斑先生、何が……っ

て、酒臭！ まさか未成年に飲ませたんですか？」

「んなわけあるか馬鹿者」

「それじゃあ、何があつたんですか？ ねえ、セシリア、大丈夫？」

そう彼女の顔を覗き込もうとすると、

「あいた」

殴られた。俯いたまま、手だけでトミーの胸を。

「え、あの？ 本当に訳がわからないんだけど。つていたいいたい。止めてよセシリア！」

セシリアのパンチは止まらない。頭を彼の胸にくつつけて、何も言わずにポカポカ叩いてきた。

小さな幼子が言葉にできない不満を兄にぶつけているようだった。

それを眺める千冬は一言も口を挟まない。ただ座ったままセシリアを見守っていた。

「織斑先生、状況を説明下さい。なんでずっと黙ってるんですか。セ

シリアもどうしたの、いったい何が嫌なの？　　っていたいいたい。もう、何なんですか、この状況は〜！」

優しさを植え付けられた少年は理不尽に怯むことなく少女をあやした。

しかしそれがかえって逆効果なのか、彼の胸を叩く手は止まらなかった。

千冬の目には、

(一生懸命ドアを叩いているようだな……)

開かれない扉を何度も何度も叩いているように見えて、いたたまれなさにもう一本ビールを空けた。

すぐにトミーに怒られた。

XI 気持ちの名前

IS学園付属図書館、メディアルーム。

その密閉型の個室にて、正面ディスプレイに映る侍女、チエルシー・ブランケットは、主であるセシリアの話を静かに聞いていた。

「そうでしたか、『彼』の記憶は、もう……」

以前聞かされた『彼』と瓜二つのクラスメイトが、まさか本当に主人が懇意にしていた『彼』本人であると聞いたときは内心驚いたが、その続きを窺ってセシリアの落胆ぶりに納得が行った。

「……」

セシリアは打ち明けると黙って椅子の上で両膝を抱えていた。

暗闇の中、ディスプレイの光のみが照らす彼女の顔はおぼろげで、画面を移さない瞳は曇っているようにチエルシーには見えた。

(これは、相当まいってらっしやるわね)

習い事でへマをした時も、剣の訓練で負けたときも、セシリアは決まって膝を抱えて俯いていた。それでもなだめすかして顔を上げれば何とか気を取り戻せていたのだが、流石に今回の件はどう対処すればいいか、長年の付き合いである従者のチエルシーにも計りかねた。

それにしても、最後にセシリアのこんな姿を見たのは、確か、

「……ねえ、覚えてる？ 貴方のご両親が亡くなられた時のこと」

年上のお姉さんの口調で語りかける。

セシリアの視線は動かない。

「とつても忙しくて、悲しむ暇なんて無かったわよね。いろんな手続きがあったし、いろんな人が詰めかけてきたし。親類が親切を装って遺産を奪おうともしたわよね。遺言に従って遺産は全てあなたに遺産されたから」

セシリアの顔が少し沈んだ。

「あの時ね、私は、ちよつとくらい遺産を渡しても良かったんじゃないかと思ったの。だって、本当に目が回るくらい忙しかったんだもの。それに、貴方がちゃんと遺産を管理できるのか心配だったのもあるわ。たくさんの従業員を抱えたカンパニーを渡されたんだもの、きつ

と無理じゃないかって思ってた」

チエルシーは白状するように伏し目がちに語った。

「でも、貴方はご両親の遺産を守り抜いた。カンパニーの経営も、色んな方の力を借りて、色んな人と渡り合って、見事に苦難を乗り切った。小さな貴方のどこにそんな力があつたのか、私たち使用人はみんな驚いていたわ。そして、貴方が単なるお嬢ちゃんから、オルコツト家のお嬢様になったことを認めさせられた。みんな貴方のことを褒めたてていたわ。亡きご当主様もきつとお喜びになるでしょう、って」

チエルシーはうつむき加減のセシリアに、優しい顔で語りかけた。「けれど、貴方はそれで満足しなかった。いくら成功しても、おべっかを使われても、表面上しか喜ばなかった。どうしてなのか、私にはわかっていたわ。本当は誰に褒めて欲しかったのか、貴方のデスクの上にある写真を見て。セシリア、きつと貴方は……」

「——やめて」

セシリアは何かに気づいたかのように顔を上げて呼び止めた。しかしチエルシーは口を閉じなかった。

『彼』に、褒めてもらいたかったんだよね」

「チエルシー、やめて」

「セシリアはちゃんと頑張っているよ、って、セシリアは偉いんだね、って、言っただけだったんだよね」

「チエルシー——」

「だから、貴方はずっと『彼』の影を追っていた。ありのままの貴方を認めてくれた大切な人を。そうでしょう、セシリア？」

——そうだ。

ああ、そうだったのだ。

分かってしまった。

何が嫌なのか、なぜトミーに近づこうとするのか。

彼が生徒会へ呼び出された時に付き添ったのも、屋上で食べてくれた手作りランチも、暴走して倒れた彼を看病したことも、ぜんぶ、

（——『彼』に、褒めてもらいたかったんだ）

瓜二つの他人かもしれない。本人であつても自分のことを覚えて

いないかもしれない。なのに彼の、トミーの側を離れなかったのは、彼の中に『彼』の幻を見たからなのだ。

それが今、『彼』の記憶がなくなったと聞かされて、もう『彼』に褒めて貰えなくなってしまうたと知らされて。それがたまらなく、たまらなく嫌だったのだ。

何ということだろう。

それは、なんて、

「なんて……、身勝手に、厚かましいオンナなのでしょう……！」

結局、すべて自分のエゴだったじゃないか。

トミーのことなど何も考えていなかったじゃないか。

最低だ。

酷いオンナだ。

そうまでして『彼』に振り向いて欲しかったのか。

褒めてもらいたかったのか。

自分の承認欲求のためだけに……！

「そんなことないわ」

チエルシーが優しく言った。

「そんなことない。聞いて、セシリア。大丈夫、貴方は何も悪くないわ。むしろ当然のことよ。愛する人に、振り向いて欲しいと思うことは」

愛する人——。

「セシリア、貴方はいま、恋をしているの。『彼』と出会ってからずっと、初めての恋がいつまでも続いているの。胸が苦しいでしょう？ 切ないでしょう？ それが恋というもののなのよ」

セシリアの瞳が揺れた。頬が朱色に染め上がってきた。胸が高鳴り、キュツと締め付けられるような苦しさがあった。

「いつか新しい出会いがあつて、『彼』への想いが過去のものになると思っていた。懐かしい幼い頃の思い出に変わるだろうって。それがまさか、変わらずに温め続けていて、こうして『彼』と再開できるなんて、思ってもいかなかったわ」

「そ、それは……、でも……彼は、『彼』じゃ……」

「ううん。貴方も本当は分かっているはずよ。トミーさんには『彼』の欠片が残っていることを。なぜって？ そんなの当たり前じゃない。皮をかぶった偽物なんかだったら、聡明な貴方はこんなに悩まないはずだもの」

そうでしょう？ と微笑むチエルシーの言う通りだった。

十三八の中に『彼』の幻を見るということは、トミーのに近くにいればいるほど、『彼』とダブるようになっていくのだ。クラス代表決定戦の時に見た剣礼はまさにそれだった。

差異があつたら直ぐに気付く自身はあつた。それだけ今でも『彼』の思い出は残っている。なのに、これほど悩みを抱えているのは、悩んでしまうほどそっくりに見えてしまうからなのだ。

しかし、この恋という名の感情をどう扱えばいいのか、セシリアという少女は戸惑っていた。

「チエルシー……。わたくしは、この気持ちを、どうすればいいのでしょうか……。トミーさんは、『彼』では……。『彼』なの、に……」

「焦らないで。答えを急ぐ必要はないわ。そして悩む必要だってないの。貴方が後悔しない答えは、貴方の中にきつとある。苦しくて辛いかもしれない。愛おしくて食欲になるかもしれない。けれどもそれを大事にして。そうすれば、貴方はもつと綺麗になれる。きつとカレが、振り向いてくれるほど綺麗に」

「そう、なれるかしら？」

「なれますとも。だって、貴方は、私たち傲慢のお嬢様なのですもの」
ね？ というチエルシーの微笑みに、セシリアもようやく破顔した。

泣きはらして赤くなった目元に、これまでとは違った雫が流れた。セシリアは深く、息を吐いた。胸の中のつかえが取れたような爽やかな気分だった。

画面上のチエルシーも、ふう、と息をついた。そして、少し伏目がちに呟いた。

「でも、羨ましいな。セシリアの大切な人は生きていて分かって……」

「羨ましい、とは、チエルシーにも安否の分からない親しい方がおられるの？」

「ええ……。妹が、いたの。何年もずっと探し続けているのだけど……」

「そんな!? なぜ、もつと早くおつしやつてくれなかったのですか！」

「しかも何年もだなんて……！　すぐに我が家の関連企業や系列企業を使って搜索を……」

「お嬢様、公私混同はなりません」

「急に使用人口調に戻らないで！　身内のことなのよ？　心配になって当然ですわー！」

「だからこそ、です。それに、私もほうぼう手を尽くして探しています。お嬢様のお手を煩わせる必要はありません」

「煩わせるだなんて、他人行儀になさらないで。もし、お時間が必要なら工面しましてよ？」

「ありがとうございます。でも、ごめんなさい。この話を貴方に伝えなかったのは相応の理由があるの。侍女が秘密を抱えるなんて不相応なのはわかってる。けど、今はこれ以上は話せない。ワガママだけど、今はどうかこのままでもいいさせて欲しい。許してちょうだい」

「……わかりましたわ。何かありましたら、このセシリア・オルコットが力添えしましたよ。そうですね、貴方の妹さんのお名前だけでも、お聞かせ願えませんこと？」

「ええ、それくらいなら構いません。私の妹の名前は……」



「眼鏡の配達が遅れるって、どういうことなの？　エクシア」

携帯端末の通話越しに、トミーは自分が所属する企業のオペレーターの女性に文句を言った。その表情はジト目で不貞腐れている。

「今回の件を踏まえて、IS操縦者にメガネっ子は危険だということで、視力矯正はコンタクトに変えちゃうそうですよ」

エクシア、と呼ばれたオペレーターの声は若い。むしろ少女のそれだった。しかも役職にも関わらず話し方はアップテンポで、電話応対者特有の無機質な物言いではない。

「なんだよそれ。ドイツにいた頃はそんな話なんて無かったじゃん」
「ドイツでは事件はともかく、事故には遭わなかったですからね。最近トミヤさんの幸運体質落ちてきてるんじゃないですか?」

「良縁に恵まれているし頭在だよ。それで、コンタクトの配送予定日はいつ? 流石に不便なんだけど。この目周りに怖がられるしさあ……」

声のトーンが落ちていくのを、エクシアはまあまあとなだめた。

「コンタクトは明日には到着する予定ですよ。眼鏡は一応予備として配備されますが、一ヶ月ほどかかるとか」

「そんなに!?!」

「だってトミヤさん、そうでもしないとコンタクト使わないじゃないですか」

うぐ、とトミーの声が詰まった。

「だって、コンタクトを目に入れるのって、その、怖いんだもん……」
「あ、いまの『怖いんだもん』って言い方、可愛いかったんで音声もらいますね」

「好きにして。というか、エクシア最近馴れ馴れし過ぎじゃない? 最初はあるなに初々しかったのに」

「そりゃあ一年も担当していれば慣れちゃいますよ。それとも、初期の対応のほうが好みだったんですか?」

「そうじゃないよ。あのオドオドしていた頃に比べて、随分フランクになったなああって」

「自分の年齢も何もかもわからなかったんですもの、しょうがないですよ」

「まあ、ね。うん、いまのエクシアのほうがずっと良いと思うよ」

「えへ、ありがとーございまーす!」

通話の声は明るい。そんな今の姿からは想像もつかないが、最初は会話すらおぼつかなかった。

なぜかというと、エクシアには、記憶が無い。

右も左も、自分の年齢すら分からない少女が、拾われた企業のもとでトミーのオペレーター担当となったのが彼との付き合いのはじま

りだった。

唯一、エクシア、という名前だけは覚えていたが、他は何も思い出せず、そのせいで気持ちが悪にこもってしまっていたのだ。

「きつとはじめてがトミヤさんだったから、こんなふうになれたんだと思ってます。感謝しているんですよ?」

「そりやあどうも。実際、エクシアのオペレーションは上達して来ていると思うよ。もし今後僕から担当外されても十分やっていけるさ。自信を持って」

「むー……。わたしはまだ、不安です。担当変わらないよう、トミヤさんからお言付けもらえませんか?」

「お言付け?」

「僕にはエクシアが必要だ、僕から彼女を取らないでくれ! みたいな」

エヘヘ、という声色はいつもよりさらに高い。彼女が好きな日本の少女マンガを、セリフ付きですすめてくる時と一緒だと、トミーは思った。

「……まあ、面白みのない事務的な人に担当変わられてもつままないし、適当に要望出しという」

「えっ、マジですか!」

「自分で言つといてなにその反応」

「いえいえいえ! 言ってみるもんだなあつと」

やったあ! とガッツポーズを決めているような音が聞こえた。いまは仕事なんだよなあ。

「そういえば、話は変わるけど、エクシアの知人の搜索は進んでいるの? 記憶があったときの足取りとか」

「いいえ? まったく」

「ダメじゃん!! 家族が気になったりするでしょ普通。きつと心配しているかもよ?」

「逆かもしれないですよ。何かショックなことがあったから、こんな状態になったのかも」

「それは、そうかもしれないけどさ」

「いいんです。いまの会社のお仕事に不満はないですし、定時制で勉強もさせて貰えるし。それに……」

「それに？」

ん、とエクシアは一瞬言葉をつまらせて、意を決して話した。

「わたしにはトミヤさんが居ますから。このまま記憶が戻らず、知り合いも見つからなかったら、トミヤさんのもとに置いて下さい」

「え……」

呆然とするトミーに、エクシアは喉で笑った。

「クス、お返事はまた今度。期待してお待ちしてますね。それじゃ、オペレーターのエクシアより連絡でした」

そう言うのと、先方から通話の途切れる音がした。

トミーは通話が終わった携帯端末のディスプレイを見た。相手の名前と、エクシアと二人で撮ったツーショット写真が編集された通話画面が、通話終了を伝えている。

赤みがかったショートスタイルの髪と同じ色の瞳の少女が、トミーの腕にくっついて笑顔で写っていた。

「……こういう話って、誰に相談したらいいんだろう」

たぶん、おそらく、エクシアが自分に言ったことは大切な気持ちのこもった話かもしれないと思った。

しかしそういった体験に疎いトミーにはどう対処していいかわからなかった。こういう場合、誰かに相談したほうが無難だろう。

「一夏、は論外として、セシリア、もそういう話題を聞かないし、箒か鈴かなあ」

「なにがだ？」

「うわああ!!?」

急に横から声をかけてきた箒に、不意をつかれて飛び退いた。

「な、なんだよ箒!!? びつくりするだろ!」

「名前を呼ばれたものでな。一夏が参加する明日の代表戦について話したかったのだが、難しい顔をしていて声をかけづらかったのだ」

「つ、通話の内容も聞こえてた？」

「いや。だが、さっきまで楽しそうに話していたと見えるぞ。友人か

？」

「んん、僕はそう思ってた」

「相手は違うのか？」

「わかんない……。同じなのか、それ以上なのか」

「なるほど。相手は女か」

ぎよ、と驚愕を向けるトミーに、箒は鼻で笑った。

「なんでわかったの」

「さっきからのお前を見ていれば察しがつくさ」

「僕は未だかつてないほど箒を凄いと思ったよ」

「大げさな上に失礼なやつだ。話は後で聞いてやるから、まずは一夏のもとへ行こう。訓練のチェックをしてほしいそうだ」

「あれ、セシリアは？ 対戦相手の鈴の動きを録画していたはずでしよう？」

「分からね。授業が終わった途端どこかへ行ってしまったな」

「ふうん？」

あれだけ鈴の対策を練っていたのに珍しいな、とトミーは思った。

それとも、セシリアもまた、自分と同じように誰か異性と会話をしていたりするのだろうか。

そう思うと、なんとなく、胸がザワつく感じがした。

(なんだ、この感じ)

違和感を覚えて、自分の胸に手を当てる。別になんともない。

「どうした、トミー？ 早く一緒に来てくれ。訓練の時間が惜しい」

「ああ、悪い」

謝罪を一言、すぐに箒の後について駆け出した。

さっつきの変な感覚への疑問は、すぐに頭の隅に片付けられた。

XII 雨の中のストレンジャー

想い人と戦うというのは、鈴にとってうれしくもあり、また複雑な心境でもあった。もしふがいなければ自らの手で叩き直して、今後訓練を共にする口実にしてしまおうと思ったが、一夏は決して弱くはない。むしろ、ISに搭乗して一月あまりの初心者にしては驚異的な実力を備えていた。

（暴走したトミーと戦った時なんて、切込みもガードもしっかりしてたもんね）

あんな動きはとっさに出来るものではない。何度も訓練を重ねて体に覚えさせたからこそなせる技だ。剣道を習っていたとしても数年のブランクがあるのだから、IS学園に入ってから鍛え直しているのだろう。

そういえば、一夏はトミーや箒、セシリアと訓練を重ねていると聞いている。今度は自分も混ぜて一緒にやるのも面白いかもしれない。

（それにしても、あの時はアタシのために、飛んで来てくれたんだよね）

先輩になじられていた自分を見て、いても立ってもいられず飛び出したのだと後から聞いた。それはつまり、一夏も自分に対して少なからず想っているということだろう。もともと、自分が持っている想いとはまた別のものかもしれないが。

（わかってるわよ。一夏が唐変木なのは今に始まったことじゃない。でも、ちよつとはアタシを見てくれたっていいじゃない）

クラスは違うし、代表戦があるからと放課後もなかなか付き合えない。せいぜいランチを皆で一緒にするくらいだ。二人つきりになんてなれやしない。

だが、このクラス代表戦は、ある意味二人だけの世界になれる特別なものだ。せっかくの機会を逃すつもりはない。一夏の目に自分の勇姿を刻みつけて、『鈴、お前凄いなんだなあ！』と言わしめてやる！「そう思っていたんだけどなあ……」

窓の向こうの雨天を見上げて、鈴は深いため息をついていた。

クラス代表戦当日。晴れを伝えていた天気予報は派手に外れて未明からの雨となった。

小雨決行とはお触れが出ていたものの、こう朝から本降りでは進行に文字通り水を差されることになった。それに、女性が傘も刺さずに雨空の元に出るといっのはどうしても抵抗があつてしまう。

「あくあ。せつかく一夏と二人つきりになる戦いだつたのになあ」

「この雨模様では中止もやむを得まい。しかしまったく、あいつらはよく元気に訓練できるものだな」

テーブルをはさんで鈴の向かいに座る箒は、その屋内観覧席から見える雨のアーリーナ内で、訓練に励む一夏とトミーの姿に呆れ声を上げた。

化粧やセットに勤しむ女性では雨の中での訓練は敬遠される。男性だからこそ気兼ねなくできる雨天練習だった。

「これまで代表戦に向けて改修工事がありましたもの。アーリーナを使えるのは久しぶりですから、お外で動いてみたくなつたのではないかしら」

鈴と箒の間で窓向かいに座っているセシリアが楽しそうに言った。

鈴は足を組みながら、

「これまで外で訓練できなかつたからつてさあ、なにも雨の中でやることも無くない？ 風邪でもひいたらどうするのよ」

「それもそうだが、この雨で今日のスケジュールは自主トレだし、誰も練習に使わないアーリーナは貸し切り状態だ。伸び伸びと飛び回りたいと思うのも無理はないだろう」

「殿方は気まままで羨ましいですわね」

会話を交わす三人の視線の先で、一夏が瞬時加速（イグニッション・ブースト）を仕掛けトミーに切りかかった。しかし容易く剣銃『グロリー・シーカー』で受け流され、尻尾銃『ペンチ・ヒッター』がムチのようにしなり逆襲にかかる。それを読んでいたのか飛び込んだ勢いを殺さず一夏は飛び退いた。

一撃離脱戦法だ。接近戦しかできない一夏の【白式】ならではの戦

術だが、その動きは代表候補生の鈴とセシリア、そして全日本剣道優勝者の箒から見てもにもサマになっていた。

「まだまだね。って言うってやりたいんだけど、正直上達早くない？前に見たときより動いているんだけど、どういうこと？」

「私達の指導の賜物だな。特にトミーは教えるのが上手い」

「そうなの？」

「もちろんですわ」

なぜかセシリアが得意そうに言った。

「なんであんたが偉そうなのよ。それにトミーは、ついこの間まで休んでたじゃない？ その、アタシのせいでさ……」

「あれは鈴が気に病むものではないさ。一夏はトミーが床に伏している間も、前から課せられた訓練をひたすらこなしていたんだ。もつと俺に力があればトミーを止められたのに、と一層稽古に身が入っていた」

「ふーん。ちなみにどんな練習をしてるワケ？」

「回避と、機動と、攻撃。この三つのみですわ」

「はあ!? それであんだけやれるようになったってどういうの？」

「一夏の【白式】はピーキーな機体だからな。教科書通りに練習するより、メニニューを絞ってやる方が効果がある。と、トミーが言っていたぞ」

「細かく言いますと、わたくしの銃撃や箒さんの斬撃からの回避。瞬時加速（イグニッション・ブースト）や三次元躍動旋回（クロス・グリッド・ターン）の取り入れ、単一仕様能力（ワンオフ・アビリティ）である零落白夜の運用。これらを反復練習で身につけておりますのよ。もつとも、この間までは私もトミーさんに付きっきりで、顔を出せておりませんでした」

「ま、まあ、おかげで私は一夏と二人つきりで練習ができたわけだがな」

「うわっ、ズルい！ 今度からアタシも混ぜなさいよ！」

鈴が唇を尖らせて抗議した。

箒の反論を受けて立つ気でいたようだが、

「そうだな……。クラス代表戦もお流れになったことだし、鈴が一緒にいてくれた方が一夏の上達のためになるだろう」

「あら、随分と殊勝ですね?」

「専用機持ちではない私が相手をしたところで、たいした稽古にはならないからな」

その箒の言葉に自嘲が混ざっていたのを、鈴は逃さなかった。

「なによそれ。好きなヤツのために本気を出そうとか考えないわけ?」

「へ、変な言い方はやめろ! 私だって、一夏と一緒に強くなれるなら本望だ。だが、未熟者同士で競い合っても、先に行く熟練者に敵わないことぐらい知っている」

「一夏さんのために、あえて自分以外の手を借りると?」

「そうだ。私をもっと強ければ、一夏を導いてやれたのだが……」

箒は顔を赤くして俯いた。自分の不出来を恥じているようで、また一夏への想いに戸惑っているようだった。

「ふーん。ま、そういうことなら手を貸して上げても構わないわよ。レッスン相手が一人でも二人でも同じことだわ」

「私も、いいのか?」

「情けない幼馴染から一夏を奪い取ったって、嬉しくなんかないわよ」

ふん、とそっぽをむく鈴に、箒はぎこちない謝辞を述べた。

「鈴、かたじけないっ」

「そ、そんな頭を下げないでよ! 周りから変なふうに見られるじゃない」

「ウフフ、一夏さんとトミーさんの練習、見ているのはわたくしたちだけではないですよすわね」

屋内観客席は三人のいる席の他にも設けられている。そこには少なくない生徒たちが雨の中で戦う男子二人に熱い視線を送っていた。時折、黄色い声援も湧き上がっている。

鈴はそれを横目で見ながらセシリアにささやいた。

「セシリア、あんたも気をつけなさいよ。一夏ほどじゃないけど、トミーだってけっこう人気あるんだからね。……向こうの席の話、聞いて

てみなさい」

小声で付け加えられた話に、鈴の視線の先にいる生徒たちに耳を傾けた。

二人の女子生徒がアリーナで繰り広げられる練習を見ながら、何やら熱く語り合っている。

「えーっ！ あんた最初一夏くんの方がカッコイイって言ってたじゃん？」

「そうだったけどさあ。部活の後輩の話を聞いていたら、トミーくんもいいかなって思うようになっちゃって」

「後輩って、ハンドボール部の？」

「そう。その子ね、毎朝トミーくんと一緒にジョギングするくらい仲が良いんだって。それである日タオルを貸してあげたら、洗濯してドリンクと一緒に返してくれたんだってさ」

「ふうん」

「しかも、その子の好きなチョコレートミルクだったの。覚えていてくれたんだ、って聞いたなら、ちゃんと低脂肪のやつだから疲労回復にも最適だよ、って言われたんだって」

「へー、気が利くじゃん」

「でしょ？ ジョギングのときも、さり気なくに道路側を走ってくれたり、ペースを見てその子の体調を気遣ったりしてくれるらしいよ」

「あ、そりゃ良物件だね」

「そんなわけで、まあ今のうちに唾つけとこうかなって……」

話を聞き終わる前にセシリアの腰が浮かぶのを箒は慌てて静止した。

「お、落ち着け、セシリア。単なる世間話じゃないか」

「そうよ。別に殴り込みかけることないって」

「そんな野蛮なこといたしませんわ。……いけません、手袋を忘れて来てしまいました」

「決闘する気まんまんじゃない!？」

「練習に誘うだけですわ。——足腰が立たなくなるまで」

セシリアを椅子に座り直させ、鈴と箒はヤレヤレと一息をついた。「まーったく。セシリアも大概トミーには甘いわよね。やつぱりアイツのことが好きなんじゃないの?」

「そういえば以前、トミーはお前の知り合いではないかと話していたな。あいつは複雑な事情を抱えているようだが、その後なにか分かったのか?」

鈴と箒の問いかけに、セシリアは躊躇うことなく「ええ」と肯定を返した。

「そうですね……。では、お答えする前に、鈴さんと箒さんに聞きたいことがありますの。もし、一夏さんが記憶を無くし、お二人の事を忘れてしまったとしたら、それでも一夏さんのことをお思いになりますか?」

「わ、私は、別に一夏のことなど……」

「アタシは想うわ」

慌てふためく箒のセリフを、鈴は断言で遮った。

「記憶を無くしたってんなら、叩いてでも思い出させる。それでも思い出さないんなら、また一緒に思い出を作る。昔よりももっと楽しい記憶をあげて、二度とアタシの事を忘れないよう一夏の心に刻みつけてやるわ。どこかの幼馴染さんとは違ってね」

「むっ、一夏を見捨てるような事を言った覚えはないぞ。私だって、記憶を失った程度で離れるような付き合いはしていない。一夏が世話のかかるやつなのは、昔っからだしな」

ふん、と、鈴の氣勢を受け止めた。

そんな二人に、セシリアはクスクスと浮かぶ笑みを手で隠した。

「そうですね。そのとおりですわ。なのにわたくしは、そのことに気づくのがこんなに遅れてしまいましたの」

「ふーん。……ん? なに、アンタまさか自分の気持ちに気付いていなかったの?」

「恥ずかしながら、そうですね」

セシリアは頬を赤くして言った。

「トミーさんは、やはりわたくしの幼馴染でした。お転婆だった頃の

わたくしを包み込んで受け入れてくれた愛しい『彼』でした。もつとも、かつての記憶を無くし、もうわたくしのことなど覚えてはおりませんでしたが……」

「そう、か……。それでも、彼を？」

「ええ。もう、迷いません。『彼』が昔のことを思い出さなくとも、また一緒に思い出を作っていきます。鈴さんのおっしゃるとおり」

ふふん、と鈴は得意げな笑みを浮かべた。

「ま、この三人の中じゃあアタシが一番先を走ってるってことね。せいぜい周回遅れにならないよう付いてきなさい」

「なに、私はスタート地点が鈴よりも先にあるのだから、丁度いい手加減というやつだ」

「わたくしだって、『彼』を狙う有象無象なんかには容赦はしませんわ。

『彼の優しさも、強さも、暖かさも、わたくしだけのものなんですもの』

「……なんか、セシリアの重くない？」

「そうでしょうか？」

キョトン、と首を傾げるセシリアの姿はあどけなく可愛らしい。

それが幼い子供の残酷さでナチュラルに人を傷つけてしまいで怖くもあった。

「アンタさあ……」

鈴がその辺りを突付こうとする、その瞬間、窓の外の闘技場に巨大な光が突き刺さった。一拍遅れて、大きなガラスが割れたような破砕音が鳴り響く。

「なに!?!」

「落雷か!?! しかし雷鳴などはなにも……」

「ご覧になって! 全天周バリアが!」

空を見上げると、セシリアの言うとおりの半透明だったバリアが割られ、雨空にヒビが入ったような亀裂が走っていた。雨風は通しても、いかなる衝撃や斬撃にすら耐えうる特殊な防壁なのに。

「一夏たちは!?!」

闘技場を見ると、一夏もトミーも光が落ちた場所からは離れた位置にいた。二人共何が起きたのかと、煙を立てる落下地点に目を凝らし

ている。

「大丈夫だ。無事なようだが……」

「過信してはなりませんっ。すぐに安否の確認を」

「待って！ 煙の中から何が出てくる。あれは……」

鈴の言うとおおり、落下地点の煙の中から、何ものかが浮かび上がってきた。

人型だ。しかし、首がない。

手も異常に長く、つま先よりも下まで伸びている。

全身を、今の空模様と同じ深い灰色の装甲で覆われており、さらに二メートルを超える巨体だった。

「IS、なのか……？」

箒が窓際に近づき、窓に手を当てようとすると、急に機械的な音と共に上からシャッターが落ちてきた。目の前が遮られ、屋内が一瞬暗くなり、非常灯が薄明かりを作る。

「遮断シールド!? しまった、出入りができない!」

「一夏っ!」

「トミーさんっ!」

それぞれの想う名前を叫び、彼らを助けるためにすぐさま三人は次の行動を模索した。

◇

(学園アリーナに正体不明の侵入者だと……!?)

アリーナのピットに続く廊下を競歩で歩く織斑千冬は、このイレギュラーに半ば予期していた懸念が的中してしまったと悔やんでいた。

(希少な男性IS操縦者である一夏。特殊な事情を抱えた一(にのまえ)。何か起きるかとは思っていたが、このような強行手段で来るとは……!)

二人にアリーナ使用を許可したことを後悔した。全天周バリアがあれば外部からの攻撃は防げると思っていたが、それをぶち抜く輩が現れるとは誤算だった。

そして、それは強敵が来襲したことを示唆していた。

「状況を報告せよっ！」

ピットに到着し、すでにアリーナ内外の情報を集めていた山田真耶と整備科の生徒たちに確認を入れた。

「あつ、お、織斑先生！ あの、実はですね、その」

「山田先生、落ち着いて下さい。アリーナの織斑と一（にのまえ）は、どうなっていますか？」

「そう！ それがですね、撃破なんです！」

「撃破!? 一夏と十三八が、やられたんですか！」

驚愕に、千冬は素で二人の生徒を名前で読んでしまった。

「いえつ、違います！ 織斑くんと、一（にのまえ）くんが、正体不明の敵を撃破したんです！」

「……は？」

啞然とした素の織斑先生の姿に、居合わせた生徒たちは珍しいものを見たような顔になった。

「二人が、侵入者を、退治したのですか？ まだ入られてから十分と経っていないのには？」

「そうなんです！ 一（にのまえ）くんが牽制して、怯んだ敵を織斑くんが一撃で仕留めたんです！ いやあ、感激しました！」

さすが織斑先生の弟さんですね、と声をかけるのを聞き流し、千冬は備え付けられているモニターからアリーナの状況を確認した。

山田先生の言うとおり、謎の侵入者は左右に真つ二つに切り捨てられていた。首のない両肩の間から、股下までずんばらり、と。

（信じられん……）

何かの冗談かと思っているところに、一夏から通信がよこされた。山田先生がすぐに応じる。

「もしもし、織斑くん!? 無事ですか？」

「あ、山田先生。はい、俺もトミーも怪我一つありません。それにしても、コイツ、どうしましょうか？」

「えー、つとですな……」

山田先生は横目で織斑先生を見て指示を待った。織斑先生も判断しかねるのか、すぐに返答を寄越さない。

さらにそこに、一夏たちの同級生である箒、鈴、セシリアの三人がピットの中に勢い良く飛び込んできた。

「すみません！・一夏たち、無事ですか!？」

走っていたのか、みな息を切らしていた。それほど二人の安否を気にして急いで来たのだろう。

幸いなことに一夏もトミーも無事だ。しかし、

(男性IS操縦者と、LS操縦者が謎の敵を撃破したなどと……)

これは、下手をすると世間を騒がすことになるかもしれない。

千冬は今を忘れて明後日の事に頭が一杯になってしまった。

X I I I 英雄は求められるから成るわけで

「フ、フフフ……。フフフフ……。！」

I S 学園のジャーナリズムを一手に賄う新聞部。その部室で、薫子はこみ上げる笑いをだだ漏れにしていた。

(I S 学園に現れた謎の機体、それを撃退した二人の勇者！ それを目の当たりにできた私。これはジャーナリストにとって、まさに、運命！)

整備科の二年生である薫子は、謎の襲撃者がアリーナに現れた際にピットに控えていた一人だった。同科でもエースであったその腕を買われていたのだが、まさかあんな特ダネが目の前で起きるとは記者冥利に尽きる事態だった。

「黛副部長、学園新聞の号外は売れに売れています」

「新年度特集号も飛ぶように捌けています！」

「まだ5月なのに来年の予算が手に入りそうな勢い」

「さすがは黛先輩！」

新聞部の部員たちが薫子を褒めちぎる。

薫子はトレードマークの眼鏡の位置を整えながら不敵な笑みで皆を制した。

「なあに、かねてより注目の的だった男子二人の勇姿を書いた記事ですもの、驚く程のものではないわ。それよりも、注目すべきは世界のメディアよ！」

ビシィツ、と指さす部室の壁に展開された7つのディスプレイには、各種、各国のメディアの表紙が展開されていた。その内容はただ一つ、I S 関連特集だ。

「皆もご存知の通り、私の姉、黛渚子にこの特ダネをタレコミ、姉が副編集長を務める雑誌『インフィニット・ストライプス』経由で、私達の記事は世界を駆け巡っているわ！ そして今日、この画面の雑誌の中にその特集が組まれているとの連絡があった！」

おお！ と部員たちが湧き上がる。

そう、このI S 学園新聞部が手がけた記事が世界のメディアに登場

するのだ。それは記者を志すものとして最高の榮譽と言えた。
部員たちに感動がみなぎってきた。

「このページの中に」

「私たちの記事が……！」

「やばい、ドキドキしてきた」

薫子は皆の興奮を受け止めると、音楽の指揮者のように両手を広げた。

「さあ、レッツ、オープン！」

薫子の合図のもと、すべての記事の表紙が開かれた。

曰く、

『男性IS操縦者、IS学園への襲撃者を撃退』

『ラストサムライ、IS学園を救う！』

『ブリュンヒルデの弟はジークフリートか!?!』

そこに踊るはIS学園襲撃事件と、謎の敵を撃退した織斑一夏の勇姿が映る多数の写真。

文章はプロが書いたと思わせる人目を惹く表現の羅列。その中に自分たちの記事は、

「……ない!?!」

ない。

自分たちが精魂込めて作り上げた記事がない。

一文も、ない。

「馬鹿な!?! 写真はともかく、あれだけ練りに練った記事が一文も使われていないなんて!」

「あ、あれ? 全部の雑誌、一夏くんについての話しか載っていませんよ!?!」

「十三八くんの記事が一つもない! どうして!?!」

薫子はその疑問を解くべく携帯端末で姉の渚子に連絡を入れた。

相手はジャーナリストだけあってコール一回ですぐに出た。

『は〜い、渚子お姉さんです。こないだは特ダネのタレコミ、ありがとうね〜!』

「ありがとうね、じゃないわよ姉さんっ! 私たちの書いた記事、一つ

も載っていないじゃない！ いったいどういうこと？」

『いきなりどうしたのよ薫子く？ 自分たちの書いた記事が採用されないなんて、ありきたり過ぎることじゃない』

「にしたって、特集には一夏くんの話しか載ってないじゃない！ 十三八くんと二人合わせたの活躍だったのよ？ この写真だって、せつかく苦勞して手に入れた二人のコンビネーションの瞬間なのに、意図的に十三八くんが消されているみたいなんだけど！」

『わかってんじゃない』

端末からの渚子の声は嘲笑に似た響きだった。

『そうよ。世の中では男性IS操縦者に注目が集まり、その活躍を欲しているの。だから一夏くんの話だけクローズアップされている。なぜだと思う？ メディアがそう仕向けたからよ。リミテッド・ストラトスを犠牲にしてね』

「犠牲に、って……」

『知っているでしょう？ LSが登場したときのメディアの反応。まるで親の敵を糾弾するかのような批判だったわよね。そりゃあそうよ。女尊男卑の世の中に売り込むんだもの、お客様の求めるような記事にしなきゃ響かないわ』

「意図的にLSを非難したってこと!？」

『そう。そうすることで、女性の力の象徴たるインフィニット・ストラトスは改めて注目を集め、各メディアへのスポンサーは増加した。IS業界からメディアに向けられた献金の額聞いたら驚くわよ。そして男性で唯一のIS操縦者が現れたとき、世界にそのことを売り出した。男性側の面子を立てる必要もあるからね。そしてそんな世論を作った者達が』

渚子は声のトーンを落として言った。

『LSの活躍を取り上げる訳無いじゃない』

薫子は姉の冷酷な一面に息を呑んだ。

「そんな……。じゃあ、私たちの記事は読まれる価値すらなかったってこと？」

渚子は小声ではあるが訂正した。

『ううん、薫子、あんたたちの記事、私は最高だと思ったわ。でもね、世の中は女尊男卑なの。男性の活躍は女性が認める範囲でなければならぬ。十三八くんだけ？ その子には悪いけど、LSに乗っている限りどんなに活躍しても誰も見向きもしないわよ。たとえばIS学園を救った英雄だとしてもね』

「おかしいよ、そんなの。まるでプロパガンダじゃない」

『そうね。そうかもしれないわ。でもね薫子、あなたもジャーナリストを目指すんなら理解しておきなさい。国営であれ民営であれ、眞実は人が好きなように作り出すんだってこと』

「お姉ちゃんは、それでいいの？」

『ん〜、どうだろ？ 私も昔から捏造入れておもしろおかしい話を作るの好きだったし。割りとすんなり馴染めちゃったから』

薫子はむぐ、と口をつぐんだ。自分もIS新聞で記事を作る際そうしている自覚があるからだ。

『話はそれだけかな？ それじゃ、記者を志す後輩たちにアドバイスを一つ。世界は自分一人で回っているのではない、つていうこと。それじゃあね』

バクイ、というおちゃらけた挨拶をして通話は切れた。

同時に、薫子はガクツと机に項垂れた。

「ふ、副部长？」

後輩たちが心配そうに詰め寄ってくる。自分と一緒に夜なべして記事を作った仲間たちだ。

彼女たちには伝えねばならない。

「……眞実は、いつも一つ」

「え、名探偵？」

「皆のもの聞けえいっ！」

薫子があがー！ と立ち上がった。

驚く部員たちに向き直り、胸を張って宣言する。

「IS学園新聞部三訓、その一！」

「じ、自分の目で確かめろ！」

「新聞部三訓その二！」

「偉い人のために記事を書くな！」

「よおし、新聞部三訓その三！」

「責められる者の側に立て！」

訓練された皆の揃った返答に、うむ、と薫子は頷いた。

「そう、私たちはI S学園新聞部としての誇りを胸に、この学園内においては、世間のメディアが切り捨てた事実を報道し続ける！」

おおっ！ と部員たちが意気込んだ。

たとえ記事が世の中に受け入れられずとも、学園内の生徒からの支持が盤石なのは変わらない。

それは先輩たちから受け継いできた信用であり、後輩たちに引き継ぐべきモノなのだ。外野の都合など知ったことか。

「うおー！ 世間の風がなんぼのもんじゃーい！」

そうペンを握った拳を天井に掲げた。



薫子の煩悶(?)を他所に、I S学園に謎の襲撃者が現れ、一夏が瞬く間に撃退した話は世界を駆け巡った。

弱い立場にいる男性側は一夏を英雄視し、次なる男性I S操縦者の発見を目指して各地でテストが行われた。

一方の女性側は、一連の話は八百長ではないか、I S学園のセキユリティに問題があるのではないか、といった批判意見が相次いだ。意外にも総じて好意的な方向にあった。

それは、自分たちを確固たらしめるI Sの話であったからだ。男性I S操縦者はあくまでゼロに等しい可能性である例外であり、俯瞰すればさしたる脅威ではない。そういう余裕のなせる話だった。

ここ、ドイツでも同様の意見が広まっている。

「ですが、我々が得た情報によりますと、やはりL Sの、トミヤの活躍が隠蔽されているのは間違いないようです」

ドイツ国防軍I S配備特殊部隊『シユヴァルツェ・ハーゼ』、通称『黒ウサギ隊』。

その兵舎にて、副部隊長のクラリツサ・ハルフオーフ大尉は、部長のラウラ・ボーデヴィツヒ少佐に調べた情報を報告した。

「ふむ、やはりそうか」

ラウラは手渡された資料を速読で読み取る。その目が止まるのを見計らって、クラリツサは声をかけた。

「また、学園を襲撃した所属不明のISは、未登録のコアを使用していた模様です」

「……どうにもきな臭いな。嫌な感じがする。どう思う、クラリツサ？」

「はい。以前我が国で起きた例のIS事件と似ているかと」

「やはりそうか。であればやはり、トミヤがいたからこそ早期に鎮圧できたのだろうか」

「あの事件には、彼も我々と共に居合わせていましたからね」

「ああ。そうでなければ、織斑一夏一人で対処できたとは到底思えん」

ふん、というラウラの物言いには蔑むような響きがあった。

「とは言っても、織斑教官の弟君が活躍したことはさすがと言うべきかもしれません」

「当然だ。そうでなければ、織斑教官の寵愛を受ける資格は無い。教官がIS世界大会二連覇を果たせなかったその責任を負うならば、少しは齒ごたえのある男であってほしいものだ。もっとも……」

と、資料をクラリツサに返しながら、

「義弟を持つ身にもなると、私も荣誉など放り捨てて助けに行く気持ちには分かる気がする」

「決勝戦の直前でさらわれたのでしたね、織斑一夏は。織斑教官は躊躇うことなく肉親の捜索を選んだ」

「同じ立場になれば私もそうするだろうか」

ふ、とラウラは柔らかい笑みを浮かべた。

「その義弟に、トミヤにもうすぐ会えるのだ。なんとも言えぬ高揚があるのを否定できない」

「上からの命令は、あくまで織斑一夏への接触でしたが」

「名目など何でもいいさ。こうして転入日を早めてくれたのだからな」

本来なら、ラウラがIS学園へ向かうのはもう半月は先のことだっ

た。しかし、今回の件を受けて予定を早めることになったのだ。

すなわち、世論を動かした男性IS操縦者の実力をはかること。

機を見るに敏とは、軍人にとって必要な性質である。

「トミヤ……。元気にしているだろうか。女だらけの学校には慣れただろうか。友達はできたらうか。寂しくはないだろうか」

「義姉というより、親のような心境ですね、隊長」

「当たり前だ。同じ釜の飯を食べた釜姉弟、つまり家族なのだぞ。可能であればずっと私と一緒にいて欲しかった」

「美しい姉弟愛です」

「お前たち『黒ウサギ隊』の皆も同様だ。クラリツサ、私が留守の間、部隊のことを頼んだぞ」

「ハッ、お任せ下さい！」

気持ちの良いクラリツサの敬礼がラウラに向けられた。答礼を終えると、その目を東の空へ向けた。

この空の彼方に、日本が、IS学園が、トミヤがいる。
「待っている、トミヤ。お義姉ちゃんがいま行くからな」

少女の目にはトミヤの笑顔が映っていた。

◆ フランス、パリ⇨シャルル・ド・ゴール空港。

その広大なロビーに、その人物はいた。

よく手入れされた艶やかな金髪を後ろで結び、その中性的な外見は、少年であれ少女であれ、頭に『美』が着くこと請け合いの容姿だった。

だが、性差を示す胸元は平らであり、手元の搭乗券の名義には『シャルル・デュノア』という男性名から、彼の性別は伺えた。

シャルルのアメジストのような瞳は空港で紹介されるフランスの名所を映している。彼がこれから外国へ飛び立つ前に、祖国を名残惜しむように振り返っているためだった。

エッフェル塔、ルーヴル美術館、ノートルダム大聖堂。一つ一つ丁寧に歩き見るその足が、あるところで止まった。

「

それは、フランスが誇るIS企業『デュノア社』の広告ポスターだった。量産機ISシエア世界第三位の有名企業。その名は彼の名字と同じであり、その会社の関係者であることを示している。

しかし、ポスターを見る彼の表情は沈鬱としていた。

(お父さん……)

彼を日本、IS学園へ行くよう命じた父の姿は、空港のどこにもいなかった。その命令すら直接会って伝えたものでも電話の口頭で伝えたものでもなく、辞令という書面での伝達だった。

(僕は、もう一人ぼっちなんだね……)

彼を見送る人影はない。

デュノア社という世界的大企業であるにも関わらず、である。それが彼自身の立ち位置を表していた。

それでも祖国フランスを惜しむのは、生まれ育った故郷であるからと、今は亡き母が眠る地であるからだった。

(行ってきます。お母さん。どうか、僕を見守っていて下さい)

ぐつと手を握り、胸の中で祈りを捧げるその身体は、小さく震えていた。

日本行きの便の搭乗を知らせるアナウンスがされるまで、シャルルはデュノア社のポスターの前で佇んでいた。

XIV 金髪と銀髪の転校生

IS学園、ランチルーム。

朝は部分開放されて朝食コーナーとして活用できるこの場所で、あの窓際の席に座る者たちに周囲の視線が集まっていた。

多くの者の手には新聞部が先日発行した記事があり、それと見比べながら熱い吐息が漏れている。記事の見出しは、『IS学園の二人の勇者、謎の襲撃者を撃退!』とデカデカと印刷され、活躍を捉えた写真が一面を飾っていた。

その注目の的の一人である織斑一夏は、朝から憂鬱そうにため息をついていた。

「まったく、どうしてこんな目にあうんだか……」

うんざりしながら食べる朝食はなかなか箸が進まない。

入学当初からたくさんの視線を浴びてきたが、今日ほど肩がこりそうなものではなかった。おかげでつまんで口に運んだご飯がポロリとまたこぼれてしまった。

「なによ。せっかく学園の英雄様になれたんだから、もつと堂々としたらいいじゃない」

向かい席に座る鈴がイジワルそうに箸でチヨイチヨイと一夏を指し、

「鈴さん、はしたないですよ」

それを隣のセシリアが紅茶の香りを優雅に楽しみながらたしなめた。

「でも、こう注目されたら普段通りの生活なんてできないよ。今朝もジョギングに出かけようとしたら、いつもより起きている生徒が多くて、しかもずっとコツチを見てくるんだもん」

先に食事を済ませていたトミーは、食後のコーヒーをすすりながら苦笑した。

それに、セシリアは紅茶のカップを皿に置いた。いつになく乱暴な仕草で、食器がガチャリと音を立てた。

「そのジョギングには、今日も相川さんがご一緒されていたんですの

「？」

なんとなく、セシリアの視線が冷たい。

「そ、そりゃあいつも一緒に走っているからね。今朝はお清さん気まぐすそうだったから、途中から違うルートに変えてみたんだ。海岸線の道で、前から気になっていたところ。気分を直してくれたらいいんだけど」

言うのと、トミーは相川清香が食事している席を見た。布仏本音や谷本癒子（たにもとゆこ）ら、いつものクラスメイトと同席していながら、チラチラとこちらを見ているようだった。目があったので手を振ると、ぎこちなく手を振り返された。

「ふくん……。明日からはわたくしも混ぜていただきますわね」

「え、いきなりだね？」

「いけませんかしら？」

「そうじゃないけど。でもお清さんに声をかけとかなないと」

「わたくしの方からしておきますから、大丈夫ですわ」

ニツコリ、とセシリアが笑う。なぜか、トミーは変な胸騒ぎがしてコーヒーがいつもより苦く感じた。

「けどさあ、トミーの言うとおり、こう変な注目を浴びると普段どおりの生活なんかできないって。なんか緊張してご飯の味もしないし」

「情けないわね。英雄らしくどーんと構えて慣れちゃいなさいよ」

「気軽に言ってくれるぜ。なあ、トミーはどうやって対処しているんだ？」

「んん、こういうときだと目が悪いのって長所だよね」

「あ、そういう」

「今はコンタクトしているけどさ」

語るトミーの目は赤色を宿していた。普段の空色ではない。

「カラーコンタクトですの。もとのほうが素敵でしたの……」

「なんでいつもつけないのよ？ 不便じゃない」

「……コンタクトつけるの怖いから」

「子供かっ」

鈴が飲茶を片手で豪快に呑み込んだ。一夏も朝食を食べ終わり、お

茶の入った湯呑みを両手で丁寧口に口にした。

鈴さん、一夏さんを見習いなさいな。と、セシリアがまたたしなめた。

「そういえば、アリーナでの練習のときもコンタクト付けてたよな。新聞部の記事の写真みたけど、やっぱりトミー眼鏡していないと印象変わるよな」

「雨の中だとコンタクトの方が便利だしね。前までは僕の目を怖がられたのにねえ」

「ヤブ睨みだったからだろ。今の方が見栄えいいぞ」

「そ、そうかな？」

「そうですわ。お陰でつまらない方たちからの視線も増えたご様子ですけど」

「つまらないって……。言うじゃないセシリア」

「事実を申したまでですわ」

ふん、と鼻を鳴らして、セシリアはすまし顔で紅茶を口にしました。

なくんか最近トミーへの配慮が鋭角なのよねえ、と鈴は思った。

「にしてもさあ、一夏。アンタ自分たちの記事なのに自分で買ったの？ それちよつとダサくない？」

「なんだよ、鈴。新聞部の黛先輩に渡されたんだよ。ご協力に感謝しますつて。俺、協力した覚えなんだけどさ」

「あ、それ僕も貰ったよ。一夏が『零落白夜』を決めた写真が掲載されてたよね。あれカッコよかったなあ、鈴」

「な、なんでアタシに振るのよ。まあ、一夏にしちやあよく映っていたんじゃない？」

「そう言いながらも、鈴さん号外も特集号もみんなお買いになったじゃありませんこと」

「べ、別につ、ルームメイトのテイナに言われて買っただけよ！ セシリアだって、刊行物全部買ってたじゃない！」

「わたくしは自分が欲しいからお買い求めになっただけですわ。お二人のご活躍が載っているんですもの、当然でしょう？」

ぐぬぬ、と鈴は飲茶をすすった。今度は両手で小動物のように身を

縮こませて。

普段は一夏さんへの好意を口にしますのに、いぎ面と向かうと尻込みしますのね、とセシリアは思った。

「でも、あの新聞よく検問通ったね？ 不明自立ISの襲撃とか、普通引つかかると思ったんだけど。主に織斑先生の」

「ああ、俺も千冬姉に確かめたんだけど、騒ぎが大きすぎる手前、下手に隠蔽するより拡散したほうが良いだろう、ってことになったんだってさ」

「わたくしも同意見ですわ。こう騒げば襲撃する側も、次は躊躇せざるを得ませんもの」

「このIS学園に喧嘩売るなんて、いったいどこのバカなのかしら」
「さあてねえ。ISやなんかに不満を持っている輩ってどこにでもいるからね」

「何か知ってるふうじゃない、トミー？」

「詳しいことまではわかんないよ。ただ……」

トミーは冷めたコーヒーを飲み干して。

「たぶん、次もまた何か起きると思う。今回みたいに大胆なことをする輩って、失敗を見越してやっていることが多いから。鈴、セシリア、そのときは」

「今度はアンタたちがお呼びでないほど、アタシがソツコーで活躍して見せるわよ」

「今回は十分ほどで撃退したのですわね。わたくしのは五分で始末して差し上げますわ」

二人の国家代表候補生はそう不敵に微笑んだ。怖い怖い、とトミーは苦笑する。

「ははっ、二人に負けないよう、俺達も頑張って上達しないとな、トミー」
「だね」

時間も頃合いとみて、ごちそうさまでした、と四人は両手を合わせ、食器盆を持って席を立った。相変わらず周囲の視線は集まるが、普段の仲間たちと一緒になら大丈夫そうだ、と一夏は思った。

「そういえば、箒はどうしたのよ？ 今朝一夏と一緒にじゃなかったの？」

「ああ、昨夜から荷造りしていてな。なんでも今日部屋替えするらしい」

「部屋替えって、……あ、アンタ箒に何やったのよ!？」

「何もやってねえよ!」

「鈴さん、ナニをお考えになったのかしら?」

「そりゃあ、相部屋なのをいい事に、一夏がナニか変なこととして箒に愛想尽かされて……」

「一夏に限ってそれは無いと思う」

「だろ!?! ……って、何かそこはかたなく貶めてないか、トミー?」

「一夏を信頼しているってことだよ。ね、セシリア」

「そうですね。……ところで、もしトミーさんの場合だったら、何かある事も考えられますの?」

「一夏以外の男性に聞くんじゃありません」

「へへえ?」

「あらあら」

「……どういふことなんだ、トミー?」

「からかい×2+朴念仁一夏に、トミーはなんだか無性に叫びたい衝動に駆られた。」

「堪えるのも面倒なので、適当な棒読みで声を張り上げることにした。」

「もつと分かってくれる男がほしいよー!」

「ソツチかよ(なの(ですの)!)?」



果たしてトミーの願いが天に通じたのか、新たなる男性がIS学園に現れた。

一年一組のSHR(ショートホームルーム)にて、山田先生に紹介される二人の転校生。その片割れが、金髪の美少年だったのだ。

(トミーのやつ、いつも運が良いとかいってるけど、マジで神通力でもあるんじゃないか?)

一夏は、転校生の登場に歓喜で湧き上がるクラスメイトたちの中で、半ば感心したようにトミーを見た。きつと喜んでいるだろうと思っただけだが、

(……あれ?)

視線の先のトミーはぽかんと口を開けていた。「シャルル・デュノアです」と自己紹介された側ではなく、冷たそうな銀髪の少女に向けてだった。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

礼儀正しくにこやかで貴公子然としたシャルルの挨拶と反比例して、ラウラは仏頂面で厳格そうな軍人さんを思わせた。

(しかも眼帯って、どこの戦争映画の大佐だよ)

左目を隠す眼帯と冷えた赤い右目が、近寄りがたい雰囲気醸し出している。えらいやつが来たなあ、と一夏は思った。トミーも同じように感じたのだろうか。

そんな彼女が、ふと、歩みだした。

足取りは生徒たちの最前列下段に座るトミーを向いていた。周囲の怪訝な感じも意に介さず、ラウラはトミーの隣に立って、目をまっまるに開けている彼に、

「——あいたかったぞ、義弟よ」

一転瞳を潤ませてトミーをその胸に抱きしめた。

「わっ、ちよっ、ラウラ!」

トミーが慌てふためいて離れようとするも、少女は彼を逃さない。

小ぶりの身長ながら訓練で体得した体術が自然とトミーの身体に絡みつき、体格に見合いつつも女性らしい胸元が相手の顔に押し付けられた。

「心配していたんだぞ。寂しくはなかったか。お義姉ちゃんが来たからにはもう安心だからな」

「いきなり僕は心配だよラウラ!? ちよつと、離れて!」

「恥ずかしいのか? 可愛いやつめ。さあ義姉ちゃんに顔をよく見せてみる。……なんだ、瞳の色が赤くなっているじゃないか! 私とおそろいにしてくれたとは、可愛い義弟だ」

「いや、これはコンタクトで……、っていうかそんなことはいいからとにかく」

「不健全ですわっ!! お離れになって下さいっ!!」

生徒たちの最後列上段から、セシリアのソプラノボイスがスナイパーキャノンのように放たれた。

弾着したラウラはビクともせず視線を上げる。

「何だ貴様は。義姉弟の再会に水を差すとは無粋な奴だ」

「公衆の面前で破廉恥な行いをする方に言われたくありませんわっ!!

トミーさんをお離しになって下さいっ!!」

「トミー? 誰だ、そいつは」

「あー、ラウラ、僕はここではそう呼ばれてて」

「せつかくの名前を呼ばれないのか!? ……くだらん」

ラウラはトミーを腕の中に抱きかかえたまま、クラスメイトたちに宣言した。

「トミヤは私の義弟だ! すなわち、トミヤは私のものである! もし義弟に何かすれば、私が黙っていないから覚悟しろっ!」

堂々と軍人調に布告されたセリフに、セシリアは

「んな、ななな、なあああ!!?」

と顔を真っ赤にして抗議の言葉を感情に乗せた。

ラウラは再度確かめるように言い放つ。

「これは、私とトミヤがドイツにいた頃からの、決定事項であるっ!」

ラウラの腕の中のトミーは、ドイツから疾風怒濤（シユツルム・ウント・ドランク）が飛んできたなど、がっくりと項垂れた

XV 弟は姉のものだとブリュンヒルデは言った

二人の転校生が現れた日の授業は、二組と合同のIS模擬戦闘だった。

これまでの座学で学んだ内容を、実践を通して身につけるというものだ。午前中は主に実機を使った実習であり、午後は今日使った訓練機の整備にあてられている。

ちよつとしたトラブルから、一組副担任の山田麻耶先生が鈴とセシリアの代表候補生コンビを相手に模擬戦を行い、ワンサイドゲームを演じて教師の実力を知らしめた事もあったが、全体的にはおおむね予定通りに授業が進んだ。

内容の形式から一組と二組の生徒が直接触れ合えるものになり、さらに転校生も生徒たちと会話しやすい環境となったため、生徒間の交流がより深まるという結果になった。

「で、どうだったシャルル？ 転校初日のIS学園の感想は」

放課後の喫茶コーナー。学園の上階に位置し展望台のような大きな窓のある名物スポットにて、箒は少し疲れた表情のシャルル・デュノアに声をかけた。

「う、うん。初対面の僕にたくさん話しかけて貰えたし、それにこんなに綺麗な海が見渡せる場所もあるなんて、やっぱりIS学園に来てよかったよ」

窓の外は夕焼け空が鮮やかなオーシャンビューとなっていた。視界の端には遠くの街の灯がみえる。もう少しすればさぞかし素敵な夜景が臨めることだろう。

シャルルは、初日で緊張した僕の疲れを癒やすためにここへ案内してくれたんだね、と招待してくれた箒に感謝した。

「今日は一日ISを使って動き回ったもんねー。もう疲れちゃった。しよっぱな誰かさんが変なことしなければ、もう少しマシだったろうけどさあ」

鈴が椅子にもたれ背中を伸ばしながら、ジト目で左隣の一夏に言った。

「そ、そんな顔するなよ鈴。あれは事故だって何度も言ってるだろう」「事故、ねえ。あんなに山田先生の胸に埋もれて揉みしだいていたクセに、まだそういうわけ?」

鈴の手のひらが何かを揉むようにワキワキ動く。

それが自分の胸に向けていないのが彼女の個人的不満の一つを表していた。

「いや、だって後ろから起動訓練中のやつに押し倒されて、何かエアバッグかクッションみたいなものに助けられたと思ったんだって。けっしてやましい目的でしたわけじゃないっ」

「そのわりには、山田先生を見る鼻の下が伸びているようになっていたようだが?」

右隣にいる箒も横目でジロリと一夏を睨んだ。

左右からサンドバッグにされる格好の一夏は涙目で無実を訴えるが、二人の検察官は容赦なく罪状を追求してくる。

そこに弁護士として一夏助けたのはシャルルだった。

「まあまあ、お二人ともその辺にしておきなよ。一夏だって悪気があってやったわけじゃないそうだし。それに一夏は男の子なんだから、山田先生の胸に目が行ってしまうのも、その、生理的にしようがないんじゃないかな」

「しゃ、シャルル。わかってくれる男が来てくれて助かったぜ」

「もう、一夏もしゃきつとしなきゃダメだよ? みんなに心配かけちゃうでしょ。それに、とぼちちりで模擬戦をさせられたオルコットさんにもちゃんと謝ったの? ねえ、凰さん?」

「うぐ」

鈴は脇腹を突かれたように呻いた。

山田先生に覆いかぶさる一夏に、鈴がISで喝を入れようとしたところ、その山田先生が代わりに受け止めたことが模擬戦の発端だった。

担任の織斑先生が、「ちょうどいい、教師の実力をを見せてやろう。代表候補生は準備しろ」とセシリアも巻き込む形となり、そして織斑先生の言葉通り山田先生の実力を生徒たちに知らしめたのだった。

もう、とシャルルは困ったような声を上げる。

「オルコットさんは完全に巻き込み事故だったんじゃないかなあ。ちゃんとフォローしないといけないと思うよ?」

「いや、まあ、その通りなだけだよ……」

「ああ、今のセシリアは、ちよつとなあ……」

と、歯切れ悪く隣のテーブルのセシリアを見た。

お淑やかに折り目よく座る姿はまるでモデルさんのようだが、その視線は絶対零度の如く冷やかに一点を見つめている。

「……………」

無言の眼光の先にいるのは、窓の景色を見ながら二人の世界に入るトミーとラウラだった。

「トミヤ、これが日本海というものなのか?」

「いや、これは太平洋だよ。日本海は日本列島を挟んで反対側」

「なるほど。では、あの遠くの街が東京なのか?」

「うくん、どうだろう? まだちゃんと出歩いていないからわかんないや」

「そうなのか。では、今度一緒に行ってみようではないか。二人でミュンヘンを歩いた時のように」

「それはいいね。あの時はちょうどオクトーバーフェストがあつて賑やかだったなあ」

「ああ。あいにく私達はお酒はダメだったが、チョコレート・ココアがとても美味しかったな。パレードも実に華やかだった」

「ラウラったら、パレードだからってガチョウ足行進するんだもん。ビックリしたよ」

「あ、あれは忘れろつ。馴染みがなくてわからなかったんだっ」

屈託なく笑うトミーにラウラはふくれっ面でソツポを向いた。ゴメンゴメン、と謝るトミーに、じゃあ、と二人で街に向かう約束をしっかりと交わすラウラの表情は、軍人然とした転校当初よりもずっと年相応の少女らしい。

それにラウラの銀髪とトミーの鉛髪は似たような配色系統だし、カラーコンタクトを入れたトミーの瞳はラウラと同じ赤い色、そして仲

睦まじい二人の姿はまるで本物の姉弟を思わせた。

それが、何だかトミーをとられてしまったようで、セシリアは泥棒を見るような目を自称義姉に向けていた。

「……………」

ミシリ、とセシリアがつかむ椅子の肘掛けが悲鳴を上げる。

(これ以上はマズイ……………！)

と危険を察知した一夏は、

「……………あー、そ、そうだ！　せっかく喫茶店に来たんだから、何か飲み物でも注文しないか？　今日のお詫びに俺が奢るからさっ」

とにかく空気を切り替えねばと身銭を切って提案した。二人の幼なじみと新しい相部屋仲間のシャルルは渡りに舟と同意する。

「そ、そうよねっ。それじゃあせっかくだから、アタシはプーアル茶にしようかしらっ」

「う、うむっ。悪いな一夏っ、私は粗茶で構わないぞっ」

「ぼ、僕は一夏と同じ飲み物がいいなっ」

「よしっ。おーい！　トミーたちと、セシリアはどう、……………なさいますか？」

なぜセシリアに丁寧語、という疑問はみんな口に出さなかった。

「ああ、ゴメン一夏、気を使わせちゃって。えーつと、僕は」

「トミヤはコーヒーだな。ブラック濃いめだ。私はココアでいい」

「あ、ラウラ、よく僕の好きなの覚えていたね」

「当たり前だ。私はトミヤのお義姉さんなのだからな」

フフン、と小さな胸を張るラウラに、トミーはありがとうお義姉さん、と微笑して頭をなでた。

そのやり取りにセシリアの纏う冷気が一段と増して、

「……………トミーさん、ちよつとよろしくくて？」

と底冷えしそうな声が放たれた。

(きたか——)

一夏たちの表情が強張り、ゴクリと唾を飲む。

しかし対するトミーは、

「うん、大丈夫だよ」

というあつさりとした返事のあとに、そつと口元をひそませた。

(そんなに怒らないでよ、セシリア)

声のない言葉がセシリアに向けられる。

彼女が読唇術を心得ていることをトミーはそれとなく知っていた。わざとこうしているのは、ラウラに聞こえないようにする話だからだ。

その意図を理解したセシリアは、一つため息をついてアイコンタクトで対応した。

「この紅茶は評判がいいと伺いましたの。よろしければご一緒にいかがですか？」

(なんでその子にそんなにご執心なのですか！)

「そうなの？ でもせっかくだけど、次の機会にしようかな」

(だって僕の家族だもの。どうか勘弁してあげてよ)

「まあ、残念ですわね」

(甘やかしすぎですわ)

「次回はぜひ一緒に来ようよ」

(これからは気をつけるからさ)

「あら、いかがでしょうか？ デートのお誘いなら一緒にお外に行きたいですわ」

(絶対に許しません)

「……ちよつと、セシリアっ！」

トミーがたまらず話を割った。

「そんなにつっけんどんにならないでよ。ラウラは、義理とはいえ僕の家族なんだ。それに日本へ来たのは初めてなんだし、もつと配慮してあげたっていいじゃないか」

「家族であれば、ラウラさんがわたくしにした授業中の無作法な物言いいも許しますの？」

「それは……」

「わたくしはまだラウラさんから謝罪の言葉を受けておりませんわ」

セシリアは氷の矢を射るように視線をラウラに向けた。

午前の授業で山田先生に模擬戦で負けたとき、ラウラは「代表候補

生ともあろうものが、一線を引いた身に手も足も出んとは無様なものだな」と挑発以外の何ものでも無い言葉を吐いたのだった。

無論トミーはすぐにラウラをたしなめたが、それにも「トミヤがそんな奴らを弁護する必要は無い」と取り付く島もなく切つて捨てた。そんな訳でセシリアのご立腹はもつともであり、トミーも配慮せざるを得なかった。

「……そうだね。ラウラ、ちゃんとセシリアに謝らないと」

「トミヤ、私はココアが飲みたいな」

ラウラはトミーの言葉を遮った。

「織斑一夏一人では人数分持ち運ぶのに難儀だろう。トミヤも手伝つてやってくれないか？」

「ラウラ、話を逸らさないで」

「話をつけるさ。トミヤが代わりに頭を下げろ、などと要求されては迷惑だ」

「わたくしはそんなこと申しませんわっ！」

「セシリアも落ち着いて。……わかったよ、ラウラ。ちゃんと言うべきことを伝えるんだよ？　一夏、ドリンクの注文に行こう」

「お、おう」

心配そうにラウラとセシリアを見てから、トミーと一夏は喫茶店のカウンターに向かった。ちょうど建物の反対側でこちらからは死角となり、また景色のいい時間帯のせいか混んでいた。

残された二人と、主に外野の三人は、なんとも微妙な空気に晒されていたたまれない。

（な、なんでこうなってるのよ一組の筈っ！　そっちの転校生でしょ？　いきなり一触即発じゃない！）

（わ、私に聞くな鈴っ。シャルル、英国と独逸は未だに仲が悪いのか？）

（もうそんなことないと思うけど……。というか、オルコットさんとトミーって、えと、仲良しなの？）

（……いろいろあんのよ）

（うん、何となく察したよ）

小声で交わす同級生のやり取りを、セシリアとラウラは全く目に入っていないかった。

コホン、とセシリアがわざとらしく咳をつく。

「……では、まずは先刻の謝罪から頂きますかしら、お堅いドイツの軍人さん？ 同じ欧州連合同士、礼儀はわきまえておいででしょう？」
「断る」

周囲の空気が一瞬にして凍った。

「なんて無礼ですこと……。貴方はトミーさんの顔に泥を塗るおつもりですか？」

「トミヤの義姉としてお前に伝える。金輪際義弟に関わるな」

「っ！ ……家族だとかおっしゃいますけれど、まるで性格は似ておられませんのね。貴方のせいでトミーさんはさぞかしご苦労なされたことでしょう」

「そうだ。トミヤは私のせいで大変な思いをして来た。だから、これからは私がアイツを守る番だ。お前のようなメスからな」

ダンツ！ と、セシリアはテーブルを叩いた。

外野は「あく、こりやダメだ」というように目を覆った。

「なんてはしたない物言いですのっ!? 貴方はいったい彼の何を知っておられるというのですっ！ 彼の抱える苦しみを理解なさっているだけでもいいのですかっ!?!」

「知っているさ、——何もかもな」

ラウラは一瞬だけ憂いをおびた目を伏せた。

「お前の事も知っている。セシリア・オルコット。大学者（サヴァント）が受け持ったオルコット家の、現頭首」
「なっ」

思いがけない名前に、セシリアはたじろいだ。

「あ、貴方は、いったい……。う？」

「情報収集は軍人にとって基礎の基礎だ。学園の人間については一通り目を通してある。中でも、オルコットのお前については特にな」
「御目に適って光栄ですわね。それで、わたくしについて何を知っているというのですか？」

「トミヤはお前の知る大学者（サヴァント）の息子ではない」
「っ!？」

セシリアは椅子を蹴って立ち上がった。

「その少年はすでに死んだ。私の目の前で、闇に飲まれて壊れて消えた。残ったのは初期化（フォーマット）されて縁（よすが）を無くしたまっさらな被験体。No. 11038号。私の大切な家族のトミヤだ」

「嘘ですっ！ 『彼』は死んでなどいないっ！ あの日の、幼い頃の優しさも強さも、今もこうして彼の中にある！ 貴方の言うことなど信じませんっ！」

「そんな残滓に今も思いを寄せているとは哀れだな。お前の事など何も覚えていないというのに」

「覚えていないなら、また作ればいいのです！ 『彼』との思い出を、大切な絆を！」

「フツ……。では問おう。お前は去年の大晦日はどこで何をしていた？ おおかた、社交パーティーやコンサートなど、暖かな屋根の下でぬくぬくと過ごしていたことだろう」

「それがいったい何だというのです!？」

「私とトミヤは軍の野外訓練で年を越した。極寒の冬のドイツの奥地、黒い森（シュヴァルツ・ヴァルト）の闇の中でな」

ラウラの口元は弧を描き、眼尻が垂れた。

それはセシリアに対する冷笑のようであり、またその時を懐かしむようでもあった。

「その訓練の趣旨は、部隊がバラバラになっても環境が厳しくとも目的地へ辿り着くことだった。最初は各個で行動し、臨機応変に進行するというものだ」

窓の外の夕焼けがかすみ、暗闇が迫ってきていた。

「吹雪の舞う寒い夜だった。何もせずとも歯がカチカチと鳴り、行けども行けども闇の森は行く手を阻む。途中で多くの兵士が脱落した。屈強な軍人たちが、何人も泣きながら逃げ出していったよ」

ゴクリ、と鈴の喉が鳴る。

「だが、私は脱落を許されなかった。私は戦うために生まれたデザインベイビーだからだ。訓練をやり遂げるか、さもなければ存在意義を失うかだ」

何気ない口調の中にあるとんでもない出自に、シャルルがえっ、と声を漏らした。

「その私の身体でもその日の寒さには堪えた。しかも森と吹雪ではぐれ、他の隊員たちとも合流が図れない。ついに寒さに倒れかけたその時、トミヤが私を見つけてくれた。私を抱きかかえると大木の下に僅かな窪みを見つけ、その中に避難した。腰を下ろすとトミヤは私を近寄せて外套を羽織り、後ろから抱きしめてくれた」

ラウラの顔から冷笑の色が消え、ハツキリとした追憶の微笑がうかんだ。

「暖かかった。その身を呈して寒さから私を守ってくれているのだと分かった。トミヤの腕に抱かれて、私達は歓喜の歌（アン・ディー・フロイデ）を歌った。歌を歌って元気になるためと、こんな状況でも新年を祝おうというためだった。新しい年はきつと良い年になりますようにと、心を込めて一緒に歌った」

大晦日に歓喜の歌、いわゆる第九を歌う文化はドイツから日本にも伝わっており、箒も理解していた。その時のラウラの心情を、箒は多少だが汲めるように感じた。

「だが、吹雪が強くなると共に、トミヤも次第に消耗していった。大丈夫だ、風が止んでから動こう、と言ってくれたが、それまでトミヤが持つか不安だった。そして朝、日が昇る前の一番つらい時間、トミヤの意識が朦朧としていった。私は青ざめた。訓練生のバイタルサインは本部でチェックされ、一定を下回ると回収されて強制退場させられてしまう。私のせいで、トミヤが失格になってしまう」

言葉に載せるその時の苦痛がラウラの顔ににじみ出る。

「なんとしてもトミヤの体力を回復させねばならない。何か温かいものを与えねばならない。私は暖を取れるような物は何も持っていないかったが、私自身の身体があった。私は彼の顔を近づけると息を吹きかけ少しでも緩ませ、彼の口に私の口を添えて、唾液を流し込んで温

めた」

セシリアの喉が、グツとくぐもつた音を上げた。何かを言おうと口を開きかけたが、声は発せられなかった。

その様子を見たラウラは、話を続けながらセシリアにゆっくりと近づいていく。

「朝、空が明るむと共に風が止み、私たちは肩を寄せ合っついに目的地に到達した。……その夜のことを、私は忘れない。トミヤはその身を持って私を助けてくれた。だから私もこの身を捧げようと思った。男女の事などではない。同士、仲間、そういつた言葉では言い表せない、何者にも変えられない深い絆だ」

セシリアの眼前に、ラウラが迫った。

「お前には分かるまい。トミヤの力強いテノールの歌声も、挫けそうになる寒さから守ってくれた温もりも、過酷な訓練の中で励まし続けてくれた優しさも」

困惑の色を浮かべるセシリアの胸ぐらを掴み、ラウラは額が着くほどに顔を近づける。

「お前に何がわかる、私達の絆の深さが。トミヤは私の義弟だ。織斑教官は言った、弟というのは姉のものだと。だからアイツは私のものだ。私だけのものだ！ お前なんかに渡すものかっ！」

真つ直ぐで鋭いラウラの赤い瞳が、揺れるセシリアの蒼い瞳を射抜いた。

セシリアは何か口ごもるが、言葉にならず何も返せない。

ラウラはつまらなさそうに、ふん、と息巻いてセシリアを突き飛ばし、トミヤのもとへ踵を返した。

「セシリアー」

箒が尻もちをつくセシリアを抱き起こす。

鈴もシャルルも心配そうに声をかけるが、セシリアの耳には届かなかった。

呆然とラウラの背中を見つめ、

(そんなにも、繋がりが違うだなんて……)

その遠ざかっていくラウラの後ろ姿が、遥か彼方にあるように感じ

た。

午前の模擬戦の結果よりも、敗北感が身をさいなんだ。

XVI セシリアは見た！

夜といえど、IS学園は真っ暗ではない。

多くの生徒たちが暮らす学生寮には門限があり、破った者には織斑寮官の厳しい処罰が待っている。だが、教員や研究者といった大人たちは、学生たちが寝静まった後もそれぞれの作業で残っていることが多かった。

IS学園はIS操縦者を育成する教育機関であるが、同時にISの研究や運用テストを行うアカデミックな場所でもある。あらゆる国の法律や規則に縛られない治外法権を持つ学園の特性上、特定の企業と密接になることはタブーとされているが、学究的な分野であれば企業からの出向者が学園に在席することも可能であった。

研究施設は校舎と校庭を挟んで向かい合う形となり、連結している訳ではない。普段の学生生活の範囲からは枠外にあった。

その研究室の一つに、訪れる影がある。

夜も深夜二時と遅く、昼夜を問わない研究施設とて非常灯以外の明かりはほとんど消えている。その闇に紛れるように、影は壁伝いに身を低くしながら研究室のドアノブに手を当てた。

ゆっくりと回るドアの取っ手が音をたてずに止まり、鍵がかかっていることを確かめると、影は懐から何やら細い金属棒のようなものを取り出した。それを鍵穴に差し込み、慣れた手つきで操作すると、ガチャリ、という音を立ててロックが外れた。

影は、慎重に、その部屋の中へ侵入した。部屋は常夜灯だけがついており薄暗かった。壁際には薬品棚が連なり、部屋の中央に病棟にあるようなベッドが備えられていた。その上の膨らみと、中から聞こえる寝息を見つけると、影は口元を歪めて忍び寄った。

と、その時、携帯端末の着信のような音が鳴った。ドアが自動で閉まると同時に照明が点灯し部屋を明るくする。弾かれたようにベッドの上の布団が翻り、目を覚ました部屋の主人、トミーが身構えながら入り口に目をやった。

しかし、そこに人影はない。すると、トミーは動揺も見せず瞳を空

色に光らせた。彼の中では周囲のものがレーダーのようにスキャンされ、上下左右、後ろまでもその視界に捉えられた。越界の瞳(ヴォーダン・オージェ)と呼ばれるIS適合性向上処置、その失敗が産んだ副産物だった。

トミーの視力を弱めた引き換えの能力が、彼の左下後方から近づく者を見つけた。トミーは振り向かず左腕を伸ばしてその首元を掴み、身体を回転させる流れでベッドの上に引っぱり叩きつけた。

う、と小さく呻くその正体は、

「……ラウラ?」

トミーが義姉と慕う、今日再会したばかりの小柄な少女、ラウラ・ボーデヴィツヒその人だった。

「いきなりベッドに押し倒すとは、やるじゃないかトミヤ」

ラウラの軽口に、しかしトミーは彼女の身を起こしながら心配そうに問いかける。

「どうしたのさ、こんな夜更けに。いったい何があったの?」

「いや……、なに、お前が一人部屋で寂しい思いをしているのではないか、とな。こうして私が一緒に寝てやろうかという義姉心だ。感謝しろ」

「それは、なんとも、気を使わせてしまったね」

トミーはいぶかしみつつも、表面上そう労った。

ラウラはバツが悪くなると頓狂に高慢な態度をとる。たいていが照れ隠しであり、また恥ずかしさを誤魔化す場合の素振りだった。

その事を良く知るトミーは彼女に追求するでもなく、

「でも、僕は寂しくなんてしていないから、大丈夫だよ」

と、ドア付近の警報機を止めながらラウラの話に乗って答えた。話の内容はつくろいではない。

「こうしてラウラも学園に来てくれたしね」

彼の本心であった。

そうだろうそうだろう、とラウラがすまし顔で胸を張る。

「ところで入口のそれは、遅延警報機(ディレイ・アラーム)か。侵入者を逃しにくいが、もし銃を持っていたら危ういぞ」

「もともとこの研究室に付いていたものさ。研究資料の盗難防止にね。ドアのロックが嚴重でないのは、おびき寄せて捕まえるための算段らしいよ」

「研究室のか……」

ラウラは部屋の機材を見渡した。病棟か実験室のような内装はとも人の生活する空間とは言い難く、隅にまとめられているトミーの生活用品がその空間に場違いだった。

ラウラは棚の薬品を眺めながら、

「トミヤ、お前は誰かと一緒に暮らさないのか？」

「え？」

「この学園の生徒たちは、多くが寮で二人一部屋の生活を送っている。私はお前の身体の事情も知っている。こんな寂しい所ではなく、私と同室で暮らさないか？」

ラウラの見る薬瓶はトミーの常備薬だった。トミーは男性でありながらIS適正を得る代償に、様々な薬漬けの日々を余儀なくされている。

その事を隠すためにこうして寮に入らず、所属する企業の研究室を間借りしていた。

ラウラの話は、闘病生活のような一人暮らしを強いられるトミーへの、他ならぬ配慮だった。

(ラウラって、何だかんだ言っても、優しいよね)

とは言っても、

「せっかくだけど遠慮するよ。いい年の男女が同じ部屋で暮らすのは不健全だ」

ラウラはトミーに向けて首をかしげる。

「織斑一夏は篠ノ之箒と相部屋だったと聞いたが？」

「あれは……、まあ一夏だし。彼に限って間違いはないと断言するよ。箒とは幼馴染でもあった訳だしね」

我ながら一夏への扱いが雑だなとトミーは思った。

「ならば私たちは義姉弟だぞ」

「それはそうだけど……」

「ハッキリ言ってくれて構わないぞ。私と一緒に、嫌……なのか？」

「そうじゃないよつ。ただ」

「ただ？」

トミーは純情なラウラの視線から顔を背け、頬を掻きながら言った。

「……僕だって、異性を意識しちゃうんだよ。普段学校で会うならまだしも、同棲するなんてさすがに無理だよ。僕がドイツにいた時だって、男子寮で暮らしていたじゃないか」

「トミヤ、お前、義姉である私を異性として見てくれているのか？」

「そうハッキリ言えるわけじゃないでしょつ。だいたいラウラは、その、なんだ、魅力的すぎて、一緒に暮らすなんて肩が凝っちゃうよ」

一夏ならこんなヤキモキしたことにはならないだろうな、とトミーは失礼ながら思った。唐変木なのは女の園で暮らすには合っている性格かもしれない。

「魅力的……」

ラウラはトミーの発言を反芻した。

「私はトミヤにとつて魅力的なのか？」

「たぶん僕以外の目から見てもそう映ると思うよ」

「そうか……」

フフ、とラウラは可愛く笑って、だがすぐに表情を失った。

「……夢を見たんだ」

告白するようにラウラは話した。

「夢？」

「ある朝、お前が冷たくなっていた夢だ」

ラウラの視線が薬品に向き直った。

「自室から出てこないお前を探しに行くと、ベッドの上で眠ったまま冷たくなっていたんだ。なのに、夢の中の私は何とも感じなかった。係の者に連絡して、部屋から運び出されるお前を気にすることも無く、訓練に向かった」

「……………」

「訓練から帰る途中、立ち寄ったお前の部屋にはもう何もなくなつて

いた。なのに、私は、……私はつまらなそうに、涙一つ零さずに部屋を後にしたんだ」

悲痛な表情で彼女は言った。

そのラウラの話に、トミーは自分の過去を思い出ししていた。

右も左も分からない頃、どこかの合宿所で寝泊まりしていた時期、ラウラが言うような体験が実際にあったのだ。

昨夜まで同室で笑い語らっていた赤毛の子も、黒髪の子も、浅黒い肌の子も、みんな先に逝ってしまった。

係の者に連絡して、相部屋仲間が運び出される姿を尻目に、いつも通り訓練所へ向かう。一日が終わってへトへトになって部屋に戻ると、ガランとしていて静かだった。

なのに、寂しさは全く感じなかった。

(どうしてだろう)

気にもとめなかった記憶を振り返り、今更ながらにそう思う。

(僕は、彼らを――)

「トミヤ」

ラウラが自分の名前を呼んでいる。

気がつけば、すぐ目の前で心配そうに佇んでいた。

「今夜、お前の部屋に泊めてくれないか？」

ラウラはトミーの手を取って言った。

「今夜だけでいいんだ。また寝たら、あの夢を見てしまいそうで怖いんだ」

その瞳は揺れている。

「私がトミヤにとつて魅力的なら、そう思う先を私にしても構わない。だからお願いだ、私を、一人にしないでくれ」

それはまさしく懇願だった。

トミーはラウラの話ぶりから、相当悪夢に苛まれていることが伝わった。

ラウラは夢見が悪い。そのことをトミーは実体験で知っていた。軍の訓練で共に野営をした時、寝ていたラウラが酷くうなされ、突然敵に間違われてナイフを喉元に突き付けられたことは一度や二度の

話ではない。

きつと今回も、彼女は眠ることを恐れているのだろう。

トミーは彼女を落ち着かせるために頭をなでると、

「……わかったよ。こんな部屋で良ければ、一緒に休もう」

そうベッドへ誘った。

ラウラは、本当か！ と破顔すると、軽やかにトミーの布団に潜った。トミーの分をちゃんと空けて、おとなしく肩まで布団をかぶる。

しかし彼はベットの脇に腰掛けたまま布団に入ろうとはしなかった。

「どうした、トミヤ？ 一緒に……」

と続きを言おうとした口元まで、トミーは布団の裾を持ち上げた。

「親しき中にも礼儀あり、だよ。流星に同衾は不躰だ。その代わり、ラウラが寝付くまで、ここでこうしてあげるから」

布団越しに彼女の身体を、トントン、と優しく叩いて、子供を寝かしつける時のようにあやして見せた。

ラウラは最初不満げな目でトミーを見つめていたが、次第に安らかな顔になっていった。

布団にはまだ温もりが残っており、あやすリズムは心地よい。それに、

(トミヤのにおいだ……)

まるでトミヤに包まれているようだ。ラウラは思った。安心感が染み入るように全身を満たしていった。

そんな事は以前にもあった。去年の大晦日の訓練で、吹雪から守ってくれたときだ。

あの時は眠らないように必死で、感慨に浸ることなんてできなかつたが、今は違う。こうして彼の顔を眺めながら、安息に身を委ねることがができる。

それは、なんて、

「幸せだな……」

布団の中の眩きに、トミーは聞き取れず、どうしたのと聞き返した。ラウラは目を動揺させたが、少し目を瞑ると、布団から口を出して

はつきりと告げた。

「――愛しているぞ、義弟よ」

トミーはドキリとした。

正直、胸がキュンとした。

ラウラは、トミーが言うとおりの魅力的だ。美少女と言っても過言ではない。

そんな少女から愛しているなどと言われれば、胸を熱くしない男がない訳がない。

しかし彼女は義弟と言った。つまりそれは家族愛なのだろう。そうトミーは思い至ると、多少の安心感と、幾ばくかのさみしさが去来した。

だが、返すべき言葉は見えなかった。

「僕も愛しているよ。義姉さん」

トミーの言葉に、ラウラは眩しそうに目を細めた。

布団を目深にかける中で、頬が朱色に染まっていた。

深く、熱っぽい溜息がこぼれて、じっとトミーの顔を見つめている。しかし安らぎは彼女のまぶたを重くした。

何度もまばたきして踏みとどまろうとするが、かつてない心の平和にいつの間にか意識が遠のいた。

間際に、

「おやすみ、トミヤ」

と消え入るような声をかけて、安らかな寝息をたてはじめた。

トミーはラウラがちゃんと寝付けたことを確認すると、ダンスからタオルケットを引き出して身体に包み、ラウラの眠るベットの横に身を持たれかけた。

元は研究室の冷たい部屋に、人の息遣いがする。トミーは一人暮らしでは得ることのできない暖かみを感じながら眠りに着いた。

◆ 五月末の夜は寒さも衰え、季節は春眠を二人に与えていた。

翌朝。

まだ朝日が顔を出していない、空が明るみ始めた時刻にラウラは起

こされた。

もの凄い寝起きの抵抗を見せたが、布団を引き剥がされると流石に朝冷えがして無理やり目覚めさせられた。

「どうしてこんな早くに起こすのだ……」

せつかくいい気持ちで眠っていたのに、とラウラは眠気眼でトミーを睨めつける。

トミーは、しようがないだろう、とあくびを噛みこころしながら言った。

「僕の部屋を出るところを誰かに見られるわけにはいかないんだから。不純異性交友を疑われて退学になっちゃうよ」

「なるほど。今度来るときはもつと夜の早い時間にするでしょう」

「素直なのは結構なんだけど、昨夜だけって言ってたよね」

「トミヤ、悪夢で苦しむ義姉を放っておいて、気持ちの良い朝日が拝めるのか」

「うわ、人の良心につけこんだ質の悪い脅迫だね」

「だから言っただろう、相部屋にしよう。それで万事解決だ」

「倫理的に解決しないんだけど」

「問題ない。IS学園はどの国の法律や規則にも縛られることがないのだからな」

「……織斑先生に相談しよう」

「冗談だ」

まったくもう、とトミーは苦笑しながら部屋を出た。辺りを見渡して、誰もいないことを確認してからラウラを部屋から連れ出した。

「それじゃあ、朝ごはんの時にまた会おう」

「ああ。これからはまた毎日一緒にいられるのだな」

「そうだね。早く学園に馴染みなよ。僕も力添えするからさ」

「別に、私はお前が居てくれれば十分だ」

「そんな恥ずかしいこと言わないで……。クラスメイトはみんな良い人なんだから」

「まあ、お前がそう言うのなら考えてやらんこともない」

相変わらずの照れ隠しを見せながら、ラウラは部屋を後にしよう

背を向けた。

だが、あ、と何かに気付いたのかその身をクルリと振り返る。

「忘れ物をしていた」

「忘れ物？」

「ああ。トミヤ、ちよつとかがんでくれ」

「なに——」

と、言いかけたトミーの口が塞がれた。

柔らかく、艶かしい感触が、不意にトミーの身体を硬直させる。

数瞬の後、彼の唇から離れたラウラが、紅潮した顔を反らして言った。

「一宿の礼だっ」

呆然と佇むトミーを尻目に、ラウラはその場所を走り去った。

彼女の遠ざかる背中を見つめながら、トミーは今起こったことを振り返って、

「~~~~っ!?!」

時間差で込み上げるものに襲われた。

口をパクパクさせながら、全身が火のように熱くなった。

とにかく頭を冷やそうと、部屋の中に駆け込んで流し台の水を頭からかぶった。

(べ、別にラウラとキスをするのは初めてじゃないしつ。大晦日の訓練ではそれ以上のことまで、……ってそうじゃなくてっ! あれは緊急事態の事だからノーカウントで、つまり今回が初めて、……ってそうでもなくてっ!?)

水がトミーの熱でお湯になって滴り落ちていきかねないほど、顔が真っ赤になっていた。

何度も顔をバシヤバシヤ洗って火照りを冷やそうとする。しかし、熱心が頭の中からはなかなかな離れない。

ラウラの香りと、唇の柔らかさと、伝わる温もりが、彼の中で化学反応を起こして燃焼しているようだった。

そんな煩惱と格闘しているところに、

ピピッ、ピピッ、ピピッ

と入り口の遅延警報機（デイレイ・アラーム）が鳴った。さつき部屋に入った時にドアを閉め忘れたのだろうか。まったく意識の外だったため覚えていない。

とりあえずアラームを止めようと顔を上げ、振り向くと、そこにいるはずのない人物がいた。

「……?!?」

トミーは幽霊に出会ったように驚いた。

金髪を後ろで結び、ランニングウェアを着た、セシリア・オルコツトが入口の前に立っていたのだ。

「せ、セシ、リア……。なん、で……」

鳴り響くアラーム音が嫌に鋭く、閉まるドアがやけにゆっくりに感じました。

ガチャン、と部屋が密室になると同時、セシリアが一步トミーへ進み出た。

外の明るさが遮られたせいか、セシリアの顔が異様に暗い。

「……トミーさん、わたくし、見てしまいましたの」

ゆっくり、ゆっくり、トミーのもとへにじり寄る。

「……ラウラさんが、トミーさんのお部屋から出てくるところを」

トミーは氷を背中に流されたように震え上がった。

部屋を出る際あたりを確認したはずだったが、

（ちゃんとコンタクトしとくんだった！）

視力矯正をしていないせいで見逃してしまったのだろう。

セシリアは歩みを止めずに言葉を続ける。

「……そして、ラウラさんが去り際に」

ゴクンツ！ とトミーの喉が鳴った。

冷や汗が滝のように流れ出る。

「……トミーさんと口づけを交わしているところを」

あ、これは死んだかも、とトミーは思った。

「……トミーさん、これはいったい——」

セシリアはトミーの目の前に到着した。

「どういふことなのでしよう？」

……結局、トミーは日課のジョギングにも、朝食の席に姿を表さなかつた。

S H R（ショートホームルーム）間際の時間に、げつそりとしたトミーとにこやかなセシリアが同時に教室へ到着した。

どうしたんだ、と尋ねる一夏に、

「何も聞かないでくれ……」

と重々しく返すトミーは奈落の底を見ているように下を向いていた。

セシリアは微笑みをたたえて、ごきげんよう、とクラスメイトと挨拶を交わしながら自分の席へ向かっている。

その姿に、ラウラの敵意の込めた視線が向けられていた。

XVII 三人寄ればの三人の内訳

ラウラとシャルルがIS学園に転入して来てから数日が経過した。当初から人当たりの良いシャルルはすでにクラスに溶け込み、女子高に現れた希少な男子ということもあって大いに持て囃されていた。それに有頂天になることもなく、物腰柔らかく誰とでも公平に接する姿は、まさに優等生らしいシャルルの性格を示している。

一方、ラウラはまだクラスメイトとの距離感が掴めないでいた。それでもトミーが間に入り、ラウラの言葉足らずを補うことで、彼女の不器用な素振りの下に隠れている天真な純粹さを理解してくれる生徒が、次第にはあるが現れてきていた。

しかし未だにラウラとセシリアとの間には冷戦状態が続いている。トミーの日課のジョギングにセシリアが参加するや、ラウラもさすが割って入り、ジョギングがランニングに、ランニングがマラソンになってしまった。ラウラとセシリアがデットヒートを繰り返したのだ。

流石にこれはマズイとトミーは注意したが、当初から一緒に走っていた相川清香が走りに対しての対抗心を燃やし、駅伝のトップランナーのように疾走して鍛錬の違いを見せつけた。

トミーは自分が発端でジョギングの調子を崩してしまったことを清香に謝ったが、

「専用機持ちに勝てたんだから、かえってトミーくんに感謝したいくらいだよ！」

と、さも嬉しそうに言いかけた。清香のスポーツマンらしいサツパリとした心意気が垣間見えた。

とはいえ、清香の理解に助けられはしたものの、このままで良いものではない。トミーはラウラとセシリアの仲を好転させるべく、どうしたものかと思案していた。といって、これという妙案がサツと浮かぶものでもない。

今、トミーがIS学園寮1025号室、つまり織斑一夏とシャルル・デユノアの部屋の前に立っているのは、とりもなおさずラウラとセシ

リアの事を相談したいからであった。

「二夏ー、シャルルー、部屋にいるー?」

ノックをして中に呼びかける。その手にはおにぎりを乗せた皿をラッピングして持っていた。

放課後のIS訓練の後、汗を流してから夕食で落ち合おうと交わしていたのだが、いくら待っても一夏とシャルルは顔を出さなかった。

IS操縦は全身運動のうえに頭も使うから余計に腹が減る。きつと二人共お腹を空かしているハズなのに。

(訓練の後、何かあったのかな?)

そう思っていると、中からドタバタという慌ただしい音が聞こえてきた。

「と、トミーか!? 悪い、少し待ってくれ!」

一夏の焦った声がする。

トミーは、どうしたんだろう、と疑問に思うが、了解して大人しく待っていた。

しばらくして、

「すまん、待たせちゃったな」

一夏が息を切らしてドアを開けた。

「どうしたの、一夏? 夕飯も取らないで。はい、差し入れ」

「おお、サンキュー、トミー! まあ入ってくれよ」

お邪魔します、とトミーは中に入る。部屋は普段と変わらない様子だが、

「ゴ、ゴホツ。こんばんわ、トミー」

シャルルが布団に入って横になっていた。

「え、シャルル風邪引いたの?」

「う、うん。シャワーを浴びた後に、ちよつとグラツとして……」

無理もない、とトミーは思った。

「転校して来てからこのかた、みんなからもみくちやで休む暇もなかったからね。疲れが溜まっていたのかもしれないよ」

「そ、そうかもね」

「一夏、シャルルをちゃんと労ってあげなよ?」

「お、おう。もちろんだとも」

何となく二人ともそわそわしているな、とトミーは疑問に感じた。ともあれ、シャルルは体調も優れないみたいだし、長居は無用だろうということにした。

おにぎりをテーブルに置いて、

「それじゃあ、ちよつと相談したいことがあったんだけど、シャルルもそんな状態だし、また今度来ることにするよ。ちゃんと休むんだよ、シャルル」

そう部屋を後にしようとしてドアに手をかけた。

すると一夏が、

「ああつ、待ってくれ、トミーー！」

「うん？」

「いや、なに。シャルルはともかく、俺は大丈夫だからさ。せつかく来たんだし、その相談事について聞かせてくれよ」

「でも……」

トミーは布団から顔だけ出してコツチを向いているシャルルを見遣った。

「僕のことなら気にしないで。そんなに悪くはないんだし」

「な？ シャルルもああ言っていることだし。それに、トミーが相談事だなんて滅多にないものなんだから、余計に心配しちまうぜ」
「そうだったかな？」

苦笑混じりに一夏に答えた。

トミーは一夏を信用している。しかし彼にあまり相談事を持ちかけないのは、その内容の多くが人間関係についてだからだ。

一夏は仲間たち満場一致の朴念仁だ。人の心のひだについて絶望的なまでに推し量れない。それにも関わらず一夏が多くの人に好かれるのは、彼の裏表の無いひたむきさと、時に見せる熱い男らしさに心を惹きつけられるからだろう。

トミーは正直シャルルメインで相談したかったが、こうなっては仕方ない。相手が一夏でも打ち明けて心の重しを下ろすことにした。

「実は、ラウラとセシリアについてなんだけど……」

◇

シャルルはベッドの中でトミーの相談事を聞いていた。ラウラとセシリアを仲良くさせたい。けれどどうすれば良いのかわからない。

(これは一夏には辛いお話だなあ……)

ルームメイトに失礼ながらシャルルはそう思った。実際に一夏は腕を組んでどうしたものかと悩んでいる。その頭から名案が閃くことは、ラクダが針の穴を通るよりも難しいだろう。

トミーも苦笑を浮かべつつ、

「まあ、おにぎりでも食べながらにしようよ」

と自身はキツチンに立ってコンロの火を着け、ヤカンに水を入れて沸かし始めた。棚にある緑茶パックを取り出し、湯呑みも人数分用意している。

緑茶パックはトミーが前に部屋へ来たとき置いていつてくれたものだった。日本が初めてだというシャルルと、お茶が好きな一夏のために調達してくれたのだという。

(ラウラとセシリアが気にするわけだね)

トミーのさり気ない気配りにそう思う。きっと二人とも、そのトミーの優しさを独占したいのだろう。彼が二人の仲を取り持とうとすればするほど、自分でない女性への配慮が気に喰わないのだ。

トミーは人間関係への気遣いには長けているが、女性への配慮という点ではまだまだ少年だなとシャルルは思った。

ところで、

「ねえ、トミー。君は、ラウラとセシリア、どっちが大事なんだい？」
我ながら意地悪な質問をぶつけてみた。

トミーは難しそうな顔を見せると思ったが。

「そんなの、両方大事に決まってるじゃないか」
事も無げにそう言った。

「でも、ラウラは君のお義姉さんなんでしょう？　だったら、普通家族を一番に……」

と、シャルルは言い終える前に言葉を途切らせた。

家族の方が大切じゃないか。そう言おうとした自分に自分が否定したのだ。なにせ、

(子供を見捨てる父親もいるのに、何を言ってるんだらう)

自分の身の上を振り返ってそう思った。

トミーはそんなことに気が付くはずもなく、ふんわりと返した。

「確かにラウラは僕の家族だよ。血の繋がりが無くてもそう思っている。でも、セシリアは前に僕が寝込んだ時に、付きっ切りで看病してくれたんだ」

シユー、とヤカンから蒸気が上がった。コンロの火を止めて緑茶パックの入った湯呑みに注ぐ。

「それだけじゃない。セシリアは、いつも僕のことを気にかけてくれている。でも、それは僕が、前にセシリアが言っていた知り合いに似ているからに過ぎないんだと思う」

お茶が染み渡るのを見るとパックを取り出し、湯呑みをお盆に載せて、まず一夏の元へと置いた。サンキュ、と一夏はおにぎりを頬張りながら手を上げている。

「けれど、僕はセシリアのその優しさを無下にしたくはないんだ。僕が彼女の知り合いの代わりでもかまわない。変な話かもしれないけど、看病してくれたことが、とても嬉しかったからかもね。はい、お茶」

トミーはベッド脇のサイドテーブルに運んでくれた。

「ありがとう」

シャルルはベッドの中から起き上がらずに、首をもたげて礼だけ述べた。

シャルルの近くへ来たとき、覗き込んだトミーの横顔には、切なさが少し浮かんでいるように見えた。

(誰かの代わりか……)

詳しくは知らないが、それはトミーの思い過ごしだろう。セシリアはトミーの事を昔から知っているふうだった。トミーとセシリアの間でどういうやり取りがあったかは分からない。

ともかく、今そのことを詮索する場面ではなかった。

「それじゃあさ」

お茶をすすって一息着いた一夏が言った。

「ラウラとセシリア、二人に告白してみたらどうだ？」

「……は？」

トミーが一時停止して目を丸くした。

シャルルもポーズボタンが押されたみたいになっている。

「俺はラウラが大切だ。そしてセシリアも大切だ。大切な人同士で喧嘩なんてしないでくれ、ってな感じでさ」

「いやあ、一夏、それで解決するような話じゃあ……」

「あると思うよ！」

シャルルが元気よくそう言った。

「名案だよ、一夏！ ラクダが針の穴を通ったね！」

「針の穴？」

「それは天国へ行く話の例えじゃあ……、ってそれはともかく、シャルルもなの？」

「僕もだよ！ むしろそれしかないと思う」

風邪だと言うことも気に留めず、シャルルはワクワクしながら、つまりね？ と説明しだした。

「ラウラとセシリアの仲が悪いのは、二人ともトミーと仲良くしたいのに、相手が邪魔して来ると思っているからなんだ。だから、トミーの方から二人のことを大切だって言ってあげたら、二人とも安心して仲違いも収まるはずだよ！」

「そ、そうかなあ……」

「そうだよ！ それに女の子って、いつもいろんな不安を抱えているんだ。今回の事だって、乙女の不安のなせる業だと思う。それをトミーが払拭して安心させてあげたら、きつと喜んでくれるはずだよ！」

トミーは瞠目してシャルルに返した。

「なんて言うか、流石シャルルだね。乙女心、っていうの？ そういうのにこんなに精通しているなんて」

「そりゃあそうさ。だって」

シャルルはベッドから身を持ち上げた。布団が身体から下にずれ下がる。

そこに、男性にあるはずの無い、胸元の膨らみが備わっていた。

「僕も、女の子なんだから」

◇

「うわあああ?」

と、トミーが驚きながら後ずさり、ベッドの足に引っ掛けて尻もちを着いた。

「お、おいトミー!」

「だ、大丈夫?」

一夏とシャルルがトミーに駆け寄る。しかしトミーはシャルルから離れるように身をよじった。

「えつ……、ええつ!!? ちよ、一夏つ! どういうことコレ!?! シャルルが女体化しちゃったよ!?!」

「落ち着け、トミー。シャルルは始めっから女の子だったんだよ」

「いやいやいや!?! だって普段から胸ぺったんこだったじゃんつ!

しかもフランスの代表候補生なんでしょ? 国家を上げて嘘つきはあり得ないよ!」

「それは、うん、僕もそう思う」

シャルルは済まなそうに頭を垂れた。

一夏はそんなシャルルの姿に、

(シャルルがそう畏まる必要ないのにな)

そう彼女の不憫に心を痛めた。

一夏がトミーを部屋へ留めたのは、頃合いを見て一夏からシャルルについて打ち明けようと思ったからだだった。

トミーには伝えておきたいと、一夏はシャルルに漏らしていた。と言っても、シャルルが女性だと知ったのはついさつき、放課後の訓練後にシャワーから上がった全裸のシャルルと鉢合わせてしまったせいなのだ。

(トミーになら、話しても大丈夫だ)

そう一夏は確信している。なぜかを聞かれれば、彼の感だ。あれ

これと詮索するより、一夏の直感がそう告げていた。それに女の園のIS学園で、二人だけ放り込まれた男子が持つ連帯感が育んだ信頼かもしれない。

「トミー、シャルルのことについて、聞いてくれないか」

トミーはコクコク頷いた。シャルルもうつむき加減になりながら、不安そうに一夏を見ている。

一夏は告げた。

シャルルが父の愛人の子供だということ、父親から疎まれていること、デュノア社の目論見で一夏のISを調べるために学園へ来たこと、そのためにわざわざ男装してまで偽っていること。

さつきシャルルから告白された一連の事情をトミーに伝えようと、妙な面持ちで言った。

「デュノア社のIS開発が進んでいないのは聞いていたけど……。アルベールさん、難しそうな人だったけど、そんなことをする人だったなんて」

「お父さんのこと、知ってるの？」

「一度、会ったことがある。もっとも、ほとんど会話を交わしたりはしなかったけどね」

「どこで？」

「前に開かれた、欧州連合の統合防衛計画（イグニツション・プラン）会議。といっても本会議ではなかったけど」

「トミー」

シャルルはトミーに身を乗り出した。同時に女性らしいふくよかな胸元がずいとトミーに近寄ってくる。ジャージ姿であるせいで余計に形も目立ち、ジッパーが喉の下まで開いているせいでその奥が覗けそうになっていた。

「君は、いったい君は何者なの？」

「いや、シャルル、近い、近いんだけど」

「ドイツ軍で、しかもデザインベイビーらしいラウラとは義姉弟だし、本物の男性なのにISを使えるし、しかも統合防衛計画（イグニツション・プラン）の会議席へ顔を出しているなんて、只者じゃないよ」

「そうだよな」

シャルルの真剣な問いに、一夏もかねてからの疑問を打ち明けた。「トミー、お前が国連関連企業に所属しているのは聞いている。薬品や肉体改造で無理にISへの適応力を備えたことも知っている。でも、それだけでそんな幅広い関わりを持てるはずはないだろう?」
今、シャルルの正体について聞かされた。今度はトミーについても、という流れにしたいようだった。

トミーは、

「別にそんなだいそれたものじゃないよ」

と前置きして、答えた。

「僕は国連関連企業に所属して、男性でもISもどきを使える。いろんな国の軍隊や防衛組織に顔を出して、そして有事の際は国連軍に真っ先に徴収される、つまり」

トミーの胸元にぶら下がる、リミテッド・ストラトスの待機状態のドッグタグが光った。

「僕は国連子飼いの私兵みたいなもんなのさ」

Extra 世界の中心の組織にて

「閣下、報告書をお持ちしました」

「閣下はよせ、と言ったハズだが」

「お立場が変わられても功績は変わりません。IS条約の締結に至る種々の取りまとめ、各国軍部との折衝、閣下なくして出来たものではありません」

「もう十年も昔のことだ。今は閑職の名ばかり機関長にすぎんよ」

「しかし、この組織で閣下のように長を務める男性は、もはや数えるほどに減ってしまいました。閣下はかねてより男女平等を謳い各国へ働きかけて来ましたのに、このような役不足なお立場を……」

「フェミニストと叩かれた時代が懐かしいものだ。しかし言っても詮無きことよ。で、どのような報告かね」

「某国から通達です。『エクスカリバーを備うるは我が国の悲願なり』。口利きの国もPKO活動の主張で横槍を出そうという姿勢」

「生体融合型IS兵器を聖剣に例えるとは無粋の極みだ。コアとされた少女を不憫と思う人の情はないものか」

「完全にIS条約違反です。議論の余地もありません」

「外交で外面を綺麗に見せるのはかの国の伝統だな。ところで助け出した少女は息災かね？」

「はい、つつがなく。No. 11038号付きのオペレーターにしてあります。彼との仲も順調だとか」

「年寄りが最も望むことは若者の幸せである。良きに計らってください」

「承知いたしました。ところで、某国への返答はいかががしますか」

「『諸君が聖剣と呼ぶものはクラレントなり』。口利きの国へは亡国機業の跳梁に備え軽虚妄道を慎むよう担当機関長を通して伝えてくれ」

「承知しました。しかしながら……」

「生ぬるい、と喚くだろうな。我が同心たちは」

「それぞれの持つ組織を使って力尽くの抗議をしようという有様です」

「心強いが、力不足だ。やめるように伝えよ」

「承りました」

「私の在任中は抑えるさ。後任は恐らく女性だろうが」

「そして男性のいない世界組織ですか。実にシニールです」

「君は若いからそう思うのだろう。私の祖父の代までは男性しかいなかったのだよ。そして父の代までは、肌の黒い者もいなかった」

「歴史は繰り返すのでしょうか」

「力を持つ者によって権威の在り処も変わってしまうものだ。強いということとはそれだけで価値があり、弱いということとは罪である」

「しかしながら、それでも解せないことがあります」

「言ってみたまえ」

「強さを求めるためとは言え、男性IS操縦者を作る計画は、本当に必要だったのでしょうか。結果を掴むまでに多くの犠牲を払ってしまいました」

「もし男性の誰もISを使えないとなれば、男性は弱者になってしまいうだろう。強者である女性は奢り、男性は蔑みの対象となる」

「No. 11038号は、弱者の抵抗の証だと?」

「かつて有色人種が白人と同じ席に座るためには相応の軍事力が必要だったのだ。私が各国のIS組織や会合に回ることはできたのは、彼という懐刀を得ることが出来たおかげだ。それに同心のおかげでドイツで訓練を受けさせられた」

「しかし、今は織斑一夏が現れました。フランスのシャルル・デュノアも男性IS操縦者だとか」

「そうだな。運良く男性も相応の力を持つ者が現れてくれた。これでパワーバランスも少しはマシになるだろう」

「力こそが正義、ですか……。私は、人類がそこまで落ちぶれたものではないと信じます」

「そうであって欲しいものだ。でなければ我が祖先たちが受けた屈辱の歴史もすべて無駄になってしまう」

「……………」

「……黒人の私が白人の君にこぼす愚痴では無かった。無礼を許してくれ」

「いえ。私の祖先も、安住の地無く迫害を受けた民族です。僭越ながら、お察しいたします」

「そうだったな……。では、わかるだろう。いかなる差別も、迫害も、人類の罪に他ならないことを」

「女性たちはその事を知っているのでしょうか」

「男性はそれに気づくまでに長い時間をかけてしまった。今はそうではないと願いたい」

「ですが今なお、女尊男卑を厭うあまり男尊女卑を再興させようという同心もおられます」

「彼の息子の結婚式には私も同席していた。あれを見ればそうもなるう」

「それほどまでに……」

「君にも妻子がいたな」

「はい。良き妻と、自慢の息子です」

「君の息子のために、No. 11038号の力を使うといい」

「！……承知しました」

「君は優しい。だが優しさは時として人を傷つける理由となる。愛ゆえに人は誰かを利用し、誰かを陥れてしまうのだ」

——世界中心の組織にて、ある一室より。

XVIIII 何をするかよりも誰がするか

「ねえ、一夏。まだ起きてる?」

IS学園寮1025号室。

すでに部屋の照明は消され、ベッドライトの淡い灯りが暗闇を照らしている。

その住人であるシャルルは、隣のベッドで横になっている同居人の一夏の背中に呼びかけた。

「ああ、起きてる」

返事はすぐに帰ってきた。

トミーが部屋を出ていってからしばらく経った後。もう夜も更けてきているというのに、シャルルも一夏も眠れないでいた。

シャルルはおずおずと問いかける。

「一夏は、本気なの?」

「本気だ」

「どうして?」

シャルルはベッドから起き上がって言った。

「僕はそこままでしてくれなんて言っていないよ。これは僕の、デュノア社の問題だ。一夏にもトミーにも関係ない」

「関係なくないさ」

一夏もベッドから起き上がり、心配そうな顔のシャルルに向かい合った。

「シャルルは俺達の仲間だ」

一夏の真っ直ぐな言葉に、少女は息を飲んだ。

「俺は仲間を守りたい。だからシャルル、俺はお前を守る。たとえ相手が千冬姉でも、逃げたりするもんか」

並の男性が言えば齒の浮くようなセリフだが、一夏の口から言われると不思議と胸に響く宣言だった。

その余韻に浸るように、シャルルは目尻を下げて頬を赤らめた。

「ありがとう、一夏……」

「トミーにも言っておいてくれよ。アイツはIS学園の学生最強の、生徒会長に立ち向かうんだから」

「うん、分かっている。……ふふ」

「どうしたんだよ、シャルル？ いきなり笑いだして」

「だって、一夏の向かう相手は元世界最強で、トミーの相手は学生最強。その目的は僕を助けてくれるため、だなんて。まるでお姫様にもなった気分だよ」

「確かにそうかもな。いわば、シャルル姫ってところか」

「……シャルロット」

「え？」

「僕の本当の名前は、シャルロット」

そう、少女は真実の自分を打ち明けた。

嘘にまみれたこんな自分を仲間と呼んでくれた少年に、もう隠すことはなにもない。

頼もしさと、嬉しさと、そして芽生えはじめた思いを胸に抱いて、シャルル、もといシャルロットは熱い眼差しを一夏に向けた。

「ねえ、呼んでくれるかな。僕の、……うん、私の名前を」

「……わかったよ。シャルロット」

一夏は手を差し伸べた。

「改めて、これからもよろしくな。シャルロット」

「——うん、うん！ こちらこそよろしくね、一夏！」

シャルロットは、差し出された手に縋り付くように両手で握り締めた。その掴んだ手に身を寄せ、顔を近づけて、確かに繋がれた二人の絆に、瞳を潤ませた笑顔で見つめ続けていた。

◆ 翌日。IS学園、生徒会室。

その立派な両開きのドアを開けて現れた生徒会長、更織楯無は、座っていた客席から立ち上がるトミーに笑顔で手を振った。

「は〜い♪ 遅れちゃってゴメンナサイね。トミー君からお誘いを受けるなんて初めてなものだから、準備に手間取っちゃった」

心なしか、いつもよりも肌や髪の手入れが行き届いており、普段と

変わらない学制服も新品のように綺麗に手入れされていた。

しかしトミーはそこには触れずに、

「お手間を取らせてしまつてすみません」

と丁寧に頭を下げた。

「んも、固い固い！ そんなに肩肘張つたアプローチじゃあ、おねーさんも緊張しちゃうでしょ」

ケタケタと笑いながら、トミーの目の前のテーブルに腰掛けた。半身を向ける距離は手を伸ばせば届くほどに近い。

いかにも無遠慮な行儀だが、彼女とそれなりの付き合いがあるトミーはさほど気にした素振りも見せなかった。

「あら？ これは……」

座るテーブルに、二つの物が置かれていた。生徒手帳と紙封筒だ。トミーはそれを楯無の近く、自分と楯無との間にスライドさせた。

「今回は、折り入つてご相談がありました」

微笑を浮かべながら、真剣な目でそう告げる。

楯無はつまらなそうにムスツと唇を尖らせた。

「だからって、こういうやり方はどうかと思うな。生徒手帳は退学覚悟、その封筒の中身は小切手かしら？ おねーさん、そんな安っぽいオナナに思われちゃうなんて、心外だな」

「楯無さんのことは信頼しますよ」

楯無は横目でチラリとトミーの顔を覗き込む。彼女の人相見によれば、嘘はついていないようだと思った。

「ただ、あんまり頼りすぎるのもどうかと思ひまして。これは自分なりの誠意のつもりです。その封筒はどうかお受けとり下さい」

「まずは話を聞いてからにしましょう。だいたい、トミーくんには色々とお願ひ事を聞いてもらつているんだもの、大抵のことは応えてあげるつもりよ」

「ありがとうございます」

トミーは小さく頭を下げた。

(もう、本当に気立ての良い子なんだから)

楯無は内心そうつぶやいた。

トミーは亡国機業（フロントム・タスク）と繋がりがあるかもしれないという、楯無の右腕である布仏虚の指摘から、彼の行動にはそれとなく注意を払っていた。

彼が生徒会に入っていないにも関わらず、様々なお役目を言いつけているのも、近くで泳がせて様子を見るためだった。

しかし、これといった素振りは楯無の目をしても全く無い。むしろ、買物を頼めば差入れを用意してくれるし、書類整理を頼めば誤字や書類順を訂正してくれるし、部活動への連絡を頼めば要望や揉め事などを事細かく教えてくれるなど、実に精力的に活動してくれる。

だから、彼に何か要求があれば、よっぽと無理な話でもない限り、楯無としては叶えるつもりでいた。

「実は……」

トミーは少し躊躇いがちに話しだした。

「同級生の、シャルル・デュノアについての事なんです」

◇

「なるほどね。シャルルくんはシャルルちゃんだったのか」

トミーの話聞いて、楯無は携帯している扇を開いて口元を隠した。扇には『思案』という二文字が書かれている。

彼のお願い事とは、要は性別を偽って入学して来たシャルルを、学園側としては退学させないようにして欲しいというものだった。

シャルル・デュノアはフランスの代表候補生だ。それが性別詐称をしていたとなれば国家の体裁として問題だし、国としてIS学園に送っていたとなれば強制退学も考えられる。

しかし、IS学園はこの国や組織、団体にも属さず、また生徒本人の同意がない限り外的介入は原則として許可されない。つまり、フランスがシャルルを退学させようとしても、本人の同意がなければ彼女はIS学園に残ることができるという訳だ。

とは言っても、デュノア社に面目を潰されたフランスとしては何かしらの行動を取るかもしれないし、またそれがIS学園へのあてつけとなれば、生徒会長や教師へも波紋が広がりがねないだろう。そうなれば学園内でシャルルを退学させようという動きが出てもおかしく

はない。

(それでも、トミーくんはシャルルちゃんを守ろうとしている)

それが一時しのぎで根本的な解決でないのは百も承知だろう。だが、悲しい経緯のある彼女をむぎむぎと学園から追い出すことを、彼には見過ごすことが出来ないのだ。

(まあ、トミーくんならそうするでしょうね)

それにしても、と楯無は思う。

「ねえトミーくん、あなたがここまでしてお願いしなくとも、おねーさんはシャルルちゃんを守るわよ？　生徒会長だもの、生徒を守るのは当然じゃない」

暗に、見くびらないでよね、と言ってみた。

するとトミーは首を振って答えた。

「楯無さんならそう言うと思います。けど、それだけではダメなんです。なぜなら、シャルルはフランスの代表候補生として入学してきたからです」

「どういうことかしら？」

「楯無さんは生徒会長であると共に、ロシアの国家代表です。そうであるならば、おいそれとフランスの要望を無下には出来ないでしょう。ロシアとフランスは昔から仲が良いですから、ロシアからの横槍が入らないとも限りません」

ですので、とトミーは続ける。

「落としていこうが必要なんです。最悪の場合に責任を負わせる落としていこう。それで、シャルルは男性と偽って入学して来た訳ですから、こういう理屈を立てようと思うんです。つまり、男性IS操縦者がシャルルを逃さなかった、という」

「あなた、まさか……」

はい、とトミーは胸に手を当てて言った。

「男性のISもどき操縦者である一(にのまえ)十三八(とみや)が、シャルル・デュノアを男性側に引き入れ学園から逃さなかった。そういうことにすれば、シャルルにも楯無さんにも害は及びません」

「ちよ、ちよつと待ってトミーくん！　あなたはそれで良くて、同じ

男性の一夏くんや君のスポンサーはどうするのよ?」

「一夏は別に織斑先生への説得にあたっています。僕がこんなふうに動いている事を一夏は知りませんので、僕の独断の暗躍と銘打ちます。また、僕のスポンサーは男性の復権を望んでいますから、うまく収まればよし、失敗したら僕を切り捨てるだけの話です」

なるほどね、と楯無は目を細くした。

「そうすれば一夏くんも君のスポンサーも巻き込まれない。シャルルちゃんがトミーくんのせいで学園に残らされたという名分の責任は、トミーくん自身にしか被らない。そういうことね」

「ご理解が早くて助かります」

パンツ、とトミーの頬をはたいた音が響いた。

「あなたにいったい自分自身を何だと思っているのっ! それで一夏くんやシャルルちゃんが喜ぶでも思っているの!?! そんな自己犠牲的な理屈、私が受け入れる訳がないでしょう!」

楯無の激高を、トミーは涼しげに受け止めた。

「あくまで最悪の場合の話です。ひよつとしたらフランスは大人しくするかもしれませんが。でも、もし万が一すべてが悪い方向へ転がったら、そのようにして欲しいんです」

「どうして? 理由を説明しなさい」

「僕が世間から嫌われていることを知っているでしょう?」

トミーはぎこちない微笑を浮べた。

そこには楯無がトミーの身を案じる優しさへの嬉しさと、自分自身への虚しさが混在しているようだった。

「一夏は男性の英雄、楯無さんはロシアの英雄です。その名誉はいつか来るべき機会のために残しておくべきだと思っんです。スケープゴートは薄汚れた一匹でいい」

「シャルルちゃんは泣くでしょうね。あなたがそんなことをすると聞いたなら」

「もう泣いていましたよ。家族から見放され、祖国を偽った悲嘆から。それを救ってあげられるのは、社会的な名声がある者しかいない」

「……一夏くんね」

「そうです」

トミーは力強く頷いた。

「僕にはシャルルを救えない。もし手を差し伸べたら、嫌われ者同士です、世間はそれを叩くでしょう。だから一夏がシャルルを救うのを、裏側からしつかりとサポートしようと思うんです。僕の大切な友達ですから」

「バカね……」

楯無はそのため息を着いた。

それではあまりにも彼が不憫だと思った。

しかし彼の言うことは正しい。ロシア代表である楯無の立場と、一夏の名声をしつかりと汲んでいる。そしてトミー自身の立ち位置を、悲しいほどに利用している。最悪の流れになっても、ほぼ間違いなく切り抜けられる。

(悪名も名声のうち、か)

フランスがシャルルを退学させようと悪意を持って暗躍してきたら、一(にのまえ)十三八(とみや)が頑としてはねつけたことにする。たとえ物事が暗礁に乗り上げても、責任は彼が被るとなれば、世間は喜々として再び彼を非難し、ISを汚さないようにLSをなじつて事を収めようとするだろう。

仮に物事が及び腰に進んだとしたら、男性IS操縦者である織斑一夏が仲間を見捨てなかったと公表する。そうすればフランスや世間は一夏の名声を利用して一気に解決しようとするだろう。

(一夏くんが陽で、トミーくんが陰。男性IS操縦者と、男性LS操縦者だからこそできること)

楯無は、深いため息をつきながら沈み込んで、答えを告げようと口を開いた。

とその時、生徒会室のドアがノックもなしに勢い良く開いた。

「すみませんっ！ 楯無さんいますかっ!？」

飛び込んで来たのは、IS学園のアーリーナを管理する整備科の生徒だった。

急ぎ駆けつけて来たのだろう、肩で息をしている。

「あのっ、第三アリーナで、一年生のセシリアさんとラウラさんがっ。模擬戦と称して、決闘をつ！」

「何ですって!?!」

聞くや、トミーは直ぐに動き出した。生徒会室を出る手前で、首だけ振り向いて断りを入れる。

「すみませんっ、僕、行きます！ 楯無さん、お返事はまた今度に！」
言うなり、風のように駆け消えた。

廊下を走らないっ、と注意を入れる場面でもない。ともかく自分も向かわねば、と楯無もテーブルから立ち上がった。

「教えてくれてありがとう。私もすぐ行くから、安心してちょうだい」
「はいっ。でも、トミーくんお返事は今度につて……。あら、その封筒は？」

「あ、これ？」

「あ、ま、まさか、トミーくん楯無さんに……。し、失礼しましたっ！」

何を思ったのか、整備科の生徒は頬を赤らめて逃げるように去っていった。

楯無は、あちゃあ、と苦笑する。

「今の、絶対勘違いしちゃってるわよねえ」

まあいいか、と楯無は思った。

「やっぱりトミーくんって、守ってあげたくなる子だもの」

もし彼を自分の近くに置けるなら、きつと安心するし便利だし、それに面白いことにもなりそうだ。

そう楯無は微笑むと、トミーの後を歩き出した。

その手にある彼の生徒手帳と封筒にキスをして、しっかりと胸元にしまい込んだ。

XIX 少女は少年の背中に虹を見た

セシリアは肩で息をしていた。

自身の駆るIS【ブルー・ティアーズ】の武器、67口径レーザーライフル『スターライトMKⅢ』を持つ腕が震えている。自分の身長を超える長大な銃身は、機動性の高い相手に対してはいかにも取り回しが悪く、既に腕の筋肉が限界に近くなっていた。

「どうした？ 銃口がブレているぞ」

対戦相手であるラウラ・ボーデヴィツヒが、嘲笑しながら自身の武器『大口径リボルバーカノン』を連射する。

セシリアは回避機動を描いてかわそうとするが、相手の放つ88m砲弾には近接信管がついているのだろう、セシリアの周囲で次々と炸裂する。まるで花火の中を掻い潜って飛ぶようなものだった。それでもセシリアは歯を食いしばりながら突破する。

「この距離なら！」

十分に間合いを取ったと判断したセシリアは、反転、翼のようなアンロック・ユニットを展開し、向きを変えてその銃口をラウラのIS【シュヴァルツェア・レーゲン】に振り返った。

自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』。IS機体の名前と同じ武装は、機体から離れ操縦者の指示のもと遠隔射撃を行うことができる。

セシリア自身も『スターライトMKⅢ』を構え直し、全五門の一斉射撃を放った。

「容易いな」

ラウラはその弾幕の中を難なく突き進む。セシリアの武装が非実体弾主体であることを見越しての機動である。ラウラの砲弾のように近接信管による炸裂がないため、射線から逸れさえすれば遮るものは何もない。

そしてラウラには射線を読んで回避することなど造作もなかった。その目は、いつもは眼帯で隠された左目が開放され、金色の輝きをおびている。

「わかるかつ、この眼帯を外す意味が！」

ラウラの「シユヴァルツエア・レーゲン」から四本のワイヤーブレードが放たれる。セシリアへではなく、『ブルー・ティアーズ』のユニットに対してだ。越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）を発動させたラウラには、セシリアの攻撃も『ブルー・ティアーズ』の動きも手に取る用に見ることができた。

セシリアはユニットを回避させようとするが、ラウラの『リボルバーカノン』がこちらを向いている。ユニットの遠隔操作と自分の行動を同時にできないセシリアは、『ブルー・ティアーズ』を回避させれば自分が撃たれ、自分が回避すれば『ブルー・ティアーズ』が撃たれるという、将棋で言えば王手飛車取りの状態に瀕した。

止むなく王将たるセシリア自身が離脱し、『ブルー・ティアーズ』が全滅した。

「見敵必殺の決意であり、私が出来損ないであることの証明だ！」

ラウラは距離を取ろうとするセシリアに向けて瞬時加速（イグニッション・ブースト）で追いつき、『リボルバーカノン』が露払いと火を吹いた。

セシリアはまたも逃げ回る事になるが、ラウラは先程のセシリアの機動から把握した予測進路に砲弾を撃ち込み、

「キヤアアアッ!!」

遂にセシリアの機体を捉えた。

「ブルー・ティアーズ」のシールドゲージが大きく削られ、絶対防御が守りきれない衝撃がセシリアを襲う。それでも、きりもみし墜落しかけた「ブルー・ティアーズ」を持ち直させたのは、セシリアが諦めていない証拠だった。

「この金色の目のせいだ、私はIS操縦者として遅れを取り、部隊内から嘲笑と侮蔑を受けた！」

叫びながら、ラウラは『ワイヤーブレード』をセシリアに放った。今しがたの直撃で動きを鈍らせたセシリアには回避できようはずもなく、それでも二本を避けきり一本を『スターライトMKⅢ』を犠牲にして受け止めたが、最後の一本に絡め取られた。

「だが、トミヤは私を見捨てなかつた！ 私たちは落ちこぼれコンビ

と後ろ指を刺されながらも、励まし合って高めあつた！　そして共に織斑教官の教えを学び、バカにした連中の鼻を明かした！」

ワイヤーを手繰り寄せたラウラは、獲物のセシリアの首を掴み上げた。シールドバリアがその身を守るも、ギリギリと締め付ける握力はセシリアに苦渋を味合わせる。

「そんなトミヤを誑かすお前などに、私は絶対に負けない……！」
憎しみで血走ったラウラの目が、苦しみもがくセシリアを睨みつける。

そこに嗜虐心が頭をよぎったせいとか、本来ならしないミスを犯した。セシリアが後ろ手で背中に呼び出したショートブレード『インターセプター』に気付かず、その斬撃をかわしきれなかったのだ。

「チッ！」

腕を切られたせいでシールドゲージを削られ、間合いを取るラウラだが、既に戦闘の情勢は決している。

セシリアの武装は見た目には『インターセプター』一振りしか残っておらず、シールドゲージもカツカツで、蒼を基調とした『ブルー・ティアーズ』の機体は砲撃によって痛めつけられていた。

にも関わらず、セシリアの目は決して諦めてなどいなかった。

「わたくしは、トミーさんを誑かしてなどいません……！　大切な人に、そんなマネは致しませんわっ！」

ラウラは鼻で笑いながら言った。

「ほう？　ではあの朝、お前とトミヤが遅れて来た日は何をしていた？　お前がやけにニヤついでいて、トミヤがくたびれていたあの朝だ」

「あれはっ、貴方がトミーさんの部屋から朝帰りするからでしょう！　わたくしはそれを見かけて問い詰めただけです。眠るのが怖いなどトミーさんに頼り、あまつさえベッドを奪うだなんて、はしたないとは思いませんのっ!？」

「義姉が義弟と一緒にいて何が悪い？　ああ、それにしても暖かいベッドだったな。トミヤの温もりが残っていてなあ。思わず愛していると口に出してしまつた」

「ッ!!」

セシリアは堪えきれずに『インターセプター』による刺突を放った。それに対してラウラは両腕を振りかざし『プラズマ手刀』で受け止め、二人の顔の間近で火花を散らした。

その中で、ラウラはセシリアを嘲笑うように言う。

「トミヤも愛していると答えてくれたよ」

「お黙りなさいっ!」

「それに、あの朝のキスは格別だった」

「だ……ま、れええええっ!!」

セシリアはアンロック・ユニットの最後の二つをラウラにぶつけた。それも自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』の一部だった。実体弾であるそれはほとんど自爆に近い位置で炸裂し、ラウラとセシリアを吹き飛ばした。

爆煙から逃れたラウラは憎らしげに毒づく。

「クソッ、まだこんなものがあつたとは!」

体制を立て直し『リボルバーカノン』を構えるラウラは、一方のセシリアが仰向けのまま墜落していくのを見て、この戦いの結果を確信した。

「勝った……!」

ラウラはその感慨を噛みしめながら、堕ちていくセシリアを見下ろした。

◇

「飛んで……! 飛びなさい! 『ブルー・ティアーズ』!」

セシリアはもがいた。しかし『ブルー・ティアーズ』は応えない。

ISを空へ飛ばすPIC（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）は度重なるダメージでイカれたのだろう。

背中に広がっていた『ブルー・ティアーズ』をすべて失い堕ちていく姿は、まるで翼を失った天使のようにも見えた。

（もうダメですわ……）

彼女の脳裏で諦めの言葉がよぎった。

（愛の告白をされて、キスまで交わしているのに、今さら何ができます

の)

セシリアの意図しない考えが頭の中で駆け巡る。

「イヤだ……」

口で懸命に払拭しようとするも、脳内で流れる言葉が止まらない。

(諦めましょう?)

「イヤだ……!」

(幼い頃の事など覚えておられないのですよ?)

「イヤだ、黙りなさい!」

(これ以上頑張っても虚しいだけですわ。だって……)

「やめて! 聞きたくないっ!」

(彼にはもう愛するお方がいらっしやるのだから)

「——!!」

言葉にならない絶叫と共に、セシリアは地面に墜落した。

残るシールドゲージを使い切り、絶対防御がセシリアの身体を守る。

しかし内部からの、心の中からの衝撃には何の備えもできなかった。

地面の上で仰向けに見上げる空はどんよりと曇っていて、自分を見下ろしながら降りてくるラウラの顔が憎らしいほどに綻んでいた。

涙がとめどなく頬を流れる。悔しさと、切なさと、虚脱感で指の一本も動かせなかった。

「……………あ……」

地面に降り立ったラウラの『リボルバーカノン』がコチラを向いている。トドメを刺すのだろう。完全に勝利を得るために、セシリアの心を撃ち壊すために。

「終わりだ」

ラウラの宣言と共に砲弾が放たれた。

もはやセシリアには避けることも動くこともかなわなかった。

彼女のすべてが敗北を受け入れかけていた。

その時——

セシリアの前に鉛色の影が躍り出た。

その巨体は彼女の視界を遮るほどに大きく、備える異形の四脚は飛び込んできた勢いをグラウンドに爪痕を残して無理矢理に抑え込み、彼女の前でドリフトして身体を回転させながら手にする剣銃を振り抜いた。ラウラの放った88mm『大口徑リボルバーカノン』の砲弾を切り払った火花が周囲に散華する。

その一瞬の煌めきを、その背中を、セシリアは見た。

セシリアの目には虹色の光彩をおびてスローモーションのようにゆっくりと流れていた。

聖剣のように輝く剣銃を持つ大きく逞しい背中が、彼方で炸裂する88mm砲弾の閃光が映し出すその横顔が、まぎれもなく彼であると知ったとき、

（ああ――）

自分は、勝利したのだ。

そうセシリアは確信した。

彼は、恋する人は、自分を選んでくれた。

ラウラではなくこの、セシリア・オルコットの前に立ってくれた。

彼は、騎士が後ろに庇う姫君を気遣うように、顔だけ振り返りながら問いかけた。

「大丈夫かい、セシリアっ!？」

はい、と答えようとする口元が震える。

瞳から溢れ出すものが止まらず、視界がぐしゃぐしゃになりながらも、彼女の耳は確かにトミーが自分の名前を呼ぶ声を聞いた。

◇

セシリアの前に立ちほだかったトミーは、LS【グレイ・アイディール】の巨体を構え直しながらラウラに向かい合った。

ラウラの表情は目を剥いて驚愕を浮かべている。その左目に眼帯が無く、金色の瞳が踵になつてのこととめたトミーは、ラウラが自身のコンプレックスを飲み込んで相対するほど、本気でセシリアにぶつかっていたことを悟った。

何が彼女をそうまでさせたのか、トミーには分からなかったが、ひとまず矛を収めるよう呼びかけた。

「ラウラ、もう勝負はついたよ。君の勝ちだ」

呼ばれたラウラは、あ、ああ。と目を瞬かせて頷き返した。

「そうだ、私はセシリア・オルコットに勝ったのだ。だが、まだトドメを刺していない。後顧の憂いのないように、トミヤ、そこをどいてくれないか」

「イヤだ」

トミーは手にする剣銃『グローリー・シーカー』を真横に向けて言った。

それは相手を通さないという意味を示していた。

「ラウラ、ここは戦場じゃない。それにセシリアも敵じゃない。もう模擬戦の決着は着いたんだ。トドメを指す必要はどこにも無い」

「そんなことはないっ！」

ラウラは叫ぶように言った。

「その女はお前を誑かしていたんだぞ!? ここで悪縁を切って置かなければ、またお前がその女の毒牙に噛まれなくても限らないっ！」

「そんな、言い過ぎだよラウラ! セシリアは僕の大切な友達だ。誑かされたり酷いことをされた事なんて一度もない!」

「嘘だっ! 騙されているんだ、お前は!」

ラウラが必死に呼びかけてくる様に、トミーは半ば混乱していた。ラウラのこんな姿を見るのははじめてだったからだ。

「ラウラ、いったいどうしたの? 戦いや物事に向き合うときは先入観を捨てろって、いつも僕に言っていたじゃないか。そんな姿、普段のラウラらしくないよ。いったいセシリアの何が気に食わないの?」

なだめるようなトミーの落ち着いた口調に、ラウラはトミーから視線を反らし、うつむき加減に言った。

「……うるさい」

「え?」

「うるさいと言ったんだっ!!」

悲鳴のような叫びだった。

「お前は私の義弟だろう? だったら義姉である私の言う事を聞いていればいいんだ! 織斑教官だって、弟は姉のものだと言っていた

じゃないか！ お前は私のものだ、私だけを見てくれていればいいんだっ！ そんな女に愛想を振りまく必要なんでありはしないんだっ！！」

限界を超えた声量の叫びだったのか、ラウラは言い終えたあと少し咳き込んだ。

息を整え、トミーに向き直ったラウラの目には涙が溜まっている。その表情は孤独に怯えているようでもあった。

「ラウラ……」

「どいてくれ、トミヤ。お前を、撃ちたくない」

「シュヴァルツェア・レーゲン」の『大口径リボルバーカノン』の砲口が、トミー越しにセシリアを向いている。もしトミーがどけば間違いないで放たれるだろう。

トミーは、もはやラウラに説得の余地が無いように感じた。ラウラの言っている話も、理由も、幼い彼には理解出来なかった。

「分かったよ、ラウラ」

その言葉に、ラウラの顔には安堵と、セシリアの顔には絶望が映った。

「そこまで言うのなら、もう、しょうがない……！」

ラウラとセシリアの反応に構わず、トミーは「グレイ・アイデール」の巨大な下半身の四脚を広げ、後ろに跳躍した。ちょうどセシリアの頭上に覆い被さるような格好になった。

すると、節足動物のようだった四脚が真っ直ぐに直立し、アンカーが撃ち込まれたのか金属音と共に地面が揺れた。

セシリアは、自分を取り囲み屹立する柱のようなそれと、覆い被さる「グレイ・アイデール」が屋根のように見えて、かつてイギリスの自宅で『彼』と遊んだ西洋風東屋（ガゼボ）を思い出した。

その「グレイ・アイデール」が作ったガゼボが歌う。柱の中央、普段なら関節部分である部位に埋め込まれていた銀色の宝石のような零型のパーツが、聖堂で奏でられる音響じみた音を立てて輝き出したのだ。放たれる四つの光は幾重にも屈折して、ガゼボを護るように煌めいている。

その光景を、ラウラは知っていた。かつてラウラもあの輝くガゼボの中に護られた事があるからだ。それは「グレイ・アイデール」の能力の一つ、飛べないLSの辿り着いた一つの答え。

「拠点防衛兵装（フォートレス・ガジェット）……！」

対象を強力なISのシールドと絶望防御を以て守り抜く防衛兵装。それは地上のいかなる防御シールドよりも優れた最強の盾だった。

その拠点防衛兵装（フォートレス・ガジェット）の前に、「グレイ・アイデール」の下半身から分離したトミーが降り立った。剣銃『グロリー・シーカー』を手に持ち、まるで聖堂を護る衛兵の如く、ラウラの前に立ち塞がった。

「トミヤ、お前はそこまでして……！　そうまでしてその女を守るのか!?!」

トミーは応えなかった。

もはや説得の機会を逸してしまったと判断したからだ。

ただ、かつてセシリアにそうしたように剣札を捧げ、その剣先の砲口をラウラに向けてみせた。

「……いいだろう、非行に走ってしまった義弟を正すのは義姉の務めだ！」

悲痛に顔を歪めながらラウラは叫び、瞬時加速（イグニッション・ブースト）をもって突撃する。

「シュヴァルツェア・レーゲン」の『プラズマ手刀』と、「グレイ・アイデール」の『グロリー・シーカー』が真っ向からぶつかり合った。

XX 雨が降ったあとすぐはぬかるみ

セシリアは自分を守る拠点防衛兵装（フォートレス・ガジェット）の一柱に身を持たれかけた。

ラウラとの戦いで薄汚れ、疲労困憊の彼女の頭上で輝くフォートレス・ガジェットの護光は優しくも美しい。多くのきらびやかな宝石や装飾を目にしたセシリアをして、その眩さにため息を着かせた。

その光の向こう、幾太刀も刃を交え繰り広げられる戦いを見遣る。ラウラの「シユヴァルツエア・レーゲン」の『プラズマ手刀』は二刀流で、トミーの「グレイ・アイデール」は『グローリー・シーカー』の一刀を八相の構えで持ち向かい合っていた。

「トミーさん……」

セシリアはその戦いを見届ける責任があると感じていた。

これは自分とラウラの戦いだ。互いに譲ることのできない想いのためにぶつかってしまった、避けられない一戦なのだ。

それを、彼は止めに來てくれた。それも自分を庇って、こんな配慮までしてくれて。「グレイ・アイデール」の装備の大部分を占める下半身と分離するなど、不利にならないはずがないものを。

「ラウラさん……」

彼女の戦いに臨む精悍な顔つきの中に、どこか苦しんでいるような目の色が覗かれた。

先程までの話を受け入れるまではいかずとも、彼への想いの強さはセシリアにもよく感じられた。

だからこそ、こうしてトミーと戦うことになった彼女胸の内を、セシリアにも察しないわけにはいかなかった。

それに今、こうしてトミーと剣を向けあっているということは、ラウラはあえて空を飛んでいないということだ。飛べないLSと同じ舞台に立つその姿勢には、きつとラウラなりの尋常の思いがあるのだろう。

「わたくしも、あの場所にいたいですわ……」

ああ、とため息を着くように悲嘆が溢れる。

(もつと強くなりたい)

彼と共に立ち、ラウラと互角に戦える強さを。トミーに守られてばかりでなく、ラウラの想いにも比肩する、そんな強さが自分にもあれば……。

「ねえ、『ブルー・ティアーズ』。どうか、私の力になってくださいまし」
自分の肩を抱くようにして、自身のISに語りかけた。

すべての武器をなくした今の「ブルー・ティアーズ」に、応える力など残っているはずがない。なのに、セシリアの頭にあるヘアバンドのコアが、エメラルドグリーン之光を明滅させた。力のない光だったが、彼女の願いを受け止めてくれたようにセシリアには感じた。

(ありがとう……。頑張りましょう、『ブルー・ティアーズ』)

決意を胸に、キツと顔を上げて戦いに向き直った。

「……あらっ？」

ふと、戦場に戻したその視界の中で、トミーの背中が煤けていくように見えた。だんだんと、その黒みが増していく。

「まさか……!」

セシリアの背中を冷たいものが流れた。その黒く変色していく姿を、以前にも見たことがあるからだ。

あれは、屋内IS訓練場で鈴との練習試合の時に起きた、セシリアにとって最悪の出来事。

「ダメです！ トミーさんっ!!」

セシリアが叫ぶと同時、黒化したトミーがラウラを切りつけた。

◇

トミーの得物が黒く変色し、形状も刀のそれになったナニカがラウラの『プラズマ手刀』を切り払う。

「これはっ……!?!」

ラウラは大きく後ろへ飛び退いた。文字通り、PIC（パッシブ・イナーシャル・キャンセラー）を使った飛行を伴う高速離脱だ。

なのに、トミーはそれへ追いつがる。全身を黒で覆い、IS装甲が別の形に変わってゆく。その顔すらも漆黒の仮面で覆われていった。

トミーは恐ろしい速さで黒刀の間合いに詰め寄ると電光の如き一

閃を振るった。

「ぐうッ……!」

かろうじて左腕の『プラズマ手刀』が間に合ったが、受けると同時に切り裂かれて量子化していった。それに「シュヴァルツエア・レーゲン」のシールドゲージも減っている。

トミーの装いの形状と、その不可思議な強さに対峙して、ラウラは目の前で起きた事が何であるか確信した。

「VT（ヴァルキリー・トレース）システムっ!？」

それは何か衝撃を受けたり戦闘不能の状態から誤作動（エラー）で起きたようなものではない。

トミーが、自分の意思で解き放った正真正銘のVTシステム。

世界最強の称号であるブリュンヒルデのIS【暮桜】もどき。

「やめろっ、トミヤー!」

ラウラの静止の声が叫ばれる。

「この戦いは、お前がそうまでしなければいけないものなのか？ 私
の声はもうお前の耳に届かないのか!？」

「僕はっ!」

黒い仮面の中からこもった声がする。

「ラウラを止めなくちゃならないんだ!」

トミーの左足が踏み込まれた。

「オオアアッ!!」

気合と共に連撃が繰り出される。

何合も打ち合わずに、残る右手の『プラズマ手刀』も切り捨てられた。

「そんなことっ……!」

ラウラは全速力で空へと逃げた。だが、ただ真っ直ぐ逃げるだけではあの最強もどきは振り切れない。跳躍だけでも追いついてくるだろう。

ならばと『ワイヤーブレード』を四機全出させてトミーの機先を制そうとした。

しかしあろうことか、トミーはそのワイヤーを掴み上げた。

「バカなっ!?!」

しかもワイヤーを手繰って飛び下がるラウラへ肉薄して来る。彼の左腕がラウラを掴むと同時に、右手で振るった黒刀がすべてのワイヤーを切り払った。

(これが、織斑教官の……! 世界最強の片鱗だというのか!)

恩師の実力を身を持って再認識すると共に、この脅威にどう対処するか思考を回転させた。もはやトミーに対する容赦どころの話ではない。彼は反則技に手を出して来たのだから。

こうも近づかれては『リボルバーカノン』は使えない、接近戦装備は破壊されている、なんとか振り払わなければならない、相手は空を飛べないのだ、間合いを取ればコチラの勝ちだ!

「ハアアアア!!」

ラウラは「シユヴァルツエア・レーゲン」をバレルロールさせながら無茶苦茶な機動をとりだした。言うまでもなくトミーを振り落とすためである。これで離れなければ本当にバケモノだ。

しかし、相手はあのブリュンヒルデもどき。

「グッ!?!」

ラウラは突然機体が制御不能に陥ったことを認識した。トミーに何をどうされたのか分からないが、気がつくのと黒刀がきらめき「シユヴァルツエア・レーゲン」の装甲やシールドゲージがゴツソリ削り落とされていた。

同時に、飛行能力すらも破壊されたのか、減速できずきりもみ状態でまっしぐらに墜落する。

「バケモノがあああ!?!」

墮ちる寸前、トミーがラウラから離脱し、ズドンツ、と激突したらウラに向け黒刀を振り向けた。

地面に伏せる彼女の目の前で刃を振り上げ、

……そこで、トミーの動きが止まった。

「ウ、…………ぐッ…………!」

トミーが左手で顔を抑える。ビクンビクンと「暮桜」もどきが震える。苦しむ声と相まって、彼の身体が鳴動しているようだった。

その鼓動を抑え込みながら、トミーは黒い出で立ちを量子化させていった。元の『グレイ・アイディール』の鉛色装備に戻っていく。

「それが、お前の限界のようだな」

ラウラは無様に這いつくばりながらトミーへ手をかぎした。

すると、トミーの動きがピタリと止まった。目に見えない何者かに握り締められているようだった。

「……A I C（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）、か」

「ああ。お前の動きを止めさせてもらった」

ラウラはぎこちなく立ち上がると、『大口径リボルバーカノン』をトミーを向けた。対するトミーはA I Cで動くことが敵わない。

「チエックメイトだ。」

「さっきのV Tシステムには肝を冷やしたが、バカなことをしたものだ。お前の身体への負担も大きいだろうに……」

「今は、九秒が、限界みたいだ。あと一秒あれば、勝て、たのにね」

トミーの言葉はたどたどしい。V Tシステムによる肉体へのダメージが伺えた。

「言わんこつちやない、とラウラは苦々しげにつぶやいた。

「降参してくれ、トミヤ」

「……こと、わる」

「トミヤー！」

ラウラはトミーにすぎるように叫んだ。

「意地を張るな！ もうお前の負けなんだ！ こうされてはもう動けないだろう!!」

「そう、だね……。でも、A I Cには、弱点がある。使っている間は、集中するから、ラウラも動けない」

「だからどうだというんだ？ 今のお前に反撃する術などないだろう！」

「そう、かな……?」

なに？ とラウラはトミーを見る。得物の『グローリー・シーカー』は砲口を向けられていない。なにかアンロック・ユニットを使っているわけでもない。しかし、彼がハツタリを言う訳もない。

とはいえ、装備のメインとなる下半身から離脱した今、取れる手段など……。

「まさか!？」

ラウラはセシリアを守護するフォートレス・ガジェットを見た。その上部、屋根のような部分の上に、彼の重銃『グラウンド・ブレイカー』が防御火器として搭載されている。その照準はしっかりとラウラを捉えていた。

「バカなことはやめろ！ この距離ではお前も巻き添えだぞ!？」

「そう、だね。今回は、引き分けとしようよ、義姉さん」

トミーの疲れ切った苦笑と共に、『グラウンド・ブレイカー』が火を吹いた。重厚な発砲音が周囲に響き渡る。

その音圧に水を指すように、

「はいはい♪ そっこだまえて!」

と、間の抜けた声と共に、トミーとラウラの前に水色の影がフワリと舞い降りた。

IS 学園生徒会長、更織縦無だ。その身には自身の IS 「ミステリアス・レイディ」を纏っている。不敵な笑みを浮かべて手を掲げると、水のヴェールが展開して銃撃を食い止めてみせた。

……ギリギリで。

「わっ、わっ！ ちょっと！ この銃威力ありすぎじゃない!？」

水の壁に受け止められたかに見える弾丸は、その防壁の中で爆発して水滴を撒き散らし、目の前の楯無を仰け反らせた。

IS のシールドに対応した特殊な徹甲弾を扱う『グラウンド・ブレイカー』は、砲口初速が遅く緩慢で当てにくいという欠点があるが、その威力はあきれるほど強力だ。

トミーは慌てて『グラウンド・ブレイカー』の遠隔射撃を取り止めた。

「ふいっ……。せっかく格好良く登場したのに、出オチになるところだったわ」

さて、と楯無は居住まいを正すと扇を開き、高々と宣言した。

「生徒会長権限において、この戦い、私が預かります！ 話の続きは

ロッカールームに場所を移してからにしましょう」

ポカン、と口を開けたトミー、ラウラ、遠くセシリアに、楯無は念を押してウインクした。

「い・い・わ・ね♪」

扇には『御意見無用』と描かれていた。

◆ IS学園ロッカールーム。

それは世界的な学園の施設と言うだけあって、アメフトのロッカールームを思わせる豪華な設備となっている。壁に並ぶロッカーはもとより、学園の校章が描かれた絨毯、照明はホテルのラウンジのようで、部屋の中央にはロングソファとテーブルが置かれている。

そのテーブルに向かいあって、トミーと楯無、ラウラとセシリアが、それぞれのソファに腰掛けていた。各自スポーツドリンクを用意して、戦いの経緯を楯無に説明している。

「なるほどね」

話を聞き終えた楯無は、ドリンクを一口飲むと、小さくため息を置いて結論づけた。

「それは、トミーくんが悪いわね」

名指しされたトミーは、む、と居心地悪そうに口を結んでいる。

ラウラは、さもありませんと何度もうなずき、セシリアも少し呆れたようにトミーを見ていた。

「ラウラちゃんと離れてIS学園に来てから、一度も連絡をとっていないだなんて。それじゃあラウラちゃんも心配するに決まっているじゃない」

「……面目ありません」

「それで再会してみれば、なに、セシリアちゃんといちやいちやしていいかなか一緒になれないですって？ それじゃあラウラちゃんも堪らなくなるわよ」

「いや、別にいちやいちやしたりなんて……」

「言い訳は聞きたくないの！」

「はい……」

トミーは首を竦めて縮こまった。

ラウラとセシリアが戦いを始めた経緯は、つまりラウラの不満が原因だった。

ドイツを離れたトミーはラウラに一度も連絡を寄越してくれない。久しぶりにトミーと再会してみれば、彼の近くにはいつもセシリアが侍っている。それも朝のジョギングから晩御飯まで。

それを目の当たりにしたラウラは、トミーがセシリアに取られてしまったのではないかと不安になってしまった訳だ。ラウラがセシリアを敵視しているのも、きっかけはトミーがかまってくれないことにある。

二人は義姉弟として接する仲だ。ましてや織斑教官から姉としての薫陶を受けたラウラだけに、トミーへの溺愛は師匠譲りと言っている。そのぶん、不安が空回りしてしまった訳である。

(トミーさんと一緒にいるのは、一夏さんや箒さん、鈴さんもなわけですけど……)

振り返ってみると、いつの間にか自分が一番彼の側にいたことにセシリアは気が付いた。

もし自分がラウラの立場だったらと想像すると、確かにこのような事態を起こしてしまうかもしれない。

(トミーさんも、身内にはだらしがないのですわね)

それはラウラを信用している裏返しかもしれないが、ラウラは男家族ではなく女家族であることをもっと知るべきだとセシリアは思った。

「まあ、セシリアがトミヤを奪ったわけではないことは安心したが。元はと言えばお前が私に心配をかけるからだぞ」

「ゴメンなさい……」

「さっきの戦いも、お前と戦うことになった私がどんな思いでいたか、わかっているのか?」

「申し訳ありません……」

目の前で繰り広げられる一方的な義姉弟喧嘩に、セシリアと楯無は相手を崩さずにはいられなかった。

きつとトミーは女の尻に敷かれるタイプだな、と二人は思った。

「まあまあ、ラウラちゃん。トミーくんも反省していることだし、そこまでにしましょう？　これからトミーくんが決意の弁を述べてくれるから」

「ほう、そうなのかトミヤ？」

「えっ、と……」

「述べてくれるわよね？」

「述べます……」

楯無の念押しに、トミーはうう、と泣きそうな顔で呻くと、一つ深呼吸をしてラウラとセシリアに向き直った。

「今回は、僕がラウラに心配かけてしまったせいで、こんな事態を招いてしまい、誠に申し訳ありませんでした」

深々と頭を下げる。

「僕はラウラを、いや、義姉さんを本当に大切に思っています。今後、心配をかけるようなことはいたしません」

真つ直ぐラウラに向けて放った言葉に、ラウラは、

「う、うむ……」

と頬を染め視線を反らして頷いた。

「そして、セシリアも大切に思っています。もう貴方を誰からも傷つけさせはしません」

言われたセシリアも頷こうとして、

「……えっ？」

なんだか、いろんなふうにとらえられそうな話に思わず聞き返してしまっただ。

しかし緊張の面持ちのトミーは、それに気付かず結論を告げた。

「僕は、ラウラとセシリア、二人のことを心から大切な人だと思っています。どうか、こんな僕でよければ、これからも一緒にいさせてくださいー！」

お願いします！　といきおいよく頭を下げた。

五秒経って、十秒経って、返事が来ない。

「……あのっ？」

トミーは恐る恐る顔を上げると、ゆでダコのように顔を赤らめているラウラとセシリアがいた。

「どういうことだ？ と隣の楯無の顔を覗き込むと、

「てい☆」

チョップされた。

人体の急所のこめかみに一撃。

「くっつ!?!」

トミーは平衡感覚が麻痺する衝撃に涙目で抗議する。

「な、何するんですかつ！ 義姉さんにもチョップされたことないのに！」

「たぶん意識を飛ばされて気付かないからよ」

「そうかもしれないけど！」

まったくもう、と楯無は笑いながら席を立った。

「シヤンとしなさいよ、色男。女の子二人を泣かしたりしたら、おねえさん承知しないわよ？」

だからどういうことですか!? と尋ねてくる後輩を尻目に、楯無はロッカールームを後にした。

後ろでドアが閉まる寸前、彼の名前を呼ぶ女の子二人の声が聞こえたが、楯無は楽しそうに笑みをこぼして、

「これにて一見落着、かな♪」

とスキップしそうな気分でその場を後にした。



何処かの教師が暮らす散らばった部屋にて。

「以上で、ラウラちゃんたちの一件は片が付きました」

楯無は出されたキーキをフォークで摘みながら、ビール缶を手に聞いている部屋の主に説明し終えた。

「あいつらめ。私は色ボケするように育てた覚えはないぞ」

言うど、500ml缶をグイッと煽る。

ぷはあく、と息を吐いて、さらに深いため息を着きながら目元を伏せた。

「私は、教師失格だな……」

酔いのせいか、いつもは硬い口が緩んでいた。

「ボーデヴィッツヒには、もつとちゃんとした教えをしてやるべきだった。そうだろうか？」

問われた楯無は、美味しそうに頬張るケーキを飲み込むと、

「織斑先生の教え方に合わなかったただけですよ」

そう笑みを浮かべて答えた。

「どういうことだ？」

織斑千冬は膝を乗り出して問いかけた。

「織斑先生の教え方は、別に変じやありません。基礎がしっかりしていて素質のある生徒を間違ひなく一流に育て上げる。僭越ながら、それが私から見た織斑先生の教育方法です」

いわば、一流の進学校や塾の講師のようなものだ。基礎がおろそかで平凡な者にはそもそも向かない。

その点で言えば、世界的なエリート校であるIS学園の教師という立場は、彼女の適任だと楯無は語った。

「……それでは、ボーデヴィッツヒのような子への情操教育や、織斑のように基礎ができていない者へは向かないということか……」

「しよげないで下さいよ。一夏くんはしっかり勉強しています。それにトミーくんもついて着実に強くなっています。先日所属不明の無人ISを瞬殺したのは間違ひなく彼の實力ですよ」

「それは一（にのまえ）の教え方がいいからだろう……」

「それだけではありませんよ。って、ああもう、飲み過ぎです先生ー！めんどくさいなあ、と楯無は内心思ったが、織斑先生の苦惱もよくわかった。

とはいえ酔っぱらいの愚痴を聞くには、このケーキだけでは割に合わない。

深酒になる前に早めに寝かせてしまおうと、布団に運ぶため肩をかけた。

「ほら、もう夜も遅いですし休みましょう。明日も朝が早いんですよ？」

「子供扱いするなっ。いや、子供すらちゃんと扱えない私が言える言

葉などでは……」

「いいから、もう布団に横になって下さいよ！」

この元世界最強どうにかしてー！

と心の中で叫ぶ学生最強の生徒会長であった。

親しき切磋琢磨

21. 僕の好きなもの — my favorite

things —

僕には好きな場所がある。IS学園最上階にある喫茶店だ。

一面の窓ガラスから眺められるパノラマの景色は最高だし、コーヒーの味も格別だ。どこの豆を使っているかは知らないけれど、音に聞こえたIS学園の施設なのだから、きっと良いものを使っているのだろう。

そんなコーヒーを頂きながら、フロアの隅の席で、椅子にもたれてボンヤリと外の景色を見るのが好きだ。

今日の天気は曇り空。西の方角では雨が降っているのかほの暗く、東の方は晩春の陽光が雲間から差し込んでいる。あと一時間もすれば東の晴れ間も遠ざかり、ここも雨に濡れるだろう。

「雨か……」

雨の休日というのも乙なものだ。特に今のような一人の時は尚良い。

別に人と一緒にいるのが苦手というわけではない。たまに、ちよつと疲れるだけだ。

今がちようどその、たまに、の時なだけ。

「はあ……」

振り返ってみると、IS学園に入学してからこのかた、とても充実した日々を過ごして来ている。

たくさんの友達ができたし、生徒会とも繋がりが持てたし、義姉のラウラと再開できた。

けれど、人との交流が多くなるにつれて、だんだんと気疲れするようになってきた。

みんな良い人たちなのだけど、だからこそ力になりたいと思って行動するうちに、自分の事が後回しになっていた。

朝のジョギングなどで体力作りはしているけれど、心の方は鍛えら

れない。

「僕はこんなに、ナイーブな性格だったかな……」

ため息を飲み込むためにコーヒーを一口。

……… 苦い。

ブラック派の自分らしからぬ感想だ。

ミルクと砂糖を加えてもう一口。

………

甘ったるさを美味しいと感じてしまうほど、今の僕は疲れているみたいだ。

気晴らしに、イヤホンを耳にさして携帯端末から音楽を流してみる。

ゆったりとした、優しい曲。

いろんな国を渡り歩く手前、流行りの曲なんて知らない僕は、自然とクラシックやジャズなんかを聞くようになっていた。

どこに行つてもどこかで耳にする曲だからだ。

ここは喫茶店だし、天気は下り坂。

雰囲気に合わせて、今回はジャズにしてみよう。

みんながよく使う動画サイトを操作して、適当なメドレーを選択。

……… いいね。

目を閉じて音楽に身を委ねる。

主旋律を奏でるソプラノ・サクスの音色が心地良い。

ピアノの伴奏に、自然と身体が動くのを感じる。

変な人に思われないう、動かすのは足と手の指先だけで我慢した。

♪

鼻歌が漏れてしまった。

有名なサビの部分が、ジャズアレンジで流れるメロディに没りきつてしまったらしい。

時間はたつぷり10分は経つたろうか。

何にも考えずに曲に魅入れたおかげで、少し気持ちもスツキリできた。

次の曲に変わるところで、コーヒーのおかわりを貰おうかと瞳を開ける。

と、

「こんにちわ、トミー」

目の前に、誰かいた。

「声をかけようかと思っただけど、気持ちよく音楽を聞いているみたいだったからさ。そのフレーズは『my favorite things』かな？ 僕も『サウンド・オブ・ミュージック』のミュージカルは見に行つたことがあるよ。いい曲だよね」

「……あんまり自然というもんだから、目を閉じたまま席を移動してしまつたのかと思つたよ、シャルル」

「それじゃあまるで夢遊病者じゃないか」

小さなラウンドテーブルの向かいに座るシャルルは、口元を隠しながら可愛らしく笑つた。

「コーヒーのおかわりだね？ 僕が注文してくるよ。あれ、ミルクと砂糖も使っているなんて、珍しいね？」

「そんな日もあるさ。注文は自分で行くから、気を使わなくていいよ」
「だめ。座つててよ、トミー。思うんだけど、ひよつとして君は疲れて
いるんじゃないかな？」

「そう見えるかい？」

「否定しないということは、凶星のようだね」
苦笑する。

「お願いするよ。シャルル」

任せて、とシャルルは変に嬉しそうに微笑んで、カウンターに向

かった。

さて、

と、僕はシャルルが戻って来るまでのあいだ、イヤホンをかけ直して音楽に浸り直そうとした。

……そもできないんだよねえ。

知り合いがいるとわかってしまうと、どうもそつちに気が向いてしまふ。

そわそわして、なんだか手持ち無沙汰な感じがする。

イヤホンから流れる曲は軽快なジャズポップスになっているのに、それに気持ちが踊らない。

結局、イヤホンを外して窓の外を眺めることにした。

雨が降っていた。

「お待ちどうさま」

シャルルが戻って来た。

手にはコーヒーが二つ。

「音楽を聞きながら待っていてくれてよかったのに」

一つを渡しながら言ってくる。

「ありがとう」

皿に砂糖とミルクがちゃんと添えられていた。

「どうも、知っている人がいるとなると気分が乗らなくてね」

「変に緊張しちゃうんでしよう?」

「あ、当たり前。驚いたな、シャルルは心理学の勉強でもしているのかい?」

「まさか。経験による実感だよ」

「経験だつて?」

「僕は幼いときから、人の顔色を探る癖があつてね。なんとなく、わかっちゃうんだ」

「ああ……」

それ以上は訊けなかった。

聞きかじったシャルルの過去から、好きで身につけた能力で無いことは確かだからだ。

「でも、たまに便利に思うこともあるんだ。こうして今の君の状態を当てられる時みたいだね。誰だって、自分の気持ちを察してもらえないのって嬉しいものじゃない？」

「確かに。『あ、この子は分かってくれるんだな』って思うと、余計に信用してしまうよ」

「そう。そうして僕は人の信用を得る手段を上手く使ってきたんだ。そんな僕だからこそ、君のことも分かるつもりだ」

「それはまた、見透かされているみたいでこそばゆいね。それで、シャルルから見ても、僕はどうか映ったんだい？」

シャルルは僕に顔を近づけて、小さいがはっきりした声で言った。「君は他人に気を遣い過ぎるタイプだね」

……うん、まあ。

「凶星、というより、なんだそんな事か、とでも言いたそうな顔だね」
「君からしたら、僕はとても正直でわかりやすいやつにみえるのだからね」

「そう思っていたけれど、それとは少し違うと思うんだ」

「へえ、どんなだい？」

「トミーは、たぶん気持ちに鈍感なんだと思うんだ」

おや。

「一夏と同じ、とでも言いたいのかな」

「似て非なるものだと思うよ。一夏は他人の気持ちを察することができないけれど、自分自身にはとても正直なんだ。それこそ、信じた道はどんな困難があっても突き進む、みたいだね」

「確かに。シャルルを助けようと頑張っているのも、きつとその表れだろうね」

「……その話は、今の話題と逸れてしまうから、また今度にしよう」
ノロケ話でも聞かされそうだな。

「顔。笑ってる」

「あ、失礼」

「ホントにね。……さて、トミーは一夏と真逆なんだと思うんだ。君は人の気持ちには、まあ一部を除いて敏感なんだけど、自分の感情には鈍い見えるな」

「その一部ってのが気になるけれど、自分の感情に鈍いというのは、どうしてそう思うんだい?」

「僕は君が人に親切にしていることが、何か義務でそうしているように思うんだ」

僕は口に運ぼうとしていたカップの動きを止めた。

「義務だつて?」

「そう。うくん、なんていうんだろう。心からの欲求でそうしているんじゃないくて、反射的というか、ロボットの行動みたいに、まるで親切にするように仕組まれているみたい。そういう感じを受けるんだ」

「……不快だったかな」

「そういうことじゃないんだ。ただ、君が人に優しくしている姿を見ると、僕はこう思ってしまうんだよ。『いったいトミーは、本当は何を望んでいるんだろう』って」

シャルルは一口コーヒをすすってカップを置き、メニュー表を開いて僕に見せた。

「ねえ、君は今は何を食べたい?」

「いや、特に欲しいものはないよ」

「それじゃあ、僕はこのチョコレートタルトにしようかな。でもちよつと重たいから、君にも手伝ってもらえると嬉しいんだけど」

「もちろん、構わないよ」

「ほら」

シャルルはくすくす笑った。

「いま君は、僕のお願いに何一つ悩まず答えたよね。欲しいものは無いと言ったにも関わらず。本当に君が食べたいものがないのなら、僕のお願ひも断ったハズだよ」

「ん、それとこれとは違うんじゃないかな？」

「違わないよ。今の君の行動は、人のためになるかどうかという事への条件反射だ。自分のためになるかどうかじゃない。違うかい？」

「それじゃあ、『僕は君のために行動したいと思ったからそうした』。コレなら可笑しくないだろう」

「本当にそう思ったと言えるかい？」

「それは……」

と、口ごもる。すぐに答えを言えなかった。

そう思い返すことができなかったからだ。

なるほど、僕はシャルルの事を思っただけで行動をしたわけではなく、反射的にそうしたと、そう言われても可笑しくないみたいだ。

「ほらね」

シャルルは、僕の事を言い当てて見せたのに、なんだか残念そうに言った。

「たぶん、君が一夏と組んで僕を助けるために、影ながら自己犠牲的な案を生徒会長に挙げたのも、トミー自身の思いからではないはずだよ」

僕は顔をしかめているのを自覚した。

「……誰に聞いたの？」

「トミー、僕はそのことについては怒っているんだ。僕は君を犠牲にしてまで助かりたくなかない」

「……」

「だから、君に頼らなくともいいように、僕はこうしようと思うんだ。強くなるう、って。強くなつて、この先何があつても実力で黙らせてやる。……そう、織斑先生から話を聞いて誓ったんだ」

「織斑先生だったのか」

楯無さん、チクったな。

いや、それは生徒会長という立場上変なことじゃない。けど、腹案として欲しかったのに。

シャルルに直接伝えられちゃあ、面目丸つぶれじゃないか。

「織斑先生は、学園として僕の事情に関知しない、自分の力で切り抜けてみせろ、って言ってくれた。僕を思う人たちのためにもやって見せろ、ってね」

「最近やたらと熱心にトレーニングをしているのは、そのせいだったのか」

「うん。今度学園で開かれる学年別トーナメント、僕は優勝を狙うつもりだ。優勝して、本当の僕をみんなに告白する。僕の会社やフランスが何か言ってきたとしても、その実績を盾に弾き返してやる。そして」

シャルルは、一息言葉を区切ってから言った。

「僕は、一夏に想いを告げる」

顔を赤らめるでもなく、真剣にそう口にした。

……すごいなあ。

僕は、シャルルを見誤っていたようだ。男子のフリをしているけれど、本当は大人しい女の子だと思っていた。

鈴や箒もそうだけど、恋をする女の子って、たぶん無敵なんだろうな。

「応援するよ、シャルル」

「ううん。悪いけど、トミーは僕を応援しないで欲しい」

「本心じゃないかもだから？」

「君にはみんなの中立でいて欲しいんだ。鈴や、箒たちが一夏を想っているのは僕も知っている。君は二人を無碍に出来ないハズだよ」

「……こうまで言い当てられちゃうと、だんだんとシャルルのことが恐ろしく感じできたよ」

「それは良いね。トミー、君はもつと自分の本心を表すべきだ。いま、君が気疲れしてしまっているのは、本当は言いたい事があるのに言えないでいるからなんだよ。僕の経験則だから、きつと間違いない」

「言いたいことが言えない、か」

「たとえば、そうだな、最近よくセシリアやラウラと一緒にいるよね。二人に振り回されたりしていないかい？」

はい。

よく振り回されています。

「顔。苦々しくなっちゃってるよ」

「……この顔と同じくらい口も正直になれたらいいのに」

「僕でよければ、いつでも愚痴を言ってくれて構わないよ。その代わりに、僕と一夏の仲をとりもって欲しいんだけど」

「おいおい、さつき中立でいて欲しいって言ったそばじゃないのか？」

「中立国にも便宜を図るのはヨーロッパの国では常識だよ」

「怖いなあ。フランスが大国で居続けられるわけだ」

「どうだい、トミー。君にとっても悪い話じゃないと思うけどな」

「シャルル先生の教えに習って、即答は避けることにするよ」

「あちや、そうきたか」

「ちなみに、こんなふうには話を楽しむことも、今後は君の肩を持たなければできないのかい？」

「まさか。僕も君とこうして会話するのは楽しいと思うよ。今度は、そうだね、お互いの好きなものを教え合うというのはどうだい？」

「いいとも。こう言っちゃあなんだけど、シャルルと話すと、心を癒やす良いリハビリになりそうだな」

「君は僕のことを心療内科さんか何かと勘違いしていないかな？」

「初診の先生が良かっただけさ」

僕とシャルルは屈託なく笑った。

そうして、

僕たちは雨の休日を喫茶店で過ごした。

相手に気を使わない自然な会話を楽しむのは、僕にとってエクシアと話すとき以外で久方ぶりかもしれない。

シャルルのような良き友を得られたことは、僕にとって本当に幸運なことだと心の中で感謝した。これは口に出さず秘めておくべきだと、そう思っている。

22. 盤上の戦い—what, s your pi ece?—

「バカなっ!? 私が、こんな……!」

ラウラは悲鳴をあげた。

絶体絶命の窮地に恐怖を感じているのだ。

これまでどんな戦場でも戦い抜いてきたラウラの精神力が、いま音を立てて削ぎ落とされている。

彼女の目の前で繰り広げられているのは、もはや一方的な蹂躪だった。

「いけませんわ、ラウラさん。そんなことでは凌ぎきれませんわよ。ほおら」

セシリアは余裕の表情を浮かべて追撃する。

それは強者が弱者を痛ぶるようなものだった。

「くうっ……! ま、まだだ、私はまだ戦える! これならどうだ!」

「そんな見え透いた手で止められはしなくてよ。そおれ」

「くあっ……! ま、まて! 今のはダメだ、これ以上されては……!」

「まあ、なんて可愛らしい悲鳴をあげて下さるのでしよう。では、こんなのはどうでしょう?」

「ひっ……! キ、キサマ、私を弄ぶつもりか!? やるならひと思いにやれっ!」

「すぐに終わらせてはつまりませんわ。ゆっくりと、丸裸にして差し上げますわ」

「ああっ!? や、やめろっ! この悪魔め!」

セシリアは妖艶な笑みを浮かべて容赦なくラウラを攻め立てる。

すでにラウラに対向する力が残されていないのをいいことに、じわじわとなぶり者になっていた。

「ウフフフ……。さあ、これで終わりにいたしましょう。そおら」

「あ、ああ……っ!!」

トドメの一撃を受け、ラウラはがくりと手をついて俯いた。

「すまない、トミヤ。お前の仇を、討てなかった……」

ラウラは詫びるように頭を下げながら、屈辱に打ち震えて、先に敗れ去ったトミヤの名前を呼ぶのだった。

「そんなに大層な話かなあ？」

僕は尋常でない真剣さで繰り広げられている、盤上のチェスの戦いにちよつと引いていた。

はじめは駒を使って戦闘シミュレーションをしていただけだったのに、それがいつの間にか本格的なチェス戦になってしまった。

戦闘シミュレーションというのは、近く開催される学年別トーナメントを受けて、タッグマッチの連携を研究していたのだ。

それにしても、セシリアったら強すぎるんだもん。

僕なんてあつという間にキングを搔つ攫われてしまったし。

あーあ、ラウラったらキング以外全部とられちゃってるじゃないか。そりゃあいじけちゃうのも無理ないよ。

「セシリアったら、大人げない」

「人聞きの悪い言い方をしないで下さいな。手心を加えては相手に失礼ではありませんこと？」

「瞬殺と虐殺をする方もどうかと思うけど」

「痛めつけられてこそ、反発心が沸き上がるというものではありませんか」

「口も上手いなあ。まあ、確かにラウラにはこういう敗北経験も必要かもしれないけどさ」

ちらり、と見るラウラはまだ敗北に打ち震えていた。

ラウラが勝負事に負けるのは久しぶりだと思う。

落ちこぼれ時代ならともかく、織斑先生の鞭撻を受けてからはメキメキと強くなった。

数多の勝利を積み重ねて、あつという間にドイツ軍IS部隊のトツ

プに上り詰めた。

……最近は勝ちすぎて凶に乗りかけていたもんねえ。

戦いの舞台が盤上とはいえ、様々な戦術や軍略も習得してきたラウラに負ける気はなかったようで、だからこそこの大敗に沈んでいるんだろう。

僕はラウラが使っていた黒の女王《クイーン》を手に持った。ラウラが一番使いまわしていた駒だ。

お国柄なのか、彼女の好みなのか、その戦術は率先速攻で、かの電撃戦（ブリッツ・クリーク）を思わせた。

しかし対するセシリアは機先を制して守りを固め、鮮やかなカウンターでラウラの攻勢を撃退。

自陣を整え迎撃してみせた戦術は、バトル・オブ・ブリテンで勝利を飾ったお国柄なんだろうか。

勢いを欠いたラウラの攻撃はもはや通じず、また戦術を転換しようにも初頭の被害が大き過ぎ、あとはジリ貧にもっていかれた。

最後の方はもう見てらんないくらいのワンサイドゲーム。

ちなみに僕は、守りを固めようとしたらその合間を縫って一瞬で勝負を決められた。

うん、まあ、これ事故死だよね。

「それにしても、セシリアって騎士《ナイト》の扱いが特に上手だよね。盤上の中央から周囲に睨みを聞かせて、相手がスキを見せたら飛び込んで。鮮やかな手並みを見せてもらったよ」

「ウフフ、騎士《ナイト》は最強の駒女王《クイーン》に対して唯一優位が取れるピースと言われておりますのよ。いかにして中央に位置取りし、アドバンテージを握るかで勝負は大きく傾きますの」

「ふうん……。なんだか『ブルー・ティアーズ』でもできそうな戦術だね」

「と、いいいますと？」

「いや、セシリアの『ブルー・ティアーズ』も騎士《ナイト》みたいに特異性の高い攻撃ができるだろう？ 同じように、戦場の中央に置いて睨みをきかせたり、相手のスキを突いて攻撃できれば、きつと凄

脅威になりそうだなあって思ってた」

「……『ブルー・ティアーズ』をISの周囲に展開するのではなく、フィールドに散らばせて相手の動きを制することで、戦況を優位にコントロールできる、と。そういうことですか?」

「まあ、そんな感じかな?」

なるほど、とセシリアは急に真剣に考えだした。

口元に手をあて、虚空を見つめながら、何やらブツブツと呟いている。

……これはしばらく思考の中から出てこないな。

たまに見るこの光景には慣れたものだった。

セシリアの強さの秘訣の一つは、そのずば抜けた集中力にあると思っている。

スナイパーっていうのはそういうものなのだけれど、彼女の場合遠隔操作ができる装備の運用もこなす訳だから、その力は推して知るべしだ。

僕の「グレイ・アイテイル」の下半身も分離して動かすことができるけど、あれはほとんどオート制御だ。

進め、退け、攻めろ、守れ。

そういった単純な指示を、僕が動かしている際のレコードを使って模倣しているに過ぎない。

だいたいセシリアの『ブルー・ティアーズ』みたいに飛びながらって訳じゃないもんね。

彼女の場合動きが止まってしまおうとはいえ、よくあそこまで細かい制御ができるなあ、って思うよ。

そんなことを考えていると、いつの間にか隣にラウラが立っていた。

目元が赤い。

や、それは元からだけど、明らかに潤んでいる。

よっほどくやしかったんだな。

「トミヤ、私はこの無様な戦いで、しかしちゃんと戦訓を掴んだぞ。そ

これは、強い駒一つだけでは勝てないということだ!」

おお!?

「えらい! 凄いよラウラ! マイペースで自信過剰で唯我独尊なラウラが、チームプレーの大事さを学ぶなんて!」

「……トミヤ、私のISが治ったら共にブートキャンプをするとしよう」

「なんで!? 僕は今かつてないほどラウラをべた褒めしてるのに!」

「私は今かつてないほどお前に傷つけられたからだ……」

あ、なんだかションボリし直した。

すん、と鼻をすすってる。

ちよつと本音を出しすぎちゃったかな。

シャルルの言うようには上手くいかないなあ。

「でもさ、ラウラは、やっぱりこの女王《クイーン》みたいなタイプだと思うよ」

手元にある黒の女王《クイーン》を見せながらフォローに入る。

興味を持ったのか彼女の顔が上がった。

「そ、そうか?」

「そうさ。僕が出会ったIS操縦者の中では、ラウラが一番強いもん。まあ織斑先生は別格として。ラウラは現役の軍人で、しかも国家代表候補生。そして常人には扱えないほど強力な「シュヴァルツエア・

レーゲン」のパイロットなんだから」

「ふ、ふん。そんなことは当たり前だ。私は強くあるために生まれ、弛まず精進を続けているのだからな」

あ、少し気を取り直してくれた。

「でも、女王《クイーン》って、序盤で動かすと流れが悪くなるらしいよ」

「ふむ?」

「きつとラウラみたい強い者は、最初はどっしり構えて戦線を伺ってればいいんだよ。速攻型の戦術とは違うかもしれないけれど、仲間と一緒に戦うことを考えたら、もつと大局を見て動いてみたらいいんじゃないかな?」

「なるほど、私のように強いものが後方で睨みを効かせ、前線の歩兵たちを鼓舞するというのはよい戦術だな。うむ、今度トミヤとタツグを組むときはそのようにするとしよう」

ふふん、と小さな胸を突き出して満足げにうなずいた。

にしても、僕は歩兵《ポーン》なのか……。

まあ、飛べないISもどきじゃあそう言われてもしょうがないけどさ。

「ラウラさん、トミーさんは歩兵《ポーン》なんかじゃありませんわ」「セシリア!」

嬉しいこと言ってくれるじゃない!

「む、私はトミヤを歩兵《ポーン》などと言った覚えはないぞ」

「あら、お話ぶりからそのように捉えられましたけど?」

「うん、僕もそう思った」

「トミヤが歩兵《ポーン》な訳がないだろうっ!」

「じゃあ、何だと思うの? セシリアの意見も気になるけど」

「それは……」

「もちろん……」

「王《キング》だろう」ですわ」

……えー。

「いやさ、我ながら城《ルーク》がピッタリだと思っただけだな? 拠点防衛兵装（フォートレス・ガジェット）とか、モロじゃない。っていうか、王《キング》を前に出さないでよラウラ!?!」

「安心しろ。盤上とは違い、戦場ではお前を必ず死守してみせる。そう、女王《クイーン》の名にかけて!」

「本当はわたくしの方が女王《クイーン》を名乗ってたかったですけれど、トミーさんに仕える騎士《ナイト》というのも悪くありませんわね。盤上での相性はともかく、平時も戦時でもピッタリですし」

「ふん、キサマはトミヤを馬のように尻に敷きたいだけではないのか?」

「あら、あなたこそ悪女のように嫉妬に狂って束縛したいだけではござ

「いませんこと？」

「……………」

「あ？」

「あら？」

「なんか、二人の間で視線が交差するんだけど。」

「しかも目つきが怖くなってきた。」

「やめてください。」

「あ、もう！ そういつもいつも喧嘩ばかりしないでよ！ だいたい、僕が王《キング》だったら女王《クイーン》とも騎士《ナイト》とも相性悪いじゃないか！ 一緒に詰まさせられないんだから！」

「ま、まあ、そうですね……」

「おい、女王《クイーン》と王《キング》なら可能だぞ？」

「あ、そうだっけ？ ……と、ともかく！ 王《キング》を前線に出す女王《クイーン》なんて怖くて一緒に組めないよ！ だいたい……」

「ウガー、つと言いつつ放った声のトーンを、急に萎めて語りだした。」

「僕たちは学年別トーナメントに出場出来ないじゃないか……」

「うぐ、とラウラとセシリアの言葉が詰まる。」

「そうなのだ。」

先日繰り広げられた二人の演習という名の決闘のせいで、【ブルー・ティアーズ】も【シユヴァルツェア・レーゲン】も修理中。

次の大会にはとても間に合いそうにないのだった。

ちなみに僕はその時VTシステムを不用意に使ったせいで謹慎処分になっちゃった。

まあ、VTシステムはIS条約で禁止されているんだから、しょうがないね。

「LSだから問題ない、って積んだ開発者は何を考えているんだろう。」

「しかし、今年はともかくとして、来年なら大丈夫だろうか？」

「そうですね。その時に向けて、こうして戦術の研究を」

「専用機乗り同士は組めないって話だけだ」

ウグ、と再び二人の言葉が詰まる。

専用機乗り同士はタツグ禁止。

そりやそうだ。

そうじゃないとチームバランスに偏りが出来て、トーナメントが出来レースになっちゃうもの。

でも、そうなる僕と僕は仲の良いみんなと一緒に戦えないのかあ……。

「僕としては、みんなと一緒に組んで戦いたかったんだけどさあ……」
「——！ わ、私だってそうだ。この盤上の演習も、なかなかのシミュレーションになる。トミヤ、今度は私と対戦してみようではないか！」

「いいですわね。それでは、わたくしは横で二人に動きをレクチャーいたしますわ。せっかくですし、チェスの戦術をお教えいたしますわう」

「それはいいね。ラウラ、よければ一緒に上達しよう。ドイツにいた頃のように」

「ああ……、ああ！ もちろんだともっ！」

「それじゃあ、セシリア先生、ご指導よろしくお願いします」

「ウフフ……。手とり足取り、優しく授業して差し上げますわ」

なんだか、二人とも前向きになってくれたみたいだ。

よしっ、僕も気合入れてやってみよう！

盤上に駒を並び直し、ラウラと戦場で対峙する気持ちで向かい合う。

ラウラは黒、僕は白い駒を持つ。

駒を動かす途中途中で、指摘してくれるセシリアの話はとってもためになるものだった。

ラウラもよく汲み取って実践に活かしている。

戦いが進むに連れて、僕が選んだ駒は城《ルーク》。

キャスリングを使って王《キング》の場所と交換する。

……そういえば、この王《キング》は、僕にとっていったい誰を連想させるんだろう。

そう思つて駒をみると、僕を生み出してくれた老いた黒人の顔を思い出した。

……閣下、か。

となると、さしずめ僕の陣は女尊男卑に立ち向かう男性陣営とでもいうのだろうか。

城《ルーク》と王《キング》の場所が入れ替わる。

盤上の隅の穴倉の中で、王《キング》は息を潜めている。

今度王《キング》が表に出してしまうとき、その時は自陣が敗北寸前のときだろう。

その時にはもう、城《ルーク》も討ち取られてしまっているのかもしれないな、と自分を重ねて思ってしまった。

23. 少女の決意—Je voudrais . t re . c . t . de toi—

歓声に包まれるアリーナの中で、シャルルは上階の展覧席に視線を向けていた。

現在開催されている学年別トーナメント。

その試合を見に、多くの国やIS関連企業から視察団がやって来ている。

自分たちの代表の活躍や、将来有望な学生を囲い込むためである。いま行っているのは一年生の試合だが、先天的な才能を見るうえでとても重要なものであり、金の卵を見つけようと目を皿にしている事だろう。

(その中で活躍し、優勝することができたなら……！)

シャルルはゴクリとツバを飲んだ。

このトーナメントに自分の将来が掛かっているといつても過言ではないからだ。

フランス代表候補生であり、大企業・デュノア社社長の子息。

それが今のシャルル・デュノアだ。

しかしそれは、会社の宣伝や、世界で唯一の男性IS操縦者である織斑一夏のパターンを採るという役割を演じるための仮の姿。

本当は、シャルロット・デュノアというデュノア社社長の愛人の娘だった。

その少女は、織斑一夏に恋をした。

偽りの自分を気につけて、居場所を与え、救ってくれようと懸命になつてくれた彼の姿に、思わず心を奪われてしまったのだ。

少女は恋に身を捧げ、嘘を脱ぎ捨てようと決心する。

(僕はシャルルじゃなく、シャルロットに、本当の自分になるんだ！)

シャルル少年が、実はシャルロット嬢であると公表すれば、スポンサーであるデュノア社やフランスに迷惑をかけることになるだろう。

だが、世界的に有名なIS学園で開かれた大会優勝者という肩書き

があれば、例えデュノア社やフランスに批難されようとも、他から引く手あまたに違いない。

また鼻肩目でなくとも、そんな有望な選手をフランスが代表候補生から外すとも考えにくい。

デュノア社には制裁が及ぶだろうが、そんなものは自業自得だ。

これから手に入れようとする栄光は、後ろめたいデュノア社へ決別の証になるものだった。

(僕は絶対に、この学園に残ってみせる、そして、一夏にこの思いを告げるんだ……！)

力が込み上げてくるシャルルの肩を、ポンと叩く手があった。

「珍しくリキンでるんじゃない？ らしくないよ」

パートナーに選んだクラスメイトの赤毛の少女、

「相川さん」

にひひ、とおちやらけた笑みを作る相川清香は、シャルルの両肩をバシバシと強めに叩いた。

「ちよつと、痛いよ相川さん」

「リラッックス、リラッックス！ 次の試合はどうとう専用機持ち相手なんだから、変にリキンだつて上手く動けないよ」

「わかった、わかったから。もう、そんなに肩を叩かないでよ」

「ん？ それにしても、シャルルくんって撫で肩だね。トミーくんと違って肩幅が狭いような」

「へえ、トミーにはこんなふうにスキンシップとつてるんだ？」

「ま、毎朝一緒に走ってるからね」

「トミーと一緒に出場できなくて残念だったね」

「それは言いっこなしだよ！ ほら、相手チームも出てきたよ！」
顔を持たれて無理やり正面を向かされる。

見れば、対戦相手の凰鈴音が、愛機【甲龍】を纏ってグラウンドにやってきていた。

「アンタと戦うのは、コレがはじめてになるかしら。お手柔らかに頼むわね、シャルル」

不敵な笑みを浮かべる鈴の隣では、パートナーがガツチガチに固くなっている。

鈴の相部屋仲間のティナ・ハミルトンだ。

「うわー、男の代表候補生が相手とか、緊張してきたー……」

金髪をいじくりまわし、碧眼が何度もまばたきを繰り返している。

間食でもよくするのか、多少ふくよかな身体に装備しているのは英国製量産機「ティアーズ」。セシリアの「ブルー・ティアーズ」の元だけあって、射撃主体の機体だ。

前衛が鈴、後衛がティナ、という布陣だろう。

「そんな気にするほどでもないわよティナ。アタシの実力知ってんでしょ？ 最近できたその凶太いボディらしく、ドーンと構えてりやいのよ」

「いきなり人の悩みをえぐらないですよ。つーか日本のお菓子が美味すぎるのが悪いんだって。だいたいね、鈴みたいにノーテンキになれりゃあ苦労しないから」

「アツハハ。雨が降ろうが風が吹こうが、アタシは負ける気しないからね」

鈴は両手に持つ青龍刀を合体させて、バトンのように振り回す。

「いくわよシャルル。代表候補生の実力、見せてみなさい」

隣のティナも覚悟を決めたのか、視線鋭くライフルを構える。

「相手はカボチャ……、相手はカカシ……、ハロウィンパーティーはパンプキンパイ……」

「アンタ実は余裕なんじゃない？」

対するシャルルと相川も、それぞれの得物を構えて向かい合った。

シャルルの「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」は右手にアサルトライフル『ヴェント』と左手にパイルバンカー『グレー・スケール』を。

相川の「打鉄」は近接ブレード『葵』を両手で持ち、両肩のアンロック・ユニットである物理シールドを前に出して受けの姿勢でいる。

「相川さん、作戦どおりにね」

「わかった。でも今さらだけど、私に凰さんを抑えられるかな？」

「できるさ。練習で気付いたんだけど、相川さんはタフだから」

「……女の子が言われて嬉しいセリフじゃないなあ」

「ゴメンね。ちゃんとトミーにフオローするよう伝えるから」

「な、なんでまたトミーくんの名前が出てくるのさ!？」

「トミーの相川さん評からもじったから」

「……今度会ったらデートでチャラにしてあげるって言っというて」

クス、とシャルルの口から笑みが溢れた。

（セシリアとラウラに内緒にできるかな？ できないだろうなあ。ト

ミーは正直者だから）

ならば、今こうして共に戦う相川にすら、身の上を騙している自分は相当な嘘つきだな、とシャルルは思った。

（それも、このトーナメントで終わりにするんだ……!）

シャルルは臨界まで高めた気迫を、試合開始のブザーが鳴ると同時に解き放った。

24. シェンロンとの戦い—fighting the dragon—

「おいしい、一夏！ 箒！ こっちこっち！」

僕は観客席の後ろの階段を降りてくる一夏と箒に手を振って案内した。

向こうも気づいたのか手を振り返して来る。

その二人の足取りは軽い。さっきまで違う会場で試合をしていたのに、やはり勝利を飾ると疲れの色も消えるんだろう。

「助かったよ、トミー。こんな前の席を用意してくれていたなんてな」

一夏が隣の席に座るなり肩を叩いてきた。

その隣に箒も腰を落ち着ける。

「二人ともお疲れ様。はい、差し入れのドリンク」

「サンキュ、トミー」

「かたじけない。いつもながら気が利くな」

二人とも渡したペットボトルの清涼飲料水にすぐに口を付けた。

自分たちの試合が終わったあと、汗を拭いただけで飛んで来たんだろう。

一気に半分まで飲み干して、気持ちの良いため息をついた。

「さっきは勝利おめでとう。相手の本ちゃん、なかなか手強かったみたいだね」

ああ、と一夏が苦笑する。

「クラスメイトの布仏さん、普段はのほほんとしてるのに、試合だとあんなに機敏に動き回るなんてな」

「うむ。それに、もう一人もかなりの手練だったな。私も危うく討ち取られかけた」

「確か四組の子だったよね？ 本ちゃんが、『私の親友なのだ』って言ってたけど」

「日本の代表候補生、らしい」

「へえ！ そりゃあ強いわけだ」

「見慣れぬ機体に乗っていたが、おそらく専用機だろう。凄まじい弾幕を張ってきた。私は近寄ることすらできなかつたというのに……」
「俺と戦うときは、なぜか動きが鈍かつたんだよな」
確かに。

相手が箒のときはすごい圧倒してたのに、一夏と入れ替わるや途端に攻撃がちぐはぐになったっけ。

結果、一夏の『零落白夜』であつと言う間に討ち取つたんだよね。
「箒と戦っていた間に、機体に不調でも起きたんじゃないか？」

「いや、戦う前と後の挨拶を見るに、別の理由だと思うぞ」

「僕も箒の意見に賛成」

「そうなのか？ どんな理由なんだ？」

「どんなって……」

ねえ？ と箒の顔を覗き込むと、腕を組んで、

「ふんっ」

とそっぽを向いてしまった。

チーム同士の挨拶の間、簪さんはオドオドして俯きながらも、チラチラ一夏の顔を見ていたんだよねえ。

一夏が「よろしく！」と挨拶すると、すごい上ずった声を上げてたし。

……いつもながら、一夏ってフェロモンどうなっているんだろう。

「なあ、教えてくれよ。二人だけの秘密なんてズルいだろう？」

「あ、もうすぐシャルルチームと鈴チームの試合が始まるみたいだ」

「そのようだな。間に合つて何よりだ」

「無視かよ二人とも!？」

「しかしトミー、よくこんな南側の前の席が取れたな。東西両チームを真ん中から観戦できてありがたいが、激戦区だったろう？」

「ああ、セシリアとラウラがとつていたんだよ。でも、二人とも専用機の修理が終わつたつて、それぞれの技術班から連絡があつてね」

「それで私たちが入れ違いで座れた訳か。せっかくの試合があるというのに、残念だったな」

「あの一、トミーさん、箒さん？ あんまりスルーされると俺の心が痛

むんだけど……」

「だってさ箒」

「私の心も痛んだのだから、自業自得というやつだ」

「俺、何かしたのかよ!？」

「したって言うか、不可抗力なんだよなあ。」

「ちよつと一夏の体質に同情……、しないかな。うん。」

ところで、席を離れざる負えなかったセシリアは「なんでこのタイミングで連絡が来ますのっ!」と膨れっ面だった。

それでもすぐに受け取りに行ったのは、ISに対する思い入れの強さだろうか。

ラウラも、「やはりISと一緒にでなければ落ち着かないな。試合は録画で見させてもらおうとしよう」と素直に受け取りに向かった。

ちなみに二人の技術班はちようど本国から大会視察団に付随して来れたみたいで、予定よりも早く届けて貰えるようになったらしい。

「冗談はここまでにして、セシリアとラウラの分もちゃんと観戦したいとね」

「うむ。見取り稽古も鍛錬の一つだ」

「なんか、納得いかないなあ……」



試合開始のブザーと友に、両チームの四人が動き出した。

鈴チームは鈴が前に、ティナが後ろに。

シャルルチームはシャルル、相川とも前が出る。

先制は鈴だった。

両刃の薙刀のような青龍刀を振り回し、遠心力を付けて叩き込むような斬撃を放った。

それを、相川は近接ブレード『葵』で見事に受け止める。

が、その『葵』の刀身にヒビが入った。

「真正面から受けるからよー」

流れるような斬撃が相川の【打鉄】に襲いかかる。

相川はなんとか両肩の物理シールドを駆使して防ぐが、見る見るシールドゲージが削られていく。時間こそ稼げているが、とても長くは持ちそうにない。

「それが私の役割だからね！」

何？ と鈴が怪訝な表情を浮かべると同時に、パートナーのティナから悲鳴が上がった。

「ちよ、ちよつと鈴！ 前衛がいきなり突破されてどうすんのさ!？」
相川から少し間合いを開けて後ろを振り向くと、シャルルがティナに猛攻を仕掛けていた。

アサルトライフル『ヴェント』を発砲しながら、しかも牽制どころでなく正確に、シャルルはティナへと猛追する。

ティナはとにかく距離をとろうとするも、機体の性能差はいかんともし難く、シャルルに今にも捉えられかねなかった。

「ちよつとくらい踏ん張りなさいよ！ アンタ土俵際得意でしょ!？」

「土俵際あ!？ 鈴、また私の体格馬鹿にしたでしょ!？」

「してないって！ 弱そうに見えて案外しぶといのがティナの持ち味じゃない！」

「それぜんぜん褒めていないから！ …って、ムリムリムリ!? コイツなりふり構わないんだけど!？」

ティナの言うとおり、シャルルは弾幕をもともせず突っ込んできた。

多少どころではない被弾すら気にも留めず、ついにティナの「ティーズ」を捉える。

「ハアアアアアツ!!」

「ちよ、マジ、ムリだつてー!?! ——ツガ!!!？」

シャルルの気合を乗せたパイルバンカー『グレー・スケール』の一撃が決まる。

さらにとどめの一発、というところで、ティナはほうほうのていで鈴に向けて逃げ込んだ。

「ああ、もうー！」

鈴の『龍砲』がシャルルに向けて牽制を張る。

しかし、

「やらせないよー！」

相川がそこに横槍を入れた。

アサルトライフル『焰備』を右手に呼び出し、狙いもつけずにばら撒いてみせる。

「しつっこいー！」

「ありがとねー！」

「褒めてないってのー！」

こども付きまとわれてはティナをサポートすることもできない。

ならば相川から、と狙いを変えると、再び防御姿勢をとられて攻め切れない。

そしてついに、

「鈴、あんた、今度スイーツビュツフエ奢りなさいよ……」

そのセリフを最後に、ティナがシャルルに撃墜された。

「そんなだから太るのよ……」

シャルルが『グレー・スケール』を装填し直しているところへ『龍砲』を放ちながら、パートナーに饞別の言葉を送る。

不意を突けたのか、一発が『グレー・スケール』を撃ち抜き、使用不能にすることができた。

とはいえ、

「これで二対一だね、鈴」

撃破された装備を惜しむでもなく、シャルルは不敵に鈴に向けて言い放った。

言外に、『まだやるかい？』とでも言うようなふてぶてしさを鈴は感じた。

それに、鈴はふつつつと湧き上がるものが胸中にあった。

「だからどうしたっての？」

八重歯を覗かせてそう笑う。

この程度のピンチ、中国の代表候補生選考の時にいくらでも経験してきた。

そしてことごとく潜り抜けてきた。

(一夏のためにね！)

心の中で気合を吐く。

バトンのように振り回す青龍刀の冴えは今日もバツチりだし、空を翔る【甲龍】の動きに乱れはない。

今日も今日とて、凰鈴音は絶好調だ。

「上等じゃない!? やってみなさい! この凰鈴音をね!」

「それ、完全に、悪役のセリフだよ!」

上空へ急上昇する鈴に向けて、シャルルが逃がすものかと追いつがった。

◇

鈴が飛ぶ。

縦横無尽に空を舞い、『龍砲』を撒き散らすその姿は、まるで飛竜がブレスを放っているようだった。

その機敏さに相川の【打鉄】では追いつけず、『龍砲』の直撃を受けて無様に後方に下げられた。

最高速度はシャルルが上だ。拡張コネクタに四基の高出力マルチウイングスラスターと二基の小型推進翼を接続しているのは伊達ではない。

それでも捉え切れないのは、彼我の運動性が一段違うからだ。そこそ突つ込むと簡単に後ろに回られるほど【甲龍】は軽快で、シャルルはカウンターを気にして攻めあぐねている。

所詮、【ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ】は第二世代機の改良型。曲がりなりに第三世代を冠する【甲龍】には僅かながらに遅れを取った。

(それでも、機体の性能差は、武装の数と腕でカバーして見せる!)

シャルルは鈴の動きを読んで後ろにミサイルポッドを呼び放つ。

それを鈴は避けるでもなく、青龍刀を振り回して撃墜しながら迫ってくる。

「トロい攻撃ね！ トミーだったらこんなもんじゃないわよ！」

「その『龍砲』すら切り払うのと、一緒にしないでよ！」

「間合いも甘いつてんのよ！」

シャルルは下がりながらアサルトライフル『ヴェント』を放つが、鈴の足は止まらない。

「だったらー！」

『ヴェント』を捨て、次に呼び出したのはショットガン『レイン・オブ・サタデイ』だった。

こなれたアクションとりロードを披露し、瞬く間に鈴の前に弾幕が広がる。

避けきれるものではなく、鈴のシールドゲージがガリガリ削られていく。

しかし、鈴の【甲龍】は止まらない。

機動性はシャルルに分があるとはいえ、今のようなバックスピートではどうしても劣る。

鈴は『龍砲』の片方が被弾し量子化されても突撃速度を緩めなかった。

「無鉄砲な攻め方するね！」

「さっきアンタもしてたじゃない！」

「そうだったかな？ 忘れちゃったよ！」

「器用なモンね！ でもこれで、——捉えたっ！」

鈴の青龍刀がシャルルを薙ぎ払う。

辛うじて身を仰け反らせてかわしたが、避けきれなかった『レイン・オブ・サタデイ』が真つ二つになった。

「逃がすか！」

残った『龍砲』がシャルルを襲う。

こういう乱戦において、射角も砲身もない『龍砲』はまさに驚異だった。

次々とシャルルに着弾し、その顔を歪ませる。

そして、シャルルの動きが鈍った瞬間を逃さず、鈴は青龍刀を振り

下ろした。

「これでお終い——、ッ!?!」

その瞬間、鈴の【甲龍】を衝撃が襲った。何者かからの砲撃が直撃したのだ。

「…っの、いったい、どこから!?!」

見渡せば、自身の左側の彼方、アリーナの端っこからこちらにライフルを向けている相川がいた。

その砲口に閃光が光る。

「くうっ……!」

回避行動を取るも弾速が速い。

直撃こそ避けれたが、近接信管による爆発の衝撃が鈴の体を揺さぶった。

【打鉄】に遠距離装備?! 接近戦型の機体にそんなモンが……、!）あった。

超長距離射撃用パッケージ『撃鉄』。

超長距離射撃の命中率においてレコード記録を打ち立てたロングライフル。

【打鉄】はその頑丈さから接近戦を選択されがちだが、だからこそ鈴は失念していた。

「訓練のとき、ラウラに言われたんだけどね——」

体制を崩した鈴に向けて、シャルルが新たな装備を展開する。デカイ。

自分の機体を上回るほどの大きな装備だ。

「僚機を失った者は、戦術的に負けているんだってさ!」

量子から形作られたのは、五九口径重機関銃『デザート・フォックス』。

すでに照準も完璧だ。

「コレで僕の、——僕達の勝ちだ!!」

アリーナを震わせる重厚な発砲音がとどろき渡る。

それが、シャルルチームの勝鬨となった。

25. かつてをなぞり未来をのぞむ――Im Lie be fuer immer――

IS学園、研究棟。

主にIS運用テストを行うその施設のメディアホールにて、黒いISが動いていた。

「ふむ、問題はないようだな」

パイロットであるラウラは展開したIS「シユヴァルツエア・レーゲン」の各部位の動作確認をしながらつぶやく。

その声に、ホールの壁際で観察していた女性が応じた。

「損傷の酷かった脚部のアイゼンはいかがでしょうか？ 『リボルバー・カノン』との接続は？」

タブレット端末を操作しながら声をかける人物は、銀色に光る鷲章の軍帽をかぶり、左目をラウラと同じ眼帯で覆った異様な姿の妙齢の女性だった。

鷲（アドラー）はドイツ軍の紋章である。すなわち彼女は修復したラウラのISをドイツから届けに来た者だった。

タブレット上ではデバイスモニターが展開され、ラウラの動きを逐一チェックしている。

数値変換された値は正常であるが、本人の感覚に合っているかは直接聞いてみなければわからない。

「問題ない、と思うが、アイゼンによる『リボルバー・カノン』の砲撃反動吸収については、やはり試射を試してみなければわからないな。クラリツサ、本国ではテストを行っているのだろうか？」

名前を呼ばれたクラリツサ・ハルフオーフは、自身の所属する黒ウサギ隊隊長であるラウラにキビキビと答えた。

「ハッ、砲身を交換するほど射撃試験を行っております。結果、脚部アイゼンの銃架機能について不具合はありませんでした」

「照準のブレはどの程度発生しているか？」

「一時の方向に三度以内です」

「まずまずといったところか……。了解だ。あとは私の腕でカバーするでしょう」

ラウラはIS装備を量子化すると、ふう、と一息ついた。修理後の動作確認は、怠ると実戦で最悪の自体に直結する。

それゆえ細心の上にも神経を研ぎ澄ましての作業だけに、さしものラウラの顔にも疲労の色がかげっていた。

「それにしても、よくお前が持ってきてくれたな、クラリツサ。本国では副隊長としての部隊運営もあつただろうに」

「良い機会だったのです。一度日本には来てみたいと思っていたもので。それに、別件でトミヤへの用事もありました」

「トミヤに？」

「はい。もちろん彼へのお土産も持参いたしました」

「準備がいいな。それで、何を用意したのだ？」

「熟慮の結果、オトコに相応しい代物ということで、SAPPOROビールを選択いたしました」

クラリツサの凍るような青い瞳は真剣のままそう告げる。

「……ここに来る前にホツカイドウ旅行でもして来たのか？」

「ラウラ隊長、私はあなたの義弟君であるトミヤには、ニッポンダンジのようにたくましく成長してもらいたいと思っていますのです。ニッポンダンジは黙ってSAPPOROビールだと伺いました。それゆえ、私は一度本場SAPPOROへ立ち寄り、タヌキコウジなるところで調達して参りました」

クラリツサは背中に下げたバッグの中から、黄金に輝く五芒星を二頭の金獅子が挟む紋章という、いかにもSPECIALと名付けられた表記に相応しい缶ビールを取り出した。

「美しいでしょう。ギンザライオンSPECIALというそうです。味も祖国ドイツビールに勝るとも劣らぬ一品。まさしくニッポンダンジに相応しいと思いませんか！」

「お、おう……」

拳を握りしめるクラリツサの熱弁はラウラをしてたじろがせた。

クラリツサの話は最初から最後まで真剣である。

ドイツでの飲酒は16歳から認められているため未成年だからと
憚る必要は彼女視点ではない。

傍から見れば暴走しているような彼女の様は、トミーへの期待のな
せるわざだった。

クラリツサはラウラを尊敬し、そのためトミーを信頼している。

ラウラを軍人として育てたのが織斑千冬ならば、人としての凍った
心を溶かし黒ウサギ部隊との融和を持てたのは、トミーの配慮のおか
げだからだ。

彼がいなければ、孤高になりがちなラウラのことだ、部隊員との信
頼も薄く、浮いた指揮官になっていただろう。

しかし、そのトミーの置かれた世間からの風当たりは厳しい。

トミーは女性の力の象徴『インフィニット・ストラトス』のまがい
物『リミテッド・ストラトス』の操縦者であることで、女尊男卑の世
の中から非難に晒されることが多かった。

クラリツサはそのことに気を配り、世間の荒波にも耐えられるよう
な立派な男、即ちニツポندانジのようになってほしいと願ったわけ
だった。

ラウラはクラリツサの熱意に、一つ咳払いを入れて意見を返した。

「……せつかくだが、クラリツサ、IS学園内では生徒は飲酒厳禁だ。
代わりに織斑教官に届けてくれ。きつと喜んでくれるだろう」

「なんと……。そうでしたか、残念です。しかし織斑教官にお渡しす
るとなると、さらになくまじさに磨きがかかりそうですね」

「否定はできないな」

実に結構なことだ、とラウラ首肯しながら、クラリツサのタブレット
を覗き込んだ。

画面に映る「シュヴァルツエア・レーゲン」のコンディションはオー
ル・グリーン。

実際のラウラが感じた動作チェックの印象は、修理前と比べて操作
性は落ちていないが、良くもなっていないかった。

「シュヴァルツエア・レーゲン」はいわゆる試験機だ。

性能を追い求めるあまり機体の反応値が高く設定され、それ故に動

きがピーキーで操縦が難しい。

というより、ラウラでなければまともに運用することすらできない。

実戦能力と機体完成度は高いものの、人を選ぶ機体となってしまうのは、目標とされる欧州統合防衛計画（イグニツション・プラン）に適するかどうか難しかった。

ラウラはタブレット画面が伝えるシステム正常の表示に、恨めしそうに眉をひそめると、しばし瞑目して言った。

「……クラリツサ、このレーゲンタイプは、メッサーシユミットMe109になれるだろうか。それとも、ハインケルHe100となってしまうのだろうか」

「He100……、性能を追い求め過ぎて実用性を度外視し、Me109に破れたゴーストファイターですか」

「そうだ。乗り手を選ぶ馬など、いくら駿馬でも軍馬としては務まらない。私の「シュヴァルツエア・レーゲン」は良い機体だが、しかしなにぶんじゃじゃ馬だ。皆が扱いに困ることは想像に難くない」

主の期待に応えられない馬は、いかにポテンシャルがあろうとも駄馬という烙印を押されかねない。

かつてラウラ自身がそうであったように、である。

ラウラはそんな愛機の今後を思うと、複雑な感情を抱かずにはいられなかった。

「恐れながら隊長」

クラリツサはキビキビと言った。

「ISに求められるのは、一騎当千の力です」
「む」

ラウラの赤い右目がクラリツサの青い右目に向いた。

クラリツサは僅かに笑みを浮かべて視線を受け止め、話を続ける。
「ラウラ隊長と「シュヴァルツエア・レーゲン」の力は祖国にしっかり伝わっております。レーゲンタイプの姉妹機の開発もされております。進捗は遅れておりますが、そのぶん最新の試験装備も搭載される予定です。きつと比類無き強さを発揮してくれることでしょう」

「ほう…。そうか、姉妹機の開発は凍結されることなく進められていたか」

「これまでの隊長の運用実績の成果です。誇ってください」

「くすぐったい言い方をする。それで姉妹機の名前はなんというのだ？」

「『シユヴァルツェア・ツヴァイク』と、そう名付けられております」
「ツヴァイク…、『黒い枝』か…。私のレーゲン（雨）に負けないような強い枝になってほしいものだな」

「はい。私もそう願っています」

クラリツサはラウラが読み終えたタブレットをカバーノットに閉じてそう言った。

「ついで、そういえば、と言葉を続ける。」

「ところで、先程フランスと中国の代表候補生同士の戦いが終わったそうです。別途録画をしておりますので、お望みとあらばこの端末からでもご覧になれますが、いかがいたしますか？」

「すでに結果は見えているさ。シャルルの勝ちだろう」

「さ、左様です。お見事です隊長。フランス代表候補生は、隊長が目をつけるほど強いのですか？」

「なに、シャルルは私にタッグマッチのアドバイスを求めてきたのだ。ずいぶん真剣な面持ちでな、熱意に負けてコツを教えてやった」

「そのアドバイスとは、どのようなものなので？」

「ソ連に『黒い悪魔（ブラック・サレナ）』と呼ばれたパイロットの教訓だ」

「ああ、なるほど……」

クラリツサは合点がいった。

あまりの強さから『黒い悪魔（ブラック・サレナ）』と称された、人類史に残る撃墜王の戦術を多少なりとも身につけられたなら、確かに結果は目に見えている。

「以前聞き及びましたが、隊長は『黒い悪魔（ブラック・サレナ）』を目標としておられたそうですね」

「おかしな話でもあるまい。ドイツの軍人でパイロットなら皆そう思

うぎ。しかしなクラリツサ、私はなにも軍人としての一面だけを目標としていくわけではない」

「と、いいいますと?」

「それはな——」

と、続きを言おうとしたところで、別の方向から声をかけられた。

「あら、ラウラさんではありませんこと」

メディアホール入り口に、コバルトブルーの水着のようなISSスーツを着込んだセシリアが顔を見せていた。

肉体的輪郭が顕になるそのスタイルは、女性として出るところが出て引つ込むところが引つ込み、持ち前の美貌と合わせて一流のグラビア女優顔負けのプロモーションを見せている。

「わたくしも復調した【ブルー・ティアーズ】のテストをしてみようかと思っていましてのに、ちょうど重なってしまいましたわね。……あら? お隣の女性は」

視線を向けられたクラリツサは自然な動作でラウラの前に立った。そのまま挨拶をしそうに見えて、立ち方は即応姿勢。警戒の証である。

が、その肩をラウラに抑えられた。

振り向くクラリツサの隣に立ち、代わりに二人をとりなしてみせた。

「コイツは私の同僚のクラリツサ・ハルフォーフだ。信用してほしい。クラリツサ、彼女はセシリア・オルコット。イギリスの『スピットファイア』だ」

「あら、祖国の名機になぞらえて頂けるなんて光栄ですわね。改めまして、イギリス代表候補生、セシリア・オルコットと申します。よしなに」

クラリツサは自身の隊長が他人への配慮ができるほどかつてより成長している事に感激しながら、しかし面には出さず淡々と返答をした。

「ドイツ軍特殊ISS部隊所属、クラリツサ・ハルフォーフ大尉だ」

セシリアはスカートの端をつまんで膝を曲げて身体を縮める、カーテシーのお辞儀を。

クラリツサは踵を着けた気をつけの姿勢から、敬礼で挨拶を。それぞれの立場を表明する挨拶を交わしあつた。

「イギリス代表候補生は『スピットファイア（癩癩持ち）』ですか。さぞかし隊長もご苦労なさっていることでしょう」

「まあ、な。だが何より苦労なのは、トミヤが『スピットファイア』を受け入れているということだ」

「なんと!? 隊長という義姉を持ちながら、『スピットファイア（癩癩持ち）』を認めるとは、気まぐれな!」

「あいつもやはり男子だ。悔しいが『スピットファイア』は美しい。それに、ヤツと比べると私にはまだ備えられていない部分も多い……」

「くっ……! おのれ『スピットファイア（癩癩持ち）』め……! 時代を経てなお我がドイツを苦しめるか!」

「なんだか散々な言われようですけど、これは侮辱と受け取ってよろしいのでしょうか? ちょうどテストプレイのお相手を探していたところなのですが」

微笑むセシリアのこめかみがピクピクしている。

望むところとクラリツサもラウラの前に出ようとするが、

「まあ待て、クラリツサ」

ラウラが再び肩を掴み止めた。

「ラウラ隊長! ……しかし……」

「言っただろう、私が『黒い悪魔（ブラック・サレナ）』を目標としているのは軍人としてだけではないと」

「は……」

ラウラはクラリツサの横を通り過ぎると、セシリアのいるメディアルーム出入り口に歩みを進めた。

「セシリア、私たちのテストはすでに完了した。もうここを後にするので、気兼ねなく使ってくれ」

「まあ、入れ違いでしたか」

「そうなるな。クラリツサ、いくぞ」

セシリアとすれ違うラウラの表情は、思いの外緩く、

「……………」

軽い会釈だけして通り過ぎるクラリツサは敵意が隠し切れなかった。

セシリアは二人に言葉をかけることなく、自分のすべき作業に取り掛かった。

◇

アリーナに向かう廊下を進むクラリツサは、面白くなさげに前のラウラの背中を見ていた。

(オルコット嬢の話は隊長から聞いている。なんでもトミヤのかつての幼馴染であったとか)

肉体改造処置を施され記憶を失う前の、トミーになる前の少年の幼馴染。

そして、

(まあ、ライバルというやつだ)

苦笑とともに言われたラウラの話を思い出す。

それはセシリアを、『スピットファイア』となぞらえていることも含めて、好敵手と認めているということだろう。

それはよい。

互いに高めあう相手がいるという事は、ラウラ自身の成長に繋がる。

よくわからないのは、なぜこうもやすやすと引き下がったのかということだ。

相手のコンディションが悪いからと遠慮したのだろうか？

それとも肉体的なスタイルの違いを見せつけられて、内心気を悪くしたのだろうか。

ラウラの背中からその胸中は覗けない。

「クラリツサ」

その背中越しに自分の名を呼ぶ声がした。

「ハッ」

「お前は『黒い悪魔（ブラック・サレナ）』の墓標に花を手向けたことはあるか？」

「は？ ……いい、いえ。ごいません」

クラリツサは拍子抜けした声を上げた。

ラウラは、そうか、と少し楽しそうに言葉を続ける。

「私はな、トミヤと一緒に行ったことがあるのだ。私が憧れていると話したら、せっかくだからご挨拶に伺おうよ、と言ってな」

「はあ」

トミヤの行動は、相変わらずというか、人の機微に少し触れるようなことをするな、とクラリツサは思った。

「そこでな、私は墓標に刻まれた言葉に胸を打たれたのだ。『黒い悪魔（ブラック・サレナ）』が伴侶を深く愛したことは聞いていたが、改めて思い知らされた。 ……私も、かく有りたいたいと思ったよ」

「 ……して、その言葉とは？」

ラウラは、ふと足を止めて呟いた。

「Im Lieber fuer immer」

クラリツサの見開かれた青い瞳が、振り返る可愛らしくも美しいラウラの微笑みを見た。

「私がトミヤに向ける言葉そのものだったのだ」

26. 時代遅れ—old fashion—

「クラリツサさんー」

僕はIS学園アリーナの一階ロビーで、思わぬ人物との再会に声を弾ませた。

ラウラから通信端末で呼び出されて来てみれば、彼女の隣にドイツにいた頃の恩人が立っていたからだ。

手を振りながら二人のもとに向かう僕の足取りが、自然と速くなっていたのも無理はなかった。

「ご無沙汰しております！　まさかいらっしやっていたなんてビックリしましたよ！　もっと早くにご連絡くだされば、何かおもてなしもできましたのに」

「ああ、うむ……。久しいな、トミヤ」

挨拶と握手を交わしながら、しかしクラリツサさんは目を瞬いてまじまじと僕の顔を見つめてくる。

それは、なんだかきこちないような感じがした。

「……どうかなさったんですか？　僕の顔に何かついていますか？」
「いや、そうじゃないんだ。その、メガネが、な。今はかけていないんだな」

ああ、と僕はクラリツサさんの態度に納得した。

「そういえば、ドイツにいた頃はずっとメガネをかけていましたもんね。実は先日、ちよつとした事があって壊してしまっただけですよ。おかげで今はこうして慣れないコンタクト生活です」

「そうだったのか。メガネをしていないトミヤを見るのは、はじめてになるからな」

あらためて、クラリツサさんは僕の顔をいろんな角度から眺めてきた。

あまり表情が豊かでない彼女が、驚きとも意外そうとも受け取れる表情を浮かべながら観察してくるのには、かえって僕の方からも意外だった。

「……なんというか、以前と比べてずいぶん、印象が違う気がするな。」

隠す必要もないから言うが、お前の素顔はそんなに整っていたのか」「えっ、そ、そうですか？ うわ、そう言われると、なんだか嬉しいな」「いつも瓶底のように分厚くダサイメガネがトレードマークだったからな。これまで外見からの魅力は感じなかった」

「ズバリ言いますね……」

「それに、瞳の色は赤なのだ。ラウラ隊長と一緒にではないか。本当の姉弟みたいだぞ」

「あ、それはカラーコンタクトで」

「当然だろう、クラリツサ」

ラウラが、フフン、と胸を張って割り込んできた。

「トミヤは私の義弟なのだからな。義姉を見習うのになんの不都合がある。こうしてわざわざカラーコンタクトをしてお揃いであることも、私との絆を大事に思えばこそではないか」

「おお、麗しき義姉弟愛です！ トミヤ、お前のことを見直したぞ！」

クラリツサさんは僕の手を両手で力強く掴みながら言った。

「それは、どうも……」

スポンサーさんから支給された品がたまたまそうだったなんて、言えない雰囲気だなあ……。

クラリツサさんは嬉しそうに頷くと、肩に下げたバッグからタブレット端末を取り出した。

「そこまでしつかりしているからこそ、お前のためにこの新装備ができたのだろうか」

「新装備、ですか？」

「ああ。詳しいことは彼女に聞いてくれ」

そう言いながらカバーノートを開き、なにやら画面を操作する。

そして表示されたタブレット画面には、

「ト・ミ・ヤ・さーん！」

「エクシア!？」

僕の専任オペレーターのエクシアが、両手をブンブン振って映っていた。

どういうこと？ とクラリツサさんに顔を向けると、

「私がここに来たのはな、ラウラ隊長のISを届けることの他に、お前への用事もあったのだ。スポンサーの『M・R・エレクトロニクス』が新しい装備を開発したので届けてほしい、とな」

「そうだったんですか……!」

『M・R・エレクトロニクス』

それが僕のスポンサーの名前だ。

かねてより付き合いのあったラウラやクラリツサさんはご承知の通りで、エクシアもこの会社に所属して僕をサポートしてくれている。

MR、というのが医薬情報担当者のインシヤルなのと繋がりがあるのかは知らないが、医療関連という意味では共通のメディカル・カンパニーだ。

医薬品や医療機器の開発、運用を手がける世界的なシェアを持つ大企業で、影響力は国連にも及んでいる。

さらに、昨今はIS関連にも手を広げてきており、僕の「グレイ・アイデール」もここで開発されている。

もつとも、人体に関わる機器をメインに扱うわけだから、主な開発装備はパイロット周辺のものが主になる。LSでいえば、四脚の下半身や、『ペンチ・ヒッター』の駆動部分などだ。

武器に関しては提携先から試験名義で寄越されているらしい。

と、それはいいとして。

「なんだよ、エクシアも水臭いな。新しい装備なんていいから、クラリツサさんが来てくれることだけでも教えてほしかったのに」

「そーゆーとこ、相変わらずですねトミヤさん。あ、ラウラお義姉さんもご一緒でしたか! ふつつかものですが、よろしくお願いいたします!」

「ん? ああ……」

ラウラは鳩が豆鉄砲を喰らったように首を傾げた。

「まあ、義姉、という呼び方はいいのだが、よろしくの前が引っ掛かる言い分だな?」

「それはもう! 今後とも長く深いお付き合いしていくことになる」と

「思いますからね！」

「……どういう意味だ？」

「つまりですね」

「あ〜！ エクシア！ その新装備っていうのはどんなものになるのかな？」

僕は話の流れが変な方向に行くのを強引に変更した。

なんとなく、このまま続けるのはマズイと思った。

たぶん、エクシアは将来、僕と一緒に居るつもりで話を進めているんだろう。

前に、記憶喪失であるエクシアが、身寄りも記憶も見つからなかったらそうさせてくれ、と話をされたのを思い出す。

もちろんそんな自体になれば僕としても断るつもりはなかったから、ラウラとそうだったように同じ釜の飯を食べるのは構わなかった。

だからその後了解したのだけど、

(ひよつとすると、僕はエクシアに慕われているのかもしれないなあ) そう思わせる素振りが無きにしてもあらずと振り返る。

歳の近い身近な異性ということ意識されているだけかもしれないが、そっち方面の経験値がない僕には対処の仕様が見つからなかった。

「おいおい、耳聡いシャルルに相談することにしよう。」

「むー……、とっても大事なことですよトミヤさん」

「大事なことなら、なおさら直接会って話をしたほうが良いと思うけどな？」

「むむ、言われてみれば確かに……」

エクシアは、一つ大きな息を鼻から吐いて調子を切り替えた。

「ふーん！ わかりました！ それじゃあラウラさん、この話はまた今度直接ということでお願います！」

「まあ、了解した、と言っておこう」

「はい！ ……さて、それじゃあみなさん、ちよつと場所を移して貰えませんか？ 屋内だとちよつと都合が悪いので」

確かに、ISの装備は大きくてかさばるから、こんなロビーではマズイかもしれないな。

僕たちは人があまりいないであろう、校舎裏まで移動することにした。

◇

学年別トーナメントの喧騒から離れた、校舎裏の備品倉庫前。

トミーはクラリツサから渡された銀色のバングルを両腕に装着した。

新装備のセットアップに使うのだろうそれを、エクシアのいわれるがままにLS「グレイ・アイディール」にインストール作業を行い、起動させる。

ISの装備は普通、身体に纏うように発動されるものなのだが、今回のそれは違った。

「非固定浮遊部位（アンロック・ユニット）か？」

ラウラの言うとおり、投影先は空中で呼び出された。

「大きいな……」

そう話すクラリツサの身長分はあろうかという二つの物体が、トミーの両肩の上、腕を伸ばせば届きそうな位置で現界する。

その姿は、

「……手？」

巨大な、アニメに出てくるロボットのような、握りしめられた二つの拳だった。

もしかや、とトミーは自分の手を開くと、ロボットアームもその動きにシンクロして開きだした。

指先は弾丸でも撃てるのか砲口になっており、掌には球体状のものが埋め込められている。甲の部分には手首まで覆うガントレットのような手甲が備えられていた。

カラーリングは、総じてグレー。

「これで、試作・マニピュレーター型非固定浮遊IS武装。その名も

『グレイ・グローブ』です！』

『グレイ・グローブ』……』

トミーはエクシアの言った名前をつぶやきながら、思うままに動かしてみた。

指の一本一本もちゃんと動き、グー、パー、もしつかり連動する。

さらにパンチのような動作をすると、

ガオン！

と空を切る音を響かせてナツクルを放った。

「撃つてみても、大丈夫そうかな？」

指先の砲口を動かしながら、トミーはエクシアに確認する。

「空に向けてなら大丈夫ですよ！ 音もそんなにうるさくないので」

「それは便利そうだね。どれ……」

人差し指を一本、上空を指して放つてみる。

発砲音は、バアン！ でも、ガアン！ でもなく、

キュイン！

という甲高い音だった。

「この発砲音は、もしや……」

「知っているのか？ クラリツサ」

「ハッ。おそらくラウラ隊長がお使いの『リボルバー・カノン』と同じ、

電磁投射砲（レールガン）の類かと思われます」

「流石はクラリツサさんですね！ そのとおりです。五連装電磁投射

砲、通称『フィンガー・スナップ』といいます。ラウラさんのとは違っ

て一発の威力は小さく衝撃も少ないですが、連射速度はダンチです

よ」

「さらにですね、とエクシアは装備の解説を続ける。

「掌の球体はバリアシールドを展開できる防衛機構になってるんで

す。通称は『ゴールキーパー』って言うそうです。手甲部分には単発

式の杭打ち機が内蔵されていて、コッチの通称は『グレート・グ

レー・スケール』と呼ぶそうですよ」

『グレー・スケール』、ってことは、シャルル愛用の装備の強化版か。

さっきのパンチを見ても、接近戦が想定されているだろうとは思っ

たよ」

「対空戦向きの火器といい、シールドといい、コンセプトの見える装いだな。しかし、これでは既存の装備とバッティングをしまわぬか？」

新装備に向けられたトミーとラウラの評価に、エクシアは「それはそうです」と頷いた。

「なんてったって、トミヤさんはしばらくこれだけで戦う事になりますからね」

「へ……う？」

「トミヤさん、今後はこれ以外の装備を運用しないでください」

はあっ!? とトミーは驚愕の声を上げた。

「えっ、あの……、『グローリー・シーカー』とか、全部?」

「全部です。ちなみに、下半身の四脚、当方では『グレイ・グリーブ』と仮称していますが、それも使わない方向でお願いします」

「それもダメなの!? いくらなんでも戦闘力ガタ落ちしちゃうよ?」

「そうですね、少なくとも、この『グレイ・グリーブ』に運用動作をすべて覚えさせるまではそうして欲しいと、常務さんからキツく言われておりました……」

「あー、常務さんからかあ……」

それは従わないわけにはいかないなあ、とトミーはため息をついた。

いつも気難しそうな上司の顔を思い出す。

眉間にシワを寄せ、縮れた髪と特徴的な鷲鼻のしかめっ面。

「いいですね?」という断れないオーラでの詰め寄りが聞こえてきそうだった。

「さてよ、運用動作を覚えさせるって、LSの下半身……『グレイ・グリーブ』でやったことと同じじゃないか? それじゃあまさか……」「ええ、ご想像のとおりです。トミヤさんの『グレイ・アイディール』の完成形は、下半身の『グレイ・グリーブ』、アンロック・ウェポンの『グレイ・グリーブ』、そしてトミヤさん本体と、それぞれ切り離れた三位一体で運用するのが目標だそうです」

ああー、とエクシアを除いた三人が一様に声を上げた。
それは、あまり気持ちの良さそうなイントネーションではなかつた。

「強力、であるのは間違いなさそうですが……」

「飛べない機体でも足掻こうとする姿勢は伝わるのだが……」

「まるでどこかのゲームのボスみたいだあ……」

クラリツサとラウラのフォローも届かず、トミーは思い浮かべられたビジュアルにげんなりと肩を落としてしまった。

(まあ、ゲテモノみたいに言われるのは慣れてるけどさあ)

そうは思っても、愛機への愛着と、サポートしてくれるエクシアのためにも、直接口にするのははばかられた。

「ま、まあ！　せっかくですしテストを続けてみましょうよ！　『ゴールキーパー』とか、どのくらいの範囲をカバーできるか知っておいたほうが良いですよ。他にもですね……」

「——ずいぶんと面白そうなことをしているな？」

不意に、

備品庫の影から放たれた冷たい声が、エクシアの話を遮った。

ぎよつ、と全員の顔が、声のする方向へ向く。

皆、よく知っている声色だったからだ。

声の主は、ゆらり、と影の中から現れた。

「織斑、教官……！」

「ボーデヴィツヒ、ISの起動について禁止されている場合を二つ述べろ」

「ハッ！　一つ、指定区域以外でのIS起動は条約により禁止されており
ます！　二つ、IS学園敷地内であつても許可されていないIS
展開は校則により禁止されております！　……あ」

「正解だ。さて、では規則違反を侵した一(にのまえ)には、相応の対応
をしてもらわねばならないなあ？」

穏やかな口元とギラついた目を向けられたトミーは、

(やつ、ちゃつ、たー)

という感情を全身で表しながら、右手で顔を覆い隠した。



「やれやれだ」

私は備品庫から必要な用具袋を引きずり出して肩にかけた。

まったく。本来なら整備科のやつらにさせる仕事なのだが、今日はトーナメントに当たるとわたくしわたくし自分で取りにくるハメになってしまった。

それで来てみれば、コレだ。

新装備のテストをしてみたいのは分かるが、ちゃんと決まりを守ってやれというのだ、ガキ共が。

周りに人がいないからと言って、むやみにISを展開させていいものじゃないんだぞ。

最終的に誰に苦情が来ると思っているんだ。

……ああ。

また一つため息がこぼれてしまった。

ええい、ビールの一杯でも引っかけたい気分だ。

「面目ありません、織斑教官……」

後ろではハルフオーフが、ずっと直立不動から腰を直角に曲げて頭を下げた姿勢のまま、私に謝罪を繰り返している。

下手人の一(にのまえ)と幫助犯のボーデヴィツヒにはグラウンドダッシュ三十周を命じた。

エクシアとの通信は切れたみたいだ。抜け目のないやつめ。

「ハルフオーフ、お前のその律儀さは立派と言えよう。しかし年長者としては、しっかりと決まりを守るよう後輩を指導しなければいかな」

「申し開きもごいせん……」

「それで？ なぜドイツ屈指のIS乗りであるお前がココにいる。ボーデヴィツヒにISを届けるのも、一(にのまえ)に装備を渡すの

も、お前でなくても良かったはずだ」

「ハッ。もちろん理由がございます。と、そのお話の前に、どうかコレをお収めください」

ハルフオーフの肩に下げられたバッグをうやうやしく渡された。

なんだ、と中身を確認してみると、

(こ、コレは……！)

黒ではなく黄金の五芒星。

SPECIALなSAPPROの500ml缶。

そして知る人ぞ知るギンザライオン・プレミアムのリミテッド・エディション！

ゴクリ……！！

いかん、自然と喉がなつてしまった。

やれやれ、ハルフオーフのやつめ、

「いいセンスだ」

「感謝の極みであります」

フツ、

夜が待ち遠しくなってきた。

「つと、ゴフンゴフン……。うむ、確かに土産は頂戴した。さて、それでは本題を話してくれ」

「ハッ。実は、コレを織斑教官に渡してくれと頼まれました」

そう胸元から取り出されたのは、古風なセピア色の封筒だった。

しかもご丁寧な封蝋印で閉じている。

この印は、

「む……」

先程までの高揚が急速に冷やされる。

見覚えのある印だった。それも、あまりありがたくない方の。

「他の誰にも悟られるな、と言われております」

「そうか……」

懐からカッターを取り出し、丁寧に封を開ける。

中に入っていたのは一枚の便箋。

それも英国の老舗のコンケラー・レイド。

(……これを用意した者は、クラシックな趣味の持ち主であることは
確実だな)

半ば探偵にでもなった気分で、便箋を開いてみる。
そこに記されていたのは、

「——ッ！」

私は一読したただけで折りたたみ、すばやく自分の懐に仕舞い込
んだ。

「お、織斑教官……？」

「ハルフオーフ、この封筒は誰に渡された！」

「ハッ！ 『M・R・エレクトロニクス』の常務より、直々に」

「ヤツか……！」

私は緊張が全身を駆け巡っていることを自覚した。

このように送られて来るといふことは、事態は風雲急を告げている
と確信できるからだ。

しかも常務のヤツめ、これまでのように取り繕うこともなく、わざ
わざ身分まで証してくるとは……！

「ハルフオーフ、直ぐに一(にのまえ)とボーデヴィツヒを呼び戻せ。

学園アリーナのピットに大至急向かうよう伝えろ。私は先に行く」

「ハッ！ 復唱！」

「無用だ、さっさと行け！」

ハルフオーフからの返事も待たずに私は駆け出した。

動くとなれば、今日のような来賓のある日が狙われるだろうとは予
想していた。

対策は講じている。

しかし、わざわざこのような伝達をしてくるとは、一(にのまえ)を
使えというお達しとでもいうのか。

私は頭の中で便箋の文字を振り返る。

それは、

『

亡国機業二気ヲツケラレタシ

Old Fashion』

コレだけだったが、十分だった。
『オールド・ファッション』という反女尊男卑主義団体が、名乗りを上げた警告であるというだけで。

27. 「信じて」という言葉には「試して」という意味もあるらしい——try me——

黒いISが襲いかかってくる。

無骨な巨体に似合わない俊敏な機動性で、こちらの攻撃を掻い潜り、得物の『プラズマ手刀』の光刃を煌めかせて挑みかかってくる。

その動きが、不意に揺れる。

横あいからの射撃が、黒いISの脇腹に突き刺さったのだ。

わずかにひるんだ一瞬のスキを逃さず、周囲から次々とビームの集中砲火が包み込んでいく。

黒いISは反撃にと『大口徑リボルバー・カノン』の砲身を構えるが、その砲門に此方の『弾道型ブルー・ティアーズ』が飛び込んだ。

盛大な爆発。

しかし、その爆炎を突き破り、黒いISは弾丸の如く迫ってくる。

瞬時加速（イグニッション・ブースト）のなせる爆速だ。

恐るべきは黒いISの装甲と、パイロットの技量だろう。

煙幕の中から狙い変わらず正確に、こちらを捉えて向かってくる。

振りかぶられる『プラズマ手刀』。

その刃が届く前に、網に捉えられたように、黒いISがビームの火線に包まれた。

放ったのは周囲に配置された『ブルー・ティアーズ』。

予め各所に展開させての、先読みによる置き攻め。

直線的にしか進めない瞬時加速（イグニッション・ブースト）の欠点を狙って、自分自身を囿に相手を絶好の攻撃ポイントに誘引し、十字砲火を叩き込んだのだ。

目に見えて鈍る黒いISの動き。

そこにトドメと、得物のロングライフル『スターライトMKⅢ』のフルチャージ・ショットをお見舞いした。

極太の閃光が黒いISを飲み込む。

並の相手なら必殺の一撃。

しかし、

黒いIS【シュヴァルツエア・レーゲン】はそれすらも堪え切り、自分の駆るIS【ブルー・ティアーズ】に『プラズマ手刀』が振り下ろされた。

◇

(ダメ、ですわね……)

セシリア・オルコットは自分で思い描いたシミュレーションの結果にため息を着いた。

IS学園研究棟のメディア・ホールにて行われていた、「ブルー・ティアーズ」の機動チェック。

そのテストプレイの中で、以前トミーたちと一緒に行ったチエスの戦術を試してみたのだ。

自立機動兵器『ブルー・ティアーズ』を置き攻めに使い、ボード・アドバンテージを有効に使って相手の行動を制限するフィールドコントロール。

イメージ上の仮想的には、ラウラの「シュヴァルツエア・レーゲン」運用の結果は一定の成果を収めはしたものの、

(惜しむらくは、火力不足ですわね)

【シュヴァルツエア・レーゲン】の重装甲には有効打までは及ばなかった。

BT兵器の実働データをサンプリングすることを目的とした試用機である【ブルー・ティアーズ】と、

実戦能力と機体完成度を追い求めた【シュヴァルツエア・レーゲン】では、

やはり戦闘力に開きがあるのか。

シミュレーションの最後に受けた『プラズマ手刀』の一撃は、間違いなくセシリアを切り裂いただろう。

そう、何もなければ。

(けれどきつと、いいえ必ず、トミーさんが助けに来てくれると思わず

にはいられないのは——)

トミーに対する甘えだろうか。

自分自身への自惚れだろうか。

イメージシミュレーションの中で振るわれた『プラズマ手刀』は、鉛色のLS【グレイ・アイディール】に阻まれた。

彼の剣銃『グローリー・シーカー』が煌めき、相手の光刃を受け止める。

かつて自身を救ってくれた時のように、ラウラの攻撃から護ったトミーの背中はとて大きく、そして頼もしかった。

(ねえ、トミーさん)

セシリアは幻の背中に語りかける。

(わたくしは、本当は、とつてもわがままな娘なのですのよ?)

助けてもらえたにも関わらず、庇ってくれたトミーにすまなさを抱き、自分の弱さに情けなくて腹が立つ。

護られてばかりは嫌なのだ。

貴方の隣に立ちたい。

共に肩を並べたい。

できるはずだ。

この【ブルー・ティアーズ】には、まだまだ可能性がある。

最大稼動時はビーム自体も自在に操るBT偏向制御射撃(フレキシブル)が可能であると、受け渡しの際に技術スタッフから言われたではないか。

そのチカラを発揮できたならば、きっと目の前の背中の隣には、自分が寄り添っていられるのに。

(ねえ、こちらを向いてくださいまし。わたくしを、わたくしだけをご覧になって……)

貴方のために強くなるから。

だから、その空色の瞳に、このセシリア・オルコットを映してほしい。

か弱い少女の右手が、すぎるように差し伸ばされた。

その願いが届いたのか、幻の背中が動き、肩越しに頭が振り向いた。

高鳴る鼓動、胸を締め付ける『彼』の横顔。

その瞳は――、

(紫色……?)

そういえば、ラウラの凶弾から護ってくれたあの時の『彼』の瞳は、一瞬だけけどアメジストのように光っていた。

裸眼の空色でも、コンタクトをした赤でもなく。

凶弾を切り払った火花がトミーの周囲で虹色の輝きを帯びていたあの瞬間を、目に焼き付けたセシリアが見間違うはずは無い。

(そう、間違いはありませんわ。けれどももいつたい、どうして……)

頭をもたげた疑問。

その問いを払拭するように、「ブルー・ティアーズ」の通信回線が着信を知らせた。

表示される相手の名前は、

「トミーさん!」

セシリアは取りも直さず、ツーコールが鳴り始める前に通話を受け取った。

緊急の要件だった。

しかしその重大さへの緊迫感よりも、セシリアの力が必要だ、というトミーからの期待の方が、少女の胸を弾ませた。



IS学園アリーナ。

学年別トーナメント、決勝戦。

西の選手登場口からは、金髪の貴公子シャルル・デュノアと、赤毛の元気っ娘相川清香。

東からは男性のホープ織斑一夏と、サムライガール篠ノ之箒。

それぞれ自分のISを身にまとい、開始位置に歩を進めて試合開始のコールを待つまでとなっていた。

いよいよ決勝、という緊張感は、しかし四人の顔色からは伺えない。全員から同じクラスメイトだからと、さらに仲の良いメンバーであ

るためだった。

自然と交わす会話も普段通りの口調がこぼれ出た。

「なんだか、いつも授業や放課後の練習でみんな一緒なものだから、目新しさが感じないね」

シャルルが眉尻を下げてそう苦笑する。

「だな。けどまさか、あの鈴たちを破って勝ち上がって来るなんて、シャルルたちもやるじゃないか」

一夏は、いつも練習でちょんけちょんにされる鈴が倒されたとあつて、シャルルたちを見直していた。

シャルルは不敵な笑みを浮かべて応える。

「おやおや？ 一夏は、僕たちが負けるとでも思っていたのかな？」

「いや、そうじゃないって」

「それじゃあ、相手が鈴じゃないからって安心した、とか？」

「変な探りを入れるのは止めてくれよ。あの自信家の鈴が負けて凹んでいるところを見るのなんて滅多にないもんだから、面食らってたさ」

一夏は頭をかいて、一つため息を着いた。

シャルルチームと鈴チームの試合の後、一夏はそれぞれのチームの健闘を称えに顔を出していた。

一夏に詰め寄って手を握ってクルクル回りながら全身で喜びを表すシャルルと、飛び跳ねて喜ぶ清香の嬉しげな姿は、一夏までも嬉しくなった。

その一方で、敗北した鈴の様子は、幼馴染である一夏でもなかなかお目にかかれないほど沈んでいた。

いたたまれず、鈴のそばに腰をおろして寄り添っていたのは、それだけ彼女が心配だったからだ。

「ふうん、それじゃあ一夏は、傷心の鈴を優しく励ましてあげたんだ」

シャルルは目を細めながら言った。

「な、なんか普段とイントネーション変わってないか？」

「そんなことはいいいから、教えて欲しいな。一夏は鈴を、どんなふうに慰めてあげたの？」

「別に。ただ、デコピンをしてやったよ」

「で、デコピン？」

ああ、と一夏が歯を見せて笑う。

「幼いときから、鈴との間の決まり事なんだ。つまんなそうにしていたり不貞腐れたりしていたときは、お互いにデコピンをして注意するんだって」

鈴も覚えていたみたいでな、と嬉しそうに一夏は語った。

「へえー……、そうなんだ……」

シャルルの濃紺の瞳に陰りが入った。

「さあつすが幼馴染だねえ。二人だけにしか分からない決まりごとがあるなんて」

「な、なんだよシャルル。急に怖そうな顔になって」

「怖そうだなんて、ひどいなあ。僕は純粋に一夏と鈴は仲が良いんだねえって、言っているだけなのに」

シャルルの声のトーンがオクターブ下り、アクセントも普段と違う。

なのに、表情だけはいつもどおりの微笑が、張り付いたように固まっていた。

「えーと、しゃ、シャルルさん……？」

「なんだい、一夏。そんなびくびくすることないじゃあないか」

「……何か、怒ってます？」

「怒ってるだなんて、変なことを聞くなあ。僕は、これっぽっちも、怒ってないよお？」

嘘だぞ、絶対に怒っているぞ。

他人の気持ちを推し量れない一夏でも、目の前のルームメイトが放っているオーラには流石に感じる事ができた。

そのオーラを緩めず、シャルルは言う。

「一夏、僕はね、この大会、絶対に優勝しようと思ったんだ。優勝しなければ手に入らない未来を掴むために」

シャルルのIS【ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ】が右足をズシン！と一歩踏み出した。

「そのために、これまでいっぱい練習をしてきたんだ。パートナーの

相川さんも、そんな僕についてきてくれた」

左手に持つアサルトライフル『ヴェント』を、敵に、一夏と箒に向けて構えた。

「宣戦と挑戦の合図だった。」

「だからね、たとえ相手が友達であっても、一夏が敵であったとしても――」

シャルルは、言葉を一泊置いて、鼻からたつぷり息を吸い込んで、宣言した。

「僕は、容赦しない」

◇

「おやまあ、シャルルくんも可愛い顔に似合わず、熱くなる性格なんだねえ」

アリーナのピット内でディスプレイに映るシャルルを見ながら、新聞部副部長、黛薫子は面白そうに言った。

「黛、記事にしたいのなら、この大会を無事に終えられてからにしろ」
「わかってますよ、織斑先生」

ケタケタ笑う黛に、やれやれと首を振りながら、織斑千冬は振り返る。

目の前には、一（にのまえ）十三八（とみや）、ラウラ・ボーデヴィツヒ、クラリツサ・ハルフオーフ、そして今しがた到着したばかりのセシリア・オルコットが揃っていた。

みな直立して千冬の指示を待っている。
（こうしてみると、それなりに見えるものだな）

国家代表候補生に、現役軍人、さらには反体制組織（オールド・ファッシュョン）の秘蔵っ子というそうそうたる顔ぶれだ。

相手がよほどのツワモノでも十分対処できるだろう。
かといって、それを過信することなく、千冬はキビキビと告げた。

「お前たちにはこれから、学園内に潜伏しているであろうテロリストに対処して貰う」

千冬の後ろにいる黨の顔から笑みが消えた。

「これは訓練ではない。信頼できるツテからの情報によれば、この決戦戦が特に危険だ。理由は、男性IS操縦者が勝ち残ってしまったからだ」

先刻、千冬が受け取った反女尊男卑主義組織『オールド・ファッション』のことづては、亡国機業に気をつけろ、という一言だけだ。

しかし千冬は、それが他ならぬオールド・ファッションの言だけに、男性側が不利となりえるものであると結論づけた。

しかも、この学年別トーナメントが開かれている時期にである。

ほぼ間違いなく、織斑千冬の弟、織斑一夏が標的にされていると推測できた。同様に、男性と偽っているシャルル・デュノアもだ。

であれば、二人ともまみえる決勝戦で何か起きないはずがない。

「現在、更織、布仏を始めとした生徒会メンバーが不審物のチエックや不審人物が紛れ込んでいないか学園中を調べてまわっている。お前たちは気兼ねなくアリーナにだけ専念しろ」

ところで、とトミーに視線を向ける。

「一（にのまえ）、お前に確認したいことがある」

「何でしょうか、織斑先生」

「お前はこのアリーナ会場を俯瞰して、レーダーのようにテロリストを見つけていることは可能か？」

「テロリストである目印があれば、可能です」

黨が眉を潜めて疑問を呈した。

一方の千冬は口元に孤をつくって笑み含んだ。

（やはりな）

と、オールド・ファッションの意図を汲んだ。

「おそらくテロリストは決勝戦を妨害するために何らかの行動をするだろう。それも戦っている選手たちに向けたものであると推定される。つまり使用されるのは、対IS用の装備である可能性が高い」

「では、一夏たちを狙っている曲者を、対IS兵装の有無によって判別できますね」

「それが何かは流石にわからん。だが、怪しいと思う者を見つけたら

すぐに知らせろ」

「承知しました」

「オルコット、ボーデヴィツヒ、ハルフォーフは、一（にのまえ）に指示された相手を取り押さえられるよう会場に散れ」

「了解しました」

軍人たちは型にはまった敬礼で織斑千冬に返事した。

セシリアも真剣に頷き返す。

何か質問はあるか？ と確認を入れた千冬に、

「あの、セシリアは僕のそばに置いて貰えませんか？」

トミーがおずおずと提案した。

呼ばれたセシリアは跳ね上がるように身をすくめ、顔をトミーを向ける。

「オルコットを？ なぜだ？」

「セシリアの『ブルー・ティアーズ』なら遠隔で操作できますので、直ぐに僕の示す先へ飛ばせると思いました。……できるよね、セシリア？」

「もちろんですわ！」

元氣よく応えるセシリアに、ふむ、と千冬は思案する。

「……なるほど、広い範囲をカバーし速やかに対応できるぶん、相手の機先を制しやすくなるか」

「相手がひるんだところをラウラとクラリツサさんに制圧して貰えればよいかと。その点では二人とも、プロですから」

「確かにな。いいだろう、その作戦で行くでしょう。他に質問は？」

「……ないようならば、これより作戦開始とする。黛」

「はい」

「各員が指定の場所へ配置後、決勝戦のコールを入れる」

「了解です。それじゃあみんな、お客さんがた待ちわびてるから、直ぐに取りかかっちゃって〜！」

その黛の言葉を合図に、トミーたちはその場から散開した。

ピットに待機している他の整備科の生徒たちも、めいめいが受け持つ役割を再開する。

去り際に、ラウラが、

「トミヤ、くれぐれも無茶はするなよ。『目』の長時間使用は身体に障る」

「わかってるよ、ラウラ」

「セシリア、見ての通りわかってない。おかしいと見たら直ぐに取り押さえろ。私が許す」

「あら、押し倒しても構いませんかの？」

「脳が焼き切れるよりはマシだ。……頼んだぞ」

走り去るラウラの言葉に、セシリアはドキリとした。

まさかのラウラからの信用の言葉と、トミーがこれからしようとする事への危険性に対してだった。

「トミーさん、あなた、また危険なマネを……」

セシリアは苦笑しているトミーに向けて心配そうに声をかける。

「ラウラもセシリアも、案外僕のこと信用していないよね」

「いつも無茶ばかりなさっているからです」

「今回は一夏たちが狙われるかもしれないんだよ？」

「そのためにご自分を犠牲にしてよい訳がありませんわ！」

「だけど、テロリストを見つけないことには……」

セシリアは思わずトミーの手をとった。

驚いた顔のトミーに、セシリアは辛そうに語る。

「私は、そんなに頼りになりませんか？」

「え……」

「ラウラさんやクラリツサさんは、あなたの頼りになっているのに、私は頼りになりませんか？」

作戦会議でトミーがセシリアの『ブルー・ティーズ』を指定したとき、念の為か確認を挟んだ。

テロリストの確保を指定したラウラたちには、なんの確認もしていなかったのに。

それをセシリアは見逃さなかった。

「……セシリア」

「はい」

「頼んだよ。僕を、一夏たちを、助けてくれ」

「はい……！」

その言葉に、セシリアは胸がいつぱいになった。

目に溢れるものを懸命にこらえた。

(絶対に、あなたの期待に応えてみせます！)

いまだけは、トミーの目にはセシリアしか映っていないのだから。

セシリアがトミーを握る手に力がこもった。

28. 友達がいつもと違って見えるとき――fall

i n . . . |

「ね〜、ね〜、マジで、ホントにやんの〜?」

けだるそうな声で、オレンジ・ブラウンのパーマヘアが映える少女が言った。

少女といっても、メイクをしっかり施された顔はすでに大人の女性と同じくらい整っている。ただ、眠そうな目つきと、露出度の多くアレンジされたIS学園の制服が不釣り合いで、背伸びをしている感じがした。

はだけられた胸元に引っかけかかっているだけのリボンの色は赤。それは三年生であることを示している。

「やるよ。ううん、やらなきゃいけないでしょ」

キツパリと問いかけに答える少女は、目をギラリとさせた。

黒のロングヘアが顔の輪郭と目元を隠し、よけいに目つきを際立たせている。

シワのないキツチリとした制服のリボンは同じく赤色。

「わっかんないんだよね〜。アンタはウチと違って成績優秀じゃ〜ん? ワザワザ危ない橋渡ることなくない?」

「それ、今更なんだけど。あのLS乗り野郎と戦り合った時点で、もう危ない橋ダツシユで渡っちやってるから」

「だけどさ〜」

パーマの少女はチラリ、と後ろに目を配る。

自分たちのいるIS学園アリーナ屋内のトレーニングルーム入り口に、二人を見張る人物を見つげられた。

その眼鏡の生徒はさり気なさを装い、しかしピッタリとくつついてくる。

「あのいけ好かない眼鏡会計も、今回ばかりは出し抜けられるんだからさ〜」

「ああ、同期首席の布仏虚ね」

「別にウチ一人だけでも構わないし、アンタが抜けるチャンスはこれがラストだよ？」

「抜けるわけがないでしょ」

黒髪の少女は、フン、と忌々しそうに鼻を鳴らした。

この二人は以前、トミーと鈴の模擬戦に横槍を入れた生徒たちだった。

二人にとっていけ好かない、国家代表候補生で転校生の鈴と、男でISもどきを操縦しているトミーを事故を装って不意討ちしたのだ。

トミーを撃墜し鈴を嘲笑したまではノリノリだったのだが、トミーのLSに搭載されているVTシステムが暴走を起こし、瞬く間に蹴散らされた。

その後、居合わせていた一夏たちの証言によって、二人の行いが不正であると処断され、退学が示唆されるほどその立ち位置は危うかった。

いま、布仏虚に監視されているのも、生徒会から危険人物であると目をつけられているためである。

「私だってね、都合があんのよ。じゃなきや、こんな状況になった事も、これからやろうとしている事も、ガチで請け負う訳がないっしょ」

「都合ねえ。そんなに巻紙おねくさんに言われたことが嬉しかったの？」

「どっちの話？」

『『みつるぎ』とかいうIS関連会社からの引き抜きの話』

「ナイナイ。仕事も金も興味ナイ。私の親が成金だつてこと、前に話したでしょ？」

ああ、とパーマの少女は髪を跳ね除けながら応じた。

この同期の黒髪の親は、IS関連商品を世間に先立って手掛けることで多大な成功を収めていた。さらに、世の中が女尊男卑に変わる事を見越したビジネスモデルを作ること、時流に乗って大変に儲けているそうだ。

「ママったら、景気が良くなつてからイケメンを取っ替え引っ替えしまくつてさ。私の弟妹を十何人もこしらえてやんの」

「はあ〜!? マジい? ビッグ・ママじゃん!」

「全員試験管ベイビーだよ」

「あ、そ〜ゆ〜オチね」

ガクツ、とズツコケるが、意外そうな顔ではない。

世間が女尊男卑になって以来、出産や子育ての環境は大きく変わってきている。

妊娠のために自分のお腹を痛めて仕事を休むことを厭う女性は、彼女の親のように体外受精を行い、それを体内に戻すことなく培養液の中で育てる例が多い。

その方向の技術革新は、ここ数年で飛躍的と言ってよかった。

「でもさ、アンタはかくちちゃんの腹から産まれたんじゃないの?」

「……別の女使った代理出産よ」

「うっわ……、変なこと聞いてゴメン」

「いーのよ。仕事と男を統べる女なんて、そんなもんっしょ」

「冷めてんね〜。まっ、ウチの親もたいがいだけどさ」

「何言ってるの、政治家でしょ? アンタの親」

「そ〜よ。女尊男卑社会によって締め出された、かつての与党の有力議員ってね。今じゃ椅子にしがみついているだけの野党の末席」

「あー…、ね」

黒髪の少女は淡白そうに相槌を打つと、ダラリと天井に顔を向けた。ロングヘアーが垂れ下がり、頭になった顔に浮かぶ表情は虚ろだ。

パーマの少女も肘をついた姿勢で無言のまま、面白くなさそうにため息をついた。

そのまましばらく、静寂が過ぎ去った。

遠く、トレーニングルームの外のアリーナ会場で、歓声が巻き起こったように聞こえた。

学年別トーナメントの、一年生の決勝戦が始まったのだろう。

「……フツ」

「ハッ」

唐突に二人は自嘲気味な笑みを見せた。

自然と合わせる顔には、皮肉そうな目をたたえている。

「巻紙おねくさんがもう一つの話をしたときに、あんた目つきを変えて喰いついたっけね」

「そうよ。ホント私にとっちゃ好都合。ピッタリっしょ？ 親不孝希望者にはさ」

「アハハッ」

「笑わないでよ、厭世家」

「いーじゃん。面白きこともなき世を面白く、ってやつよ」

「アンタにイシンシシは似つかわないよ」

「イシンシ……、なにそれ？」

「ニッポンの革命家」

軽口を交わしながら、二人は身を起こした。

やれやれ、いくかく、とダラダラと準備をする。

身にひそませるのは、学園の訓練機 I S の待機状態。

その装備には、以前トミーを撃ち落としたり大砲も添付されている。

二人はこれから道にそれた行いをするのだ。

今まで人気のないこのトレーニングルームで、ひたすら駄弁つてくつろいでいたのは、学生でいられる間の最後のモラトリアムを噛み締めているためだった。

これからやることに後悔はない。

I S 学園という名門の学籍にも、すでに興味は失せた。

世界的な権威を持ち、猛烈な倍率のある I S 学園に通って、女尊男卑の世間によって狂わされた親を持った少女が、女尊男卑の世間を作り上げた力の象徴である I S に乗っている矛盾。

むしろそんな二人だからこそ、多くの女性が憧れる I S 学園の学籍も卒業の資格も、蹴り捨てて新たな道を選択できたのかもしれない。

パーマの少女の上着からファンシーな音楽がする。

携帯端末への着信だった。ディスプレイに浮かぶ送信者の名前に、お、という声をあげて届いたメールに目を通した。

「……巻紙おねくさん、ああ、せつかくだし、オータムさんって呼ぼう

か。オータムさんが言うには、いよいよ私たちの出番だつてさ」
「アンタのケータイにだけ連絡？ 私もアドレス交換したんだけどな」

「ウチの方が先に入ったからね。オータムさんの組織に」

「そつか。じゃ、ご指導お願いしますよ、『フオール』パイセン」

「お、いくね、コードネーム呼び。ちゃんとしてきなよ『オートーニョ』」

二人が笑う。

女学生らしいあどけなさ、世間擦れした軽薄さが混じり合ったよ
うな笑みだった。

トレーニングルームの入り口から、何やら話し声が聞こえる。

見れば、ロングヘアーの美女が布仏虚に道を聞いているらしくかっ
た。

その美女の正体を二人は知っている。

あてがわれたスキを逃さず、フオールとオートーニョは音もなくその
場を後にした。



決勝戦が開始されたIS学園アリーナの一角。

会場全体が見渡せる展望台の上に、ISとLSを展開させたセシ
リアとトミーが並んでいた。

集中し、遠い目をしていたセシリアがトミーに振り返る。

『『ブルー・ティアーズ』の展開配置、完了しましたわ』

『ご苦労様。うまく会場のみんなに気付かれなかったみたいだね』

「せっかくの決勝戦ですもの、試合を邪魔する訳には参りませんわ」

「そうだよ。一夏たちも、シャルルたちも、頑張つて勝ち登ってきた
んだもの」

会場で繰り広げられるクラスメイトたちの戦いに、トミーは目を細
めながら言った。

身内びいきかもしれないが、仲間たちの成長は本当に目覚ましい。普段の練習もよく見てきたものだから、こうして決勝戦まで進んで来れたのは嬉しさもひとしおだった。

そんな友人たちの活躍を、テロ対策だからと水を指すのは躊躇われた。

「それにしても、『グレイ・アイデール』の下半身の四脚、装着いたしませんのね？」

「ああ、『グレイ・グリーブ』のことか。実は、しばらく使わないように指示されてね。別の装備だけで頑張るように、ってさ」

「そうでしたの。いえ、こうして装備を展開しながら視線を並べるのは、初めてになるものですから」

「ああ、いつも僕が見下ろす格好だったものね。失礼だったかな」

「そういうわけではなくて、その、肩を並べるのも、初めてですし」

「そういうえば、そうか」

トミーは珍しげに言った。

セシリアとはよく一緒にIS操縦の訓練をしているが、ほとんどの場合試合相手のように向かい合う形になっていた。

横に並んで同じチームで練習するということはない。お互い専用機持ちというせいで、タッグを組まれては周りとの戦力差がありすぎて、練習にならないからだろう。

「でも、こうしてセシリアと一緒に戦えるのは、嬉しいし、頼もしいな」

トミーの笑みに、セシリアは頬を紅潮させた。

「ええー！ わっ、わたくしもですわー！」

上ずった声でしどろもどろに答える。

そこに、トミーの右手がセシリアの左手を握った。

「はひゃあ!?!」

「あつ、ぐ、ゴメン。失礼だった？」

「そそそそ、そういうことではありませんわ！ イキナリだったものなので、つい……」

セシリアは呼吸を整えると、コホン、と一つ咳払いを入れた。

「珍しいですわね。トミーさんから積極的にアプローチをして下さる

なんて」

「これから行う事に対して、ちよつとね。気に触っちゃったならひかえるよ」

「いいえ、そのように頼って下さるのは嬉しいですわ。ですが、マナーもごぞいましてよ」

セシリアは自身の胸元に右手を置きながら、トミーに面と向かい合った。

「殿方は、淑女の右手の前でかすずき、その右手をひくのですわ。多くの場合人は右が利き腕ですから、それを相手に預けることで信頼を表し、身を委ねることを意味しますの。一般的に言う、エスコートの状態ですわね」

「な、なるほど」

「さあ、トミーさん……」

セシリアは優雅な動きで右手を差し出し、にっこりと微笑んだ。

「こう、かな」

トミーはぎこちなくセシリアの右手の前でかすずくと、うやうやしくその手を自分の左手で受け取った。

言われたとおり、すとセシリアを引き寄せる。

と、ふわりとその淑やかな身体がトミーの胸元に吸い込まれた。

「わ……」

トミーは小さく驚きの声を上げた。

普段は特段意識しない友人の姿が、今はとてもいじらしいものに感じた。

セシリアの動きに合わせてなびく甘い香りが鼻孔をくすぐる。

間近に見る少女の瞳は僅かに潤み、頬は朱色に染まり、その美貌は息を呑むほどに美しい。

トミーは、不意に、目の前の女を強く胸に抱きしめたい衝動に駆られた。

「……………トミーさん？」

「!!」

ハツとトミーは我に返った。

目の前いっぱいにはセシリアがいた。

知らずに彼女に近づいていたのだ。

もし今セシリアが呼ばなかったら、一体どうしていただろう。

「ご、ゴメンー!」

トミーはセシリアから顔を反らすと、苦しそうに自分の右手を自分の胸に押しやった。

心臓がけたたましく鳴り響き、汗がダツと流れ出る。

「だ、大丈夫ですか?」

セシリアの問いかけに生返事を返す。

鼓動は尚も苦しいほど高鳴りを続けている。

繋いだ手を通してセシリアにも伝わっているのではないかと気恥ずかしさを覚えたが、その手を放すことはできなかった。

遠くから、一夏たちの戦いの音が聞こえる。

そうだ、こうしてはられないのだ。

自分たちはしなければならぬ事があるのだから。

そう意識をむりやり引き戻すと、ようやく呪縛から解かれたように動くことができた。

「大丈夫……」

トミーはそう安心するよう口にした。

自分に対してかセシリアに対してかはわからない。

「本当ですか? 汗もおかきになっているみたいですから……」

「ううん、少し緊張してみたんだ。もう、平気だよ」

言うと、トミーは一つ深呼吸しようとして、やめた。

セシリアの甘い香りをこれ以上受け入れるのは非常に不味いと、脳裏で警鐘が鳴ったのだ。

代わりに、セシリアから向きを返して、手を繋いだまま横並びの格好になった。

アリーナ会場全体を望む形だ。

「……うん、よし」

視界がクリアになり、ようやく一息着けたように感じた。

僅かに感じる名残惜しきは頭の隅に押しやった。

「やるよ、セシリア。テロリストを捕まえよう」

「はい。でも、どのようにして見つけますの？」

「僕の目のチカラを使う。見たものを全部スキャンしてレーダーみたいに捉えられるから、変なものがいたら分かるはずだ。ただ……」

「ただ、なんですかの？」

「長くは使えない。負荷がかかり過ぎて、脳が処理しきれなくなってしまうんだ。だから、インターバルを入れながら探してみるけど」

トミーはセシリアの顔に振り返った。

「セシリア、その間、僕を支えていて貰えるかい？」

お願いに、セシリアは、まっすぐにトミーの瞳を向いて、嬉しそうとも心配そうとも捉えられそうな表情で、力強く答えた。

「はい。貴方を、支えてみせます」

繋いだ手が指を絡める。

それに、トミーは再び胸の鼓動が高まった事を自覚した。

しかし、今度は苦しいほどの荒々しい鳴動ではなく、胸に暖かさが広まるような高鳴りだった。

今なら、どんな敵でも、どんな無茶でも、乗り越えられそうな気持ちになった。

トミーは静かに目を閉じ、少しうつむきがちにアリーナに向き直る。

そして、カツ、と見開かれた瞳は紫色の輝きを帯びて、見えるものすべてをその奥底まで補足した。

29. バグ技は本体を痛める恐れがありますので―― Guilty Power――

心の中でカチツと点火音がした。

同時に、瞳が空色に輝き、赤色のコンタクトレンズが光を屈折させて紫色にきらめかせる。

ラウラの眼帯同様、機能制御装置（リミッター）を持つコンタクトのセーフティが、眼光によって開放された。

視界が一変する。

眼下の闘技場で繰り広げられるISバトルの光跡、周囲の観客席を埋める生徒たちの姿、自分が立っている展望台の床飾、それら僕を取り巻くありとあらゆるものが、電子データの集合体へと変貌した。

世界はコンピュータ・シミュレーションだったという話の映画そのものに、あらゆるものが情報で満たされる。

世界の理を越えて根源を見透す。

『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』というだけそれた名前に違わない能力だ。

実はエラー・バグを使った裏ワザでしたと言わなければ、本来の機能と間違われるだろう。

（初期施術不良が、こんな形で使えるなんてね）

超常のチカラは臨床試験被験体の約得だ。

研究内容はナノマシン投与によって疑似ハイパーセンサーを人体に施し、反射神経とIS適合性を向上させること。

その目的は見事にハズレたが、得難い副産物をプレゼントしてくれた。

頭痛持ちの薬漬け生活と引き換えに、世界をサイバー空間に捉え直してデバッグモードのように見れるチカラを与えてくれたのだ。

僕がIS戦闘で相手の動きを読み、攻撃を切り払える技も、種を明かせば失敗治験の予期せぬ恩恵に他ならない。

もつとも、試験自体は当然ながら安全性に配慮して修正された。

僕以降の被験者たちへは、僕に発生した問題を元に改良されたナノマシンを処方されたらしい。結果、ラウラのように on/off を切り替えられない不具合は一部あっても、人体能力向上と IS スキルアップという主眼は達成できたようだ。

踏み台にされた僕の『越界の瞳（ヴォーダン・オージェ）』は、僕だけに与えられた他に例のない、言わば『唯一仕様の特殊能力（ワンオフ・アビリティー）』と呼べるシロモノだと前向きに受け取めている。「——見えた！」

電子情報化されたサイバー空間には床や壁といった遮るものがないため、お尋ね者はすぐに見つけられた。

織斑先生の言ったとおり、IS 装備を検索に入れたら簡単にヒットできたのだ。

「どちらにですの、トミーさんっ！」

僕の左手を力んで掴むセシリアが、視線を会場に向けたまま問いかける。いつでも『ブルー・ティアーズ』を動かせると左の指呼を突き出していた。

「11時方向、客席のシエルター・シャッターが合わせ目になる柱の影だ！ 二人いる、……片方が大砲、じゃない、ミサイルランチャーか？ それ構えていて、もう一人が望遠レンズを覗いている」

「恰好から砲撃手と観測主だと推測しますわ。させません、お行きなさい『ブルー・ティアーズ』！」

セシリアの手振りに合わせて、アリーナの屋根に散開していた『ブルー・ティアーズ』がターゲットに向けて機動した。客席を横切らず屋根の稜線に沿った配慮が、彼女の気遣いをうかがわせる。

僕はLSのプライベート・チャンネルで、アリーナの何処かで息を潜めて待機しているのであろう、ラウラに通信を入れた。

「受託、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「ラウラ、聞こえる？ テロリストを見つけた！」

「トミヤか。敵は何処だ」

ラウラの無機質な声音が落ち着きを表していて頼もしい。

「会場南側の柱だ。セシリアの『ブルー・ティアーズ』が向かっている、

それについていって！」

「承知した。これより捕縛する。行くぞ、クラリツサ」
「了解！」

サイバー視界に二つのデータの動きが生まれた。

『ブルー・ティアーズ』と同じくアリーナの屋根の上。

ISを纏ったシグナルが、東西から南にいる敵へと向かっている。相手も狙われている事に気付いたのか逃げようとするが、『ブルー・ティアーズ』が機先を制して取り囲み足をもたつかせた。

そのスキを逃さず、ラウラとクラリツサさんが急行するなり武器を構えて制圧する。

これで決まりだろう。

よかった、一夏たちの試合に影響は起きていないみたいだ。

「……つつ」

安堵と同時に頭痛がほとぼしった。『越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）』の使用限界だ。

足がぐらつき、吐き気をもよおし、視界が回る。

（あと少し、持ってくれ！）

過半まで順調に進んでも土壇場で何が起きるか気が抜けないのが作戦だ。

ラウラ達なら大丈夫だろうが、テロリストがどんな悪あがきをするか分からない。

それに隣には『ブルー・ティアーズ』の遠隔操縦に集中しているセシリアがいる。

指を絡ませて握り合う彼女の手に、不調を伝え心配させたくはない。

僕は足腰を踏ん張り、奥歯を食いしばって堪えた。

（落ち着け……、呼吸法だ。短く深く吸って、長く細くはいて……）
息を整え気を取り直す。

（……よし）

大きく息をついて顔を上げると、ラウラ達がテロリストたちを取り押さえているのが見えた。テロリストたちはISも装備も量子化し

ている。

これならもう大丈夫だろう。

『越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）』を解こうと、切り替えようとして目を細めた。

その時、

（――！・ 新たなIS反応？）

不意にあらぬ方向からISの発現を感知する。

データ配列は見たことのないタイプだ。

（場所は、アリーナのピット？ 織斑先生や技術科の生徒のもの、じゃない!?!）

僕は頭痛で視界が歪むのに耐えながら状況を確認する。

（IS反応が織斑先生に接触した、……あつ!?! 織斑先生が後ずさる？ 動きがよろめいている、攻撃を受けたのか!?!）

彼方で起きているただならぬ事件に、僕は自分たちが取り押さえたターゲットがどんな役割を担っていたのかを直感した。

「しまった！ あのテロリストたちは罠だ！」

反射的に飛び出した叫びに、隣のセシリアと、プライベート・チャネルが開きっぱなしのラウラが息を呑むのが聞こえた。

聞いただす声が重なって響く。

僕は答えることなく、セシリアの手を引いてピットへ飛び出した。説明する寸暇が惜しい。

僕たちは、まんまと罠にハマられたのだ。

◇

（まさか、私を直接狙ってくるとはな）

左腕の裂傷を右手で抑えながら、織斑千冬はピット内の生徒たちを後ろに庇いつつ、内心毒づいた。

『オールド・ファッシュョン』からの手紙の警告を思い出す。

届いたのが学年別トーナメントの時期であることと、送付者が反女

尊男卑主義者であることから、トーナメントで男性IS操縦者に危機が迫っていることを忠告したいのだろうと推理していたのだが。

(もう少し、自分の立場を勘定にいれるべきだったか)

予想は半分当たっていた。

トミーたちがテロリストを退治しているのはピット内からも伺えている。

もう半分が、受取先の織斑千冬本人に宛てた手紙であったことは想定外だった。

「織斑先生、血が！」

千冬の後ろで、両手を広げて仲間たちをかばっている技術科のエース、黛薫子が悲痛な声を上げる。

力なく垂れ下がった千冬の左腕から、足元に赤い雫が滴り落ちていた。

「案ずるな。流れている程度だ。嘔吐はしていない」

「いやいやいや、安心できませんよそれ!？」

「深手ではないということだ。後で治療すれば問題ない」

「今が絶望的な状況に変わりはないでしょう！」

千冬は口をつぐんだ。

(確かにな)

と喉まで出かかった自認を飲みこんだ。

生徒を守るべき教師が諦めるなど許されない。

たとえ相手が、世界最強の兵器インフィニット・ストラトスを装備しているようともだ。

千冬は目の前に立ちはだかる偉容を睨み付けた。

人型ではない。八つの脚を持った蜘蛛型のレイアウトだ。色は橙と紫を基調とし、けばけばしくも妖艶さがある。

狭くはないピット内だが圧迫感を与えるほど大きい。

操縦者の顔はフルフェイスで隠されているため分からないが、首の傾きからして千冬を見下しているのは伺えた。

「無様なものだなあ、ブリュンヒルデ」

ISパイロットとして当然ながら女性の声だ。

ねっとりとした粘着質のある、お手本のような下卑た嘲笑が耳につく。

「ドアをロックした程度でピットの中に入れてもらってるなんてなあ。不用心にも程があるぜ？　ちゃんと危機管理教育してんのかよ？」

「何が目的だ、『亡国機業』」

「解んだろ？　お前だよ、織斑千冬」

「誰の恨みだ。手掛かりが絞れん」

「誰でもいいだろ、そんなこと。冥土の土産なんぞ持って来てねえからなあ！」

蜘蛛が脚を開き飛び掛かる。

蹴りだ。

それも鋭利な刃物を仕込んだ八脚の連撃。

「クッ！」

千冬は傷付いた左腕の袖を口に噛んで吊り下げ、右手にヒ首を服の中から取り出して逆手にかまえた。

無謀だ。

ISに生身の人間が相手になるはずがない。

普通ならば。

「おおっ？」

蜘蛛が面白そうに感嘆した。

千冬はしなやかな動きで身体を回転させ、紙一重で躲しヒ首で受け流し、一連の足蹴を捌いてみせたのだ。

「はっ！　えらい、えらいなあ織斑センサー！　生徒の前だ、頑張んなきゃなあ！」

蜘蛛は左右にステップを振りながらフェイントを混ぜえて攻め立てる。

蹴りだけだ。

装甲脚には実弾発射口も備えているのに。

（おのれ、弄ぶか！）

千冬は身をかがめて避けると、地を舐めるように飛び込んだ。

蜘蛛は凶体のぶん足元がお留守で反応が遅れる。

一瞬の隙を逃さず、怒りと勢いを込めた匕首が、装甲の無い敵の太ももに振り上げられた。

「んなあ!？」

匕首の直撃は、遮られた。

ISシールドだ。

肌があらわになる部位だったが、しっかりシールドで護られている。ISを防御においても最強たらしめる理由の一つが防いだのだ。しかしISシールドは衝撃までは減衰できない。

千冬の斬撃は匕首が折れるのと引き換えに、強烈な衝撃を敵の右太腿に叩き込んだ。

敵はたまらずたたたらを踏んで引き下がるが、

「いつてえなあ!!」

怒りにまかせて四肢を振り回し、手当たり次第に薙ぎ払った。

周囲の機器がズタズタに切り裂かれ、破片があたりに飛散する。壁に当たって跳ね飛び交い、生徒たちにまで襲い掛かる。

(いかん!)

千冬が身を投げて生徒達の盾になった。

そこに暴れる蜘蛛が吹き飛ばした椅子が腹部に直撃し、身体をくの字にへし曲げる。

「ぐふっ……!」

膝を付き、右手も床につき、噛んで吊っていた左腕がだらんと下がった。

咳き込む吐息が苦し気に風切る。

「織斑先生!」

黛が膝について手を貸し、千冬の背中をさする。

生徒たちの、キヤー! という甲高い悲鳴が響き渡った。

「うるせえ! わめくなガキ共!!」

蜘蛛が一喝する。

「ピーピー鳴いてばっかか? 情けねえなあ! この世界最強に護られてんだぞ! それでもエリートかお前ら!」

最初の下卑た笑いとは打って変わった迫力のある叱責だった。

生徒たちは身を震わせるも、声を失ったように静まり返る。

蜘蛛のフルフェイスは学生たちの様子を見渡すと、床に這いつくばる千冬に向いた。

「……教師稼業で鈍っているかと思えば、そうでもないみたいじゃねえか」

「生徒たちには、手を出すな」

「そのつもりだったがな。お前に足切られて反射的にねえ。不可抗力って奴だ」

蜘蛛の脚が一本、千冬の目の前に伸びた。

銛のような先端がゆっくりと下がり、先程切りつけた右太腿の同じ箇所で止まる。

「さっきの礼だ。覚悟しな」

冷酷に告げられた言葉に、千冬は睨み返して不屈を示した。

脚が引き絞られる。その瞬間、

ガアンッ！

という打撃音がピットの壁に響き渡った。

二度、三度、四度。

何度も何度も撃ちつけられる。

「……早かったな、ご苦労なこった」

蜘蛛は肩をすくめた。

「でもな織斑千冬、お前を襲撃するタイミングはいくつもあった。なのにわざわざこのピットの中まで来てやったのは、どういう理由か解らんだろ？」

千冬は盛大に舌打ちしなくなったのを、生徒達の前ということだろうかうじて押しとどめた。

蜘蛛が言わんとすることが重々承知できたからだ。

IS学園アリーナのピットはシエルターとしての機能を持っている。それも並大抵のIS兵器ではびくともしないほど分厚い装甲で護られていた。

もし学園が襲撃されても対応できるよう、指令を出せる本部という役割を担うためだ。

中に敵が踏み込んで来ては絶対にいけない箇所だというのに。

(はじめにコイツが言ったとおりだ。なぜ容易く中に入れてしまったのか!)

一夏たち男性IS操縦者がターゲットだとばかり踏んでいたせいだ。ピット担当の生徒達へ警戒を怠り、自分たちへの配慮がおろそかになってしまった。

後悔先に立たずとはこの事だ、と千冬は苦汁を噛み締めた。

「ま、助けも来たみてえだし、さっさとケリをつけて帰らせてもらおうぜ」

外からの壁ドンをBGMに、蜘蛛が再び脚を引き絞る。

救助隊も諦めたのか、一瞬、壁への衝撃が止んだ。

一瞬だけだった。

二拍目に、強烈な轟音と共にシエルターの壁がぶち破られた。

「まっ…、じかよっ!」

灰色の柱のような極太の杭が、蜘蛛めがけて突っ込んでくる。

仰天して後ろに下がるが間に合わず、足が二本えぐり飛ばされた。

杭は反対側の壁に突き刺さると、ライフリングされていたのか回転が残っている。

「あの色、杭、まさか、『グレー・スケール』? にしては、大きすぎるけど……」

黛が整備科の頭脳を回転させるが、他の生徒たちの判断は冷静だった。

「黛先輩! とにかく織斑先生の救助を!」

「私、ハンカチ持ってます! これで傷をおさえましょう!」

「そ、そうね。お願いするわ!」

「外部への緊急ダイヤルは!」

「やっています、さつき計器を壊されたせいか繋がりません!」

「ケータイ! 誰でもいい、外へ連絡しろ!」

「了解です!」

技術科の生徒たちが、果たすべき役割を模索して奮闘している。

緊急時の対策マニュアルはおざなりだが、それでも対処しようとする

るのがIS学園の生徒というエリートたちだ。

千冬は教え子たちの活躍に口元が緩みかけた。

「外から、何か来ます！」

生徒の一人が言うように、杭がこじ開けた穴の外から青いユニットが飛び込んできた。銃口を備え、ISの装備のようだ。

『ブルー・ティアーズ』、オルコットか」

千冬は見慣れた教え子の武器の名前を呟いた。

きつとどうにかしてこちらの状況を掴み駆けつけてきたのだろう。

(私が思うよりも優秀だな、ウチの生徒たちは)

ピットの整備科たちといい、オルコットたちといい、緊急事態へ柔軟に対応できる姿に頼もしさを感じた。

千冬の眼前では、外から次々と『ブルー・ティアーズ』が入ってくる。続けて6つ。

生徒たちの前で横一列に整列すると、主もいないのに蜘蛛に向けて整然と銃口を構えた。

「オイオイ、こつち見えてんのかよ？」

蜘蛛の呆れた問いに答えるように、一斉射撃が開始された。



トミーがセシリアの右手を取り、穿たれたピットの壁に向け掲げている。

『越界の瞳 (ヴォーダン・オージェ)』の紫の光は壁の向こう側の状況をつぶさに見通し、セシリアに伝えていた。

「……撃ち方、もう止めていいよ。敵は退散したみたいだ」

「わかりましたわ」

重ねた手を下ろして、展開した装備を量子化させる。

トミーも、先刻渡された「グレイ・アイディール」の新装備、『グレイ・グローブ』の展開を解いていた。

手甲部位の『グレート・グレー・スケール』が放っていた硝煙だけが、残り香となって漂っている。

「織斑先生や、生徒たちはご無事でしょうか……?」

セシリアは心配そうにトミーを向いた。右手で目を覆っていて表情が掴めない。

「良くないね……。織斑先生は手傷を負っているみたいだ」

「そんな!」

「いま後ろの廊下から保健委員の生徒たちが担架を担いでくるから、すぐに保健室へ運んでもらおう」

見れば、トミーの言う通り、団体が急いでバタバタと走って来ている。

セシリアは少しだけ胸を撫で下ろした。

「本当に、なんでもお見通しなのですわ……。それでは、わたくしたちは不届き者を追いましょう!」

「いや……」

「心配ご無用ですわ。あなたと一緒にならわたくし、何処まででも行ける気がしますもの!」

胸を張るセシリアは今日、これまでにない充実感があつた。

『ブルー・ティアーズ』は思い通りに動かせられるし、長時間運用しているのに集中力はまったく衰えない。

トミーとタッグを組んだお陰で力が凜々とみなぎっていた。きつと学年別トーナメントに出場できたなら優勝できたに違いない。

そう確信していた。

「うん……」

「……トミーさん?」

反応の薄いトミーの肩をゆすると、のそりセシリアの胸元にしなだれかかってきた。

いま身に着けているISスーツは生地が薄いため、もろに互いの感触が伝わってしまう。

「えっ!? あの一、い、いけませんわトミーさん! そんな、人前でだなんて……!」

嬉しそうにトミーを受け止めるが、もたれてくる重みが不自然にあつた。

「トミー、さん……？」

顔を覗き込むと、額からダラダラと汗を流し、苦しそうに息をしているのに気が付いた。

しまった！ とセシリアはラウラからの忠告を思い出した。

危険な力を使うから、無理をする場合叩いてでも止めろと言われていた筈だったのに……！

「トミーさん！ しつかりなさってくださいまし！」

調子良く『ブルー・ティーズ』の運用にかまけていたばかりに、互いの手を握り合っていたにもかかわらず、隣人の容態に気づけなかったとは。

なんのためのパートナーか。

自分のことしか考えられないで。

作戦前に、トミーを支えてみせると、断言していたのに。

「ああ……、ゴメンなさい、ゴメンなさい！ こんなはずは……、もっと早く気付きましたのに！」

セシリアはトミーを胸に抱き締めながら、何度も何度も謝罪を繰り返して、自分のふがいなさを罵った。

30. 表のハッピーエンド。裏のビターエンド― the llo Game Over―

通信端末が通知する着信名に、金髪の女性は熱のこもった吐息を着いた。

シャープな造形のサングラスの奥でまなじりが下がる。

スレンダーな足をくねらせ、引き締まったヒップが赤いレディース・スーツのスカートにぴっちり煽情的なラインを浮かび上がらせる。くびれた腰と豊満なバストも相まって、女盛りという形容を象つたような美女だった。

「はあい、愛しいオータム。ご機嫌はいかがかしら」

落ち着いたセクシーボイスの通話の向こうでは、走っているような弾んだ息遣いがする。

「ああ、美しいスコール。気分はいま最高になったぜ。さっきまでは最悪だったけどな」

「あら、貴女の心をかき乱すなんて、相手はどんないけない輩なの？」
「エリート学園のガキどもと、分不相応に相手をしている織斑センチーだよ。あのアマ、腕は鈍っていないみたいだぜ」

うふ、とスコールと呼ばれた女性の口角が禍々しく歪んだ。

「それじゃあ大切な教え子をウチで引き取ってあげましょうか。そうすれば少しは頭を冷やしてくれるでしょうから」

「そうしてやってくれ。ああ、だけどなスコール」

「なあに、オータム？」

「フオールとオトニーヨのこと、くれぐれもちゃんと迎えてくれよ。着の身着のまままで来るんだから、その、ちったあ心細いだろうかと思つてよ」

「うふ、うふふふふふ……」

「が、柄じゃねえってことは分かっているつもりだが、なにもそんなに笑うことはねえだろうか？」

「いいえ、嬉しいのよオータム。貴方って本当に素敵よね。自分が見

込んだ女の子はちゃんと親切に面倒を見てあげるんだから。惚れ直しちゃったわ」

「う、うっせー!」

「そのやさしさをエムにも分けてあげたらいいのだけれど?」

「あいつはダメだ。まるで可愛げがないからな。どうにもいけ好かねえ」

「残念ねえ」

スコールは楽し気に喉を鳴らすと、瞳を冷徹に尖らせて前を見据えた。

サングラス越しの視線の先には、IS「シユヴァルツェア・レーゲン」を装備してスコールを伺うラウラの姿があった。

背後には苦痛に顔を歪ませるクラリツサが身を横たえている。装備していたレーゲン型量産タイプは左半分の装甲が破損しており、搭乗者が喰らった衝撃の威力を物語っていた。

「それじゃあ貴女に褒めてもらえるように、二人を連れて早く帰還するわ」

「そうしてくれ。コッチは先にながってるからよ」

「気をつけてね。最近、流行遅れ（オールド・ファッション）のストーリーカーが沸くっていうから」

「はっ、脳みそにカビが生えたオールドタイプなんで、返り討ちにしてやるぜ!」

じゃあな、と通信が切れると、スコールは自分の後ろにいるフォーとオトーニョに首だけで振り返った。

二人とも腰が抜けたように床にへたり込んでいる。

ISは展開していないが、ちゃんと待機状態で身に着けているようだ。

「立ちなさい。さっさと退くわよ」

「あ、は、はい!」

オタオタと身を持ち上げる二人に、スコールは「さっさとしなさい」と声を荒げた。

「行かせると思うか」

ラウラが左目の眼帯を外し、金色の瞳をきらめかせながら両手を交差して突き出した。

動体視力と視界解像度数倍に跳ね上げた『越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）』が、首をもたげたまま動かないスコールを睨み付ける。

「動けまい。クラリツサの敵、取らせてもらうぞ」

『ワイヤーブレード』を展開するラウラに、スコールは火のように赤い瞳だけを動かして対峙した。

「……『A I C（アクティブ・イナーシャル・キャンセラー）』ね。慣性を停止させる領域展開。ドイツの技術はなんとやら、つてやつかしら」

「減らず口もそこまでだ！」

四本のワイヤーブレードが左右上下に展開して包み込むように切りかかる。

それを、

「っ!? 熱っ！」

熱波の衝撃がスコールから放たれ、『ワイヤーブレード』ごとラウラを吹き飛ばした。

とつさにクラリツサを庇ったラウラは、『越界の瞳（ヴォーダン・オージエ）』によって衝撃波の基を察知する。

（右手に展開しているI Sの腕部、太陽のように発光している球体からか！）

まるで太陽が放つコロナのように猛々しい熱風が吹きすさぶ。

ラウラの体制が崩れ『A I C』から解放されたスコールは、艶やかな金髪を払うとつまらなそうに鼻で笑った。

「どんなものかと期待したのだけど、ノンアクションの技には効かないなんて、がっかりだわ」

言い残すと、あんぐり口を開けて呆けていたフォールとオトーニヨの襟首を掴み、I Sの脚部を展開して軽やかに飛び去って行った。

「逃がすか！」

ラウラが『リボルバーカノン』を構える矢先、オトーニヨたちがいた床に転がる小物が破裂したかと思うと、粉塵のようなものが散布さ

れた。

視界が遮られるとともに照準ほかセンサーの類に一斉にノイズが走る。

「くっ、チャフか……！」

『プラズマ手刀』を展開し切り開こうとするが、手刀の根元でバチバチと火花が立つだけで刀身が現れない。エネルギーを攪乱させる妨害粒子も含まれているようだ。

ラウラは苦々しく舌打ちをすると、追撃を諦めて支援を求めるため、クラリツサを抱えてチャフから離れる事にした。

「申し訳ありません、隊長……」

腕に抱えられるクラリツサが、苦痛に顔を歪ませながら弱々しく謝罪する。

「謝るな。お前だけの失態ではない。不意打ちを防げなかった私たち二人の落ち度だ」

顔色を変えずにラウラは応じるが、内心はテロリスト達をみすみす逃してしまったことに自責していた。

特に、テロリストを捕縛中いきなり割り込んできたスコールに気が及ぶ。

(私とクラリツサがああも手玉に取られるとは)

IS特殊部隊の隊長・副隊長を相手に軽くいなした実力はまさに驚異的だ。

自分たちの敵は強大であると見越して、今後警戒すべきだろう。

そうラウラは千冬への報告のテーマを構築した。

(ともかく、今は情報伝達が最優先だな)

チャフから抜け出しセンサーの回復を確認すると、プライベート・チャンネルでトミーに通信を入れた。

トミーの能力なら自分たちの代わりに追走できるだろうと踏んだからだ。

普段であれば2コールで繋がるはずが、3コール、4コール、5コールしても一向に応じない。

おかしい、遅くとも3コール鳴る前に通話に出るよう教育されてい

たのに。

「……向こうでも何かあつたらしいな」

「繋がりませんか」

「うむ。仕方がない、一度織斑教官のいるピットへ戻ろう」

「それがよろしいかと。……あ」

「どうした、クラリツサ？」

「いえ、闘技場の試合が……」

クラリツサの視線を辿ると、シャルル・デユノアが織斑一夏を撃ち破っている場面に出くわした。

一夏の振るう『雪平式型』が届く手前、シャルルのリアスカートにあるマルチウエポンラックから放たれたグレネードが直撃したのだ。

爆煙の中から墜落する一夏を、シャルルのパートナーである相川清香が見送る。装備している【打鉄】はアンロック・ユニットの防盾も自慢の武者鎧もぼろぼろで、浮いているのがやつとの状態だった。

一夏のパートナーである篠ノ之箒の姿はすでに無い。

相川の【打鉄】は満身創痍になりながらも箒の攻勢を防ぎ切り、シャルルの側面攻撃によって先に沈んでいたのだ。

ここに、学年別トーナメントの勝者が決定した。

「……シャルルは、ブラック・サレナの教訓をしっかりと守ったようだな」

ラウラはぼつりと呟き、目を細める。

僚機を大切にし、苦難を共に戦い抜く。

黒い悪魔（ブラック・サレナ）と畏れられた、ドイツの誇る撃墜王は、最後まで仲間と共に戦い抜いた誇りを戦訓にして語り継がれている。

ラウラは教示した立場として、パートナーを欠けることなく勝ち抜いたシャルルチームに、感慨深いものがあつた。

IS学園アリーナが歓声に包まれる。

観客たちの拍手が鳴り響く。

シャルルと相川は肩を組んで横並びに飛ぶと、声援に応えて手を振り返していた。

その光景を、ラウラは胸に暖かいものを感じながら眺めている。自分たちが守り抜いた、仲間たちの決勝戦だ。

ラウラは急いでいる足をほんの少しだけ止めて、クラスメイトの健闘を称え見つめることにした。



「みなさん、どうかこれまでの僕の嘘を許して下さい。僕は、いや、私は、シャルル・デュノアという男の子ではありません。シャルロット・デュノアという女の子なんです！」

優勝セレモニーの選手インタビューでカミングアウトされた、シャルル、もといシャルロット・デュノアの秘密は、会場を驚愕にどよめかせた。

シャルルは貴公子的男子として学園で人気を博していただけに、そのショックのあまりよろめく生徒の姿もあった。

「これは、私が所属するデュノア社の指示に従っていたからです。決して、祖国フランスを欺こうというつもりではありません。結果としてそうなってしまうましたが、私はフランスを心から愛しています！」

準優勝者の席でシャルルの宣言を聞く一夏は、両手の汗を握っていた。

内心で、頑張れ！ と力強いエールを送り熱い視線を向けている。「しかし、私の行いを許せないと思われるのも、仕方がないことだと受け入れています。私のフランス代表候補生という立場が不相応であるとお思いでしたら、除籍してもらって結構です」

しん、と静まり返る会場のVIP観客席で、オートクチュールの仕立服に身を包んだフランス政府の代表が、気まずそうに厚化粧の目元をしばたたいている。

「ですがもし、私のこの力が、幸いにもフランスのお役に立てるのでし

たら、どうかこれからも代表候補生として、この学園で学ばせていただきたいのです！」

「各国政府高官や企業代表たちの視線がフランス政府代表に集まる。いらないの？ ならちようだいよ！」と露骨に目で訴えてくる者もいた。

ゴホン！ と無暗にこぼした咳払いが思いのほか周囲に響き渡り、衆人環視がさらに強まった。

「どうか、……どうか、お願いします！ 私にもう一度だけチャンスを与えて下さい！ 嘘偽りのない、本当の私でいさせて下さい！」

シャルロットの潤んだ声が観客たちの心に波紋を引き立てる。

わずかにざわつき始めた会場に、一夏は意を決して席を立ち声を張り上げた。

「俺からもお願いします！ どうかシャルのこと、見捨てないであげてください！」

勢いよく頭を深々と下げる。

シャルロットも、お願いします！ ともう一度叫ぶと、一夏に習って直角に頭を下げた。

二人のひたむきさに、セレモニー会場の空気がある種の一様に包まれる。

いたたまれなくなったフランス政府代表は、歩を前に進めてVIP席の最前列からシャルロットと向き合うと、

務めて優雅なしぐさで、首を縦に振った。

フランス政府としてもトーナメント優勝者を手放すのは惜しい。

周囲のお偉いさん方は、ちえ、と残念がっていた。

「やった……！ シャル、やったじゃないか！」

「うん……！ ありがとう、一夏。ありがとうございます！ みなさん！」

破顔し、喜びが爆発するシャルロットと一夏に、会場のテンションも一気に跳ね上がった。

何はともあれ、苦難を抱えていた少女のハッピーエンドを目の当た

りにできたのだ。

大勢の祝福に包まれながら、学年別トーナメント一年生の部は無事に幕を閉じたのだった。

31. あるモノの心と大人の心—identity

C r i s i s —

もの寂しい暗黒の中、孤島のように浮かんでいる冷たい明りのもとに、僕は立っていた。

周囲には闇以外何も存在しない。天も地もなく、果てしない空虚で茫洋とした空間だった。

「……は……」

どこだろう、という疑問と、現実離れた光景に夢をみているのではないか、という予想が浮かんだ。

何かとつかかりになる物でもあればいいのだが。

そう足を運ぼうとしようともしようと、冷え冷えとした明りは今立っている場所から動こうとせず、僕もその場に佇むよりほかになかった。

とりあえず、声を上げようと口を開きかけた、その時、

「……い」

ぞくり、と背筋に寒気を感じた。

限らない無音の中、無地のキャンパスの上に墨滴が落ちたかのような、有が生じた気配がする。

自分の真後ろ、それもごく近い距離からの雰囲気だ。

僕は反射的に振り返った。

「っ!!」

息を呑む。

五歩にも満たないすぐ先に、少年が立っていたのだ。

歳は10歳ほどだろうか。

顔色は病的なまでに青白く、目は患っているように淀んで僕を見澄ましている。

濁り切っている瞳は、よく見ると曇天に覆われたような空色だった。

手入れされていないぼさぼさの髪はネズミの体毛のようだが、汚れの薄い生え際は鈍い鉛（あおがね）色が覗いている。

よくよく見ずとも、少年の容姿を受けると、こみ上げてくる既視感があった。

(幼い、僕の姿、なのか……?)

毎日ドア横の姿見で見ている自分の面影があるのだ。

まるで古い壊れた鏡を見せられているような、自分でない自分が目の前にいるという恐怖が全身を駆け巡る。

喉がカラカラに乾いて、ねっとりとした生唾を飲み込んだ。

「君、は」

「かえせ」

僕の言葉に被さって少年が口を開いた。

「そのからだを、かえせ」

「え……?」

「それは、ぼくのからだだ」

変化が全くない表情のまま、白い手を翳して僕に近づいてくる。

有名なホラー映画でも比較にならないほど恐ろしかった。

全身が粟立ち、ひ、という声が漏れ、逃げるように後ずさる。

「い、痛っ!」

二歩目が下がれない。足首を誰かに力いっぱい掴まれているようだ。

見れば、

「……へ? なに、なんだ! なんだよこれ!」

白い手が、いや、骨の手が僕の足に伸びていた。

足の下には、幾重にも折り重なる、白い骨、骨、骨。

床だと思っていた一面が白骨で敷き詰められていた。

「おまえのせいだ」

思わず絶叫しそうになった僕を少年は指差した。

「え、ええ?」

「おまえのせいで、みんなこうなったんだ」

「な、なにがだよ! いったい何がどうなっているんだよ! 僕が、僕

が何をしたっていうんだよ!!」

「おまえをつくるために、みんなぎせいになったんだ。いちまんいつ

荒み切った顔。

口を開ける闇。

圧倒される恐怖。

畏れ。

絶叫。

——この感情は、僕に命がある証明じゃないのか？

微かに脳裏をすぎる疑問すら、押しつぶされそうな闇に掻き消えていく。

底のない深淵に沈んでいくような落下感がした。

「——ごめんなさい」

塗りつぶされていく闇の中で、透き通った声が明りを兆す。

ふわりと、僕の体がすくいあげられた感覚がした。

温もりが伝わる。

何者かに守られているような、言いようのない安心感があつた。

目を開けると、明るく白い空間の中で、誰かに抱きしめられている

のだと気が付いた。

「あ……」

言葉が出てこない。

さつきまでのサイコホラーと一変したこの状況に、理解が追い付いてこなかった。

身じろぐ僕に、抱擁する人物が顔を上げる。

少女だった。

長い銀髪と、閉じた瞳が特徴的な。

今にも泣きだしそうな悲しみをたたえた目元が、美しさを一層際立たせている。

その容貌と表情にもまた既視感があつた。

(ラウラ……？)

いつかだったか、僕の顔を覗き込んで必死に名前を呼んでくれた時のラウラを連想させる。赤い瞳は潤んでいて、閉じていたなら目の前

の少女と瓜二つだろう。

「貴方の奥を、覗かせてもらいました」

「僕の、おく？」

「はい……」

ラウラによく似た少女は声を震わせた。

「見るべきではなかった。あんなこと、貴方も知るべきではなかったのに。ごめんなさい……」

再び頭を下げて、僕の胸元にうずもれてくる。

僕はどうすればいいかも、何を話せばいいかも分からなかった。

ただ疑問だけが口から飛び出した。

「君は、いったい……？」

少女は僕の目と鼻の先に顔を上げた。

長いまつげと吐息が触れそうなほど近かった。

「貴方は、ラウラをお義姉さんと呼ぶのでしたね。でしたら私は、親戚のお姉さん、といった距離かしら」

「ラウラを知っているの？」

「はい、と言う口元がはじめて緩んだ。

「ラウラを救ってくれてありがとう、トミヤ。ううん、ラウラだけじゃない。貴方の身で行われた、数々のおぞましい臨床試験のおかげで、いったいどれほどの仲間が助けられたことか」

「それじゃあ、君も？」

「はい……。ああ、会いたかった、トミヤ。本当はあんな恐ろしいものを見たりせずに、ゆっくり喋りたかったのに」

僕たちを包む白い空間に、ごーん、と時計が鳴ったような響きがあった。

「時間です……。もう、いかなくはいけません」

「行くって、何処へ？ ううん、時間がないなら少しでも教えて。いつたい君は僕に、あんなものを見せてまで何を伝えたかったの？」

少女は表情を曇らせながら応えた。

「トミヤ、貴方自身と、ラウラを、どうか大切にしてください」

「どういうこと？ それにももちろん、ラウラは僕の大切な」

「ラウラだけじゃない、貴方もです！」

強めた声音はラウラそっくりだった。

「作られたからと言って、誰かの役に立つためだけに生きるような、そんな悲しい生き方はして欲しくない。もっと自分の好きなように、自分のしたいように生きて。……お願い」

僕の頬に両手を添えられて、少女の顔が近づいてくる。

抵抗する気も起きず、自然な動作のまま、なるように唇が交わされた。

恥ずかしさも高揚も感じない、ただ安堵感だけが広がる優しいキスだった。

少女は僕の身体から離れると、名残惜しそうに振り向いて、口を開いた。

「きつとまた会いましょう。その時はトミヤ、貴方から口づけをしてほしい。それまで私の及ぶ限り、貴方を護ってみせるから」

「まって！ 最後に、君の名前だけ教えて！ 君の名前は……！」

「クロエ。クロエ・クロニクル！」

自身の名を叫ぶ少女は、最後まで悲しそうな表情のまま、光に溶けるように消えていった。

僕のこの悪夢とも夢物語ともいえるような出来事も、朝もやが晴れていくように霞んでいき、何も感じなくなっていく。

もう一度、ごーん、という鐘の音が彼方から聞こえたような気がした。



知っている話し声がする。

のんびりと間延びした織斑先生の声と、困ったようなクラリツサさんの声だ。

ぼんやりと目を開けて顔を向けると、僕が横になっているベット越しに織斑先生が缶ビールを傾けているのが覗けた。

窓の縁に座り、グビグビと喉で味わいながら実に美味そうに飲んで

いる。

「つくう〜！ 染み渡る。流石はSAPPOROギンザライオンSP
ECIALだ。喉越しが比較にならん」

「織斑教官、もうそのへんになさってください。キズに響きます」
クラリツサさんが忠告した。

「ああ？ 固いことを言うなよクラリツサ。IS学園の保健室は世界
一だぞ？ ほおら、この左腕を見てみる。思うように動かせず全治
一ヶ月はあろうかという傷が、あつという間に綺麗さっぱりだ！」

「はいはい、存じております。我がドイツの最先端医療技術ですもの」
「なあんだ、お前のところのモンだったのか。んじゃあまだビール
イケるな」

「なにがイケるな、ですか」

「んなもん、ビールつつつたらドイツだろうが。どうだクラリツサ、お
前も病み上がり一杯」

プシユ、と開けられて押し付けられたビールを、クラリツサさんは
ちやんと固辞した。エライです、大尉どの。

「理由が雑すぎます。それに、いまこの学園は大混乱の最中なので
すよ？ アリーナのピットが大破し、生徒が二人も失踪なされたんで
すから」

織斑先生は押し戻されたビールを無言でグビリと一口入れた。

「こうしている間にも、生徒会長さんや担任の教員が対応に追われて
いることでしょう。我々は怪我を理由に安穩としていられますが、明
日に向けて傷を癒やすことが肝要ではありませんか」

「傷はもう癒えた。寛容なのは英気を養うことだ」

「織斑教官っ！」

「そうカリカリするな、小じわが増えるぞ。なあ、一（にのまえ）」
いきなり僕に話が飛んできた。

酔っ払いのトロンとした目つきがコチラに向けてくる。

僕が目覚めているのに気付いていたのか。

「先生、僕も少し飲み過ぎだと思えますよ。そんなに酔っばらった姿
はじめて見ました」

布団から身を起こす僕に、クラリツサさんがベッド脇まで駆け寄ってきてくれた。

「目が覚めたのか！ トミヤ、体の調子は悪くないか？ 頭痛や、寒気は？ けだるくはないか？」

額に手を当てながら矢継ぎ早に聞いてくる。クラリツサさんの冷え性の手がひんやりして心地良い。

寝起きの気分は、思いのほか快調だった。

不思議なほどに体調が良い。

『越界の瞳』を使った後は、たいてい酷い頭痛がしてベッドに引きずり戻されるのに。

「もう大丈夫みたいです。ご心配おかけしてすみません」

「んん……、確かに目を見た限りでは具合は悪くなさそうだが、お前の大丈夫はアテにならん」

「まったくだ!!」

織斑先生に大声で叱責された。

「一(にのまえ)、どおしてお前はそういつもいつも無茶をするのだ！

お前を気にかけているやつらの気持ちを考えたことはあるのかあ!?! ああるまい!」

缶ビールを振りながら酔っ払いべらんめえ口調で怒鳴られた。

ああ、ビールが泡立ってこぼれてます！ あとその口調だと普段より怖くないので効果薄いです先生。

「オルコットのやつは泣いていたぞ。私がしっかりしていないばかりに、つてなあ。女を泣かせる奴は最低だぞ！ 最低！ わかっているのか一(にのまえ)!!」

「も、申し訳もありま……」

「ごめんなさいですむかあ!!」

あ、これ長くなるやつだ。

僕は観念してベッドの上に正座した。

「ボーデヴィツヒのやつはオルコットの胸倉掴んで怒鳴り込んでいたぞ。何のためにお前を任せたのか、つてなあ！ 女二人に心配されるとは言いご身分だなあ！ ええ？ どうなんだ一(にのまえ)!!」

「ぼ、僕の不徳のいたすところで……」

「すみませんじゃあなあいい!!」

「はい……」

喉を潤すためかガブガブ缶ビールを口に注いで、そのまま飲み干した。

ぶはあー、ひつく、げつぶ、と三拍子する様はもうキビキビとした日頃の織斑先生とは思えない体だった。

心配かけた僕が言える立場じゃないけどさ。

「以後、二度と女を泣かすんじゃないぞ! これは命令だ、命令! ブリュンヒルデの命令だからな、分かったなー(にのまえ)!!」

「し、承知いたしましたー!」

ベッドに両手をつけて土下座する。

もう、勢いに圧倒されて平伏する以外に何も無い。

こんなときだけ自分を世界最強(ブリュンヒルデ)っていう権威を使うのはいかがでしょうか。

織斑先生は言いたいだけ出し切って少し気が落ち着いたのか、ブフー、と酒気をふくんだ溜め息を吐いた。

「……これだけ言っちゃっても、お前は聞きはしないだろうなあ」

急なトーンの変わりように、僕は恐る恐る顔を上げて確認した。

相変わらず酔いで紅潮しているが、怒っているというより物さびしそうな表情が意外だった。

「なあ、一(にのまえ)、もしオルコットやラウラの身に危険が迫ったとしたら、自分の身を投げ出すか?」

「投げ出します」

間髪入れずにそう答えた。考えるまでもない返答だ。

「ならば、一夏や篠ノ之、凰やデユノアたちの場合はどうだ? 自分を犠牲にしても助けるか?」

「助けます」

即答に、織斑先生は大きなため息をついてがっくりとした。

クラリツサさんも腕を組んで難しそうな顔をしている。

「——ああ、そうだろうな。お前は、そうしてこれまで来たんだもの

な」

「あの、どこか、おかしいでしょうか？」

「おかしい、か。難しいな。私が教育者としてちゃんと導いてやれればいいんだが、ご覧のとおり、私に教師は向かないのかもしれないかもしれん」

「そんなことっ」

「言うな。お前の言葉では私に響かん」

「ど、どうしてそんなこと言うんですか!? 僕だってドイツ時代から織斑先生の元で学んできました、たくさんの技術を教えてもらって成長してきたつもりですよ！」

織斑先生は相変わら物憂げな表情を向けてくる。

何か言おうと考えて、言葉を繕っているように逡巡していた。

「私には生徒の心を育てられん」

ぽつりと、ようやく見つけた言葉のように呟いた。

「テロリストになり失踪した二人の生徒もだ。お前と風の邪魔をしたとき、私がちゃんと言い聞かせたつもりだったのに、結局更生させられなかった」

それにな、と覇気のない目で僕を見つめてきた。

「一（にのまえ）、お前についてもそうだ。誰かのために生きねばならない、というお前にかけられた呪縛を、私ははまだ解けないでいる」
——作られたからと言って、誰かの役に立つためだけに生きるような、そんな悲しい生き方はして欲しくない。

夢の中で出会った、クロエ・クロニクルという少女の言葉がフラッシュバックした。

僕にかけられた呪縛？

「お前は「見人当たりもよく、よく気が利いて、頼りにもなる。人として上等な性格だ」

だが、と窓の横縁に背中をもたれ、首を据えて、

「それは、お前が生きてきた中でかたち作ってきたものではない」

「……僕の、ものじゃない？」

「被験体No. 11038号として植え付けられた性格だ。人を助けるように仕組まれた、そう、ロボットのようにな」

「じよ、冗談でしょう!? 第一、僕だって人の話を断つたりしますよ。実際一夏から相談を持ち掛けられたとき、内容によつてはそうしました!」

「相談には乗り、自分なりの回答はするのだろうか?」

「そう、ですが、でも……!」

僕はベッドから立ち上がった。

「じゃあ、この僕はいったい誰なんですか!? こうして僕が怒つたり、悲しんだりしているのは、僕以外の誰だつていうんですか!」

「お前の気持ちはお前だけのものだ。だがな、お前の意思決定に、心はこもっているか?」

「――」

「相手を慮つた、人として望ましい行動原理に、お前の意思と心の介在する余地はあるのか? 自分の身すら人を助けるための部品であるような使い方をするお前に、魂が宿つているといえるのか?」

――僕は君が人に親切にしていることが、何か義務でそうしているように思うんだ

――君の行動は、人のためになるかどうかという事への条件反射だ。自分のためになるかどうかじゃない。違うかい?

雨の日のカフェでシャルロットに言われたことがダブつて聞こえた。

シャルロットは、気づいていたんだろうか。

僕がロボットみたいな奴だつていうことに。

中身のない抜け殻のようなものだということに。

力なくベッドに着座する僕に、織斑先生は、

「すまん、少し、言いすぎた。酔いが回っているようだ。そろそろ眠る。お前も眠れ。明日も忙しいぞ」

「はい……」

言われるがまま、布団の中にもぐりこんだ。

クラリツサさんが優しくあやしてくれたが、ぐるぐる渦を巻いた僕の心は、いっこうに静まらなかった。



「寝たか？」

電気が落とされ、月の明りだけが差し込む保健室で、窓際に腰掛けたままの織斑千冬がささやいた。

「ぐっすりと眠っています。よほどシヨックだったのでしょうか。目元に、涙がこぼれています」

トミーのベッドの隣に座るクラリツサが、寂しそうに丸くなって眠る少年の頭を撫でながら応えた。

「立場上の話が長くなってしまった。本当は、助けてくれたことへの礼と、謝罪をするつもりだったんだがな……」

ピット内でテロリストに襲われたとき、トミーが無理をして駆けつけてくれなければ、千冬は無事では済まなかっただろう。

テロリスト対策を指示した自分の不手際をトミーの犠牲によって埋め合わせてくれたことを、千冬は深く悔やんでいた。

「いつかは言わねばならない話です。それにいま言わなければまた無理を繰り返し、取り返しがつかなくなったらかもしれません」

「信仰心や意思が介さない自己犠牲になど、価値を見出すことはできないからな」

「……私も力不足でした。新手の敵にさっさとやられてしまうなんて。大人として、トミヤら子供を護れなかったことが口惜しい」

「私もだクラリツサ。一（にのまえ）がこうなったのはすべて私の責任だ。そうオルコットとボーデヴィツヒに謝ることしかできない自分が腹立たしい」

千冬の独白のあと、痛い沈黙がしばらく続いた。

トミーの寝息と、小さなうめき声が弱弱しく聞こえる。

静けさを破ったのは、心無い事務的な話だった。

「織斑教官、自分は明日、ドイツの視察団の護衛として本国に戻ります」

「そうか」

「今回のIS学園での一件、オールドファッションが言う通り亡国機

業の仕業であるとして、こちらでも調査をする所存です」

「ああ、頼んだ」

「……あの」

「わかっている。お前が言いたいことも、気持ちも、ダメな大人同士として全部わかっているつもりだ。だから、何も言うな。私にも堪える」

「は……」

「眠ろう。おやすみ、クラリツサ」

「おやすみなさい、織斑教官。……おやすみ、トミヤ」

布団に戻る千冬の動きに乱れはない。

酒に溺れようとした当初の勢いも、酔いと共にすっかり醒めてしまっていた。

クラリツサも静々と自分のベッドに入る。

学園の教師と、特殊部隊副隊長・現隊長代理。

大人達の持つ責任が重い枷となって、心を押し込めて忙しくなるだろう翌日に備えるのだった。

Extra. ある豪華な建物の会議室にて

「まったく、バカンス中でしたのに急に呼び出されるなんていい迷惑ザマスー！」

「ええ。コチラも次のコンペに向けた追い込みで忙しいのですが」

「ISにまつわる緊急案件とあらば、参集も致し方ないでしょう」

「ま、常任メンバーとしての面子もあるしな」

「静粛に。これより議長の名のもとに会議を始める」

「議題については、あらかじめ聞き及んでおりますが……」

「IS学園がまた襲撃されただと？」

「資料を見たが、生徒が失踪したなど前代未聞だぞ！ それも二人！」

「しかも、闘技場のピットが大破したなんて」

「間違いございませんか、織斑先生」

「お手元にある報告書に記載された通りです」

「これは由々しき事」

「トーナメントが無事に済んだのはなによりですが……」

「悠長に構えてはられないザマスー！」

「下手人は、資料によりますと亡国機業となっておりますが」

「お待ちください。出所がオールドファッションというのが解せません」

「ごもつともです」

「反体制的な組織の甘言に違いありません！」

「むしろ、自分たちの犯行をカモフラージュするためとか？」

「まあ、お待ちください。テロリストにはISを扱う者がいるのとこのと。つまり、我らと同じ女性が所属しているのでは」

「なんてこと！ オールドファッションにかどわかされたに違いありません！」

「ごもつともです」

「……どう思いますかな、賛助殿」

「はあ……、わ、わたくしめ、ですか？」

「本会議の中で唯一の男性としての意見を伺いたい」

「ドーセアンタもオールドファツションに一枚噛んでんだろ？」

「にしても、また頭髮が薄くなつたのじゃありませんか？」

「さらにより太つて」

「失踪した生徒は君の娘が含まれているのだぞ！ シャキツとしないか！」

「音に聞こえた有力議員の名声も落ちますわ。ああ、失礼。二元・有力議員でしたわね」

「静粛に。賛助殿、お考えや如何に」

「は、はあ。では、僭越ながら。……オールドファツションの言は欺瞞ではないと思います。これまでと同じであるなら、無視を決め込んでIS関連の失態に手を叩いて喜んでいたでしょうから。ですので、変化の兆しがあるのではないのでしょうか」

「ほおら！ やっぱり野郎は野郎ザマス！ 悪びれもせず庇い立てをするだなんて！」

「しかし、確かに注意喚起を促すのは異例と言えるな。ハゲデブ賛助の言うことも一理ある」

「冷静に言いつつ辛辣ですわね……」

「私はハゲとデブが嫌いだ」

「ごもつともでぶ」

「ん？」

「……わ、わたくしを見るんじゃないザマス！ わたくしは単にふくよかなだけザマス！」

「な、何も申しておりませんわっ」

「オールドファッションの動きが違うのは、LS乗りが在学しているからでは？」

「む……」

「副委員長、続けて」

「いえ、確かに賛助殿のおっしゃるとおり、昨今のオールドファッションは動きが鈍い。我らへのあてつけが減り、むしろ奴らの関連組織と思しきものから便宜を図られることすらある。ちょうど、LS乗りが表に出てきたときと同じ時期だ」

「そういえば、確かに」

「資料によりますと、今回の学園襲撃事件において、LS乗りは過分な働きを示したとか」

「間違いございませんか、織斑先生？」

「はい。リミテッド・ストラトスのパイロット、一（にのまえ）十三八（とみや）の働きにより、事態を抑えられました」

「ふうん……」

「オールドファッションからの警告文と、LS乗りの働きか」

「LSとオールドファッションがグルであるのは確定的にも明らかと言えます」

「ごもつともです」

「それでは信用するというのか！　そもそも亡国機業の危険性は周知の事実。いかにオールドファッションが本件でポイントを稼いだからといって、反体制組織であることに変わりはない！」

「どう思われますか、賛助殿」

「はあ、……呉越同舟、とは相成りませぬか？」

「まかりならん！」

「いや、勝手に決めんなよ、大将」

「今回の件ばかりで決めるのも、軽々に過ぎますが」

「とりあえず、その、とみや君、だったかな？ その子を在校させておけばオールドファッションも大人しくなるし、亡国機業対応もしてくれそうだし、今のままでいいんじゃないかな？」

「まあ、仮想敵組織が大人しくなるなら、やぶさかでもないか」

「ふん！ 運の良い坊やザマス！」

「わたくしとしても、異論はございませんわ」

「ごもつとも、ではありません」

「!?」

「!?」

「皆様、それでは落としどころが困ったことになりますわ。織斑先生をはじめ、IS学園、及び学園を運営する我らの失態ということになりますもの。わたくし達の綺麗なお顔にドロを塗られるなんて、考えたくもありません」

「で、ではどうお考えなのですか？」

「スケープゴートを。幸いLSは世間的な嫌われ者。彼の動きが悪かったからこのような事態になったとすれば、我らの面目も立ちましよう？」

「……………」

「あら、織斑先生は不服かしら？ いえ、そうでしょうね。教師として、教え子を気に掛けるのは真つ当なことですよ」

「しかし、その、とみや君を犠牲にすることによって、学園の名誉を守り、ひいては在籍する生徒や教員たちの立場も守る、ということだね？」

「オイオイ、話聞いてたのかよ、姫様？ それじゃあオールドフアツシヨンがまた何しでかすかわからないぜ？」

「なにも退学させよという訳ではありません。ほとぼりが冷めるまで、休学ということにしておけばよろしいでしょう」

「なるほど……」

「それなら、穏便にすませられそうだ」

「バカとハサミは使いよう、つてやつですわね」

「織斑先生、そして賛助殿、異論はございますかな？」

「………いえ」

「はあ、………特には」

「結構。では、IS委員会臨時議案についてはそのように決定する。さて、次の議案に移る。エクスカリバーについてだが……」

Extra かいせつ！ ※31話時点まで

リミテッド・ストラトスも30話を超えるまでになり、原作にない単語がさらに増えてきました。

そこで、31話までの部分を含めて改めてまとめてみることにしました。

また、ようやくルビの活用法もつかめましたので、今後活用していきます。

【人物】

『トミー』

オリ主である本作の主人公。

LS（リミテッド・ストラトス）の操縦者。

もともとはセシリアの幼馴染で名前も違っていました。セシリアの両親と一緒に事故に遭い、九死に一生を得たところを改造手術された男の子。その結果男性でもISが動かせる身体を手に入れました。

後述するトミーの製作者『閣下』の懐刀として各地を周り、そのついでドイツ軍IS部隊に入隊し、ラウラと一緒に織斑千冬の教えを受けています。

本名は一三八。真名は被検体No. 11038号。

この数字を漢字に直し、11一、101十、381三八、ということとで一・十三八（にのまえ・とみや）となりました。

ラウラはトミヤと呼んでいます。IS学園では布仏本音がトミーという呼び名を付け、それが通称になりました。

性格は気配り上手な耳年増。気さくで思いやりがあるのですが、自分に関しては後回しにしがちで、人からの好意に疎いタイプ。

イメージカラーは鉛色。鉛色11白（一夏）+青（セシリア）+黒（ラウラ）から取りました。

イメージCV：細谷佳正（ファイアーエムブレム覚醒のルフレ）

髪：鉛色

瞳：空色（普段は分厚い眼鏡を着用。カラーコンタクトを着けた場合だと赤）

追記

ヴォーダン・オージェ

世界の瞳のエラースキルを保持しており、解放すると瞳が輝いて世界をマトリックス空間みたいに見ることができません。

戦闘で敵の砲弾を切り払えるのも、この能力を適宜使っているからです。

トミー自身は唯一ワン・オフ・アピリテイ仕様の特殊能力みたいに捉えています。本人への負荷が大きくて長時間使用は命にかかわる、まさにバグ技です。

イメージ画像←

『セシリア・オルコット』

本編のヒロインであり、原作と大きく改変されたキャラクターの一人です。

最大の違いは、幼い頃に男の子の親友を持てたこと。心の隙間を埋める異性の理解者を得られたことで、原作のように父親や男性を嫌うようにならず、また虚勢を張って高慢になることも控えられています。

トミーとの関係は、彼が記憶をなくした幼馴染であることに気付いてからは積極的。

ちなみに、幼馴染の父、通称「大学者（サヴァント）」と出会うことで、セシリアの両親も原作ほど冷たくなっていませんでした。

『ラウラ・ボーデヴィツヒ』

もう一人のヒロインであり、セシリア同様に原作と大きく改変されたキャラクターです。

改変箇所は、ラウラの暗黒期に彼女と似た「人為的な手のかかった者」即ちトミーを仲間に持てたこと。それが、原作のように織斑千冬に傾倒しすぎずに済んでいます。

「同じ釜の飯を食べた仲間は兄弟同様である」というクラリツサの微妙にズレた話を真に受け、トミーとは義姉弟の契を交わしました。ラウラが姉なのは階級が上のため。ここに織斑千冬の姉談話が混ざり、師匠譲りのブラコンになってしまうことに。

トミーとの出会いで性格的に少し丸くなり、また「同じ釜の飯を食べた仲間」という話から、原作よりも早く「黒ウサギ隊」の仲間と打ち解けています。

『織斑一夏』

原作の主人公。本作でもその男の子らしさや唐変木、姉思いな性格は健在です。

トミーと出会うことで切磋琢磨し合える同性ができた事により、原作よりも精進して実力も上がっています。

ちなみに、トミーの一夏に対する教え方は「必要項目の反復練習」。勉強で例えるなら「テストでよく出る問題対策をひたすら行う」こと。基礎も応用も無視してますが、基本動作しかしない無人機相手ならば非常に効果的なので、ゴレム相手に完勝できました。

『篠ノ之箒、 凰鈴音、 シャルロット・デュノア』

この三人はほとんど原作通りで作っています。

箒の性格がたまにイケメンだったり、鈴が姉御肌だったりするのは原作を読んだ作者の主観のせいです。

追記

シャルロットですが、本作では学年別トーナメントを勝ち抜いて実力を示し、自分の力で代表候補生とIS学園の生徒という立場を守り抜きました。

原動力はもちろん一夏くんへのラブパワー。

『チエルシー・ブランケット、 エクシア・カリバーン』

セシリアのメイド姉妹。

チエルシーは原作では基本侍女口調でしたが、セシリアのお姉さん代わりという設定のもと、本作ではお姉さん口調も取り入れました。

エクシアは原作とかげ離れ、「エクスカリバー」のコアになっています。あとに述べる『閣下』たちのおかげで、「エクスカリバー」の計画が潰されたためです。

今ではトミーと同じ組織に所属し、オペレーターの仕事を任せられ、また夜間はちゃんと学校にも通わせられています。

トミーとの仲は「上々」とのこと。

『布仏本音、相川清香』

基本的には原作通り。

本作では、本音がトミーの隣の席で、十三八（とみや）を「トミー」と称した名付け親。清香は朝のジョギング仲間となっています。

本音がたまに何か企んでそうだったり、清香が元気ハツラツなスポーツウーマンなのは作者の主観です。

追記

相川清香がメキメキ強くなってます。

シャルロットとペアを組んで練習したためですが、トミーの影響もある模様。

『更織楯無』

基本的には原作通り。

……のつもりだったのが、なんだかよくビンタするパワハラお姉様に変身。作者の筆のせいです。なんでや！

『織斑千冬』

彼女も原作通りに考えて書いていたのですが、なんだかより飲んだくれでブラコン要素が目立つように。

また、千冬の教育の仕方について、様々な創作でいろいろ意見が見受けられるのですが、本作としては「一流の進学校や塾の講師」みたいな先生として捉えています。いわゆる生徒によって向き不向きが激しいが実力のある教師のような感じですよ。

『クラリツサ・ハルフォーフ』

基本的には原作通りで書いていますつもりです。少し棘が小さいかも？

トミーとの関係は、ラウラと同様ドイツ軍に所属していた時期に一緒だったため、親交が深いです。

『オータム、スコール』

二人とも原作通り、だったのが、オータムさんなんか面倒見の良い姉御に。

『閣下』

オリキャラ。

本作におけるIS条約作成の立役者であり、世界の中心の組織で機関長を務める黒人。女尊男卑の社会でありながら珍しい男性の権力者です。

その立場から、ISの行きすぎた兵器利用や人体実験を監視し、「エクスカリバー」計画を潰すなど活動しています。

本人の性格はあらゆる差別、迫害を嫌う博愛主義者なのですが、同時に「愛が人を利用し、傷つけさせる」という矛盾した考えの持ち主。そのためアンチ女尊男卑を掲げる組織に属し、男女のパワーバランスを崩したISへの対策として、「男性でもISを扱える者を作る」「男性でも使えるISを作る」ための計画に着手。人体実験を辞さない内容のため、戸籍操作を容易にするよう身寄りがなく怪我や病気で死にかけの者を集め、改造手術を施して計画を進めていました。

結果、生まれたのが被検体No. 11038号(即ちトミー)と、専用のIS「グレイ・アイデール」ということです。

しかしVTシステムの搭載や、人体実験を監視しながら自身は計画のために人体実験を行うなど、男女のパワーバランスを保つ名目とは言え実に矛盾した行動が目立ちます。

『フォール、オトニーヨ』

オリキャラ。悪役の上級生二人組です。

オータムに陰ながら勧誘されて亡国機業に寝返りました。二人のコードネームが秋をなぞらえているのもオータムになぞらえているため。

女尊男卑の社会を体現する性格ですが、家庭内にはその弊害を受けた被害者でもあります。

【物、組織など】

『リミテッド・ストラトス』

通称LS。

本作ではトミーは一夏よりも先に男性IS操縦者という触れ込みでデビューしたのですが、操縦する機体は飛行能力もなく外見も歪であったため「こんなのをワタクシ達のISとよぶんじやないザマス

！』とマスコミ（主に女性側）から大バッシングを受けました。結果、IS（インフィニット・ストラトス）の模造品という意味で、リミテッドという蔑称がつけられることに。

現状トミーが操縦する機体のみの通称です。

ちなみにその後「正式なIS操縦者」としてデビューした一夏と【白式】とは世間にて比較されがち。

『グレイ・アイディール』

トミーの専用機。

『男性でも使えるIS』という計画により作られたのですが、トミーはどうしても空を飛ぶ事ができなかったため、空を飛ばずともISに対抗するためにいろいろされてゲテモノに。

下半身は虫みみたいな四脚、ハサミムシみたいな尻尾、そのうえ巨体とあつて「うわあ……」と言われる見た目。

イメージはモンスターハンターのゲネルセルタス。その上にトミーが乗っかっているので、ガンダムOOのアグリツサ要素も含まれています。それにならつて下半身との分離も可能。

武装は、剣と銃がハイブリッドした剣銃『グローリー・シーカー』。対IS用徹甲弾を運用するヘビーマシンガン、重銃『グラウンド・ブレイカー』。ハサミムシみたいな尻尾の『ペンチ・ヒッター』。

追記

新たな武装『グレイ・グローブ』が配備されました。

人の背丈近くある巨大な籠手で、非固定浮遊兵装としてLSの左右に浮いています。

内装武器として、

手甲部位に『グレイ・スケール』の拡大発展型『グレート・グレイ・スケール』

指先は砲口になっており、超電磁砲レールガンを発射できる『フィンガースナップ』

掌の球体はバリアーシールド防衛機構『ゴールキーパー』を展開するコアとなっています。

『IS学園』

原作よりかなりゴージャスな感じですよ。

理由は運営が違っているから。

原作では基本的に日本がすべて請け負って、問題が起きた場合の尻拭いも一任されていましたが、本作ではIS条約加盟国共立と考えています。アカデミックな研究施設が並立しているのもそのため。

原作で日本に丸投げなのは「ISを作って世界を混乱させた落とし前をつけるため」と一夏は語っていますが、ISの恐ろしさを理解すれば共同監視、共通利用を図るだろうということでした。国の威信に関わる国家代表や候補生を派遣するなら、保身も含めて相応の便宜も図るでしょうしね。

『オールド・ファクション』

オリジナル組織。

女尊男卑の社会を良しとしない反体制組織です。

体制側のIS委員会などとは犬猿の仲。同時に亡国機業とも対立しています。

今回はここまでです！

また新たな情報が出たら修正していきます。

次回からはトミーの秘密を開封しながら、新たな章として展開していきます。

今後ともお付き合いをお願いします！

揺れ動く遠出

三十二話 たそがれ十三八（トミヤ）

IS学園、学年別トーナメント閉幕後、生徒たちに前触れのない臨時休校がアナウンスされた。

急遽実施する実力試験のテスト休みという名分で、許可なく学園の敷地から外に出られない自習メインの休みということだった。

生徒の反応は悲喜こもごもだが、大会の裏事情を知る一部の生徒や事情通たちは、亡国機業から受けた学校の被害を隠蔽し復旧させるためであろうとがった見方をしている。

また、状況を把握できないまでも、

「なにかあつたな？」

と嗅覚の鋭い生徒はいるもので、人の口に戸は立てられず、まして話好きな女の園とあれば噂に尾ひれがつき、

「学年別トーナメントの影でなにかどえらいことが起きたんだよ！」
といった話が、半ば公然のオフレコとなっていた。

三日設けられたの休日後、思い思いの日々を過ごした生徒たちは、冷めやらぬ大会の興奮と、休み中に漏れ聞いた噂話を土産に、大にぎわいの朝の時間を楽しんでいる。

S H Rに向かう織斑千冬と山田真耶は、担当クラスの一年一組のドアが開き教師が入ってきてきなお繰り広げられるガールズトークに辟易していた。

「いい加減にしろ貴様ら！ とつとと席に着け！ IS学園はエチケツトまで休めとは言っていないぞ！」

教卓を殴りつけて叱り飛ばす千冬に、生徒たちは肩をすくめて席に駆け込んだ。

全員が所定の位置に戻るのを確かめてから、副担の真那が一つ咳払いをする。

「えっと、今日はですね、みなさんにお伝えしなければいけないことが二つあるんです。デユノアさん、このまえ一くん、前に出て来て貰えますか

？」

はい！ とハツラツとした返事をして前に出るデュノアと、無言でそのそと進み出る一にのまえが、共に教卓の前に並ぶ。

二人とも大会前の姿とは違っていた。

デュノアはぺったんこだった胸が膨らみ、すらりとした足がスカートから伸びている。

一にのまえは皺ひとつなく整っていた学生服がしわくちやで、髪も手入れされずにボサボサ、表情はいつもの快活さが火が消えたように暗かった。

クラスメイト達は興味深げに二人を見つめ、織斑担任の手前会話ができないもどかしさを表情に出していた。

「まずは、ですね。みなさんに転校生を紹介します。といっても、すでにご存じかと思えますけども」

さ、と挨拶を促されたデュノアは、小さくない胸を張って元気良く発声した。

「シャルル・デュノア、もとい、シャルロット・デュノアです！ 代表候補生として、フランスから正式に受け入れてもらえました。改めて、よろしくお願いします！」

元気のいいお辞儀に、歓声と一緒に拍手がわいた。

みな、学年別トーナメントのセレモニーであつたことを目の当たりにしていたのだ。

今まで嘘をつかれていたとはいえ、お家の事情で止むに止まれぬ立場。さらに実力を示して今の地位を獲得したのだから、クラスメイトの見せた勇気に喜びもひとしおだった。

ひとときわ大きいのが、織斑一夏と相川清香。満面の笑みをたたえて祝福している。

反対に小さいのが、篠ノ之箒だった。拍手こそすれ、表情は乏しい。「次に、ですけども、ええと……」

真耶が言いにくそうに、チラチラと横目にのまえで一を伺っている。

オタオタと口ごもる副担任に、一にのまえは微動だにせず、一瞥もくれず、顔色も変わらなかった。

いつもなら苦笑を浮かべて気を配るのに、なんの反応も示さないでいるのが不可解だった。

「あー、もう一人、人事異動が起きた」

埒が明かないと、千冬が真耶の代わりに告げる。

「にのまえとみや十三八だが、今日付で休学する運びとなった。何か貸し借りなどをしてる奴がいたら、今日中に解消しておけ」

デュノアの盛り上がりだが、一瞬にして冷めた。

次いで、驚愕と悲鳴の「え〜！」が教室に響き渡る。

軽く会釈をする一にのまえの顔は、最後まで虚ろなまま、蠟人形のように動かなかった。



「これはいったいどういうことですか!？」

IS学園上階にある展望台カフェのラウンドテーブルを叩きながら、セシリアは感情を激発した。

テーブルを囲む仲間たちが一様に渋い顔を見せる。

「そういきり立たないですよ。シャルロットがいなければ飲み物がこぼれてただけと」

鈴の言うように、机の向かいに座るシャルロットが、トレイに載せたままのティーセットをすくい上げて被害を未然に防いでいた。

興奮すると物に当たるセシリアの性格を察して、あえて飲み物をトレイから配らずにいて正解だった。

「セシリアの気持ちはもつともだけど、こればかりは本人に直接聞くしかないんじゃないかなあ……。そういえば、セシリアとラウラはこの一番にトミーへ詰め寄っていたよね」

「シャルロットさん、わたくしはあれから何度もトミーさんに伺いました。でも、お答えになる言葉はただ一つ、しばらく一人にしてくださいのよ! わたくしもう心配で心配で……」

ポケットティッシュを取り出して目元を拭うセシリアに、一夏も腕を組みながらうーんとうなっている。

「あいつが休学を言い渡されて、もう二日になるけど、本当に授業へ来ていないしな……」

「一夏、同じ男の子どうしなんだから、何か話したりできなかったの？」

トレーから飲茶の入った湯呑を取りながら鈴が尋ねた。

啜った表情が苦いと告げている。

「俺もトミーの部屋に顔を見せたんだけどな、三回行って三回ともカギがかかっていたんだ。声を掛けてもセシリアが言うのと同じ言葉が返ってきたよ。あいつが部屋にカギを掛けたことなんて今までなかったはずだぜ？」

「それはそれで、不用心じゃない？」

「トミヤの部屋には遅延警報機ディレイアラームが設置されているからな。防犯はぬかりない」

ラウラが鈴の疑問に答える。

両手で持つミルクココアの入ったマグカップをすすり、深いため息を着いた。

「心配なのはトミヤだ。私も部屋に行ったり連絡を取ってみただが、さしたる反応もしなかった」

「ラウラですらか」

「ああ……。大会の裏でいろいろ起きていたのは前に伝えたとおりだが、いったいトミヤに何があったというのだ」

「グス……。申し訳ありません。あの時私が、すっかりしていないばかりに……」

「セシリアの謝罪はすでに受け入れた。さらに織斑教官にまで頭を下げられているのだ。これ以上私が何か言えるわけがない」

「そうだ、一夏、織斑先生は何か知っているんじゃないの？」

一夏とお揃いの緑茶を手にしたシャルロットが話を向ける。

「それなんだがな」

と一夏は緑茶をテーブルに置きなおして、

「トミーから助けを求められたら力を貸してやってくれて、それしか言わないんだ。事情は知っている風だったが、詳しくは教えてくれ

なかった」

「相川も織斑教官に直接聞いて、同じことを話されたらしい。自分に行き得ることなら何でもするのに、と心配していたな」

「相川さんも……」

無理もないな、とシャルロットは口を結んだ。

学年別トーナメントでペアを組んでみて分かったのだが、相川清香がトミーに向ける視線は、自分が一夏に向けるものと似ている。

聞けば、毎朝一緒にジョギングするし、授業の難しい箇所を勉強し合うし、トミーからの頼まれごとを請け負ったりもするらしい。

あの気遣いしいのトミーが他人に物を頼むなんて、と聞いた当初は驚いた。

トミーにとって相川がいかに近い存在となっているかを察せられるエピソードだった。

そんな身近な距離にいる者へ、相川が友情以上の思いを育んでしまったとしても不思議ではない。

「……そうだね。相川さん、大会で一緒になって気づいたけど、きつとトミーのこと好きだもんね」

「ええ……ええええ!」

「シャルロット、いま少し詳しく」

「えっ? ……あー!」

明らかに口が滑ったシャルロットに、セシリアとラウラがすごい勢いで食いついた。

ちょうど地理的にフランスがイギリスとドイツに挟まれているような左右の位置取りと、国際情勢みたいなプレッシャーが半端ない。「い、いやあ、単にそう思っただけだよ。ひよつとしたら私の思い違いかもしれないからねっ。あは、あははは……」

「——シャルロットさん、笑い事で済ませたらタダではおきませんわよ?」

「——そういえば、大会のペア戦術を教えた返礼がまだだったな?」

そろそろ利子を付けて返してほしいものだなあ?」

「えっ!? ええと……、い、一夏あつ! 助けてえっ!」

「いや、俺に振るなよっ!」

「そんなあ!?! いったったかの夜、私を助けてくれるって言ったじゃないかあ!」

「あ、あれはシャルが男の子だって偽ってたときで、しかも状況が違うじゃないか!」

「——いったったかの夜?」

ぎよろ、と目をギラつかせて鈴が喰い付いた。

「一夏、それ、いつの晩のどんな話よ? しかも、シャルですって?」

もう二人の間でしか使わない呼び名があるなんて、ずいぶん仲がイイのね?」

じわりじわりとにじり寄る鈴に、一夏は徐々に後ずさる。

「お、落ち着けよ、鈴。なんにもやましいことなんかしていないって」

「あらあ? アタシ、やましいことがあったかなんて一っ言も聞いていないんだけど? ああ、そういえば一夏とシャルロットって一緒の部屋で暮らしていたから、間違いがあったりしたのかもしれないわね?」

「ないないっ! まったく、これっぽっちも、間違いなんて全然ない!

…っ痛て!?! な、なにすんだよシャル!」

「一夏、そこまで力強く否定されると、さすがの僕も哀しくなっちゃうなあ?」

目の色を暗くしたシャルロットが一夏の背中をつまんでいた。

周囲に見えない部位を狙っているのがたちが悪い。

(僕、ねえ)

と、一夏と話す時だけ違う一人称になっているシャルロットに、鈴は新たな敵が現れたのだと確信した。

これまで相手にしていた筈は良くも悪くも真っ直ぐで、いざ相対してみても気持ちのよいライバルと呼べた。

しかし今後参戦するシャルロットの場合だと、絡め手や裏の手、奥の手までかいてきそう、いよいよ戦況は泥沼に発展するのかと陰鬱になる。

当然、負ける気は微塵もない。

「つて、あれ？　そういうや箒はどうしたの？　一夏たちと一緒に来る
と思つてただけだ」

「そういえば、見ないね？」

「剣道部の練習でしようか？　学年別トーナメントが終わつてから熱
心に鍛錬なさつていたようですが……」

ああ、と一夏が椅子に座り直した。

「箒のやつ、なんでもトミーに話があるつて言つてたぞ？　ラウラ、今
日のクラス当番一緒だったろ。何処に行ったか心当たりないか？」

「いや。今日は大人しいなどは感じていたが、そこまでは知らなかつ
たな。しかしここに来る前トミヤの部屋の前に行つてみたんだが、箒
の姿はなかつたぞ」

「……あれ？　あそこ、箒じゃない!？」

シャルロットが指差す先、自分たちの座る東側の窓際席とは真逆の
位置に、特徴的な黒髪のポニーテールがなびいていた。

神主の娘らしく白いリボンで結わえているため、箒の後ろ姿に間違
いない。

向かう席には、

「と、トミー!？」

よれよれの服を着た不精な姿のトミーが、西側の窓際席に着いてい
た。

ちょうど西日が差し込んでいて、逆光の影になる顔色は何えない。
すぐさま駆け寄ろうとしたセシリアとラウラを、

「待つて！」

とシャルロットと鈴が静止した。

「な、何をなさいますの鈴さん!？」

「どけつ、シャルロット！　トミヤには聴きたいことが山ほどあるの
だ！」

「アンタらの気持ちもわかるけど、箒のたたずまい、なんだかおかしく
ない?？」

「そうだよ。ちよだとだけ様子を見よう。ね?？」

二人の言う通り、箒の後ろ姿からはいつもの凜とした気配がしな

い。背筋が曲がり、顔が前に垂れている。

トミーが気を落として気配を消していたのは分かるが、日本刀のような優美さと鋭さを放つ箒がなまくらみたいになっているのは解せない。

察知したラウラとセシリアは不承不承に席に戻り、目と耳をそばだてた。

「――頼みがあるんだ」

カフェに流れるジャズミュージック越しに、かぼそい箒の声がある。

「つきあってくれないか？」

・
・
・
聞き間違いか？

とラウラとセシリアが顔を見合わせた。

箒のセリフが、耳から脳へ達し、単語を理解し、リアクションをするまでの数秒の

間

の後、

「~~~~~!?!?!?!」
「~~~~~!?!?!?!」

席を蹴って立ち上がり奇声を上げるセシリアとラウラの口を、鈴とシャルロットが塞ぎ止めた。

「待った待った！　ともかくその展開したIS閉まいなさい！」

「ダメだよラウラ！『リボルバー・カノン』は不味いよ！　せめてAIで動きを止めて『ワイヤーブレード』で縛り上げてからにしてっ！」
「アンタが焚き付けてどうすんのよっ!?!　って、ちよっ、あの二人もういないんだけど!?!」

「一夏！　先にトミーたちを探して！　私達何とか二人を抑えるから！」

「お、おう！」

混乱してドンパチしそうなセシリアとラウラを、鈴とシャルロットもISを部分展開してなんとか静止している。

託された一夏は、先ほどまでトミーが座っていた席からあたりを伺うと、エレベーターへ向かう二人の背中が、

「しまったー！」

ドアの向こうにいつてしまったのを見止めた。

一夏は迷うことなく階段へと駆け出した。

筈のいきなりの発言に、面食らったのは一夏自身でもあったからだ。

三十三話 篠ノ之神社は誰でもウエルカム

西に沈み欠けている太陽が神社の境内を赤く染め上げていた。

帰路につくカラスの群れが一休みしている鳥居には『篠ノ之神社』と記されている。

初夏の爽やかな夕風がそよぎ、社を守る鎮守の森がサワサワと囁いた。

拝殿前で手を合わせている箒のポニーテールも風になびき、夕焼けに染められた姿は一枚の絵になるほど幻想的だった。

「知っているか、トミー」

振り返りざま、拝殿近くの神木に寄りかかっているトミーに話しかけた。

「神社の境内に入ってから雨や風が吹くというのは、神様に歓迎されている表れなのだろうだ」

「……………」

返事はない。

無表情で、話を聞いているのか判断に困る風貌だが、視線だけは箒に向いていた。

「相変わらずか。まあ、いい。そのまま私の話を聞いてくれ。……神様の前だからこそ、素直に胸の内をさらけ出せそうだ」

苦笑を漏らしてから、一息ついて、箒は語り始めた。

「私は、IS学園を辞めようかと思ったんだ」

サワ、とまた風がそよいだ。

「学年別トーナメントの敗北を受けて、自分の身の程を思い知らされた。私はIS操縦者に向いてない、所詮適正B評価なんだ、とな」

木の葉がポニーテールに絡みつき、慣れた仕草で払い落とされる。

「これでも中学のときは、剣道で全日本一位になったことがあるんだ。自分の剣に誇りがあるし、この力がきつと一夏の役に立つと信じていた」

だが、と空を仰ぎ見る。

「私は敗れた。念願だった一夏と一緒に戦うことができたというの

に。ましてや相手は相川さん、日本人が敵であつたにもかかわらずだ。日本一という実績も、所詮剣道の世界だけの話で、ISには関係ないんだと痛感させられた」

それでも、と掌を視線の先に掲げた。竹刀たこがいつぱいついていた。

「私には、この剣の道しかないと思つてしまふのだ。大会のあと気を晴らそうと遮二無二道場に通つて剣を振つた。だが、太刀筋が歪んでまるで稽古にならなかつた。情けないものだ。私の剣もISも、私を裏切つてしまつたようで、膝を折つてしまいたくなつた」

箒は一旦話を切り、トミーに相對して表情を引き締めた。

「お前の休学話を聞いたのは、そんな時だ」

「……………」

「浅ましいが、私はこう思つたよ。それでもトミーよりはマシだ、とな。世間に悪評を広められ、薬漬けの実験体で、おまけに学園の勉強からも遠ざけられたお前と比べればまだ良い方だ、と。……怒つてくれ」

トミーは相変わらず何も言わず、反応も示さなかつた。

「トミー……、私は、自分に腹がたつたのだ。どこかで安心している自分に、気を取り直してしまふ自分にだ！ きつとこれから学園の勉強に一層精を出し、次こそはと修練を積むだろう。だがそれが、お前と比較して得た軽薄な甘心によるものであることを、私は何より我慢ならなかつたんだ！」

なあ！ と箒は叫んだ。

「私はお前に謝罪をしたんじゃない、お前にこの気持ちを投稿つて、打ち返して欲しかつたんだ！ 腹黒い私の邪心を、お前のまっさらな清い心で引き裂いて欲しかつたんだ！ だからトミー、私を叱り飛ばしてくれ！」

お願いだ！ と悲痛な表情でトミーに迫る。

夕日に照らされた箒の姿は、まるで水を求める火のように赤く焼けて痛々しい。

神木の作る影の中にたたずむトミーは、困つたように眉尻を下げた

だけで、口を開きはしなかった。



「箒のやつめ、それで思いつめた顔をしていたのか」

鎮守の森の藪の中からささやく声がする。

暗闇の中、もぞもぞ動く影があった。

「ちよつとラウラさん、わたくしにも見せてくださいまし！ トミーさんの具合は如何なのですか？」

「押すなセシリア。ただでさえ狭いのだ」

「ラウラさんは迷彩服ギリースーツを着ているのですから、カモフラージュネットの外に出ても構わないでしょう」

「ええい、これだから素人は。だいたいこの光学望遠鏡サウンド・コレククター付集音器も迷彩装備も私のなんだぞ。使わせてやっているだけありがたいと思え！」

「つていうか、なんでこんな一式がラウラの部屋に揃ってんのよ」

カモフラージュネットの後ろで鈴がぼやいた。

隣のシャルロットもヤブ蚊を気にしながら苦笑する。

「いくらラウラが現役軍人さんだとはいえ、学生さんが持っているアイテムじゃないよねえ」

「ああ！ 虫よけスプレーを撒くなシャルロット！ 匂いが風に乗ってバレてしまうかもしれないだろう」

「えっ、っ、ごめんラウラ」

「いーじゃないの、そこまで本気で隠密行動する必要ないでしょうが。にしても日本の夏ってほんと虫が多くて嫌になっちゃうわ」

扇子をパタパタしながら服をはだける鈴に、

「ちよ、ちよつと鈴！ いくらなんでも破廉恥だよ！ 一夏もいるんだから加減して！」

「だあって暑いんだもん。一夏もずっと双眼鏡にかじりついているんだから問題ないわよ」

「もう、ネックを引っ張って扇ぐなんて不埒すぎるよ。いくら胸元の風通しが良いからって……」

「——あ？　いま、何て言ったのかな、シャルロット？」

「いい加減にしないか！　本当にバレてしまっただろう！」

「そうですね！　静かにしている一夏さんを見習いなさい！」

セシリアの言う通り、一夏は一人黙々と双眼鏡を覗いていた。

そこまで箒とトミーが心配なのか、それとも、そのどちらかを特別に案じているのか。

鈴とシャルロットは小さいいうなり声を上げながら、一夏の様子を恨めしそうに見ていた。

「しっ！　……誰かが来たようだぞ」

「えっ、ひよつとして、見つかつちやった？」

「話声を聞くに、そうではないみたいですが」

「雪子おばさんだ」

一夏が口を開いた。

どちらさまですか？　というセシリアの問いに答える。

「篠ノ之神社の管理人さんで、箒の親戚の方だ。俺も千冬姉も小さいころからいろいろとお世話になっっているんだ。困ったことがあればいつも相談にのってくれて」

「ああ、そういえば一夏と初詣に行ったときなんか会ってたわね」

「へえ……」

「鈴は話したことなかったっけか？　頼りになる人だぞ。と言っても、あんまり甘えるわけにはいかないけどな」

「昔っから人に甘えんのが下手なんだから」

「自分でできることは自分でやりたいんだよ」

「……」

幼馴染トークの間に挟まったシャルロットがみるみる闇オーラを醸し出していく。

セシリアは、触らぬ神になんとやら、とトミー達の観察に切り替えた。

「場所を変えるようですわね……」

「手を洗う場所の椅子に座ったな」

「あの雪子さんというマダム、気品があっというらっしやいますわね。」

お声も柔らかくて暖かい」

「ああ。トミヤの悩みを聞き出してくれそうだ。……って、後ろがやかましいなまったく！」

「シャルロットさん、辛抱できなくなったみたいですよ」



手水舎に設置された長椅子に、トミーを真ん中にして横に並んだ。

箒に紹介を受けた雪子は、

「いつも箒ちゃんがお世話になって」

とたおやかに応じてくる年長の女性に、トミーも無言を貫くわけにはいかず、不器用に受け応える。

「まあまあ、そんなに怖がらなくてもいいのよ。ここにあなたを傷つける者なんていないから」

雪子の言葉遣いは何気なさそうできて、トミーの心に素直に染み込んできた。

目をしばたたくトミーに、雪子は笑みを深める。

「悩んだら内に籠っちゃやう性格なのかしら。箒ちゃんがそうだったから、なんとなくそう感じちゃったわ」

「……箒も？」

「そうなのよ。小さいころ近所の男の子たちからかわれた時なんか、むっつりふくれっ面なのに何にも言わなくてね」

「ちよつと、雪子おばさん！」

「それを一夏君がかばってくれたの。男の子たちを追っ払ってくれてねえ。箒ちゃんと一夏君が仲良くなったのはそれからで」

「わー！ 雪子おばさん!!」

うふふ、と笑って済ませてしまう雪子に、箒が適うはずもなく座り直した。

「でも、トミー君の場合は、少し複雑そうね」

「……そう、思われますか？」

「なんていうのかしら、トミー君の発する、気、といったらいいかしら

？ どんより黒ずんでいて、濁って感じるの。ああ、別に靈感がどうこう言うわけじゃないのよ」

「はあ……」

雪子の手が、トミーの背中に回された。優しく、幼子をあやすように撫でるその温もりが、トミーの闇を薄くする。

「胸の中にあるモノを吐き出してみなさい。言葉を繕わなくていいの。口にこみ上げてくるものを、あるがままに外に出してみなさい。焦らなくてもいいわ。私は夜は非番だから」

神社の灯籠に明りがともった。

東の空は夜を告げているが、初夏の夕暮れはのんびりしていてまだるっこしく陽光を残している。

ザアツ、と一陣の風が通り過ぎる。どこかで蚊取り線香でも焚いているのか薬の香りがした。

「——僕は」

トミーの肩がビクリと跳ねた。

「僕は、頑張ってきた」

息が、苦しそうに吐き出された。

「頭が痛くても、身体が辛くても、非難されても、たとえ仲間が死んでも、僕は、くじけることが無かった。できなかつた。辛いなんて、感じなかつた。それが——」

呼吸が荒くなりながら、トミーは話す。

「人に植え付けられたものだったなんて知ったとき、なにかもかも空しくなつた。どうりで、鈍いわけだ。苦しまないわけだ。幸運だなんだって、楽観的になるわけだ。みんな、そう感じるように、感じないように、仕組まれていたなんて……!」

ギリ、と歯を食いしばる。

「じゃあ、僕は、いったい誰なんだ？ 織斑先生は、僕の気持ちは僕だけのものでって言うていた。その僕はいったい誰なんだ！ 十三八トミヤ？ トミー？ それとも、11038号？ いったいどれなんだ!」

両手で頭を掻きむしり、顔を覆い隠した。

「薬を止めれば、痛みを感じれば、僕の本性が分かると思つてやつてみ

た。のに、ただただ苦しいだけだった！ 薬がないと、頭が痛むんだ。ハンマーで殴られているとか、虫が這っているとか、とても我慢できないくらい痛いんだ。馬鹿みたいなのたうち回って、眠りたくても眠れなくて、我慢できなくて薬を飲んだ。ふざけてる。情けない。たまらなく……惨めだ」

箒は、トミーの皺だらけの制服と、ぼさぼさの髪と、濃い隈のある目元の理由が分かった。

「みんなが僕を呼んでくれる。心配してくれている。でも、僕が僕をわからないのに、どう応えればいいのかわからない」

今まで口を閉ざし続けてきた、その訳も。

「学校も休学になって、もう僕の居場所がなくなったみたいで、自分自身と向き合うのも怖くて、もう、何もかもが……——」

トミーの言葉が止まった。

身を屈め、肩を震わせ、指の隙間から零れ落ちる滴が、言葉の代わりに感情をあらわしていた。

雪子はトミーの背中をさすりながら、

「箒ちゃん、悪いんだけど、お水とお神酒とお塩を持ってきてくれないかしら？ 社務所のお台所にあつたと思うから」

「わ、分かりました」

お使いに走る箒の後ろ姿を見送りながら、目の前の少年に背負わされた運命の大きさに、小さくため息を着くしかなかった。



いくぶんか落ち着いたトミーに、雪子は水と塩を使ってお祓いを施した。

お神酒を少量おちよこに入れて、トミーの手をとって包みもたせる。

「お神酒はね、身体の内側から清めてくれるの。気休めかもしれないけど、グツと飲み干してごらんさい」

言われるまま、一口に入れた。量は微量だが、胸がカツと熱くなる。

目の曇りも少し晴れ、良いきつけ薬になった。

「……私は、洗脳とかそういうのには疎いんだけどね」

雪子はそう前置きを入れて、

「自分が自分でない、と悩むのは、その人の性格や感情の一部が肥大化したり、矮小化してしまうから起きてしまうの。よく悪いことをした人が、魔が差した、なんて言い訳するじゃない？ それは一瞬の欲望が膨らんで、理性を押しえつけてしまうことなの」

だからね、とトミーの瞳を覗き込む。

「あなたが自分を取り戻すためには、いろいろなあなたの性格や感情に気づいてあげるといいんじゃないかしら」

「いろんな、僕、ですか？」

「そう。さつき、自分の辛さが分からないって言ってたじゃない？

それもきつと、あなたの一部が大きくなりすぎたり小さくなって、心理的な不感症になっているんだと思うわ」

そうね、とトミーの持つているおちよこにお神酒を注ぎだした。

みるみるお酒が一杯になって、

「あの、こぼれてますよ？」

「このおちよこはちっちゃいものね」

「いや、そうですけど」

「このおちよこが、今のあなただと考えてみて。どんなに神聖なお酒でも流れ出てしまうわね」

雪子はお神酒の溢れ落ちる先に、水を入れていたコップを差し出した。

「このコップがあなたの気づいていないあなた自身だとしたら、ちゃんと収めることができるじゃない？」

「え、ええ」

「この気づいていない部分は何なのかしら。もしそれがわかったとしたら、今まで感じずに流してしまっていたことも、ちゃんと汲み取ることができるはず」

雪子はコップが一杯になると、注ぐ手を止めた。

なみなみと注がれたコップを、おちよこにチンと当てると、一気に

豪快に飲み干した。

「ゆ、雪子おばさんっ」

「大丈夫よ、箒ちゃん。私お酒強いから」

うふふ、とまったく動じない姿は、本当にうわばみみたいだ。

「とみや君、でしたね。これはおばさんからの他愛もないアドバイスなのどけれどね」

「ぜひ、聞かせてください」

「もしお時間があるのなら、旅行に行ってみてはいかがかしら？」

「旅行、ですか？」

「ええ。知らない街や文化の人に出会おうと、自然と自分と比較するようになるのよ。日本人が海外に行くと、たいていこれまで気づかなかった日本を知ることができたりするの。それと一緒によ。自分を見つめ直すには、旅が一番なのだと思うわ」

なるほど、とトミーは頷いた。

今は休学中で時間が余っている。織斑先生に許可を貰えば行けるかもしれない。

いや、ぜひ行こう。

「やってみます」

「素直な子ねえ。そうだわ、かなうなら、ぜひお友達と一緒に行ってみなさいな。旅は道連れよ。それに誰かといたほうが、客観的な意見が貰えたりするものだから」

「友達と……」

むむ、とトミーは考え込んだ。

IS学園の仲間たちは当然バツだ。大事な勉強がある。

クラリツサさん？ 当然ダメだ。軍務で絶対忙しい。

他に声をかけられる人となると……。

「なんとかあたってみます」

いた。自分に身近で、自分を慕ってくれているかもしれない女の子が。

「そう、それが良いわ。ぜひ楽しんで来なさいな。ところで気付いたのだけど、あなたって意思がしっかりしているのねえ」

「そう、ですか？」

「あなたの返事はね、何々してみようと思う、じゃなくて、何々します、って意見がハッキリしているの。気づかなかったでしょ？」

「はい、まったく……」

「うふふ、これでああなたのおちよこも、少し深くなったかもしれないわねえ」

雪子の優しい笑顔に、トミーも表情が緩んだ。

久しぶりの破顔だった。

景気づけに、おちよこのお神酒をグツと飲み干した。

胸が熱くなるのが、お酒によるものか、心の動きによるものか、どちらにしても心地よい熱情を感じた。

三十四話 生徒会の煩悶

「あくあく、トミーがいなくてつまらないよ〜」

両手を広げてテーブルに突っ伏しながら、布仏本音は間延びしきつたため息を着いた。

「本音、生徒会室でだれるのはやめなさい」

向かい席で書類と格闘している姉、布仏虚が、せわしなく作業する手を止めずに注意する。

本音は顔の右隣に山となって積まれている報告書を一枚めくると、手でもてあそびながら不満げに喉を鳴らした。

「やっぱりさ〜、無理にでも生徒会にいられておけばよかったんだよ〜。そしたら休学だからって、旅行に行かれることもなかったのに〜」

「いない人のことをいつまでも話していたってしょうがないでしよう」

「だって〜、トミーがいれば書類整理もとつくに終わっていたはずだよ〜？ 今頃お姉ちゃんが淹れてくれた紅茶とケーキ摘まみながら、楽しくおしゃべりできてたろうにさ〜」

「それは、否定できないけれども」

「でしよ〜」

口をとがらせて本音がブーたれる。

やれやれ、と虚も頭を振るが、いなくなつて改めてトミーの貢献の大きさを目の当たりにしていた。

トミーは生徒会メンバーではないが、本音の友だちである間柄から、ちよくちよく手伝いに駆り出されていた。

書類整理もその一環で、速読と速記の能力、そして丁寧な仕事ぶりが好まれて瞬く間に生徒会に溶け込んだ。トミーが手伝いに来る日は明るいうちに帰れるどころか、ティータイムを挟めるほど作業効率があがるのだから、いかに尽力してくれていたかが偲ばれる。

「本音の言う通りだわあ。生徒会長権限でトミー君を入会させていれば良かった。逃がした魚は大きいってホントよねえ」

社長机のように立派なオフィスデスクで、ハンコを押す機械と化

している更識楯無が、疲れた表情で愚痴をこぼした。

普段気丈な楯無だが、今は珍しく疲労の赤ランプが灯りかけている。

ファントム・タスク
亡国機業の襲撃やら、生徒二人の失踪やらで、処理しなければならぬ作業と書類が膨大に溜まっているのだ。

大会後の事後処理も含めて、生徒会メンバーに先日の臨時休校は充てられていない。

「……っあー！ もう、おわんなーい！ まったくどうしてくれるのよ、虚！」

「わ、私ですかお嬢様!？」

「だあって、トミー君は亡国機業の差し金かもしれない、とか言つて、入会に反対していたのはあなたじゃない！ 蓋を開けてみたらオールド・ファッション反女尊男卑主義団体繋がりだったなんて、反対勢力にも程があるわよ！」

「あの、お嬢様。オールド・ファッションも反体制組織ですので、注意に越したことはないと思うのですが」

「組織の方針はそうらしいわ。けどテロとか表だった直接行為は見られないのよね。それに亡国機業ファントム・タスクの暗躍から身を挺して学園を護ってくれたトミー君を見ると、少なくとも学園を敵に回すつもりはないんじゃないかしら」

「そうだよ。それにトミーが学園を守ってくれたのは前にもだよ？ 正体不明の無人機が襲撃してきた時、おりむーと一緒に撃退してくれたじゃない。お姉ちゃんの神経質」

「そ、そうは言ってもですよ」
虚は手にしていた書類を机に叩いて、斜めにずれた眼鏡を整えながら、

「彼のスポンサーである『MRエレクトロニクス』の製品が亡国機業ファントム・タスクの活動で見られたのは確かです。それも一般流通していないものだけに疑惑は拭えません。むしろ私としてはオールド・ファッション反女尊男卑主義団体に連なっていたということのほうが、正直信じられません」

「とは言っちゃって、もうネタは上がっているしねえ」

楯無はハンコを押す手を休めて、椅子にもたれながら腕を組んだ。織斑先生のもとに届いた手紙の出所と封蝋印からして、MRエレクトロニクスとオールド・ファッションの線は濃厚だ。

もし偽造や偽装であると考えても、そうなるとトミーの活躍の理由がつかなくなってしまう。

やはり虚の考え違いだろう、と楯無は下した。

「むしろトミー君の背後関係より、失踪した二人の三年生の方が問題よ。なにせ、前に虚が焚きつけた子たちなのよ？ LSを容認できない生徒の膿を出すって話だったけど、化膿して外科手術が必要な事態になるなんて思わなかったわ」

「そ、それは……、申し訳ありません……」

虚は今度はすまなそうに頭を下げた。自分の手落ちを自覚しているためだった。

件の三年生たちはLSに否定的な輩の代表格だった。

今でこそトミーは学園になじんでいるが、入学当初はLSがISもどきとして世間に非難されていた背景もあり、不信感をもつ生徒が多かった。虚自身も当時トミーを警戒していたため、強行調査と不平勢力のガス抜きを兼ねた、暴発という荒療治を仕組んでいたことがある。

もちろんただそそのかした訳ではない。以前から不審な行動があると目を付けていたが故の人選だった。普段の生活態度や背後関係含め、何かよからぬことを企んでいそうだと、虚の感が告げていた。

対暗部用暗部という、更識に連なる者としての直感だ。

果たして三年生二人はトミー襲撃事件で裏の顔をまざまざと露呈してみせた。その後織斑先生に豪雨じみた説教の雨を受けたらしいが、どこまで改めることができただろうか。

学年別トリーナメントが何者かに狙われていると聞いたとき、虚は二人が何かしでかすような予感がした。そのため独自に見張っていたのだが、まさか亡国機業ファントム・タスクに与して失踪するなど、彼女をしても思えないことだった。

そんな侍女の悔悟する姿に、主の更識楯無は肩の力を抜いて息を着

いた。

「ふうっ……。もういいわ。私もちよつと疲れてるみたい。こんな力リカリするなんてね。一休み入れましょう」

「おお、賛成〜！」

「本音は何もしていいいでしようが」

「ケーキを食べたら本気出す！」

「どうだかね。虚、紅茶淹れてくれる」

「かしこまりました、お嬢様」

布仏姉妹が侍女らしくテキパキと準備してみせた。

本音もこういう時は動きが速い。ケーキプレートにフォークを乗せ、来客用のタルトを皿に切り分けて皆に配る。気持ち、自分のだけサイズ大きめに。

虚の注ぐ紅茶は絶品で、品種ごとに最高の入れ方を覚えている。無論、主の好みも汲み取り済みだ。

三人はしばしの休憩に会話の花を咲かせた。

「……ところで彼、旅行に行かれたようですが、よく織斑先生が許しましたね？ 休学とはいえ、事情が事情ですから、渋ると思っておりましたが」

虚がカップを置いて尋ねた。

「ああ、それね。なんと織斑先生、笑って許したらしいわよ」

「ええ!？」

「なんでも箒ちゃんと一緒にお願いしに行ったらしいんだけど、彼女のおばさんのアドバイス、とかつて言ったら、急に機嫌よく背中を押したそうなのよ」

「あく、それ私も知ってる〜」

本音がフォークについた生クリームを舐めとりながら口を挟んだ。

「雪子おばさんっていうらしんだけど、織斑先生も信頼している人みたいだよ〜」

「あの世界最強が信頼している御仁ですか……」

「今度は私も人生相談にいつてみるかな、とか言っていたって、おりむ〜が感慨深げだったな〜」

「ま、いつもお酒に逃げるよりは建設的じゃない」

最近お酒の量が増えてたみたいだしね、と楯無が笑いながら紅茶を傾けた。

「それで、彼はどこに向かわれたの？」

「イギリスらしいよ。セツシーが猛アピールしてたから」

「なるほど、目に浮かびますね」

「でも、最初は別のところに寄ってから行くみたいだよ。友だちと一緒に周るんだって。セツシーとラウランがすごい悔しがってたな」

「別のところ？」

「えっと、確か……」

「ルクーゼンブルクよ」

楯無がカップを置いた。目の色が急に真剣になる。

虚もその国名を聞いて息を呑んだ。

「トミー君が所属するMRエレクトロニクスの欧州本店がそこにあるの。彼の友だちはその同僚よ」

「なるほど……。かの国に、本店が」

「どう思う、虚？」

そうですね、と口元に手を当てて、考えをまとめる。

顔を上げるまでの時間は存外に少なかった。

「ルクーゼンブルク公国は小さな国です。地勢的にも東欧で主要国とはかけ離れている。にもかかわらず、大企業の欧州本店があるとなれば……」

「MRエレクトロニクス、思ったよりもIS関連に喰い込んでいるみたいね」

伶俐な頭脳を持つ侍女は主の言葉に首肯した。

三十五話 おいでませルクーゼンブルク

「着くいた〜!」

飛行機での長旅を終え、ようやくルクーゼンブルクに到着した。途中モスクワでの乗り換え以外はずっと座りっぱなしだったので、さすがに体が疲れている。久方ぶりに惰眠をむさぼって、頭が少しボーっとしていた。

キャリーバックを置いて軽くストレッチを済まし、空港の外に出ると、

「わあ……!」

青々とした朝の空が目飛び込んで来た。

大きく背伸びをしながら胸に吸い込んだ空気は、日本とは比べ物にならないくらい爽やかだ。

頬をなでる風は少し肌寒く、出発前にセシリアが巻いてくれたストールが風になびいた。

「東欧の朝晩は今の時期でも冷えましてよ」

と心配そうにループノット巻きをしてくれた優しさが冷えから守ってくれる。

初夏の朝日はこれから暑くなるのを予期させる強さがあるが、ラウラに被せてもらったハンチング帽がいい具合に日差しを避けてくれた。

「お前の額のアザも隠れるからな」

と、頭を撫でながら載せてくれた帽子のつばをトントンと叩いた。目深に被り直して、しばし目を閉じる。

出発に際して見送ってくれた、大切な、愛しい仲間たちの顔が瞼の裏に浮かび上がってきた。

一夏や箒、シャルロットや鈴、お清さんに本ちゃん、IS学園のみんな。

かけがえのない、僕の宝物たち。

ふいに、胸がいつぱいになってきた。

「……さあ、行こうか!」

湿っぽくなつた気分を晴らすように声をあげ、キャリーバックを引きずつて歩きだす。

目的地はルクーゼンブルク市街地中心部。市内を流れる川に面したカフェで、旅仲間と合流する予定だ。

空港から地下鉄までのシャトルバスが出ているらしいが、せっかくなのでタクシーを選んだ。

お金は使う機会が無いぶん溜まっているし、寿司詰めの車内で僅かな車窓を覗くよりも、ずっと風景を堪能できると思つたからだ。

タクシー乗り場は混んでいたが、チップを弾むとすぐに乗り込むことができた。

「やあやあ、ようこそルクーゼンブルクへ！」

運転手のおじさんが愛想よく帽子を振ってくる。

観光客が多いからか、対応も流石にこなれていた。

「今の時間だったら、お兄さん日本からのお客さんだね？　へへ、モスクワから来たつて言つてもね、顔色を見れば乗り継いできたんだなつてわかりますよ。それに日本の方にはご鼻屑にして貰つてますからね。……にしては、お兄さん顔立ちが日本人っぽくないね？　なに、日本の学校に通つていた。なるほどねえ、あの国は学問も進んでますからねえ」

よほどおしゃべり好きなのだろう。少し話題を返すと、怒涛のようにおつりが返つてきた。

「天気が良くて爽快だつて？　そりゃあそうですよ。日本は、あれだ、今は梅雨の時期でジメジメしているそうですからね。こつちはカラツとして気持ちが良いでしょう。そういやあ、前のお客さんとの話で盛り上がったんですがね、ルクーゼンブルクにも四季があるつて知つてましたかい？　日本のお客さんはね、四季は日本にしかないと思つているらしくてね、みんなびっくりしていかれるんですよ」

流暢なしやべりに巻き込まれながら、窓の外に目を遣つた。

蒼天の下、絵にかいたような中世ヨーロッパの街並みが広がっている。

あらゆるところに塔がそびえ立ち、家々の赤い屋根と教会のブロン

ズ色が見事にコラボレーションしていた。

「綺麗な街だなあ……」

僕がそうつぶやくと、運転手さんはさも嬉しそうに、そうでしょう、と頷いた。

「ルクーゼンブルクはね、先の戦争の破壊に巻き込まれずに済んだ幸運な国なんですよ。その後東側陣営に組み込まれましたけどね、まあだいぶ苦労はしましたが、西側陣営の高度経済成長に巻き込まれなかったもんですからね、昔ながらの町並みが再開発されずに残ってるってわけですよ。おかげで今や中世の町並みが残る観光都市、つて銘打ってしましてね。そら、左前を見てごらんなさい」

言われるままに顔を向けると、風情を残す市街地の中を流れる広い川に、物語の絵本に出てきそうな橋がかかっていた。

きっと由緒ある有名な橋なのだろう。

「あの橋は今から六百年以上も前に作られたものなんですよ。この街は歴史も古くてね、口の達者な観光協会の連中なんか、千年王都なんて結構な呼び名を付けてるんですよ。お兄さん、日本から来たなら京都もご覧になったでしょ。え、見てない？ そりやあ残念だ。実はね、あの街と仲良くやってるんですよ。うちの君主様ファミリーが表敬訪問なされた時は、たいそう歓迎されたそうですよ。今度は末の妹君アイリス様を日本に行かせたいとか、そうおっしゃられたそうですよ」

へへ、と社会科の先生に先導されているような気分になりながら、ふと右側の町の向こうに眼が行った。

そのあたりだけ異様だったのだ。

「あのあたりは、なんだか感じが違いますね。周りの色に会わないというか、現代的というか」

「ああ、ありやあ外資企業連の区画ですよ」

ドライバーのおじさんがつまらなそうに、ふん、と鼻息を荒くした。「この国はISのコアの基となる地下資源が豊富でしてね。それでIS関連企業が他所から押し寄せてきているわけです。政府も経済特区を作ったは良いが、その区域が面白みのないビル街になっちゃいま

してね。俺らのような地元の人間から見たら、まあ複雑な心境ってわけですよ」

「そうなんですか……」

僕もその外資系企業に勤めているとは言い出せなかった。

代わりに、というわけではないが、街の説明分も兼ねてチップを上乗せすることにした。

「こいつはありがたい！ そうだ、お兄さんいい人だからこれをあげるよ」

そういうと、おじさんは懐からなにやらチケットのようなものを手渡してくれた。

読んでみると、

「ジュエリーショップの割引券？ なにに、ガーネットがおすすめ……」

「この国はガーネットが特産でしてね。他所のと違って透明度が高く、深い赤色をしてるんですよ。それにガーネットは旅人の守り石と言いますからね。お兄さんにピッタリでしょう。本物をあげられりゃいいんだが、割引券で勘弁してください」

「いやあ、ありがとうございますー」

何度もお礼を言いながら、親切なタクシーを後にした。

仕事から、ルクーゼンブルクに来たのは別に初めてというわけではないのだが、これまでにない特別な出会いに胸が躍った。

この気持ちはきつと、誰かの手で作られたものではなく、僕自身の思いだと信じたい。

さて、待ち合わせ時間には少し余裕がある。

せっかくなので、この割引券のお店に寄り道することにした。

そう携帯端末のマップを開こうとすると、

「あの〜」

という声と共に、肩が叩かれた。

はい？ と返事をしながら振り返ると、
ぷに

とほっぺに指を突かれた。

にししし、と歯を見せているのは、

「……結構なご挨拶だね、エクシア」

今回の旅仲間で、僕の専属オペレーターが、さも嬉しそうに笑っていた。

「お久しぶりです、トミヤさん！ やゝ、早めについたんで街を散策しようかと思っていたら、ちようどタクシーから降りるトミヤさんの姿を見かけたんですよ！ これぞまさに運命の再会ー！」

「うん、久しぶりゝ」

「軽いつ!? ちよつとトミヤさん薄情過ぎです！ こうして会うのは春先以来なんですからね！ それに私の今日のおめかしとか、男性として言うべきことがあるでしょう！」

腰に手を当てながら一氣にまくしたてられた。

まあ、確かに直接会うのは、IS学園に入学する前以来だけどき。

端末上でいつも顔を合わせているから、っていうのは、エクシアの言う通り薄情なのかも。

改めて彼女を眺める。

明るいレモン色のシャツを腰に巻いて、白いノースリーブニットとデニムのハーフパンツ。

明るいエクシアらしいカジジュアルさが伝わってきた。

ぷくつと頬を膨らませている顔は、何とというか、いじらしくも可愛らしい。

僕はなんとはなしに頬が緩んでしまった。

「あゝ！ なに笑っているんですかトミヤさん！」

「ゴメンゴメン。いつも会社の制服姿しか見てなかったからさ。ちよつと驚いちゃって。うん、エクシアには、そういう元気そうなおファッションの方が良く似合っているよ」

「んんゝ、まあ、及第点としましょう。でも、ファーストコンタクトは減点ですからね！」

「悪かったって。じゃあ、ここでお詫びの品をプレゼントするから、どうか機嫌直してよ」

「あら、チケットを用意していたなんて殊勝ですね。お店は、『ガー

ネットtour……』って有名店じゃないですか！ いいんですか!？」
「そうだったの!？」

「あ、えーっと、まあ、とりあえず行ってみようよ」

「はい！ 私、場所知っているんで案内しますよ。行きましようトミヤさん！」

そう腕をぐいぐい引つ張ってきた。

ちよつと、こつちはキャリアバックをひきずっているんだから、そんなに急げないんだぞ。

それに気づいたのか、今度は横に並んでこちらのペースに合わせてくれた。

「えへへ」

エクシアがニコニコしながら身を寄せて来る。

心なしか、彼女の頬が髪の色と同じ朱色に染まっているように見えた。

つないだ手がギュツと握られる。

「ありがとうございます、トミヤさん」

不意に感謝の気持ちを書べられた。

「そんなにチケットのお店に行きたかったの?」

「違いますよ。旅行に誘ってくれたことにです」

「ああ。こちらこそ、だよ。エクシアも仕事あったらうに、よく休めたね」

「そりやあもう、上司に向かって、お願いだから休ませてくれ〜!」

「て迫りましたからね」

「だ、大丈夫だったの?」

「ええ。常務さんがすんなりOKしてくれました」

「あの常務さんが? 意外だね」

「いつも気難しい方ですからね。でも、陰ながら、いつも私とトミヤさんのことを案じてくれているんですよ」

「そうだったんだ……」

まだまだ人を見る目が養えてないなあ、と嘆息する。

どんなに想像を膨らませても、ムツツリとして眉間にシワを寄せた

常務さんの顔しか浮かび上がらない。

エクシアには、少しでも笑いかけているんだらうか。

お土産、もつと高価なものにしておけばよかったかな。

「さあ、着きましたよー」

エクシアのはずんだ声に考えを中断した。

彼女が指をさしている先の区域は、車道と歩道が同じくらいの道幅で広く、人通りも車通りも賑やかなところだった。

劇場や美術館の立派な建物がある境界の、四角い建物が均等に並んだ中に、その宝石店が立っていた。

中に入ると、外の喧騒とは打って変わって静謐な感じがした。

ショーケースの中の商品は、決してきらびやかに輝いたりせず、お店の雰囲気に合わせて奥ゆかしい光を放っている。

店員さんがピッタリ張り付いてくることもなく、静かに煌めくジュエリーグッズをゆったり見回すことができた。

手前にある値札を見ても、

「……思ったより、良心的な価格だね」

宝石って上限が限りがないものだから、そこそこで落ち着いてくれることに安堵した。

いいお店を紹介してもらったな。タクシーのおじさんの行き届いた配慮に感謝する。

エクシアは目を輝かせてショーケースに食い入っている。

ブローチ、ピアス、リング、チャーム……。

ありとあらゆる装飾品が、ガーネットの赤で彩られていた。

「わあ——！」

エクシアの足がある箇所で止まる。

「コレー・コレがいいですー」

小ぶりのガーネットが三つ、シルバーリングの上に並んだ、控えめながら深紅の映える指輪だった。

確かにきれいだけど、この商品は……、

「ペアリング、だよ？」

「だからですよー」

「いいの？」

「トミヤさん、その疑問形、ナシですからね！」

またほっぺを膨らませて怒られた。

わかったわかった、と言う通りにする。

店員さんに用意して貰っている間、隣でワクワクしているエクシアを横目で見て、

——さすがの僕にも、彼女の胸中が察せられた。

僕の視線に気づいたのか、エクシアが微笑みを返してくる。

一瞬その可愛さにドキツとした。

心中がバレないように苦笑を返す。ちゃんときこちなくできただろうか？

「お待たせいたしました」

店員さんが用意してくれた指輪を取ろうとすると、

「せっかくですし、お二人で指輪を交換なさってみてはいかがですか？」

妙齢の女性店員さんが笑いながら囁し立ててきた。その左手の薬指には、契約の指輪が煌めいている。

「い、いいですね！ トミヤさんも、いいですよね!？」

「う、上ずった声上げないですよ！ そ、そだ、僕は親指にしたかったんだけど……」

「ええ〜」

店員さんからもブーイングされた。

「いいだろうっ！ 僕だって指の場所で意味合いが違うって事ぐらい知ってるよ」

「じゃあなんで親指なんですか？」

「左の親指だと、目標達成の願掛けになるっていうだろう？ いまは叶えたい願があるの」

「むく、そう言われると断りずらいじゃないですか。じゃあ、私の指にはどこにはめてくれるんですか？」

「……小指で、どう？」

「えっ、そ、それ、意味わかって言ってますよねっ。」

「右か左かは、任せるよ」

「や、やった……！」

ドギマギしながら、二人で指輪を交換し合った。

僕は左親指に、エクシアは左手の小指に。

「なるほどですね」

店員さんがニヤニヤしている。

僕はノーコメントを貫いた。

「せっかくですし、記念に写真を一枚とりましょうか？」

まったくサービスの行き届いたお店だなあ！

僕は叫びたくなかったが、エクシアは、お願いします！ と携帯端末を手渡した。

後で見せてもらったが、二人とも火が出るほど顔が赤らんでいた。僕たちの旅行は、こうして始まったわけである。

三十六話 怪物、襲来

MRエレクトロニクスの常務は戦慄した。

それはトミーが持つてきてくれたお土産のセンスが悪かったからではなく、トミーとエクシアがお揃いの指輪を付けていたからなども決してない。

陰ながら見守っている彼にとつて、二人が仲睦まじそうにしているのは微笑ましい以外にないことだ。

今、目の前に現れた招かれざる客に対して驚愕しているのだ。

「ちよつと借りるね」

当代きつての大天才、篠ノ之束。

ほかならぬその人が何の前触れもなく自分たちのラボに現れ、有無を言わさぬ傍若無人さで研究開発にいそしんでいる。

「説明を要求します」

眉間にしわを寄せた普段通りの厳めしい顔を努めて崩さず、常務は尋ねた。

「うるさい」

取り付く島もない生返事に切つて捨てられる。

「しかしですね……」

追求は轟音に遮られた。

見れば、目の前の足元に隕石が落ちてきたのかと思えるようなクレーターが発生したのだ。

「んん〜♪ さつすが私。グラビティ・コントロール・デバイス重力制御装置をいとも簡単に作れちゃうなんてね。パパツとやって、こんなショボイラボなんかとつととおさらばだぜい☆」

常務の特徴的な驚鼻から冷汗がしたたり落ちた。

グラビティ・コントロール・デバイス重力制御装置など、どこの研究所でもいまだに開発途上でしかなかったはずだ。それを、この天才はばけもの作ったというのか？ この短期間で？

「失礼、わたくし私から申し上げます」

不意に後ろから声を掛けられた。

振り向くと、銀の長髪の少女が瞳を閉じたままこちらに対峙している。

「いま束様がおつくりになられているのは、この国のロイヤルファミリーに向けたISです」

「……なるほど」

なぜこの天才かいふつが自社にいきなり現れたのか、なんとなく察知した。「ルクーゼンブルクが産出する資源、ISのコアとなる時結晶タイム・クリスタルとの取引ですか」

「おっしゃる通りです」

少女は機械のように首を傾げた。

「御社のラボに目を付けたのは、ルクーゼンブルクにある最大のIS関連企業であることと、独自にLSの開発にこぎつけた技術を見込んでのことです」

「ふっ、そこまで調べられては、返す言葉もありませんな。しかし、直に直面して改めて、あなた方とは次元が違うことを思い知らされます」

「当然です。しかし、もし御社がさらなる探究を望まれるのであれば……」

少女は一枚の書類を手渡してきた。

一読して、常務は瞳をこれ以上にならないほど見開いた。

「こ、これは……!」

「他のいかなる団体とも繋がりを絶ち、私たちとのみ提携する。どうです、悪い話ではないと思えますが?」

常務はゴクリと唾を飲んだ。

MRエレクトロニクスが反女尊男卑主義団体オールド・ファッションに与していることは、間違いなく知っているだろう。

そのうえで持ち掛けてきているのだ。

「しかし、なぜですか? 弊社と同じ分野で弊社より優れている企業は当然ながら存在しますよ」

「万を超える犠牲者を出して男性IS操縦者を作り上げたのは、弊社だけです」

「犠牲の数はそうでしょう。しかし、消えかけた命のみを選別している分、良心はごぎいます」

「死にかけの子供たちであれば、どんなおぞましい処置をしても良心が痛まないと？」

「我々男性の側には、ISに対抗するための力がどうしても必要なのです」

「そのためにVTシステムの開発にも与したと？」

「……すべてご存知の上でしたら、問答は無用ですな」

「では、わたくし私からお聞きしたいことがごぎいます」

「なんですか？」

少女はいきなり胸倉をつかんできた。端正な顔立ちが怒りに変わる。

「彼には打ち明けたのですか？ 心がいじくられていることを」

「……すでに気づいたようです」

IS学園の織斑千冬から、彼の旅行に際して知らされていた。

「貴方がたが、手を下したことには？」

「ま、まだ、伝えていません……」

常務がそういうや否や、世界が変貌した。

テレビの砂嵐の中にいるような、この世のものとも思えぬ空間に投げ込まれる。

天も地もわからないその中で、少女の髪がざわざわと波立った。

見開かれた瞳は、白目が黒に、黒目が金色に染められた異色の双眸があった。憤怒の形相を深め、はつきりとした殺意がほとばしる。

「ダメだよ、クーちゃん」

東の指摘に、は、っと少女が顔を上げた。

「残念だけどソイツ、まだ利用価値があるからね。生かしておかないと面倒なのだよ」

東の表情は満面の笑み。

しかし常務の顔からは滝のような冷汗が流れ出た。

まだ、利用価値があるということは、まだ、が終わればどうなってしまうのだろうか？

「申し訳ありません……」

少女が瞳を閉じると、世界はもとのラボに戻された。

「んくん、謝らなくていいんだよーちゃん。好きな人が傷つけられるのって悲しいもんね」

「た、束様っ!?!」

「ふっふくん、隠れて彼の中に遊びに行ってたの、バレてないでも思ったのかな〜?」

少女は年相応に顔を赤らめた。

この娘に対してだけは、天才も優しくなるらしい。

じゃあさ、と篠ノ之東はパツと常務に振り向いた。

「その紙切れにあるとおり、お前たちと提携を結べなかった場合、にのまえとみや一十三八を貰い受ける、ってことでのいーのかな?」

「し、しばしお時間を」

「即断あるのみ☆」

「私の一存だけでは決めかねるのです!」

「知ったこつちやないな〜」

「万が一私が独断を下したとして、後に弊社が意見を翻すことも……」
「で?」

東がきよとんと首を傾げた。

「それがどうしたの? 私に恫喝する気でもあるの? いいよ別に。潰すだけだから」

「……!!」

「あ、ひよつとして利用価値を笠に着た自己保身? ちつちつち、甘いぜ旦那♪ お前とくーちゃんのカレシ(予定)とだったら、比較する秒も分も厘の時間ももつたいたいないぜい☆ っていうか即決って言っただじゃん。とつと決めてよ。ハリー、ハリー!」

常務は人並み外れた頭脳を高速回転させた。こいつを前に時間稼ぎは通用しないと踏んだからだ。

オールド・ファッシュョン
反女尊男卑主義団体との繋がりを絶つ。

これは無理だ。会社にとって企業理念が最も重要なように、自分たちのあり方を変えることは認められない。目先の儲けに喰いつくな

ど、長期的視野から見れば忌避すべきことだ。第一そこまで落ちぶれていない。

では、万を超える犠牲の血と、汗と努力の結晶であるLS操縦者^トを明け渡すのか？

事態が事態だけに、致し方あるまい。時間はかかるが、また生み出せばいい。そうだ、一つ条件を課そう。ISを開発した篠ノ之東ならたやすい話だ。

「……ISのコアを一つと交換に、ではいかがでしょうか？」

「いいわけではないじゃん」

「な……!?!」

「あのさあ、もっと自分の立場をわきまえたほうが良いよ？ LS操縦者にあてがったオペレーター^トの女、業病を患っていたあれにISコアを埋め込んだのもお前たちだよ？ イギリス貴族のお願い聞いて、自分たちの研究成果にするために」

常務は後ずさった。

甘かった。

こいつらは、知り過ぎている！

「IS生体ユニットとしての研究成果をもとに、男性にコアを埋め込もうと企んだ。コアが人の命を長らえさせるなら、コアと繋がる検体を見つけれれば、男性でもISを動かせられると踏んだんだ。消えかけの命を選別した良心？ 笑わせるね。死にそうなのの方が都合がよかったんだ。コアとのリンクが分かりやすいからね」

「わ、私は犠牲となった子供たちすべての顔を覚えているんだ！ 彼らすべてに哀悼の意を持っている！ 決して消耗品のように扱ったわけではない！」

「うんうん、偉いね。もし消耗品みたいに使い捨てていたら、とつくの昔にしんでたよ、君ら」

常務は恐れおののいた。

ぺたりと床にへたりこみ、がくがくと全身を震わせた。

「ただでさえ、彼を操縦しやすいように心をもてあそんだ所業は許せません。どの口が良心などとほざくのですっ。」

常務の手を踏みつけながら、銀髪の少女、クロエ・クロニクルは言い捨てる。

「たっ、助けてくれ……!」

「それは、彼をもらい受けてもいいということですね?」

「言うとおりにする! だから、私を、我が社を滅ぼさないでくれ!」
「言質は取りましたよ」

クロエは常務の元から離れ、束の元に引き下がった。

「それじゃあ常務さん、ルクーゼンブルクの王女様向けのISができませんまで、一緒に協力しようじゃないか。なあに、そんなに時間がなかったりはしないって。ふふん、苦しゅうない、君は適当にくつろいでいてくれたまえ♪」

常務は絶望的な気持ちになった。

この化け物と、同じ場所で、同じ時間を過ごさなければいけないというのか!?

まるで猛獣の住む檻の中に入れられたような恐怖だった。

「ところで、トミヤがこちらに顔を見せたそうですが、その、今は、どちらに?」

クロエが先ほどまでと打って変わって、もじもじと尋ねてくる。

「す、すでに、ここを去っています。お土産を置いて、常備薬を補給していきました。ですのでその、今頃は飛行機の上ではないかと……」

「あっちゃく、行き違いになっちゃったね、くーちゃん」

「はい……。残念ですが、再会はまたの機会といたしましょう……」

「気落ちすることないよくーちゃん。君の未来のカレシは、今や私たちの手の内なんだからね☆」

まったくなんの悪びれもなく、無邪気に束は言い放った。

(かなわぬわけだ……)

常務は内心あきらめに似た言葉をついた。

ISに対抗するための力を求めた数多の所業が、目の前の怪物には何もかも見透かされている。

何重にも秘匿した機密情報が、今までのあらゆる努力が、いとも簡単に飛び越えられていく。

この籐ノ之束か い ぶが女性であったことが、男性にとつての災厄なのだ。
反女尊男卑主義者は、自分の持つ信念が折れそうになっていること
を自覚した。

三十七話 とある侍女（メイド）の憂鬱

「チエルシー、くれぐれも、くれぐれも！ よろしく頼みしましてよ！？」

60インチの大画面ディスプレイいっぱい、セシリアのドアップが映し出されていた。

画面の向こうではスクリーンを掴んでいるのだろう、ディスプレイの両サイドがセシリアの手でふさがれている。

「お嬢様、先ほどから会話がループしておられます」

画面の前で折り目正しい侍女服に身を包むセシリアのメイド、チエルシー・ブランケットが笑顔を張り付けたままセシリアの涙声を受け流した。

いまのチエルシーは侍女モード。セシリアの悩みを親身に聞くお姉さんモードではない。

最初こそセシリアの鬼気迫る勢いに、すわ何事ぞと真剣に応じたが、しばらく聞いて主人がいつもの妄想癖を爆発しているのだと切り替えた。

「繰り返したくもありませんわ！ トミーさんの旅仲間の方は女性だと言うではありませんか！ わたくし何が起きるか心配で心配で……」

「異性とは申しませんが、トミー氏の職場の同僚ということではありませんか。さらに旧知のラウラ氏が言うには妹分なのだから。そこまで懸念することもないでしょう」

「その妹という立ち位置も危険ですよ！ 親しい関係を利用して密かに近づき、トミーさんのスキを狙って本性を、……ああっ！ なんて破廉恥な!？」

今日は一段と妄想逞しいな、とチエルシーは笑顔の仮面の裏で思った。

「杞憂かと存じます。お嬢様と、ある意味で比肩するラウラ氏は信用しておいでのようなですし」

「いーえ！ 手緩いですわチエルシー！ ラウラさんは人見知りの風

がありますの。つまり、身内と判断した者には脇が甘くなる傾向がありますよ！ わたくしが注意しても、『トミヤの妹分なのだから、私の義妹分でもあるわけだ。きょうだい仲睦まじいのは良いことだろう』なんておっしゃるのよ！ ラウラさんは獅子身中の虫という故事を、祖国の歴史から学ぶべきですわ！」

チエルシーはピクリ、と僅かに顔色が強張った。

引きつった表情はほんの一瞬だけで、すぐに侍女の仮面をかぶりなおす。

「それに、トミーさんつたらせつかくのご旅行だというのに、ご勤務先からお使いを頼まれたそうですのよ！」

「……どうしてお嬢様がトミー氏のご動向を逐一ご存じでいらっしゃるのですか？」

「日に三度連絡をよこすよう申しつけておりますもの」
「なるほど」

「本当は通話を願い出たのですが、時差もありますし、わたくしの勉強がおろそかになっては心苦しいと断られましたの……。そのような配慮など無用と申したのに。優しいトミーさん……」

今度彼に会った時は主の非礼を詫びねばならないな、とチエルシーは従者としての義務感を覚えた。

それにしても、最近トミー氏への執着が強くなっただけではないかとついでに少し懸念する。

「そのお使いにしても、我がイギリスのＩＳ関連企業に配達を任せられるような話ですよ？ 祖国の企業が粗相をするとは思いたくありませんが、トミーさんはＩＳ操縦者という立場がどういうものであるのかを、もっと自覚なさるべきですわ！ 世間ではどんなに忌み嫌われて、メディアをはじめバッシングをしているか……。ああっ！ まさか悪い輩につかまって、人体実験やモルモットにでもされたりはしないかしら!? やはり今からでも追いかけて……」

などと突飛な供述を繰り返す主人の迷妄に、これはしばらく終わらないな、とチエルシーはこっそりため息を着いた。

少なくともお昼休みはペアだろう。今の時刻は日本では授業も終

わって夜だろうが、イギリスは8時間の時差があり正午を回ったランチタイムである。テーブルの上の昼食は未だ手を着けていない。

くう、とチエルシーのお腹が可愛く鳴いた。

そうげんなりしていたところへ、セシリアが長話を続けるディスプレイの右下に、メールの着信アイコンが現れた。

助かった。ちょうどいい時間つぶしができそうだ、とチエルシーが密かにデバイスを操作し、件名と差出人を確認する。

「――」
その表記に、チエルシーは再び侍女としての仮面が外れかけた。内心の動揺を持ち前の我慢強さで押さえ込み、喉まで出かかった驚きの声を噛み殺す。

いまだ続くセシリアの長口上が、とても小さく聞こえた。

デバイスを動かす手が鉛のように重い。

それでもどうにかしてメールを開く。

差出人は、『亡^{フアントム・タスク}国機業』

文面は、

「
今夜決行する。 Mを補佐せよ
」

それだけであり、これだけで十分だった。

「……とは思わないかしら!? どうお思いまして、チエルシー!」

主の呼ぶ声に、チエルシーはハッと我に返った。

内心の動揺を悟られぬよう、努めて応じねばならない。

咳ばらいをし、こもった前置きをしてから、

「もつと、トミー氏を信じてみてはいかがでしょうか、お嬢様」

指摘に、セシリアの表情が変わった。言葉が詰まり、口ごもる。

「どうやら適当に選んだ発言は、思いのほかセシリアの心に響いたらしい。」

同時に、チエルシー自身の心にも痛かった。

(信じてみる、などと、どの口が言うのだろう……)

チエルシーは胸の奥に冷たく重く暗い物がのしかかってきたよう

に感じた。



低い爆発音が響く夜のとぼりの中を、二つの光跡が飛び上がった。ミサイルよりも早く上昇するその姿は人型。ISを纏った乙女が二人、星も見えぬ闇の中を突き進む。

それを追うようにサーチライトが幾条も連なった。光線は乱雑に振り乱され、地上の混乱をあらわしている。

遅れて警報のサイレンが湧き上がる。あたりの建物に明りが灯り、煮えくり返るような騒ぎが巻き起こっていた。

イギリスの首都ロンドン、その郊外に立地しているIS研究施設は、平坦な屋上から煙を噴き上げて、襲撃の現場であることを物語っていた。

「他愛ない」

曇天の闇夜に行くISのパイロットが、鼻で笑いながら毒づいた。

機体の色は青。蝶の羽のような巨大なスラスタが特徴的で、同様の触覚のようなアンテナが付いたバイザーで目元が隠されている。フレーム自体はセシリアのフルー・テイアーズISによく似たシルエットをしていた。

「曲がりなりにも国家を代表するIS企業の研究所だというのに、この体たらくとはな。イギリスの凋落ぶりが見えるような無警戒さだ」
「潜入した仲間たちの工作があつてこそです。過度な侮蔑は控えなさい、M」

嘲笑に、もう片方のIS操縦者が諫めた。淡々とした声音の中に、抑え込まれた怒りのような響きがある。

装備する機体はイギリス製テイアーズ。ありふれた量産機だが、節々のパーツがカスタマイズされ、使用者の使い込まれた跡があった。

「くだらないな。売国奴にも愛国心があるのか？」

Mと呼ばれた少女は、相変わらず口元を歪めて応えた。

売国奴、と呼ばれた女性、チエルシー・ブランケットは、眉をひそ

めて睨み返す。

「……うぬぼれが過ぎると、そう言っているのですよ」

「情弱が過ぎると笑っているのさ。せつかくの最新鋭機を、このようにむぎむぎと奪われてみせるのだからな」

Mは自分が装備する青い機体を、フアッションチェックをするように見回した。

悪くはない、と言いたげな表情だった。

イギリスが独自に開発していたISの新型機。それを奪取するのが二人の任務だ。

「まあ、私がかまくらに使わせてもらおうさ。先ほど軽く慣らしてみたが、この長距離遠隔攻撃兵装はおもしろいな」

「不必要に暴れすぎです。予定ではあと27秒早く退避できていました」

「ハッ。向こうからもISが出てくれば、もっと歯ごたえもあったんだがな。どうにも物足りん」

「あれだけ暴れておいてよく言えたものです。居合わせた研究者たちが哀れでした」

「殺傷はしていない。決まりだからな。それに、カップルの観光地になっっているような場所だ。壊したところでどうとでもあるまい」

Mの軽口に、しかしチエルシーは口をつぐんだ。

Mの言う通り、襲撃した研究所には、なぜか一組の男女カップルがいた。明らかに私服姿で、職員風ではない。

男性の側は今時珍しく甲斐性があるようで、一緒にいた女性を身を楯にしてかばっていた。

背中を向けていたため顔は分からなかったが、躊躇のない動きが目

に留まった。
彼のような男性が健在ならば、英国紳士ジェントルマンもまだ捨てたものではないな、と内心嬉しく思っている。

「——おや」

唐突に、Mが嬉しそうに口角を上げた。

何事か、とチエルシーも切り替えると、ISのセンサーに感がある。

「……追手ですか」

「の、ようだな。それに、こいつは」

「早いー」

追手のシグナルはものすごい速度で接近してきていた。

二人は襲撃現場から回避している手前、当然ながら全速力で航行している。新鋭の機体はもとより、ティアアーズ量産機も追加バーニアを備えて、並みのISでは追いつけないほどのスピードを発揮していた。

にも関わらず、追撃してくる相手はすでに視認できる距離まで来ているとセンサーが告げている。

チエルシーが振り返るが、周囲に機影はない。

高度が違うからだ。

相手の位置は、もつと上。

「雲の上か」

Mが頭上に顔を向けると、ちょうど雲が途切れはじめ、星々のきらめきが広がってきていた。

次いで月が顔を出し、満月に近い月光に照らされる。

その月の中に、シミのように黒い点が光をなびかせているのが見えた。

シグナルのポイントに間違いない。

「あれは——」

ISだろう。あかがね銅色のトーンに彩られた人型の半身がある。

背中にトンボの羽のようなスラスタスラスタが四枚、飛行機雲ヴェイパーを引いて飛んでいる。

しかし、その下半身はどうだ。まるでウエディングドレスのスカートのように裾が長い。

大馬力のPICスラスタが内蔵されているのか、ひとときわたい光跡をなびかせていた。

その機影が、頭から沈み込む。機首をこちらへ向けて、まっしぐらに突っ込んできた。

「面白いー」

Mが吠ええると、機体を転じて迎撃態勢を取った。

手に持つBTエネルギーマルチライフル『スターブレイカー』を構え、追手に向けて撃ち掛ける。

——ゴールドキーパー 防衛兵装、展開！

急降下する機体のパイロットがそう叫ぶと、胸元の球体が輝きを放ち、周囲にバリアが展開された。

Mの放つ銃撃を弾き、構うことなく向かってくる。

「カミカゼかつ！」

判断するや、Mは蝶の羽に似たスラスターを羽ばたかせて飛び下がる。

「？ おいつ！」

チエルシーは動かない。

迫ってくる敵を映す瞳が大きく見開かれたまま、雷に打たれたように静止していた。

Mは面倒に舌打ちしながら仕方なくその背中を蹴り飛ばし、敵の軌跡から回避させる。

直後、いましがたの場所を流星のようなISが突き抜けた。一瞬でもMの動作が遅れていればぶつけられていただろう。

「！……あ」

「ボーつと突つ立っているな！ 足手まといだ！」

Mは怒鳴り散らすと、スターブレイカー長銃を敵の背中に向けて構えなおした。

「ま、待ってください！」

「なに？」

「あれの相手は私입니다！ 貴方は奪取した機体を送り届けてくだ

さい！」

「……貴様」

Mは怪訝そうにチエルシーを睨む。

しかし次の言葉が出る前に、自身のISのロックオンアラートが鳴り響いた。

後ろ、すなわち相手が降ってきた空の上からだ。

反射的に回避軌道を取ると、狙いすまされた光弾が次々と降り注ぐ。

「まだいたか!」

「先ほどの機体と一緒に?」

光弾は僚機のティアーズにも向けられていた。

相手の照準は恐ろしいほど正確で、躲しきれない一撃をフレームで受け止めると、

「くうっ!!」

ISのシールドと絶対防御の上からでも甚大な衝撃をもたらし、被弾箇所の装備を量子化させた。

「チイツ! どんな奴だ!」

Mが顔を持ち上げ、相手の素性を探る。

まず飛び込んできたのは、大きな手だ。二つ、敵機の左右にアンロック・ユニット
非固定浮遊装備のように浮かんでいる。

肝心のパイロットの姿は、

「男、だと……!?!」

世界で唯一の男性操縦者、織斑一夏。

ではない。

Mは一瞬でそうとわかった。しかし男であるのには違いない。

ISは一人の例外を除いて女性にしか扱えない。

もしそうでないとしたならば、

「まさか、『彼』が……」

リミテッド・ストラトス
「L S か!」

インフィニット

ISではないISもどき。

空を飛べないはずの出来そこないが、月を背に現れた。

三十八話 英国空中戦（バトル・オブ・ブリテン）

世界が飛び込んでくる。

全身を包み込む風圧が、地上の星のような街の明かりが、夜空に投げ出した僕の心を躍動させる。

飛んでなどいない。

墜ちているだけだ。

まるでスカイダイビングのようになりながら、僕とLグレイ・アイディール Sはイギリスの空を降下する。

「ははっ——」

やっぱり、空はいい。

地上を這う生き物たちは、きつと誰もが飛ぶことを夢見るだろう。

見上げる空、何処までも続く無限の成層を感じて、その中を駆け抜けたいと思うのはいつの時代も変わらぬロマンに違いない。

Lリミテッド・ストラトス S！ こんなところで出会うとはな！」

……あの蝶々みたいなISのパイロットも、そう思ったりはしないんだろうか。

目元がバイザーに隠れつつも、凄みのある笑みを浮かべてこちらに襲い掛かってくる。

蝶の羽のようなスラスタをふかせ、必殺の間合いで長銃を撃ち掛けた。

「防衛兵装——」

非固定浮遊兵装の防衛機構を起動し、掌にあるコアからシールドを展開。

敵の光線が水鉄砲のようにはじけて散った。

「その装備、さっきの奴と同じかっ」

言うや、すぐに射撃を取りやめて、出方を探るように間合いを整えてきた。

——さすがに気づいたか。

僕を乗せて運んでくれたエクシアのIS【ブロンズ・ガスト】でも、この防衛兵装は運用している。部分的な防御力では物理シールドに

負けるが、面として防いでくれるぶん応用が利く装備だ。

実際に使ってみて便利なんだよね、これ。エネルギーは喰うけれど、僕とエクシアの機体は容量が大きいからなんとかなっているみたいだ。

兄弟機、というわけではないが、同じメーカー製ということもあって、他にも多くの装備が共通していた。

——さあ、どう来る？

正面からの攻撃では僕に通じないぞ。

といつても、こっちは自然落下している状態だ。PICスラスタをふかして多少の軌道修正はできるが、LSのそれでは空を飛ぶにはあたらないい。

敵はそうと分かったのか、僕の頭上を取ってきた。

——ただ位置を変えるだけなら、こちらも向きを変えて防げるぞ？
そう非固定浮遊兵装グレイト・グロブを天にかざす。

と、向こうはスカートのように装着していた越元のパーツを展開させた。

放たれる数は6機。

各々自立起動してこちらに向かってくる。

——独立可動に、遠隔運用……。

僕には明らかに見覚えがある装備だった。

「BT兵器か！」

「ご名答。賞品をくれてやろう！」

6機のビットが僕の周囲に展開し、光の集中砲火を放ってくる。

——マズイッ！

僕は最初に飛んできた左右に向けて防衛兵装ゴールキーパーを展開させる。が、こうなると当然ながら上と下がガラ空きだ。

後出しのBT兵器が狙ったように防壁の隙間を突いてきた。

「詰みというやつだな！ 墜ちろっ！」

もう墜ちてるよ！ というツツコミは置いといて、なんとかPICスラスタを使つてのたうち回った。

体中のあちこちに銃弾がかすり、衝撃が四肢を弾く。

僕は空中で溺れそうになりながらも、何とか直撃を避けてジタバタもがきうごめいた。

まったく無様な動きだけど、しょうがない。地上用が空中で適うはずがないのだから。

「ちよこまかとつ、飛べない虫が何しに出てきた!」

「お前たちの気を引くためだよ!」

なに? と蝶型のISが表情を変える。

そこに、僕の後ろから光の弾が湧き上がってきた。

それも複数。僕を中心として周りから包み込むように光が蝶に集中する。

「これはっ、貴様らも!」

「ありがとう、エクシア!」

僕は右手を無造作に伸ばすと、そこに向けて後ろから一機のユニットが飛んできた。

長方形のフレームユニット。

先端に砲門、末端に有線ケーブルが着いた装備を力強く掴み、その機動に牽引される。

「お待たせしました!」

ユニットを追い越して、エクシアのI^{ブロンズ・ガスト}Sが疾風の名の通り吹き抜けてきた。

「トミヤさん、お怪我は!」

僕の手を取ってエクシアが尋ねる。

「無いよ! イギリスからの連絡は!」

「まだです!」

「遅いな、そんなだから盗まれるんだ!」

僕はエクシアのISの背面部位リアフレームに回りながら、いまだ対応しきれないイギリスの警戒網にイラ立った。

あのBT兵器を扱うISにしても、僕たちが偶然強盗現場に居合わせなければ、すでに逃げられていたことだろう。

エクシアのISが追加加速装備ブロンズ・ブースターを備えているからこそ追いつけているのに、こうも連絡がつかないとあつては、せつかく稼いでいる時

間が無駄になってしまう。

「あの、怪我、本当にはないですか？ 研究所で襲われたとき、トミヤさん、私をかばって……」

エクシアが心配そうに振り返り、見つめてくる。頬が少し赤らんでいた。

「エクシアの前なんだから、痛かったら痛いっていうよ。……!?!」

僕は反射的に強がりと言わなかった自分に、我ながら驚いた。

これがIS学園でだったなら、相手に心配かけないように、精一杯の痩せ我慢をするだろうに。

「なっ、なんですか！ そのどっちに受け取ればいいかわからないセリフ!?!」

僕だってこんな返事、普段しないからわかんないよ！

「ど、どっちでもいいだろう。と、ともかく、僕は戦闘続行可能だよ！

さあ、あの二機をおさえるよ、エクシア！」

「はぐらかしているつもりですか？ もう、ちゃんとかまっついていて下さいね！」

僕は「ブロンズ・ガスト」の追加加速装備ブロンズ・ブリスターにブロンズ・ブリスター着いているグリップを握り締めた。

左右に浮かぶ非固定浮遊兵装は、追加加速装備の外部兵装みたいに装着される。

目の前では、さつき掴んでいた長方形のユニットが、彼女の背中に戻されていた。

有線でつながっていた他の三つも引き戻され、トンボの羽が生えているようなシルエットになる。

「ブロンズ・ガスト」の高機動型+LSおまけ付きの完成だ。

「いきますよおっ！」

エクシアの気合が入った掛け声のもと、眼下の敵機に向けて勢いよくダイブする。

さつきまでの自動落下とは比べ物にならないほどの加速力だ。

まさに空を駆ける一陣の風。

僕の鉛色あおがねいろのLSと、エクシアの銅色あかがねいろのISは一つになって、イギ

リスの空を切り裂いた。



「ふん、やはり抑えられなかったか」

蝶型のISを駆るエムは、不甲斐なく飛んでくるチェルシーに向けて悪態をついた。

自分がLSの相手をする一方、もう一機のISを任せていたのだが、まるで相手にならなかった様子に不満を隠さない。

「……機動性がまるで違います。このままでは二人とも逃げきれません」

「逃げるつもりなどさらさらしない。あのロングスカートのISから受けた多方面からの攻撃、おそらくBT兵器の類だろう。であれば撤退など到底無理だろうからな」

BT兵器は操縦者のイメージを反映、具現化する特殊な装備だ。

そのコンセプト上、逃げる相手を捕らえる、もしくは足を止めるとイメージすれば、忠実な猟犬と化す。

しかもハンターは別格の俊足ときた。逃げる側にとっては悪態をつきたくなる相手だった。

エムは戦わざるを得なくなった今の状況を、むしろ楽しむように笑っていた。

「いえ、あれはBT兵器とは違います。もどき、という意味で、類するという言葉肯定できませんが」

「もどき、だと?」

「あれは使い手を選ぶBT兵器を、ワイヤード・コントロール・オペレーション機械補助付き有線制御にすることで運用者を広げるために作られた模造品レプリカです。IC兵器、『インコム』という通称で聞いた覚えがあります」

「なるほど、つまり鎖でつながれている猟犬か」

「未だに実験段階にあると聞いていたのですが、実用化までこぎつけていたとは……」

「構わないさ。絡繰りが分かれば対処の仕様もあるからな。他に何か

あるか？」

「もう一つあります。先ほど対戦して分かったのですが、あのIS、おそらく他に武装がありません」

「なぜ言い切れる？」

「三度、必敗の様相を呈しましたから。もしピストルの一つでもあれば墜とされていました」

直接対峙したチエルシーは、縦横無尽に襲い掛かるインコムをおのれの力量一つで躲しきっていた。

とはいえ完全にはさすがにない。必死の回避軌道の中で、相手本体にスキを露呈せざる負えない場面がいくつもあった。

完全な失態。にも関わらず、必殺の間合いを何度も逃したということとは、インコムの他に武装がないと考えられる。

「相変わらず状況分析が得意なことだ」

エムは見直したように棘のない笑みを浮かべた。

「では、実戦で活かすでしょう」

「いえ、エム、あなたには退いてもらいます」

「なんだと……？」

エムは笑みを消し、眉根を寄せた。

「時間を浪費しすぎました。内通者が稼いでくれたとはいえ、これ以上の手間はかけられません。イギリス当局の応援が駆けつける前に、その機体を持ち出さなければ任務失敗です」

「キサマ、私が遅れをとるとでもいうのか？」

「さつきから上司スコルの鬼電を無視するのも限界でしょう。あなたの首輪の締め付けが強くなる前に、大人しく言うことを聞くべきです」

「チツ……！」

エムは苦々しく顔を歪ませるも、機体を翻し、撤退の構えを取った。「いいだろう、退いてやる。だが、お前一人で奴らを抑えられるとは思えないな」

「あのLSを組み敷きます。飛べない機体ですから、何とかなるでしょう」

「それで肝心のISはどうするっ……」

「分かりませんか？ 相方を連れ去られたカップルがどういう行動をとるのか」

「ふん、馬に蹴られるオチが見えるな！」

言い捨てるや、エムは一目散に逃げだした。

チエルシーは巻き起こされた乱気流に煽られながら、自嘲気味な微笑を浮かべる。

「馬どころではない者から蹴られそうですけどね」

一つため息を着くと、眼に力を入れて気持ちを切り替えた。

装備を構え直して相手を見遣る。

彼方、自分に向けて彗星のごとく落下してくる、ひと塊になった姿を捉えた。

「いくわよ、——エクシア！」

チエルシーは対戦相手の名前を明確に口にした。

得物のライフルの先端に、銃剣じみたレーザーサーベルを煌めかせ、真つ向から突撃する。

いかに機動性に優れていようとも、むしろ機動性に引きずられて真つすぐにしか飛べないからこそ、接近戦は苦手と踏んだのだ。

インコムが迎撃してくるとはいえ、高機動同士がぶつかり合えば、機械的なサポートにも限界があるだろう。

「まずはこれよっ！」

チエルシーはISのバックパックから数発の砲弾を発射した。ティアーズ

弾は向かい合う両者のちようど真ん中で炸裂し、もうもうとした煙と粉塵を撒き散らす。

「チャフ!?!」

エクシアはゴールキーパーを作動させるが、視界不良だけはどのようなようもない。

さらに、わずかに入り込んだ妨害物質が各部のセンサー、レーダーを部分的に麻痺させる。

急降下中の今、自分の位置がつかめなくなるのは非常にマズイ。

その一瞬の戸惑いを見逃さず、チエルシーはエクシアに組み付いた。

「わ、わわっ!?」

「接近戦とは、思い切りがいいな!」

トミーが間に割って入り、チエルシーに掴みかかる。

「あなたとランデブーしたくなりました!」

チエルシーはトミーに絡みつくど、PICを最大にふかしてエクシアから離脱した。

「ちよっ!? ひ、ひとさらいー!!」

「もつと他に言いようがあるでしょう、エクシア!」

「盗人猛々しいことを! ……つて、あ、あれ? 私の名前?」

「どうしてお前が知っているんだ!」

掴みかかるトミーに、チエルシーは顔を間近に向けた。

「わかりませんか、トミー。いえ、にのまえとみや十三八さん?」

「僕の名前!? それに、その顔は……!」

あかがねいろシヨートヘア
銅色の短髪。

赤みがかった色の大きな瞳。

雰囲気こそ若干大人びているとはいえ、トミーは自分のパートナーと瓜二つの面影に目を見開いた。

「貴方がたと話したいことがあるの。一緒に来てくれるわね?」

トミーは取り逃がしたISのことも忘れて、目の前の問いに首肯した。

三十九話 苦労人さんの愛想笑いでない破顔

エクシアに瓜二つの女性、チエルシーに誘われ、向かった先はお城だった。

市街地から少し離れた、木々が生い茂る丘陵地帯の上に構えているそれは、廃城や観光地のようなものではない。

城門から一本だけ伸びる並木道はコンクリートではなく石畳。さらにアンティークな街灯が規則的に連なり、歴史的な景観を醸し出している。

一方の城内は大学のキャンパスのように現代的で、中庭に下ろされたトミーはぐるりとあたりを見回すと感嘆の声を漏らした。つまり、この城は未だに現役であることを物語っていた。

「さあ、着きましたよ」

チエルシーは先に自分が纏っているISを量子化させた。敵対するつもりはないらしい。

悪い人ではないようだ、とトミーは思った。飛べない自分をここまです重に運んでくれたこともあって、警戒心が多少薄れた。

「なんでお姫様だっこして人さらいやってるんですか」

後ろからの声はトゲトゲしい。

後を追ってきたエクシアが、追加加速装備プロンズ・ブースターを解除しながら、あたりに強風をまき散らして乱暴に着陸した。

IS自体は解除しない。冷たい目つきで唇を尖らせ、敵意をむき出しにしている。

「人さらいなどと物騒な言い方はよしなさい、エクシア」

チエルシーは腰に手を当てたため息を着くように応じた。

「じゃあ泥棒です。それに、チエルシーさんでしたっけ？ あなたなんで私の名前を知っているんですか。いったいあなたは私の何なんですか？」

「なに、と尋ねられると、少し寂しいわね」

視線を落とすチエルシーに、トミーは二人の顔を見比べてうなる。

「まさかとは思うけど、二人は姉妹だったり、とか？」

「まさか。他人の空似ですよ」

にべもないエクシアの否定に、チエルシーは露骨に動揺をみせた。それをトミーは見逃さない。

「でもさ、髪の色も瞳の色も、エクシアと同じなんだよ?」

「私は覚えていません」

「そりゃあ、エクシアは記憶喪失だからね」

「じゃあ、本当にこんな奴が私の姉妹だって言うんですか!？」

「ちよつと、こんな奴だなんて言い方は……」

「イギリスの研究所を襲撃して、ISを強奪した泥棒ですよ!」

「エクシア」

トミーの制止も聞かず、エクシアはまくしたてる。

「嫌ですよ! 確かに私には記憶がありません。けど、トミーさんと一緒に頑張つて、ようやく自分の居場所ができたんです。それなのに、実は泥棒の身内でしただなんて、そんなこと受け入れられるわけではないじゃないですか!」

トミーは閉口した。

確かに、出会ったばかりの頃のエクシアは、記憶をなくしてしまった混乱もあってオドオドとして引つ込み思案な様子だった。トミーから話しかけても狼狽するばかりでろくな会話すらままならなかった。

それが、役職柄二人で過ごす日々を続けるなかで、次第に打ち解けるようになっていった。性格も、出会った当初とは比べ物にならないほど明るくなった。きつと生来のものなのだろう。

そんな、ようやくまともに歩き出し始めた彼女が、不都合な過去に追いつがられて、足をもつれ転ばされかけているようなありさまに、冷静になれと諭すのは酷すぎた。

「……そうよね」

チエルシーは寂しそうにうなずいた。

「知らない人に、急に身内面されても、困るわよね」

「なにを……!」

「泥棒さんの妹だなんて、嫌よね、エクシア」

「気安く！ 私の名前を呼ぶな!!」

「エクシア、落ち着いて」

トミーは飛び掛かろうとするエクシアの肩を抱いて抑えた。

「彼女が本当に人さらいだったたり泥棒だったら、僕たちをこんなところに招待しないよ」

語りかけながら、トミーは周囲の中庭を確認する。

良く補修された青々とした芝生、丁寧に世話をされた花壇、建物には夜のしじまを壊さない優しい照明。

この城の主の性格が読み取れそうな意匠だった。

案内したチエルシーが城主と縁があるのであれば、彼女の気質も多
少察することができる。

「……」

エクシアもそんな雰囲気を感じたのか、肩に添えられたトミーの手
を持ち、口をつぐんだ。

そのまま、自身のISを解除すると、固くなった身をそつとトミー
に預けた。

トミーはしっかりと受け止めてうなずいた。

「……それで」

トミーはエクシアと入れ替わるように前に出る。表情は固い。

「お話をして頂けますか。なぜ僕たちのことを知っているのか、なぜ
こんなところへ招いたのか」

「お答えいたしましょう。貴方のことも、そして私たちのことも。オ
ルコット家累代の臣、ブランケットの名にかけて」

唐突に飛び出してきた耳慣れた名前に、トミーの両目が見開いた。



チエルシー・ブランケットには夢がある。

幼い頃に見た幸せな光景を再現することだ。

それは、仕えるオルコット家の中庭で、緑に囲まれた西洋風東屋で
の出来事だった。

椅子に座る主人、セシリア・オルコットが、彼女の親友の『彼』と屈託なく談笑している。

チエルシーは妹と一緒に側にかしずき、暖かく優しい風景の中に溶け込んでいた。

まるで一枚の絵画に飾られそうな情景。

しかしそれは、彼女の幻想でもあった。

正確には、チエルシーの妹は病弱のせいで並んでひかえることなどできなかつたし、セシリアと『彼』が談笑していた時、チエルシーは来客の対応に追われてその場にいなかった。

ただ一瞬、セシリアの笑い声につられて見た中庭で遊ぶ二人の姿は、さんざめく花園の中に浮かんでいるような、幻想的なたたずまいに思えた。

(私もあの中に加わりたい)

そう心に刻んだ想いは、叶わぬ願いではきつとないと思っていた。

チエルシーはそのお家柄、大きくなったら正式にセシリアの侍女となるのだし、妹の病気も発展目覚ましい現代医学が何とかしてくれるに違いない。そして『彼』はきつとこれからもセシリアの親友として、一緒に歳を重ねていくはずだ。

そう思っていた。

それが間もなく、『彼』はセシリアの両親と一緒に帰らぬ人となり、妹も消息不明となってしまふなど、思いもよらないことだった。

音を立てて崩れ去った憧憬。

その後、主と共に多忙の中に放り込まれたチエルシーは、心の後始末もそぞろに、幼い夢を心の奥底に封印させてしまふことになる。

ただせめて、妹の安否を心配する気持ちだけは拭いきれずに、ずるずると方々を探し彷徨い続けてきた。

最愛の妹、エクシアを探しだす。

そのためには手段を選ばず、当てになるとあれば反社会組織ファンタム・タスクにすら足を踏み入れてしまうほどに、チエルシーの夢の残滓は彼女を動かしかつて続いていた。

そして――

◆
(まさか、探し求めていた妹のエクシアと、亡くしたはずの『彼』が、二人そろって私の目の前に現れるだなんてね)

一通り説明を終えたチエルシーは、目を丸くして向かい合うトミーとエクシアの狼狽した姿に、そつと苦笑を零した。

しかし直ぐに、悲しそうな息をついた。

かつてトミーとエクシアもこのオルコット城で語らっていたこと。セシリアと仲の良い間柄であったこと。

オルコット家が侵したISコアに絡んだ事故に遭ったこと。そのISコアを使った人体改造を受け、口封じのために記憶を改竄されたこと。

チエルシーは説明をしながら、二人に課せられた運命を呪わずにはいられなかった。

だが伝えねばならない。チエルシーが亡国機業ファントム・タスクに潜り、手を汚してまで情報をかき集めたのは、いつかこの日が来ることを待っていたからに他ならない。

失くしたピースをもとに戻し、夢見た光景を再現するために。

「……確認しますが」

トミーが動揺を抑え込みながら、努めて真摯に尋ねる。

「僕が、セシリアの……いや、オルコットさんの、いわゆる幼馴染で、エクシアがその、オルコット家に仕えるチエルシーさんの妹だって、そういうことですね？」

「相違ごいませませんが、私にさん付けは不要ですよ。それに十三トミヤ八さんは、IS学園にてセシリアお嬢様と懇意の仲ではごいませんか。無理に他人行儀を装うことはごいません」

「貴方の仰る通りなら筋は通ります。しかし、僕にはオルコットさんと幼馴染だったという記憶はありません。ですので、貴方を信用することはできません」

「記憶というのは不確かなものです。人の手が加わっているならなお

さら」

「なにを……」

「十三八トミヤさんはご自分の生い立ちに疑念を持っていらっしやるのか。失礼ながらお嬢様から聞き及んでいます」

トミーは紡ぐ言葉を失って顎を引いた。

「お嬢様に確認なさいませ。すぐに疑念が晴れましょう」

「……。聞けるわけがないでしょう」

「はて、それはなぜです？」

「セシリアを傷つけることになる」

チエルシーは口角を上げて目を細めた。

対するトミーの眉間にシワが深まる。

「信頼するメイドが主を裏切っていたなんて、そんなことを知ったらセシリアはどう思いますか。ただでさえセシリアは愛国心が強いんだ。まさか売国行為を働いていたなんて、ショックを受けないはずがない」

「もはや取り返しもつかないことです。お嬢様には、申し開きもございません」

「悲しませるのはエクシアにもです！ 外道に身をやつしてまで妹さんを探していただなんて。たとえそれで再会できたとして、エクシアが喜ぶと思えますか!？」

エクシアはトミーの背中にそっと身を寄せた。

エクシア自身、チエルシーの話から自分の無くした記憶と関係があるように思いつつある。ひよつとすると、本当に身内なのかもしれない。

しかしそれでも、目の前で繰り広げられたチエルシーの犯罪から目を背けるともできず、困惑と葛藤が表情に浮かんでいた。

チエルシーは顔色を変えずに答える。

「私の思いはおそらく、十三八トミヤさんになら理解できるものかと存じます」

「知っているふうですね。どこまで僕を理解した上で言っているんです？」

「お嬢様からのお話を聞けばわかります。本当に、変わらないわね、貴方は……」

「……ッ」

トミーは苛立ちを覚えた。見知らぬ他人から内面を見通されるのは一種の恐怖を感じさせるものだ。

「僕にはわかりません！ 貴方のやっていることは大切な人を傷つけてしまうものでしょう!? 何を理解しろというのですか!」

「その大切な人のためならば、自分の身と名誉を傷つける事を厭わない。……そんな貴方の姿勢を存じ上げたうえで申しているのです」

トミーは目を丸くした。

夜空を見上げた。どこまでも見通せる、よく澄んだ星空が広がっていた。

「……そうですか」

そして、ため息を付きながら頭を垂れた。

トミーにはわかってしまった。

大切な者のためには、自分のことなど勘定に入れず、誰かの信頼を裏切ってしまったとしても、その人を助けたいと願い行動してしまう。

我儘で身勝手な、どうしようもないエモーション。

そんなチエルシーのエクシアを思う気持ちと行動を、余すところなく理解出来てしまって、むしろ自分の事のように感じてしまった。

テレビの登場人物の失態を見て自分まで恥ずかしくなるような感覚だった。

それゆえ、チエルシーに返す言葉にも見当がついた。

「……僕は以前、友達からこう指摘されたことがあります。『自分一人が犠牲になれば良いとか、そんなの全然カッコよくない』僕は君を犠牲にしてまで助かりたくなんかない』と」

「実に、耳に痛い話ですね」

「ええ。その時の友人の思いを、今更ながら感じ取ることができたように思います」

「よいご友人を持たれましたね」

「まったくです。この受けた恩は、ちゃんと活かさなければと思いません。同じ場面に出くわした時、僕も同じように振る舞うことで」
「……………」

トミーとチエルシーの視線が絡み合う。

力のこもったトミーの瞳に、気圧された感じのチエルシーが、先に目元を伏せることになった。

「チエルシーさん、僕は貴方を正さなければなりません」

「私を救えるとおお思いですか」

「できるかどうかではなく、やらなければならぬんです」

「十三八トミヤさんにも被害が及びかねませんよ。そうなれば、エクシアにも」

「私は、大丈夫だよ」

エクシアはトミーの背中から顔を出して、チエルシーに答えた。

先ほどまでの敵意は失せていた。

「私は、トミヤさんがしたいっていうなら、受け入れるよ」

「エクシア……………」

「あなたが本当に私のお姉ちゃんなのかなんて、今の私にはわからない。でも、もし今後思い出したとき、後悔するようなことはしたくないから」

チエルシーは口を結び、眉根をひそめて目を細めた。嬉しいとも悲しいとも判別できない表情だった。

きつとその両方なのだろう、とトミーは察した。

「チエルシーさん、あなたが僕を理解できるなら、僕が引き下がらないこともわかるでしょう。あきらめてください」

「フフ……………、まるで警察に連行されてしまうような雰囲気ね」

「確かに。でも、本当は捕縛されることを望んでいたんじゃないですか？ これ以上罪を重ねないために」

「あら、私、そんな殊勝なオンナに見えるかしら？」

「セシリアの見込んだメイドさんなら、きつと奇特な方だと思いますから」

チエルシーは一瞬ポカンとすると、次いでクスクスと笑い始めた。

次第に、声を抑えられず大きくなっていく。

チエルシーにとつて久しぶりの大笑いだつた。

(私の言葉を信用したからではなく、お嬢様を信じているから、私を信じられるだなんて)

つくづく、己が仕える主の偉大さと、自分自身の矮小さを痛感させられる。

そして、かつて抱いた儂いユメへ、届きそうなこのめぐり合わせに、これまでの苦勞がエッセンスとなって開放されるような清々しさがあつた。

オルコット城の中庭に差し込む月光はやわらかく、花壇の
イウニング・プリムローズ
月見草が嬉しそうに咲いていた。

四十話 忙しい現代人に一本のフレーザーを

「売国メイドの行方はまだ見つからないの!？」

デスクトップパソコンのディスプレイを閉じるなり、その部屋の主の女性は職務机にこぶしを落とした。

衝撃に、彼女の長髪も一緒に踊る。イギリス人特有の茶髪ブルネットで、手入れされずボサボサになっていた。目元には深いクマができていて、肌はがさつきが目立っている。

日頃、迫りくる年波に対して必死にもがき足掻く女性の努力は、最近のデスマーチの前に水泡に帰っていた。

「失踪からすでに三日目よ三日目！ 相手は名門オルコット家の使用人なのよ!？ 何にも音沙汰無しなんてありえないでしょうが!」
そう机の前に横一列に並ぶ部下たちに向かって怒鳴り散らす。

ついでに机の上の書類に鬱憤をぶつけた。

ヒラリと、その一枚が部下の足元に飛んでいった。紙にはチエルシー・ブランケットという女性のプロフィールが記載されている。

部下は、さも緩慢な動作で資料を拾いながら、上司同様目の下にクマができている目をこすり、疲れた声を上げた。

「そう言われましても、本当に全く見つからないですよ……」

ため息まじりのぼやきに、他のメンバーもポツポツと状況を説明しだした。

「オルコット家やその親戚はもちろん、関連企業にもとつくに探りをいれてますよ、ええ」

「てゆーか、関連企業多過ぎだつーの！ 何だあの疑似財閥。まじブルジョワ。まじブルジョワヌー!」

「だいたい、私たちはミッシェンクリアしてたじゃないっすか！ I S強奪のおぜん立て、あれ超・パーフェクト・オペレーションやつてましたつて!」

「それな！ いったい誰のおかげでI Sかっぱらうことができたんだつーの！ さつき画面に映ってたオバさんに文句言つてくださいよー!」

「はつきりいってコレ、実働部隊のしりぬぐいです。給料上乘せ、最低限です」

隊員各位から不平が轟々と湧き上がる。

いつもの仕事してますよアピールにしては声量と言動が荒っぽいな、と茶髪の上司は思った。

結局みんな、疲労が不満に輪をかけていてカリカリしてるのだ。

「騒ぐな！ 要はなにも進展無しってことなのね？」

「要は、で私たちの苦労をまとめないでくださいよ！」

「あたしら完全にオーバーワークなんすよ！」

「もうやだ。休みたい。お風呂入りたい……」

ギヤアギヤアと響き渡る雑音ノイズの合唱コーラスに、上司は思いつきり舌打ちをして盛大にため息を着いた。

しかし部下たちの言う通り、自分たちのグループ、すなわちファントム・タスク亡国機業の英国工作部隊に落ち度は無いはずなのだ。

英国が独自に開発した第三世代IS試作二号機『サイレント・ゼファイルス』。その強奪を補助する役割は見事に成功させた。すでにISは無傷で組織の手の内にある。

にもかかわらず、実行犯の一人であるチェルシー・ブランケットが行方知れずという失態のしりぬぐいを、実働部隊ではなく、彼女ら現地班に出されてしまった。

しかも緊急にとケツをはたかれ、現在の疲労困憊とストレスマツハな状態に押し立てられてしまったわけだ。

（そりゃあ、亡国機業の情報漏えいを防ぎたいのは分かるけどさ……！）

隊長は懐からタバコ取り出すと無造作に火をつけた。今朝買ったばかりの英国煙草だが、残り本数は既にして心もとない。

タバコはお肌の大敵と最近禁煙に励んでいたのだが、ここ数日の超過勤務に吸わなければやってられなくなっていた。

（ちくしょう、せめて高級エステとボディケア代くらい手当寄越せよな！）

そう脳内で悪態を吐きつつも、直接言い出せない自分にやるせなさ

を感じた。

先ほどまでデスクトップ画面に映っていた若作りの上役には、口でも実力でもまるで歯が立つ相手ではない。というか、まともに直視できないくらい恐ろしい。

下からは突き上げられ、上からは叩かれる。中間管理職の悲哀を一身に背負い、陰鬱としてやけ酒のように紫煙を喰らい、怨言と一緒に吐き出した。

ほんのちよびつとだけ、気分がマシになった気がする。

(……しかし、こころも見つかからないのはどういうわけだ？　ウチらの情報収集能力は英国管理局にだってタメ張れる。小娘一人探し出すなんて訳ないはずだ。にも関わらず、痕跡すら掴めないなんてことは……)

思案は、勢いよく蹴り開かれた戸口の衝撃に中断させられた。

「なんだ!？」

また厄介事か!?

と悲鳴と怒りをはらんだ怒声を飛ばす先、入り口に現れた女性が煙草をくゆらせて部屋に入ってきた。

ラフなスタイルだった。ネイビーブレザーとスキニーパンツに身を包み、ミドルヒールのブーツをツカツカ鳴らして、ファッションモデルのように歩いてくる。

後ろには付き人を二人従わせていた。帽子を深くかぶっていて顔が分からないが、体格から女性と男性だとは分かった。

「ハロー」

来客は艶やかなブラウンヘアをかき上げて、サングラス越しに不敵な笑みを向ける。

ボサボサ髪の毛の部屋の主は怪訝そうに値踏みすると、一点、その胸元に着けられているブローチの意匠に目の色を変えた。

「女伯爵カウンテス……!　IS委員会常任委員が、なぜここに!？」

上司の言に、部屋に居並ぶ部下たちも色めきだった。工員である彼女らにとって、イギリスを代表する常任委員の名前を知らないはずがない。ブローチのデザインが名門の家紋をかたどっていることも

すぐにわかった。

「なぜって？ わかってんだろが。中途半端なところで尻尾をみせやがって」

女伯爵はゆっくりとタバコの紫煙をはいて、たつぷり間を置いてから言葉が続けた。

「亡国機業との繋がりが浅いお前らに、パイプが太くなるまで待っていてやるつもりだったんだ。なのに、まんまと下手を踏みやがって。これじゃあお縄にしたってろくな手掛かりも掴めねえ。どうしてくれる」

部屋の住人たちが一斉に身構える。

だが、それより先に、女伯爵の従者の方が早かった。

いつの間にか氷のようにきらめく剣を抜き放ち、茶髪の喉元に突きつける。

もう一人の従者はISの非固定浮遊武装を展開。巨大な二つの手が現れ、指先の砲口が全十門、下手人たちに狙いをつけている。

その機敏な動きに帽子が脱げて、二人の顔があらわになった。

「キサマ……！ チェルシー・ブランケット!!」

剣を持つ女性の顔と、足元の資料の顔が全く同じだった。

「はい。こういうわけです、亡国機業」

「裏切るか！ 祖国を裏切ったお前が、手を貸してやった我々すらも！」

「貴方の仕事ぶりには同情を禁じ得ないこともありませんが、その苦労も今日でおしまいです。お疲れ様でございます」

「ふざけるな！ それに、後ろの小僧！ オマエ L S のパイロットだろう！」

声を掛けられた少年、トミーは無言で視線を向けた。

「おおかた、この売国メイドを絆したか！ よくもまあ卑劣なマネをしたものだ。男など所詮汚らわしい獣だなあ!!」

男性であるトミーには無言で通すわけにはいかない誹謗だった。

「何を勘違いしているのかは知りませんが、男だからといっぺんに否定しないでください！」

「ふん、仮に思い過ごしであつたとしても、オマエの場合は特別だ
マリオネット
傀儡人形！ 蛇にそののかされて禁断の果実を手に入れた罪人め！」
「な、なにを言っているんです……!?!」

「ISは女性にのみ与えられた力の象徴！ 女性蔑視の歴史を変えた
革命的存在！ それを歪め、男が運用することなどあつてはならない
！ ゆえにオマエは、私たち女性すべての敵なのだ!!」

真正面からの罵倒に、トミーの非固定浮遊武装の指先が震える。言
葉の剣はISの絶対防御の守りを抜いたようだ。

亡国機業のメンバーはその逡巡を見逃さず、一瞬のアイコンタク
トの後に四方に散って強行突破を試みた。

「——なに!?!」

その機先を制して女伯爵が動く。

ブローチが輝くと瞬時にISを部分展開させ、有線式のクローアー
ムが次々と下手人を捕縛する。

トミーのL Sが扱う尻尾鋏や、エクシアのI Sが運用する
IC兵器によく似た装備だった。

「御用、なくんつってな」

「くそっ!」

かろうじて逃れた一人が窓へ走る。ここは地上五階だが、外に飛び
出してISを展開すればどうにか逃げられるだろう。

そうウインドウへ体当たりしようとした先に、一機のISが現れ
た。亡国機業の味方機ではない。『サイレント・ゼファイルス』とIS
チエイスを演じた銅色のISだ。

「やめとけ。そいつの足は記録破りの韋駄天だぜ？」
銅色の疾風。

エクシアが駆るISは下半身に追加加速装備を展開させて、いつで
も逃亡犯を捕捉できるよう準備している。

それを見た工作員は悪あがきをあきらめて、ドカツと床に膝を着い
た。

詰みである。

いかなる国家や軍隊すら翻弄してきた亡国機業の、その一端が壊

滅した瞬間だった。



トミーは窓に寄りかかって頬杖を着いていた。

ぼんやりと外を眺めていると、眼下から喧騒が聞こえる。女伯爵が

呼んだ警察が作業員たちを連行していくところだった。

その中の一人、ボサボサの茶髪ブルネットの女性に目が留まった。髪が乱れ

目を暗くする姿は幽霊のように恐ろしい。

——オマエは、私たち女性すべての敵なのだ！

そう自分に向けられた敵意と罵声。

呪いの言葉は確実にトミーの心を蝕んでいた。

(最近、怒られたり恨まれたりしてなかったからなあ……)

LSに搭乗し、世に出た当初から非難を受け続けてきたトミーの心は、いつしか責めやそしりに不感症になっていた。

それが、IS学園での暖かな生活の中で、いつの間にかもろくなっ
てしまったようだ。

女性の敵という言葉は、IS学園で得た親しい仲間たちとの間を切り裂いてしまいそうで、鈍い痛みを感じさせた。

捕り物劇の後、チエルシーは心配そうに気遣い、エクシアはトミーの代わりに怒りを表してくれた。そんな二人の優しさにトミーは感謝を述べたが、大丈夫、という言葉にだけ嘘が混じっていた。

パトカーがサイレンを鳴らしてドップラー効果を残して去っていく。

その後ろ姿を眺めながら、心に染み出してきたイギリスの霧のよう
なもやもやが、トミーを鬱屈した気分へと引きずり込んでいく。

「ガキにアンニユイは似合わないぜ、少年」

唐突に背中から声を掛けられた。

振り返れば、女伯爵カウンテスがタバコを吐きながら笑みを見せている。

相変わらずサングラスで目は分からないが、かえってその方がト
ミーにはよかった。目は口程に物を言うのを、これまでいくつも見て

きたからだ。主によくない方向で。

「あ……、すみません。この部屋、もう使いますか？」

そう身を起こそうとすると、タバコを一箱投げられた。銘柄は『ト
レジャラー・ブラック』と刻まれている。

「ああ。喫煙部屋にな」

「えつと……、あいにくと、僕はタバコは吸いませんで……」

「くわえてみる」

え、と困った顔をするトミーに、女伯爵カウンテスは面白そうに笑いながら新
しいタバコを一本口にしたら、

それに火をつける前に、

「少年、コーヒーは飲むか？」

「え、ええ」

「熱いのは好きか？」

「好きです」

「いいだろう」

女伯爵カウンテスは贅沢キヤサリンハムネット銘柄のライターに火をつけた。タバコを優しく包
み込むようにしながら、じわじわと先端をあぶっていく。

その火のついたタバコを、吸うのではなく愛おしそうに口に含む。
やけに唇のルージュが色つぽかった。

ほとんどの大人たちがすぐに口から煙を吐いているのを見ている
トミーには、女伯爵カウンテスの吸い方はやけにゆっくりとしたものに感じた。

同時に、その所作に上品さを感じずにはいられなかった。

タバコをつまんで紫煙を吐き出す動作にも、静けさと気品を醸し出
すものだった。

一通り吸い終わると、顎をしゃくってみせた。お前もくわえてみ
ろ、というようなジェスチャーに、トミーも仕方なしに封を開けた。

パッケージを開けたとたんに渋い香りが広がり、黄金色のティップ
ペーパーが光を放つ。

見たことのない高級そうなタバコを、トミーはおずおずと取り出し
て口にする。

「タバコはな」

トミーの前に屈みこんで火をつけながら、下から覗き込むように
女伯爵カウんテスは言った。

「吸うんじゃない、すするんだ。熱い上等なコーヒーをすするように
な」

その際見えた彼女の目元は優しい。おっとりとしたタレ目と澄ん
だ緑色の瞳がぞんざいな口調と対照的で、トミーは意外に感じた。

「ゆつくりとすすった煙を、口の中で楽しむんだ。フレイバーを満喫
しろ。後はコーヒーと同じ、じつくりと吐き出して後味も堪能す
んだ。間違っても肺に入れんなよ」

わかったか？

という問いに、

「なんとなく、ですが……」

と曖昧に答えるトミーの頭を、女伯爵カウんテスはポン、と叩いた。サングラ
スの奥のタレ目が深く下がっている。

やってみろ、と言っているらしい。

トミーは誘われるままに吸ってみた。

熱い上等なコーヒーを飲んでる姿をイメージする。実際、コー
ヒーは大好きだ。

「……………」

口の中に流れる煙、マイルドな感じと、適度な甘さ。

「……………」

そして、味わったことのない独特の清涼感。

「ふー、……………」

吐き出され広がる煙が晴れていくように、トミーの中のもやが晴れ
ていくような、不思議な爽やかさがあった。

「うまいだろう」

「……………美味しいです」

「これでお前も不良の仲間入りだな、少年」

女伯爵カウんテスは豪快に笑った。部屋中に響き渡るような、男性的な図太い

笑いだった。

「いいか少年」

ひとしきり笑うと、首だけで向いてキザな顔を見せた。

「タバコは格好良く吸うもんだ。吸いたくなくても、ダセえ吸い方になるんなら吸うな。今教えて見せたように優雅で穏やかに吸え。間違っても安酒を喰らうようなみみっちいマネはすんなよ。それとな、煙は肺に入れんな。あれは貧乏な雑兵がメシの代わりにやるモンだ」
一服、お手本を見せるように吸って見せてから、女伯爵カウンテスは続ける。「人間生きてりや、どうしようもねえムカつくこともあるもんだ。そんな時、たいていの大人は酒かタバコか肉欲へ逃げる。だが、ガキはどれにも逃げらんねえから、ちゃんと甘やかさなくちゃつぶれちまう」
それがどうだ、と初めて憎々し気に表情を歪めた。

「ガキに大人とおんなじ苦労をふっかけて、それで未成年は酒もタバコもダメときた。そういう大人のいうことなんぞ、まったく聞く必要なんかねえよ。いいか、ろくでもねえ大人の相手をしなくちゃならねえときは、お前もグレたつていいんだぜ。表面ガワだけちよちよいと取り繕って、裏で好き勝手やつちまえ」

女伯爵カウンテスはもう一箱煙草を取り出した。

銘柄は同じ『トレジャラー・ブラック』。それが世界で一番高価な煙草であることをトミーは知らない。

ただ、箱を胸にポンと押し付ける目の前の女性が、これまで出会ったどの人物よりも格好良く見えた。

「どうして、こんなに僕に良くしてくれるんですか？」

トミーは聞かざるを得ない問いを発した。

女伯爵カウンテスは煙草をくわえなおして視線を外す。

「……チエルシー・ブランケットの件、『閣下』に相談したろう」

『『閣下』を知ってるんですか!』

「これでも元教え子さ。つたつて、教師泣かせのクソガキだったがな」

フー、と長い紫煙を吐いて、ククツ、と鼻で笑った。

「お前がいらんことをしたせいで、こっちが追っていた亡国ファントム・タスク機業の追跡調査は中途半端でポシャっちゃった。あんな末端吊し上げたところで、トカゲの尻尾の先つちよ部分にしかすぎねえよ。本体はとつく

にドロンしちまってんだろう」

「チエルシーさんにも、捜査の手が及びそうですか？」

「安心しろ少年。捜査協力つて名目で司法取引にしようよ。ま、オ
ルコット家とは知らねえ仲じゃあ無えしな。それに、……あん？」

部屋のドアをノックする音がした。

入ってんよ、と良いのか悪いのか分からない返答に、ドアがゆつ
り開かれる。中に入ってきたのは、スーツに身を包んだ壮年の黒人。

「閣下……！」

トミーはすぐさま直立不動の体制を取った。

彼にとって最も格上の上司であり、自身の存在を確立しうる最上位
の存在だからだ。

IS条約締結を実現したIS委員会元委員長。

世界の中心の組織の一員にして男性唯一の機関長。

そして、反女尊男卑主義組織『オールドファクション』の有力者。

「失礼する」

女尊男卑に染まった世界の男性という立場としては、おそらく指折
りの実力者が、あろうことか目の前に現れた。

「閣下、なぜこんな場所に!? ……いえ、あの、この度は、僕の我がま
まを聞いていただき……！」

「トミヤ君、チエルシーさんとエクシアちゃんが探していたぞ。すぐ
に会いに行つてやるといい」

「へ？ あ、はい！ ……えっと」

「玄関ラウンジで待つよう伝えている」

「承知しました！ 閣下、この度のことは改めて礼を……」

「急ぎたまえ。男子たるもの、女性を待たせるものではないぞ」

「——はい！ ありがとうございます！ 失礼します!!」

深く勢いよくお辞儀をして、トミーは部屋を飛び出した。

残された女伯爵カウんテスの顔からは笑みが消えている。

煙草をもみ消すと、サングラスを外して素顔をさらした。磊落な彼
女にとっても、目の前の壮年にはマナーを守る相手であることを表し
ていた。

「よくもぬけぬけと顔を出せたものだな、センコウ」

表面だけである。口から飛び出す中身までは知らない。

「昔から、その口ぶりは変わらないな、女男爵」パロネス

「女伯爵だ。『副総長』閣下殿」カウンテス

「元、だ。そうか、君は昇進したんだったな。ISが作った時勢の中で」

「アンタは落ちぶれながらもしぶといもんだぜ。ようも一機関長にすがりつく」

「君のお仲間の現役大将殿のご高配でね。デブでもハゲてもいないのが幸いしたようだ」

「血の気の凍った姫様は面白くなさげだぜ。ジジイらしく隠居してればいいものを」

「そもいかなない立場なのでね」

ふん、とどちらからともなく鼻を鳴らした。

「……何の用だ」

カウンテス 女伯爵の言葉に、閣下と呼ばれた老人は眉間の皺を深くした。

「世の中を変えた天災について、少々困った事態になつてな」

四十一話 上司はたいいてい嫌われるけど好きで嫌われている訳じゃない

「第四世代 I S だあ？」

おつとりとしたタレ目を見開いて、女伯爵カウンテスは口元を歪めた。

「おいおい、ついにボケたか閣下殿。今のトレンドは第三世代への過渡期だぜ？ 老人の冗談はシャレになんねーぞ」

「残念ながら事実だ」

黒い肌に刻まれたシワをさらに深くして、閣下と呼ばれる老人は厳かに答える。

「つい先日、篠ノ之束が我が社のラボに突然現れた」

「オーライ。介護車呼ぶからちよつと待つてろ」

「聞け。場所はルクーゼンブルクの外資企業区域の一角、A R エレクトロニクス欧州本店だ。現場は有無を言わず占拠され、常務を人質に新型 I S の開発拠点とされてしまった」

「は？」

「何でも時結タイム・クリスタル晶との取引でルクーゼンブルクの姫君アイリス王女に進呈するらしい」

「ああ、いや、おいセンコウ、お前いまシレつと反体制関連疑惑企業A R エレクトロニクスの関係者だつてゲロしなかったか？」

「白々しい、どうせ気づいているのだろう。これを言質に私を失脚しようとしても画策するかね？ 構わんよ。I C 兵器等の技術協力は止めさせてもらうが」

「地味にウゼえ報復考えてんじゃねえよ。ああ、あの I C 兵器インコムは結構気に入ったぜ。B T 兵器への適応がないやつには嬉しい装備だろうさ。だが対 I S 戦闘用には使えねえな。有線が短いし、無駄に容量がかさんで拡張領域パススロットが圧迫される」

「ふむ、技術部に伝えておこう」

小まめに手帳へメモを取る姿に、女伯爵カウンテスは思わず嘖き出した。

「っはは！ どうしたよセンコウ？ 聞いたことは何でも覚える地獄

耳は遠くなつたか？」

「物覚えが悪くなっていることは自覚している。だが嘘偽りを言わない性格は守っているつもりだ。篠ノ之束の出現についても証拠は持ってきている」

「まるで怪物が出現したような言い方だな。どれどれ……、お、ホログラフィーか」

閣下の差し出した携帯端末の上に3Dホログラムが展開される。

現れたのは、頭にウサギの耳のようなヘッドセットをピコピコ動かし、鼻歌交じりに作業をしている篠ノ之束の様子だった。傍には淑やかなドレスを纏ってパソコンのキーボードを叩いている銀髪の少女と、壁際には細身の中年男性がオロオロとしている姿も見受けられた。

隅に表示される日付はつい昨日。場所は確かにどこかのラボのよううだ。

女伯爵カウンテスにとって残念ながら、閣下の冗談知らずの調子は今なお健在であるらしい。

「あー……、マジかよクソツタレ。コッチはようやく第三世代に手が届きかけたところだけ？ やっこさん、神か悪魔と契約でも結んでんのか？」

「それだけ篠ノ之束が隔絶した存在だということだろう」

「つつたつてなあ……。だいたい第四世代機なんておっかねえもん、貰ったところでどうすんだよ。世界最強戦力とか、ルクーゼンブルクも扱い困んじやねえの？」

「某超大国すら上回る戦力が東欧の小国に配備される。世界のパワーバランスは篠ノ之束の気分一つに掛かっているというわけだな」

「やれやれ、米国パクス・アメリカ覇権型世界平和も今は昔だな。英国パクス・ブリタニカ覇権型世界平和だった時代が懐かしぜ」

女伯爵カウンテスはおもむろに懐のタバコに手を伸ばしかけて、止めた。

このままでは格好悪い下品な喫煙をしまいそうだったからだ。トミーにキザって教えた手前、自分の品格を崩したくない。

仕方なしにサングラスを指で回して気を紛らわせた。

「んで、どうすんだよコレ。ウチらに手出しができる話じゃないぜ？」
「IS委員会に、IS開発の技術躍進を提案してもらいたい」

「——あ？」

「束博士の持つリードスキルは、我が社のラボを使っている手前、徹底的にバックアップを取っている。このデータを各国に開示し、ノウハウをジャンプアップしてもらいたいのだ。これ以上、一人の天災の都合で世界を壊されないように」

「天災ウサギが黙っているとは思えねえな」

「LSパイロットの少年をあてがう。先ほど映っていた束博士の助手の少女だが、彼にご執心なのだそう。上手くつながれば、危害を加えられることはないだろう」

カウンテス
女伯爵は舌を打った。げーっ、と言いそうになった口を塞ぐためだった。

閣下の言っていることは確かに効果的だ。

しかし、そのために少女の淡い心をもてあそぶのと、タバコの吸い方をレクチャーしてあげた、あの純朴そうな少年をむざむざ危険に投じさせるのは気が引けた。

同時に、なぜ閣下が自分たちにチエルシー・ブランケット救済の話を持ち掛けたのがハッキリ分かった。

「なるほどな。それがあの少年の願いをウチら経由で聞いてやった理由か。——義理を餌にこちらの思い通りに動かすためという」

「そちらに損はさせぬと言っていただろう」

「胸糞悪い。だからウチはセンコウに対して不良で通さざるを得ねえのさ」

こんな奴の前で格好をつける必要はないな。

カウンテス
と女伯爵は今度こそタバコをふかした。

人を駒のように扱うのは、人の上に立ち責任ある地位にいる者にとつての必然だ。

しかしだからといって、人を駒とするために義理で縛り、傀儡人形のように操る術は、貴族たる女伯爵には下品と映った。

マリオオネット
「汚いとても罵るがいい。もはや我々男性は、こうでもせねば意地も

張れんのだ」

「なめんじゃねえぞセンコウ。その意地とやらを張るために、他にもコソコソやってんだろうが」

「なに？」

「お前の会社、実は篠ノ之束の技術、黙って入手してんだろ」

老人の表情は厳しい顔つきのまま変わらない。

ただ、目だけがギョロリと睨みつけられた。

「ハツタリじゃねえよ。ARエレクトロニクスの技術な、ありやおかしいくらい先鋭的だ。世界のトップクラスのハイテク企業すらできないことを、お前らはサラッと完成させやがる」

「論としては信憑性に乏しいな。我が社の社員が素晴らしい能力を持つているという話で流すことができるぞ」

「ほー、優秀な社員を抱えておいでで羨ましいかぎりだねえ！」

「何より、あの束博士が我々と繋がるなど考えられるかね？ 世を女尊男卑に変貌させた張本人が、曰くつきの企業に与する？ 常識に照らし合わせて話を通らんと吐き捨てられるだろう」

「確かに、あの天災ウサギがお前らとつるむなんざとても考えられねえよ。だがな、ウサギは何故か反女尊男卑主義組織を潰さねえ。お前の言うように女尊男卑を望んだ奴ならいの一に消しそうなのに、だ」

閣下の鋭い眼光が逸れた。

脈ありだな、と女伯爵は畳みかける。

「吐けよセンコウ。お前の正直な口は無言と例え話がお好きなようだが、事が事だけにしかと断言で答えてもらいたいねえ」

「やて……」

閣下は眉間のシワを深めたまま、目を閉じて一呼吸置いた。

「そういえば……、私の後任たちが条約に違え、人の命を顧みない兵器を開発していて哀しい、と嘆いたことはあつたな」

「——エクスカリバーか！」

カウンテス
女伯爵は叫んだ。

そういうことか！ と頭を抱えた。

エクシア・カリバーンと呼ばれた少女が向こうにいる時点で気づくべきだった。

「痛えところをチクリやがったな！ 確かにあれは人聞きの悪いクソみてえな兵器だぜ！」

生体融合型 I S 兵器。

その動力に I S のコアではなく、I S と融合した人間を糧に動く攻撃衛星。

ある国が、その歴史上にきらめく聖剣になぞらえて生み出した兵器は、その製造段階で完膚なきまでに潰されたはずだった。

当時 I S 委員会委員長であった、世界の中心の組織にて副総長閣下と呼ばれた老人によって。

その際、コアとされかけた哀れな少女は、老人傘下の組織にかくまわれたと公表されている。

「噂ではあるが、その開発は未だ続いていると小耳に挟んだことがある。さらに『エクスカリバーを備うるは我が国の悲願なり』とのたまった通達があつたとも聞いたが」

「だから私は止めておけと議会で叫んだんだチクシヨウが!! わざわざ自分らの首絞める縄をこしらえてどうすんだってな!!」

女伯爵カウンテスはくわえていたタバコを床に叩きつけ、ヒールで何度も踏みつけた。

荒くなった息の奥で猛獣のようにうなり声を上げ、放送コードに引っかかる神を呪う言葉を吐き捨てた。

世界を変えた篠ノ之束が、その力を、あろうことか反体制組織に零しているかもしれない。

体制派である女伯爵カウンテスにとって悪夢のような事態だった。

しかし、ここで一つ疑問が生じる。

「……おう、センコウ。お化けウサギのおこぼれに預かつといて、なんでウチらにまで技術躍進を提案しやがる。テメエらの手でウサギの目論見を潰しやあいだけの話だろうが」

「……富の再分配によって社会不安は減少させられる。現在の社会はあまりにも格差が大きすぎ、不安要素が多すぎる」

「累進課税の名目か。なるほど、今の世の中はウサギ一人が大金持ちだあな」

幾分か、女伯爵カウンテスの呼吸が和らいだ。

「どうやら閣下の目論見は、彼女たちにとって損なものでもないと踏んだからだ。」

「いいだろう、テメエらの持つウサギのデータ、とつとウチらに公開しやがれ。委員会には私から働きかけておいてやる」

「そうしてくれ。少なくとも第三世代ISが早期に完成させられる技術が欲しい」

「おいおい、女性の特権を促進かい？ 男性らしからぬ女性をいたわったお言葉だこと」

「昔はフェミニストと叩かれたこともあったのだ。私は男性であれ女性であれ、力が傾くことを望まない。……だがしかし、公平とは、疲れるものよ」

「……違いねえ」

女伯爵カウンテスは苦笑を零した。ふと見せた老人の疲れた顔が、昔と変わらなかったからだ。

彼女がまだ幼い時、この老人は出会ったばかりの当初から、人一倍シワが多かったなど思い出す。

かつてはきつと公平のために女性を助け、今は公平のために男を助けているのだろう。

そのために人を義理で操り、そのために人の弱みを逃さない。

(まったく、面倒な性格してやがるぜ)

彼女が不良を装いいつも決して彼を見限らないのは、人一倍の苦労性と熱い信念を認めているからだだった。

そしてその気質が、周囲が彼を今なお閣下と尊称し続けている理由に他ならない。

女伯爵カウンテスは、やれやれ、とため息を着くと、背筋をぐいと伸ばして気持ち切り替えた。

「話は以上か？ そんなじゃあ一服やらせてもらおうぜ」

「構わないが、トミヤくんに喫煙を教えた件には抗議させてもらおうぞ。」

彼はまだ未成年だ」

「その未成年にヒデえ苦勞背負わせといてよくいうぜ。それにな、教えてやったのはクールスモーキングつつうまともなやり方だ。知ってるか？」

「……初耳だ」

「禁煙社会だからって不勉強なのはよくねえな、先生」

ケタケタ笑う女伯爵カウンテスの懷で、タバコの隣のポケットにある携帯端末が鳴った。

同時に、閣下の持つ端末からも着信が知らされた。

二人とも怪訝な顔を合わせてから応答する。通話に出る第一声は、「私だ」

というシンクロナイズ。

その後、先方からもたらされた話に、閣下の口はゆっくり開かれて沈黙し、女伯爵カウンテスの口からは、

「明後日のアイリス王女の誕生日にISが進呈されるだあ!？」
という悲鳴が部屋に響き渡った。

四十二話 オルコツト航空は快適な空の旅を保証しません

アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルク。

国家代表候補生の肩書を持つ、ルクーゼンブルク公国第七王女。

その14歳の誕生日会席にて、篠ノ之東から新型ISが進呈されるという話は、各国のIS関係者の中に激震を起こした。

曰く、贈られるのは前代未聞の第四世代ISである。

曰く、未だ誰も実現させたことのない重力制御装置グラビティ・コントロール・デバイスを運用できる。

曰く、——それは、世界最強の力を秘めている。

様々な憶測が飛び交い、どこまでが真実の情報かは分からないが、共通しているのは、

『篠ノ之東ならやりかねない』

という畏怖の念だった。

その恐れを隠すように、今年のアイリス王女の誕生日会は盛大に開催すると公表された。

どうせ世界中が注目しているのなら、いつそ大々的にした方が潔いと、国政を担う者たちが判断したのだ。降つてわいた強大な力を、持て余した小国の開き直りとも呼べるかもしれない。

招待状は、ルクーゼンブルクと縁のある貴族・王族はもとより、国に籍を置く国際企業やIS関係者にすら配られた。

国は一大イベントを前に沸きたち、お祭り前夜といった様相を呈していた。



「それでセシリアのお家にもお呼びがかかるなんて、さすが名門貴族は違うね」

ルクーゼンブルクへ向かうオルコツト家専用機プライベートジェットの機上にて、僕

は大画面モニターに映っている得意げな顔のセシリアに話しかけた。
「当然ですわトミーさん。ルクーゼンブルク公国には、我がオルコツトに連なる企業も在籍していますもの」

「それって、あの外資企業区画のビル群に？」

「ご存知でしたの？」

「僕の会社での所属先もそこなんだ」

「まあ！ それでトミーさんとエクシアさんもご招待されておりましたのね」

そう。僕とエクシアもアイリス王女のお誕生日会へ行くところだったのだ。

それならばとチエルシーさんが気を聞かせてくれて、こうしてオルコツト家の専用機プライベートジェットに同乗させてくれたんだよね。

「といっても、私もトミヤさんもアイリス王女に面会したことなんてないんですけど」

「そうだよなあ。常務さんとかじゃなくて、なんで僕たちにお呼ばれがかかったんだろう」

そう首をかしげる僕とエクシアに、セシリアは大したことじゃないように言い添えた。

「お二人とも、王女はまだ13、いえ今度14歳なのでしてよ？ 年の離れた上役よりも、若いトミーさんたちのほうがお近づきになりやすいと踏んだのでしょうか」

「そういうものかなあ」

「ここは王女を一番にお考えになったほうが良いですわ。と言つても、お二人は会社の名前を背負って立つ重圧があるでしょうし、チエルシー、しっかりとサポートしてくださいませね」

「承りました、お嬢様」

満足げに頷くセシリアは、今日は一段と機嫌が良さそうに見えた。はじめましてなエクシアが自己紹介したときは、ひときわ嬉しそうにに応じてくれて、かえってエクシアの方が戸惑ったくらいだ。

オルコツト家の名代として誕生会に出席するチエルシーさんにも、たっぷり楽しんできなさい、なんて言うほど羽振りが良い。

その理由は、エクシアとの挨拶の後にチエルシーさんと交わした、「よかったわね、チエルシー」

という慈しみのこもった言葉でなんとなく分かった。声を掛けられた当人も、

「——はい」

と噛みしめるように受け止めていた。

きつと、いや、間違いなく、セシリアはチエルシーさんとエクシアとの繋がりについて知っているのだろう。

エクシアには昔の記憶がない。だから本当のところはどうなのかわからない。けれど、僕は示唆されているようにチエルシーさんの妹さんであれば良いと思っている。

だって、エクシアは天涯孤独なんだ。ARエレクトロニクスと僕への縁以外は、まったくと言っていいほど無い。

そんな彼女に、信頼するセシリアに近い人が身内であるというのなら、それはとても頼りになる話だった。

はやく無くした記憶を取り戻して、本来の場所に戻れるなら、パートナーとしてこれ以上ないことじゃないか。

(けれど……)

その一方で、僕は自分自身の過去を思う。

チエルシーさんのいうことが正しいなら、ううん、きつと正しいのだろうけれど、それなら僕の持つ記憶は何なのだろう。

どこかの施設で暮らしていて、わけのわからない訓練を成し得て、LSに乗って。

閣下と一緒に世界を回って、閣下の紹介でドイツに行つて、ラウラや黒ウサギ隊のみんなと出合つて、IS学園に入学して。

これら知る限りの記憶の前は、いったい僕はどんな人物だったのだろうか。

ひよつとすると……、

——かえせ。ぼくのからだを。

そう僕に掴みかかってきた、僕を幼くしたような少年が脳裏を過る。

IS学園での学年別トーナメントの後、クロエ・クロニクルという少女が見せた、不思議な世界で出会った少年。

彼女は、僕の奥を覗いたのだと言っていた。

だとしたら、この体の持ち主は僕ではなくて、あの少年になるのだろうか。

そして彼こそが、セシリアがいつか僕を通して見ていた誰かで、チエルシーさんが語る僕の知らない僕なのだろうか。

それじゃあ、いま、ここにいる僕は……

「難しい顔をしているな、少年！」

物思いに沈みかけた僕の肩を、グラマーな女性がいきなり横抱きにのしかかってきた。

「わっ！ か、女伯爵さん!?!」

一緒にルクーゼンブルクへ向かう同行者さんだ。彼女もIS委員会常任委員という立場からアイリス王女の誕生会に招待されているらしい。

「んん、少年からその呼び方は堅苦しいな。なんなら姐あねさんと呼ぶ方がいい」

「あ、姐さんですか……。って酒臭っ!? ちょっと、昼間から飲み過ぎじゃないですか？ そのグラス何杯目ですかいったい」

「固いこと言うなよ少年。どうしようもない時に大人は酒に逃げると教えたじゃあないか。にしても、このワインはやけに上手いな？」

「当然ですわ女伯爵カウンテス」

セシリアが横から口を挟んできた。

顔は笑っているのに目の奥が怖いのがこれまでの付き合いでわかってしまう。

「お客様をもてなす用意にぬかりありませんわ。それにしても、お嬢、というのはもう止めにして頂けませんこと？」

「はっは、そうおしやまになるなよお嬢。私はこれでも気を使っているんだぜ？ みんなから一人前に扱われて、年相応のおてんば娘になりたくともなれやしなのお前さんだ」

「おてんばだなんて、もうだいたい昔のことですよ」

「ちようど^{サヴァント}大学の先生が健在だった頃だったかな。ま、私から見
ちやお前さんは今も昔も可愛いお嬢さ。だから、私の前では無理に
かしこまる必要なんてないんだぜ？」

キラーン、と効果音がつきそうな姐さんのキマツた笑顔は、けだし
カッコイイと思えてしまった。美人というのはキザつたらしさを隠
してしまうからお得なものだ。

セシリアもまんざらでもない様子で、やれやれと苦笑を漏らしてい
る。

「まったく、かないませんわね。とはいえ、もう間もなく到着時間で
しょう？ チェルシー、お水の用意を」

「無用なお嬢。これから旨くもない酒に付き合わなければならん
だ。ルクーゼンブルクに着くまで好きにさせてくれ。お代は払う」

そういうと、手のグラスに入ったワインを回して、呷^{あお}るように一氣
に傾けた。酔っていても所作から品が失われないのはさすが貴族と
いうべきか。

(それにしても、旨くもないお酒か)

IS委員会常任委員としての立場は、招待された披露宴でもいろい
ろとしなければならぬ面倒事があるのだろう。

どうしようもねえムカつくときに大人は酒に逃げると言っていた
けれど、きつとそれくらい大変な仕事なんだろうな。

そうだ。

僕でなくたって、みんなそれぞれ大変な事情を抱えているんだ。そ
れを何とか飲み込んで、他人に心配かけることなく毅然とすましてい
るのだろう。

ならば僕も、いつまでも自分のことにはかり目を向けていられない
じゃないか。このままじゃあ格好良くキメた姐さんみたくセシリア
を気遣うことだってできやしない。それは嫌だ。

気張れよ、『俺！』

そう自分を励ますと、心が少し晴れた気がした。

「ところで、女伯爵様^{カウンテス}」

チエルシーさんがお水を用意しながら言った。

「あんだよ?」

「卒爾そつじながら、……トミヤ様に、何かたらしこみましたね?」

——瞬間、高度1万メートル上空の機内が凍った。

エクシアの眼がゆつくりと僕へ動き、チエルシーさんの瞳が冷ややかになり、姐さんの目が、あ、サングラスで見えないや。でも間違はなく泳いでいるなこれ。

まず声を発したのは、画面越しで空気を感じないはずのセシリアだった。

「どういうことかしら、チエルシー?」

「はい。失礼ながら、トミー様は女伯爵カウンテスとお会いした後から、変わった匂いがいたします」

「……は?!」

え、ちよ、何言ってるの? 何知ってるの!?

ああ、エクシアまで変な目で見ないでよ!

「トミーさん、いったいこれは、どういう……」

セシリアの顔色がおどろおどろしくなっていく……!

「変わった匂いって、あ、た、タバコ!? タバコのことじゃないかな!

だよね、チエルシーさん!」

「はい、左様でございます。未成年が手を出すには宜しくないタバコでございます」

「思いつきり嫌煙しているね……。っていうか、匂いなんてわかるものなの?」

「トミヤ様、女性はみな鼻が利く生き物なのですよ」

「そ、そうだったのか」

「雌犬を連想するのはいかなことかと存じます」

「僕まだ何も思考していないんだけど!」

え、なに、英国のメイドは名探偵の薫陶でも受けているわけ? 僕はワトソン博士よりもリアクションキャラになっちゃうよそれ。

チエルシーさんは僕へ歩み出し、顔がドアップになる距離まで詰めてきた。

「トミヤ様、お出してください」

「な、なにを……?」

「懐に忍ばせたものを出せと言っているのです」

口調がだんだん怖くなっていくよお……。

僕は大人しくタバコの箱を一つ明け渡した。

「なるほど、トレジャラー・ブラックですか」

名探偵チエルシーさんは横目でソファアに座る姐さんに狙いを定めた。銘柄だけでこうまでわかる物なのか!?

「やはり貴方様の手口に相違ありませんね、女伯爵^{カウンテス}」

「……………」

「女伯爵^{カウンテス}?」

見ると、呼ばれた当人はいつの間にかワイヤレスイヤホンを装着していた。

手元の携帯端末の画面が音楽再生を表示している。これと繋いで喧騒から逃避しているらしい。目元はサングラスをしているせいでわからないが、目もつむって外界とシャットアウトしているのだろう。

チエルシーさんは、おや、と可愛らしく小首をかしげると、セシリアに向き直った。

コックリと、たおやかな返答がよこされた。

忠実なメイドは迷うことなくそつと携帯端末に手を置き、美少女格闘キヤラクターの棒読みのようなセリフと共に必殺技を繰り出した。

「ポリューム☆あつぱー」

「ぐわあああああー!!?」

なんとむごいことを……!」

僕は飛行機が着陸するまで、チエルシーさんの機嫌を損ねないよう大人しく身を縮こませた。

エクシア、たとえチエルシーさんと血のつながりがあったとしても、お姉さんのようにはならないでくれ。

四十三話 暗闇の中のボーイ・ミーツ・ガール

アイリス王女のお誕生日会は、ルクーゼンブルク公国首都にある迎賓館が会場となっていた。

ヨーロッパの王宮のイメージがそのまま現れたかのような外観が、夕闇を前に見事にライトアップされている。屋内のシャンデリアもきらびやかで、庭園には色彩の変わる噴水を中心に意匠を凝らした装飾街灯が煌々と照らし出していた。

来客は、屋内はもちろん玄関先にまで溢れかえっていた。

貴族様や王族様たちは一目でそれと分かるゴージャスな衣装を着飾り、企業関係者さんはキチツとした正装で、そしてIS関係者さんたちはほとんどが女性ということもあって、個性的なドレスに身を包んでいた。

格好でそれぞれの立場が一目で見取れるというものだが、見渡すまでもなく、お客さんの過半はIS関連者さんだと見分けがかった。

なぜかという、僕を見る視線が一様に険しいものだったからだ。

リミテッド・ストラトス
(L S が嫌われ者だつてこと、よくわかるよねえ)

談笑する婦人方が僕を見るなり口元を隠してひそひそと声を低くしたり、笑顔が一転してしかめっ面になったり、露骨に舌打ちをする様子が、僕の歩くところそこかしこで散見された。

人混みの中を進む時はまさに圧巻で、まるで海を割って歩いたという聖典の指導者のごとく、勝手に道が開けるのだからまいってしまふ。

(いくらなんでも、これじゃあ会社の評判が落ちかねないなあ)

僕はM・R・エレクトロニクスの代表として来ているのだが、このザマじゃあさすがに自粛せざるを得なかった。

会社の使節役はエクシアに任せ、チエルシーさんにサポートをお願いして、外に出て待つことにした。

二人は心から僕のことを心配してくれて、本当にありがたかったが、だからこそこの場で一緒にいてはならないと引き下がった。僕のとばっちりを二人に飛び火させたくない。

会場はまだ開会のあいさつもされずごった返している。今日の主役であるアイリス王女はおろか、公族の方々もお見えになつていない。

せめてアイリス王女がどんなお顔なのかくらいは拝見したかったのだが、僕がいることで無駄な騒ぎが起きてもまずいし、退散しておくべきだろう。

そう自分に言い聞かせて踵を返す。足は不思議と重かった。それに、胸の中はざわついて、腹の底がグツグツしていた。

(……IS学園を休学して、旅行に出たからこの方、ずいぶんと感情的になったもんだなあ)

いつもの女性方からのバッシングに、いちいちむくれてしまうなんてさ。

我ながら思いがけない憤りに戸惑いつつも、不機嫌が顔に出ないように懸命にこらえて会場を後にした。

何気なく右肩に手を当てる。

ルクーゼンブルクの空港で先に分かれた女伯爵カウんテスさんが、去り際にポンと僕の右肩を叩いて見つめてくれたのは、こうなることを予見していたからだろうか。

別れの言葉はただ一言、

「しつかりな」

という励ましに、いっぱいの気遣いを込めてくれたのだと振り返る。

(もちろんです。ヤケなんて起こしませんよ)

肩を強く抑えながら外に出た。

もう日が落ちていた。見上げる空は雲で蓋がされ、なんだか息苦しいように感じた。

しかしとにかく、一人になりたかった。

周囲からの敵意の視線から逃げ出して、暗闇の中で息をつきたかった。

玄関は明るすぎて煩わしい。まばゆい迎賓館の光によって、宵闇は庭園の向こうに追いやられていた。

その中に飛び込もうと歩を進める。

通り抜ける東欧の風は初夏だというのに肌寒くて、ブルツと身を震わせた。

「あれ、君、ひよつとして」にのまえ「君じゃないかね?」

ひよんな掛け声に、おや、と思いがけないものを感じた。名前を呼ばれたのもあるが、男性の声だったからだ。

「あなたは……」

会場の明かりを横に照らし出された姿は、でっぷりとした中年の方だった。

顔にも無駄な肉が着いて、綺麗にセットされた髪が対照的にキマっている。もとはかなりの美男子だったのか、目鼻立ちに整っていたような名残があった。

ただ、濁った瞳とニタついた口元が肥満と相まって、いつそ醜悪な印象を受けた。

いわゆる、一目見たら忘れられない顔つきだったので、すぐにどこ
の誰だったのかわからなかった。

「以前に、一度お目にかかったことがありませんでしたか? 確か、
欧州連合統合防衛計画の事前会議の席、I S委員会の……賛助さん、
でしたっけ?」

「おお! よく覚えていてくれていたねえ。ありがとう。まさかこんなところで再会できるだなんてうれしいよ」

賛助さんは肉を揺らして駆け寄ると、がっちり両手で握手してきた。

「閣下は元気かね? あれからめつきり会えていなくてねえ。もう歳
だろう? 幾つだったかな」

「七十近くだったかと思えます。昨日お会いしましたが、ご健勝
そうでしたよ」

「そうかそうか。いや、まったくなによりだ。それはそうと、君の話は
聞いているよ。I S学園でいろいろあったそうだねえ。ああなに、ワ
シは別に君のことを悪く言うつもりはないから、安心したまえ」

「は、はあ……」

いちおう、アウエーで貴重な僕の味方でいいんだらうか？

まあ男性同士だし、少しは気が楽になった。

「賛助さんも、今日はIS委員会のお立場でご出席ですか？」

「まあ、そうなんだがね。こうも女性ばかりだと心休まる暇もないもんだな」

「あ、わかります。僕も会場の空気に馴染めなくて、いま外に出てきたところなんですよ」

「可哀想にねえ。ワシも仕事だから仕方がないとはいえ、いやはや、――肥溜めみたいなどころだわい」

「え……う？」

「ん、ああ、失敬失敬。何でもないよ。えーと、君もアイリス王女の誕生日会に招かれたのかい？」

「あ、はい、会社の代表に選ばれてしまいました」

「ははあ、さてはきつと、あの人使いの荒い常務に走らされたんだらう。そうに違いない。まったくひどいもんだねえ、こんなオオカミの群れに放り出すなんて」

「そんな、オオカミだなんて言いすぎですよ」

ハハ、と苦笑でごまかすが、賛助さん、発言がぶっそうすぎやしないか？

僕はひやひやしながら周囲に気を配った。

「うっはっは、いやまったくだ。これじゃあオオカミさんに失礼だったね。言い直そう。君も大変だねえ、なにせ――」

賛助さんの顔が上目遣いに近づいた。

「こんな女郎共の遊宴に放り出されるなんて、ねえ」

「……」

僕は何も言えなかった。

目の前の、半分影で覆われた顔は憎々し気に歪んでいた。声音はひそめられ、底冷えするような嫌忌に満ちている。

今まで出合ったことがないほどの憎悪の塊に、女尊男卑への怨念めいたものを感じた。

閣下も、常務さんも、というか僕を補佐してくれる男性方はみんな、反女尊男卑主義を掲げている。

中には直情的に振る舞う人も少なくないが、目の前の男ほどドス黒い忌々しさを撒き散らす者はいなかった。

こんな人が、どうして女尊男卑の牙城である、IS委員会の賛助という立場でいられるのだろうか？

そう当惑していると、会場の方からけたたましい叫び声がつんざいてきた。

「まあ！ 嫌なものに出会ってしまったものザマス！」

今度は誰だ、とそつちを見ると、

「こ、これは、マダム……」

賛助さんがすぐに応えた。さつきとは打って変わって、腰が引けておどおどとした臆病そうな雰囲気になっている。

「まあまったく、こんなめでたい席に野郎同士で何を密談しているのかしら!? さつきと立ち去るがいいザマス！」

しっし、と猫を追い散らかすように手を振ると、賛助さんにも負けないような全身の肉がブルンブルンと大揺れした。

なまじ格好が肌を露出するレースのドレスなだけに、人一倍の大ボリュウムが嫌でも目についた。こういうのを、ダイナマイイ、というのだろうか？

「はあ、そんな、密談などと……」

「なんザマス？ まさかこのワタクシにケチをつける気ザマスか!？」

「いやはや、まさか、そんな。IS委員会広報局長のマダムが、わたしなんぞに声をかけて頂けるなんて、いやあ光栄の極みです、はい」

「口だけは本当に達者ザマスね！ その口と有力議員という権勢でもって、若い時分にはいったい何人の女性を手籠めにしていらしたのかしら！」

「そんな、マダム、誤解ですよ」

「こんな野郎に引つかかる女も女とはいえ、そんな時代があったこと自体が嘆かわしいことザマス！」

ぐ、と賛助さんのゴマすりの手が力むりきのが見えた。

顔は薄笑いを張り付けたままだ。

「はあ、世の中を憂うマダムの清らかな心、まるで世間へもたらす一服の清涼剤のようです。はい」

「あー!! もう、口を開くんじやないザマス！ 汚らしい、行くザマスわよ！」

同じような体格の取り巻きを従えて、ドスドスと迎賓館に向かっていった。

なんていうんだろう、日本の国技のスポーツマンたちを連想するな。ごつつあんです、つていう独特な言い回しをする方たちみたい。

と、その足を、ふと止めて振り返ってきた。

「ところで、立派な鬘かつらザマスね。よおくお似合いザマスわよ」

「!!」

賛助さんは両目が飛び出んばかりに見開いて、雷に打たれたように硬直した。……ヅラだったのか。

周囲からザワザワと失笑が漏れてきて、一段といたたまれなくなつた。

ザマスさんは打ちひしがれる賛助さんを満足げに目で舐めまわすと、オーツホツホツホ、と高笑いを浮かべて建物の中に入っていった。

……すんごい人だったなあ。

IS委員会つて、こんな半端ない人が他にもわんさかいるんだろうか。僕は賛助さんに同情せざるを得なかった。

ザマスさんを前にした時の変わり身の早さも、きつとブラック委員会を切り抜けるための処世術なんだろう。

賛助さんはようやく硬化が解かれると、がっくりと両膝に手をついた。背中はブルブル震えている。

僕は恐る恐る横目で顔色を覗くと、

「……クソ」

見てはいけないものを目にしてしまったかのような、総毛だつ思いがした。

顔が真つ暗になって、呪詛のような恨み言を呟いている姿は、地獄の鬼か悪魔のようだ。

「そ、それじゃあ僕はこれで、失礼します！」

軽くお辞儀をすると、その場を足早に後にした。一刻も早くこの場所から逃げ出したかった。

速足は駆け足に、駆け足は疾走に変わった。

通り過ぎる人も、明りも、手入れされた庭園も、僕の眼には映らなくなつた。

(なんだ、いったい、なんだというんだ、この気持ちは！)

賛助さんへの、同じ男性同士という中であつたわずかな親しみが、一気にリバーズしてめちやくちやになつてわけがわからない何かに変わった。

胸の奥がゴワゴワして、変な嘔吐感までこみ上げてきて、途端に叫びだしたい衝動に駆られた。

ザマスさんは許せない。男性を侮蔑しきつて嘲る姿にはムカムカした。

かといつて、賛助さんのように、人間はあれほど闇に染まれるものなのか？

女尊男卑は悪だ？ かつての世の中に戻すのだ？ 男女の均等を目指すのだ？

僕だつて反女尊男卑の理念を否定するつもりはない。けれど、だつたらその前の、何人も女性を侍らせる男性が居たような世の中が正しいとでもいうのだろうか。

もし自分が女性だったとしたら、そんな世の中を変えようとするんじゃないだろうか。そしてその時は僕も——賛助さんみたいな闇になつてしまふのだろうか。

今のこの世の中が正しいのか？ かつての世の中がおかしいのか？ それとも、そのどちらもが間違っているのか？

わからない、分からない、解らない！

——！！

どこともしれない建物の陰で、僕は全身に力をみなぎらせて、歯を食いしばって、……がつくりと芝生の上に膝をついた。

と、懐からポトリと何かがこぼれ落ちた。

女伯爵さんカウンテスからもらった、二箱目のタバコだった。

チエルシーさんに出せといわれたときに、一つ隠していたんだっけ。

僕は震える手で封を開けて、一本を口にくわえる。チエルシーさんの怖いお叱りも今は吹っ飛んでいて、とにかく一服着きたかった。

(ああ、カツコ悪いなあ……)

こんなに手が震えて、ライターの花がなかなか着かないじゃないか。吸うときはカツコ良くやれって、女伯爵さんカウンテスに教わったのに。

何回も着火を失敗して、ようやく着いた明りを逃すまいとタバコを突き出した。

すぐさまに煙を吸い込んで、むせた。

馬鹿みたいにむせかえって、それでもタバコを放さなかった。

ようやく落ち着いてから、やっとゆっくり煙を味わえた。

口の中にたっぷりと含み、よくフレーバーを堪能して、鬱憤と一緒に吐き出した。

(あーあ、ダッセーな、俺)

へへ、と皮肉めいた笑みが浮かぶ。大概、不良が板についてきたみたいだ。

煙が目染みたのか、視界が歪む。

もう、どうでもいいや。

遠くでにぎわう誕生日会の喧騒を尻目にして、暗がりに向かい合っ
て紫煙を吐いた。

闇が一層広くなって、深い安息を与えてくれるような気がした。



アイリス王女、おめでとうございます。

アイリス王女、素晴らしいISですね。

アイリス王女、ISがよくお似合いですよ。

アイリス王女、将来のIS国家代表の姿が目に見えるようです。

アイリス王女、ISの乗り心地はいかがですか？

アイリス王女、 I S の――

アイリス王女、 I S は――

アイリス王女、 I S で――

「はあ……」

誕生日会の主役、アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルクは大きなため息を着いた。

「誰も、私のことなど見ていないのじゃ……」

化粧室の鏡に向けて呟く言葉は、消え入りそうなほどか細く弱弱しい。

幼い少女にはわかっていた。

今日集まったたくさんのお客様は、自分の誕生日のためでなく、自己進呈される I S の方が目当てなのだということ。

加えて、お尋ね者の篠ノ之束に接触したいだけだということ。

もつとも、篠ノ之束はいつも通り雲隠れしてしまったのだが。

それでなくとも、王女の健やかな成長を祝う者はほんのわずかばかりであった。

「つまらぬ……」

ギョツと服の裾を掴んだ。このまま席に戻っても、また自分の I S に関わったお話しかされないだろう。

ありていに言えば、自分は I S のオマケなのだ。

【セブンス・プリンセス】という名は自分に与えられた称号のはずなのに、 I S が名前ごと奪い取ってしまったように感じた。

そう嘆いても、誕生日会を開いてくれた兄や姉たち、国の政務官のためにも戻らねばならない。主役が長く席を空けたら、みな心配してしまうだろう。

(こんなピエロみたいな役を、兄上も姉上も、嫌ほどこなしてきたのじやろうか)

ルクーゼンブルクは、所詮小さな国に過ぎないのだから。

「はあ……」

止まらないため息を着いて、空気を換えようと、小窓を開けて空を見た。

雲がどんより立ち込めていて、何処にも逃げられないような息苦しさが感じられた。ISがあれば遠く空高く自由になれると思っていたのに。

「ん？」

ふと、鼻腔をくすぐる香りが通った。

風上に向けて視線落とす、その先に、何やら小さな明かりが揺らめいているのが見えた。淡くて、ホタルみたいに明滅している。

「なんじゃ？」

好奇心に駆られて外に出る。ちよつとくらい良いだろう。側近のインベリアル・ナイト近衛騎士団長ジブリルは表面上厳しいが、実際には何だかんだわがまを聞いてくれる。

迎賓館の裏手にある勝手口を抜けると、吹き抜ける肌寒い風に首を縮込ませた。東欧に位置するルクゼンブルクは、初夏でも夜は10度ちよつとしかない。

メイドのフロレンスにかけてもらった羽織を被り直して、音を立てずに歩き出した。

たしか、この少し先、自分のISのモデルであるユニコーンのモニメントがある場所のあたりのはずだ。

建物伝いに進み出で、明りの方を覗き見ると、

「あ——」

少年が、いた。

モニメントの前、土台に横たわるユニコーンを守るように、腰を掛けた少年が静かにタバコを吸っている。

伸ばした右足に左足を組み、タバコの明りにぼんやり映るうつむき加減の横顔は、

(泣いておるのか……?)

頬を伝うものに僅かな明りが照っていた。

儂い灯はいっそう寂寥感せきりょうを醸し出し、どこか幻想的な風でもあった。

その雫を、少女は、とても美しいと感じた。

偽りの笑顔に満ちた虚飾の祭典の中で、その涙だけが真実を表して

いるように見えた。

「——おぬし」

少女は、ふらりと建物の陰から前に出た。

唯一の誠を示すこの少年が、何者であるのか知らねばならないと、小さな胸が急ぎ立てる。

「おぬし、如何したのじゃ。このようなところで」

驚いた顔の少年の小指で、紅い指輪が静かに光った。

ルクーゼンブルク特産のガーネットだと、姫君はすぐにわかった。

四十四話 ワンダーランドに迷い込んだお姫様

華やかな会場を、すれ違う者たちがみな振り返る美女が進んでいく。

スラリとした長身で、腰まで伸びた赤いツインテールが背中を開いた漆黒のドレスと相まって、見事なセクシーさを振りまいている。

右肩には黄色い花が装飾され、まさに美貌を見せつけるような艶姿、の反面、表情には経験を重ねた人物特有の落ち着きが備わり、成熟した雰囲気醸し出していた。

しかし人見を引くのはその華麗さだけではなかった。

右腕が、無いのだ。それに右目も、眼帯で塞がれている。首元に巻かれたチーフの下には火傷の跡が垣間見える。

もつとも、そんな異彩の麗人を訝しむ者はこの場にいなかった。みな、彼女が何者であるかを知っているからだ。

迷いなく進められた歩みは和風着物姿の少女の前で止まり、ニカツと軽快に微笑みかけた。

「Добры́й Вечер、ロシア代表さん。お元気そうで何よサ」
ロシア語で挨拶をかけられた相手にとって意外な人物だったのか、あ然と目と口を開いて返答に戸惑っている。

「……Buona sera。わざわざ日本人の私にそんな挨拶だなんて、何かのあてつけでしょうか？ イタリア国家代表。——いえ」
皮肉っぽい笑みを浮かべて告げる。

「二代目世界最強、アリーシャ・ジョゼスターフ」
「あいかわらずのようだねえ、更識の十七代目楯無。織斑千冬と戦わなかった世界最強なんておこがましいと言ってくれるのかな？」

「今日の出席者のみなさんと同じく、貴女の実力に敬意を払っているだけですよ」

楯無は着物の折り目正しくお辞儀をして見せた。

普段、IS学園の生徒会長としての飄々とした姿とは違い、公の場おおやけに相応しい洗練された立ち振る舞いになっている。

楯無もアリーシャも、IS国家代表という立場からアイリス王女の

誕生日会に招かれていた。似たような境遇の者は、二人の他にもルクレーゼンブルク公国の隣国、及び馴染みのある国々から参列している。

もつとも、それは王女へ贈られる第四世代IS絡みであるのだが。

「敬意ネえ……。世界最強なんて忙せわしないご身分サ。今日だってそんな立場のせいで、忙いそがしい中呼び出されてしまったんだからサ」

「お役目お疲れ様です。強者は相応の振る舞いを求められてしまますものね」

「ま、その通りなんだけどサ、ロシア代表の君に言われると調子が狂ってしまうのサ」

「あら、それはどういう意味でしょう？」

「東欧は未だに自分たちの前庭だ、つて考えている尊大な国が、つわもの矜持を語るなつてことサ」

楯無は苦笑を浮かべた。

「よりによつてロシア代表になるなんて、物好きなジャパニーズガールなのサ」

「島国育ちの私には、あまり大陸国家の因縁というのにピンと来ません。けれど、ロシアが影響力を持ちたいと画策しているのは事実でしょうね。それゆえに、IS学園から私をこの場に呼び出した」

「キミとは今後もこういう会場で会うことになりそうなのサ」

「穿った物の見方をなさいますね。アリーシャさんの目には、ロシアはどう映っているんですか？」

「強いものが正義のパワハラ帝国」

「……ずいぶんと物騒ですね」

「ステレオ視感ではあるけどね、ロシア人にとって力は何よりも大事なサ。なにせ脆弱な指導者のもとでは、極寒の冬を生き抜くことができないう厳しいお国柄だからネえ。キミがこうしてロシア代表でいられるのも、強いからに他ならないのサ」

「お褒めに預かり光栄です」

楯無は扇で口元を隠してクスクスと調子を合わせた。二代目ブリュンヒルデ世界最強に実力を褒められて悪い気はしない。

一方で、自他ともに認める実力者の自分とアリーシャがこの場にいる意味を懸念した。

「ところで、アイリス王女のISですが、私たちが招集されるほどに危険されるものなのでしょうか？」

「世代が違うらしいからね。飛行機でいえば、レシプロ機とジェット機の違いはあるだろうサ。向こうが初期型ならまだやりようがあるけど、あの篠ノ之束お手製というんだから推して知るべしなのサ。……しかシ」

「いかがしました？」

「アイリス王女、しばらく姿が見えないナと思つてサ」

「そういえば……。まあ、お化粧直しか、お花を摘みに行かれたのではないでしょうか。もしくは今日みなさんにもみくちやにされてお疲れなのかも」

「ふうん……。だいたい」

「……」

二人の目つきが鋭利に変わる。

アリーシャも楯無も、それぞれのカンが違和感を告げていた。具体的な理由はないが、幾つもの修羅場をくぐり抜けてきた経験が警鐘を鳴らしているのだ。

二人は自然と背中合わせになつて会場全体に注意を払った。表情は場に合わせて笑顔をつくり、瞳の奥で俯瞰する。

(こういうとき、トミー君がいてくれたら助かるんだけどね)

楯無はふと、IS学園のトーナメント決勝の陰で働いてくれた彼を思い出す。そういえば、旅行でルクーゼンブルクに来ていたのだったか。

しかしまさか、オールドファツション反女尊男卑主義組織に属するLS乗りの彼がこの場にいるはずはないだろう、とすぐに頭の隅に追いやった。

◇

そんな二人の姿を、壁に背中を預けながら眺める瞳があった。

（二代目世界最強と仲良く背中合わせとは、相変わらず我が生徒会長サマはご立派だねえ）

自己主張の強い豊満な胸を組んだ腕に乗せ、私の強そうに顎をしゃくりあげている表情は不敵。後ろに金髪のホーステールを流す長身の彼女は、楯無と同じくIS学園の生徒であった。

「おう、壁の花にしちやあ棘が強すぎる目つきじゃねえか、ダリル・ケイシー」

「……アンタには適いませんよ、イーリス・コーリングセンパイ」

イーリス、と呼ばれた軍の礼服に身を包む女性は、金色のシヨートヘアーをポリポリとかきながらため息を着いた。

「ハア……、本当はナタルと来るはずだったのが、なんでこんな生意気なガキのお守りなんぞを任されたんだか」

「センパイ、軍人なんですから前情報入れといってくださいよ」

「ああ？」

「米国のお偉方に聞いたんですが、ナターシャセンパイは自分のIS、「シルバリオ・ゴスペル」でしたっけ？ その調整で手がふさがっているそうですよ。で、オレにお声がかかったわけです。代表候補生つてのにもありますが、ロシア代表である更識楯無の様子を伺えつてのが本心でしょうね」

「何だそりゃ。現代はISが軍のパワーバランスを決める世の中だぜ？ 米軍はいつまでロシアと冷戦気分にいるんだっての」

「軍人さんらしいじゃないですか。頭が固いっていうセオリー通りの」

「けっ、言ってくれなせ。ダリル、お前卒業後の進路米軍なんだから、今のうちに世間視ておけよ。一人くらい軟弱な頭の奴が欲しいからな」

そういうと、イーリスは一気にシャンパンを飲み干し、空になったグラスを替えにドリンクコーナーへ向かっていった。

その背中を見つめるダリルの顔色は物憂げだった。

（でもねえ、センパイ。世間視てると、嫌なものまで目についてしまうんですよ）

肩を落とすダリルのポケットで携帯端末が震える。学校の後輩で恋人のフォルテ・サファイアからだった。

表情をあからさまに和らげて端末の通信アプリを起動する。画面一番上には着信のあったフォルテからのメッセージが未既読を表していた。

そしてそのすぐ下、最近連絡を交わしたであろう欄には、先日IS学園から失踪した二人の生徒の名前が記載されていた。未既読には、なっていない。



「アリス、ちゃん？」

「ちゃん付けは無用じゃぞ、トミー」

絢爛な賑わいの陰で、少年と少女は薄闇の中に肩を並べていた。

会場である迎賓館の外、裏手に置かれたユニコーンを象ったモニュメントの土台に腰を下ろし、身長差から少女は自然とトミーを見上げる。背丈はもとより顔立ちも幼く、しかし釣り合いのとれた豪華なドレスから、トミーはどこかの貴族のご令嬢様かと推察した。

「わかったよ、アリス。それにしても、どうしたってこんな人気のない場所に来ちゃったのさ。時計を持ったウサギでも追ってきたのかい？」

少女はプラチナブロンドの髪を揺らした。

「ルクーゼンブルクは不思議の国ではないぞトミー。なに、お主が吸っているタバコの明りに釣られたのじゃ」

「え、こんなものなんか？」

「わらわはとんと目にしたことがなかったのじゃ。姉上はもとより、兄上も家の使用人も皆吸わぬ」

「ああ、そうか。今のご時世はそうだもんね。昔の男性はみんな吸っていたっていうのにねえ」

トミーは、火をもみ消したタバコに視線を落とした。

女尊男卑の世の中になってから、世間は禁煙運動が加速していた。

タバコの匂いが服や髪に着くのが嫌悪されるためだった。それ以前も禁煙の流れはあったが、今ほど顕著なものではない。

現代で吸っているのは、女伯爵カウんテスのようによほど物好きな人に限られている。

「吸ってみてはどうじゃ?」

「え?」

「タバコは気分を落ち着ける効果があるのじゃろう? ならば吸っておるがよいぞ。泣くほどのことがあったようじゃからな」

言われてトミーは目の下の涙後を急いで拭いた。気恥ずかしさに苦笑がこぼれる。

「見られちゃったか」

「うむ。ゆえにわらわに気をつかうことはない」

「そもいかないよ。タバコの匂いが君の服に着いたら、お母さんに何て言われるかわからないじゃないか。女性は匂いに敏感らしいからね」

「……母上は、もう早くに亡くなられた」

「あ……、ゴメン、不躰だった」

「無用じゃ。気遣い痛み入る」

二人とも視線を落とし、しばしの沈黙が流れた。遠くで沸いた笑い声が、えらく耳障りに感じたのか、アリスと自称する少女は表情を曇らせる。

「つまらぬ宴会じゃ」

「そんな。せつかくアリス王女のお誕生日に招待されたのに」

「みな、嘘しか言わぬ」

「嘘?」

「表情は笑っていても、誰も本心から祝おうとはせぬ。みな、新しいI Sが目当てなのじゃ」

「ああ……」

貴族の令嬢であればこそ、そういった人の裏表に敏感なのだろう、とトミーは思った。

「アリス、アリス王女の助けになってあげなよ。きつと心の中で悲

鳴を上げているかもしれないから」

「そなたは優しいの。しからば、わらわと一緒に会いに行ってみるの
はどうじゃ?」

「光荣だけど、遠慮するよ」

「どうしてじゃ?」

「僕は、嫌われ者だから」

「嫌われ者?」

「さつきもそうだったけど、あまり公おおやけの場に相応しくない立場でね」

悲しそうに微笑むトミーに、アリスは、

「なれば、後日であればよかろう」

「後日?」

「トミー、そなたは嘘が着けぬ性分じやろう」

「まあ、口はともかく、顔に出やすいって友達に言われたけど」

「王女は嘘が嫌いじゃ。真偽を疑うことなく交わせる相手を欲して
おるのじゃ」

「それって、お友達を欲しがっているってこと?」

「お友達……! そうじゃ、王女は友を欲しておる!」

アリスは我が意を得たりと勢いよく立ち上がった。

くるりと、ターンを踏むようにドレスをひらめいてトミーに向き直
り、ビシッ、と指を差し向ける。

「さすれば問おう、トミーよ。お主、王女の心を救うために気を引き信
用を築かねばならん、如何いかにしてこれを得んや?」

「え、つと、現実的でない質問だね?」

「応えよ、トミー!」

「わかったよ、そうだなあ……。せっかくの誕生日を外すんだから、ア
リスと、アイリス王女と一緒に『お誕生日でない日を祝う』っていう
のはどうかかな?」

「お誕生日でない日?」

「ほら、いかれ帽子屋マッドハッターと三月ウサギと眠りネズミがさ、歌ってたじゃな
い。君と僕とが生まれなかった日♪ 祝え♪ 何でもない日☒ 万
歳! つてさ」

「じゃから、ルクーゼンブルクはワンダーランドでは……」

と、不平を言いかけた口が止まると、アリスの表情から花が咲いたように綻んだ。

「トミー、それは、わらわと一緒にいられるならば、いつも祝ってくれるというのか？」

「もちろん、アリスと一緒にアイリス王女に謁見できたなら、僕にとつては祝い事以外でないからね」

「おおー！」

アリスはトミーの手を取り、ぶんぶんと振り回した。

「しからは事は善は急げじゃ！ 明日の夕方に、この場所でどうじや？」

「ここで？ 僕はたぶん良いけど、アイリス王女はどうだろう？」

「まったくもって問題ないぞ！」

「ずいぶんと見知った感じだね……」

まあ、アリスはアイリス王女と同じくらい的年代だし、馴染みであるのかもしれないな、とトミーはアリスの意見に同意した。

アリスは年相応にはしやぐと、

「では、約束じゃからな。遅刻などしたら承知せんからな！ 死刑にするぞー！」

「大げさだなあ。アリスもね。アイリス王女にもよろしくね」

うむ！ と上機嫌で裏戸へ向かうアリスに向けて手を振るトミーは、彼方で何かまたが瞬いたように感じた。

風を切って向かう先は、すぐ目の前の――

「あぶないっ!!」

ん？ と振り返る着弾点のアリスを覆いかぶさるように抱きかばった。

飛来物は弾着前に網を広げ、二人を絡み取る。

「な、なんじゃ!？」

「これは、ネットランチャーか!」

弾道予測から発射地点に目を向けると、闇の中に異形の者が浮かんでいるのが見えた。

頭が無く、両腕が長く、機械的な黒い外装。

それは、IS学園に襲撃してきた正体不明のロボットに酷似していた。

「あいつ、こんなところまで!?」

トミーはLSの武装グロリーシューカー 剣 銃を展開し、一刀のもとに縛めを切り捨てた。

体制を整えるとアリスを守るように立ちふさがり、ヴォーダン・オージエ 越界の瞳を起動して闇の中の敵を探り出す。

（前見た時よりもスマートか？ 武装も違う。右腕は肘から先がブレードに、左肩にはネットランチャーをマウントしている）

装備を検証するトミーに向けて、黒い襲撃者は左腕を突き出し閃かせた。

「左腕の砲口はそのままか!」

グロリーシューカー 剣 銃が砲弾を切り払うと、弾かれた先でものすごい爆発が巻き起こった。

（威力も段違いに違う! 一夏無しに一人で撃退できるか?）

その衝撃を受けたせいかわ、迎賓館の照明が一齐にダウンした。一拍置いて建物内から悲鳴が沸き起こる。

「と、トミー……!」

後ろにかばうアリスの声は明らかに震えていた。

無理もない、とトミーは思う。彼女のような幼い少女が、こんな状況を目の当たりにして怯えないわけがない。

「大丈夫」

トミーは背中越しにアリスをなだめる。

「君は、僕が守るから」

やさしく投げかけると同時に、トミーは覚悟を決めた。相手が何であつても、この小さくか弱い存在は絶対に死守してみせると、全身に勇気をみなぎらせた。

それが、男としてあるべき姿だと、呪われた賛助の暗影に向けて気魄をはいた。

「行くぞ! グレイ・アイデール!!」

満身の力を込めて、トミーは異形の力を解き放った。

◇

暗闇に包まれた会場を淑女方の悲鳴がこだまする。

突然の爆発音と消灯に、テロでも起きたのかとパニックが起きているのだ。

「アイリス王女！ アイリス王女はいずこか!？」

喧騒を鎮めるべき近衛騎士たちも、主の失踪を前に狼狽し、恐慌に拍車をかけるだけになっている。

(これは、まいったネえ)

冷静に状況を見つめるアリーシャでも、あわてふためく会場を鎮めるまでの力はない。大声で鎮静を促そうにも、それ以上の叫び声が響き渡って焼け石に水となっていた。

しばし容態の変化を待っていると、非常電源が作動したのか薄明りがようやく照らし出された。

ホールの叫喚もしだいに収まり、不安そうな声のざわめきに変わる。

「アリーシャさん、どう見ます?」

楯無が背中越しに尋ねた。

「ずっと見張っていたんだが、おかしな素振りのヤツは見えなかったのサ」

「私もです。となると、外で何かが……?」

「だろウネえ……。楯無、ひとまずこの場は任せるのサ」

「構いませんが、お一人で向かわれて大丈夫ですか?」

「オヤ、私を誰だと思っているのサ」

アリーシャはハイヒールをカツと踏み鳴らすと、勇壮に言い放った。

「我こそは初代IS^{モンド・グロツソヴァアルキリー}世界大会部門優勝者にして、現世界最強^{ブリュンヒルデ}、アリーシャ・ジヨゼスターフ様なるぞ! ……てネ☆」

拡張高く名乗りを上げて楯無にウインクを送ると、グツと上げられ

たサムズアップを尻目に、アリーシャは人混みの中を縫うように外へ出て行った。

向かうは爆発音が起きた建物裏手。

何人かの警備員や騎士とすれ違ったが、みなパニックから立ち直れていないのか必死に無線へ状況確認を乞うている。

現場慣れしていなければこんなものか、とアリーシャは落胆を着きながら、裏門の扉を開けた。

そこでは、

「――ナニ!!？」

アリーシャをして驚愕にさらされた。

それは、周囲に散在するクレーター跡や爆発の惨状に対してではなく、

ブリュンヒルデ
「暮 桜!？」

かつて第一回モンド・グロツIS世界大会の決勝で対戦し、敗れた相手、織斑千冬の愛機【暮桜】。

そのシルエットにそっくりなものが目の前で愛刀『雪平』を振るい、異形の敵を真つ二つに切り伏せていた。

(……いや、違うか？ 色が真つ黒だし、女性的な見た目でもないのサ)

よく見れば性差的な部分が男性的で、フルスキン全身装甲の頭部ではラインアイ・センサーが赤い光を放っている。

織斑千冬では、【暮桜】ではない。

暮桜もどきは仕留めた敵が動かないことを確認すると、黒い装甲から灰が散るように外装が剥がれ、中身をあらわにした。

アリーシャはその姿に見覚えはないが、聞き覚えはある機体だった。

(リミテッド・ストラトス……！)

立場がら、頼んでもいないのにLSの情報はアリーシャの元へもたらされていた。ISの敵としてである。

頭部装甲が剥がれ、少年の顔があらわれて確信した。この機体は【グレイ・アイディール】という飛べないISもどきだ。

しかし、話に聞く異形の四脚は装備していなかった。最近調達した
という非固定浮遊武装アンロック・ウエポンも浮いていない。

「どういうわけだ？　といぶかしむと、自身の左側で光を放つ何かがあることに気が付いた。そこには、

「……なるほどネ」

アイリス王女がいた。

四脚が拠点防衛兵装を発動し、非固定浮遊武装グレイ・グロップが防衛兵装を展開させて、幾重にも王女を護っている。

リミテッド・ストラトスは、使えるリソースの過半を割いて、アイリス王女を守り抜いたのだ。

（だから、暮桜もどきの恰好をしていたのか。自分の危険を承知の上で、ヴァルキリー・トレース V T システムを使ってまで、とはネえ）

光の守護の中にいるアイリスへはキズ一つ付いていなかった。

その目は見惚れるようにトミーの背中へ注がれ、小さく開いた口元と、ぼうつと夢心地のような表情は、

（ま、そうなるだろうネえ）

アリーシャはにやける口を止められなかった。幼い少女が、こうまでして助けられては、心を動かされないわけがない。

卑しまれる男性であったとしても、世間の悪者LSの操縦者ヒーローであったとしても、夢の中に落ちた少女にとっては、まぎれもなく勇者に他ならなかった。

「これは、面白くなってきたものサ」

アリーシャは、間違いなくこれから楽しい事態に巻き込まれそう
だ、とこみ上げる笑いを堪えなかった。

四十五話 掌(てのひら)返しは押さえつけられていたものほど舞い上がる

二代目世界最強、ブリュンヒルデアリーシャ・ジョゼスターフの予想は的中した。

リミテッド・ストラトスの操縦者がアイリス王女を助けた出来事は、王女のお誕生日会を取材していたメディア達によってすぐさま世間一般に公表されたのだ。

会場にはIS委員会広報としてLSをこき下ろしていたマダムも出席していたが、IS関連のビッグスターであるアリーシャがトミーを擁護したこと、他ならぬアイリス王女本人がトミーを認めたことから、事実は歪曲の余地もなく世に知らしめられることになった。

介入の口を閉ざされたマダムは、

「あばばばばばばばばばばばばば……」

と挙動不審に陥り、取材の一部始終を見ていた賛助は、

「ぐふふふふふふふふふふふふ……」

と暗い笑みをダダ漏れにほくそえんでいた。

かくして、リミテッド・ストラトスと一にのまえとみや十三八は名誉回復となった。

男性が作り上げ男性が扱うISが女尊男卑の世間に風穴を開けたのだ。

報道の中では、困惑するトミーにアイリス王女が満面の笑みで抱き着き、その隣でアリーシャがニヤニヤしながら祝福し、やや離れた位置で王女お付きのメイドと近衛騎士団長が当惑した顔でうなだれているシーンが幾度となく放送された。

ついでに楯無とダリルがIS学園つながりということインタビューを受け、トミーの同僚のエクシアが、

「なんですかそれー!？」

と仰天しているところを、名門オルコット家の侍女チエルシーがなだめ、英国貴族にしてIS委員会常任委員の女伯爵カウンテスがベロベロに酔っ払いながらゲラゲラ笑っているというカオスな場面も一部挟まれた

り挟まれなかったりした。

IS学園では、朝食をとっていたセシリアが流れてきた番組を見て飲んでいた紅茶を向かい席のラウラに嘔き出し、職員室でコーヒークップを手にしていた千冬が報道を前にフリーズしてカップの中身を山田先生の頭に浴びせ、もう一人の男性IS操縦者、織斑一夏は、「本当なのか、鈴!」

と、箒と一緒に朝の剣道の鍛錬に打ち込んでいた手を休めた。

「マジよ。嘘だと思うなら食堂に行ってみなさい。セシリアとラウラの面白い光景が見られるわ」

「そうか……! トミーのやつ、休学になったときは心配したけど、転んでもただじゃあ起きなかったな!」

「嬉しそうだな、一夏」

「当然だぜ箒! 俺にとつちやあISの世界で唯一の男仲間なんだけ。ああ、あいつ早く帰ってこないかなあ!」

無邪気にはしゃぐ一夏を見て、鈴も箒も互いに苦笑を浮かべて肩をそびやかした。

「復学についてだけどね、今回の活躍を受けて許されることになったみたいよ。しかも同時にアイリス王女も転入してくるってさ」

「マジで!?!」

「それは本当なのか、鈴。一国の王女がやってくるとなると、影響はシャルロットやラウラの時の比ではないぞ?」

「ルクーゼンブルクの偉い人が言ってたけど、アイリス王女も国家代表候補生なんだって。それでIS学園にいつかは来ようとしていて、今回の件を契機に決めたみたい」

「え、それって、トミーは王子様になっちゃうのか?」

「いろいろ飛躍、ってかワープし過ぎよ一夏。まあ、アイリス王女目のにはそう映っているかもしれないけどさ。……でも」

「でもっ!」

鈴は難しそうな表情になった。

「今回の事件、きっかけはアイリス王女が何者かに襲撃されたことなのよ。このままルクーゼンブルクに残っても、またいつ襲われるかわ

からないからってのもあるみたい。警備体制がダメダメだってア
リーシャさんにつつかれていたから」

「つまり、アイリス王女がIS学園に来るということは、ここが危険に
さらされないとも限らないわけか」

「箒の言う通りよ。敵の狙いは、お誕生日プレゼントで贈られた最新
のISかもしれないってさ。篠ノ之東から贈られた第四世代ものら
しいけど」

「!!」

箒は息を呑んで両目を見開いた。

その様子に気がつかない一夏は何気なく応える。

「へえ、東さんのお手製だったら、きつともものすごいISなんだろうな
あ」

「のんきに言わないでよ一夏。第四世代なのよ？ 精魂込められて作
られたウチの【甲龍】があつという間に型落ちなんて、なんか面白く
ないわ」

「そりゃあ狙われたってしょうがないシロモノだな」

「だから、一夏は何でそうお気楽なのよ。あたしたちまでとぼっちり
受けるかもしれないってのにさ」

「鈴」

一夏はふいに真面目な顔になった。

「何者かも知らない奴にいつ狙われるかわからないのって、とても恐
ろしいことなんだぜ。一人でいることが怖くて、外に出ることもおっ
くうになつて、自分の無力さが情けなくなつてくるんだ」

「あつ……」

鈴は口をつぐんだ。一夏が、かつてそうだったことがあったのを失
念していたからだ。

第二回IS^{モンド・グロツ}世界大会トーナメント、織斑千冬が決勝に上り詰め二度
目の優勝を期待されたその日に、織斑一夏は何者かに誘拐された。ド
イツ軍の協力もあつて無事に救出されたが、助け出されるまでどんな
に恐ろしい目にあつたか鈴は知らない。

ただ、二度と一夏を誰からも傷つけさせはしないとISに打ち込ん

だのは確かだった。

「トミーの活躍がアイリス王女にとってどれほど嬉しかったか、俺にはわかるよ。もう、かつての俺が味わったような恐怖を誰にも受けてほしくない」

「……自分も危険にさらされるかもしれないとか、思わないわけ？」

「そんなの今更き。けど、今の俺はあの時のように無力じゃない」

グツと握り締める拳に、待機状態の「白式」がきらりと光った。

「鈴、俺はもつともつと強くなるよ。この手でみんなを護れるくらい、みんなが安心していられるくらい、強く」

「カツコつけちゃって」

歯を見せて笑う鈴の頬はうつすら朱くなっていた。

自分が想い続ける大切な人は、その気持ちに気が付いた日から変わらなず、純真な魅力を抱き続けているのが嬉しかった。

そりやあライバルも多くなるわけだ、と一方で思う。

「それじゃ、俺たちも朝飯にしようぜ。腹も減ったし、セシリアとラウラをなだめないといけないし——」

「見つけたあ!!」

一夏の言葉を遮って、突然出入り口に現れた生徒が大声を上げた。

「一夏くん発見!」

「かくほ〜!」

「つれてけつれてけー!」

その後ろからも次々とわいてきて、強引に一夏を引きずり出している。

「ちよつと、なんなんですかいったい!」

「黛副部長の命令よ!」

「黛さん……って、新聞部の?」

「詳しいことは部屋に来てちょうだい!」

「そんなわけで、一夏くん借りるわね」

「あー、どうぞどうぞ」

「鈴!」

「トミーのスクープがらみよきつと。今のカツコつけた感じを言って

やりなさい。一面見出し間違いなしよ」

「お、俺はそんなつもりでいったわけじゃあ……」

「一夏も負けずに張り合えっていうのよ！　もう、あたしも手伝ってあげる！」

新聞部員の一団に鈴も加わって、一夏はわっせわっせと運ばれていった。

お神輿となった一夏の苦情はかしまし団の掛け声に掻き消え、かつて誘拐された時よりも仰々しい連行に、一夏は自分の無力さを「あれ〜」と嘆くのであった。

「……………」

そしてもう一人、稽古場に残された箒もまた不満げな顔で佇んでいる。

その視線はどこへも向かず、ただ心の中に去来する姉への感情に揺れ動いていた。

◇

「フッフ……、ハハハ……い！　ハーツハツハツハ!!」

IS学園新聞部の部室にて、見事な三段笑いをあげる黛薫子のデスクはトミー関連の記事で埋め尽くされていた。

どれもLSの活躍に驚きと予想外を告げていたが、すでに彼の活躍を予期していた新聞部たちには、これから自分たちが巻き起こすであろうトミー特集の反響にワクワクとドキドキが噴出してしまっていた。

「イエーイ。トミー君、イエーイ」

「ああ、黛先輩、まるで南米にある国名の上でドヤ顔をキメているようなポーズに」

「そのふてぶてしさがクセになるお顔も完コピしちゃって！」

「素敵です、黛センパイー！」

薫子は沸き立つ部員に向けて左手を翳してテンションを抑えた。右手はメガネをクイッと上げてレンズを光らせる。

「フツ、まあ、落ち着きたまえ皆の衆。いま私のお姉ちゃんから催促の電話がかかってくるから」

「おおつ、薫渚子さんからですか!」

「雑誌インフィニット・ストライプスの副編集長直々に!」

「当然よ。なにせ私たちは昨今ブームの主人公についてガツチリ抑えているんだからね。朝の会議前にかけるって連絡があつただけど……キター!」

携帯端末から流れる、20世紀の名前を関した映画会社のファンファーレを止めて、

「ハロー★ 愛しのスイートお姉ちゃん。ご機嫌はいかがかしら?」

『お、おはよう薫子。そうね、ぶっちゃんやけイラツとしたかしら。それであなたのところのこのまえ君についてなんだけど』

「ねえ、どんな気持ち? 自分たちがボツ喰らわしたネタが大化けしちやってどんな気持ち?」

「ああつ、ケータイ片手にデンプシーロールムーブかましている副部長、素敵です!」

『ぐつ、く……。こんなこと、私たちの業界じゃ日常茶飯事なんだからね!』

薫子はチューチュートレインサークルに動きを変えて全身で感情を表現していた。

薫子たちIS学園新聞部は、かつてIS学園を襲撃してきた正体不明のゴーレムを一夏とトミーが見事に撃破した記事について、渚子にリークしたことがあつた。

その時はトミーがLS操縦者ということまで世間ウケしにくいことから、一夏のみ活躍として新聞部の話はお蔵入りすることになる。しかしジャーナリストの卵たちは、世間が切り捨てた真実を捨てるにはあまりにも若く純粋であり過ぎ、学園新聞のみではあるがトミーの活躍を載せ続けて抵抗していた。

渚子は冷笑じみた反応を妹の薫子に見せたが、事態は一転、トミーが世間でもてはやされることになって掌を返すこととなったわけである。

温め続けてきたリポートが一躍脚光を浴びる形となった薫子は、もはやキャラが変わってしまったほど狂喜乱舞してしまっていた。

「大丈夫よお姉ちゃん。だいじょーぶはーかせー。ジャーナリズムに失敗はつきものデース」

『ぐあつ……い……こ、こここまであなたのことを憎らしく恨めしくも求めてしまうのは今回が初めてよ薫子……!』

「ま、冗談とリフレッシュはここまでにするわ。で、どうするお姉ちゃん。求めているトミー君についての情報はウチらがいくらでも持っているわよ。まず誠意としてお代についてだけど」

『言い値で買うわ!』

「フツフー! 愛してるわお姉ちゃん! それともう一声、私たちI S学園新聞部の名前も」

『ソースとして明記することを約束するわ!』

「グウレイトオ! 商談成立よ! 口約束だからって後でとぼけないですよ」

『薫子のことだからどうせ録音しているんでしょ。良い情報と写真、お願いね』

「任されたわ!」

通話を終えた薫子は部員たちにキメ顔を送ると、一斉に喝采が巻き起こった。

ノリにノった絶好調の自己陶醉に抗うこともなく、トミーについて知っている情報は新聞部の情熱によって多分に脚色されて送られることになる。

連行した一夏に言わせたいセリフを吐かせるまで監禁し続けて作った友情ビデオの出来も上々で、世間では男性IS操縦者同士の深い絆が美談として広まることになった。一部の方々の間で妄想を膨らませる素材となったのは別の話。

善良な一般市民を守る個人情報保護法というものが、治外法権のIS学園に及んでいるかは、わからない。

Extra. どころとも知れないラボの中にて

「……フフツ」

「よかったね、くーちゃん」

「！ た、束様」

「さつきからずっと君のカレシ(予定)の記事漁っちゃってさ。なんかもー連戦連敗の暗黒面に落ちた野球チームの勝利に浮かれているファンみたいだったよ」

「そ、その例えですと、また悪い知らせがもたらされてしまいそうです」

「ぶっちゃけそうでしょ。マスコミってさ、無名の人を一躍ヒーローに祭り上げるのが上手いけど、それを最高のタイミングで地獄に叩き落すのも得意なんだからね」

「それは……！」

「だからさ、その崖から突き落とされたタイミングがベストなんだよ。窮地に陥ったカレシ(予定)をくーちゃんが颯爽と救い上げる。んーん、完璧なシナリオだね。くーちゃんのためなら私がしつかりメガホン取って、撮影と演出と編集と、ついでにそのあとのいやーんなシーンまでまるっと脚本書いてあげちゃうよ」

「せっかくのご厚意ですが……、彼は、きつと望みません」

「およ？ くーちゃんったら、相手のために我が身を引くオペラ座の怪人タイプ？ ダメだよそんな弱気じゃ。外見紳士ヅラした国じゃあ恋愛と戦争では手段を選ばないって本音漏らしちゃうくらいラヴはヘビーなんだからね」

「私にとって、彼は親戚の弟です。彼の活躍を見守れるだけで、十分なんです」

「あー、ウキエさんタイプ選んじやったかー。でもあのカツオ君だったらハナザワさん以外からも好意持たれそうなんだよね」

「その流れですと、ルクーゼンブルクの姫君はどなたになるのでしょうか」

「お姫様？ あれは予想外だったなー。ていうか本当に国家代表候補

生なのかなあ？ 私が丹精込めて作ったISのお披露目ができなくて不完全燃焼だよ。黒煙ボーボーでダイオキシン散布しまくりだね」「彼がそばにいた時点で仕掛けたことから、束様が複数のシナリオをお書きになられていたと拝察いたします」

「賢い娘は好きだよ。ま、下手つぴのまま動かされるより、ちゃんと訓練してから運用してもらえる方がいいかもね。でも、次のお披露目ははっきりやるつもりだよ」

「……妹様の、専用機ですか」

「そ☆ 箒ちゃんもいよいよ焦ってきたみたいなんだよね。いっくんはずんずん先にいっちゃうし、トミーくんも活躍しちゃうし、一人置いてけぼりにされたみたいにダウン入ってるから、今度こそ大丈夫だよ」

「篠ノ之神社で彼に鬱憤を語っていた時は、正直憤りを覚えました、同時に危ういほど純真であると感じました」

「箒ちゃんはまじめだからね。だから自分の力だけで道を切り開いてきたんだよ。剣道で全日本一になれたのもきつとそのためじゃないかな」

「しかしここで、ついに壁にぶち当たってしまったと」

「ふっふっふ、箒ちゃん、力が欲しいか？ 力が欲しいなら……くれてやる！ 私の愛のこもった【紅椿】をッ」

——どことも知れないラボの中にて、紅き機体を前にして

Extra. かいせつ つー!

前回の解説からしばらく進み、次の話からは新章になるところまできました。

そこで、これまでの「揺れ動く遠出」の章で新しく出てきたキャラやオリジナルについて解説したいと思います。

【人物】

『雪子おばさん』

原作通りで書いたつもりです。イメージはお節介焼きの気のいいおばちゃん。

『條ノ之束』

ついに登場しました、原作のジョーカー。

原作通りになっているつもりですが、その活躍と傍若無人っぷりはデウス・エクス・マキナっぽくて使いどころが難しいです。

『エム』

敵役として使いやすいエムちゃん。

原作通りに書いています。少し戦闘狂っぽいかも。

『女伯爵』
カウンテス

オリキヤラ。

英国貴族にして国際IS委員会常任委員という立場です。

実は前のEXTRAでもちよい見せしています。

英国関連でセシリアやチエルシー・エクシアと、IS関連で閣下など広いコネクションを持っています。

姉御肌のヘビースモーカーで、ISの腕前は一級と、頼りになる大人として描いています。

『賛助さん』

オリキヤラ。

ハゲとデブが特徴の元有力議員さんです。彼も前のEXTRAでペコペコしていました。

女尊男卑の風聞によって権威を失墜した男性の象徴のようなキャラで、それ故に僻みや妬みも尋常でないほど抱えています。

ちなみにオリキャラ、オトーニヨの父親でもあります。

『マダム』

オリキャラ。

とつてもふくよかなご婦人ザマス。

カウんテス

女伯爵と同じく国際IS委員の一人で、主に広報担当。前のEXT RAでもザマスザマスしてました。

徹底的な女尊男卑主義者で、時代を悪い意味で象徴する女性です。

『アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルク』

原作よりも早い時点での登場です。誕生日については明確でないため創作しました。

本文のキャラ説明では「傲岸不遜にして生意気、気の強さは鈴以上」というすごい性格ですが、大上段に構える前にトミーと触れ合うことで少し軟化するようになりました。

アリス、という呼び名から不思議の国を連想してあなりました。

しかしトミーといいアリスといい、この世界のキャラは一文字変え呼びが多いな……。

『アリーシャ・ジヨゼスターフ』

原作通りの粹でいなせなお姉さんなのサ。

この癖のある言葉遣いが難しい……。

イタリア代表という立場なので、オシャレな恰好をするだろうと勝手に思っています。イタリア人女性ってセクシーなファッションが多いんですよ。

『ダリル・ケイシー、イーリス・コーリング』

アニメには出てないかな？ 二人とも原作キャラです。アメリカ出身ということでもまとめて登場。

ダリルの原作説明ではやけに胸が強調されているのが謎。IS学園の3年生です。

イーリスはアメリカ軍人でIS国家代表。『シルバリオ・ゴスベル銀の福音』のパイ

ロットの友人という立ち位置です。

【物、組織など】

『ルクーゼンブルク公国』

独断と偏見でチエコをモデルに考えています。

東欧に位置すること、リンブルク＝ルクセンブルクというお家がプラハを発展させたという名前のつながりから、その領地であるボヘミアを連想したからです。

ちなみにチエコってヨーロッパでもトップクラスで治安が良くて、しかもヨーロッパらしい建物を現代にも多く残しているらしいです。一度行ってみたいなあ。

『ブロンズ・ガスト』

エクシアの専用機です。

トンボの翅のようなスラスタが特徴的で、追加でウエディングドレスのスカートのような追加加速装備を展開できます。

けれど最大の特徴は、スラスタが機械補助付き有線制御であるIC兵器、通称インコムとして運用できること。

英国面でビットがあるならインコムもいいよね。これしか武装が無いのもご愛嬌。

ちなみに『ブロンズ・ガスト』、訳すと銅色の疾風という呼び名は、トミーの鉛色の理想『グレイ・アイディール』と対になっています。

今回は以上です！ 抜けがありましたら追って修正いたします。

世界を変えたチカラ

46話 入学する若者はいつか卒業する大人にならねばならない

日本最大の空港ロビーに人だかりができていた。

野次馬や報道陣の中を進むのは、ルクーゼンブルク公国の専用機から降り立った話題の中心人物たちである。

第七王女、アイリス・トワイライト・ルクーゼンブルク。

二代目世界最強にしてイタリアIS国家代表、アリーシャ・ジョセブリュンヒルデスターフ。

リミテッド・ストラトス操縦者、このまえとみや一十三八。

護衛としてお付きの騎士とメイドを侍らせて現れた三人が現れるやいなや、どよめく喝采と無数のフラッシュ、そしてインタビューが飛び交った。

アイリスはさすがに一国の王女だけあって対応がこなれており、有名人のアリーシャも記者受けしそうなセリフとポーズを振りまいている。

一方、二人の後ろに付き従うトミーは、ただ前を向いていた。表情は毅然と引き締まり、口はきつく閉ざされている。乱れ飛ぶ質問にも一切応じず、まるで護衛の一人かと思えるほどゆるぎない様子で進んでいく。

「すみません、みなさんの写真を一つよろしいでしょうか！」

どこかの女性記者の呼び掛けに、アイリスとアリーシャは歩みを止めずに写真映えするポーズを向けた。アイリスに促されたトミーも素直に習い、ふわりと口元を緩める。

お転婆姫の爛漫な笑顔と、大人な貴婦人のセクシーなはにかみ、そして凛々しかった少年の見せたあどけない表情。

黛という名前のリポーターが撮った一枚は各メディアのトップを飾ることになり、撮影者は後日個人的に妹に向けて高笑いの電話を送ることになるのだった。



「アリーシャさん、ご助言ありがとうございます」

空港からIS学園へ向かうリムジンの車内で、トミーは広い椅子にだらりと寝そべるアリーシャに向けて頭を下げた。

前回、メディアの取材に行くわした時にしどろもどろで何も答えられなかったことを反省していたトミーは、こなれているであろうアリーシャにアドバイスを求めていた。

音に聞こえる世界最強への質問としてはなんとも幼稚なものだったが、意外にもアリーシャはすんなり応じていた。

「かしまる必要なんてないのサ。お呼びでないマスコミの対応なんて、マジメな顔して黙ってれば適当に脚色してくれるもんなのサ」
「もったいないお言葉です。アリーシャさんに教えて頂けなければ、またこの前のように笑われて、みなさんにもご迷惑をおかけしていたかもしれません」

「固いナア、アーリイでいって言ってるじゃないのサ」

「そんな、年長者に対してあだ名は畏れ多いですよ」

「ふーん？ ほおお、君は女性を年齢で区別するつもりなのかな？」

「そ、そういう意味で言ったわけではなくてですね」

「アイリス様にはアイリスと呼んでいるじゃあないのサ。一国の王女様へはあだ名で呼べるのに、どうして私はダメなのかナア？」

「ふふん、そんなものは当然じゃ」

アイリスことアリスは、すまし顔で小さな胸を張った。

「わらわとトミーとの間には深い絆が結ばれておるのじゃからな。アリーシャ殿とは出会ってまだ日が浅いゆえ、致し方あるまいの」

「初めて会った時は王女殿下とは露知らず、お名前も偽られていただけして……」

トミーの訂正にアリスはムツ、とした顔を向ける。

「トミーー！ お主最近よそよそしいではないか！ 付き合い始めのころの情熱はどこへいってしまったのじゃー！」

「語弊、というより捏造じみたご発言は危ういと懸念いたします、殿下」

「トミ〜〜〜!!」

「……わかったよ、アリス」

「——キサマ」

トミーはアリスの隣から怖い顔を向ける女騎士の眼光に気圧されつつも、我がまま姫の調子に合わせることにした。

「勘弁願います……。アリスも、公の場では無理だからね。誰がどんな受け取り方をするかわからないんだから」

「心配性じゃのう。わらわ達の仲はそうやすやすと傷つくほど軟やわではあるまい」

「なんだか怖いほど信頼してくれるのはうれしけど、アリスにはお立場があるんだからね」

「懸念無用じゃ。なにしろ、これからはトミーと同じ学生という身分になるのじゃからな」

アリスは歯を見せて笑った。

ここ数日のアリスはかつてないほどご機嫌だなど従者たちは思っている。それほどIS学園に入学が決まったのが嬉しかったのか。そのきつかけとなった少年との出会いのせいか。

ルクーゼンブルクから日本に来るまでの間、アリスはトミーへ質問攻めにしていった。学生生活とはどんなものか、クラスメイトとはどんな話をするのかなど、興味津々で根掘り葉掘り聞いていた。トミーが口にする名前に、一夏はともかく女性ばかりあがるたびに不満げな顔をしていたが。

「アリス様、これは外遊ではなく留学です。学問を修めるために行くのですぞ。浮ついた気分は謹んで下さい」

王女専属の騎士、ジブリル・エミュレールが凜とした口調でいさめた。

しかしアリスは動じない。

「ジブリルもジブリルじゃ。まさかIS学園に通っていたなどと今まで一言も申さなかったではないか」

「お話しする必要が無かったからです」
「今はあるぞ」

アリスは探していたおもちゃを見つけたような顔付きでジブリルに詰め寄る。

「ジブリルよ、お主は学園でどのような交友を持っていたのじゃ。主に異性関係で」

「いつ、異性関係ですか？」

「うむ。まさかとは思うが、異性と付き合ったことが無い訳ではあるまいの？」

「心外ですアイリス様！ この近衛騎士団長ジブリル、男などそれはもう毎日とつかえひつかえしておりましたよー！」

えっ、という意外そうな表情二つと、フーフーン？ というニヤニヤ顔が一つ咲いた。

「ま、まことかジブリルよ!? すまぬ、わらわとしたことがお主を見くびっておったわ」

「ジブリルさん、英雄色を好むとは言いますが、本当に女傑だったんですね……」

「間合いを開けるなトミー！ こっちも意識するだろうが！ アイリス様もそんな詫びを入れることなどありません！」

「ジブリルよ教えてくれ。わらわとトミーが次の段階に進むためにはどうすればよいのじゃ。やはり同室で生活することが肝要かと思うが」

「あー、えー、っと、僕はもう専用の一人部屋があるからアリスと一緒には無理じゃないかなっ」

「アイリス王女、学校でイイ感じになる場所はイロイロとあるものサ。例えば生徒が帰った後の体育館倉庫とか」

「アリーシャさん、煽らないでくださいっ」

「聞こえないナア。あと定番なのは放課後の誰もいない教室なんぞ」

「アリーイっ!!」

「しかたがない、黙るのサ」

HHHHHA! とラテン系らしい陽気な調子でアリーシャこと

アーリイは笑った。

零れ話に、アリスはなるほどうなずき、ジブリルは剣を抜きかねない勢いでトミーを睨み、トミーは手で顔を覆いながら椅子にもたれた。

賑わいを載せた車は初夏の爽やかな空の元、一路学園へと向かうのだった。



王女様の入学にIS学園は大騒動、とはならなかった。

シャルロットとラウラの転校と同じように、配属される1年1組の教室にて挨拶があっただけの一般的なものだった。

それというのも、IS学園の在校生は世間一般と比べ特殊な身分にあるからだ。セシリアのような貴族、ラウラのような軍属はもとより、シャルロットのような大企業の令嬢、箒・一夏のような有名人のきょうだい等々。

鈴のような特徴のない普通の一般人は珍しい部類に入る。

倍率一万倍と呼ばれるIS学園の狭き門をこじ開けられる逸材は、逸材として成長できるだけの素養と、何よりも頭角が現れるための環境を整えられる基盤が必要という証左といえた。その基盤を持つ者として、高貴な者が入学することも珍しい話では無いのだ。

「とはいえ、お前まで一緒にくるとは思わなかったぞ、アーリイ」

IS学園闘技場のピット内にて、千冬は意外な来客にコーヒーを勧めながら呆れるように言った。

アーリイはスクリーンに映る闘技場内の試合を見ながら、くすぐったそうな表情で受け取る。

「気兼ねなくあだ名で呼んでくれるのはお前くらいなのサ、千冬」

「そりゃあそうさ。偉くなる代償にカジュアルさなどは失ってしまうものだからな」

「息苦しい限りなのサ。自分で演出でもしないとガチガチでやってられないのサ」

「同情するよ」

千冬はカップを一口すすする。アリーシャも口元に運んだが、屋内のある個所に視線を止めると、躊躇いがちにソーサーに置いた。

「どうした？」

千冬がたずねる。応えるアリーシャの目は鋭い。

「千冬、コレ、何か盛っていない力？」

「心外だな。私がお前に手を掛けるとでも……」

と言いかけて、千冬も表情を引き締めた。

「百面相でもいるというのか」

「いないと判断するのはこのステイックシユガーより甘々なのサ。IS学園が襲撃されたことは私の耳にも入っているゾ。それも二度」

「私の危機意識が足りないと言っているのか」

「その壁、直したばかりだネエ。敵の侵入をこんな奥まで許すなんて、世界最強の名が泣くというものサ」

「まったく……、現役には適わないな」

千冬の弱音にアリーシャは不機嫌な顔を向ける。

「分かっているのか？ この学園の生徒たちの価値を。アイリス王女と第四世代ISなんてスパイス程度に考えてもらわないと困るのサ」
「分かっているつもりだが、正直現状の教師陣と私では手のまわらない箇所がある。私にあらゆる権限を与えてくれるのは学園側の不安の裏返しなのだろう。私は万能ではないというのに」

「お前は目立ち過ぎたのサ。そのせいで世界最強という称号はあまりにも神格化されすぎタ。優秀な先達を持った後輩の気持ちかわかるか？」

「……今言われるまで考えたこともなかったよ」

千冬はぐいとカップを煽った。今度はアリーシャも一緒に傾ける。

「そういうわけでサ、私を学園に受け入れてくれる気はない力？」

「お前を？ おいおい、ありがたい話だがお前ほどの者を留めるわけにもいかないだろう。追加戦力ならジブリルが来ている。あいつはIS学園の卒業生であり、IS世界大会でも部門優勝者に列せられた近衛騎士団長だぞ」

「実力は知っているサ。が、あいにくと性格がまとも過ぎるんだナア」
「守衛向きではないというのか」

「味方を疑いもなく信じちゃうタイプなのサ。私が襲撃側なら、内部にスパイでも送り込んで飲み物に薬を盛っているサネ」

「それは、少々期待が外れるな」

「I S委員会としても学園の安全確保は優先事項なのサ。なにせ世界で唯一のI S関連教育機関だものネエ。でだ。私が望み、千冬が受け入れると言えば、委員会も無下には断らないだろうサ」

「ふむ」

千冬は腕を組むと椅子に体重をもたれかけた。

アリーシャの提案は悪い話ではない。I S学園は正体不明の無人ファントム・タスクI Sや亡国機業の襲撃、現役生徒の出奔といった不祥事が相次いでいる。セキュリティ強化のテコ入れとして、現役最強であるアリーシャが所属すれば大いに安心感が上がるだろう。

ただでさえエリート揃いの生徒を匿っているのだ。保険は多いに越したことはない。

だが、一つ引つかかることがあった。

「お前、何を企んでいる」

「何を、つてなにサ」

「私はお前の性格を知っているつもりだ。何事にも執着しない飄々としたお前が、こんなに殊勝な心がけを持ち掛けてくるのは違和感があるぞ」

「おお、ちよつと身近でありすぎたカナ？」

「しよつちゆう突つかかって来ていたからな、嫌でも覚えてしまった。で、どうなんだ？」

アリーシャは猫のように笑った。

「まあ、面白そうだなってものあるんだけどサ」

視線の先は再びモニター。そこではトミーとセシリアとラウラがI Sで戦っている。

というより、私刑リンチしている。飛べないI Sを飛べるI Sが寄ってたかって痛ぶっている構図で。

『ウフフフ、トミーさんと久しぶりに踊れるなんてとっても嬉しいですわ』

『トミヤよ、私は省みよう。義姉としてもっとお前をもっと鍛えておけばよかったと。そう、これは愛の修行なのだ!』

『学園に帰って早々なんなのさ、もー!』

トミーの抗議は銃弾の雨に遮られた。

『トミー、しっかりせぬか! わらわを助けてくれた時はもっと力強く逞しかったではないか!』

観客席からアリスの声援が飛ぶたびに二人の攻撃は勢いを増す。

『あらあら、王女様とこんなに仲良くなってい出したなんて、トミーさんも隅に置けませんわねえ!』

『ブルー・テイアーズ』の強襲用高機動パッケージがうなりを上げて縦横無尽に飛び回りつつ銃撃の雨を降らせ、

『もっと逞しかったとはどういうことだ! 義姉に手加減など無用だぞ! そんなことでは生き残れないぞトミヤ!』

『シユヴァルツェア・レーゲン』の八十口径連装電磁^レ投射^ル加農^カ砲^ンが重爆の嵐を巻き起こす。

『これ新兵装の試運転をしたいだけじゃないのー!』

トミーはもつともな不満を叫ぶが、セシリアとラウラの蛮行の理由がそれだけでは無いことまでは思い至らなかった。

一夏であつてもわからなかっただろう。むしろ三重に輪をかけて。そんな若者たちの青春の1ページを、アリーシャは眩しそうに、どこか懐かしそうな面持ちで見つめる。

「なあ、千冬。お前歳は幾つになるのサ」

「なんだいきなり。二十四だが?」

「私は二十八だ」

アリーシャは椅子の背もたれに全身を預けて天を仰いだ。

「同年代の操縦者は、もうほとんどみんな引退してしまったのサ。I Sの教官になったり、夫子を持ったたり、企業に勤めたりサ」

「……」

「アスリートに加齢の引退は付き物サ。もうみんな自分以外の誰かの

ために情熱と時間を注いでいる。あのLSの操縦者なんて偉いもの
「サ」

「にのまえはまだまだ未熟だ」

「未熟者ならもつと自分の好きなように遊べばいいのサ。なのに、ア
イリス王女のために命を張った。トミー君の身体のこととは私の耳に
も届いているのサ」

「不器用なだけだ。あまり褒めるな。凶に乗らないだけ健気に見え
る」

「あの子と出合ってから、これまで見ないでいたことに向き合うよう
になつてサ」

むくり、とアリーシャは顔だけで千冬を向いた。いつもの飄々とし
た調子はかけらも無かった

「千冬、私と戦って欲しいのサ」

「……あいにく今の私に【暮桜】は無いぞ」

「量産機同士で構わないのサ」

「それではお前、その片目片腕では」

「構わないのサ、決着をつけられるなら。結果がどうあれ、私はもうお
前と戦わないことには先に進めないのサ。それに、意地だけでお前に
張り合い続けてきたのにも、もう疲れたのサ」

現役の世界最強は力なく笑った。

事故でこのような身体に成り果てても捨てきれなかった妄執が、亡
霊のように背中中のしかかっていた。その重しがくだらないものに
感じたのは、敵視し続けた【暮桜】がそれまでと違ったものに見えた
からだ。

【暮桜】はアリーシャにとって最強無比の象徴だった。自分がアス
リートの中のトップに登りつめるうえで乗り越えねばならない壁だった。

その【暮桜】が、目の前で散った。トミーがアリスを助けたときに
使ったVTシステムを解除したときだ。燃え尽きた灰のようにト
ミーのLSから溢れて風に舞った。

アリーシャは『最強』の辿った一つの結末を見てしまったのだ。

もしアリーシャの念願叶って【暮桜】を討ち果たしたら、自身の愛

機もあなるのだろう。人の命を啜る化物に。

それが、自分の追い求めた到達点の、その先にあるものだと思がっていたとき、アリーシャのIS操縦者としての人生に終着点が見えたのだ。

ゴールまでの最後のハードルは、宿命のライバルとの決着だけになってしまった。それが済めば、アリーシャはようやく自分のためだけの人生に終止符を打ち、誰かのための人生に階段を上がることにきる。

先に引退していった仲間たちのように。

「……一回だけだぞ」

千冬はそっけなく言った。努めて、そういった態度を取ったように声音が抑えられていた。

「ああ、恨みっこ無しなのサ」

アリーシャは頷いた。

少女の季節を遠く過ぎ去った女性は、卒業式に挑むような気持ちでスクッと席を立つのだった。

47話 安らぎと厳しさと謀略はホームグラウンドだからこそ

「疲れたあ……」

トミーはカフェテリアのテーブルに大の字の上半分になって突っ伏した。

普段なら人目の多い学園内の施設だが、今は夕食後ということもあって比較的閑散としている。

「散々だったな、トミー」

一夏は友人のくたびれた肩を叩きながら労いをいれた。うめき声の返事に苦笑する。

ここまでへトヘトなトミーの姿を見るのは始めてかもしれない。一昨日はまだ談笑をする余裕があったのだが、昨日は顔色も暗く早めに別れ、本日はこのありさま。

ここ数日のトミーの忙しなさに同情を禁じえなかった。

「ちよつと、散々だ、なんて言い方は無いんじゃない一夏」

トミーの多忙な理由を知る鈴は唇を尖らせて肘で小突いた。

一夏は首をかしげる。事情は同じく知っているが、受け取り方がまるで違っていた。

「なんでだよ。トミーのやつ帰ってきてこのかた、セシリアとラウラに振り回されればなしだったんだぜ？ 今日はどうだったんだ」

「ラウラ……。今日は学校休みだったから、朝からトレーニングに付き合っつて、ランチに行っつて、買い物に付き合っつて、荷物持ちしながら帰っつてきた……」

「ほら見ろ。こつ酷く翻弄されまくっているじゃないか」

「あーっ、もーいーわよ一夏は。トミーはしっかり分かつてんの？」

「ちゃんとエスコートしてあげたんでしょうね」

「……うー……」

「情けないわねえっ、あんたがちゃんとリードしてあげなくてどうすんのよー！」

「なんで連れまわされた方がリードしなきゃならないんだよ」

「どうせ一夏には分からないんだから口挟まないでよね」

「なんかあしらひどくないか!？」

「あんたにデリカシーがあつたら私はこんなに苦労してないっての
!」

「俺が鈴にどんな苦労をかけたつていうんだよ!」

「現在進行形でかけてんのよ!」

「だったらちゃんと教えてくれよ! 幼馴染の頼みくらいなんでも聞
いてやるつもりだぜ?」

「教えて分かるような……、え? いま、なんて言った?」

頭の上でポンポン飛び交う夫婦漫才に、トミーは芋虫みたいに這い
出してテーブルから離れていった。

うるさい、と注意するのも気が引けるし面倒だし、疲労困憊過ぎて
他人を気遣う余裕もない。

(何か冷たいものが飲みたい……)

よたよたとカウンターまで向かうトミーの頬に、いきなり冷えた何
かが押し付けられた。

うひゃあつ、と仰け反つて隣を見ると、

「あつはっは。うひゃあ、だつて」

「楯無さん……」

「疲れちゃうと視野が狭くなるつてホントなのね。さつきから声を掛
けていたのだけれど?」

「それは、すみませんでした」

「ちよつと付き合つてちょうだい。はい、これお駄賃代わり」

「ソーダ一本で釣り合うものにして下さいよ?」

「生徒会室でちよつとお話しするだけよ」

「……本ちゃん、もとい本音の残業は手伝いませんからね」

「それは来週からでかまわないわ」

あ、生徒会の雑務はお願いされるんだ、とまた仕事が増えたみたい
で気が重くなった。

布仏本音が、にははく、と間延びした笑みで待ち受けている姿が脳

裏を過る。^{よぎ}

(最近のみんな僕に対して遠慮なさすぎじゃないかなあ……)

トミーは深いため息を着いた。

IS学園に帰ってきてから、トミーは絶賛フル稼働状態である。

入学したてのアリスの案内役件お世話係を強制的に任されたり、アリスと会話する度にラウラとセシリアがニコニコと近づいて来て騒動を起こしたり、ジブリルから小言を言われたり、なぜか先輩のダリル・ケイシーとフォルテ・サファイアから冷やかしを受けたり。

朝のジョギングでは走り仲間の相川清香が発破をかけてくるし、夜自分の部屋に戻った後も、会社に残ったエクシアへ通話しなければならなかったりと、旅行前に比べてバタバタと追い立てられるような毎日を送っている。

気心の知れた唯一のオアシスとでもいうべきシャルロットへ助けを求めようにも、

「無理しないで、と言いたいけれど、自業自得でもあるからね」

と正面からシャットダウンを受けてガックシと両肩を落として沈んでしまった。

シャルロットには、一夏との仲はどうなったのかといった尋ねたいこともあったのだが、すっかり聞きそびれてしまっている。

ともあれ、トミーは肉体的にも精神的にも散々に参っている状態だった。

「その来客ソファア、好きに使いなさい。ゴロンと横になっても構わないから」

誰もいない生徒会室に通されて、トミーはご厚意ありがたくソファアにダイブした。このまますぐに寝入ってしまいたいようなほど上等なクツシヨンが心地よい。

「……それで、僕にどんな用事なんです」

ゴロゴロしながら目も開けずに聞く。

「トミー君が人の顔も見ないで尋ねるなんて、よっぼどね」

「よっぼどですとも……。みんな僕を便利屋みたいに思っているんじゃないかって、正直くさくさしちゃいますよ」

「ささくれ立つちやつてまあ。明日は一日休みなさい。何なら私が宿直とのおいをしてあげるわ。トミー君の部屋に押しかけてね」

「そうもいかないでしょう。だって明日からは——」

「臨海学校だけど、トミー君とアイリスちゃんは行けないわよ」

トミーは上半身を起こすと、キョトンとした目で楯無を見つめた。

「トミー君は休学していたし、アイリスちゃんは途中からだもの。授業の後れを取り戻さないといけないでしょ」

楯無は扇で口元を隠しながらくすくすと笑った。扇には『補講』と書かれている。

「だからみんな、トミー君と一緒に時間をもちたかったのよ。あなたったら旅行に行く前、ちよつとダウナー系になってたじゃない？ セシリアちゃんもラウラちゃんも、あなたの友だちはみんな心配していたの。そして無事に帰ってきてくれて嬉しかったから、余計にトミー君に接したかったのよ」

トミーはソファアーに頭をうずめると、むく、と小さくうなった。足が力なくもばたつかせる。

なんだかトレーナーにこつてり絞られた子犬が頭を撫でられた時みたいだ、と楯無は口をにやつかせた。

「……それじゃあ授業はアリスと、もとい、アイリス様と特別コースを受けることになるんですか？」

トミーがのそりと顔をもたげる。目元がほんのり朱くなっていた。かわいいやつめ、と相好を崩した口元を扇で隠しながら楯無は応える。

「ジブリルさんも一緒よ。復習がてら同じ生徒という立場に立って身近に接したいそうよ。ちなみに講師はなんとアリーシャ先生」

「アーリーが!？」

「ビュ〜♪ 現役最ブリュンヒルデ強をあだ名で呼ぶなんて、やるじゃない」

「いろいろ躰けられたもので……」

「ますます子犬みたいねアナタ。私も顔を出すつもりよ。ついでにダリルとフォルテも来るみたい」

「ダリルさんと、フォルテさんも？ 僕はお二人に接点なかったと思

いますけど」

「ダリルはアイリス王女のお誕生日会にも来ていたのよ。あの時の事件でトミー君に興味を持ったらしくてね。フォルテはダリルの付き添い。あの二人仲がいいから」

「はあ」

「ま、ともかく明日はお休みになさいな。どうせ臨海学校も一日目はバケーション代わりなんだから」

「ありがとうございます。けど、宿直は結構ですからね」

「あら、私が側女そばめじゃご不満かしら」

「寝首を搔かれそう、と言ったら怒りますか？」

「寝込みを襲われそう、と言って欲しかったわね。私ったらそんなに信用ないの〜？」

「セクハラ被害にあってますので。これ見よがしにスカートを穿いたまま足を組まないでください。不埒です」

「あん。トミー君ったらガードかたーい」

トミーは缶ジュースを開けて一気飲みすると、テーブルに叩きつけるように置いた。げっぷを一つ吐いて、ごちそうさまでした、と頭を下げて少しだけ足取り軽く生徒会室を出て行った。

その後ろ姿を楯無は楽しそうに見つめる。

（いつの間にかこんなに素を晒してくれるようになったこと、気が付いているのかしら）

少なくとも自分のアプローチはガードの奥に響いていそうだと、『着実』と書かれた扇を仰ぐのだった。



同じ時間、IS学園のカフェテリアの片隅で、膝を突き合わせている影があった。

大人の女性と女子生徒という構図からお悩み相談かと察せられるが、打ち明けているのは年長の方。

ジブリルが眉根をひそめて前屈みに腕を組み、シャルロットに教え

を乞うているところであった。

「えっと、どうして僕なんでしょうか？」

シャルロットはおごつてもらったミルクティーを啜りながら尋ねた。

「アイリス様の同級生の方に伺ったところ、君が適任だと教えてもらったのだ」

ジブリルはミルクと砂糖をたっぷり入れたコーヒーをかき混ぜながら応える。

「でも、ジブリルさんは山田先生と旧知の中みたいでしたけど」

「それはそうなのだが、真耶に聞くのは、その後でからかわれるのが目に見えていてな」

あ、そういう仲なんだ、とシャルロットは頭のメモ帳に記入した。後で何かに使えそうだな。

しかし、

「僕を指名したのって誰なんですか？ 正直、そういった話題に強いという自覚はないのですが」

「いや、さすがに名前はな。仮にA氏ということにしてもらおう」

「なるほど、相川さんでしたか」

「なっ、なぜわかったのだ!? ……あ」

ちよろい。

というかホントに相川さんだったんだ、と適当に鎌をかけたのがいきなり当たってシャルロットは目線を横にした。

シャルロットと相川は学年別トーナメントの時から交流が深い。一緒に戦い抜いて優勝を果たしたのだから結びつきはひとしおだった。

その訓練の時から、相川との話にはよくコイバナが咲く。あれこれと異性に対するアプローチの仕方など、さりげなくも意図的に会話の節々に散りばめられていた。

シャルロットも意中の男性がおり、そういった話題もまんざらではないのだが、相川から受ける視線は友人に向けられるものというより先輩に向けるような尊敬の念が感じられた。

自分はそんなに恋愛上手に見られているのだろうか？ とシャルロットは我ながら首をかしげる。

「せっかくですけど、大したアドバイスはできないと思いますよ？」

「ま、まあとりあえず聞くだけ聞いてくれっ。実はな……」

とジブリルが語りだす。

内容は、大人の女性が口にするにはあまりにも初々しい恋のお悩みだった。

一口に言えば、意中の相手と良い仲になるにはどうすればいいか。

「そんなこと、ですか？」

「そ、そんなことと言い切れるのか!？」

「まあ、基本的な話ですからね」

「では教えてくれ！ どうすればアイリス様は、ああいや、ええと、恋する女の子は次のステップに行けるのだ!？」

正直な人だなあ、とシャルロットは気持ちを和ませながら自分なりの回答を口にする。

「そうですね、簡単に言えば……、使えるオンナになつてください」

「——は？」

「あ、すみません。言い方が悪かったですね。ちゃんと言い直しますと……、男にとって利用価値のある女性になることです」

相談する相手を間違えたか？ とジブリルは少し身を引いた。

それともパリジェンヌの恋愛模様は複雑怪奇なのだろうか、とマジメな頭が空回る。

「すまない、それはいったいどういう意味なのだろう。例えをいれて教えてくれないか」

「かまいませんよ。例えばジブリルさんが男性であったとして料理ができなかったとしますね」

「ふむ」

「その場合、料理が上手な相手とできない相手。どちらがいいですか？」

「……料理ができる相手だな」

「そうですね。それじゃあ、ジブリルさんのために優しく尽くして

くれる相手とそっけない相手、どちらがいいですか？」

「優しく尽くしてくれる相手。……って、おい、いいのかこういうので？」

「いいんですよ。もし意中の男性が違う人を好きになっても、男性にとって都合のよい女であれば繋ぎ止めておくことができるじゃないですか」

ニコ、っと可愛らしくどぎついことを口にするシャルロットに、ジブリルは羊の皮を被った飢狼を連想した。

「い、いや、しかしだな。こう、好きな気持ちをハッキリ伝えるとか、さりげなくアピールをするとか、いろいろあるとおもうのだが」

「ジブリルさん」

「ハイ」

「勝てる見込みのない戦いはするものではないですよ？」

ニコ。

と微笑む愛らしい少女からどうしてとてつもないオーラを感じるのだろう、とジブリルは噴き出る汗をぬぐった。

「勝つためには勝利の可能性を着実に積むことです。もしくは、負けない体制を整えること。相手にとって都合のよいオンナになれば、少なくとも負けることはありません」

「え、ええ、つと。もし、体制を整えている間に他の女性に搔つ攫われてしまった場合は」

「いやだなあ、ジブリルさん」

ニコニコ。

というシャルロットの笑顔が放つ圧力がものすごい。

そのとき、ハツとジブリルはあることに気が付いてしまった。シャルロットの後ろ、カフェテリア反対奥の席で歓談している織斑一夏と凰鈴音の姿を。

「こちらが不敗の状態になれば、あとは相手の取り巻きを少しずつ引き剥がせばいいじゃあないですか」

ネエ……。

と横に動く視線がハッキリと後ろの様子に気が付いていることを

理解したジブリルは滝のような汗を流していた。

可能であれば一刻も早く逃げ出したい。

「ジブリルさん」

「ハいい!？」

「せっかくですから、恋のお話、もっとうじやないですか。そう、守るだけじゃなくて、攻める方法も、ね」

ニコオ……。

と妖しい笑みを浮かべる女性に、ジブリルは総毛だつて首肯した。

(フランス恐るべし……!)

ジブリルは目の前の少女にだけは決して敵にすまいと心底から誓うのであった。

48話 部活動で先輩が後輩に舐めてかかるのを見ると先生はプツンしそうになるんです

それは『イージス』といった。

あらゆる物理攻撃を防ぐ鉄壁の守りが、見たものに神話の女神が備う防具を連想させるほど、優秀すぎるからだった。

織りなすのは、アメリカ代表候補生ダリル・ケイシーの操る「ヘル・ハウンド・ver2.5」の炎と、ギリシャ代表候補生フォルテ・サファイアが駆る「コールド・ブラッド」の氷。

相反する力が共食いをすることなく寄り添い、二人組が一つの生き物のように機能する類まれな連携術だ。

機体の開発当初から構想されていたわけではない。ダリルとフォルテだから、密接な関係の二人だから生み出すことができた秘術のよくな技なのだ。

その名はIS学園のみならず各関係団体にまで轟かせ、ISの生んだ可能性の一つとして論文にもまとめられている。

ダリルとフォルテの名前は随所に挙がることとなり、二人は大いに自信を膨らませて、互いの存在をより愛しく、誇らしく想い続けるようになっていった。

(その、うちらが、なんてザマっすか！)

地面に押しつぶされながら、フォルテは歯を食いしばる。ダリルに編んでもらった三つ編みが乱れるのを何よりも気にしながら地上へばりつくように首をもたげた。

上目遣いに睨む先には、七枚の翼をはためかせ、ユニコーンの頭をかたどたような杖をかざすアイリスの「セブンス・プリンセス」。

名うての『イージス』を地に縛り付けたのは彼女の『重力爆撃』グラビトロン・クラスターのなせる力だった。

「もう勝敗は決しました。降参してください」

その前に姫君を守護する怪物のように立ちふさがる、巨大な四脚に

双銃・剛腕を駆使用するトミーの「グレイ・アイデール」。

「セブンス・プリンセス」によって大地に引きずり落とされてからはLSの本領である地上戦に持ち込まれ、せつかくの連携も『イージス』もズタズタに掻き乱されてしまった。空を飛べないISなど足枷をはめられたようなもので、飛べずともISに立ち向かうため限界まで研ぎ澄まされたLSの敵ではなかった。

後は各個撃破するまでもなく、ひとまとめにしたところを再び重力の網に絡み取られて地面にへばり付けられてしまったのだ。

「ちつくしよおおおおお!!」

ダリルが獣のような咆哮を上げて倒れ伏した体を持ち上げる。両肩の犬頭を模したアーマーからは炎がうなり声をあげるように噴き出しダークグレーの装甲を色めかせた。

軋みを上げる全身のPICが悲鳴じみた絶叫を上げる。無理矢理に立ち上がったその腕には、双刃剣を両手でしかと握り締めていた。エスコート・ブラック『黒への導き』と名付けられた剣は、その名の通り「ヘル・ハウンド」の炎によって敵を真っ黒に焼き尽くすことを宣誓しているかのような禍々しさを醸し出している。

ダリルは気合と吐くと共に全身に炎をまとい、猟犬のように突貫する。

「無茶っスー!」

「知ってらあっ!」

フォルトテの制止を振り切ってダリルは駆ける。

無茶で結構。

それで愛する者が少しでも永らえられれば十二分に意味はある。

それに、要はあのお姫様をビビらせればいいのだ。グラビトン・クラスター『重力爆撃』の戒めを解き、再び空へ舞い戻れば勝機はまだ十分にある。二度も同じ目を喰らいはしない。

真面目すまして降伏勧告なんぞを行う一年坊主のデカブツなんぞに、

「止めて見せろやああああ!」

気炎万丈、渾身を力をエスコート・ブラック『黒への導き』に託してぶちかました。

「——言ったはずです」

トミーは冷淡に言い放ち、上体を横に反らした。その後ろから飛び掛かるのは、巨大な鋏。

「ぐがあつ!？」

『尻尾鋏』が待ち構えていたようにダリルの胴体へ喰らいついた。

「僕は地上戦では誰にも負けないと」

挟み上げるダリルの首元に『剣 銃』を突きつける。さらに右の『非固定浮遊武装』からは『五連装電磁投射砲』が照準を倒れ伏すフォルテへと定めた。

今やトミーの「グレイ・アイデイル」は『大型四脚』と『非固定浮遊武装』、そして『剣 銃』と『重 銃』すべての武装を運用していた。『非固定浮遊武装』へのデータ収集もひと段落し、ようやく完全機動にこぎつけることができたのだ。

ダリルは懸命に身をよじって抵抗を見せるが、左の『非固定浮遊武装』が驚掴みにするともはやどうにもできなくなった。完全なチエツクメイト。

にもかかわらず、ガンと口をつぐんで負けを認めようとしないう上級生二人に、

「そこまで、としておこうじゃないのサ」

監督役のアリーシャ・ジョセスターフの声が、スピーカー越しにISS学園第三闘技場に響き渡った。

「みんなマジになるのはいいけど、これは補講の一環だっていうことを忘れないでほしいのサ」

弾んだ声には、若いなあ、という言葉が言外に含まれていた。「これより二十分の休憩とする。その後ピットに集まりな」

有無を言わせぬ声音に、トミー達はそれぞれのISSを解除した。

ダリルとフォルテ、上級生コンビが向ける視線は刺々しい。が、口はきつく噛みしめられて悔しさをにじませている。

「勝った……のか?」

アイリスが肩で息をしながら確認するようにトミーに問いかける。「そうだよ。よく、頑張ったね」

トミーの言葉に、アイリスはこてん、と尻もちをついた。緊張が一気に解けてとても大きなため息を上げた。

彼女にとってはほとんど初戦に近いような状況だった。祖国で訓練を積んでいても、容赦のない相手との戦いは今までなかったことだろう。

「そうか、やっと、終わったのか……」

勝った余韻に浸るでも喜ぶでもなく、アイリスは試合をやりきった疲労感と、わずかばかりの満足感に包まれていた。

そんな生徒たちの姿をモニターで見ながら、アリーシャはほくそ笑む。

（お姫様もなかなかどうして、根性があるじゃないのサ）

トミーとアイリスの補講その三、現在の実力を測ること、はおおむね可という評価で見ている。

今後どのように能力を伸ばしていけばいいのか、そのポイントもだいぶ掴めた。後はプログラムを組むだけだ。頭に浮かぶことをキーボードに叩き、ものすごい勢いでレポートを起こしていく。

「フーフーフ、フーフー、……ん？」

その中で、アリーシャは自分が楽しいと感じていることに気が付いた。

トミーの成長を想像し、アイリスの発達に期待するとき、その傍らに自分がいて指導している姿を思い浮かべると、なんだか心がわくわくしてくる。

まさか、人を育てることがこれほど面白いものだったとは。

（……千冬め。ISの選手といい、教員といい、私が好きになるジャンルにはどうしてその先にお前がいてくれちゃってるのサ）

アリーシャは胸躍る新しい道の先に、また見慣れた宿敵が背中を向けているように感じた。

キーボードを叩き考察をまとめる手を動かしながら、先日行った千冬の試合を思い出す。

——その結果に後悔はない。

だが、やられっぱなしというのも気に喰わなかった。

確かにISでの戦いは最後まで言ったが、競うことをやめたわけではない。リターンマッチは別でいい。

(次こそは、負けないっていうのサ！)

新たな分野の競争心を掻き立てられたアリーシャは、高揚する気持ちを心地よく胸に抱き、流れるような手つきで一年生の教育方針を作成するのであった。



「これは……」

第三闘技場のピットに集められた生徒たちの前に大型のスクリーンが起動している。

「まさか、この短時間でこれほどのテキストをまとめられたのですか？」

闘技場で直に観戦していたジブリルは、頭にまとめていたデータが悉く画面上に記載されていることに驚愕した。中には重要と覚える場面が画像付きで注釈されている。

「なに、ちよつと筆が乗ったってやつなのサ」

アリーシャは右目の眼帯を眼鏡をかけ直すように上げて見せた。同時に豊満で大きく開いた胸元が強調される。艶めかしいスタイルがぴっちりと際立つ紅いスカートスーツの上に黒いジャケット羽織った姿は、彼女らしいセクシーさを前面に出した女教師モードだった。

一方のジブリルは学生服姿。OGということもあって調達に苦労はしていないが、卒業後の発育が着古した制服の皺をピチピチに伸ばしている。ついでにスカートもミニが着くほど短く見えた。

「ジブリルちゃん、言っちゃあなんだが、それイメクラっぽく見えるのサ」

「しばしご容赦ください。悪友に誑かされたもので」

「あの胸がバイーンなおっとり眼鏡かい？」

「同級生です。信用した自分が愚かでした」

ジブリルはスカートの上を必死に隠しながら強がって見せた。

「……見るなよ、トミヤ」

頬を赤らめて睨む。対するトミヤはドン引きしていた。

「見ませんよ。そのスタイルで男性をとつかえひつかえしてきたと思うと……」

「半目で萎えるな！ あとその話をほじくり返すな！ 地味に傷つくんだぞー！」

「だってご本人がおっしゃったんじゃない？」

「アリーシャ殿！ 講義を進めてください！」

周囲のジト目視線から逃げ下がりながら、机に隠れて先を促した。

「あいあい、それじゃあ講義を再開するのサ。まずは、せつかく協力してくれた先輩方二人についてといこうじゃないのサ」

げ、とダリルとフォルテの顔色が歪んだ。

「フーフーン。自覚はあるようだネエ。お二人のコンビネーションは見事と言つていいのサ。名をはせた『イージス』も見事なものだ。が、注意点はただ一つ」

アリーシャの独眼がギラついた。

「舐めプすんな」

叱責を受けた二人は気まずげにこうべを垂れた。

スクリーン上では撮影された模擬戦が上映されている。

当初、状況は圧倒的に上級生コンビが優勢だった。

アイリスがいかな第四世代機を扱つていようとも、彼女の腕はまだおぼつかなく、トミヤのLSも完全機動を果たしたとはいえ熟練のIS操縦者相手では分が悪い。

しかもタッグマツチとなつては、付け焼刃にも満たないトミヤとアイリスの連携では、心身ともに密接なセンパイカップルに適うべくもなかった。

だが、そこに慢心が生まれてしまった。

先輩方は圧倒的優勢と見るや、次第にトミヤ達をもてあそぶような攻めに変わり、本腰を入れた戦いからは外れていつてしまったのだ。

実力差がハッキリすればそれを覆すことは容易ではない。ましてや IS という最先端技術同士の試合なのだから、よっぽどのことでなければ結果は見えていはずだった。

そのよっぽどのが起きてしまったのは、未知の第四世代 IS 「セブンス・プリンセス」の実力の発端が覗けてしまったからだ。

搭載された重力制御装置グラビティ・コントロール・デバイスが放たれるや、上級生の繊細なチームワークが一挙に瓦解するほどの威力を發揮した。なにせ空を飛べなくなるほどなのだから与えた混乱は計り知れない。

地上戦となつたあとはトミーの独壇場となり、形成は逆転。

先輩タッグの敗北はうぬぼれが綻びを生んだ結果と相成つたのである。

「言葉を並びたてるつもりはないのサ。——今回のこと、恥だと思え。以上なのサ」

「申し訳ないっす……」

「面目ねえ……」

ブリュンヒルデ 現役最強からの苦言とあつて、思い上がる二人も素直に反省の色を見せた。

プライドが高い分、自分らへの自戒もハッキリしている。

「さて、お次にアイリスちゃんといこうじゃないのサ」

「うむ」

アイリスはまじめな顔つきで背筋を正した。机の後ろに隠れるジブリルはちゃん付けの呼称に、む、と反応したが、学生という身分をわきまえて口をつぐんだ。

「戦い方を見て、やはり実力と経験不足が顕著なのサ。けどそれは伸びしろがいっぱいあるということでもある。試合に望む姿勢も悪くない。普段のお前さんの姿とは違つてネエ」

アイリスは表情を緩めない。強気でわがまま放題な性格のお姫様だが、いぎ訓練に取り組む際は真面目に熱心に向き合っていた。

「特に……」なのサ。劣勢でトミー君に庇ってもらっている中でも、なんとか挽回しようと相手の動きを見ようとしているネエ。さつさと諦めちゃうのかと思つたけど、杞憂だったのサ」

「そのような無様な真似はせぬ」

アイリスは毅然と言い放った。アリーシャは嬉しそうに頷いた。ジブリルには意外だった。ルクーゼンブルクで自分が習い事を教えるときはすぐに飽きて投げ出していたのに、IS学園に来てからは人が変わったようにひたむきだからだ。

今もアリーシャからの様々な指摘を真剣に受け止めている。

(学生という身分にお立ちになられて、身を引き締めたということだろうか)

それとも、とジブリルはちらりとアイリスの隣のトミーを見た。真面目に講義を受けているアイリスを兄のような目で見守っている。

先ほどの試合では、トミーは終始アイリスを庇い続けて攻撃を一身に受けていた。もともと防御に秀でたLSであるが、二機からの攻撃を同時に捌き切れるものではない。シールドエネルギーがじわじわと削られ、それでもアイリスには一歩も手を出させなかった。

その中で、きつとアイリスは自分の弱さに歯噛みしたに違いない。負けず嫌いなお姫様だ。護られてばかりな状況を受け入れられるはずがない。

認めたくはないが、彼の存在がアイリスに良い刺激を与えているのは事実だろう。本当に、認めたくはないが。

「んん、ジブリルちゃん？」

「は……、ハッ！　なんででしょうかアリーシャ殿！」

「さっきからおっかない顔をしちやってどうしたのサ」

「あ、いえ、別に、なんでも、ありません」

「ふん。じゃあ、トミー君の話に移る前にちよいと質問んだけどサ。試合中の彼の動き、どう見るかナア？」

「は」

ジブリルは探るような視線のトミーと目が合った。彼なりに意見を期待しているようだ。

ふむ、とジブリルは思考にふける。観戦で感じた意見はアリーシャが挙げた注釈に載っているので、改めてこれといったものはほとんどない。

が、

「……攻撃面に置いて、今一つ出し切っていないように見受けれます」
ほう、とアリーシャは目を細めて口角を上げた。

「防衛においては絶対に守り切るといふ断固たる意志を感じました。私も護衛任務を多く任されておりますので共感できる節があります。しかし、いざ攻めるとなると非情になり切れない。そう思います」

「具体的には？」

「状況が覆った際の降伏勧告と、姫様の『重力爆撃』グラビトン・クラスターが決まった瞬間トドメを刺さなかったところですよ」

「部門優勝者の名に違わぬ見聞をお持ちなようだねエ」

アリーシャはジブリルの指摘箇所をディスプレイに挙げてトミーに向いた。

視線が再びきつくなる。

「トミー君、どうして手を抜いたのかナア、戦いに勝ちたくはないのかナア？」

「そ、そんなことはありませんし、手を抜いたつもりもありません」

トミーは真剣に否定する。

「僕は、こと戦いには全力で臨んでいるつもりです。手を抜くなど、相手への非礼に当たります」

「どうかナア。たぶん、私やジブリルでもなければ見えなかっただろうけどサ。こう経験を踏んだ眼でみてしまうと、瞬間、一拍のズレが分かってしまうものなのサ」

「……、僕は、そんな気を遣う余裕を持って戦っていなかったと、自覚しています」

アリーシャの鋭い眼光が、左目一つからとは思えないほどの威圧を放った。戸惑いがちなトミーはまともに受けきれず一歩引き下がる。

その様子に、アリーシャは一つ息を着いて集中を解いた。

嘘を着くことも虚勢を張ることもしない少年に、我ながら大人げないと思ったからだ。

だが、と彼について教わった話を思い出す。ブリュンヒルデの立場上、周囲から『ISの敵』と目され調べられたLSパイロットについ

て情報だ。

(どうやら、リミッターが付けられているのは本当なようだネエ)

トミーの戦い方を見て確信した。

彼は、自覚のない部分において容赦している。

以前、彼が無人機と戦った時のデータを、あらかじめ見ていたアリーシャには今回の対人戦が若干劣っていると見ていた。

シミュレーションでのプレーが実戦でもこなせるわけではないのだが、彼の場合IS学園やルクーゼンブルクで無人機相手に実戦を経ているのだからきめんに実力が変わるのはおかしい。

となると、

(オールド・ファツション 反女尊男卑主義組織。何か細工をしているナ)

彼を作り上げた反女尊男卑主義組織はその主義主張故にISを受け入れない。

『相応』の力は求めても『同様』の力は求めない。女性の力の象徴にすがって男性の力を復権するなど彼らの矜持が許さないからだ。

しかし時が過ぎること十年、女尊男卑は覆ることもなく世を席卷してく世情を見て、もはやいかんともしがたいとなりふり構わなくなつたのだ。

そして生み出されたLSと一にのまえとみや十三八だが、本質的に信用しきつていないのだろう。故に限界を付けられている。

彼はよく調教されている。従順で、まじめで、礼儀正しい。そして戦いでも非情になり切れない。

それはきつと、彼に与えたISの力を恐れ、何か間違いが起きないようにあえてそういう性格に造り上げたのだ。

もしそのタガが外れるような場合があるとすれば……、

(トミー君の殻を脱皮した何者かに生まれ変わったりするかもネエ)

アリーシャは昂るものがあった。

もし自分の教育によってトミーが真の力を取り戻し、はめられた首輪を引きちぎることができたとしたら。

そしてその力が飼い主によってではなく、彼自身の意思によってふるわれるとしたら。

一人の生徒を心身ともに独り立ちさせて大人という個人に成長させる。

それは、教育者の本望と呼べるものではないだろうか。

アリーシャはドキドキとワクワクが滾ってくるのを抑えきれなかった。

「――よし、それじゃあトミーくん、君はこれから特別メニューを……」

そうレシピを渡そうとしたとき、ピットのドアが勢いよく開かれた。

息を切らせて現れるのは数学を担当する女性教員。エドさん、だっけ？ とアリーシャが名前を思い出せないでいると、

「た、大変ですっ！ アメリカの、シルバリオ・ゴスベル銀の福音が……！」

口が上がった名前を聞いたダリルは目を見開いた。他でもない祖国が技術の粋を集めて作り上げた最新鋭試験機の名前ではないか。

「エドワース先生、ウチの銀のシルバリオ・ゴスベル福音がどうしたんだ!？」

心配そうに見上げる隣のフォルテの目には、いつも自信にあふれた恋人らしからぬ戸惑いの色がハッキリと見て取れた。

49話 グレートなティーチャーを目の当たりにすると実際困る

「どういうことだイーリス先輩っ！」

ダリルは通信端末の向こうにいるアメリカ代表、イーリス・コーリングに向けて声を荒げた。

「こっちだって把握し切れてねえんだよっ！」

怒鳴り返された音声の背景には喧騒が混じっている。

「いま現場は大混乱だッ。ナタルの【銀シルバリオ・ゴスベルの福音】が暴走し、その針路先の日本じゃあ防空網にキャッチされた！ そっちのメディアも騒ぎ立ててやがる！」

「マジかよ……！」

ダリルは手近なテレビを付けてみると緊急特番が流れていた。アメリカ軍の試験ISが暴走を起こし、日本に向かってしていると若い女性キャスターが伝えている。若干早口で上ずった調子が動揺を隠しきれないでいた。

「現在日本のIS部隊より『チグサ』が迎撃の用意をしている……ってオイ！ 『チグサ』だと!?」

「そうだよっ、三木一草さんぼくいつぞうの一面が出張ってくるってことだ！」

「まるで開戦前夜じゃねえか！」

ダリルは手近のテーブルに拳こぶしを叩きつけた。

三木一草さんぼくいつぞうといえば、日本が誇るISのトップランカー部隊だ。

『ユウキ』『クスノキ』『チグサ』『ホウキ』

故事に倣った名称を与えられた戦乙女たちは、ロイヤル・ガードの日本版ともいうべきもので、その実力はアメリカ軍人のイーリスはおろか代表候補生のダリルの耳にも達している。

勇名を馳せる彼女たちは自身らが頂く女帝のために、文字通り身命を賭して戦うだろう。

それが表に現れるということは、日本は本腰を入れて迎え撃つつもりに違いない。

「コツチのお偉方だっているいろいろやってる！ 戦争にはならねえ！
が、ナタルを止められる要素がねえんだよ！」

「沖繩の奴らは？ 在沖部隊は何やってんだ、目と鼻の先だろう!？」

「ダメだ！ ロートルじゃねえが第三世代ISが相手では分が悪い。

シルバリオ・ゴスベル
【銀の福音】に撃墜スコアを稼がせるだけだ！」

クソツタレ！ とダリルは悪態をついた。

通話の向こうでは別の誰かから声が掛かったのかイーリスが応答している。

「……分かった！ 悪い、ダリル、アタシにもお呼びがかかった。お前
はお前でできることをやりやあ良い。軽拳妄動すんじゃねえぞ！」

「あ、待て、まだ聞きたいことがッ」

と聞き返す途中で通話が切れた。

ダリルは再び雑言を吐くと、頭を振ってすぐに端末を操作する。連絡先アプリにある隠しフォルダを開き、番号に通話を入れた。

コールが2回鳴る前につながった。

「ハ〜イ、どちら様ですか〜？」

間延びした女性の声にイラツとしながらダリルは怒鳴る。

「オレだ、フオールツ！」

「あつ、ダリル……じゃなかった、レイン先輩!？」

「まだ学生気分が抜けてねえぞ、元同輩！」

レイン、と呼ばれたダリルは通話しながら部屋の外に顔を出した。周囲に誰もいないことを確認すると、ドアを閉めて中からカギを掛ける。

そこは、かつてIS学園の二人の生徒が亡国機業へ寝返る算段を企んでいた場所だった。

一人はオトーニヨ。もう一人は、

「フオール、叔母貴……スコールはいるか？ オータムの姉御でもいい！」

「えっと、いまスコールさんもオータムさんも離れていまして……、近くにはオトーニヨしか……」

「んなこた聞いてねえ！ クソツ、聞きてえのは今タイムリーな

【銀の福音】の暴走の件だ、お前何か知ってるか？」

どうせ知らないだろうが、という言葉が続ける前にフォールが応える。

「あれ、レイン先輩知らないの？ それ仕組みたやつだよ」

「知ってるのかよ!? つか、仕組みただあ？ 誰にだ、亡国機業か!?!」

「違うよ。誰だと思う〜?」

ウゼエ……! とレインは盛大に舌打ちする。

「ああ、反女尊男卑主義団体か！ 奴らならISの名望を墮とすためにやりかねえもんな」

「ブブー、はっずれー」

「アあ!? じゃあどこだ？ まさかアメリカの自作自演じゃねえだろうな!?!」

「あ、その陰謀論よくゴシップ記事なんかであるよね〜」

「テメエ、マジで今度会ったらぶっ飛ばすぞ!? 真面目に応えろやつ！ 他つつつたらもう……!」

イヤ、待てよ? とレインは瞬時に冷静になる。

「フォール、お前なんで反女尊男卑主義団体が絡んでねえって断言できるんだ？ 犯人がわかってるうえ、その繋がりまで追ってるのか?」

「事情までは分かんないわよ。私だってスコールさんから聞いたただけだし」

「なんで叔母貴が敵対組織の事情に通じてんだよ。……んあ、それはそれで諜報が充実してるってことでもいいのか」

「二人で納得しないでよ。つつーか、パイセンなんでそんな必死な訳?」

「なんでって、お前……!」

はた、とレインは、ダリル・ケイシーは身動きを止めた。

自分はどうしてこんなにマジになっているんだろう……?」

【銀の福音】が暴走したから? まさか。パイロットのナターシャ先輩が心配だから? んなわけがない。祖国の失態を濯ぎたいから

？ オレがそんな殊勝なハズが……」

考えるたびに、浮かぶ案を否定するたびに疑問が募る。

いったいなぜ、自分はこんなに一生懸命、この事態を収拾しようとして
しているのだろうか？

「……なん、で……」

「ちよ、ちよつとレイイン大丈夫なの？」

「あ、ああ。……悪い、もういいわ。騒がしたな」

「はあ？ いきなりかけて来といて意味わかんないんだけど。あ、
せつかく電話貰ったんだから、スクールさんから貰った伝言話してく
ね。あのね、今後の亡国機業の方針なんだけど」

フオールが預かった連絡事項をギャル口調に乗せてレイインに伝え
る。

その内容がレイインの頭に入っていくたびに、彼女の両目がだんだん
と大きくなっていく。

そしてすべて聞き終わり、

「んじゃ、ちゃんと伝えたらからね」

と向こうから通話を切られると、レイインはだらんと通信端末を握つ
た腕をぶら下げた。

その表情は、眉根をひそめた形のまま固まり、どこともしれない虚
空を見ている。

部屋にはテレビからの焦った音声だけが流れていた。

『ただ今新しいニュースが入りました。今回のアメリカのIS暴走
を受け、現地に近いIS学園関係者が対応に移るといふことです。関
係者の中には国家代表候補生も複数人おり、また……』



IS学園の屋上から望む空はよく晴れ渡っていた。

夏の陽射しがジリジリと降り注いでいるが、澄んだ風が熱を逃すよ
うに吹き抜けていって気持ち良い。

「……フー」

そんな青空に向けて紫煙を吹き上げた。

向かい風に飛ばされてタバコの煙が流されていく。

目の前に広がる青は曇ることなくどこまでも広がっている。遠く、視界の先の彼方までも晴天が広がっていそうだ。

(天気はこんなにいいのにねえ……)

僕は口の中でタバコの煙を転がした。芳醇な清涼感が広がり、僕の心を癒そうとしてくれる。

空も、風も、本来ならこんな清々しい日なんてめったにないだろうに。

「……ハア……」

ため息と一緒にムワッと吐き出す煙は、こんどはなかなか飛んではいかなかった。ちょうど風の間に入ったようで、僕の周りにとどまっている。

今の僕の気持ちと同じようだった。

——匂いが制服に着いちやうぞ。

——先生にバレたらどうするんだ。

——カツコ悪い吸い方をしているなあ。

そんな自分の内なる抗議にも耳を貸す気分にならなかった。

再びタバコを口にくわえて、モヤモヤを頬張る。

「……ん？」

そんな僕の足に、なにかが触れた。

視線を下ろすと、

「猫？」

がいた。

純白の、毛並みの良い、顔つきも人好きしそうな、今まで見たことのない猫だ。

「お前、どうした。迷子か？」

しやがみこんで頭を撫でると、なく、と可愛く鳴いた。

たしか鳴くネコは人に飼われているらしい。それに人を怖がらないから、やはり野良ではないだろう。

白猫はしばし僕にすり寄ると、周りをぐるりと回って、後ろの屋上

出入り口側に向かつていく。

「珍しいね、シャイニイが私以外に懐くなんてサ」

振り向く視線が白猫を見つける前に声をかけられた。特徴的な語尾の。

「アーリイ。……あつ」

僕は顔を上げる前に咄嗟にタバコを握り締めて隠ぺいを図る。

「なんだ、それ消しちゃうのかイ？ 勿体ない。屋上で吸うタバコは格別だろうにサ」

バレてるか。と観念して顔を上げた。

見ると、アーリイも喫煙を楽しんでいた。タバコではなくキセルで。

フー、と吐き出す仕草がこなれていて乙な感じがする。

「タバコの匂い、私が着けたってことにしておくといいサ」

アーリイは煙管で僕の制服を指しながらクツクツと言った。

隻腕の右肩にはさっきの白猫を乗せてあげている。

「見逃してくれるんですか？」

「シャイニイに感謝するんだナ。コイツの好意に免じてやるのサ」

「……ありがとう、シャイニイ」

シャイニイはまた、なく、と鳴いた。可愛いやつだ。人の言葉がわかるんだらうか。

「お前も可愛いところがあるじゃないのサ」

まなじりを下げて言ってくる。

「臨海学校へ行ったみんなを想って南の空を眺めているなんてサ」
「……」

僕は無言でさっきまで見ていた南の彼方に向き直った。

「そんなに心配かい？」

「心配ですよ。アメリカ軍の最新鋭試験機の暴走、止めに行かされるんではないですか？」

「現場に一番近い有力な戦力だからネエ」

「領空侵犯されているのに、日本の軍隊や国家代表は何をしているんですか」

「アメリカ政府の働きかけがあつたらしいのサ。IS委員会に頼み込んで日本政府を抑え、IS学園を動かしたらしい。メディアの鎮静化も頑張つてるみたいだネエ」

「……内政干渉じゃないですか」

「君のお仲間が喜々として利用しそうだネエ」

「オールド・ファッション反女尊男卑組織も関知しているんですか!？」

アーリイはキセルの煙をフー、と吐いた。

「だとしたらどうする?」

「……!」

「お仲間たちが君に動けと命じてきたら、どうするのサ」

僕は歯を食いしばって即答を避けた。

閣下が、常務さんが、僕のスポンサーたちが、僕にみんなの苦難の陰で暗躍しろと命じてきたら。

どうするか、なんて……、

「学友たちを見捨てて世をただすかイ?」

「そんなわけ無いじゃないですかっ!」

僕は叫んだ。

そして、むせた。あたりのタバコの煙が絡みつく。

それを振り払ってさらに声を張り上げた。

「僕がみんなを、IS学園のみんなを見捨てるなんて、ありえません!!」

「——甘いネエ」

アーリイの表情が笑みを残したまま鋭利に変わる。

「オールド・ファッショントミーくん、私は君の仲間を反女尊男卑組織などとは言っていないヨ」

あ、と僕は口を開ける。だが後の祭りだ。

「それにお仲間の命令に背けてでも学園のトモダチを大切にするなんてネエ。ホント……サ」

アーリイはキセルをくるくるっと持ち直すと、豊満な胸に挟んだ革製の煙管入れに収めた。

「よく言った」

「え……」

オールド・ファッシュヨン

「私は君を反女尊男卑組織のイヌかと疑っていたんだが、改めよう。すなまかった」

「え、あ、頭を上げてくださいっ。アーリイがそんなこと、誰かに見られたらどうするんですっ」

「構わないサ。教え子を疑った教育者の不面目を詫びているのだから」

「だからって、そうかしこまられても困りますよっ」

「じゃあチャラにしてくれるのかイ？」

「アーリイは顔を上げると茶目っ気たっぷりにウインクしてみせた。

「……別に、謝られるようなことだとは思っていませんし」

「そっか。じゃ、私はまだ君の先生でいられるってことなのサ」

よかったなーシヤイニイ、と白猫の喉をゴロゴロさせる。

この人、本当にネコみたいに捉えどころがない人だなあ。

「さて、トミーくん。お詫びついでに、君の願いを一つ聞いてあげよう。先生になんでも言うが良いのサ」

「なんでも、ですか？」

「なんでも、サ。あくんなことやら、こくんなことでも、なんでもいいのサ」

「それじゃあ」

僕は真剣になって言った。

「暴走しているアメリカのISを止めてくださいっ！」

「そりゃあ無理なのサ」

軽くずっこけた。

ですよね、と半分思っていたが。

「……とでも、言うと思っただかい？」

「!？」

「お、いい顔するネエ」

「アーリイ！ 僕は本気で……！」

「本気ならばここを使うがいいのサ」

アーリイは自分の頭を人差し指でさして見せた。

「遙か彼方の敵を、どうやって撃退し、君の学友たちを助けるのか。その方法はこの中に入っているのサ」

「頭の中に、ですか？」

「そうサ。いい機会だ、一つ講義と行こうじゃないのサ」

アーリイはそう言うのと、いきなり自身のISを展開してみせた。

全身を覆う展開光が収まると、両肩腰に四つの非固定浮遊部位アンロック・ユニットが翼のように備わった。ハンディキャップの隻眼隻手もISの装甲と義眼が補っている。

そして、周囲にまとう吹き荒れる風。

「これが、『テンペスタ』」

嵐の名を冠するISを装備したアーリイは、ふわりと自然体に空に浮かぶ。

「いいかいトミーくん、この現役最強のISは人が作ったものサ。そして本来飛べない人間がこうして空を飛べるのも、人が生み出した技術のおかげサ」

当たり前前のことを大仰に言われて、どう返していいか戸惑った。

「それが、いったい何なんですか？」

「すごいことだとは思わないかい？ 驚異的だとは感じないかい？

100年も前なら空想の中になかったものが、こうして現実になっっているのサ。つまりは」

僕の頭を指さしながら告げる。

「人の脳は、想像できるものなら何でも生み出すことができるのサ」

「なん……でもって言ったって、あんな彼方にいる敵を、どうやって」
「考えるのサ！ 学生！」

アーリイ先生は両手を広げて叫んだ。

「頭の中は空よりも広く、海よりも深く、ちやうど神のようにできているのサ！ ……いや、これはある詩人の受け売りだがネエ」

手で顔を半分覆うと、再びクツクツと笑いながら言った。

「明確な目標を設定し、あらゆる可能性を模索し、現実として実践する。これが私が世界最強ブリュンヒルデに上り詰められた秘訣なのサ。何のことはない、頭を使っているだけサ。大事なのはイメージネーション少年っ

50話 世界を支配する可能性を秘めた力はごく身近にあるかもしれない

空の青と海の藍の狭間に、開聞岳かいはんだけは美しくそびえていた。

九州は薩摩半島の南端、日本本土の最果ての地にそそり立つ威容は、別名薩摩富士とも呼ばれる名山だ。

古くから海上交通の目印とされてきたそれは、空を行くものにとっても道しるべとなる重要な山だった。

その上空に、一機のISが飛んでいる。

侍が装備した武者鎧を思わせる形貌の日本製IS、【打鉄】だ。
専用機化パーソナライズされているのか、外見ハイドウエアが着背長と美称される大鎧の出で立ちに最適化フィッティング処理していた。

パイロットの妙齢の女性は艶やかな長髪を靡かせ、瞑目したまま腕を組み、開聞岳を背にして南の海に面している。

『——状況を報告します』

インカムにもたらされたオペレーターからの連絡にも動じず、目をつむったまま動かない。

『敵機はグアム島アンダーセン空軍基地にて、試験飛行の途中、暴走を起こした模様。一切の通信に応じず、北北西に向けて航行中とのことです』

「……当初、試験はハワイ沖で行うと聞いていた筈ですが？」

鈴を転がすような声でパイロットは尋ねる。

『試験前に調整を行う必要が生じた結果、スケジュールに乱れが生じ、会場を変えた模様です』

「そうですね。不思議ですね、IS学園の臨海学校の場所も、例年の旅館が取れずに系列店のある南国に移ったとか。まるで」

『警告いたします。当通信は録音されております。不用意な発言は危険かと存じます、チグサ』

無機質な声でオペレーターは告げる。

『迎撃任務は既に取り下ろされており、本飛行は哨戒任務と位置づけ

られています。いたずらな会話は無用です』

「無用ついでに、少し昔話をしましょう」

チグサ、と呼ばれた女性は奥ゆかしく口角を上げ、整ったまつ毛の目元を開き、後ろの山麓を振り返った。

「この開聞岳を臨む景色は、沖縄へ片道切符で向かう防人^{さきもり}たちが最期に見た本土の景色だそうですよ」

オペレーターは応じなかった。

清聴と捉えたチグサは話を続ける。

「当時の女性は、出撃する殿方をただ見送ることしかできなかつたそうです。歯がゆいですね。でも、そんな苦難の歴史の果てに今の私たちがいるのですから、ご先祖様方には感謝しかありません」

チグサは組んだ腕を解いた。太陽に照らし出された左肩の装甲に笹竜胆^{ささりんどう}の紋がきらめいている。

彼女の名の由来となった者の家紋だった。

「今はもう違います。日本はISを生み出し、蔑ろにされてきた女性の地位を高め、世界を変えました。ご先祖様方が果たせなかつた日本の躍進を実現することができたのです。私は、この愛する国を護れる『チグサ』という位^{くらゐ}を誇りに思っております。そして、二度と」

チグサは南の海に視線を戻すと、両の眼をギラつかせた。

「米兵^{ヤンキー}どもの軍靴に踏みにじらせはしませんわ」

彼女が駆るIS【打鉄^{あたらため}改】は日本を背にし、南から向かってくる南蛮を撃ち滅ぼさんと待ち構えていた。



IS学園の屋内訓練場では小柄な二人の少女がトレーニング^{いそ}に勤しんでいた。

一人は自身のISを展開し、ぶつぶつと呟きながら自身の挙動を確認している。

もう一人はその動きを見て気が付いた点を指摘しているのだが、「あく、やっぱ早い動きとなると粗が目立つちまうっスねえ」

フォルテ・サファイアは編んだ髪をいじりながらやる気なさげに意見を上げていた。

「やはり、一朝一夕には、身につかぬか」

一つ一つの動作をきびきびとこなしながら、アイリスはウェーブがかった金髪を振り乱す。

いま行っているのは、PICを使った急加速と急ブレーキ。ISの基本動作である。

長時間にわたっているのか額に汗がにじんでいるが、表情には疲労の色を表さなかった。

「根詰めすぎじゃないっすか？ そんなんじや続かないっすよ、実際」
「サファイア、先輩、申し出は、ありがたい。が、せめて、教官に言われたことを、一つだけでも、習得したい、のじやっ」

「PICを利用した短距離高速機動っすか。しかもターンやカーブ込みとか。新人にやらせるメニューじゃないっすよそれ」

「いつまでも、トミーに、守られて、ばかりでは、……あつ」

アイリスの姿勢が崩れた。重心がブレた高速移動がブレーキを利かなくさせたのだ。

速度を落とせずまっしぐらに壁が迫る。

ぶつかると……！ と目を閉じたアイリスを、

「言わんこつちやないっすねえ」

フォルテがぶつくさ言いながらISを展開して受け止めた。

アイリスの小さな体がぐいと力強く引っ張られると、壁際から綺麗なカーブを描いて最初の位置に抱き戻される。

ISの瞬時展開と瞬間加速イグニッション・ブーストによる急接近、そして先ほどまでアイリスが練習していたPICを使った立体機動を容易くやってのけたのだ。

「み、見事じゃの、サファイア先輩……」

「フォルテでいいっすよ。王女様から敬語とか、まわりに何言われるかこわいっすからね」

ドサツ、とアイリスを床に下ろすと、おもむろにフォルテが声を上げた。

「王女様お付きのOGさん、どつかで見ているんでしよう？ お姫様頑張り過ぎっス。なんか飲み物持ってきてくださいよ〜」

「……気が付いていたか」

頭上、キャットウォークの上から声が降りてきた。

一緒に身体も宙に舞うと、しなやかな身のこなしを見せつけるように、ジブリルが二人の前に降り立ってみせる。

「なにげなく人外パフォーマンスやらないでくださいっス。あそこまでビルの高さくらいあるんスよ？ フツ―は生身じゃ降りれないんスよ?。」

「なに、着地の瞬間ISを部分展開させればいいだけだ」

「ハイハイ、大先輩の実力は大了もんっスよ。で、なんでこの子の教える相手してやらないんスカ」

「いや、私も姫様に申し出たのだが」

「ジブリルの教えはよう分からんのじゃ」

アイリスはジブリルから渡されたスポーツドリンクを口にして一息入れる。

「ジブリルの手引きは、なんというか、格式ばって堅っ苦しくて肩がこるのじゃ」

「そつ、そんな!？」

「あー、それでわざわざ私のとこに来たんスカ」

「お主とは先ほど試合をした仲じゃからの。実力は身をもって知っておる」

「だからって面識もないのに根性あるっスね。頭下げて頼み込まれたときにはコツチの方がビビったっスよ」

「未熟者が熟練者に教えを乞うのは自然じゃろう」

お転婆な姫様の場合とつても不自然なんですよ、という言葉を飲み込んでジブリルは閉口した。

ついでに苦々しい顔つきになった。

本来ならばフォルテの位置にいるのは自分のはずなのに、というジェラシー的な衝動のせいである。

ジブリルは精神的に成長しつつあるアイリスに感心しつつも、のけ者にされているような自分の現状がなんとも情けなかった。これでは亡きお父上、お母上から傳役もりやくを仰せつかった立場がない。

「姫様、鍛錬に励むのは大変結構ですが、そう自分を追い込み過ぎてはなりません。地道な訓練こそ成長への近道であると」

「今のわらわでは」

アイリスがジブリルの諫めに被せて言う。

「仲間たちの役に立てぬ」

フォルテとジブリルは意外そうな顔でアイリスに向いた。

「わらわの同級生たちは、いま暴走するISを止めに行かされておるといいうに、わらわはただこうして学園で安穩としておくことしかできぬ。相手は軍が運用する強力な機体なのだとか。彼奴らきゃつのことを想うと、歯がゆい。歯がゆうて仕方がないのじゃ」

「姫様……」

「まあ、気持ちは分からなくもないっすけど」

フォルテは顔をそらして言った。

「ダリルも、とつても心配していたみたいっす。暴走してんのは自分とこのISっすからね。ぶっちゃけそんなに愛国心あるほうじゃな
いと思つてたんすけど……あんなに取り乱した姿、初めて見たっす」
「さもあろう。わらわも身体を動かしていおらぬと、気が急いてたま
らぬのじゃ」

そう言うのと、アイリスは唇をかみしめた。

誰も彼女にかける言葉が見当たらず、しばしの無言はあたりに沈痛な雰囲気を漂わせる。

そんな空気に割り込んだのは、カラっとした特徴的な声音だった。

「おやおや、みんなお揃いとは都合がいいのサ」

アリーシャがトミーを連れて訓練場に入ってきたのだ。

アイリスたちは意外な来客と、一瞬アリーシャの右肩に乗っている白猫に目を奪われたが、何をしに来たのだらう、とアリーシャに問いかけた。

「フン。どうさね皆の衆、暴走するISを私たちの手でやつつけて

みたいと思わないかナア？」

アリーシャの爆弾発言に周囲が一気に色めきだった。

「暴走機を抑えるですと!？」

「マジツスか？ いや、冗談っスよね？」

「トミー、いったい何をするつもりなのじゃ？」

「いや、僕も正直わからないんだけど。でもコツは頭を使うことだつて……」

「そう！ 大事なのはココなのサ」

アリーシャは自分の頭を人差し指で叩いてみせた。

「だが、それを説明する前に、みんなに確認しておきたいことがあるのサ。ズバリ、ISはなぜ世界を変えられたのかについて、サ。フォルテちゃん」

「はいっス」

「模範解答、言っちゃってみるのサ」

「ええと、なぜ世界を変えれたかったスか。ん〜……、やっぱISは一般兵器を遥かに上回るほど強力だからじゃないスかね。それが白騎士事件によつて広まり、女性にしか扱えないということで世界が女尊男卑に変化した。つまりISの軍事的優位性が世界を変えたんだと思うっス」

フォルテの説明に、みな一様に同意をみせる。

「OKなのサ。じゃあ、ここでより具体的な部分に移ろうじゃないのサ。ジブリルちゃん」

「はっ」

「ISの強さの理由はどこにあると思うかナア？」

「そうですね……。やはり絶対防御やシールドバリアといった防御力、そしてPICによる慣性を無視した飛行能力、あとは多彩な兵装を扱える応用力、ではないでしょうか」

「いいね。ではここで重要なクエスチョンだ。アイリスちゃん」

「はいー！」

「元氣良いネエ。そのISの持つ力のうちで最も重要なものは何だと思うかナア？」

アイリスは口元に手を当てて考える。

「防御力、は違うだろう。今では絶対防御を貫く兵器が現れていると聞く。」

「飛行能力、も外れるか。飛ぶだけならば飛行機で事足りる。となると、

「応用力、であると思うのじゃが、今一つその理由が見出せぬ」

「正解なのサ。解説は彼に手伝ってもらおうとしよう。トミーくん」

「は、はいつ？」

「ISの持つ応用力、その源泉は何だと思うかナア？」

「うん……と、後付装備イコライザの運用、ではないでしょうか？ ISの拡張領域パススロットに量子変換インストールされた専用兵装を運用できる……」

「そこだ!!」

突如としたアリーシャの絶叫に全員が肩をすくめた。

彼女の肩に乗ったシャイニイは慣れたものなのか首を掻いている。

「いきなり大声出さないでくださいよつ。そこつて、専用兵装のことですか？」

「その前なのサ。拡張領域パススロットへの量子変換インストール、これこそが問題を解くキーワードなのサ！」

いぶかしむ周囲へアリーシャは畳みかける。

「そう、なぜISは世界を変えられたのか。それは、ISが世界で唯一、『量子力学』を運用できるからなのサ」

「量子力学……。そういえば、そういった機能がISに着いておると習っておったの」

「そうサねアイリスちゃん。これは学校の授業の基礎で習うワードなのさ。しかしこれこそが他者と一線を画す超重要項目なのサ」

「んん、いまいちよく分かんないつすけど」

「例えばだフォルテちゃん。君の【ゴールド・ブラッド】は冷気を操っているだろう？ トミーくん、それはどういう機構に思うかナア？」

「ええつ？ そんな、冷たくするなんて冷蔵庫みたいにするとか、……」

といつても原理がどうかなんて分かんないですよ」

「冷蔵庫はいい着眼点なのサ。あれの構造は気化熱を運用する、まあ簡単に言えば分子をどうこうするモンなのサ。そして「コールド・ブラッド」もまた、分子活動に干渉することで冷気を運用することができるのサ」

「ちよつ、ちよつとアリーシャ先生ネタバレっスよそれ？　ネタバレっスよそれ！」

「二度言うほど大事な話でもないのサ。なぜなら、ねえフォルテちゃん、「コールド・ブラッド」はどうやってそんな機能を運用できると思うかナア？」

「そんなもん、ISの超パワーとかじゃないんスか？　ISのコアとかブラックボックスって言われますし、ぶっちゃけわかんないっス」
「あつはつは！　超パワーとは良い得て妙なのサ。だが、ご名答。量子力学とは即ち、魔法のような超パワーと捉えてもらって構わないのサ」

「いや、いやいやアリーシャ殿！」

ジブリルがたまらず指摘する。

「量子力学というのは立派な学問の一派です。それを超パワーと称するのは語弊があるかと」

「もつともな意見なのサ。でもさジブリルちゃん、量子の法則は物理法則とは全く別物であるのはキミも知っているだろう。量子を運用できるならば、あらゆる問題が途中の計算式をカットしていっぺんに正解を導き出せるものなのサ。だから量子コンピューターが完成すればあらゆる暗号が紙切れになると言われているのサ」

「それは、そうですが。……いや、そうですね。あれ？　これ、ひよつとして」

「わかったかいジブリルちゃん。ISはこの量子力学の一端を運用できてしまう、これが実はいかに恐ろしいことかってものをサね」

ジブリルたちは互いに顔を見合わせた。

自分たちが扱っているISの恐ろしさを今さらながらに実感したからだ。

アリーシャの話が本当ならば、ISがその気になれば一夜にして世界を変えられる可能性を秘めていることになる。

しかし、

「でもアーレイ、なぜISは量子変換部分インストロルにしか扱っていないんですか？ それに、各IS企業だつてこの機能を元に兵装を作っているのに、量子力学が世界を変えたことなんてないですよ？」

「簡単なことだよトミーくん。麻酔がなぜ人を眠らせられるかと同じことなのサ。つまり原理は分からなくても『そうやってしまうから』運用しているし、いろんな麻酔を生み出せるようにいろんな後付装備イコライザを作ることができる。逆に言えば、原理が分からないからその神髄にまでは手が出せないのサ。唯一、ISを創造した篠ノ之束は例外だろうけどサ」

「篠ノ之博士は量子力学を運用している……？」

「そう捉えれば辻褄がある例がたくさんあるのサ」

トミーはゴクリと唾を飲んだ。

彼女の底知れぬ実力の深淵を覗き見れたような気がして、そのあまりの深さに畏れを感じずにはいられなかったからだ。

篠ノ之束は世界を支配できるかもしれない。

まるでゲームに出てくる強大な魔王に、何の準備もなしに遭遇したような気分だった。

「これでわかっただろう？ ISはあらゆることを可能にする超パワーを秘めている。それをどう運用するかは操縦者の頭次第なのサ」「イマジネーション、ですか」

「その通りなのさトミーくん。さて、今回のミッションは暴走するISを抑え、キミの同級生の手助けをすることだ。そのためには敵に奇襲をかけるなり向こうへジャンプする手段が必要サ。そしてそのツールが、目の前にある」

アリーシャの視線はアイリスに向けられていた。

「わ、わらわにか!？」

「アイリスに……【セブンス・プリンセス】についてことですか？」

「【セブンス・プリンセス】の能力は重力関係みたいっすけど」

「重力、……！ まさか、アリーシャ殿!？」
「そうサ」

アリーシャはにやりと笑みを浮かべた。

「重力を運用し、ワームホールを繋げ、先方へと殴り込むのサ」

51話 福音とはグッドニュースということです。
バツドな話も塞翁が馬ということだ

蒼空を一頭の虎が疾走する。

反衝撃性硬化装甲の体毛と、単分子結晶の爪、そして全身が無骨な牙を思わせる人工の虎だ。

虎の名前は、アメリカ製第三世代IS「フアング・クエイク」

外見を彩る虎タイガー・ストライプ模様はアメリカ代表イーリス・コーリングのパーソナルペイントだった。

背部4基のスラスタは間断なく咆哮し、力強く虚空を駆けていく。

「フアング・クエイク」の独自兵装、リボルバー・イグニッション・ブリスト個別連続瞬時加速が成せる超ダツシユだ。

成功率40%前後という低い稼働率をイーリス自身の腕で補い、盟友ナターシャ・ファイルスのシルバリオ・ゴスペル「銀の福音」が向かう先に到達せんと最大速度で驀進していた。

(ここでしくじっちゃいねえもんな！)

イーリスは余裕なさげに表情を歪める。

暴走するナターシャの機体を抑えようとIS学園の生徒たちが向かったというが、イーリスにはあのシルバリオ・ゴスペル「銀の福音」を止められるとは思っていないかった。

腕ではない。機体が暴走している以上ナターシャの腕が及ぶ余地はない。

理由は単純、「シルバリオ・ゴスペル」は機動性がハンパでないのだ。大型スラスタの他に両手両足に4つ噴出口が存在し、補助推進用のブースターまでもが取り付けられている。

放つ機動はマツハ2以上の飛行が可能で、最高速度は時速2450kmを超える。

加えて可動試験の日程が延びたこともあって、かねてから依頼していた英国製の試作パッケージが間に合ってしまった。英国代表候補

生が駆る「ブルーティアーズ」も扱う強襲用高機動装備の一部らしいが、これをもつてさらなる速さを求める計画がアダになっている状況だ。

よしんば追いつけたとしても、運用する『銀の鐘』^{シルバークロウ}の前にどこまで持ちこたえられるだろう。

大型スラスタと広域射撃武器を融合させた新型システムであるそれは、ウイングスラスタに36の砲口を持っている。高密度に圧縮されたエネルギー弾を全方位へ射出するとともに、常時、瞬時加速と同程度の急加速が行える高出力の多方向推進装置^{マルチスラスタ}なのだ。

いかな国家代表候補生が迎撃にあたるといえど、所詮は雛鳥にすぎない。時間が稼げただけでも御の字だ。

イーリスは最悪を想定した場合の到達ラインを計算し、その行く手に先回りするつもりでいた。

ポイントは日本の領空ギリギリであるが、この緊急時である。何がトラブルが起こっても割り切るしかない。

それに、すでにIS委員会経由で日本を鎮静化させている手はずになっっているはずだ。露骨な領空侵犯でもしなければ問題にはならないだろう。

——そう思っていた矢先、

「うおっ!?!」

超高速で飛ばすイーリスに、いきなりドンピシャの一撃がもたらされた

ロックオンアラートの鳴らない突然の一撃だ。

咄嗟にもれた声と共にかろうじて機体をひねるが、左端のウイングが躲しきれずにはじけ飛ぶ。

「ッ……! 左推進システムに異常か!?!」

被害状況を一瞬で確認し、来襲してきた方角を睨む。針路よりやや右寄り、日本の鹿児島に近いところだ。

だが見えない。敵が遠すぎるのだ。

視覚補足拡大映像^{スーパビジュアル}に切り替えて彼方を見据えても、まだ見つからない。

(超長距離からの正確な射撃……、この虎の目フアング・クエイブですらすぐにサーチできないほど彼方からの一撃……)

このような神業をやったのけられるものは、世界広しと言えど、イギリスには一人しか見当たらなかった。

「……出やがったか」

イギリスの目がようやく捉えた先は、空に浮かぶ一機の武者。

その左肩のエンブレムが語る、音に聞こえた日本の精兵『三木一草』さんぼくいつそうの二画。

「チグサ……！ 相変わらず安全圏からのアウトレンジ戦法がお好きなようだな」

「警告いたします、アメリカIS代表、イギリス・コーリング」

互いの姿を認め合うや、相互意識干渉が働き、通話が始まりました。しかも名指しで。

「貴方の針路は我が国の領空を侵す行路にあります。速やかにコースを変更しなさい。さもなければ撃墜いたします」

「ハッ！ 先制攻撃かましといて警告とは笑止だぜ。テメエんところは騙し打ちスニークアタックがお家芸なのかい？」

躊躇なく二発目が放たれた。

尋常でない弾速だが正面からとあつて流石にかわす。

「おおっと！ おいおい穏やかじゃねえなあ。そんな派手にぶつぱなしといて大丈夫かよ？」

「これは警告です。本気でしたらその口でおしやべりできなくしていただきますもの」

「ご大層なことだぜ。だがな、お前のそれ独断専行じゃねえのかい？ ちゃんと迎撃任務は出てんのかよ。IS委員会おえらがたにどやされた及び

腰の日本政府が許すとは思えねえぜ」

「二昔前に殿方が政まつりごとをしていた時代ならいざ知らず、ISが変えた世界の我が国が、つまらぬ威嚇に流されるとお思いで？」

チグサの持つ長砲身銃ロングライフル、【打鉄】の基本装備『撃鉄』はピタリと照準を定めたまま、今にも火を噴きかねない様子で見据えている。

彼女がその得物の扱いを誤るはずはない。

超長距離射撃命中率の世界記録を叩きだし、一躍『撃鉄』の名をとどろかせたのは他ならぬチグサなのだ。

下手な動きをしようものなら、レコード・キーパーに違わぬ狙撃を味合わせてくるに違いない。

（やっばか。やっこさん、羊の皮を被ってやがったな）

チツ、とイーリスはしたたかに悪態をついた。

日本政府は外交下手だ。土下座外交や優柔不断、アメリカ任せなど、昔ながらの体墮落は今も表面上は続いている。

しかし、その裏でえげつないほどの根回しや暗躍、さらにはISの武力をちらつかせた恫喝じみた涉外活動を行っているとの噂も聞く。

オカルトだろう、と軍の上層部はいつも通りの日本の調子を見て気にも留めていないようだが、イーリスはチグサの調子からまんざらでもないと思直した。

「分かった。無用なゴタゴタはこつちも本意じゃねえ。それにお前さんとドンパチやるつもりもねえんだ」

ハツタリ勝負も分が悪いか、とイーリスは苦虫を噛みしめた表情で両手を上げる。

つまらぬ意地を張って目的を見失っては意味がない。

それに「シルバリオ・ゴスペル」の暴走を抑えようとしているのは先方も同じなはずだ。少なくとも敵に回りはしないだろう。

「賢明です。それでは先ほどの指示に従い、退避なさい」

「悪いがちよいと目こぼししちやあくれねえか？　おいおいウチの暴走ISが突っ込んでくる。それを止めたいんだ」

「懸念無用です。暴走機はこちらで対処しましょう」

「そりゃあ安心だ、とは残念ながらいかねえんだよ。悪いがアンタとはスペックが違う。その【打鉄改】あらための足じやあ一度突破を許したら追いつけねえぜ？」

「後詰めにクスノキが待機しております。これならばあなたも安心できましょう」

「な、なんとも大盤振る舞いじゃねえか……」

イーリスは舌を巻いた。

クスノキといえば三木一草の筆頭だ。イーリスのような国家代表クラスでも比肩できるのは限られるほどの兵つわものである。

それほどの逸材までスタンバツているとなると、

(ドサクサに紛れて拿捕するつもりか……！)

イーリスは踵を返した。どうやらチグサに譲る気は無いらしい。ならばこの場で足止め喰らっている時間がもったいない。

日本領空圏外のクロスポイントに飛ばして行き、チグサたちより先にナターシャを捕まえるしか手立てはない。

正直間に合うとは思えなかった。先ほど推進システムに被害を受けたため、もう超加速は使えないからだ。

一縷の望みをIS学園の生徒たちの奮戦に賭け、出せる全力で駆けつけるしかない。

「いいか！ 暴走機は私が抑える。ウチのナタルに手を出すんじゃないぞ！」

去り際に警告を発して飛び去ろうとすると、

「———どうやら、もう遅いようですね」

落ち着き払ったチグサの銃口が別の方角へ向けられる。

「！ もう来やがったのか!？」

チグサの向いた彼方に目を凝らすと、たちこめる雲間に「シルバリオ・ゴスペル」が物凄い速さで向かってくるのが見えた。

しかも、その形状はイーリスの知るものとは違っている。

破損を受けているのではない。名が表す銀色の翼と装甲は変わらぬ輝きを放っている。

おかしいのは頭部だ。本来一対の巨大な翼を持った異様がエネルギー状の翼に変わっている。さらに各パーツもところどころ違っている。

追加装備を施したとはいえ、ここまで外見が変わるものではない。

ISの外見が変わるのは、換装パッケージ装備の運用でなければ、形態フォーム以降ぐらいしかない。

「シルバリオ・ゴスペル」は一次移行ファースト・シフトはとうに済ませている。となれば、残るは前例がほとんど無いと言われる、

「まさか、セカンド・シフト二次移行だど!? ナタル、いったいお前に何があつたんだ!」

イーリスは盟友のISの異常に狼狽せずにはいられなかった。



【シルバリオ・ゴスペル】から遅れること僅か、一夏と箒が全速力で追走していた。

箒の機体は普段の【打鉄】ではない。かねてから姉の束が開発していた朱色のIS【紅椿】に変わっている。

束が最愛の妹のために丹精込めて作った一品だけあって、朱漆のようなカラーリングと金の蒔絵で手足を飾った絢爛たる出で立ちだ。

性能も気前良く、現在の最先端を超えた世界二例目の第四世代。その機動力はすさまじく、背中の花卉のようなバインダーと腕部・脚部の各ユニットからくりなす推進力は余裕でトップレベルを超えている。

しかし、

「この【紅椿】ですら追いつけないとは……!」

箒の表情に余裕はない。

【シルバリオ・ゴスペル】は英国製ユニットの追加装備もあって、現行機最高速度を更新していた。

【紅椿】が劣ることはないとしても、一度離された距離が詰められないほど速度は拮抗している。

「あきらめるな、箒! 先にやられたみんなのためにも、俺たちが負けるわけにはいかないんだ!」

箒の背に乗る一夏が気を吐く。

一夏の言う通り、迎撃に当たった仲間たちはみなやられてしまっていた。

ラウラの【シュヴァルツェア・レーゲン】の重装甲を貫き、

シャルロットの【ラファール・リヴァイヴ・カスタムII】の手数を抑き折り、

セシリアの「ブルー・ティアーズ」の速度を蹴散らして、

「シルバリオ・ゴスペル」は羅刹のごとく駆けている。

「わかっている！　だがラウラが言うには、ヤツはお前と同じようにセカンド・シフト二次移行を起こしたらしい。遅れてくる鈴には悪いが、私と一夏でなければ太刀打ちできない！」

「俺は大丈夫だ！　箒こそしつかりしろよ、もう俺がやられても取り乱すなよ！」

「お、お前が情けないからいけないんだっ。だが二人ならきつと、いや、絶対にやり遂げられる！」

「ああ！　なんとか追いついてみせようぜ、箒！」

一度撃墜されたとは思えないほど、一夏の呼びかけは心強い。

その声に勇気づけられたのか、箒の【紅椿】の光跡が一段と輝いた。少しずつだが敵との距離が詰められる。

「いける、この速度なら！」

「！　向こうが気づいた、よける箒！」

一夏が箒の右肩を押して軌道をずらす。

その直後、数多の光弾が元の位置を貫いた。

『キアアアアアア……！』

【シルバリオ・ゴスペル】は翼を翻すと獰猛な金切り声を上げて向かってくる。

続けざまに全身の銀翼から放たれる弾丸が、今度は幕のように広がった。

文字通りの弾幕が一夏たちを面で制圧しにかかる。

「させるかああああ!!」

一夏は左手を突き出すと光の楯がかざされた。

【白式】が二次移行によって得た新たな武装『雪羅』によるエネルギーセカンド・シフト防壁だ。

『零落白夜』と同じくエネルギーを無効化する楯は凶悪な威力の光弾すら打ち消し、弾幕を喰い破る。

「いくぞ、箒！」

「わかっている！　決めるぞ、一夏！」

一夏が『雪片式型』を右手に構え、箒が両手に『空裂』『雨月』の二振り抜き放ち、一気に突っ込む。

敵は光弾のレンジを絞り弾幕の濃度を上げるが、『雪羅』の楯に受け流されて一夏たちの勢いを殺せない。

間合いが迫る。

「おおおおおおおおお!!」

「はああああああああ!!」

二人の気合が一つとなって、三つの斬撃が放たれた。

その刃が届く刹那【シルバリオ・ゴスペル】の姿が墜ちる。

頭部のエネルギー・ウイングが人外の動きを見せ、スライディングするように一夏たちの真下に滑り込んだのだ。

そこに『雪羅』の楯は無い。

「——ッ、が、はあ?」

腹を見せる形となった箒めがけ【シルバリオ・ゴスペル】の光弾が襲う。

たまらず箒の体勢が崩れ落ちた。が、なんとか飛行は維持する。他のISであればKOしていたことだろう。

しかし、先の戦闘からのダメージもあって、飛んでいるのがやっとなんて状態だ。

「箒いいいっ!! クソッ! もうこれ以上は!」

一夏が箒の背中から離れ、その身でかばう形で敵に向いた。

相手の『シルバー・ベル』はすでに全銃口を一夏たちへ定めている。

一夏は背中に冷たい汗を流すと、とつさに『雪羅』を展開し、すんて既のところ銃雨を防いだ。

だが、こうなつてはもはや防戦一方だ。

後ろに箒を置いたままでは動くことも構わない。

「一夏! もういい、お前だけでも……!」

「ふざけるな! 箒を見捨てるなんて絶対にできるかっ!」

「しかし、このままでは【白式】のエネルギーが……!」

箒の言うとおり、大飯食らいの『零落白夜』を模した『雪羅』がみるみるうちにエネルギーを食っていく。

先程までは【紅椿】の能力『絢爛舞踏』によって【白式】にエネルギー供給をしていたが、満身創痍の状態で下手をしては箒の身まで危ぶまれる。

「箒、逃げろー！ 早く、今のうちに！」

「う、く…、ん？ どうした、【紅椿】！ 動けっ！ 動いてくれっ?!」

箒がもがき動かそうにもISが言うことを聞かない。すれ違いざまの一撃が効き、もはや墜落しただけで精一杯なのだ。

「お願いだから、動いてっ!! このままじゃあ一夏が……! 【紅椿】 いいいい!」

「く……、そ……」

【白式】のエネルギーがレッドゾーンに入る。

もはや一刻の猶予も無かった。

敵は勝利を確信したのか、さらに弾幕を厚くしようと全身の翼が一夏たちに向けられる。

そんな中、

『ギッ……?!』

何か巨大なものが【シルバリオ・ゴスペル】に覆いかぶさった。

なんだ？ と確認する前に四つの足が絡みつき、尋常でない剛力で締め上げられる。

翼をふさがれ、バランスを失った機体は飛ぶ事もままならず墮ちていく。しかも不可思議なほどの重量で、スピードは重力加速度を無視する勢いで落下し、海面へと叩きつけられた。

「え……」

何が起きたのか呆然とする一夏が見たのは、大きな波飛沫を上げる碧い海と、

「あ、あれは……?」

箒の示す頭上、まるで空に穴があいたような亀裂が塞がっていく様子だけだった。

少しして、鈴がようやく追い付いて来た。

「一夏っ、無事でしょうね?! 箒も、ああもうボロボロで！」

「……鈴」

「アイツは？ 暴走したISはどうなったのよ!？」

「……あれじゃ、ないかな?」

一夏が指差す海の上に、ぷかりと人の形をしたものが浮かんでいた。

各所の翼がもがれ、箒以上にボロ雑巾となっているが、その姿は先ほどまで死闘を繰り広げていた「シルバリオ・ゴスペル」に相違ない。「いったい、何があったっていうのよ……?」

鈴の問に答えられる者はこの場には誰もいなかった。

後におっとり刀で駆けつけて来たアメリカ軍のISパイロットも、友軍機の惨状に言葉を失い、信じられないものを見るように一夏たちを見回しているだけだった。

52話 ミーティングは参加者が少なくても別個の視点があれば有意義

【銀の福音】シルバリオ・ゴスペルの暴走事件から数日後。

「うーん。申し訳ないが、もう一度言ってくれないかい？」

畳の匂いが新しい新調の和室で、新茶を入れた湯呑を置きながらその女性は言った。

妙齡の、美人、というよりも人好きするような雰囲気を持つ糸目の人だった。

「突然、巨大な何かが空から降ってきて、米軍ヤンキーどもの不良ISを海へ引きずり落としたのです」

座卓の向かいに座るチグサは凜とした口調でそう言った。

持参したバッグから数枚の写真を取り出すと、相手に向けて広げて見せる。

「ご覧のとおり、空に亀裂が入り、鉛色の巨体が現れたのです。敵を抱きかかえるや違う重力下にあるかのようにストンと落ちていきました」

「……【シルバリオ・ゴスペル】と向かい合っている二人は、織斑一夏くんと、篠ノ之箒さんだね。二人とも変わったISをまとっているようだけど、何かあったのかねえ」

「重要なのはそこではありませんよ、クスノキ」

トン、と一枚の写真へ指を叩いた。

「これを見たところ、下手人はIS、【グレイ・アイデール】に相違ありません」

「相違ありませんっていったって、彼、ええとトミヤくんだったかな、その子は当日IS学園から出ていないんだらう？」

「機体が量産化されているとみるべきでしょう。そしてこの空の亀裂も同じ組織の輩やからが絡よんでいるとみるべきです」

クスノキは湯呑を口に運ぶと、ふう、と息を着いた。

「そんなことが起きてしまつては、世界が一変しそうだねえ。アタシ

が同じチカラを持っていたら各国の要人の目の前に現れて、『いや、ウチらここまで来ちゃいましたよ。ちよつと世界を超えちゃいましたかね。じゃ、また今度』なーんて冗談飛ばしておったまげて見せたかね」

「瞬間移動などというチカラが現実化された日には、あらゆる安全保障が無価値となります。世界中が大混乱になりますよ」

「ISがあらわれた日も同じことが起こったのかもしれないねえ」

「クスノキ、悠長に構える話ではありませんよ」

真剣に詰め寄るチグサを、クスノキは受け流すように立ち上がって縁側に出た。

外には見事に手入れされた日本庭園が広がっている。

夏の深緑が増し、池の周りにはアジサイや菖蒲の花が可憐に咲き誇っていた。

「例えばだけど、この庭にワープを使って完全武装のISが乗り込んでくる、なんてことが起きると思うかい？」

「ありえない話ではありません。私やクスノキであれば瞬時にISを展開して返り討ちにするでしょうが、他はそうもいかないでしょう」「そうだねえ。でも、今のところ起きていないのはどういうわけなんだろうなあ」

「牙を研いでいるのでは？」

「牙を持っていないのかもしれないよ」

え？ とチグサはクスノキの後ろ姿をみた。

「もし牙や爪を持つ者がすごいチカラを得たならば、何かしら試し切りをしたと思うだろう。それがチカラを持つ者の業だからね。けれど、アタシが知る限りこんな不可思議な事は初めてだ。ひよつとしたら今回が最初のワープ使用だったのかもしれない」

クスノキはチグサに向き直る。

「チグサ、もし君がこんなチカラを持ったとしたら、ぶっつけ本番で使うかい？」

「ありえませんが。安全性や運用実績を得るためにも試運転はするでしょう」

「そうだろうなあ。となると、相手は牙を持っていないか、もしくは持っているが抜いてしまった者かもしれない。今回の使用をみても、暴走するISを止めるためなんていう善行と呼べる扱いをしたわけだしね」

「……楽観的すぎるのでは？」

「世界を驚かせて回る篠ノ之東が運用したならばこうは考えないさね。けど、篠ノ之東ならばもつとド派手に演出するだろう。世間に公表されている、アメリカ軍が友軍機を抑えたという話も、一部の者のみを知るIS学園の生徒たちの活躍の話も、まるで核心にふれていないじゃないか」

ふむ、とチグサはうつむき考え込んだ。

クスノキの話を踏まえて、まだ見ぬ相手の素性に思いを巡らしているのだろう。

その様子をクスノキは苦笑しながら眺めた。相変わらず心配性の苦労性だなあ、と仲間の性格を心配して。

「とりあえず、瞬間移動をした者が誰かを突き止めることが肝要じゃないかい。その点でいうと、アタシはこれからとつかりに会えそうさね」

「とつかり、というと？」

「なあに、最近IS学園の生徒さんから練習を見てほしいと申し込まれていてね。ああ、もちろん日本人相手だからご心配なく」

「外人に手ほどきをするなという厳命、守っていただけで嬉しいですよ。そういうえばIS学園はいま夏季休暇でしたね。なるほど、出稽古というわけですか」

「感心な若者じゃないさね。あ、別にウチラが歳喰ってるって言いたいわけじゃないからね」

「何も申ししておりませんよ。それで、お相手はどちら様なのですか？」
「相川さんといったかな。こないだ更識の子とそのお付きさん相手にしたら、そこから繋がったみたいだね」

「貴方のその人を引き付ける魅力は連鎖するのですね」

「褒めても何も出ないさね。そういうわけで、それとなくトミヤくん

のことを探ってくるよ」

それじゃ、とクスノキはその場を後にした。

和室に入り込む風は日本庭園の緑にふれて、暑さが和らいだ清々しさを運んでいた。



暗闇の中、チグサが撮った写真と同じような画像が、唯一の光点であるディスプレイに浮かんでいた。

「ふっふーん☒ やりおるのう、やりおうのう。さあつすがくーちゃんのカレシ（予定）さん」

「あの、東さま、その呼び方はもうやめていただきたいのですが」

「およ？ あー、もう身を引いちやったんだったよね、もつたいたい。それじゃあ何て呼ぼうか？ トミーくんだからとーちゃん？」

「み、の一文字くらい抜かさなくても十分略称になっているかと」

「ちつつちつち、甘いねくーちゃん。一文字抜くだけでそれだけ世界は縮まるんだよ。主に文章量的な意味で」

「ミーニングが分かれてしまつては、説明する分量が増えてしまつてむしろ広がつていしまいます」

「を、くーちゃんいま『み』と『ミーニング』をかけたのかな？ でもさんねん、一文字と単語じゃあ掛けたりも割つたりもできないぜい。あと宇宙は分岐点があるまで広がり続けるんだからこの先ミーニングももつとたくさん増えるかもね」

「ところでだ！ と東は回転椅子をぐるんと回してクロエに向き直つた。

「どうやらトミーちゃんたちは「セブンス・プリンセス」の可能性に気づいたみたいだね。この調子なら彼はきつとISの持つポテンシャルをもつともつと引き出してくれるかもしれないよ！」

「二夏様が二次移行^{セカンド・シフト}を果たしたように、ですか？」

「それもだね！ いくくんもトミーちゃんも、うちの箒ちゃんとは仲良しだから、きつと箒ちゃんと【紅椿】を高めてくれるよ！」

東はガッツポーズするように拳を掲げるが、急にぐたーと下ろした。

「それにしてもやっぱりぶつつけ本番はいけないね。箒ちゃんたらあんなトサカ頭にやられるなんてガツカリしちゃった」

「最近ご自分の未熟さを目の当たりにする機会が多いのもあるでしょう。東様からISをもらったときも、以前の箒様でしたら拒絶なさっていたかもしれません」

「なーんか焦つちやつてる感バリバリなんだよねえ。私もメンタルばつかりはどうしようもないなあ。でも、【紅椿】という最強のISを与えたんだからもっと頑張つてほしいなー」

「最強の肉体を得ても精神的な脆さで勇者に敗れる、というシナリオはままあります。やはり支えてあげられる方が必要ではないでしょうか」

「んー、いつくんに発破かけようかなー。でも、ハー！ ってやつてせっかく二次移行した【白式】壊しちゃうのももったいないしなー」
ちら、と東はクロエにいたずらっぽい笑顔を向ける。

「このさい、壊れちゃってもいいトミーちゃんに発破をかけるのは……」

「ダメです」

「えー、けちー。ちよつとくらいいいじゃないー」

「ちよつとでもそつとでもダメです」

「もしトミーちゃんが箒ちゃん射止めたらくーちゃんとはホントの親戚になれるんだよう」

「ダメなものはダメです。身内だからこそ甘くなるとは限りません」
「ひーん。くーちゃんの義理ブラコンー」

駄々をこねる東にため息を着いて、クロエは新しい紅茶を煎れにその場を離れた。

どういうミーニングのため息だったかは、彼女自身も詮索しないことにした。

ISの運用は運動能力と密接にからんでいるため、入学する生徒たちはたいていスポーツの素養が高い。もちろん整備科選考者のように頭脳派なれど運動音痴な生徒も一部いるが、入学に際し高い倍率の壁を超えられる生徒だけあって、総合的なポテンシャルは非常に高かった。

いわば一流の強豪校と遜色ない剣士たちが腕を磨くIS学園の訓練場には、今日はたった二人だけだった。

にもかかわらず圧倒的な緊迫感がみなぎっている。

ドン！

といきなり篠ノ之が一步踏み込んだ。

剣の間合いにはやや遠い。フェイントだ。

釣られたのか、四十院の竹刀がやや上がる。

好機とみた篠ノ之はすかさず送り足で態勢を整えた。

一足一刀の間合いにはまだ遠い。しかし強靱な瞬発力が距離を飛び越える。

同時に剣がわつ、とひるがえった。目にもとまらぬ一刀が相手の面に振り下ろされる。

「めええええーん!!」

入った！

と思われた剣が空を切った。

四十院の身が掻き消えるように横に流れたのだ。

手に持つ竹刀は返す勢いにまかせて横薙ぎを放つ。

「胴——」

物打ちと呼ばれる竹刀の有効打位が篠ノ之の横つ腹を強かに打った。

剣道の技で一番カツコイイと言われる抜き銅が決まったのだ。

打った後の抜きも残心を見事に決める。

まぎれもない一本だ。

篠ノ之は不覚を悟ったのか、ガツクリと膝を着いた。

振り返る四十院へ攻撃する気配はもはやない。

四十院は正眼に構えた剣を収めると無言のままに一礼をした。

決着だ。

中学時代、剣道全日本一に輝いた篠ノ之箒が、クラスメイトで部活仲間の四十院神楽しじゅういんかぐらに敗北を喫する結果となった。



「箒さん、あなた、何かに心を乱されているのではないですか？」

面を外し手拭いで防具てぬぐに着いた汗と自身の長髪をぬぐいながら、神楽は心配そうに尋ねた。

箒は面を外した格好のまま顔を向けようともしない。

「いや、別に……。そんなことはない」

「嘘ですよ」

神楽はおつとりとした垂れ目をいからせる。

「臨海学校から帰ってきてからずっと、どこか落ち着きがないご様子でした」

控えめながら、神楽の声音は気品がある。

旧華族の出自というだけあって、行儀作法をわきまえている者の振る舞いだった。

「今日、箒さんを稽古にお誘いしたのも御気分をうかがうためです。互いに剣士同士、武道の中で語り合えるかと思いましたが、まさかこれほどささく立っておいでとは思いませんでした」

箒はうつむいたまま黙りこくっていた。

したたり落ちる汗にも気に留めず、手拭いでふこうともしない。

「何が、おありになりましたの？」

箒は応えない。

神楽は身をただし、正座して箒に向いた。

「……わたくし、今日はご返事を聞くまではいっまでもこうしていようと決めています」

そういうと、神楽はじつと箒が動くのを待った。

五分、

十分、

十五分、

何も言わず、微動だにせず、ただ箒の機が熟すのを待ち続けた。まるで時間が止まったかのように二人の少女は動かない。ただ屋根を叩く雨音だけが道場を包んでいた。

「……参ったな」

先に音を上げたのは箒だった。

足を崩して、ようやく神楽に向き直る。

「さっきの試合と同じだ。自分の弱さに、辟易してしまったのさ」

神楽は顔を少し傾けて話の先を促した。そのしぐさにはいちいち風格がある。

「せつかく……、せつかく新しいチカラを手にしたのに、ようやく仲間の役に立てると思ったのに。私は、私は結局勝てなかった」

ぐっ、と太腿の上で握る拳に力がこもる。

神楽は清聴する。

箒の言っていることが何を意味するのかは正直わからない。しかし彼女に何かがあったのは確かだった。

それが箒にとって心を荒^{すさ}ませることでもあることも理解していた。

「手を借りまいと思っていた大嫌いな者の助力を受け入れてすらこのザマで……。そんな奴を受け入れてしまった自分の心もみすぼらしくて……」

箒の手が震え、次第に肩も震えだした。

怒りと悲しみがふつふつと湧き上がっているのだろう。

それも自分自身の身を傷つけるような、体内から棘が突き出しているような自責の念に苛まれている。

神楽はあまりにもいたいけに感じて、そつと震える箒の背中に手を回した。

幼子をあやすように包み込み、痛みを和らげるようにさすりあげる。

「私は……、よわいっ！ 弱くて、ああ……、なんて情けないんだっ！」
箒の口からついに感情がほとばしった。

身体をくの字に曲げて神楽の胸に顔をうずめる。
腹の中にため込んでいた淀んだものを、すべて吐き出すように嗚咽する。

神楽はしつかりと受け止めて、何も言わずに寄り添っていた。

道場には二人だけだった。

神楽はあえて部活動の練習がない日を選んでいたので。

外は雨脚が強まり、屋根を打つ調子が強くなる。

箒の嘆きを掻き消そうとしているかのようだった。

雨曇りの薄暗いなか、激しい雨と慟哭がいつまでも響き渡っていた。



しばらくして、箒がようやく気分を落ち着かせると、沈黙を保っていた神楽は静かに切り出した。

「箒さん、一緒に出稽古に行きませんか？」

しゃっくりをしながら箒は顔を上げる。涙や汗で乱れた姿を神楽はぬぐいながら言葉を吐き出した。

「私の家は旧いだけ取り柄ですが、それだけに昔ながらの付き合いというのも多少あるのです。その中には、きっと箒さんのためになる方がおりますの」

「わたしの、ためになるかた？」

「ええ。強くなりたいと願うならなおさらです。実はわたくしもその方から何度か手習いを受けたことがありますの。とつても気さくな明るい方です」

いかがですか？ と微笑む神楽に箒はうなずき返した。

すさんだ心を受け止めてくれた剣友の神楽であれば、きっと悪いようにはしないだろう。

「わかった……。よろしくたのむ」

「はい。それでは汗を流してから、学園本館の玄関で待ち合わせにし

「ませんか？」

「今日、いくのか？」

「善は急げと申します。部活棟の管理をしている榊原先生にはわたくしから伝えていきますので、後片付けはお任せください」

「ずいぶんと手際が良いな、と箒は少しいぶかしんだ。」

「神楽、ひよつとして最初から私を誘おうとしていたのか？」

「さあ、どうでしょう。ただ心に浮かんだことを出まかせにしているだけかもしれない。そんなことよりも早く準備なさってください。車をすぐに用意します」

「いや、そんなに急かすこともないのでは」

「鉄は熱いうちに打てとも言うでしょう。思い立ったが吉日です。後は野となれ山となれ。ささ、参りましょう」

神楽が箒の手を取って体を起こす。

箒はなんだか神楽のペースに乗せられたような気分だった。

そもそも神楽は自分の調子を通すのが上手い。

普段はおつとりと物静かなお嬢様なのだが、人の上に立つ教育を受けてきたせいも、他人を押しつけるよりすり抜けざまに巻き込んで引きずっていくようなタイプだと箒は見ていた。

要はめちやくちや強引なのだ。

しかし、今のだらしない自分が一人で何かするよりも、ずっと成果が上がるだろう。

箒は神楽に背中を押されながら、まんざらでもない気で流されていく自分にそう言い聞かせた。



神楽が呼んだ国産高級車に乗せられて快適な移動を初めて数十分。「まだ目的地にはつかないのか？」

箒は神楽に問いかけた。

車窓から流れる景色はどんどん緑が濃くなっていく。

いったいどこに連れていかれるのだろう。

「すみません、もうしばらくかかりますの。運転手さん、道路状況はいかがでしょうか？」

「せやなあ」

タクシードライバーみたいなパンツスーツに身を包んだ運転手の女性がカーナビを操作する。

「あかんわ。この雨やからな、だいぶ混んどるし、横道で飛ばすのもおっくうや。姉ちゃんら、観念して菓子食いながらダベっとってや」
調子のいい方言をかましながら、当初から用意された和菓子ボックスを勧めてくる。

ずいぶんと気さくな運転手だな、と箒は思った。

「どこへ、向かっているのですか？」

箒がおおずとおと尋ねる。

「なんやお嬢様から聞いとらへんのかい。富士山や」

「フジサン？」

箒は神樂を見遣った。

神樂はお饅頭をぺろりと一口に入れて、右手で口元を隠しながら咀嚼している。

「せや。麓にウチらのアジトがあるからな」

「アジトって、運転手さんの会社ですか？ 私はてつきり道場か何かに向かっていると思っただけです」

「会社つっのもちと違うな。道場、まー鍛錬場って意味なら同じやな。なーに着いたらわかるわ。この名和なわおねーさんにまかせとき」

「名和さん……？」

どこかで聞いたことのある名前だな、と箒は首をひねった。

隣の神樂はペットボトルのお茶を飲み込んでようやく一息ついている。

「遠くまですみません、名和さん。本来でしたら近場の都内にしたかったのですが」

「しゃあないわ。ちようどクスノキが先におさえとったからな」

「クスノキって……」

箒の疑問をよそに話が続く。

「相川さんが申し込んでいたのでしたね。まさか親切にお受けなさるとは思いませんでした」

「そりゃあ受けるわ。人たらしのクスノキやで？ 後輩の女の子の頼み聞いたら喜び勇んで飛び出すわ」

名和と名乗った運転手はケタケタと笑った。

「しっかしIS学園の生徒はみんな真面目やなあ。イギリスのオルコット嬢ちゃんおったやろ？ どっから聞き及んだか、嬢ちゃんもウチラに教えを受けたい言うて来たんよ。チグサがバツサリ切つとつたけどな」

「それはセシリアさんも残念でしたね」

「ウチにとつちや大事なお得意様やから、固いこと言わんでええやんゆーたんやがな」

「なっ、セシリアもなのか!？」

「せやで。でも箒ちゃんは大丈夫や。なんせ同じ日本人やからな」

運転手はバツクミラー越しに箒へ笑いかけた。

そばかすが特徴的な顔で、狐目みたいなツリ目が箒を捉える。

まるで商家の女将さんみたいな人だなと言う印象を箒は受けた。

それよりも、

「私の名前、知っているんですね。神楽から聞いたんですか」

「ちやうちやう。箒ちゃんの名前は前から知つとつたもん。なんせ、

ウチおんなじ名前なんやからな」

「同じ名前？ ホウキという名前と……、!？」

驚きの表情を上げる箒は、まさか、と声を上げた。

隣の神楽に確かめるように振り返る。たおやかな笑みで返された。

「お気づきになられましたか？」

「さっきから並ぶ名前がおかしいと思っていたんだ！ クスノキ、チグサと聞いて、ホウキと呼ばれるのはその人しかいない」

「あちや、ちよいヒント出しすぎたかな？ まーええわ。ほな箒ちゃん、

ウチの名前は何でしょか？」

箒は息を整えてから真つすぐに言い放った。

「名和伯耆守……！ 一騎当千、三木一草のホウキ殿ですわね!？」

運転手はプツプー、とクラクションを鳴らした。

「だいせーかい！ ウチこそが日本最強の精兵部隊、三木一草の中でも最弱！ ナワホウキノカミ様なるぞ！ ……つて最弱つてなんやねんしまらんわ！」

自己ツツコミにもう一度クラクションを鳴らして、ホウキは快活な笑い声をあげた。

54話 素晴らしい環境

「悪い、お嬢。無理かと思ったがやっぱムリだったわ」

まったく悪びれない様子で女伯爵は頭をかきながら言った。

「だあつはっは、という笑い方はモニター越しからも「まいったまいった」というような心情がくみ取れる。」

「ダメもとではありましたが、そこまでお笑いにならなくともよろしいじゃありませんこと?」

モニターに向かうセシリアは唇をとがらせる。

「そう拗ねんなんて。だいたい英国人が日本の三木一草に教えを乞おうつてのがお門違なんだ」

女伯爵はなだめるように言った。

セシリアから三木一草への取次ぎを頼まれていたのだが、さすがに国家代表クラスの教えをおいそれと開示してもらうのは無茶だった。

女伯爵自身、英国の実力者という立場から三木一草とは知らない仲ではない。というか貴族階級同士というのもあつてチグサとは特に親しい。日本では平民となった旧華族でも、コネクションは続いていることが多いのだ。

そんな仲なのでもしやとは思ったが、「親しき中にも礼儀あります」と一蹴されてしまった。

「女伯爵であれば、教えを乞われれば誰にでもご指導なさってらっしゃるのに」

「私の技は一般的上がりだからな。だが三木一草のは違うんだよ」

「どう違うといいますの?」

女伯爵はテーブルに肩ひじを着いてニヤリと笑った。

「あいつらは自分の技を極めまくってんのさ。それも、一つの流派になるくらいにな」

セシリアは目を見開いた。

「お嬢がお近づきになりたいチグサなんてのはいい例さ。狙撃を中心にしたISの運用、それも超長距離射撃と立体機動の両立だ。撃鉄装備した【打鉄】一機でIS一個小隊足止めできるほどの代物

だぜ？ 日本がIS先進国だっていう理由の一つがそれってことよ」「他のお三方も、同様に独自の流派をお持ちなんですか？」

「そうだが、射撃関連じゃあない。お嬢が弟子入りすんならチグサが適任だ。ま、ガイジンさんは門戸をくぐれないそうだがな」

カウンテス 女伯爵はおもむろにタバコを取り出すと、上品なしぐさで一服ついた。

「むくくく」

と、頬を膨らませるセシリアは面白くない様子だ。

理由はいろいろあるが、先日の福音事件が決定的だった。

要は自分の実力不足に焦っているのである。

ひとときわ努力家の彼女にとって修練と練磨は常なのだが、現状では太刀打ちできない相手と与くみすることが多くて負けが込み、いよいよお尻に火が付くほどに追い詰められているのだった。

(可愛いもんだ)

そんなお嬢を愛らしい気持ちで女伯爵カウンテスは見つめる。

がんばり屋さんなセシリアであればIS学園を卒業するころには目を見張るほどの上達を見せてくれるに違いない。

が、それはもう数年先の話。今ではない。

これはお嬢が成長するための重要な関門なのだ、と先輩IS操縦者は思った。

「そうだ、お嬢、お前さん人を指導する側に立つちやあどうだ？」

「人を指導する側、ですか？」

カウンテス ああ、と女伯爵は我ながらいい思い付きだと言わんばかりに頷く。

「どんなに良い練習しても教わるばっかじゃあなかなか消化しきれないもんさ。実力にまで身に着けるためには、学んだことを発信するの
も一つの手だぜ」

「学んだことを発信する……」

「ちやうど少年……あー、トミヤ坊な。そいつとアイリス姫が補講受けてんだろ？ いわば絶好の機会ってヤツじゃねえか」

「た、確かに！」

セシリアが色めき立った。あと一息かな？ と女伯爵カウンテスはニヤつい

た。

「ココでお嬢が良いコーチやつて頼れる先輩役になるのはどうよ？

あー、ひよつとしたら尊敬されるかもなー。今話題のLSパイロットと一国のお姫様が、セシリアに羨望のまなざし送ったりしてさー」

チラツ、チラツ、とセシリアをみると、うつむきがちな表情の口元がニタついているのが覗けた。効果ありのようだ。

「イイ！ イイですわね女伯爵^{カウンテス}！ やはり貴方に相談したのは正解でしたわ！ こうしてはいられません、すぐに授業の資料をまとめてトミーさんたちのもとへ向かわなくては！」

「おう、その意気だお嬢」

「ごきげんよう女伯爵^{カウンテス}、次は吉報を期待していただきますましー！」

セシリアの弾けそうな笑顔を最後に通信が切られた。

良い仕事したぜ、とブラツクアウトしたディスプレイに映る一女伯爵《カウンテス》の表情が、ふいに曇る。

「あれ、これフラグじゃね……？」

こういうイケイケドンドンな状況のセシリアはたいてい空周る。ということに気づくくらいセシリアと女伯爵^{カウンテス}の距離は近かった。

そして前例を踏まえて取るべき手段は、

「ま、いっか」

適当に信頼してスルーするに限る。

だいたい、放置しても勝手に乗り越えるくらいセシリアはたくましいのだ。心配するだけ野暮である。

次のお嬢との会話でどんな話が飛び出すのか。なんにせよ、セシリアがイギリスに帰ってくる日はだいぶ遠のくだろう。

陰ながらの支援として、オルコット家侍女チェルシー・ブランケツトへご機嫌伺いにも行こうかと、女伯爵^{カウンテス}はタバコの煙でいっぱいの書斎を後にした。

◇

果たしてその30分後、構築したフラグは無事に回収された。

授業のレポートをどっしりと詰め込んだバッグを片手に乗り込んだ、自習室を兼ねるIS学園図書館には、トミーと、最近彼の隣を独占するアイリス。そして、

「僕も声を掛けようかと思っただけだね」

セシリアの隣に進み出てささやくシャルロットが示す机では、一夏が熱心に講義を行っている様子だった。

「ま、まさか一夏さんに先を越されるとは思いもよりませんでしたわ……」

ふらついて一步のけ反るほどに、セシリアにとって思ってもない事態だった。

「あれで一夏って教えるのが上手いんだよ」

シャルロットが小声で言う。

「そ、そうなんですの？ 正直、意外なのですが」

「ほら、一夏って授業に着いてくるのが、悪いけどやっつとでしょ？ だから人一倍大変さを分かっているんだよ」

「ご苦労なさっているぶん、ご教授がたくみだと？」

「そういうこと。重要な部分はしっかり押さえているみたい」

セシリアは一夏の講義に聞き耳を立ててみた。

一夏は自分で作ったレポートと教科書をペン先で示しながら、トミーとアイリスに教えている。

「この部分についてだけど、実は教科書の前のページにも登場しているんだ。えつと……あった、ここだ。一緒だろ？ つまり今回の話についても、前回の内容の焼き直しと捉えてみるとやりやすいんだ」

おおー、とトミーたちの感嘆声がデュエットする。

二人も示された前のページを開きながら現在の問題に取り掛かっているようだ。

「ね」

シャルロットが楽し気にウインクをみせた。

「さすがは織斑先生の弟さん、といったところでしょうか。もしくは」

セシリアが優しい横目をシャルロットに向ける。

「貴方の一夏さんへの指導法を吸収したのかもしれませんがね」

「そ、そうかな。まあ、ところどころ拙い箇所があるのは僕のせいかもね」

「……わたくしも、教え方が堪能であればいいのですが」

「セシリア？」

「指導力があれば、裏打ちされた実力が身に着くものでしょう」

セシリアは女伯爵カウンテスの助言を口にした。

そういえば、「シルバリオ・ゴスペル」との戦いにおいても、シャルロットは撃墜されたわけではなかった。

愛機得意の手数をもともされずに叩き折られたが、それは出した手札をことごとく破られたということに過ぎない。

シャルロットは直接対決が不利と悟るや、僚機との連携と牽制に徹した。学園トーナメントでコンビネーションの大事さを体感しているだけに、洗練された動きが何度も仲間の危機をフォローしている。

結果、「シルバリオ・ゴスペル」を空域離脱に、ある意味追い込むことができた。

逃げられはしてもやられてはいはない。判定負けではあるが、手も足も出せずに敗北を喫したわけではないのだ。

「未熟者が教官役になるなど、おこがましいと思うがな」

シャルロットとセシリアの後ろからいきなり声をかけられた。

振り返ると、

「ラウラ」

名前を呼ぶシャルロットに、ラウラは一枚の切符を渡した。ついでセシリアにも

「な、なんですのこれ？」

「食券だ」

「あ、もうそんな時間？」

「タイムキーパーは大事な役目だぞ、シャルロット」

「ご、ゴメンなさい……」

「まったく。セシリア、お前の指導とやらは午後からにさせてもらおうぞ」

「わたくしの指南など差し出がましいといひますの？」

セシリアはムツとしたトーンで応える。

「トミヤたちに休憩を取らせねばならない。朝からぶっ続けだったんだ、自覚がなくとも疲れが溜まる」

ラウラはセシリア達のあいだを邪魔だと言うように押しのけて、トミー達がいる場所へ向かっていく。

その背中に、セシリアは声を荒げた。

「多少なりとも成長する機会があるなら、取り組むべきかと思いませんか？」

「自分のためにトミヤを巻き込むな」

振り返るラウラの目つきは突き刺すように鋭くセシリアに向けられた。

「私は今より強くなれるとしても、トミヤを踏み台に使いはしないぞ」

「踏み台にするなど思ってませんわ！」

「利用はするのだろうか？」

「い、言い方というものがありましようっ」

「要は同じだ。……私なぞ」

ラウラの視線が力なく落ちる。

「一方的に撃墜されたんだぞ」

セシリアとシャルロットが、ぐっ、と引いた。

返す言葉もなかった。

【シルバリオ・ゴスペル】との戦闘で、真っ先にやられたのはラウラだった。

【シュヴァルツエア・レーゲン】の重装甲を頼みに盾役を任せた戦術のせいなのだが、敵の攻撃は想像を絶し、瞬く間にラウラは撃破された。

現役の軍人で世界有数の第三世代ISを駆るラウラが、である。

少なくとも自信とプライドもろともに海に没し、回収されたときはしばらく口を利けなかったほど、落ち込みようは激しかった。

仲間たちの活躍によって【シルバリオ・ゴスペル】を倒せていればまだマシだったのだが、正体不明かつ原因不明の事態で戦いの幕が下ろされただけに、ラウラは行き場のないやるせなさを引きずったまま

にある。

「弱さを自覚するなら鍛錬する以外に解答はない。セシリア、もしお前も私と同じように思っているなら、場所を移して付き合ってくれないか？」

「……私のほうがより未熟者でしてよ？」

「自惚れ者を相手にするよりはるかにマシだ」

「まあ」

セシリアの顔色が変わった。ぶっきらぼうなラウラの表現にも慣れてきたためか、彼女の真意がくみ取れるようになってきた。

珍しいことに、ラウラはセシリアを認めているようだった。

「よろしくてよ、ぜひ一緒に一緒にいたしますわ」

セシリアはスカートの裾をつまんでカーテシーのおじぎで返した。

ラウラは相応の返礼をするべく、姿勢を直すと踵を付けて敬礼で応じた。

二人の表情にはいつの間にか笑顔が咲いている。

(なんだかんだ、仲いいよね、ふたりとも)

シャルロットは微笑ましそうにやり取りを見つめる。

きつと、セシリアも、ラウラも、そして仲間たちも、これからもっともつと成長していくだろう。

そんな素晴らしい環境に身を置けたことが心から嬉しかった。

フランス、デュノア社からは夏休み中に一度帰ってくるように言われているが、みんなと一緒に駄々をこねるのもいいかもしれない。

天気は今日まで雨だという。明日からは晴れるだろう。必ず。

55話 夏のBeachに悪ノリGirls

「海へ、ですか?」

「ああ」

職員室に呼び出されたトミーとアイリスに向けて、千冬はコーヒークップをソーサーに置きながら言った。

「補講も無事に終えたようだしな。お前たちだけ臨海学校を体験できないのも寂しいだろう」

千冬のデスクにはトミーたちの答案用紙が広がっている。採点結果は上々で、備考欄には補講を取り仕切っていたアリーシャの太鼓判も押されていた。

ついでに、

「真面目に頑張った生徒たちにご褒美を上げてもバチは当たらないんじゃないのサ」

と絵文字付きで劳いの要望が添えられていた。

読み上げた千冬は、あのアリーシャがなかなかどうして生徒思いなものだ、と苦笑を禁じ得なかった。

「そ、そ、それはわらわとトミーだけで行けるというのか!」

アイリスが身を乗り出して問いかける。

二人だけ、というのは、お付きのジブリルは先だつて祖国に戻っていて不在だからだ。アイリスから離れてしまうことに大層不満を持っていたが、公家の命とあればしようがない。

おかげでアイリスは悠々と羽を伸ばせる状態だった。

「そんなわけがないだろう馬鹿者」

千冬は身分の隔てなく切り捨てる。

「クラスメイトの専用機持ちたちも一緒だ。当然引率も付ける。若い身空の男女を勝手にさせる訳があるか」

「ぐぬう」

「引率はともかく、一夏たちも一緒なんですか」

トミーは嬉しそうに言った。まあな、と千冬は応じる。

「あいつらは臨海学校の際、イレギュラー対応もあつて負担をかけた

からな。これくらいのサービスはくれてやってもいいだろう。とはいえ、私たちの目がないからと言って、あまり羽目を外しすぎるなよ」「む？」織斑先生たちが引率者ではないのか？」

「ああ。私もアリーシヤもこれで忙しい身なのでな。今回は特別講師に来てもらうことにした。せいぜい可愛がってもらおうといい」

千冬は意味深な笑みを浮かべる。

トミーとアイリスは戸惑いがちに視線を合わせた。

とはいえ、諦めていた臨海学校へ行けるのは嬉しい。

交わされた表情は自然と笑顔に変わっていった。

「ありがとうございます、織斑先生」

教え子たちからの感謝の言葉に、千冬はコーヒーをすすりながら手を振って応えた。



青い空。

碧い海。

光る砂浜に、駆け回る水着の乙女たち。

「これぞっ、夏ってやつじゃない！」

鈴は拳を掲げて歓声を上げながら海に飛び込んでいった。

「待ってよ、鈴。ほら、一夏もいこっ」

鈴の後に続いて、シャルロットが一夏の手を引いて波打ち際に走っていく。

「ちよ、待ってくれよ二人とも！」

一夏は足をもたつかせながらも着いてき、海に入ると同時に鈴から海水をかけられた。

「わっぷり!? やったなく鈴！」

「きやははっ! かかってきなさいよ一夏！」

バシャバシャと水を飛ばしあう二人に、シャルロットは一夏に加勢する。心なし鈴に詰め寄って。

「鈴、今わざとやったね？」

「なぐんのことかしら〜」

「とぼけちゃって。せつかく自然な流れで手をつなげたつていうのに」

「抜け駆けなんてさせないつてのよ。そらつ、今度は追いかけっこよ！」

「元気よく泳いでいく鈴に、一夏は童心に帰ったようにはしやぎながら追いかけていった。」

「へへっ、泳ぎなら俺の方が早かったんだぜ」

「そんなの中学時代の話じゃない。……つてシャルロットはや!?」

「はいタッチ！ 今度の鬼は僕だよ。一夏、捕まえにおいで」

「ちよつと、そういうルールなの〜!」

鈴は不平を笑いながら飛ばして泳いでく。

一夏もシャルロットもはじけるような笑顔で海と戯れていた。

そんな青春の1ページを、浜辺から睨み付ける妙齢の人物がいた。

こめかみに青筋をあげながら腕を組み、周囲の者たちにプレッシャーをビシビシ飛ばしている。

「ふ、フッフ……、織斑姉貴、躰がなつとらんちゆうねん」

IS学園組とは別に、箒と、彼女の剣道仲間である四十院神楽と一緒に現れた女性だった

何者かをトミーは知らない。一緒にビーチパラソルとレジャーシートをセッティングしている箒に、さりげなく囁くように聞いてみる。

「ねえ箒、あの人、引率さんだと思うけど、どちらさん?」

「ああ、紹介がそびれてしまったな。あの方は……」

「——ホウキだ」

トミーのひそひそ話に箒が応じるよりも早く、ラウラが応えた。

「や、ラウラ、そりやあここにるのは箒だけど」

「そうじゃない。あいつはホウキだ」

「ええつと……?」

「まさか、直に訓練を受けたというのか? 箒、四十院」

名を呼ばれた二人は、何やら誇らしげな笑みを浮かべて視線を合わ

せてから、同時に頷いてみせた。

そのやりとりがトミーには不思議であり、またラウラの話についていけなくて目をパチくりさせている。

「ごおらああー！　みんな戻ってこんかーい!!　まだ自由時間とちやうんやでー!!」

爆発した新顔の姉さんが、ウガー！　と両腕を突き上げて海に駆けていく。

が、一夏たちのもとにたどり着く前に、

「うつひよー！　海、気持ちええー！」

彼女も海の魅力にほだされて白波の中に飛び込んでしまった。

「ホントに、誰なのさ……？」

トミーはあつけにとられた様子で、ただ成り行きを見つめていた。

◇

「ウオツホン！　えー、本日はお日柄もよく、つて開会のあいさつちやうわつ。……あー、みんな、夏休みで海に来たからつて羽目を外しすぎちやアカンで」

ひとしきり一夏たちと海を堪能した新参者は、取り繕うように咳払いをすると堂々と岩の高場から見下ろして言った。

対する一同の視線は冷たい。さんざん遊んでからなに仕切つてんだこの人？　という疑問と不信が混じっている。

「はい、質問よろしいでしょうか」

トミーが拳手をして尋ねる。

「いきなり飛ばすな兄ちゃん。まあええよ、どしたー？」

「あなたはいったいどちら様なのでしょう？」

生徒たちの大半が思っていたことを代弁する。

「あれ、ウチの自己紹介まだやったつて、箒ちゃん？」

「わ、私に話を振られても困ります」

「名和さん、いつものように『ごーいんぐ☆まいうえい』を爆走してらっしやいますよ」

「あつはっはー、なんや神楽ちゃん分かつとったんなら止めてーな。んじゃ、改めて」

そばかすが特徴的な頬にえくぼを浮かべ、二カツと八重歯をのぞかせながら、狐目の女性は控えめな胸を張った。

「本日からキミらのまとめ役を任せられた名とおねーさんや。よろしゅうな。あ、キミらの名前とお立場はちゃんと聞いとるから名乗りは省略してええで」

「はい。これでは名前しか話していませんので、私から補足いたしますね」

神楽が一つ手を叩いて丁寧に説明してくれた。流れるようなノリの良い調子が名和との付き合いの長さをうかがわせる。

内容は端的で、

IS学園のOG、つまり先輩であるという立場。織斑先生と面識があり、生徒たちの面倒を直接頼まれたという役割。先日まで神楽と箒の指導を受け持っていたという状況。

というように、自分たちに近い存在であることを強調しているような紹介だった。

「さあつすが神楽ちゃん！ とグツジョブする名和に、ラウラが、
「それだけではないだろう」

と詰め寄った。その隻眼はわずかに鋭い。

「日本が誇る最精鋭IS部隊『三木一草』が一画、ホウキ。名和という名前も由来となった者からの借り物か」

「なんやそんな堅っ苦しい言いかたせんといてや。ドイツ国防軍最強のIS配備特殊部隊『シュヴァルトエーハーゼ黒ウサギ隊』隊長、ラウラ・ボーデヴィッツ少佐！」

「……………」

「返事せんのかい、怖いなー。大昔は同盟組んでたお国柄やで。お互い仲良くしようや。あ、名和って名前は芸名みたいなもんやで。今の代の生徒会長ちゃんみたいにな」

楯無さんみたいに？ と首をかしげるトミーを置いて、

「あの、名和ってひよつとして、名和商事様の身内の方ではありません

こと?」

とセシリアの問いかけた。名和は「大当たりにー!」と大げさに答える。

「やー、オルコット・グループ様にはいつもご贔屓にさせて頂いてますわ。しかーし、今はお目付け役という立場。ここであつたことは商売抜きで、どうかひとつ穩便に」

「ええ、それは、構いませんが」

「デュノア社のご令嬢様もな。お父ちゃんは達者かい?」

「……それなりだと思います」

困惑気味なセシリアと、ややトーンダウンしたシャルロットが適当に応じる。

「おいおい、二人とも知り合いなのか? というか名和商事って名前は聞いたことあるんだけど、いったいどんな会社なんだ?」

一夏の問いかけに、シャルロットは無言。しようがなくセシリアが答えた。

「名和商事さんといえばIS関連業界でも有名な企業です。倉持技研の陰に隠れがちですが、研究・開発ではなく流通という面では世界規模のネットワークを展開していらつしやいますの。むしろ名和商事さんの流通網があればこそ、倉持技研がISのトップシェアを誇っていると言つても過言ではありませんわ」

「へー。あんま庶民には馴染みないけど、でつかい会社なんだなあ」

「直接お会いするのはわたくしも初めてですが、まさかIS学園のOGさんだなんて思つてみませんでしたわ」

むふふーん、と名和は鼻で荒く息まいた。

「やーん、おべっかはその辺にしといてえな。くすぐったいわ。これからおっぱじめる試合に影響及ぼしかねんて」

「試合?」

「せや。みなさんにはこれからIS使うたサバゲー（さばげー）をしてもらいます。まあ、ペイント弾での模擬戦やな」

「目的が見えないな」

ラウラは不満気に一步前に踏み出した。

「今日はトミヤたちへの慰労を兼ねた休暇と聞いている。仕切り役を任されているとはいえ、せつかくの休日を壊すような真似はやめてもらおう」

「ら、ラウラ。ちよつと口が過ぎるよ」

「懸念無用だトミヤ。ホウキの傍若無人さは筋金入りだからな。直接言わなければ常識も通じん」

「おーおー、織斑姉貴^{ネキ}直伝のブラコンは揺るぎないねえ。それともさつきからの突っかかりを見るに、個人的なやつかみかな？ —— 国際親善試合でメタメタにされたことへの」

「キサマ……！」

ラウラはいきなりISを展開させた。さらに眼帯を外す様子を見るにガチで頭に血が上っている。

「待った待った！ ちよつと落ち着いて二人ともつ。何があつたか知らないけどこんな場所で喧嘩はやめてよ！」

「はい、名和さんも挑発しないでください」

トミーと神楽が間に入って双方をとりなした。

特に神楽の抑え方は、

「ちよつと大人げなさすぎではありませんか？」

はんなり笑顔に真黒な影を作つて凄味を利かせたたしなめで、勇名を馳せる名和をしてたじろがせる気迫が籠っている。

「か、堪忍してや神楽ちゃん。そんなけつたいなマネせえへんて……」
「だいたい模擬戦の内容もお粗末です。ペイント弾の使用、つまり銃撃戦を想定した試合ということですね？ その場合ですと一夏さんのように刀剣を駆使する様式の方には不都合ではありませんか。加えてお聞きしますが、勝負は個人戦ですか？ 団体戦ですか？ 団体戦の場合、特殊な仕様のトミーさんや一夏さんの扱いはどうなさるのか考えおられますか？」

「ちよ、ちよ、ちよ！ 待つて、神楽ちゃん、待つて！」

「待ちません。私、今日は海へ遊びに行けるのを楽しみにしていたのです。それが、模擬戦、ですって？ 私のこれまでの期待を、ねえ名和さん？ どうしてくれるんですか、ええ？」

神楽の表情は微笑。ただ微笑。

着飾る水着は巫女さんを模したような和風スタイルで、一見おしとやかな大和撫子を思わせる四十院神楽。

だが、般若の面をかぶった大將軍が守護霊にいるのではないかと感じるほどの威圧感が、

「う、ウチにどないしろ言うんですか!？」

と名和から主導権をもぎ取ってしまう。

「はい。それでは、これからは私が名和さんの代役を務めましょう。不本意ですが、ちゃんと試合も行います。ええ、ほんつとうに不本意ですが、やるからには皆さんが楽しめるようなものにいたしましう」

いいですね、みなさん？

と笑顔で振り返る神楽に逆らうものはいなかった。

神楽が提案した模擬戦は、二チームに分かれての旗取りゲームだった。

各チームがそれぞれ一つの旗を持ち、それを先に奪った方の勝ち。

旗はメンバー内で回してもよい。

ISの使用は銃・剣等の武装以外すべて可。

相手メンバーへの妨害も可。

「どうせ絶対防御とシールドがあるのですから目いっぱいやりましう」

と暗にトラブル上等発言をぶっこむ神楽の顔は、やっぱり笑顔。

範囲も定め、内容は各ISに送信されている。範囲外に出たチームは負け。

ルールを一通り聞き終えたセシリアは、

「キングがフリーなチェスのようですね」

と感想を口にし、？マークを頭の上に幾つも作っていたアイリスが「おおー」と納得した。

神楽はさらに「トミーさんと一夏さんは別々のチームでお願いしますね」と取り決める。

「何でだ？」

と確認する一夏に、当然じゃないですか、と神楽は応じた。

「トミーさんが旗を拠点防衛兵装内に置いてしまったら、一夏さん以外に対処できないですもの」

ああー、と皆が納得した。

確かに一夏の『雪羅』ならば、強力なエネルギーバリアを展開する
フオートレス・ガジェット
拠点防衛兵装でも突破できる。

というか、そうでもしなければ破れないため、二人が同じチームになるとゲームが決まってしまうのだ。

「……なんで名和さんも感心しているのでしょうか？」

「えっ、や、か、神楽ちゃん頭ええなーと思うて」

「まさか、選手分けで考えていなかったなどは」

「思うてませんっ！ ちゃんと試合の流れを想定します、はい！」

「結構です」

なんとなく二人の力関係が透けて見え、特に箒の神楽評が大揺れに揺れていた。

やだ、私の剣友、強すぎ!?

ニューアンス的にそんな感じ。

神楽はさらにチームメンバーを割り当てる。

イ・チーム【一夏、箒、セシリア、シャルロット、神楽】

ロ・チーム【トミー、鈴、ラウラ、アイリス、名和】

チームごとに並んで立つ面々を見て、鈴は、

「ん？ んー……、んん？ んんく!? あれあれく？」

と神楽に詰め寄った。

「どーゆーことかな神楽ちゃん？ これ、意図的でしょ？ 意図的

だよな？ あえてこのチーム分けしたよねアンタ!？」

「さて、何のことなのか私にはさっぱり」

ああ、とトミーは察したように声を上げる。

「鈴、一夏と一緒にじゃないからってスネてるんでしょ。IS学園でのトーナメント戦といい、毎回一夏と戦う羽目になっちゃってるからね」

「なんだ鈴、そうなのか？　意外と可愛いところあるな。俺とトミーで交換しようか？」

「違うってえの!!　あ、いや、でも一夏が言うのも違わなくも……。」

「……いや！　やっぱり納得できんわこれー！」

再び鈴がヒートアップした。

シャルロットは、

「一瞬すごいクールダウンしたね。あの発言はちよつとヤバかったと思っただよ。でもオンナの意地が勝っちゃったか」

「シャルロットさん、抜け目ありませんわね……」

「セシリアもあわよくばと思っただね。鈴が恋愛脳じゃないことにガツカリしすぎだよ」

観戦している外野でも一喜一憂が巻き起こる。

そんな中で、

「アンタだってそんなにある方じゃないじゃない！」

と鈴が言っただけじゃないようなことを口走ってしまった。

「……はい？」

現場の空気が一瞬にして凍り付く。震源は笑顔の般若武者。

「ちよちよちよ!?　鈴ちゃん気は確かかい死ぬ気かいな!？」

「よせ鈴っ！　私も深淵は知らないが、今の発言は本気でマズイ！

奈落におちるぞ!？」

「セシリア、僕はこの場を離れるべきだと思うのだけど」

「シャルロットさん、わたくし達が離れたらさらに炎上してしまいますわ」

「なあトミー、神楽さんにあつて鈴に無いものって何だ？」

「一夏、見ざる聞かざるで触らぬ神に祟りなすだよ。たぶん何か発言したら火にガソリンをくべることになりかねない」

「わらわとて、あと数年すれば、あるいは……」

「アイリス、トミヤは持つ者と持たざる者に公平でわけ隔てない。気にする必要はないぞ」

巻き起こる喧騒に、もはや収集が付かなくなっていた。



そんなカオスのただなかを、遠目に見る二つの陰がある。

一人は持たざる少女で、一人は持つ者の大人の女性。

「私が入るとしたら、トミーさんと一緒のチームですね」

少女は苦笑しながら言った。

「おや、怒らなのかい？ 清香ちゃん」

「複雑ですが、今だけはラッキーって思っちゃいますよ」

「乙女だねえ。まったくホウキは何やってるんだか」

大人の女性は、やれやれ、と糸目を長くする。

「クスノキさんは、一夏くんのチームですね」

「そうなるのかねえ。まあ、ホウキの面倒はアタシがみるから、思う存分稽古で身に着けた力を発揮してみせるがいいさね」

「本当にありがとうございます。このISの初お披露目ですね。そういえば、名前は何でしたっけ？」

クスノキは自分の豊満な胸元にあるエンブレムを指さした。描かれているのは、

「【菊水】、【打鉄・菊水】。アタシが選んだ子にだけ与える特注の【打鉄】さね。誇ってほしいな」

相川清香はくすぐったそうに微笑むと、感謝と共に首を垂れた。

『三木一草』筆頭のクスノキの師事を受けて、今の自分はこれまでとは違うのだという自信と自覚がみなぎっている。

あとはあの場所に駆けつけるだけだ。

だが、場がもう少し落ち着いてからにしよう。

自分の高ぶりを抑えるのにも、ちょうどいいインターバルだった。

56話 先輩の視点

ISを展開し、上空から戦況を俯瞰する名和は腕を組んだままうなっていた。

「アカンわ今期の後輩ら、金の卵ぞろいやん」

彼女が頭部に展開するバイザー内では、10人の生徒たちすべての動きが個別の画面に分かれて表示されている。

イ・チーム（一夏、箒、セシリア、シャルロット、神楽、クスノキ）ではセシリアが自軍の旗を持ち、強襲用高機動パッケージを展開して圧倒的な速度で逃げ回っていた。

エスコート機にはシャルロットが追加ブラスターを展開して随伴している。

セシリアの機動センスとシャルロットの連携技術は、同年代どころか大人顔負けの腕前をみせていた。

チームのオフセンスは一夏と箒。

希少な二次移行を起こした【白式】と、世界で二例しかない第四世代機【紅椿】は、破格のポテンシャルをもって怒涛の攻勢をかけている。

機体の性能もさることながら、

「なかなか乗りこなしてるやない」

オーバースペックに振り回されないでいるだけでも二人の成長がうかがえた。なにせ一夏は今年ISに乗り始めたばかりの素人同然なのだ。それに箒も名和のレッスンを受けるまでは馬力に任せられた縦しかできなかったのに。

「さっすがウチの指導力、箒ちゃんメキメキ上手くなつとるやん。一夏くんもええやない。織斑姉貴喜ぶやろなあ」

そして一夏と箒のフォワードと、セシリアとシャルロットのディフェンダーの間で、神楽は両者のつなぎ役として遊撃していた。

神楽が駆るのは量産型IS【打鉄】のカスタムタイプ【打鉄・北辰】ほくしん。船乗りが天測航法で頼りにした北極星の別名を異名とするように、【打鉄・北辰】は皆を導く早期警戒管制機、すなわちAWACSとして

の機能に特化していた。ISは基本的に同様の仕様を持っているが、それを先鋭化させ運用を可能とすることで量産機の発展的なバリエーションを達成したのだ。

その機体の真価は、ほかならぬ名和自身が現在運用していることで有益性を表明している。

「で、さつきから隣でなに一緒に観戦しとんねん、クスノキ」

名和はバイザーを外すとジト目を向けた。クスノキは飄々とした糸目の表情で受け流す。

「いやあ、なに。今年の新入生はみんな優秀だなあつてさ」

「んなこた織斑姉貴ネキから送られたデータ見たらわかるやろ」

「資料以上の腕前さね。そりゃあ清香ちゃんが発奮してアタシのところへ勉強に来るのも頷けるもんさ」

「清香、ああ相川ちゃんな」

「キミの目から見てどうだい？ 名和ホウキ」

「クスノキが目をかけただけはあるわな」

名和はバイザーを再装着すると、クスノキが視線を向けるロ・チーム（トミー、鈴、ラウラ、アイリス、名和、相川）に視点を移した。

ロ・チームはイ・チームのようにポジション分けをするのではなく、全員が一丸となってフォーメーションを組んでいる。

理由は、ロ・チームのメンツは状況が整えば戦いを決められる技能を持つ者がそろっているからだ。

個で相手の動きを封じるラウラの アクティブ・イナーシャル・キャンセラー A I C

面で制圧するアイリスの グラビティ・コントロール 重力制御

そして地上戦で無類の強さを誇るトミーの リミテッド・ストラトス L S

これらの脇を、パワータイプ 【甲龍】を運用する鈴と ガードタイプ 【打鉄・菊水】を活用する

相川がカバーし、旗を持つトミーを中心にガツチリと陣形を敷いていた。

一夏と箒が攻めあぐねているのも、一瞬のスキが必敗につながる技への警戒と、接近戦に強い鈴の牽制、そして鉄壁ともいえる相川の防御のためだった。

「菊水与えたんは太っ腹すぎやと思うでホンマ」

名和は呆れたような口調で言った。クスノキは鼻で笑う。

「名和ホウキだつて北辰あげているじゃないかい」

「それはええのよ。配備されたばつかで実践の数積ませたいしな」

「アタシも同じさ。最近倉持技研に依頼した試験機が続々と届いててねえ、テストが間に合わない状況なんだよ」

「【打鉄】のリニユール展開多いからなあ。こないだIS委員会で告知された技術統合計画、影響受けてるらしいで」

「各企業の既存技術が共有され、篠ノ之束の先鋭的な技術が配られたつていうあれだろう？ 世界的にIS研究が底上げされているみたいだねえ」

「お上かみで何ぞあつたらしいやん。あの菊水の新兵装とか、他所よそ様で見たことある気がするわ」

名和がバイザー内で相川の姿をクローズアップさせた。

相川が駆る【打鉄・菊水】の特徴は三機の盾形非固定浮遊兵装、『指呼アンロック・ウエボンの三楯みたて』と呼ばれる固有装備にあった。

三つの盾にはそれぞれ他国の技術が流れている。

LSの非固定浮遊兵装アンロック・ウエボンに備えられたバリアシールドを流用した『大盾おおだて』

フランス製ISが運用するパイルバンカーを内装させた『突盾つきだて』

ドイツ製のプラスマブレードを発生させる『角盾かくのだて』

他スラスターや装甲にも様々な既存の技術が使われ、いわば【打鉄・菊水】は同世代の粋を集めた第二代最終形態というべきシロモノに出来上がっていた。

「ま、既製品をハイブリッドによって延命させたようなものだよ」

「所詮は第二代機やからなあ。いうて舶来モンを取り入れたんは英断やと思うで」

「それなんだけどねえ？ アタシは商売に疎いからよくわからないけど、企業にとっては自社の技術が持つてかれるのってまずいんじゃないかなあ」

「普通はそうやな。けどIS研究つてぶつちやけ篠ノ之束のぶつちぎり状態やん？ どうせ周回遅れの技術なんやから、使用料かけて技術

供与するんはかまへんらしいで」

「なるほど。それならチグサもこだわらずに受け入れた方が良さうと思
うんだけどねえ」

「アイツの【打鉄改】あらためなあ。日本の技術のみで仕上げたいっちゅう縛
りゲーしとるアレやろ？ あのと石頭の国粹主義はなんとかならん
もんかいな」

むずかしいだろうなあ、とクスノキは苦笑を漏らした。

笑わろてる場合かいな、とツツコミを入れる名和の顔は、かわらず試合
に向けたまま。

状況は変わらず、イ・チームは攻めあぐねつつも旗を堅持し、ロ・
チームは防ぎつつも攻略の糸口を見いだせないでいる。

膠着状態の戦況は、観戦者側に選手たちの実力を推し量る絶好の機
会となった。

「なあクスノキ、あんさんの目で後輩らの強さ、順序つけるとしたらど
う見る？」

「まあ順当にいつて、最下位はトミヤくんだね」

「ありやしやあないわ。飛べへんのやさかい」

「続いて下から順に、神楽ちゃん」

「どう見ても指揮官か官僚向きやからな。前線出張るよか参謀やる
か、政略と謀略がお似合いなイイ性格しとるわ」

「次は、悪いけど清香ちゃんだなあ」

「あの子は神楽ちゃんと逆で兵隊さんタイプやね。代表候補生に選ば
れるには実力と出自が惜しいんやけど、それがかえってお呼びがかか
りやすいちようどいいポジションやんな。代表関連は他国よその目も
あつて使いどころに困るわ」

「あとの子たちは……、正直ダメになつていかなあ」

「ほ？ 代表候補生に、最新鋭機セカンド・シフトに、二次移行機。どれか抜きんでてい
るでなく？」

「総合的に見てあまり変わりはないさ。ISは上になるほど機体と操
縦者が一心同体。なればどちらかだけが良くてダメだし、今後の成
長次第でいくらでも変わるからねえ」

「なるほどなあ。ま、クスノキくらいからしたら多少の違いも誤差のうちかね。……ん?」

名和の見る先、アイリスがトミーに接触しているのが見えた。ラウラが二人に叱責をあげている。フォーメーションが崩れるのだから当然だろう。しかしアイリスは構わずトミーの隣に降り立ち、何やら「セブンス・プリンセス」の能力を使っている。

ユニコーンの頭をかたどった杖を掲げ、彼女の周囲が重力変化の影響かボヤけていく。

「なに拝んどるんやろ?」

「どうやら何かおっぱじめるみたいだねえ」

どの道、ゲームはこのままではうちが明かない。現状を打破するよ
うな仕掛けだろうか。

二人の期待が籠った視線の先、

「ああ、グラフィティ・コントロール重力制御かいな、見えんようになってしもた」

光を曲げるほどの力場が発生しているのか、二人の姿が隠れてい
く。

そして、

ピピーーーーッ!!

と汽笛が鳴った。

あらかじめ旗が取られたとき用に仕込んでいたゲームセットのア
ラームだ。

「は?」

「ん?」

二人の視界では、一夏も箒もトミーに接敵できていない。

となれば、セシリアの旗が奪われたことになる。

「まさか……!?!」

クスノキは名和を振り返った。彼女の【打鉄・北辰】ならば全生徒
を観察できているはずだ。

何が起きたのか?

名和はバイザーを外すと、呆けたように言った。

「トミヤ坊、瞬間移動かましよった」

あゝ、とクスノキは苦笑を漏らす。

「なに笑わろとんねん！　つか、はあ!?　アイリス姫様ワームホールこしらえよったで!?　だいたいトミヤ坊もなに瞬間移動してフツー行動できてんねん。機械かワレは！」

ゲームエリアの端ではセシリアの持つ旗がトミーに奪い取られていた。

後ろから襲われたようで、覆いかぶさられた格好は強引に抱きしめられているように見えないでもない。

セシリアの表情はなぜか負けたのに満面の笑顔。

「なるほど、ヴォーダン・オージエ越界の瞳、か」

クスノキは呟くように言った。

彼の越界ヴォーダン・オージエの瞳は突然変異もので、世界を電子データの集合体のように捉えられるという。それならば、瞬間移動後も自機を見失うような「酔い」を受けずに済むのだろう。

「セブンス・プリンセス」も重力を操るとは聞いていたが、まさかワームホールを発生させるほど芸達者だったとは。

「チグサ、キミの予想、まんまと大当たりみたいだよ」

眼下の会場では、鈴がとりあえず勝利に沸き立ち、勝ったのにもかかわらず、なぜかうラとアイリスと相川が不平を騒ぎ立てていた。

57話 前夜祭

「一夏、僕たちは不当な扱いを受けたのではないかと思うんだ」

トミーは露天風呂に首元まで浸かりながら半目で不満をこぼした。彼が不平を漏らすときは、たいてい自分以外の誰かを巻き添えにしてしまった時であるのを、一夏は学園生活のなかで知っている。

今回もそうであることを思い起こしながら、一夏は洗面器のお湯で体を洗い流すと、タオルを固く絞って言った。

「仲良しカップルがイジられ過ぎて辛いつてか？」

茶目っ気のある言い方にも、トミーは目を尖らせてしまう。それは面倒をかけてしまった相手への申し訳なきの裏返しだった。

「水を滴らせてるイイ男が何言ってるのさ」

「イイ男って、急に褒めても何も出ないぜ」

「いつも濡れ衣を被っている」

「遠回しな不幸えぐりすんな」

「ウイットに富んだ言い回しだと思っただけだ」

「お前相当不満ためてるのな」

一夏はタオルを畳んで頭の上に乗せると、トミーの隣の湯にゆつくりと身体を沈めた。「はあ、あゝ」という間の抜けた声が湯気と共に立ち上がった。

トミーも夜空を見上げて昼間のことを思い出す。

海岸で行われたISの練習は、旗取りゲームのあとトミーとアイリスを中心にしたメニューに組みなおされた。

トミーのLS【グレイ・アイディール】とアイリスのIS【セブンス・プリンセス】の合体技である瞬間移動が名和とクスノキの目にとまったせいだ。

ISパイロットとして日本のトップランカーである二人ですら見たことのない秘技に、興味半分データ取り半分、トミーとアイリスを散々に酷使させる内容となった。

特に【セブンス・プリンセス】の重力を操る能力にはご執心で、アイリスはよろしくお引回されまくったわけである。

「別に、僕は構わないけどさ。アリスはまだIS初心者なんだよ？」

それをあんなに連れまわすとか引率者としてどうなのさ。日本人は体育会系とやらがまだシゴキとか蛮行やっているって聞くけど、ホントそういう時代錯誤なことはいいい加減やめてほしいんだけども」

「あー、そういうやあ俺も千冬姉からいつつもしごかれてるなあ」

「一夏も。日本の学生は大人しいから教育者がちゃんと育たないんだと思うよ。だいたい」

「俺は別に不満に思っただいじゃないさ」

「うん？」

「千冬姉、不器用なだけだからな。そういうの汲み取れると、相手がただ悪いって決めつけることもない」

「だからそれじゃあ教える側が」

「教わる側も、ちゃんと受け入れる姿勢でいなけりやあ、学べるものも学べないと思うぜ？」

トミーは閉口すると口元まで湯船に潜行した。鼻から不満げなため息を噴く。

しかしこれ以上無用な不平を言葉に出せないよう、物理的に塞ぐことには成功した。

「それに、お前がそんなに心配するほどアリスはくたびれていないと思うぞ」

トミーは目だけ向けて続きを促す。

「だって、あんなに介抱してあげていたんだからな。ていうかし過ぎだろ、ありゃ」

そうかなあ、と首をかしげるトミーに、一夏は「あのなあ」とあきれ声を上げた。

「訓練が終わったあと、歩けないのじゃく、って駄々をこねるアリスを旅館までおぶってあげて。ついてからは甲斐甲斐しく世話をして。晩御飯なんか全部食べさせてあげて、とか。まるでお姫様を相手にしているみたいだったぜ？」

「……だって実際お姫様だし」

「あ、そうか。ってそうじゃなくてだなっ」

「一夏と僕の立場が逆だったとしたら、どうしてた？」

「そりやあ付き合わせちまって悪いなってケアする」

「ほらみろ」

ぬ、と一本取られて不満げな顔の一夏からそっぽを向いて、トミーは広々とした露天風呂を腕を組んだ姿勢のまま流れていった。

首は傾いたまま定まった様子ではない。

「ねえ、一夏。もし箒や鈴やシャルロットが、君のために何かを懸命に頑張っている、なんてことがあったとしたらどう思う？」

「やけに具体的な人選だな」

「それじゃあ織斑先生でもいいよ」

「余計に狭まってるぞそれ。はあ……、まあ、なんていうか、困る、と思う」

「困る？」

「俺なんかのために苦労かけちまって、うくん、すまないっていうか、心苦しいな」

「報いるためには、どうするのが良いだろう」

ん？ と一夏はトミーの質問の意図に気が付いた。

彼は、一夏に尋ねるふうを装いながら、自分の中の答えを模索しているのではないか。

ひよっとすると、トミーはアリスを看護する中で、彼女から思いを告げられていたのかもしれない。彼の様子から愛の告白などではないだろうが、トミーのことを想って頑張っていることくらいは言われたのだろう。

それに責任を感じているのだとすれば、

(こんなにささくれ立っている理由も立つ、か)

一夏はヤレヤレといった感じをみせないよう、お湯を両手で掬って顔を洗った。

トミーの言っていることはとどのつまり、お互いを大事に思い合っている男女の話なのだ。なんだか一風変わった惚気話のろけを目の当たりにしているような、何とも言えない気分になった。

なので、回答は深く考えないものにした。

「まー、そうだな。結局は自分がしつかりしていないといけないと思うぞ。自分が立派なら相手を助けることができるだろうし、変に心配かけることもないだろうしな」

「なるほど……。いつも一夏が目指しているような？」

「そうだな。強くて自立した男になれば千冬姉も安心して……。つて俺は関係ないだろうッ」

「一夏ってやつぱり織斑先生一筋なんだね」

トミーはバシャバシャお湯を浴びせてくる一夏からスイスイ泳いで遠ざかった。お風呂で泳ぐな！ という叱責も無視して広い露天風呂を漂っていく。

真ん中のあたりで、体を脱力してプカリと浮かんだ。暗く穏やかな夜空には学園では見られない星々が輝いていた。

南北に流れている天の川を眺めながら、トミーは強くて自立した自分とはどんなものかと思いをさせた。今の自分よりも立派になっている状態。

生活では葉に頼らず、ISでは空を飛べて、義姉ラウラや友人セシリアたちを守ることができ姿が浮かぶ。

それはまるで、

(なんだか、一夏の姿みたいだなあ)

身心は健康で、ISでは空を思うがままに飛び回り、織斑姉先生や箒友人たちを守るよう強くなろうと頑張る背中。

トミーは、親友の輪郭がこれまで以上に大きな存在であるように感じた。



旅館、花月かげつ荘は知る人ぞ知る名店である。

上質な従業員のサービス、絶品な料理、海を一望できるロケーション。

そして日本情緒豊かな風格を秘めた佇まいは数多の宿泊客を虜にしてきた。

そんな上等なホテルをIS学園の生徒たちが使うことができたのは、花月荘かげつの持つ特異な性質にあった。

いわゆる要人専用の宿。

警護に気を遣うVIPの状況に対応し、万全のセキュリティを配しているのだ。

ゆえにIS学園の生徒という世界各国から集まった黄金の雛たちを預けるのにも適していた。女将である清州景子氏きよすけいこも織斑千冬と馴染みであり、IS学園の事情も熟知しているだけに学園ご用達のお宿となつているのだ。

「むほく、これが畳と言うものか」

その客間の座敷にて、アイリスはごろりと仰向けになりながら大字になった。

今は口うるさい侍臣ジツリルもいないし、部屋仲間はずか相部屋になろうと言い寄ってきた者たちだ。気兼ねなくのんびりと体を伸ばすことができていた。

「お姫様はお気楽でいいわね、ホント」

鈴が座椅子に背もたれながら団扇であおぎつつ言った。若干あきれた声色もアイリスは気にしない。

「昼間はあれだけ個別指導をうけておったのじゃ。しばし醜態をさらしてもいいじゃろうが」

「そこはまーアンタも頑張ったと思うわよ。でもその後のアレがねえ」

「アレとな?」

「トミーさん召使い騒動、ですね」

四十院神楽が卓上にお茶を用意しながら口を挟んだ。

受け取った箸はひと口すると、盛大なため息をつけて先ほどまでの冷戦模様を思いだす。

アイリスがトミーに背負われるとき、旅館について介抱される際、さらには夕食の料理を一つ一つ「あーん」してもらう場面などで、

『なにやっとなんじゃー!!』

という声なき怨嗟の念が金髪ロールと銀髪ロングから噴火した。

ボーイッシュショートからもやや噴煙が上がったのには鈴と箒にとつて意外であったのだが。

そんな活火山地帯にアイリスを放り込むわけにもいかず、部屋割りには『アイリス・鈴・神楽・箒』と「セシリア・ラウラ・相川清香・シャルロット」と分けられた。当然男性陣は名和たちの裁量で別室になっている。

「この部屋割りを提案しておいてなんだが、鈴と神楽に受け入れられて本当に良かったと思っている」

「そりやするっしょ。明日の朝に事件が発生していたとかなつたら最悪だわ」

「良い提案でした。断る理由もございません。シャルロットさんはご苦労なさっていると思います」

「……明日、一夏との夏祭りデートの優先権を与えることで飲んでもらった」

「はあ!? ちよつ、なに勝手なことやってんのよ箒!」

「鈴に頼めば受け入れてくれたか?」

「そりゃあ、……まあ、こういう場面じゃあシャルロットが適任よね」
「だろう」

「箒さんも人を見る目が養われましたわね」

別に養いたくはなかったのだが、と神楽から足してもらったお茶をズズつと啜った。再びつきため息は先ほどよりかはちよつぴり軽い。

「それにしても、明日は近隣でお祭りが催されるとは重畳じやの。ふふ、これはトミーと一緒にいろいろ巡って」

「ダウト。アンタ最初は大人しくしていた方が無難よ」

「ぬう? 何を言う。わらわとてIS学園では先輩方からも鍛錬を受けた身じゃ。それほど軟やわにはできておらぬて」

「いや体調面じやないってーの」

あのね、と口を開きかけた鈴を、神楽がたおやかに制した。

ここは任せてくださいまし、と意味ありげな表情に自然と会話の流れが移される。

神楽はにこやかに口を開いた。

「アイリスさん、恋は戦略が肝要ですよ」

「ぶほっ!？」

箒がお茶をいきなり噴き出した。

「箒さん、汚いです」

「いきなり直球すぎやしないか神楽!？」

「そもそも、そうじゃぞ。そんな、恋などと、たいそうな……」

「結構グイグイ押してるクセにウヴな純情を語られても参ってしまいません」

「アンタ結構容赦ないわね」

コホン、と神楽は可愛らしく咳ばらいを着いて仕切り直した。

「いいですかアイリスさん。まずは相手に先手を取らせてあげることです。そうすれば自^{おの}ずと隙が生じます。お、ちゃんと配慮してくれてんじやーん、みたいな感じで」

「時折かますフランクな口調はどこから影響を受けたのだ……」

「箒さん、些事については後ほど。さあいいですか、トミーさんは3人をお相手にしてくたびれた状態です」

「何気にセシリアとラウラと清香がデートするのは既定路線なのね」

「鈴さん、はけ口は大事ですよ。さて時刻は夕方、思い出に残りやすい終盤戦。ここをガツチリ掴んで優しくいたわってあげちやつた日には逆転ホームラン間違いなしですわ」

「な、なるほど!」

「ゆえに、朝は健気さを演出するのです。昨日はたくさんわがままを聞いてくれてありがとう、もう大丈夫だから皆さんと楽しんでらしてくださいな。などと演出すればトミーさんの心の底にカエシの着いた針が如くザクツと引つかかることでしょう」

「フィッシュ、じゃな!」

「ご明察。あとは釣り糸を手繰り寄せるがごとき時間を待てばいいだけですよ」

アイリスは「見事な策じゃ!」と手を叩いた。

箒と鈴は神楽の背後に羽毛扇を手にした三国志の英雄が顕現したように感じた。一言でいえば、

(コイツ策士だ……！)

そんな感じである。

「さあさあそんなわけですから、今夜は早めに床につきましよう。ゆつくり休んで英気を養って明日に備えるのが大事です。ああそれと」

神楽は箒と鈴に振り向いた。

ビクリ！ と二人の身がすくむ。

「一夏さんについてのご助言については控えさせてもらいますね。シャルロットさんからきつく申されておりますので」

「ま、まさか裏切るつもりか神楽!？」

「ご冗談を。お三方はレースでいえばほぼ横一線に並んで走っている状況ですもの。茶々をいれるのは野暮というものです」

「それじゃあなんでアイリスは助けんのよ?」

「いささか出遅れの感が否めませんでしたもので」

「相川さんは」

「彼女、ああ見えて結構虎視眈々なんですよ。それにしても、うふふ」
「ど、どうした神楽?」

口元を隠してコロコロ笑う神楽に、箒と鈴は恐々としつぱなしでいた。

いえね、と答える言い方に含んだ笑いがボロツとこぼれる。

「私はこうして最前列の席でたっぷりレースを鑑賞できるんですもの。清らかな青春と、混濁たる感情の渦が織りなす素晴らしい競争を。ああ、これからのどのような模様が堪能できるのか、まったく楽しみで面白いわけがないではありませんか」

ねえ? と流し目の問いかけに、真正面から答えられるものはいなかった。少なくとも、この場には。

58話 夏のマスカレード

夏祭りは神社を中心に行われていた。

海を眺めることができる見晴らしのよい場所に鎮座する境内に向かつて、階段や麓ふもとの通りには提灯が列を成している。

門前町は駅からほど近い商店街でもあった。商魂たくましい店々ではすでに軒先に出店でみせを並べ、威勢の良い掛け声が飛び交っている。時刻はまだ朝だというのに多くの来客が行きかい、笑顔で溢れていた。

そんな賑わいのなかを一風変わった集団が歩いている。服装は夏祭りらしく甚平じんべいや浴衣姿なのだが、みな様にお面を被っているのだ。美少女キャラにヒーローキャラ、マスコットキャラにゆるキャラといった、お祭りの店頭に並んでいそうな面々となっていた。

そんなグルーブの先頭を歩く、人体改造を受けた某ライダーのお面をした一夏が言った。

「顔バレしないようにお面を用意してくれるなんて、一流旅館の女将さんは手際が良いな」

応えるのは2号のライダーを被ったトミーだ。

「僕に一夏、アリスはテレビに顔出ししちゃっていたからね」

「変装もしないで来たらきつとお祭りどころじゃなかっただろうな」

「だね。ちよつと子供っぽすぎるお面だけど、結構面白いかも。みんなもなかなか似合っているじゃない」

キュアキュアした金髪少女のお面をかぶったセシリアが楽しそうに同意する。

「本当に。まるで仮面舞踏会マスカレードに参加しているようですよ」

「正直セシリアが一番似合っていると思うよ」

「まあ。それはこの仮面ですの？ それとも、この装よそおい？」

セシリアは振袖を上げてポーズをとってみせた。彼女のシンボルカラーである青を基調に、アサガオや笹の葉が描かれた落ち着いたデザインだ。

「トータルバランス的に、かな。特に動作が様になっているよ。さす

がお嬢様」

「うふふ、トミーさんもお上手ですわね」

「浴衣自体はラウラも良いんだけど……」

トミーは自分の半歩斜め後ろを歩いているラウラに振り向いた。彼女に合う黒を基調にした浴衣は、右肩から裾にかけて黄色に分けられたツートンカラーになっている。さらに金色であしらわれた帯には鶴が翼を広げ、小柄な体格に似合わない存在感を放っていた。

しかしお面は、

「ふふん、やはりこのウサギの仮面が気になるか。わかっているぞ義弟よ。黒ウサギ隊に所属していたドイツ時代を思い出すのだろう」

「……それ、バニーガールのコスプレみたいだよ」

「なっ？ そ、そんなふしだらな恰好に見えるとは、何気に男を持て余しているのではないのか？」

「ラウラはもうちょっと自分を省みたほうが良いと思う」

「そんな、わざわざお前のためにこの仮面を選んでやったというのに」「フツ……」

「あっ！ セシリア、いま笑ったな！ 笑っただろう、絶対！」

「あらあら、何のことでしよう。このとおり顔を晒しておりませんし、気のせいではありませんこと」

「奥が透けて見えるというのだっ」

セシリアとラウラが追いかけてこのようにトミーの周りを駆けまわった。まーたはじまった、と一夏が笑う。

そんな喧騒の後ろでは、ぶつくさと不満を漏らしている暗い影があった。熊本のゆるキャラグマをモチーフにしたお面をかぶったシャルロットだ。

「せっかく今日は一夏とデートできるはずだったのにさ……。タベだつてそのために頑張つてラウラたちをなだめてたつていうのに……」

恨めしそうに見つめる先の一夏は、シャルロットの気など知りもしない風だった。

いまこうしてみな一団になっているのは、旅館花月荘かげつで朝食をとつ

ていた時に、急に一夏が「せっかくだからみんなでいこうぜ」と思い立ったからだ。

その方が盛り上がるだろ、と清々しい顔で言われては、作戦、というより謀略を巡らせていた女性陣も無下にはできなかった。おかげで数々のオペレーションが水の泡となったわけである。

(これじゃあ骨折り損だよ……)

そう内心毒づくシャルロットを知ってか知らずか、策謀とは無縁の少女、子猫^{キティ}がハローと言っているキャラのお面をかぶった相川が進み出た。

「ね、ねえみんな。せっかく一緒に来てみて何だけどき、ここからは別々に行動してみない?」

シャルロットのダークオーラが一瞬で吹き飛んだ。

「そ、それはいい考えだと思うよ!」

「シャルロットさんもそう思う?」

「思う思う! だってこんなにお客さんいっぱいなんだもの、別れて行動したほうが無難だよ。ね、一夏」

「うーん、そうだなあ。俺もまさかこんなに人手が出ているとは思わなかったしなあ」

「で、でしょ? だからさ、集合場所を決めて、時間になったらそこに合流して、今度は別の組み合わせで歩いてみたら面白いかな、って思ってる」

「うんうん、いいアイデアだと思う。相川さん今日は冴えてるね!」

「今日は、は余計かな」

どうかな、と念を押すように問いかける先のトミーも「一夏がそう言うなら」と頷き返した。

「よし! それじゃあ全員で10人だから……、3—3—4で別れようぜ」

「それでいこう!」

「シャルロットさんノリノリだね」

「チームリーダーはどうする? じゃんけん、だどちよつと時間がかつちまうか」

逡巡する一夏に、狐のお面をかぶった神楽が手を上げた。

「よろしければ、私がリーダーの一人を任されましょう」

「お、ありがとうございます」

「ただし、メンバー分けは私の一存とさせていただけないでしょうか？」

む、とたじろぐ数名と、一転してさらに輝きを増したシャルロットが肯定した。

「それじゃあお願いしようかな」という一夏の言葉に決が下る。

◇

「裏切りだな」

「裏切りよね」

箒と鈴はアメリカンドックとイカ焼きを頬張りながら悪態をついていた。ベンチには空になったパックがいくつも散乱している。

一夏とシャルロットが一緒というのはまだいい。そういう取り決めだったからだ。しかし間に神楽自身が入るといのはいかなものだろう。

「神楽のヤツ、なんだかんだ言つて、一夏と一緒になれるのを狙ってたんじゃないの？」

「ああ。例えばこのアイリスを入れるなどやりようはあつただろうに」

かき氷を頬張るアイリスが引き合いに出された。名指しされてカップから顔を上げる。

「杞憂じゃと思うぞ」

鈴がイカ焼きを食いちぎって咀嚼しながら言う。

「んぐんぐその……、もぐもぐ根拠は……、ごつくんならだつていうのよ」

「鈴、はしたないぞ」

「うっさいわね。そのアメリカンドック残すんならアタシが貰うわよ」

「やらん。で、どうなんだアイリス」

「別に深い意味はない。単に、一夏が神楽の好みには見えなかっただけじゃ」

「好み？」

「あヤツは年下好きじゃろう」

ガタツ！ とおもむろに箒と鈴が立ち上がる。

「その話」

「いま少し詳しく」

「う、うむ……。まず座ってくれ」

二人は大人しく席に着きなおした。

「単に性格や人づきあいを見てじゃ。あヤツはどうにも人の下に立つタイプではない。年上にもバンバン食って掛かるしの。それに世話焼きで頼られ好きの感もある」

「まあ、あながち間違っていないはないな」

「そういう女性はたいてい年下の方が好きなのじゃ。そもそも、世間ではそういった傾向があるじゃろう」

確かにそうだ、と二人は頷いた。女尊男卑の世の中になってから、一般的に女性の好みは年下に傾いている。女性側の方が強いというという観念からか、男性を下を見ると言った風潮が自然とそうさせていた。

逆に男性は自分たちを対等に見てくれる同年代を恋愛対象とすることが多くなっている。

「それにしても、かほどに心配なら影で追いかければよかったものを。こうして屋台を物色しておってよいのか？」

「ふっ……。やっぱお子様ね、アイリス」

「なんじゃと!？」

「今のうちに美味しいお店を見つけておけば、後で一緒になったときに役立つだろう。そのための下調べというやつだ」

「戦いつていうのはより多くの準備をした方が勝つていうことよ」

「男を掴むならまず胃袋を掴めというからな」

「美味しいものを一緒に楽しむ。食べさせ合ったりあーんしてあげた

り」

「そして芽生える」

「ひと夏の思い出！」

「……集合時間的に、昼食はみんな一緒じゃと思うぞ？」

「え」

フリーズする二人に、アイリスはヤレヤレとかき氷を搦う手を再開させた。彼女がカロリーの低い食べ物を選んでいたのは後のことを考えてのことだったのだ。

頭がキーンと痛くなつたのは、何も冷たいだけのせいではないようだった。

◇

パンツ、という乾いた音と共に標的が倒れ落ちた。出所は紅白幕がひととき目を引く緑日の射的コーナーだ。

射的台には子猫キティの仮面をかぶった相川清香がいた。隣には、銃を構える相川を支えるように、ライダー2号の仮面をしたトミーがサポートしている。

「やった、当たったよ、トミーくん！」

「お見事だよ、お清さん」

密着した姿勢のまま、相川は店主のおじさんから商品のスティック菓子を受け取り小躍りした。

1回3発セットのコルク球を2回5発を外した相川は、6発目にトミーの助力を借りてようやく成功させたのだ。

トミーへ丁寧に感謝を言う姿勢は、なぜか彼に身を持たれて下から見上げるような格好。

互いの息遣いを感じるほど間近なもの。なのだが、
(うー、せっかくなこまで頑張ったのに、仮面が邪魔ー！)

見つめ合うのはライダーと子猫キティ。お互いの表情が分からず、仮面同士だけにどことなく変哲になってしまった。

トミーは苦笑しながら応じる。

「学園の練習では射撃そんなに悪くなかったのに。今日は調子が悪かったの？」

「あ、そ、そうかもね。それにほら、ISでは操縦者にいろんなサポートをしてもらえるでしょ？ 生身ではこんなもんだよ」

「そうだったんだ。お清さん運動神経いいから、ちよつと意外だなあ」「そんなことより、つ、次はあの景品が欲しいなっ」

相川が気を取り直して指さした先には、マールと書かれた円柱形のチョコレートの箱があつた。ステイツク菓子よりも細身で当たりにくそうだ。

「それでね、またトミーくんを手伝ってもらいたなっと思って……」

言い終わる前にチョコの箱が撃ち落とされた。ただの一発だ。

射撃手を振り返ると、キュアキュアなお面をかぶつたセシリアがいた。射撃に精通しているだけあつてライフル型の射的銃を片手で構える姿は実に板についている。

「あら、ごめんあそばせ。狙いがかぶつてしまいましたわ」

「せ、セシリア……。いいや、あそこにまだあるよ！ トミーくん、私たちも急いで……」

また言い終わる前にチョコレートが撃墜された。

今度はバニーガールの耳を被つたラウラだ。現役軍人だけあつてライフルを構える姿は実に様さまになつている。

「おや、すまん。先を越してしまったようだ」

ぬけぬけとそうのたまつた。

「はいはい熟練者エキスパートさんたち、こんなところで本気になるのはやめてください」

トミーは立ち上がると腰に手を当てて抗議した。身を離された相川は肩を落としてため息を着いている。

まず食つて掛かつたのはセシリアだ。

「だって先ほどから相川さんにかかりきりではありませんの。私にもちゃんとエスコートしてくださいませ」

「セシリアとは最初に風車を一緒に買って遊んだじゃない」

「ですけども」

「その後指をくわえて見ていた子供たちへプレゼントしたのは素敵だなあと思ったよ」

「それはその、嬉しいですが……」

「ライダーとキュアキュアのお面が気に入ったのか、記念写真をせびられてたよね。上手く撮れてた?」

「もちろんですわ! 子供たちもみな幸せそうな笑顔でしたよ」

セシリアのスマホには近所の子供たちと撮った写真が待ち受け画面に設定されていた。階段で撮影されたそれには、トミーたちの後ろの子供たちが手でハートマークを作っている。それがセシリアには微笑ましかった。

(ウフフ……、これはバックアップをとって永久保存ですわね)

楽しそうに画像を見るセシリアと入れ替わって、今度はラウラが不満を吐き出した。

「トミヤ、私の方はどうなのだ。一緒に買い物を楽しんだりしなければ、写真を撮ってもいけないぞ」

「……ラウラには、もうちよつと後で渡すつもりだったんだけど」

「なにをだ?」

トミーはラウラの手に一つの小袋を手渡した。

顔色を変えたラウラが確認を取って中を開けると、小さな小さな手毬の付いた鬢びんが入っている。

「こつ、これはカンザシとかいう髪飾りではないか!」

「さつき小間物屋こまものさんの前でじつと見ていたでしょう? 気に入ったのかなあと思ってさ」

「いや、しかし、似合うかどうかわからなかったものでな……」

「きつと似合うと思うよ。でも僕女の子の髪を結うなんてできないから、得意そうな神楽さんをお願いして飾ってもらえたら嬉しいなあ、なんて」

「お、義弟よろ!」

ラウラはトミーにギュツと抱き着いた。ちゃんと自分のことを気にしてプレゼントまでしてくれたことがこの上なく嬉しかった。

上目づかいに感謝を告げる姿はなんとも愛くるしい。

が、はた目には正義のライダーにフアンの女の子がすがり付いてい
るみたいで、やっぱりムードはぜんぜん無かった。

「えー、ごほんっー！」

相川がわざとらしく咳払いをする。

「セシリアさんもラウラさんもまったく羨ましいですね。そろそろ
私の番にターンさせてもらってもいいじゃないですか！ トミーさんと一
緒にさせてくださいよー！」

「それもそうですわね。バックアップは任せてくださいませ」

「うむ、私も加勢しようではないか」

「それはどうも、……加勢？」

セシリアとラウラは同時にある射的の景品を指さした。倒せば大
当たりになるダルマさんだ。

「いや、別に、一緒についていうのは大当たりを狙おうってわけじゃなく
て……」

「大丈夫だってお清さん。一緒にやればきつと倒せるよ」

トミーが相川に射的銃を手渡した。すでに新たな1セット購入し
ていてコルク球もセットしている。

セシリアとラウラも射的銃を構えなおし狙いを定めた。

「ご安心なさいませ。わたくしの援護射撃を受けて負けた仲間はお
りませんのよ」

「ドイツ軍最強部隊隊長の實力、戦友とものために見せてやろうではない
かー！」

「あー、もー！ そんなわけじゃないのにー！」

ノリノリの二人に相川は首を振った。

しかしそんな相川の手を取ってトミーが身を寄せてくる。先ほど
よりも近く、銃へ重ねる手はとても大きく、少女の心臓が高鳴った。

「しっかり持って、よく狙って。撃つタイミングはみんなで合わせよ
う」

耳元でささやかれると「はい」という肯定の言葉が上ずった。

知らず唾をぐくりと飲み込む。

ラウラがカウントダウンを数えはじめた。

相川の胸の高鳴りはうるさいくらいに響いているが、銃口は静止したまま全くブレない。外れる、という感覚がまったく起きなかった。引き金に添えられた指先は震えていたが、トミーに重ねられると不思議と止んだ。

「……撃てー！」

ラウラの号令と同時に一斉射撃が放たれた。

狙いは凶ったかのようにダルマさんの左目。三発同時着弾はさすがのバランスをも動揺させる。

ぐらりぐらりと揺れる姿勢がしだいに台座の端に動いていき、

「――あ」

相川の声が自然と漏れた。

ある感情がこもったそれを掻き消すように、カランカランと店主が鳴らす鐘があたりに響き渡った。

59話 青春の夏。陰謀の夏。

「で、見事にこれをゲットしたわけか」

昼時、集合場所となったそば屋の二階座敷にて、一夏がスイカを頬張りながら言った。

目の前の食卓には切り分けられたスイカが山となっている。すでに全員分行き渡っているにもかかわらずまだこの量だけに、もとの大きさがうかがえた。

この一品を縁日で射止めた相川は自慢するように胸を張った。

「そう、すごいでしょ！ みんなで力を合わせて一発で決めたんだよ。ね、トミー君」

「うん。息もぴったり揃ってさ。一夏にも見せてあげたかったな」

トミーは種を丁寧に取ってから口にしていた。顔を隠していたライダーの仮面は右側を向いている。隣の相川も子猫キティの仮面を顔の左側にかけており、仮面同士が向かい合っているようだった。

「へえ、それじゃ俺も午後から行ってみようかな」

「いいんじゃないかな。副賞でトマトやトウモロコシなんかも当たるらしいよ。味もきつとこれと同じくらい美味しいと思う」

「確かに。こんなうまいスイカは久しぶりだぜ。箒と鈴もたくさん喰えばいいのに」

言われた二人は微妙そうな顔を浮かべた。

「いや、美味しくいたでているぞ、うむ」

「そうそう。ただここのお蕎麦がちよつと多かつたっていうかさ」

「そうか？ 注文したのざる蕎麦だけだったじゃないか。それも小盛の」

「た、たまにはそんな時もあるのだっ」

「女の子にはいろいろあんのよっ。そ、そだ、午後からあの神社にのぼってみない。腹はらごなしもかねてさ」

鈴は窓から望むことができる山の上を指差した。

このそば屋は商店街の一番はじ、高台の神社の階段下にある鳥居の前に構えている。古風な日本家屋を綺麗に維持した二階建てで、街で

もひときわ目を引く建物だ。だいぶ歴史を刻んできたのだろう、暖簾のれんには何度も染め直した跡があった。

お店の方は気さくで、スイカをさばいてほしいとお願いしたら気軽に応じてくれた。射的コーナーで当てたのだと言ったら縁日の店主を知っているらしく、農家である自宅で育てたものだ教えてくれた。どうりでうまいわけだとトミーは思った。

一夏は種を小皿に吐き出してから言った。

「あー、悪い鈴。実はさつき行ってきたばかりなんだ」

「そうだったの？」

「町を見渡せそうだなって思ってた。実際とても眺めが良いところだったぞ。神楽さんが記念写真を撮ってくれて。ほら、コレ。良く映っているだろう」

一夏がスマートフォン画像をみせる。

「……なんで一夏とシャルロットのツーショットなワケ？」

「俺も神楽さんも一緒に入りなよって言ったんだけど、それでは意味がありませんって断られてさ。どういう意味なんだかわからんが」

「……この二人でぴーすを合わせているポーズは？」

「写真映えるからぜひやってみたって神楽さんが」

「へーえ……」

「ほーう……」

底冷えするような相槌を打つと、二人は勢いよくスイカを食べだした。種も構わずガツガツと噛み砕いている。

「なんだ、やっぱり二人とも食べたかったんじゃないか」

「うん、一夏、君も静かに食べたほうが良いと思うよ。」

トミーのたしなめに、おう、と一夏も再開した。彼女たちのかぶりつくような食べ方の理由は、一夏には到底わからないだろう。

端の席に座るシャルロットと神楽はひそかにアイコンタクトを交換する。したり顔で実に満足そうだ。

間に挟まれているアイリスは小さくため息を着いた。トミーに皮と種を取ってもらい小分けにされたスイカにフォークを突き刺す。本当なら「あーん」をしてもらいたかったのだが、両隣の状況から自

重することにした。

「……午後からも厄介事が起きそうだね」

トミーは左隣に座るセシリアにそつとささやいた。

「いいではありませんの。お祭りにトラブルはつきものですわ」

「それもそうか」

「むしろ騒ぎが起きたほうが、忘れられない思い出になると思いますし」

「僕はもうすでになつているよ」

「まだ早いですわ。夜は花火が上がるそうだとか。せつかくですから最高の一日にしようではありませんか」

「みんなと一緒になら間違いないだね」

「そこは、わたくしと一緒になら、と言って欲しかったですわね」

茶目つ気たつぷりにウインクをするセシリアに、トミーは頬を赤くした。返す言葉もみつからず、ぎこちない苦笑を浮かべるしかできなかった。

その火照った顔に、風が通り過ぎた。

窓から入り込んだそれにはお祭りの香りも混ざっている。屋台の食べ物や、人々の活気、そして夏の透き通った爽やかさが含まれていた。

チリーン、と縁側の風鈴が涼し気に鳴った。

（いいもんだなあ……）

トミーは良く澄み渡った窓からの景色を眺めた。向かいの家々でも窓から顔をのぞかせたりペランダに出ている住人たちがたくさんいた。酒を飲んでいるのか顔を赤くして笑い合ったり、知り合いを見つけたのか商店街の人へ手を振ったり、皆とても楽しそうだ。

今日出会った方々を思い返す。セシリアと写真を撮った子供たちといい、縁日のおじさんやそば屋の店員さんといい、なんて気持ちのいい人たちだろう。

（まるで、この町が一つの家族みたいだ）

トミーはふいに正面の席に座るラウラに目が行った。天涯孤独の彼にとって、義理でも家族である彼女を意識したのだ。

向こうも気づいたのか、スイカを食べる手を止める。

「楽しいか、義弟よ」

「——うん。僕は幸せ者だよ」

一瞬、言葉に詰まった。

神楽に髪を結ってもらい、簪をかけた義姉の姿は息を呑むほどに綺麗だったからだ。

「私もだ」

簪の小毬に手を添えて、少し照れたようにラウラは応じる。

「こんな気持ちになれたのは、お前と家族になったとき以来だ」

「きつと、これから何度も味わえると思うよ」

「そうだな。……不思議だ。ついこの間まで、自分の弱さを嘆いていたのに」

「いろいろ、あったものね」

「弱者に幸せは無いと思っていた」

「……、義姉さんは、思いつめやすいから」

「そうかもしれない……。だが、せめてこの気持ちを与えてくれるものを守るくらいにはなりたい」

「うん」

「やりがいがあるというのはいいものだな、義弟よ」

ラウラはくすぐったそうに微笑むと、照れを隠すように再びスイカへ口をつけた。

トミーは目を細めた。

ラウラが強さを追い求めるのは戦うために生まれた彼女の性さがかもしれない。『強くあらねばならない』という強迫観念があるようにも見えた。

いま、『強くなりたい理由がある』と口にした。それがトミーにはたまらなく嬉しい。

新たなスイカの一切れに手を伸ばす。その味はとても甘くてみずみずしかった。



国際 I S 委員会。

国家の I S 保有数やその運用、開発などを監視する組織であり、I S 条約に基づいて設置された国際機関。

その本部ビル内にある会議場にて、委員会メンバーや関連組織の代表たちが馬蹄型テーブルに集^{つど}っていた。

I S 学園の織斑千冬とアリーシャ・ジョセスターフのほか、英国からは常任委員の女伯爵^{カウンテス}、ルクセンブルクからは近衛騎士団長ジブリル・エミユレル、米国からは国家代表にして特務部隊^{イレイズド}の基地に名を連ねるイーリス・コーリング。

さらに倉持技研の研究所所長や M・R・エレクトロニクスの常務取締役、デユノア社からは社長直々に来場と、関連企業からもオプザバーとして多数出席されている。

みな一様に神妙な面持ちだ。

大人しく席に着くのは千冬とアリーシャくらいのもので、あちこちに輪を作って何やら話し込んでいる。会議場はざわざわと異様な雰囲気^{雰囲気}に包まれていた。

そこに、新たな来場者が現れた。日本の時代劇に出てきそうな古風な髪結いを施し、紺の地味な着物に身を包んだ、目つきの鋭い気の強そうな女性だ。

「なんだいなんだい、みんなシケたツラしてみつともない。もっとシヤキつとしたらどうなんだい！」

独特のソプラノボイスが会場に響いた。

一番シケた顔しているイーリスがげんなりと応じる。

「……チグサが来るかと思ったら、お前さんかい、『ユウキ』」

周囲の視線が登^{ユウキ}場者に集まった。同時にさざ波のようなざわめきが広がる。

それは畏怖だった。

彼女こそ日本が誇る I S トップランカー部隊『三木一草^{さんぼくいつそう}』の一画、ユウキ。

その実力は国家代表どころか前^{ブリュンヒルデ}世界最強の千冬と引き分けたとも

言われる女丈夫である。

が、当人はそんな経歴はどこ吹く風と、ツカツカと足を進め口角泡を飛ばしている。

「アンタが来るって聞いたんだからしようがないじゃないかい！ アタシだって別に来たか無かったんだけどね、ヘタにチグサを寄越してごらんよ、またひと悶着起きるに決まってるじゃないのさ！」

「相変わらずキンキンうるせえなあまったく。来たくないなら、ほら、クスノキやホウキを寄越せば良かったじゃねえか」

「おあいにく様。その二人は千冬にお使いをまかせられていてね」

「お使いだあ？」

「IS学園の生徒たちのお守りさ」

「何してくれてんだよ織斑千冬……」

力なく千冬に抗議を向ける。

がさつで負けん気が強い軍人をいつも相手にしているイーリスであるが、「ちやきちやき」と「おきやん」の代名詞的なユウキに対しては本気で苦手になっていた。なにせ一言いえば十いい返してくるような相手である。ぶつちやけ疲れるのだ。

千冬もそこらへんの事情を汲みつつも、表情には出さず淡々と返した

「無駄足ではない。今回の議題に関わることだ」

「ガキどもの面倒をみるのか？」

「その面倒をみることで、この調査報告書をまとめられたということだ」

ふん、とイーリスはテーブルに設置されているホログラム資料に手をかざした。次第には第四世代IS考査の文字が浮かんでいる。

そこには篠ノ之箒が操縦する第四世代IS【紅椿】の性能が列挙されていた。

曰く、近接戦闘を基礎にした万能型であること。ワンオフ・アビリティー絢爛舞踏けんらんぶとによるエネルギー増幅能力があること。これにより燃費最悪ながら優秀な『アクティブ・エネルギー・ブラスター』すなわち攻撃、防御、推進力いずれにも応じられる展開装甲が運用できる

こと。

そして、どの国家にも帰属していないことが赤文字で記されている。

「ようもこれだけまとめたもんだな」

イーリスの憎まれ口にユウキが口角を上げた。

「ま、役得ってやつさね」

「ああ?」

「ホウキは箒ちゃんに、ああこれじゃ分かりにくいやね、ホウキが篠ノ之妹にISの稽古をしてあげたのさ。息のかかった子を使いに出したらうまい具合に釣りあげてくれてね」

「んでその傍らでデータを収集していたわけか。お、しかも専用の基地使ってやってるとかえげつねえな。……っておい、コレじゃあ【紅椿】を日本に帰属することが前提になってるみてえじゃねえかよ」

「穏便に済ませるにはこのやり方が一番じゃないか。何か問題が起きてもホウキがいれば対処できるしね。どっかの国みたいに辺鄙な基地でこそそそテストするよか安心できるってもんさね」

「……どさくさに紛れて搔つ攫おうとしたクセに減らず口を叩くじゃねえか」

イーリスの目がギラつきだした。

別に軍や国が貶められるのはいい。慣れている。しかしその辺鄙な基地で被害をこうむったのは彼女の盟友なのだ。しかも暴走して日本に向かうや『三木一草』さんぼくいつそうを揃えて対処するような過剰反応に、防衛以上の目論見があることを見逃さなかった。

「ハンッ! 言いがかりはよしとくれ。ろくにISの管理もできないような奴らにや分不相応ってモンさ。中身も含めて大人しくウチらに任せときやあよかつたんだ」

「クチが過ぎるぞ teme エツ!!」

イーリスが弾け飛んだ。自身のIS【フアング・クエイク】を瞬時に展開し『単分子結晶ナックル』をぶちかます。

風を切りうなりを上げる剛腕が、しかしユウキの目の前で止まった。彼女の両肩から第三、第四腕が伸びて掴みかかったのだ。見た目

は武者の籠手に近い。さらに背中には幌ほろのようなISのスラスタユニットが展開され、アイリスの勢いを受け止める。

「――威勢だけじゃあ、この【武蔵】は倒せないよ」

【打鉄・武蔵】。

日本の国産IS量産機【打鉄】の強化発展型の一つで、ユウキに最適処理化された専用機である。最大の特徴は腕が四つあることで、剣・銃・盾などあらゆる装備を自在に繰り出し阿修羅のような戦いを演じることが可能であった。

当然、多腕を御せるだけの実力が必要となるため量産機という面では落第生であるが、ユウキはこのピーキーさを気にいり導入することになる。結果、量産機という茎から枝分かれして咲いた一輪の仇花あだばなとなったわけである

「そんな【打鉄】ロートルの微調整マイナーチェンジごときで俺に敵うと思つてののか？」

「やってみなよ。IS後進国の新鋭機ルーキーにできるもんならね」

拳を掴み合う両者の間に睨み合いの火花が散る。

そこに、入り口側から声がかけられた。

「本会議の議長の名において命じます。両者ISを解除なさい」

女性にしては低いアルトながら重く響き渡る声音だった。

プラチナブロンドのくせっ毛にルビーのような紅い瞳、それは平たく言えばアイリスをやや大人びさせたような女性だった。

ただ、まとう雰囲気があったく違う。アイリスが明るくて元気いっぱいな性質であるとするれば、彼女は仄暗く冷たい印象を放っている。

進み来る彼女に、ジブリルが居住まいをただし片膝を着いた。臣下の礼だ。それに異を唱える者は誰もいない。それが当然であることを知っているからだ。

アイリスとユウキは大人しくISを量子化させた。

「へえ、そうか、議長になられたのですか。『姫様』」

「そーいやあ今回の会議はオタクの国のISも関わっているんだから、当然っちゃとうぜんかねえ、『姫様』」

姫様、と称される女性は口元を弧の字にして両者に応じる。

「第四世代IS対策、ひいては篠ノ之束への検討会議。私わたくしたち雑魚ど

もが共食いしてもはじまりませんわ」
ルクーゼンブルク公国の国章が記されたドレスを着る女性は、重々
しくそう言い放った。

60話 男と女、面子と情

今回の国際IS委員会会議は異様だった。

最初の議題、篠ノ之箒が操縦するIS「紅椿」の処遇について即決裁判のようにトントン拍子となったのである。第四世代IS、製作者である篠ノ之束以外では到達しえない超オーバーテクノロジー技術の扱いであるにも関わらずだ。

結論は、操縦者が卒業するまでIS学園管轄とすること。

早い話が先送りだが、参加者の反応は落ち着くところに落ち着いたという感じだ。機体を調べるうえでも面倒ごとの置き場としてもIS学園はどうってつけの場所は無い。なにせ現・旧世界最強が雁首ブリュンヒルデを揃え、アカデミックな研究施設としても第一級の設備が揃っているのだ。これ以上の環境は世界のどこにもありはしなかった。

加えて、今回のように何をしでかすかわからない束への対策という面もあった。妹の箒をIS委員会傘下の学園に縛りつけることで人質としたのである。

教師の織斑千冬は手元のコーヒークップを握り潰さんばかりに身をこわばらせたが、席を並べるアリーシャが何でもないような調子で、

「学園に閉じ込めておくのはいいが、中に入れた後はこっちに任せてもらうのサ」

と、IS学園特記第21項のいわゆるアンタッチャブル条項を突き出してそれ以上の干渉を受け流した。

参列者たちも箒を籠に入れられれば良しと判断し、すんなり了承。

あとは「紅椿」の運用事例など細かな確認に終止し、第一議案の終了と共にいったん休憩となった。

千冬は席を離れる際、

「私より教師家業が合うようだな」

とアリーシャの肩を軽く叩き、コーヒーのお代わりを貰いに行っ
た。

この多少とも言えぬほど少ない意見交換は、これまでの会議ではあ

りえないほど順調すぎる進行であった。

その秘訣を、フランスIS関連大手デユノア社をまとめ上げるアルベール・デユノアは、オブザーバーたちが座る傍聴席から見通した。(新しい議長殿は有能であらせられるようだな)

噤んだ口元に添えた手が整えられたあごひげを上下する。眉間には深いシワが刻まれ、厳めしい顔がさらに険しくなっていた。

(すでに答えは決められ、会議とは名ばかりの確認事項の共有ばかり。とうに根回しは済んでいたということか)

アルベールは正面の誰もいない会議テーブルを向いたまま、隣の席の『男』に話しかけた。この場で数少ない『男』、M・R・エレクトロニクスの常務にである。

「……こうなることを予期していたのか？」

常務のかけるぶ厚い眼鏡には机の「紅椿」関連資料が映っていた。手は空間に浮かぶタッチパネルを忙しく叩いている。

「茶番になるだろうとは思っておりました」

顔の左側空間には何やら表がホログラムで現れ、タイプが進むごとにグラフが形作られていく。

「【紅椿】に関するデータを頂けただけでも良しとしますが……、ダメですね。第二世代段階の技術ではどう最適化してもまったく歯が立ちません」

「第三世代が立ち向かった場合ではどうなのだ？」

「そちらはほとんどが試験段階です。計算したところで正確な数値になりませんし、どんなに好条件でやっても匹敵こそすれ勝ることはないでしょう」

「また、我々は條ノ之東に突き放されたというわけか」

アルベールは瞑目してため息を着いた。

デユノア社は量産型ISシェア世界第三位の^{おわたな}大店ではあるが、主力機【ラファール・リヴァイヴ】は第二世代型の最後発だった。同じ二世代でも早い段階で打ち出した【打鉄】の倉持技研には大きく差を開けられている。技術蓄積の未熟により技術革新へたどり着けないのだ。遅れを取り戻すためにも第三世代の開発が急務なのだが、このう

えさらに第四世代の登場とあつて、まさに周回遅れにさらされているような状況だった。

常務はウインドウを閉じながら事務的に言う。

「前の会議で採択された国際IS技術統合計画によって、どこまで^{ベースアップ}基礎技術向上できるかが重要となるでしょう」

「うむ」

渋い顔で頷くアルベールだが、この件には内心安堵していた。

IS技術統合計画とは、篠ノ之東による第四世代ISの登場に危機感を抱いたIS委員会が下した一手である。世界が個人に振り回されている現状を打破するための。

デユノア社は第三世代開発の遅延のせいで国際競争力の低下が懸念されていたが、技術統合計画によって一息置くことができた。IS開発では後塵に甘んじているものの、関連する装備展開においては一日の長があつたからだ。「ラファール・リヴァイヴ」の特徴である大容量バスロットを活用するために手掛けた付属品戦略が功を奏したのである。

多彩なソフトバリエーションが技術統合によって拡散され、急増した利用者たちから膨大な運用データがもたらされた。結果、既製品の改良や発展型の開発、さらに新たな分野の開拓など、ソフト販売という分野ならば一定のポジションを確保できそうな勢いとなった。

アルベールの内ポケットの携帯端末がバイブする。

「失礼」

受信したメールを見れば、受注が決まっていた新商品が完成したことの通達だった。自然と緩む顔のシワを作り直し、喜びを押し殺して端末のアプリを閉じる。

トップに戻った画面を見て、再度アルベールの顔がほころんだ。

映っているのは、

「おや、^ご息女のお写真ですか」

常務が口にする『^ご息女』のイントネーションがやけに強い。

アルベールの表情筋が引き締まった。

「覗き見とは感心しないな」

「ご子息であれば喜ばしいことこの上なかつたもので」

「……、それはもう済んだ話だ。シャルル・デュノアはもういない。シャルロットに戻ったのだ」

携帯端末の画像には、若き日のアルベールと幼い愛娘のシャルロット、そして清楚な美しさを放つ彼女の母親が微笑んでいた。

「不憫な子ですな。もはやその光景は望めないのですから。写真のご婦人は妻となることなく没し、正妻のロゼンタ殿は不義の子に憎悪される。さらに御家やグループ内ではあるうことか廃嫡運動が発生し、お命すら危うい始末。今や、液晶パネルの上でしか娘に会うことができな

「!!——ッ」

アルベールのすさまじい眼光が常務を突き刺した。セットされた髪が総毛立ち、顔の筋が浮き出るほどの憤怒が沸き立つ。

しかし口はへの字のまま食いしばり、こみ上げる言葉を懸命に堪えている。

何を言わぬよう我慢しているのか常務にはよくわかった。

「ご立派です。下手に言質を漏らすわけには参りませんからな。私の言をお認めになることになる」

「……………」

「貴社の内紛の話は調べさせてもらいました。娘の命を救うために性別を偽らせIS学園へ送ったこと。しかしその子は自ら偽装を拭い去り自分の力で代表候補生を堅持したこと。我々としてはまんまと騙されてしまいました」

「そちらから、首を突っ込んできたと、記憶しているな。
オールド・ファッシュョン
反女尊男卑主義組織……………」

「逆境に立ち向かう男性すべてに助力すること。それが我らのモットーです。女性には決してない」

アルベールの怒りを正面から見据え、常務は毅然と言い放った。

「どうですか、男性同士、貴方も我々に与するといふのは」

「御免被るッ。お前たちにはあまり良い噂を耳にしないのでな」

「女尊男卑主義者の流言でしょう」

「万を超える少年たちを犠牲にしたというのも飛語だど?」

「世界を変えたいと思っただことはありませんか?」

「生け贄をもって捻じ曲げるというのであれば断固拒否する」

「商談決裂ですね」

常務の話は終わったと荷物をまとめ、席を立つた。「すでに歪んだ世界だというのに」という独り言がアルベールの耳に残る。

「残念です、アルベール氏。貴社には我が社の製品を多く手配してきましたが、疑問に思うことはなかったのですか?」

「恩着せがましいことを。たとえ今後流通を絶たれようとも、コンプライアンス企業倫理を捨てることなど社長としてやってはいけないことだ」

常務は初めて齟齬を崩した。

「さすがです。見事です。漢とはかくあるべきです。その気概に敬意を表し、ささやかながらこれを進呈しましょう」

常務は空間に浮かぶホログラムの小ウインドウから一通いっしょうのメールをアルベールに送った。携帯端末に表示されたその内容を一瞥する。

「!? 貴様らは……!」

弾かれたようにアルベールが立ち上がろうとする手前、柱時計が奏でるようなチャイムが鳴った。会議の再開を知らせるものだった。

去っていく常務の後ろ姿を見送る顔は、怒りではなく驚愕に目と口を開いていた。



『姫様』と称される議長が重々しく続開を告げる。

第二号議案はもうひとつの第四世代IS「セブンス・プリンセス」等の処遇について。

これもすでに話しているのか、何処からか上がったルクーゼンブルク公国の管轄という意見に同調の声が連なった。操縦者が公国の姫君であり、開発されたのも公国内であるからと後付けのように理由が塗装される。

しかし、意見とは反対に難しい顔をする面々が多い。

「セブンス・プリンセス」の管轄はともかく……」

会議テーブルに並ぶ唯一の男性、賛助が肥満体をゆるわせ口ごもりながら言った。

「グレイ・アイディール」も一緒にルクーゼンブルク管轄というのは、その、いかなる了見なのでしようか？」

出席者の視線が議長に集まった。

普段であれば場違いな男の意見などすぐに叩かれているというのに、誰も彼を否定しない。

議長はすました顔で淡々と応じる。

「そのISモドキも我が国のラボで生まれたもの。また操縦者も我が国に籍を置く会社で生まれております。「セブンス・プリンセス」と同じではありませんか」

「はあ。で、ですが、それでしたらなぜこれまで受け入れなかったのですか？」

「ISの模造品の受け入れなど御免ですもの」

バツサリ言いやがる、と賛助は内心こぼし肩を震わせた。

「ですが、パイロットの少年は我が妹を助けました。世間的にも人気を博したと聞いています。男にしてはマシのようですし、妹の顔を立てるためにも特別に配慮をしたままですわ」

ヒユウ☒ と調子のいい口笛が鳴った。発信源である英国の女伯爵カウンテスがニヤニヤと歯を見せていた。

「なにか言いたげですね？」

議長が顎を引いて睨むように言う。

「いやあ、他愛のないことです。まさか男嫌いの『姫様』がお認めになるとは思いませんでしたもので」

「ろくでなしの馬の骨より実験室で生まれたモルモットの方が利用価値があるというだけですわ」

「それは素晴らしい。男に価値を見出すとは。議長と言う大役を任せられて成長されたようですねあ」

議長がテーブルに掌を落とした。

「他に意見が無ければ採決に移りたいと思います」

カウテンテス
女伯爵は鷹揚に顎をしゃくった。サングラスの奥の視線が難しい顔の千冬と口元を緩ませるアリーシャ、そして困惑するジブリルを順に巡り、ケタケタと笑いを浮かべる。

他の出席者は特に異論は無いようで大人しく決議を待った。

しかし、

「ちよいといいかい?」

と甲高い口を挟む者がいた。ユウキだ。

またかよ、とイーリスが椅子にもたれかかる。

「何でしょうか」

議長が務めて平静に言う。

「挙げてもらった『セブンス・プリンセス』のデータ、重要なところが端折^{はしよ}ってるみたいだねえ」

指摘に、列席者の怪訝な視線がユウキに集まった。

議長は顔色を変えずに続きを促す。一瞬だけ眉をひそめたのをユウキは見逃さなかった。

「ウチの仲間たちが『紅椿』と同様に性能チェックしてくれてね。今送るのがその資料さ。ちよいと目を通してもらえるかい」

ユウキが手元の機材を操作すると参加者のモバイル端末に新たなデータが追加された。

そこに記されていたのは、

「瞬間移動ですと!」

出席者から上ずった声が上がった。

会議資料に載っていない情報が写真や動画付きで掲載されているのだ。

映像はIS学園の生徒たちが旗を奪い合うゲームの中で撮られたものだと注釈がある。

各自読み進めるうちに、それぞれ感想が口を継いで出た。

「ふうん、『セブンス・プリンセス』が運用する重力を使い、ワームホールを生み出した、と」

「しかもすでに実戦で使われているですって?」

「現場は……、銀の福音暴走事件!」

「写真に写っているのはISモドキではありませんか！」

「お、トミヤ坊じゃん」

「あれは米国が収めたのではないのか？」

「わ、わたくしだって知らないザマス！」

「どういふことなんだイギリス!？」

急遽話を振られた米国代表のイギリス・コーリングはしどろもどろだ。

「あ、えくとだな、何ていえばいいか……」

「はつきりしたらどうなんだ！」

そうは言っても祖国が誤魔化し通した秘匿事項をどう説明すりやあいいいんだと目が泳ぐ。

まごついた姿勢にさらなる追求の声が重なり、議場が急にざわめき立った。

今まで裏工作によって舗装された道を走っていたのが、突如断崖に突き当たったようなものだった。

「こんなことは聞いておりませんよ!？」

ついに議長へ矛先が向いた。

ユウキは頃合いとばかりに悠々と立ち上がって手を叩く。

「ハイハイ、盛り上がっていると悠々と立ち上がって手を叩く。ここで確認したいのは「セブンス・プリンセス」のワームホール展開とLSのシナジーがヤバイってことだ」

「と、申されますと……?」

賛助が汗を拭きながら続きを促す。どうやらLSと同じ男性側である彼も知らない様子だ。

「調べただけだね、ワームホールはそんなに便利なもんじゃないのさ。エネルギー効率的に一回使えば打ち止めさね。しかもトンネル内は高エネルギーがバリバリでよっほどのシールドがなきや通れない。うまく通り抜けられてもいきなり向こう側にほっぽり出されたって状況を確認するまでに酔いが発生しちゃう」

でも、とユウキは値踏みするように議長と、アリーシャに目を配った。

「リミテッド・ストラトスならばそれが可能だ。曲がりなりにISシールドと絶対防御があるからね。それにパイロットは酔いを受けない能力を持つていて寸法さ。そうだね、アリーシャ」

ユウキは一連の技能を生み出した張本人であるアリーシャに念を押しした。三木一草総出で調べ上げた結果彼女に行きついたのだ。

アリーシャはもったいぶりながら両手を上げた。

「そこまで調べがついてるんなら、確認するまでもないってもんサ」というわけだ。で、議長さん。アンタのところだ【セブンス・プリンセス】とLSを両方管轄にする話、こりゃあちと業突^{ごうつ}く張りすぎてやしないかねえ」

勝ち誇るように見下しながらユウキが言った。一同も不審げに議長を見つめている。

それに対し、

「情けないですね」

嘲るような声が議長からもたらされた。

「そこまで辿りつきながら、我が国の技術独占にしか答えが至らないだなんて」

「どういうことなんだいっ?」

ユウキが目の色を変える。

議長は憐れむような視線で返した。

「瞬間移動も、ISモドキの運用も、行うのは誰ですか? 私の妹と、遺憾ながら妹が見初めた者ですよ」

不意を突かれた内容に、ユウキは鳩が豆鉄砲を食ったような顔になった。

「そ、そりゃあ、そうだけど」

「それで、貴方がたが懸念されるようなことをする前提はどういった状況ですか?」

「そりゃあ、操縦者のアイリス様とこのまえ一くんを嵌めてつてことに」

「妹たちを敵に回した時、もしくは洗脳などで意のままにしたときですわね」

「ぶっちゃけりゃあそうだね」

「そんなことを私が許すとお思いで？」

ユウキは一步後ずさった。汗も流れる。目の前に座る自分より年下の女性が放つ圧力に抗せなかったのだ。

「ま、待ちなよ。ISとLSが奪われるなんてこともありえるじゃないかい」

「LSは奪えませんし、こと【セブンス・プリンセス】に関しては東直々の妹専用機です。他人の手に渡ることは不可能ですわ」

「ちよ、ツツコミたいところがあるんだけど」

「調べればわかる話です。勉強不足を嘆きなさい。……さて、みなさんに伺います」

議長は圧の矛先を会議場全員に向けた。各々の身がすくむ。おのおの

「私は議長故に会議の進行に徹しなければなりません。しかし、身内を思いやることを表明するくらいはしてもいいはずですよ。そこで、淑女の皆々様」

アイリスの姉は両手をテーブルに叩きつけて宣言した。

「我が妹の恋路を阻もうという輩はいらっしゃいますかしら？」

決議はルクーゼンブルク管轄に満場一致で決定した。

Extra それぞれの舞台裏

淀んだ空気が溜まる薄暗い会議室。

ボロい空調が咳き込むような音を立てて地下の湿気を集めていた。わずかな照明の下、ぼんやりと浮かぶ丸机に幾人もの男たちが影をまとうように集^{つど}まっている。

椅子はない。みな立ちっぱなしだ。

ぼそぼそと、エアコンの雑音^{ノイズ}に負けるほどの小声で語る話題はIS委員会の議事録について。

特にLSの処置だ。

彼らが希望した以上にLSは女尊男卑の世界に食い込んだ。

もしいま牙をむけばきつと痛快なことになるだろう。

そう逸^{はや}る仲間を、冷静な声が止める。

噛みつけたとしても一回こっきり。二度目は無い。たとえ骨まで刺さろうとも命までは届くまい。

相手を、女尊男卑の世界を倒すにはさらなる詰めが必要だ。

抜かりはない。

デュノア社には逃げられたが、種は送った。どこにも育っていない黄金の種を。

まだ地盤が固まっていないデュノア社ならば必ず耕作するだろう。

LSに続くもう一つのピース。それが育てば、きつと世界を変えられる。

血を吐くようなうめき声がある。

我々は10年待ったのだ、と。

冷静な声の主にも届いたのか、諫める声は震えていた。

ようやく微かな希望が見え始めたのだ。あせってことを仕損じてはならない、と。

弱者たちは地面に這いつくばっておっかなびっくり進むのだ。

10年間負け続けた者たちはそう再確認した。

最後に参列者たちは唱和する。

——男たちに栄光あれ



「陛下、なにもアイリス様のためにあそこまでなさらずとも」

「ジブリル、女が色恋の話を好きだというのは本当ですね」

「私はアイリス様とトミヤ氏の仲を認めてはおりませんっ」

「私とて同じですよ」

「は？ しかしそれでは」

「利用価値がある、と言ったでしょう。まさか恋バナで煙に巻けるなんて。実に愉快」

「最初から『セブンス・プリンセス』と『グレイ・アイデール』を取り込むつもりだったと」

「トミヤ氏はとても純朴な少年なのだそうですね。それこそ犬のように」

「陛下、今はIS学園の生徒です。アリーシャ氏が突っぱねた通り、あまり干渉なさるのは」

「今は、ね。でも3年後、卒業した後はどうとでも料理できるでしょう」

「まさか、それを見越して」

「瞬間移動の運用はとても心強いですわ。しかし、ルクーゼンブルクのような小国が生き残るためには足りません。もっと駒を揃える必要がありますよ、ジブリル」

「ハッ」

「IS学園から引き込みなさい。戦力になるものなら糸目は着けません。アイリスの誕生日会のような不手際、二度目は肅清の嵐が吹くと心得よ」

「近衛騎士団長インペリアル・ナイトの名誉にかけまして、必ずやご期待にお応えいたしますっ」

「結構。ああ、それと」

「は」

「あなたもお年頃。そろそろお相手を探してみてもどうかしら。たと

えば、織斑の弟とか」

「おっ、お戯れを！」

「まあ、あなたにハニートラップを期待しても無駄ですね」

「は、はあ……」

「ならばせめて、トミヤ氏の義姉あねを自称するドイツの冷水か、彼に執心するイギリスの令嬢を抱き込むように」

「どちらも、国家代表候補生ですが」

「にぶいわね。落ちた場合拾えるように網を張っておくのですよ」

「なるほど」

「それと、あなたもIS学園の警備には目を光らせるように」

「お言葉を頂戴するまでもございませんが、なにゆえあえて？」

「我が国の生命線はIS関連と女尊男卑という風潮。それを脅かすものは決して生かしておけないのですから」

Extra かいせつ さん！

いつの間にか回も60話を超え、前回の解説から新たな人物や用語も増えてきました。

次からの新章を迎える前に、ここで一度まとめたいと思います。

『人物』

◆ジブリル・エミユレール

アイリスお付きのくつころナイト。

原作通りで書いてますが、ちよつとポンコツ過ぎるのを何とかしていききたい。

近衛騎士団長とかいてインペリアル・ナイトと読む。彼女が所属するルクーゼンブルクって公国なのに、昔は帝国インペリアルだったのか？

◆フォルテ・サファイア

ダリルの相方のギリシャ代表候補生ツス。IS学園2年生。

原作通りで考えてますが、ちよつと先輩らしさを加味して描いてみました。

◆チグサ

オリキヤラ。

後述する『三木一草』の一画である日本のエースパイロットです。

上品な仮面の下にガチガチの愛国主義を燃やす毅然きぜんとした大和撫子。

名前の元ネタは南北朝時代の公卿武将、千種忠顕ちくさただあき。登場する太平記

では最初から最後まで後醍醐天皇の最側近のような位置づけでした。

◆クスノキ

オリキヤラ。

エース部隊『三木一草』でも筆頭に立つトップランカー。

ですが、垂れ糸目でのほほんとした人付きの良い田舎の姉ちゃんみたいなキヤラ。

元ネタの楠木正成くすのきまさしげはド偉い武将として有名ですが、大河ドラマの太

平記だと気のいいおっちゃんとして描かれているんですね。コッチのイメージに合わせています。

◆ホウキ

オリキヤラ。

ヤツは『三木一草』の中でも最弱……。箒ちゃんとまじって紛らわしい。

そばかすと釣り目が特徴のコテコテの関西娘やで。でも筆者関西出身ちやうから方言よくわかんないんやで……。

元ネタは名和伯耆守長年^{ながとし}。武将の一方海運業を営む商売人でもありました。

彼だけ伯耆守^{ほうぎのかみ}（山陰地方の長官職の意味）と官位が付いているのは、三木、つまり「き」の文字を使うための語呂合わせ。

◆ユウキ

オリキヤラ。

『三木一草』の一人です。

こちらら現代でも着物に髪結い姿で通す、ちやきちやき江戸っ子なおきやんだよ。

口調は時代小説から探ってますが、筆者江戸っ子じゃないもんでにわかな感じに。べらぼうめ。

元ネタは結城親光^{ゆうぎちかみつ}。単身敵に乗り込んで、見破られるや大暴れして敵将を討ち取るほどの荒武者だったとか。

◆四十院神楽

旧家のお嬢様で、箒とは剣道部の部活仲間です。

いちおう原作キヤラですが、ほぼ描かれていないものでだいぶオリ化しちやってます。

三木一草のホウキとは旧知で、名和さん・神楽ちゃんと呼び合う仲。

◆議長（姫様）

オリキヤラ。

直近の国際IS委員会会議で議長の席に着いた『姫様』と通称されるルクーゼンブルクの王族です。

アイリスに似た外見だけど、性格真逆のお姉さん。てかアイリスが第七王女ってスゴイ親族いっぱいいるそう。

登場自体は前のExtraでもちよこつと出てました。

◆アルベール・デユノア

シャルロットのお父さん。世界的なIS企業デユノア社の社長です。

厳格な一方家族想いなツンデレパパ。

原作通りで書いていますが、いつの間に会社を持ち直したんですか社長さん。それともシャルロットを遠ざけるためのブラフだったのか？

『組織、ISなど』

◆三木一草さんぼくいつそう

オリジナルの日本最精鋭IS部隊。

元ネタは太平記に出てくる後醍醐天皇の親衛武将から。

全員国産ISの【打鉄】をカスタマイズした機体に乗ってます。

ちなみに本作の日本は世界に先駆けてISを運用したため、ノウハウや管理面などで世界の一步先をリードしている設定です。

◆打鉄・改あらため

チグサが操縦する【打鉄】のカスタムタイプ。カラーリングは青。

搭乗者の意向により純国産技術のみで改良され、ほぼ【打鉄】をベースアップしただけのシロモノです。

なのに超長距離射撃を難無くこなすのはチグサの実力のなせる技だったり。

◆打鉄・北辰ほくしん

ホウキが操縦するカスタムタイプ。カラーリングは黒。

早期警戒管制機EWAACSにバリエーションエンジンされ、部隊の目として戦う後方支援型です。

ホウキと親しい四十院神楽にも供与され、データ取得用に運用を任せられています。

◆打鉄・菊水きくすい

クスノキが運用するカスタムタイプ。カラーリングは黄。もともと防御に秀でた【打鉄】に、非固定浮遊装備の盾を三つ装備させたガードタイプです。

新装備は『指呼の三楯』と名付けられ、バリア展開の『大盾』、杭打機内蔵の『突盾』、プラズマカッター搭載の『角盾』で成り立っています。名前のモデルは防人の歌と地方都市。

クスノキの元で修行した相川清香にも供与され、データ取りに運用されています。

◆打鉄・武蔵

ユウキが運用するカスタムタイプ。カラーリングは赤。

両肩にも腕が着いた異形の多腕型。操縦しづらいためユウキ以外では使えないじやじや馬です。

スラストも特注品で、幌のように展開される姿は織田信長親衛隊の赤母衣衆のよう。

なお、読者さんからイメージを頂戴して生まれました。ありがとうございます！フルハベル暗月さん！

◆ワームホール

アイリスのIS「セブンス・プリンセス」が運用する重力制御によって生まれたオリジナル技。

コンセプトはアリーシャの助言から。

空間を捻じ曲げてどこにでも行けるドアのように運用できますが、ゲート内は強力なエネルギーが発生するため、シールドを持つISぐらいしか通れません。

それにしても重力を操る最新鋭機とか、スパロボのあんなボスやこんなボスを連想しちゃって妄想が膨らみまくりんぐ。

◆旅館花月荘

原作でも臨海学校で登場した旅館。

が、VIP御用達だったり立派な外見だったりとかかなりイメージ膨らませていきます。

IS学園の生徒たちが泊まるんですから並大抵の宿ではないだろうということ。

夏祭りが開催された近隣の町もオリジナル。ありふれたアットホームな田舎町を想像しています。

ここまでの分は以上です！ 抜けがありましたら追って修正いたします。

お家の事情

六拾壹 伸びるときは一気に伸びる

夏も盛りのIS学園は蝉の声だけが交わされていた。

売店など多くの施設が夏季休暇で扉を閉め、教師たちもバケーションに出払っている。

残っているのは研究棟に籠る狂科学者と施設管理人ぐらいなもので、校舎は人気のない閑散とした雰囲気にも包まれていた。

その静けさが、IS訓練用アリーナから響く騒音を際立たせる。

太鼓を打ち、金属がぶつかり、地面を叩くような音が漏れていた。

学園の者ならだれもが知るISの戦闘音だ。

「ハアアーンッ!!」

試合場上空では黄色い機体が燕のように舞い踊りながら、地上に向けてマシンガンを放っている。

三つの楯型非固定浮遊装備を従える武者姿の【打鉄・菊水】だ。

「動きはいいけど、射撃が散漫だよー」

地上からは幾条もの対空砲火が猛然と噴き上がっていた。

巨大な籠手の非固定浮遊兵装備を構え、甲虫を思わせる四脚シル

エットの【グレイ・アイデール】だ。

【打鉄・菊水】は高度を取って回避しようとするが、近接爆発が咲き乱れ翻弄させられる。

それでも爆炎をかいくぐって浮かび上がる姿に傷は無く、機体の堅牢さを示していた。

「もつと機体の頑丈さを活かすんだ、お清さん！」

トミーは相手の動きを見切ると、温存していた左の籠手から五連装電磁誘導砲を放った。五指のうち四発が相手の周囲で炸裂す

る。回避障害の妨害射撃だ。一拍置いた本命の一撃が誘引した直撃コースへ狙い撃つ。

相川清香はバリアを展開させる『大盾』おわだてで受け止めた。その合間に炎アサルトライフルのスコープを絞り込む。有効射程ギリギリだと警告表示が呼

び止めるが、彼に悪くないと言われた射撃の腕を信じて引き金を引いた。

反撃は、見事に届き地上の機体を揺さぶった。

「こ、こっうかな、トミーくんっ!?!」

「そうそう! やっぱりお清さんは射撃上手だよ!」

「おだてたって何も出ないよ!」

「この間のスイカのお返し!」

「もうっ。ほんとはスイカ割りのほうが得意なんだから!」

笑みを滲ませる相川は焰アサルトライフル 備を量子化させると、緩む口元を噛みし

めてトミーの元へ飛び込んでいった。

ダイブだ。

「いくよっ!」

直上からの急降下。直線ではない。途中三度も瞬イグニッション・ブースト時加速を噴かして左右に揺さぶりをかけ、地上からの迎撃を掻い潜る。

以前、タッグマッチトーナメントでシャルロットが見せた動きだ。

「パートナー直伝の軌道だね! でも!」

トミーはその戦法を知っている。相川の体捌たいさばきは左右に武器を向けさせることでがら空きになった中央へ突進する技だ。

矛先が分かれば対策もとれる。トミーは広がった籠グレイ・グローブ 手に防護膜を発生させ、柏を打つように叩きつけた。

しかし、

『突盾』っ、『角盾』ツ!」

それを二つの楯が食い止める。さらに『突盾』の杭打機グレイ・スケールが、『角盾』がプラズマカッターが逆襲した。防護膜ゴールキーパーを発生していなければ破られていただろう。ともかく籠グレイ・グローブ 手は防がれた。

「やるね!」

トミーは右手に持つ重グラウンド・ブレイカー 銃をばらまいた。ISのシールドをこっそり剥ぎ取る特別弾使用だ。

しかしそれに『大盾』おだてが身を挺す。バリアが破られ楯が砕けても主を守り切った。

相川の勢いは止まらない。

「だあああああつ!!」

鞘から引き抜いた近接ブレード『葵』が翻る。刀身には驚愕するトミーの顔が写っていた。

◇

「それなのに及ばないのかあ〜」

アリーナのロッカールーム、設置された長椅子に相川が身を広げていた。悔しそうに足をばたつかせ、両腕をぶらぶらさせている。

「決まったと思うただけだなあ。尻尾ベンチヒッターでハエ叩きにされるとかカッコ悪すぎだよお……」

「いやあ、ほら、僕の機体接近戦得意だし」

トミーは自販機で買ってきたパックドリンクを渡しながらフオローを入れる。

しかし相川は頬を膨らませて受け取ろうとしなかった。彼の得意分野なんてそんなこと、いつも追いかけているのだから百も承知だ。それに、常に専用機持ちたちと一緒にいることも。特別な才能のない自分が使い古された練習機でいくら訓練しても、その背中に届かないことだって痛いほど知っている。

どうすれば追いつくことができるのか。そのことばかり考えてがむしやらに練習する中で、転機が訪れた。友人の布仏本音が彼女の親友と共に三木一草のクスノキから稽古をつけてもらえるという話を聞きつけたのだ。この機を逃すまいと拝み倒して自分も参加すると、なんとクスノキの目に止まり、あろうことか特別機を貸し出してもらえる流れとなった。

心機一転。生まれ変わったような気持で打ち込んだトレーニングは自分でも驚くほど上達をみせた。もうこれまでとは違うのだということをこの試合で一本取って見直してやろうと意気込んでいた。それなのに、

「いくら上手くなっても、才能のある人には追いつけないのかな」

結局は負けてしまって、彼との距離はまるで縮まっていけないじゃない

いかと、舞い上がっていた自分が情けなく感じた。

「新しい機体、よく乗りこなせていたと思うよ」

トミーのねぎらいも気休めのように受け止めてしまう。

「そうでなければ懐に潜り込まれたりしなかったもの」

「勝ったくせに」

「勝たせてくれたんでしょ」

「……え？」

涙ぐんだ相川の瞳がトミーに向いた。

「どうして接近戦なんて選んだの。あのまま距離を取って戦えば僕のシールドエネルギー切れで勝てたのに」

「それは、射撃を褒めてもらえて、うれしかったから……」

「接近戦もできるんだって、見てもらいたかったの？」

「う、うるさいなっ」

相川はゴロンとそっぽを向いた。もっと褒めてもらいたかったなんて子供みたいなこと、言いだせるはずがないじゃないか。

トミーは彼女の背中にやさしく語りかける。

「お清さんは、もっと空を飛ぶべきだよ。試合で見せた燕のような綺麗な飛行を、どこまでも高くやった方がいいよ」

僕ができない代わりに。

そう言葉の裏に載せているように相川には感じた。

ハッ、とその瞬間気が付いた。見つめ続ける彼の背中とは、いつも地上にしかなかったことに。

自分は彼に追いつけないのではなく、空を飛んで見下ろしているばかりで、彼のもとに寄り添おうとしてこなかったのだ。

相川は上体を起こした。振り返る瞳に涙は無い。

「あ、あのさ。もう一回、練習に付き合ってもらえないかな。今度は試合形式じゃなくて、射撃とか剣の使い方とか見直してもらいたいんだ」

貴方の隣で。

そう口に出る前に、ドリンクのストローをくわえさせられた。

「一息ついてからにしよう。今日も相変わらず暑いんだから、水分と

らないと参ってしまうよ」

気を削がれた格好の相川は不満げにストローを吸った。

(あ……)

ふと表情が変わる。甘くて冷たいチョコレートミルク。相川の好きな飲み物だったのだ。スポーツの後には一番だと言ったのを、彼はまだ覚えていてくれたらしい。他ならぬ、自分のために。

いつもながら優しいな、とくさくさしていた胸が和らいだ。

チョコレートが今まで以上に美味しく感じた。

◇

二人が練習を終え、シャワールームから上がったときは日が傾いていた。遠くでひぐらしの鳴く声がする。

「ありがとう。ゴメンね、こんな遅くまで練習に付き合ってもらっちゃって」

アリーナ利用の書類を提出して、二人は食堂へ向かっていた。

「お役に立てれば何よりだよ。ちょうど自習にも飽きていたところだったし」

「トミー君が学校に残っていてくれて助かったわ。みんな帰省しちゃったもんね」

「お清さんこそ、実家に帰らなくていいの?」

「実は最近まで帰ってたんだ。そんなに遠くないからすぐとんぼ返りしてきたの」

「ゆつくりしてくればよかったのに」

「じゅうぶんしてきたよ。中学の時の友達にも会ったりね。みんな高校デビューしてキラキラしてたな」

「相川さんの友達らしいね」

「どういう意味よそれ。……まあ、いっぱい遊んで楽しかったけど、恋バナはちよつと疲れたかな」

「高校に入って、もう彼氏ができたりとか?」

「アタリ。みんながそうじゃなかったけど、一緒にお祭りへ行くの」

とか、海に行つちやおうかなとかはしゃいじやってさ。もう青春しちやってますよ感バリバリだったわ。で、そのとき私なんて言ったと思う?」

「実はすでに行つてきた」

「せいかりい! こないだのときの写真も見せつけてやったわ。ぐぬぬ、って感じで鼻を明かしてやっちゃった」

「その写真って、射的でスイカ当てたときの?」

「そ。トミーさんと一緒に撮ったやつ。できでさ、そんなわけで、今度友達と会うときに私の彼氏役、お願いして貰えないかな」

「そういうのは良くないと思います」

「えー。私そんなに魅力ないかな?」

「相川さんも僕も、人を騙せるような質タチじゃないでしょ」

「あ、それもそっかあ」

二人は同時にふき出した。他愛のない無邪気な笑いだった。

トミーは、今日初めてお清さん笑ったな、と嬉しくなった。練習中の彼女は本当に真剣で、自分の持つている技術をどん欲に吸収しようとは度もレクチャーを求めてきた。銃の構え、フェイント、動きながらの射撃、さらには接近戦。事あるごとに確認をされ、その都度手を添え足を添えての修正を頼まれるほど熱の入れようだ。

このぶんだと夏休み明けには専用機持ちに肩を並べてもおかしくない。その手助けを自分が担えることが面白くて仕方がなかった。

「ねえトミーくん、明日も一緒に練習できるかな? 次こそ一本取ってみせるわ」

あれだけトレーニングしたのに、彼女はまったく疲労の色をみせていなかった。すごい体力だなと感心する。

「もちろん。と言いたいんだけど、ちよつと出張ってほしいって連絡があつたんだ。帰りは遅くなるかもしれない」

「ふーん。スポンサー企業さんからのお願い?」

「うん。倉持技研に行つてくれってさ」

「倉持? 私のISを作ってくれたところじやない。私も一緒に行つてみようかな。運用データもたまってきたし」

「いいんじゃないかな。依頼を寄越してきたの、本ちゃんだったし」
「本ちゃん、って布仏本音!? 企業経由でトミーくんに頼んできたわけ?」

「そうみたい。直接連絡くれても良かったのにね」

「というより、本音っていったい何者なのかしら? クスノキさんともコネがあったし」

「楯無さんの右腕が本ちゃんのお姉さんだし、実はすごい家の出だったりしてね」

「うくん、あの本音がねえ……」

悩ましそうに腕を組む。

トミーも相川の意見に同感だった。本音は普段からポワポワしていて、生徒会の仕事をいつも丸投げしてきて、扱いに困ることもしばしばだ。

しかし学園に溶け込むきっかけを与えてくれたのは間違いなく本音であり、振り返ってみれば生徒会関連で多くの生徒たちと交流を持たせてくれたのも事実だ。

まさかすべてが計算ずくで……。

(いや、考え過ぎかなあ)

下手に思い悩む自分たちの姿を幻の本音が指差して「あははー」と笑っているような気がしてきた。

どうあれ、明日会えるのだからその際確認すればいい。

「ところで、倉持技研さんへの用事の内容は言われているの? あ、私が聞いちゃいけない話だったら別にいいけど」

「特別機を任せられているお清さんなら大丈夫だと思う。新型機のテストを手伝ってくれてさ」

「新型……。また変わった【打鉄】が生まれたのかしら」

「マイナーチェンジだったらわざわざ僕を呼ぶ必要もないし、ひよつとすると、完全なりニューアルモデルかもしれないね」

「となると、第三世代型の【打鉄】?」

「ありえるね。名前は教えてもらってる。【打鉄・式式】と言うんだそうだよ」

「式式、かあ」

相川は【打鉄・菊水】の待機状態である二の腕のアームレットに手を当てた。

その手に力が籠っていることにトミーは気が付いた。ただ、口に出すべきではないように感じて、やはり彼女と一緒にいこうという気持ちにさせた。

六拾弐 人は自分のことほどわからない

トミーは相川と夕食を共にした後、自室でパソコンに向かっていた。以前この部屋を使っていたM・R・エレクトロニクス研究所のお古デスクトップだ。当然中身は初期化されていたが、かつての利用者が利用者だけに性能は良く、三面ディスプレイも何かと便利だった。

その正面の画面に映っているのはイギリスに帰国しているセシリアだ。彼女はIS国家代表候補生という肩書以外にも、名門オルコツト家を背負って立つ当主としての立場がある。オルコツト傘下の企業グループのオーナーとして経営状況を見なければならぬし、他の貴族や旧友との交遊も務めとして果たさなければならぬ。とはいえ、優秀なメイドのチエルシーが主の留守居をしっかりと果たし、何かと縁のある女伯爵カウンテスが遠巻きにサポートしているため、今のところは安泰と言えた。

「聞きましたわよトミーさん！」

セシリアは画面に乗り出して目をむいた。

トミーは思わずのけ反って、高画質なモニターの性能を若干恨んだ。

「ええと、どの話を？」

「トミーさんの所属がルクーゼンブルクになることですわ！」

「ああ、そのことか。オペレーターのエクシアから事後報告で聞いたけど、特に今までと変わりはないみたいだよ？」

トミーは前回のIS委員会会議で不明瞭だった所属がルクーゼンブルク公国に確定していた。出身がルクーゼンブルクに籍を置くM・R・エレクトロニクス欧州本店であり、かつアイリス王女を救った英雄として祭りあげられたというのが表向きな理由だ。

「何を呑気なことをおっしゃいますのっ。これでは今後アイリス王女とのレールが敷かれたも同然ではありませんか！」

「飛躍しすぎだよ。おおかた。【グレイ・アイデール】関連との結びつきを強めたかったんじゃないかな」

「あれだけLSと蔑んでおきながら、ですか？」

「ルクーゼンブルクはISの発展で躍進した国だからね。アリスとのことがきっかけで、僕みたいな不安要素を排除するより取り込もうという方針が変わったんだと思う」

トミーはコンソールを操作すると、先日ラウラからもたらされた情報をセシリアに送った。ルクーゼンブルクがドイツに軍事顧問の要請をしたという内容だ。国防や保安が国の発展に追いついていない状況への対策なのだ、すでにメディアでも流れている。特にアイリスの学友でもあるラウラに影響がでるだろうと踏んでいた。同様にトミーも巻き込まれることが想定され、今回所属が明確になったのはそういった情勢の一環と捉えていた。

「ドイツ軍は、数年前一夏が誘拐されたときに活躍した実績があったでしょ。そこから織斑先生との繋がりもあるし、僕のバックのM・R・エレクトロニクスだって影響力はそれなりだ。いろんなところを巻き込んで足場を固めようとしているんだらうね」

セシリアはまだ納得いかないように鼻をツンと立てる。

カウんテス

「女伯爵も同じようなことを言っておりましたわ。アイリスさんとトミーさんの仲を取り持ったため、なんていう会議の発言はブラフだという見解でしたが、虚は実を引くということもありましたよ」

「そうは言ってもほどほどの位置におさまると思うよ。こういう話つて、セシリアにならわかるんじゃないかな」

「わたくしなら、とおっしゃいますと？」

「貴族だったらお家のために最大のメリットがある選択をとろうとするでしょう？」

セシリアは不満げな顔で視線をそらした。それを見てトミーは見込んだ通りと苦笑する。苦労性である彼女になら、貴族の交友が半分実利に基づいていることを理解しているだろう。トミーとアイリスの仲介というのも、トミー自身ではなく背後を見込んでのことに違いない。まして相手はロイヤルフアミリー。平民とも言いがたいトミーへの配慮などが知れているというものだ。

トミーは何気なく右側のディスプレイに目を移した。先日行った夏

祭りで撮った記念写真が写っていた。皆笑顔でポーズを決め、背後では幾つもの花火が咲き乱れている。

(あらためて、すごい写真だよ、これ)

鮮やかなスターマインもさることながら、映っているメンバーの出自は錚々たるものだ。トミーは幸運が手繰り寄せた不思議なご縁に心から感謝していた。

「……トミーさんは、まだご自分の立場が分かっておられませんのね」
セシリアの低い声に振り向いた。腕を組んだ彼女が半目で睨んできている。

「せっかくですからお教えいたしますわ。たとえば、世界に二つしかない宝石があったとしますわね。それはきつとたいへん高価なもので、貴族や王族であればこそ手に入れたいと思うでしょう。そうは考えられませんこと?」

「え……つと、その宝石ってまさか」

「ああもちろん、その輝きに魅せられて盗み出そうとする輩が現れないとも限りませんわね」

「えらく物騒な話なのだけれど」

「少なくとも、誰かのモノになるくらいなら身近に囲っておきたいと、そう思うお方はどれくらいいらっしゃるかしら。たとえそれを身に着けることができない都合があったとしても、頑丈なクリアケースの中に封をしてリビングやベッドルームに飾るなんてこともありますわね。そうそう、せっかく手に入れたのですから自分好みにカットしてさしあげますかしら」

「ちよ、ちよ、ちよつとですね、セシリアさん?」

ウフフ……、とうつむき加減に微笑む姿が異様に恐ろしい。ひよつとして、自分を個人としてでなく希少品として見られることがあるとこのだろうか。真に迫った話かもしれない。一夏は様々な理由のもとにさらわれたが、次にさらわれるのは自分のような気がしてきた。

集合写真に目を移す。ここに映っている仲間たちならきつと助けてくれると思うのだけれど、

「これは……、再検討と助力を願い出る必要があるかもしれないね」

渋い顔をするトミーにセシリアの表情が明るく変わる。

「ええー、もちろんトミーさんのお願いとあらばいかなるご支援も厭わないですわ。それこそ、こういった状況に場慣れした方が望ましいでしょう。そう、たとえばわた——」

「ラウラだね。確かに。軍事訓練で護身術を一通り身に着けているし、僕に迂闊なところがあればビシツと指摘してくれそうだ」

トミーはうんうん頷いた。やはり自主防衛となると本職であるラウラにお願いするのが一番だ。ルクーゼンブルクのこともあるし、一度鍛えなおしてもらうのが良いかもしれない。さすがはセシリア、目の付け所が違う。

感謝の気持ち伝えようと画面に向き直ると、なぜかズッコケている彼女の姿があった。どうしたんだろう、と聞く手前でチャイムが鳴った。消灯時間を知らせるアラームだ。

「ああ、ゴメンセシリア。もうこんな時間になっちゃった。また明日連絡するからね」

IS学園は夏休みだが、だからこそ時間厳守が徹底されていた。不審な外部侵入者への対策になるからだ。

セシリアは何か言いかけていたみたいだが、下手に長引いてしまつたら問題だ。明日は早朝から倉持技研へ向かう予定もあるのだし、悪いなと思いつながら通信を切った。

ちよつと警備に不安がよぎり、部屋の遅延警報機ディレイアラームを確認する。常に身辺を狙われる、セシリアやアリスのような要人の気持ちが少ないだけ分かった気がした。



翌朝、倉持技研までの道のりは長旅となった。

最寄駅からモノレールに乗り、主要駅で電車に乗り継いで一時間。さらに連絡駅でバスに乗り換えて一時間。

車窓の向こうに立ち並ぶビルは樹木に変わり、地面はコンクリート

から田園になるほど郊外へと向かっていた。当初ぎゆうぎゆう詰めだった乗客は乗り換えるたびに減っていき、最後はトミーと相川の二人だけとなっていた。

「旅は道連れと言っけれど、お清さんと一緒によかつたよ」

トミーは頬を緩めて隣席の相川に言った。IS学園への入学で来日してからまだ4カ月、日本暮らしに馴染みきっていないトミーにとって、相川の道案内はとてもありがたいものだった。さらに道すがら、相川は持参してくれたお菓子を広げたり、タブレットを取り出して撮りためていたおススメのドラマと一緒に鑑賞したりと、道中を実に楽しいものにしてくれたのだ。

「無理言っつけて着いてきたようなものだからね。これくらいはしなないと」

相川ははずんだ声で答える。トミーはまったくありがたい限りだと眩しそうに目を細めた。

「一人だったら心細くてうんざりしていたと思う。楽しい旅にしてくれてありがとうね」

「そ、そんなに改まって言うほどのことじゃないわよっ」

「優しいよね、お清さんて」

「も、褒め殺しは困るわっ。そんなに思ってもらえてるなら、帰ってからのISの訓練とことん付き合っつてよね」

「もちろん。満足するまでどこまでもお相手するよ」

相川は「よろしい」と何度も頷くと、顔をタブレットに向き直った。上映されているのは若者たちの青春ラブストーリー。ちょうどヒロインと主人公が引き裂かれてしまう場面のように、相川はのめり込んでいるのか頬を赤く染めていた。

そんな中、バスのアナウンスが放送された。どうやらいつの間にか目的地間近になっていたようだ。ドラマはクライマックスを迎える前で止めることになった。

下車した場所は山奥と言っても過言でないところで、うっそうと生い茂る林の奥に場違いな白い壁がそり立っていた。建物にキズらしいキズは無く、蔦植物が手を出していない状況から新しきや手入れ

が行届いていることがうかがえる。それに緑の深い場所だというのに異様なほど周囲が静かだ。殺虫剤なり鳥避けなり、相当人手が入っているのだろう。

わざわざ自然に分け入って居を構え、我が物顔で動植物を踏みにじっている、実に研究者の巣窟らしい場所だとトミーは思った。

「トミーくん？」

ふいに相川に声を掛けられた。

「なに？」

「あ、ううん、何でもない……。あ！あれ本音じゃない？」

相川につられてゲートを見ると、ぶかぶかの白衣を被った人物が袖口から手が出ていない腕を振っている。

「こつちこつち」

という特徴的な間延びした声が聞こえてきた。オーバーサイズの研究衣を着ている格好といい、間違いなく本音だ。わざわざゲートの前まで出迎えに来てくれたようだ。

「やつほー、本音！ひつさしぶり！」

「ご無沙汰、本ちゃん」

相川とトミーの挨拶に本音は両袖で握手を求めてきた。

「わざわざ遠くまでありがとうなのだよ。お清ちゃんも来てくれるなんて感激なのだ」

「本音と言いつトミーくんといい私の呼び名は『お清』になっちゃうのね。ま、親しみがあるみたいでいいけれど」

「入り口で待っていてくれたんだね、ありがとう。初めて来たもんだから助かるよ」

「ココは警備が厳重だからね。関係者と一緒じゃないと立ち入りできないのだよ。ささ、ごあんない」

手をかざす本音を先頭に施設の中に入っていく。途中守衛に呼び止められたが、本音が何か言う「ああ、彼が」と呟いて変な笑顔で通してくれた。

研究所の内装は、白一色で塗りつぶされていた。床も、壁も、天井も、蛍光灯すら真っ白だ。こちらに好機の視線を向けながらすれ違う

研究員の服装も一様に白衣。彼らはほぼ外に出ないのか、肌の色は夏だというのに全く日焼けせず白いままだった。

「なんだか、ちよつと不気味だね……」

相川が小声でささやいてくる。トミーは無言でうなずき返した。

「気味悪いくらい真っ白けだし、みんなトミーくんを見ると変にニヤニヤしてくるし、……トミーくん？」

声音を変えて相川が呼び止める。

「ん、どうしたの？」

「あの、なんだか、表情が硬いような気がして」

「あれ、そう？」

「うん。なんだろう、こういう場所、苦手だったりする？」

トミーは頬に手を添えた。そのまま口元を隠しながら、またいつもの癖、正直すぎる面持ちおもてが出ているのではないかと思ひ至る。

「……顔に出ていたかな」

「顔もそうだけど、目つきがね、鋭いんだ。ISの試合の時なんかより、ずっと怖い」

トミーは目をしばたかせた。

「この研究所に着いた時もそうだったけど、なんだが雰囲気がいつもと違うのよ。張りつめているような、そんな感じがするの」

相川の疑念に、前を歩いていた本音が振り返る。

「そういうえぼく、今日のトミーは、ちよつとおかしいかも」

「だよね、だよねっ」

「そんな、いたって僕は普通だよ？」

心外だ、と困りながら首をかしげる。

「うくん、トミーが嘘をつくとは思えないけど」

「早めに切り上げて学園に帰ろう？ 気づかないうちに疲れが溜まっちゃったのかもしれないわ」

相川が心配そうに顔を覗いてくる。

そんなに軟やわではないつもりだが、相川の懸念を無下にするのも気が引けた。それに二人同時に違和感を持たれているのだから、何か身体に異変が起きているのかもしれない。

本音は通信端末でどこかに問い合わせる。こぼれてくる話を聞く
と、今日の目的の新型機テストを予定よりも繰り上げてくれるよう
だ。了解を得たのか、改めて先導してくれる。

「本当はね、パイロットさんにご挨拶して仲良くなつてほしかった
のだけども、トミーの調子だとおあずけかな」

本音の声は残念そうにトーンダウンしていた。

「そのパイロットさんって、本ちゃんのお友達なの？」

「そこのだよ。ちよつと人見知りだけどいい子だから、トミー達
にも紹介したかったんだ」

「今回は機体チェックだけだったんだし、またの機会にしましょうよ。
ね、そうしましょう」

やけに相川が食い下がる。そんなに世話を焼かなくてもいいのに
とトミーは思うが、

「まあ、IS関連の方ならまたお会いする機会もあるだろうしね。今
度よろしくお願いするよ」

「しようがないか。はい、到着だよ」

通された場所は広いドーム型の空間だった。形状はIS学園のア
リーナに近い。ISの実践型試験場だろう。

殺風景なその中央に、一機のISがぼつんと立っていた。見たこと
のない形状だ。

「え、まさか、あれが新型機？」

トミーは意外そうに本音に確認した。機体は一目見て「速そう」と
いう印象が浮かぶ。下半身は独立ウイングスカート、両サイドに大型
ウイングスラスト、全体的にスリムかつ鋭角が目立ち、戦闘機を擬
人化したようなフォルムにも見えた。

しかしなぜ疑問を抱いたのかと言うと、

「ぜんぜん【打鉄】っぽく見えないんだけど？」

相川の言う通り、目の前の機体は【打鉄式式】という名を冠してい
るにもかかわらず、武者姿をモチーフにした【打鉄】の名残がまった
く無いのだ。設計者はデザインに関してこだわりのない性格なのだ
ろうか。

「本音、案内ありがとう」

うろたえるトミーたちを無視してパイロットが話しかけてきた。顔はバイザーで覆われてよくわからない。ただセミロングの髪色がやけに既視感を覚えた。どこかで会ったことがあるのだろうか？

「早速テストに移ります。離れてちようだい」

「はくい。それじゃく、私とお清ちゃんは応援席に行こく。トミー、ロッカールームはあっちだよ」

「う、うん。頑張つてね、トミーくん」

「あ、ああ。機体テストなんだから大丈夫だよ」

相手は会話を交わすこともなく一方的に話を進めてきた。トミーは、本当に人見知りなんだなと思いつながら、二人と別れてISスーツに着替えに行った。

だが、更衣室に入るといきなり研究員にでくわした。それも5、6人はいるだろうか。トミーが来るのを待っていたのではないかと思うほど急に群むらがってきて取り囲まれた。

「えつ？ あ、あの……」

首元にぶら下げる社員証から、倉持技研の関係者で間違いないようだ。しかし、なぜこんななここにいるのだろう。視線は興味津々ともいうようで、「へえ」「この子が」などと何やら眩きながらじろじろ見てくる。

トミーはとりあえず事情を話して相手の出方を伺った。

「今回IS運用テストに呼ばれたこのまえ一といいます。これから試合に臨むにあたって着替えたいので、出て行ってもらいたいですけど……」

研究員は男性だけでなく女性もいる。このままいられると気まずいのだが、相手は怪訝な表情を浮かべるだけで何も返してこなかった。不安になったトミーは、いったん戻つて本音を確認をとるべきかと、後ろを振り返ろうとする。と、

「違うだろうか？」

マスクをした男性が、さも不思議そうに話しかけてきた。

「な、なにがです？」

「キミに名前なんてないだろう、被検体N011038号」

トミーの姿が固まった。

「」

表情がなくなり、直立不動に立ち、光のない目でマスクの男を見る。

「うん、起動ワードは間違いないようだね。11038号、これよりテストを行う。君の本来の実力を見せてくれたまえ」

少年は機械のように頷き返した。生き物離れした無機質な佇まいのなかで、その額の痣が血がにじんでいるように変色していた。

六拾参 テストプレイ・レビュー

【打鉄・式式】は速かった。

秘訣は装備の変更にある。旧【打鉄】が装備していたアンロックユニット非固定浮遊装備の盾がスラスタ仕様が変わっているのだ。機体のコンセプトが防御型から高機動型に移行していることを表していた。その空中に線を引く機動力は既存の量産機とは比較にならず、柔軟で縦横無尽な飛行は旋風つむじかぜのように目まぐるしい。

(いける……！)

確信めいた実感が操縦者の胸を昂たかぶらせた。これほどの動き、夏休み前までは考えられなかったことだ。

何を隠そう【打鉄・式式】は操縦者自らの手で組み上げられたものだ。彼女にはそれほどの技術力と、そうせねばならない意地があった。

とはいえ自力開発を目指して数カ月、独力ではさすがに無理があった。設計は案の定暗礁に乗り上げることになる。

しかし状況はある機を境に一変した。

(やっぱり、クスノキさんのアドバイスがきいているのかも……)

地上の敵からの攻撃に、クスノキ直伝の錐揉み回避軌道を演じながら思い返す。

彼女は日本の国家代表候補生ということもあって、親友の本音と一緒に精兵クスノキの指南を受けることができた。折しもクスノキ待望の改良機【打鉄・菊水】が配備されたばかりで、担当の整備チームが控えていた場面だった。そこで独力で自分のISを作っていることを告げ助言を求めると、「その意気や良し」と快く開発データを提供してもらえたのだ。

頂いたノウハウを取り入れたところ、結果は歴然。懸念だった不具合が目に見えて改善された。プロの技術者のワザはこうも違うのかと、本音と顔を合わせたものだ。

そして今、これまで重ねてきた運用テストを元にした調整アジャストは見事に結果を出しつつあった。何カ月もかけてきた努力の結果がようや

く実りかけている。

「これなら……、届く。彼の、隣に……！」

得物の荷電粒子砲『春雷』を足を止めずに連射する。

見ろ、相手は防戦一方じゃないか。

所詮は飛べないLSだ。馬鹿正直に接近戦を仕掛けないで距離を取って戦えば負けることなんか決してない。

いましがた撃ち返してきた攻撃へは余裕を持ってカウンターを決められた。

勝てる。

アイツ LSに勝てば、きっと彼が振り向いてくれる。

違うクラスで、会話をしたこともなかったけれど、彼の活躍はいつも聞いている。

4月の、1年1組のクラス代表決定戦。気紛れに見た試合での彼、織斑一夏の姿は輝いていた。

聖剣のような光る剣を振るい、怪物のようなLSゲテモに立ち向かう姿は、まるでアニメに出てくる勇者ヒーローのようだった。

今なお瞼まぶたの裏に焼き付き、胸を高鳴らせるときめきは、きっと一目惚れなのだろう。

「倒れる……、LS……！」

私ヒーローの一夏の隣おまえに立つために、私のISの力を認めてもらうために、「LSには踏み台になってもらう！」

敵の後背、死角を取った。新たな『春雷』を生み出し二丁構えで連射する。

決まるハズだ！

しかし相手は籠手を広げバリアを張って容易く打ち消してきた。

やはり簡単にはいかないか。試合前に目を通したLSの戦闘データにもあったように、相変わらず相手は鋭い眼を持っているようだ。「でも……、眼の良さが悪いこともある……！」

『春雷』の下部に備えられた榴弾グレネードを発射する。敵の頭上、彼我の真ん中で盛大に閃光を上げたそれはチカチカと光る粉塵をばらまいた。フラッシュ・チャフだ。

視界を潰すチャフがLSに覆いかかる。これなら自慢の目を眩ませられただろう。

【打鉄・式式】のパイロットはこれを見込んで装備していたバイザーが功を奏した。

「今だ……！」

肩部ウイング・スラスタ―が駆動する。取り付けられた6枚の板がスライドし、高性能誘導八連装ミサイル『山嵐』を次々と射出した。

導く指は空中に投影した搭乗者オリジナル・キーボードを叩き、六基・八連・計四十八発すべてのミサイルをマニュアル・ガイドで撃ち込ませる。

散開した『山嵐』はLSの周囲に半球を形成し、チャフを被せた敵に蓋をするように包み込んだ。これならいかなLSとて迎撃不可。逃げ場だつてありはない。

「今度こそ、決ま——っ!？」

そのチャフの幕とミサイルの籠を、LSは強引に食い破った。

巨体に似合わぬ機動で一点突破し、誘爆も承知と防御姿勢で爆炎を突破して、四脚が地面に爪を立てギヤリギヤリと掻き巻りながら制動させる。

顔が上がる。赤く輝く敵の瞳がこちらを射抜き、両手の得物を向けて狙いを定めてきた。

「なんてでたらめな……。でも、『山嵐』は止められない！」

キーボードに新たな指示を入力しミサイルを再度LSに誘導させる。着弾前に数発喰らうだろうが、その程度でコチラは墜ちはしない。肉を切らせて骨を断つ。

が、その最後のエンター・キーを叩く前に、両肩のウイング・スラスタ―が爆発した。

「な……、何っ!? 攻撃……? 敵は、撃っていない!? どこから……、！」

ISのセンサーが弾きだした弾道予測は、先ほどまでのLSの位置。ばらまかれたチャフが先のミサイルの爆風で四散し徐々に現れたその場所に、二つの籠手『グレイ・グローブ』が『五連装電磁投射砲』

を構えていた。

「隠れていた……!? こちらのチャフを逆手に……!」

本体をオトリに、チャフの下に身を潜ませ、両手の得物とセンサーを同調させて撃ってきたのか。そのために誘爆でチャフに穴を空けてまで。

一瞬止まった入力の手が弾かれる。空中に投影したキーボードが弾け飛んだのだ。

「ひっ」

本体からも撃ってきた。二丁の銃が唸りを上げている。『グレイ・グローブ』も二期・五連・計十門の砲口が次弾充電の雷光を響かせる。都合二つの方向から狙われることになった。

キーボードを壊された今、『山嵐』はもう誘導^{ナビ}できない。コントロールを失ったミサイル群はあらぬ方向に飛び回っていく。

「あっ……、ああ……っ」

敵の砲撃が本気を出してきた。完全にロックオンされたのだ。なぶるように機体が打ちのめされ、見る見るシールドエネルギーが減っていく。

回避行動はとつくにやっている。なのに、もどかしいほどに鈍い^{のろ}。スラストを失ったとはいえ、これほどまでに影響が出るとは。

(ダメージを受けた場合を想定していなかったから……!)

万全の状態で十全の性能を引き出すことばかり考えてきたせいで、破損や損壊を受けた場合の対応が抜けていたのだ。

それでも、せめて一矢報いんと『春雷』を向ける。と同時に、『春雷』が吹き飛んだ。反撃の糸口すら敵は無情に断ち切ってきた。

シールドゲージがついにレッドゾーンに入った。敵の攻撃が厚みを増す。

もはや敵うすべはない。

「助けて……、一夏くん……!」

最後に叫んだ思い人の名前は爆音の中に消えていった。



広大な試合会場を見下ろす展覽室に二つの影がある。冷静な顔の更識楯無と、食い入るように会場を見ている布仏虚だ。

「正直、驚いております」

虚が眼鏡をかけなおしながら言った。

「お嬢様を目指してご自分でISを組みなおす。なまなかにできるものではないと思っておりますが、まさかこれほどまで完成させていたとは」

「結果は敗北なのだけれどね」

「それでもです。さすがはお嬢様の妹君、簪様です」

やや興奮したように虚は楯無に向き直り、空間にいくつもの図表を展開した。モニターには今しがた行われていた戦闘の数値がグラフで表示されている。

「これがクロス・グリッド・ターン、これがイクニッション・ブースト、これが三次元躍動旋回、これが瞬間加速、これが武装運用時のデータです。そしてこれが本音が送ってくれた【打鉄・式式】の機体スペックを元に計算したカタログデータ。ご覧の通り、ほぼ完全に性能を發揮しております」

円グラフで表示された二つの値はほとんど一緒の値を示していた。もつとも、ウイング・スラスターを壊された後は大きくダウンしているが。

「操縦者である簪様の實力は、代表候補生に選ばれているだけあつて決して劣るものではありません。であるがこそ、後半の性能低下は機体の設計になんらかの不具合が発生していると言わざるを得ないでしょう」

虚はさらに別のフォトを呼び出した。トミーの戦闘の様子だ。

「一方、これらがトミヤ氏……、いえ、今回はあえて11038号と称しましょう。その実戦データと学園での戦闘データです。正直に申しまして別物と言っても過言ではありません」

表示されたグラフは学園時の数値をはるかに上回るものだった。特に反応速度が顕著で、これまでギアをローに入れていたのではないかと思われるほど別格の値を叩きだしている。

さらに動画ではトミーの動くタイミングを逐一捉えていた。そこにはある一定の法則がある。

「11038号の戦闘は途中まで【打鉄・式】が行動し終えた後に行われておりました。すなわち、実戦試験という名目を順守して相手に合わせて戦っていたことになりました。簪様がフラッシュ・チャフという搦め手を使った後からは攻勢に転じていますが、おそらくこれは簪様を脅威と受け止めたためと思われる。とはいえそのうえでこれですから、潜在的にはまだまだ伸びしろがあると考えてもよろしいでしょう」

「解説ありがとう、虚」

パチリ、と楯無は扇子を掌てのひらに落とした。

「M・R。エレクトロニクスにはこう報告して頂戴。貴社の人造兵士の能力は見事なもの也。なり倉持技研は稀有なサンプルを得られ喜色満面のご様子。なれど、IS学園生徒会長としては一にのまえとみや十三八氏の健全なる成長を希求する。御一考あれかし」

「お嬢様、その進言はいささか挑発的と捉われかねません」

「構わないわ。人間をロボットのよう調整した向こうのやり口は、正直受け入れたくないもの」

吐き捨てるように楯無は言った。

トミーの事情を知らされてから、楯無のM・R。エレクトロニクス及び反女尊男卑主義組織への評価は暴落している。トミーは何かしらの事情を抱えてるだろうとは予期していたが、人でなしの所業だというのには愕然とした。

先ほの試合観戦時、冷静を装ってどちらにも加担せずに見守っていたのは、身内びいきを控えていただけではないように虚には見えた。「しかし、今回M・R。エレクトロニクスから11038号の秘匿情報を開示された理由は、ひとえにコネクションをつなぐことにあります」

虚は新たな資料をウインドウに呼び出した。

「昨今、M・R。エレクトロニクスはコネクション・ネットワークの拡充に勤しんでおります。デユノア社への技術供与、ルクーゼンブルク

公国との安保連携協定、ドイツ軍への武装手配、また未確認ですがオルコットグループと名和商事にも業務提携の打診が行われている模様です」

「商人なら手広くやろうというのは悪くないけれど、こと軍事関係であつたとすれば」

「急な同盟拡大は戦争の前触れ。そして先兵となるであろう11038号の経緯を我々に開示したというのは、特に重要視していることになりませう」

「織斑先生やアリーシャさんなら事前に伝えていたでしょうけど、私たちにまで触れ込むなんてね。私がロシア代表であるということを意識してのことかしら。ルクーゼンブルクとの繋がりは表面上だけでは無いみたいね」

さすが我が主はよく読んでいるな、と虚は思った。

東欧に位置するルクーゼンブルクにとってロシアは昔からの懸念対象だ。その国のIS代表を穩便に敵に回さないために、IS学園の生徒会長に向けてトミーの秘密を開示してきたのだろう。生徒会長であれば生徒であるトミーを守らなければならない。そのトミーはルクーゼンブルクに管轄されているため、それぞれの所属国家に何かあつたとき敵対以外の選択肢をとることができる。

そういつた見えない糸の織り手として、M・R・エレクトロニクスはルクーゼンブルク側に立って暗躍しているように見えた。

「簪ちゃんの開発機テストにトミー君の秘密パワーを当ててみたいと聞いた時も、特別嫌な反応見せなかつたわね。それなら倉持技研も一枚噛ませてデータ採取しちやいたって言つても「ご存分に」だもの」「ほぼ無制限に11038号を任せられていると捉えてよろしいかと。それと、本音によりますと、簪様は以前からトミヤ氏と戦つてみたかつたそうです。ちやうどよい機会となりました」

「まあ、一夏くんに近づくためにはトミーくんを使うのが早いものね。将を射んと欲すれば先ず馬を射よつてことかしら。トミーくん、馬と
いうよりワンちゃんぽいけど」

「ほへ。」

「コッチの話よ。主にプライベート方面の」

はあ、と虚はそれ以上の追求を止めた。

だが簪様が織斑一夏に近づくのは悪くないかもしれない。彼もI S 関連組織が裏でコソコソとしている対象だ。その彼を学園側に繋ぎ止めるポイントになってくれないとも限らない。そして一夏を味方に行っている限り、織斑千冬という最強のカードを手札に持つことができる。

我ながら人を駒のように扱う癖にあきれるが、これも主とI S 学園のためならばと気を取り直した。

「さて、そろそろ夏休みも終しまいね。休み明けのイベント前に、私も男の子二人と手合わせしてみようかしら」

「お嬢様直々に、ですか？」

「いろいろと確認も兼ねてね。好きな子ほど、相手を知りたくなるものじゃない」

そう言うと、楯無は窓から試合会場を覗き込んだ。簪とトミー、どちらを見ているのか、虚には分からなかった。

六十四 憂鬱でない休み明け。大人は別

学び舎の賑わいが夏季休暇の終わりを告げていた。

学園のそこかしこで談笑の輪ができている。みな長期休暇の土産話をたんまりこさえて披露宴を開いているのだ。

ましてIS学園は女子高。三人そろえば姦しいというのが何百もいるのだから、校舎全体が管楽を鳴らしているように騒がしかった。

1年1組の教室も例外でなく、一夏たちもまた、篠ノ之神社のお盆祭りに参加した思い出話に花を咲かせていた。

「へー、箒と一緒にそおんなことしてたんだー」

「僕たちが帰省している間に二人でそんな楽しいことしていたなんて、一夏、ちよつと薄情過ぎるんじゃないかなあ」

鈴とシャルロットが座った目で凄みのある笑みを浮かべて噛みついた。ヤバイ、と直感を働かせた一夏はトミーの後ろへ隠れるように移動する。

「べ、別に二人だけで行きたかったわけじゃないんだぞ」

「そうだったのか!？」

「箒、ややこしくなるからちよつと待ってくれ。実はトミーや相川さんも誘ってたんだ。でもちよつと二人で用事があるって断られてさあ」

「あらあらあら。お二人でご一緒にだなんて仲のよろしいですこと。どのような用件だったんですの？」

今度はセシリアが目の色を変えだした。身を引こうとするトミーは背中に一夏がいるせいで下がれない。

「く、倉持技研で新しいISのテストに付き合ってくれて頼まれてさ。それでその、まだ日本の交通事情に不慣れだったから、相川さんと一緒に行ってきたんだよ」

「先方までの所要時間は？」

「乗り継いで……二時間とちよつとかな」

「滞在期間は？」

「日帰りだったよ」

「ずっとお二人だけでしたの？」

「倉持技研についてからは本ちゃんとは合流したけど……なんだか尋問くさくない？」

「……まあ、ぎりぎり許容範囲といたしましょう」

「その新型機というのはどんなだったのだ？」

今度はラウラが会話に入ってきた。純粹にISの性能について気になったようだ。

「荷電粒子砲やホーミングミサイルを運用する高機動型……だったらしい」

「らしい？」

「対戦したと思うんだけど、なぜだかよく覚えていないんだ。向こうは被弾時のレスポンスが未整備だったらしくて、それで僕が勝ったそうなんだけど……」

「まるで記憶に穴があけられたようにか？」

「そんな感じかな。そこだけぽっかり空いちやって」

ひたり、とラウラの掌がおもむろにトミーの額に乗せられた。

急なことに面食らい、ぱちぱちと目をしばたたせてラウラを見やる。

「む」

ぴくり、とラウラは眉根をひそめた。そのまま手をいっぱい広め、

「ふぎ」

がっちり頭を掴まれた。

「ちよつとついてこい」

「わ、わ、ちよ!? 頭持って引つ張らないでよっ!」

「ちよつとはしたくないですよ、ラウラさん!」

周囲の制止を無視してラウラはトミーを引きずっていく。

「どこに行くのさっ?」

「教官のところだ」

「織斑先生の? なんで?」

「対応策を講じるため……、ぬ」

教室の入り口に差し掛かったとき、来客と鉢合わせになった。
生徒会長の更識楯無だ。

「あらあら、アグレッシブな姉弟関係してるわね」

「余計なお世話だと言わせてもらおう。邪魔だ。どいてくれないか」
「つれないわね。ちよつと義弟わとうとくんに用事があるんだけど」

「どうせ生徒会の雑用だろう。日を改めるんだな」

「違うわ。それは明日の予定よ」

「僕、行くなって言っただけですけど」

トミーの控えめな反論を無視して言い合いが続く。

埒が明かないと見た楯無は腕を組んで背中を丸め、挑発的にラウラの顔を覗き込んだ。

「トミーくんの身体に用があるのよ」

「押し通らせてもらおうぞ」

「先輩、最低です」

「あー待って待って！ 言い方がマズったわ！ 倉持技研でのI S試験についてよ」

ラウラの鋭い瞳とトミーの不思議そうな目が楯無に注がれた。

「生徒会室に来てちょうだい。織斑先生もそこにいるわ」

ラウラは何か言いたげに口を開けたが、言葉を発することなく閉じると、掴んでいたトミーを解放した。

代わりに庇うようにその身を寄せた。

◇

「飲め」

生徒会室に着くとすぐ、トミーは千冬からアンプル剤を勧められた。
た。

「話はそれからだ」

トミーはラウラと顔を見合わせ、軽い頷きに応じて一口いちぐちに入れた。

「ッ、ンッ、ッ!？」

「吐くな。飲み込め」

「頭を上に向くんだトミヤっ。そう……。この椅子に座って、落ち着いてゆっくり鼻で息をするんだ。……おいつ、なにか飲み物はないのか！」

ラウラは居合わせた本音からペットボトル飲料を奪い取ると、優しくトミーの口元に注ぎ込んだ。

トミーが落ち着いたのを見計らって、千冬が口を開く。

「倉持から連絡があった。先日の試験を見込んで、一、このまえお前に企業の専属テストパイロットになってほしいそうだ」

「お断りします」

「……ってなんでラウラが先にいうのさ」

「義弟をみすみす危険な目にあわせるつもりはありません」
おとうと

「公私混同するな。お前らしくもない」

「織斑教官とて、一夏が同じ目に合わせられれば拒否なさるでしょう」

千冬は椅子の背もたれに、キィ、と体を預けた。

「織斑先生と呼べ。……まあいい。どうせこの件はこちらで断っておいた。情報だけを伝えただけだ」

「ありがとうございます」

「あの、僕、置いてけぼりなんですけど」

「だいじょぶだよ、トミー」

「本ちゃん……」

「せっかく周りがやってくれてるんだから、楽しちゃえばいいじゃない」

「自分の知らないところで自分のことが決まっていくのって不安じゃない？」

「あはは、過保護なモンペに縛られているみたいだね」

「非行に走るべきかなあ」

「走っても逃げ切れるとは思えないな」

確かに。

と頷きかけたトミーに千冬から呼びかけられた。

「本題はここからだ。今月中ほどに開催される学園祭だが、お前には警備担当へ回ってもらいたい」

「学園祭の警備、ですか」

「そうだ。倉持でのときもそうだが、お前は大層目が良い。それを見越しての配置だ」

「お言葉ですが教か……織斑先生。アリーシャ殿やジブリル殿もおられるなかで、わざわざトミヤを動員する理由としては弱いと存じますが」

「道理だな。実は、にのまえ一にはこれを活用してもらいたいのだ」

そう千冬は机の上にあつた箱を開けた。ティツシュほどのボックスに入っていたのは、

「……虫？」

「ドローンだ。甲虫型のな」

言うとおり、カブトムシのような角付きの虫型ロボットだった。色は学園の壁と同じで、天井にはりついていたら気が付かないだろう。

頭を押すと目が光り、翅を開いて飛び出した。

「ずいぶんと静かですね。静粛性がとれている」

「これを学園のかしこに散りばめる。ざっと百体」

「そんなに」

にのまえ

「一にはカメラからの情報を統制してもらいたい。さっきのアンプルはキャパシティーを高めるための、まあ、いわばドーピングだな」

「なるほど、やはりトミヤ用のナノマシンでしたか」

事情に通じるラウラは得心して頷いた。

小声でトミーに、

「記憶の件だが、あれで対処できるだろう」

とささやいた。

トミーは義姉の配慮に微笑で返した。

「理解が早いな。そういうことだ。一緒に四十院もつける。あいつの処理能力は名和に見いだされるほど高いからな。【打鉄・北辰】を任せられるだけはある」

【打鉄・北辰】といえは早期警戒管制機カスタムタイプだ。それを乗りこなしているのだから、警備役としてうってつけと言えた。

「アリーシャとジブリルは即応のために学園を巡回してもらう予定

だ。しかし何か起きてからでは遅い。そして何か起きそうなポイントを見分けられるのはにのまえ一が適任であると判断した。ボーデヴィツヒ、何か異論はあるか?」

「はっ。ありません!」

「あつてもいいんだがな」

「はっ」

きよとん、としたラウラの顔に、千冬は珍しく自嘲的な笑みを浮かべた。

「本来であれば生徒を駆り出す状況は非難されるべきなのだ。だが、お前らも知つての通りIS学園は反社にとつて垂涎すいぜんの的だ。テコ入れのアリーシャとジブリルだが、アイリスの登場によって差し引きゼロと言えよう。ルクーゼンブルクにいたときから狙われていたからな。にのまえ一はタッグトーナメントの裏での暗躍と、アイリスを守った実績がある。加えて倉持からの誘いを断る理由にもなる。仲間と学園祭を楽しみたいだろうが、こらえてくれ」

「そこまで気にかけてくださつて、感謝しても不満はありません」

「いつもながら忠実なことだ。そのへんは義姉に似たか?」

「えと、どう、でしょう?」

ちらりとラウラを見やると、すました顔で口元を緩めていた。

「まあいい。私からの用件は以上だ。あとは楯無から何かあるようだが、そちらは任せる」

「ありがとうございます、織斑先生」

楯無からの礼を背中で聞きながら千冬は生徒会室を出て行った。

扉を閉め、廊下を進みながら、

「私がラウラの立場だったら、か」

先ほど投げかけられた例えを呟いた。自然と、ラウラの呼び名がファミリーネームではなく名指しになっている。

自分がラウラで、にのまえ一が一夏であつたとしたら……。

「……………」

なんと口走つたのか。それは千冬にもわからなかった。

六十伍 生徒会長の直接指導

IS学園武道場。

柔道畳が敷き詰められた試合場にて、トミーは白道着に紺袴といった出で立ちで所在無きげに突っ立っていた。

「なかなか似合っているじゃない」

ここに招いた楯無が軽口を叩く。衣装はトミーと同じ道着姿だ。

「なんか、ゴワゴワして着心地悪いんですね、コレ」

「あら。ドイツ軍で訓練してたって聞いたけど、胴着を着たことはなかったの?」

「ありませんよ。別に武道を習っていたわけでもありませんし」

「それじゃあ格闘技の嗜^{たしな}みはいかほどかしら」

「通り一遍は習いましたが、専門家さんには到底敵いませんよ?」

「本当のところはどうなの? 少佐さん」

道場の端で、腕を組んで見守っているラウラに問いかける。

「やってみろ」

楯無の呼び方が気に入らなかったのか、ぶつきらぼうに返ってきた。

「実力テストか何か知らんが、実際に確かめてみるのが一番だろう」

「なるほど、それなりに腕は立つということね」

「ずいぶんポジティブにとらえるな」

「あなたはトミーくんに関して嘘とネガティブな話はしないもの」

ふん、とそっぽを向くラウラの様子に、楯無は面白おかしく舌なめずりしてみせた。

ドイツ軍屈指の実力者が認める腕前とはいかほどのものか、試してみたくなったのだ。

生徒会室で楯無が語った要件というのは、トミーの生身での実力を計ることだった。

LSの操縦技能は卓越していると把握しているが、警護活動をするうえで彼の能力は未知数だ。

一時、軍に在籍していたとあってそれなりの作法はわきまえている

だろう。しかし、カポエラにマーシャルアーツ、果ては古武術などを修めた楯無としてはそれなり程度では面白くない。

(それに、トミーくんといい、一夏くんといい、お姉さんが世話焼くことになるかもしれないもの)

トミーの訓練は、アリーシヤが来てからは彼女にほぼ独占されていた。何か思うところでもあるのかずいぶんとご執心で、楽しそうに鼻歌交じりで練習メニューを振る舞っている光景を楯無はよく目にしていた。

取られた、というわけではないが、なんとなく放っておけない対象のトミーに関われないのは少し寂しい。それが今回のことで距離を少し縮めることができるのではと気持ちが弾んでいるのだった。

「じゃ、はじめましょうか♪ 勝敗は先に床に倒した方の勝ちってことにしましょう」

「わかりました」

「言っとくけど、手加減無用よ?」

「そのつもりですが、ISでならともかく、生身だと気後れしちやいますね」

「あらあら、すっかりしなさい。暴漢が生徒に襲ってきたらどうするのよ。いい、真面目にやること。これ、命令だからね」

「……やってみます」

不承不承、といった感じでトミーはうなずいた。

両者、赤くマークされた試合エリアに足を進める。

「さあ! 手加減してあげるから本気で掛かってきなさい——」

い、

の言葉が出る前に、楯無の身体が宙に浮いた。

「い!?!」

何が起きたのか、は分かっていた。

トミーが懐に潜り込んできて襟首を掴むや投げ飛ばしたのだ。

彼の右足からの踏み込みも、伸ばされる腕も、どういった所作なのかよく見通していた。

(なのに、なんで反応できなかつたわけ!?)

楯無は空中で体をひねると危なげなく着地する。

「場外だな。柔道なら指導だぞ」

「わ、わかってるわよ！」

外野ラウラからのヤジをいなして再びフィールドに戻る。頬を両手で叩き気を入れ直した。

どうやら、トミーは思った以上にくせ者らしい。

(手加減している場合じゃないみたいね)

精神を研ぎ澄まし、万全の備えで面と向かう。

再開の宣言はせず、ただ構えを見せて試合続行を促した。

トミーがにじり寄る。

徐々に間合いを詰め、一足の距離から一気に詰めてきた。

早い。

が、正直すぎる攻め手だ。

楯無は応じる構えでトミーの勢いを右に躲かわし、流れるように裾を掴んで引き倒すと、

「わっ」

あっけなく、ものの見事に床に落ちた。

「――あら？」

ちゃんと受け身を取ったトミーに、拍子抜けした表情で見下ろす。

「一本だな」

ラウラがジャツジするまでもなく、決着は誰の目にも明らかだ。

「まってまってまってっ！ あれ、おかしくない？ 最初のアレはいったい何だったのよ!?!」

「何だったの、と言われましても、楯無さんのスキを突いただけですよ？」

「突いただけって突きすぎじゃないのっ。確かに油断はしてたけれどもっ」

「それがトミヤの技だ」

ラウラがいつの間にか側に来て、トミーの身を抱き起こした。

「相手の目線、呼吸、動作を見切り間隙かんげきを打つ。いつものトミヤの戦闘スタイルだろう。IS戦でもみせていたはずだぞ」

「そういえば、そうね。でも、分かっていたのにまったく反応できなかったのはどういう仕掛けかしら？」

「奇をてらわず正統派オーソドックスなぶん動きは簡単に掴められる。油断なく相対すれば何でもないのだが、正統派オーソドックスの神髄は相手の虚を突いた場合効果がてきめんに出来ることだ」

なるほど、と楯無は得心した。

彼は、その性格ゆえか攻め手がまとも過ぎるのだ。それこそ、集中しなければ出だしが気が付かないほど自然なまでに。

だから仕切り直しであれば簡単一本取れた。逆に言えば、試合開始時のようにおっとりした相手にはファーストストライクがきれいに決まってしまうのだろう。

もし初手が投げ技でなく腕を取られてひねり落とされでもすれば、結果は違ったものになっていたかもしれない。

「ほら、僕、眼が良いじゃないですか」

「なんかその一言で片づけられると癪なんだけど」

「今日はなんだか特別良いんですよ。それでよけいに上手く決まっちゃったんだと思います」

「特別良いって……」

ハッ、と楯無は気がついた。

生徒会室で織斑先生からアンブルを投与されたことを。

「まあ、調子のよい日もあるということだな」

「……あなた、気が付いていたわね」

「さてな」

「とぼけちゃってまあ」

「それでどうするのだ。トミヤの腕に不服があるか？」

「うーん、クレームつけるほどではないけれど、もっと磨いてみたい気もするのよね」

「生憎練習相手は間に合っているぞ。組合手は私がいるし、指導官はアリーシャさんが務めている」

「オアシス担当として私が混じるなんてことは」

「無用だ」

「ですよー」

「一夏を見てあげてはどうです？ 同級生たちにしごかれてますけど、楯無さんほどの実力者が教えるのも刺激になると思いますし」

「あら、一夏くんって叩かれて伸びるタイプ？」

「何気に、すごい根性ありますよ」

「イイわね男の子同士。お互いのことを理解し合っているみたい」

「女性ばかりの環境ですから。僕にとってのオアシスは一夏になりま
すよ」

「……間違つても他所で口にしちゃあだめよ、ソレ」

「は？ はあ」

今季から大人気売り出し中の男子生徒二人を、はべらせてみたいとか観察してみたいとかいろいろんな妄想をはかどらせたいとか、そういう女子生徒は、いなくもない。

楯無は一つ咳ばらいをして汚染されかけた空気を入れ替えた。

「そうね。トミーさんの言う通り、一夏くんにもあたってみるわ。ちようどお願いしたいこともあつたし」

「楯無さんが、頼み事ですか？」

「ええ。ちよつと身内がらみでね。今度の学園祭にあたって動いても
らいたいなと思つてるの」

「それって、もしかして妹の簪さんがらみですか？」

楯無は両目をまんまるくした。

「え……、それ、どこで」

「本ちゃんに聞いたんです。倉持技研で僕の記憶が飛んだ前後のこ
と、お清さんと本ちゃんにいろいろ確認したんですよ。まさかあの時
のテストパイロットが楯無さんの妹さんだったとは」

「そ、そうだったの。まあ、とんだご縁になっちゃったわね」

「それで、一夏だったら、大丈夫だと思いますよ」

「そ……、そう？」

「はい」

単刀直入な断言に、楯無はおおいに動揺した。

トミーが簪について本音から聞いているということは、彼女が一夏

に向けている気持ちも伝わっていることだろう。

そのうえで、大丈夫、ということとは、

(まさか、一夏くんフリーだったりするのかしら？ いえ、むしろトミーくんがOKするんだから、何気に一夏くんも簪ちゃんのこと気にかけているのかも?)

楯無は思考の深淵へと沈んでいた。

沈んでいたがゆえに、

「なにが大丈夫だというのだ？」

「簪さん、自分で組んだISに不具合が生じて、それで負けちゃったんだよ。だいぶ苦勞してようやく仕上がりってそうなんだから、ガツカリしちやっってるじゃないかなあ」

「姉であればフォローの一つも入れてやりたいところだが、姉自身も自分でISを組んだと聞くな。慰めは返って傷を深める。なるほど、それで一夏か」

「一夏って他人のために一生懸命になれるタイプでしょ？ だから、あの時負けてショックの簪さんを元気づけてあげられると思ってるさ」「ふむ。違うない」

などというトミーたちの会話も耳に入ってこなかった。

「……よしっ！ そうとわかれば早速一夏くんのところにいこうかしら。トミーくん、背中を押してくれてありがとうね！」

「上手くいくことを願ってます」

「いきすぎたら、祝福してくれる？ きっと一夏くん同級生たちから集中砲火喰らうかもよ？」

「こらえますよ。一夏って、人のためなら変な誤解を受けても気にしませんから」

「誤解のないようにしてもらいたいけれど、まあいいわ」

楯無は足取り軽く試合場を離れていった。

後ほど楯無は同じ会場で一夏と組手し、不可抗力をセクハラと勘違いした見物の同級生たちに一夏は集中砲火を喰らうのだが、見事耐え忍べたかどうかはトミーの耳には入らなかった。

六十六話 執事修行

IS学園は一般の学校と比べて行事が多い傾向にある。しかし実感として煩わしいという気持ちはわかかなかった。級友たちが積極的かつ精力的に参加し、学園生活を楽しまうという気概にあふれているためである。

もつとも、一般の学校経験に疎い僕が言えたものではないかもしれないが、学園で唯一の親愛なる男性仲間、一夏も同様の意見をよせているため間違いはないと思う。

ではIS学園の生徒たちの質が高い理由はなにかといえば、世界各国から選りすぐられた逸材ぞろいであることと、入学試験におけるふりの内容にあると見えた。一般に「才ある者に徳はなし」というように、有能な人物にはいささか浮世離れというか、率直に言えば性格に難ありという人物が多い。ふり返れば幸運のめぐりあわせで出会った僕の仲間たちも、おおむね善良でありながらもそれぞれに尖った個性をお持ちでいる。この出っ張りが飛び出し過ぎたものたちは網に引っかかってしまうのだろう。

だが、学園生活の中で角が伸びてしまった者もいる。例えば僕と鈴の練習時に悪意をぶつけてきた先輩方のようなだ。また違う方向では、記者の魂に燃える新聞部の黛さんや、深謀遠慮な生徒会会計の虚さんのような方もいる。どちらも世間では、……もとい、世間に明るい僕の友人たち、特にシャルロット、に言わせればめったに出会えないような英才であるようだ。

そんな人材の宝庫であればこそ、現在準備に取り掛かっている学園祭には多くの来客が見込まれるだろうと予想していた。

学園祭についての生徒たちの見識もまた個性豊かの例に漏れない。セシリアに曰く、

「学園祭とは国民的な行事を学び舎の気風に寄せて開かれるものですわ」

といい、箒に曰く、

「学園祭は主に生徒たちが中心に企画・運営し、門戸を開いて学校の文

化を世間に広めるものだろう」

といい、ラウラに曰く

「学園祭は組織人たちが金の卵を見つけに来るものだろう」

という。

この相違は国際色豊かな生徒を抱えるIS学園ならではの、意見の統一は当然ながら難航を呈するかに見えた。

しかし、ここに織斑一夏という得難い友人がいたおかげで方向性が絞られる。彼の発した、

「みんな楽しんで、来てくれた人たちにも楽しんでもらえるものにしてあげようぜ」

という飾り気のない真心の発言は、求心力という類い稀な彼の個性も相まってクラス全体に浸透したのだ。

かくしてクラスの催しの方向性は決定した。

具体的にどうなったのかというと、ある朝、開かれた全校集会において、生徒会長の楯無さんがぶちまけた、……はっちゃけた、……言葉を選ぶのが難しいが、悪ノリの過ぎる企画の提示によって、哀れなる友、織斑一夏は生贄の山羊に饗されることと相成ったのだ。



その夜、IS学園の展望室に隣接された喫茶店にて、僕と一夏はそれぞれ軽食を頼み席に向かい合っていた。彼の表情がまことに優れないのは、コーヒーが苦いからでも体調を崩しているからでもない。

「トミー、お前は、よく平気な顔でいられるな」

押し殺すような低い声で一夏は言った。

「衆人環視は前々からのことじゃないか」

ミルクと砂糖をたっぷり入れたコーヒーをすすりながらの僕の返答に、一夏は喉の奥でうなり声をあげる。

「学園祭の出し物のためだからって！ こんなかっこう 燕尾服を着て、わざわざ喫茶店にテーブルマナーを習いに来るとか羞恥プレイにもほどがあるぞ！」

「遊び^{プレイ}にしては悪趣味なことに否定はしないよ」

僕たちの会話に、周囲のテーブルの女子生徒たちが作業の手を止めて好奇の視線を向けてくる。卓上には資料が広がっているところから、みな学園祭に向けた話し合いをしているのだろう。

僕たちも同様だ。クラスのお題目は喫茶店。それはいい。前置きにコスプレが入っていないければ。

なぜかような事態になったのかというと、

「学園祭で一番になったところに、一夏君を所属させることにします！」

という生徒会長の発言のためである。つまり、学園のアイドルである一夏が商品となったのだ。アーメン。

僕は生徒会の仕事を任されて裏方に回るのだというと、一夏から絶望の嘆きを吐かれてしまった。

クラスとしても、一夏を他に取られまいとして様々な企画が検討された結果、商品が魅力的ならばその商品を活かせばよい、ということで一夏を前面に出した催し、コスプレ喫茶を運営することになったわけである。

「よく似合っていると思うよ、一夏。お世辞じゃない。不本意だろうけれどね」

「この上なく不本意だ。まったく、アイリスもいつの間にかこんなものを仕立てていたんだか」

「ジブリルさんが学園服を新調した際に一緒に頼んだらしいよ」

「なるほど、……ってならないわ！　なんで燕尾服^{イブニング}で、しかもサイズぴったりなんだ!?!」

「僕たちをいちど召使いにしてみたかったらしい。寸法は集合写真から割り出したんだとか」

「相変わらずエゴイズムとアクティビティに富んだお姫様だぜ」

一夏は空になった自分のカップを手を取って弄^{もてあそ}んだ。

「それで？　テーブルマナーの講習についてだけど、トミーにもできるのか？　いや、なんとなくお前ならできるんじゃないかって気はするが、こういう場合セシリアとかのほうがあつてつけじゃないかと

思ってた」

「ご信頼はありがたいけれど、今回セシリアは監督役だ。……喫茶店の中央にある本棚の隣にある観葉植物の奥を見て。それとなく」

「……うわ、めっちゃ見てる。しかも同じテーブルにラウラとアイリスまでいるぞ」

「箒と鈴とシャルロットも来ているよ。出入口付近のカウンター」

「すっげえチラ見してやがる。つうか鈴て二組じゃん。どこで嗅ぎつけたんだか」

「こんな具合にお歴々を介しているわけだし、さっそく話を進めよう。みたところ、一夏は教え甲斐のありそうな生徒役みたいだからね」

「ああ、だからわざわざ一腹頼んだのか。どうせ俺はマナーが悪いですよ」

腐りかけた一夏をなだめて、練習を開始した。

確かにみたところ一夏は作法に疎いようだが、ISの訓練の様子から学習能力が高いことは知っているため、さほど心配はしていなかった。

食器の取り扱い、足音を立てない歩き方、来客時に持ち物をお預かりし、席に着く際はイスを引くといった執事としての心遣いを、スポンジのように吸収していくのは実に舌を巻いた。

講習に集中していくと周囲からの視線も気にならない、という訳にもいかなかった。例えば動作の矯正にあたっての必要から一夏の手を取り足を取ると、一瞬ザワツ、と異様な雰囲気巻き起こる回数度あった。

特に、食器の置き方を教える際、空いた卓に自分たちの席からテーブルクロスを引いて広げた時は、

「ブッフオ」

とくぐもつた声が漏れてきて、やや気に障った。

「いやいやいや！ トミー、お前そんな技どこで覚えてきたんだよ!」

「ドイツ軍での研修時にちよつと」

「何やってんだドイツ軍!?!」

「世の中が女尊男卑になってから、男性の士官は執事としての礼節と

作法を教わるようになったそうだよ。軍隊って上下関係に厳しいから、女性が偉いなかで必要に応じて取り入れたらしい」

「だからって新春かくし芸大会みたいな技を求められても困るぞ」

さすがにそこまでは期待しないが、学園祭までの日に余裕があれば一夏でも十分身につくだろうという感じはした。

そんなこんなで、每晚喫茶店で一夏の執事練習に付き合う日々が続いた。

日を重ねるごとに、なぜか学園祭の会議を喫茶店で行う生徒たちが増えていったが、いつも僕たちが使う席の周辺は空いていたため、滞りなく進むことができた。

一夏の上達は申し分ない。

しかし事件は彼にではなく僕に起きてしまったのだ。

「ずいぶんご上達なさっていらつしやいますわね、一夏さん」

きっかけはいつもの席に先客としてセシリアがいたことから始まる。

「トミーのおかげでな。学園祭までには最低限はこなせそうだ」

「それはなによりですわ。ところで、トミーさんに贈り物が届いておりますの」

「僕に？ どこから？」

「わたくしが経営する企業グループ傘下の一社からです。どうぞ」

渡された小包を受け取る。まったく心当たりのない僕はすぐに開封せず、差出人と品名を確認した。

セシリアが経営するお店はよく知らないが、どこかで聞いた覚えのある社名だった。僕のスポンサーとも関係のある会社だろうか。

そして中身は、眼鏡。

「眼鏡!？」

僕は飛び上がった。

「えっ……、え!? コレ、僕宛だよね? いいんだよね、合ってるよね!？」

「え、ええ。間違いありませんわ」

「えらい舞い上がりようだな、トミー」

「そりゃあそうさ！ 前に眼鏡を割ってからこのかた、煩わしいコンタクト生活を過ごしてきたんだから！」

「そんなにコンタクトが嫌なそぶりは、……ああ、していたな。鈴に子ども扱いされていたっけ」

「そう。まったく、毎朝目に装着するのがどれだけつらかったことか！ コンタクトのせいで一日がマイナスからスタートしていたんだから」

「予想以上に深刻なものでしたのね……」

「でも、なんでセシリアのところから？」

「それなのですが」

セシリアはまず席に着くよう促してきた。ただならない内容のよ
うな気がした。

「実は、わたくしのメイドのチエルシーに、エクシアさんから連絡が届いたそうなのです」

「エクシアから！」

「誰だ？ トミー」

「僕と同僚だよ。オペレーターとしていつもサポートしてくれている。でも、なんで僕にではなくチエルシーさんに？」

「二人は、前から少しずつ連絡を取るようになっていましたの。ご事情は、トミーさんはご存知かと思えますから控えますけれど」

「ああ、うん……」

僕は一夏に詮索しないよう視線を送った。

エクシアとチエルシーさんの事情とは、それぞれに問題を抱えてきた生き別れの姉妹であることだ。エクシアは記憶を無くしているし、チエルシーさんはエクシアを探すために正しいとはいいいがたい方法に手を染めていた。

それがある一件に居合わせた女伯爵（カウンテス）の計らいからチエルシーさんの容疑は晴れ、再び出会うことができた二人はぎこちなくも関係を築こうとしていた。少しずつ連絡を取り合うようになっていたとは、お互いのアドレスを交換するまで進展していたのだろう。それはとても喜ばしいことだった。

「おもむろに眼鏡について相談されたそうです。どうしてかと問いかけると、トミーさんがコンタクト事情について不満を漏らしていたのを想っていらっしやったそうですわ」

「えっ、いや、確かに困っているとは……言っただけど」

「どうした？ 目が泳いでいるぞ、トミー」

「……」

「あ、閉じた」

僕は瞑目して沈黙した。その話題はエクシアだからこそ愚痴を零せる内容だったのに。鈴に「子供か」って言われたの、地味に気にしていたんだぞ。まさか巡りめぐってチエルシーさんの耳に届くなんて。

それにだからといってどうしてチエルシーさんも用立てしてくれただろう。

「トミーさんはご自分の体質ゆえに普通の眼鏡をご利用になれないということでしたわね」

「うわ、そこまで話しちゃったか」

「詳しいことまでは詮索しなかったようですわ。もつとも、おおよその検討はつきませんが。わたくしもラウラさん同様、拝見いたしましたもの」

「……そうだったね」

僕の目に宿る、ヴォーダン・オージエ越界の瞳、その贋作を、たしかにセシリアの前ではしっかり見せていた。彼女の予想どおり、僕が嫌々ながらこのコンタクトを使い続けているのは普通ではない能力を抑える意味があるのだ。

レンズはよっぼど特殊なものらしく、だから眼鏡に戻るのには難しいと半ばあきらめていた。

「それで、トミーさんに見合ったレンズを作れないものかと検討し、我がグループ会社の眼鏡店に問い合わせたところ、なんと可能でありましたの」

「そうだったの!?! あれ、ウチのスポンサーでも苦労したっていうのに。……あ」

そこで思い出した。セシリアのグループ企業の名前、あれは僕のスパンサーであるM・R・エレクトロニクスと提携していた会社じゃないか。

まさかここでウチのグループとセシリアの財閥が繋がることになるとは。

いや、ひよつとするとエクシアは知っていたのか？ エクシアは下手に他所の会社をつつこうとするやつじゃない。チエルシーさんという縁を使つて件(くだん)の眼鏡会社に難しい注文を穩便に届けていたとか。

こんな想像が本当なら、エクシアにはずいぶんと気を使わせてしまったな。今度日本のおいしいお土産でも送つておこう。

「ただ、それでも再現するのは難しいそうでしたの。そのため、このような形となりました」

「このようなかたち？」

疑問符を浮かべて、念願の眼鏡が入った包みに手をかける。

きちんとした包装と肌触りの良い箱を開けて、その意味を理解した。

「方眼鏡……！」

「はい。グラスのコーティングの都合から、トミーさんの目を抑制する力がどうしても落ちてしまうそうです。そのため、片目はそのままコンタクトで抑え、もう片目に眼鏡を着けるという方法で脳への負担を軽くするという結論に至ったそうですわ。申し訳ありません。中途半端なうえ、お身体にも障るかもしれない結果で」

「まさか、そんなことはないよセシリア！ 片目とはいえ今までのストレスから自由になれるんだから！」

「なんだか知らないけど、さっそく着けてみるよ、トミー」

「……………」

「どした？」

「化粧室いってくる。鏡越しじゃないとコンタクト外すの怖いし」

「お前、マジで困ってたんだな」

困っていたともさ！

と叫びたい衝動をこらえてトイレに直行した。手をしつかり洗って、目に人口涙液をたらし、おっかなびつくり取り外す。

あらわ露になった空色の瞳に、新品の方眼鏡を装着する。ぴったりフィットして掛け心地もよい。それに、レンズは瓶底型びんぞこではなく丸く平たく透き通ったタイプだった。

鏡に映る自分の顔は、おかしくはないだろうか？ コンタクトをした紅い右目に、方眼鏡をした空色の左目。いわゆるオッドアイのような姿は、

「ラウラとおそろいみたいだな」

自然と呟いた言葉が本心だった。

喫茶店の席に戻って、一夏とセシリアにじかに見せると、

「まあまあまあ！」

「っはは！ よく似合っているじゃないかトミー、今の格好にぴったりだぞ！」

一夏に言われて気が付いた。

燕尾服に身を包んだ僕の姿は、まるで本に出てくる昔の執事そのものだったのだ。

六十七話 渋いお茶と甘いケーキ

初秋、IS学園は季節を置き忘れたような陽光に蒸し蒸しと照り付けられていた。

(なんとという暑さだ……)

小脇にカーディガンを抱え、上等なシャツを汗で湿らせ、のりできちつと固めた襟をだらしなく開いたフランス男、アルベール・デュノアは恨めしそうにため息をついた。

今ほど、故郷を恋しく思うことはない。IS学園のあるこの時期の日本、東京の気温が優に30℃を超えていようとも、フランス、パリは25℃前後に過ぎないのだ。

(学園祭を開くならば、もっと気候の良い時期にすればよいものを) そうでもなければ、こんな時期に日本くんだりまで来ることはない。

眉間のシワを普段以上によせながら、学園の通路に目を配った。どこか腰を落ち着けるところを探しているのだが、右も左も来客でごった返している。秘書役として随伴させた自社のIS試験操縦士テストパイロット ショコラデ・ショコラータに空いているカフェを探しにやっているものの、なかなか戻ってこない。この人出ではなかなか見つからないだろう。

IS学園の学園祭は基本関係者のみに対して開かれている。それでこのありさまなのだから、学園の名声が偲ばれるというものだった。

「いささか、難儀しておられるようですね」

汗でぐっしよりとしたハンカチで首元をぬぐっていると、ふいに声をかけられた。

地味な紺の帽子キャップに、同じ色の作業着を着た、小柄な年配の男性からだった。顔にはアルベールの眉間よりも深いシワが刻まれているが、厳かな感じは無く、柔和な雰囲気をもとっている。

アルベールは、学園の用務員か？ といぶかしんだが、

「あ、あなたは……！」

すぐに誰か気が付いた。

「そのの」

老人は中庭を指さす。

「オリーブの木の陰にベンチがありましたな。一休みなさってはいかがでしょう」

アルベールは、話しながら差し出された冷たい緑茶缶を受け取ると、短い謝辞を返して老人の後にしたがってベンチに腰を掛けた。

周囲の人だからからやや離れた頃合いで、あらためて深く頭を下げる。

「轡木十蔵氏とお見受けします」

「いかにも」

老人は微笑みをたたえている。

「感謝の言葉をお伝えするのが遅れてしまい、申し訳ありません。シャルロットのこと、お目こぼしくくださってありがとうございます。た」

「ああ」

十蔵は歯を見せて笑うと、自分の緑茶缶のタブを開けアルベールに向けた。アルベールも封を開け、コツんとささやかな乾杯を交わす。

「はじめに性別を偽って入学させたい、と言われたときは参りました。妻には普段尻にしかれつぱなしますので、なだめすかして納得させるのに、それはもう骨がおれましたよ」

「奥様とは、学園長の」

「さようです。責任重大な立場にいますからね。フランスの協力者にも手を借りて、なんとか体面を整えたのです。それが、はは」

「まさか、あのようないきさつになろうとは」

アルベールはふき出してきた汗を小まめにふきとった。

シャルロットは始め性別を隠して入学するも、学年別トーナメントで優勝し、その栄誉を笠に着て真実の自分を式典の場で宣誓したのだ。

面目をつぶされた形のフランスの視察も、実力を示されての説得には渋々折れざるを得なかった。

その後のデユノア社へのとぼつちりは、嚴重注意。シャルロットを否が応でも国家代表レベルの実力者に育て上げよ、というお達しだった。

結果としては丸く収まった形だが、

「これでは何のために男装し入学させたのかわかりません。いまだ身内にはシャルロットを排斥しようとする輩が潜んでいるというのに」アルベールは茶をいっきにあおり、渋い顔になった。

シャルロットを偽らせてIS学園に入れた理由は、お家騒動の一手前な状況にあった。それも、命を危ぶまれるほどの。経営者としては辣腕を振るうアルベールも、親族内の揉め事を収める術には生憎と疎かった。助力を請うべき彼女の母親である愛人は既に故人であり、正妻であるロゼンタは、あろうことかシャルロットを憎悪する。アルベールは万策至らず手の施しようがないと悟り、外部不介入の校風を持つIS学園に一時的に避難させようと手を配ったのである。

十歳は、茶をちびりとすすった。シャルロットのことはすでに聞かされている。

「ですがもし、半年や一年も嘘をつき続けていたとしたら、シャルルくんは罪の意識に押しつぶされていたのではないでしようか」

「しかし」

「シャルロットちゃんに戻った今となつては、妻に無理言つて入学させてよかったと思いますよ。優秀で、よい教え子を持ってましたから」

「……能力は、あります」

「そうですね。校友たちと友情を育み、親を離れて自立できるほどに」アルベールは息をついた。視線が、まごつく。

娘が成長して羽ばたいてくことは嬉しい。だが、親である自分はいつたい、これまで彼女にしてきたことを振り返って、何と落ち着ければよいものか。

シャルロットは今年、夏季休暇の間もついに実家へ帰らなかったのだ。

「ところ」

十歳は手の缶を頭上の木に向けた。

「今回来校されたのは、あの子たちの確認も兼ねておられるのではないですか？」

生い茂る緑の中に擬態するように、甲虫型のロボットが静かにあたりを見回していた。

学園祭前に導入した警備ロボットだった。

「ええ、そうです。わが社の警備用ドローン、『ファール』といいま
す」

「昆虫記でも作りそうな名前ですな」

「祖国の偉人の名に恥じない性能を、と命名しました。貴校に進呈した先行量産型ですが、いかがですか？ 運用は」

「良好と聞いています。ただ、武装を施したのは物騒ではないでしょうか？」

「お気づきになれましたか」

「失礼ながら、技術部に確認させましたので
「賢明です」

十蔵は横目でアルベールを見た。自社の新作を探られているというのに、さして気にするふうでもない。どうやらこの社長は信用されていないことを想定しているようだ。

だがそのうえでなぜ電撃銃レーザーガンを内蔵させてきたのか。

「ISが世界の兵器業界を一新させたのは周知のとおりです。しかしご存知ですか？ このようなドローン兵器が地に潜むように業界で蔓延っていることを」

「……小耳にはさんだ程度ですが」

アルベールの眉間のシワが、ほんの一瞬ふかくなった。

「実は、私も詳しくはなかったのです。ある伝手ついでからこの素体プロトタイプをもた
らされるまでは」

「ほう」

「ですからあえてこのような形にしたのです。もし、今後同じようなものが悪意を持って広まったとき、先手を打てるように」

十蔵は小さく唸って腕を組んだ。

アルベールは、失敬、と告げると空き缶を捨てに立ち上がった。十

蔵に背を向け思案する。

『ファールブル』のもととは、先日の国際IS委員会会議でM・R・エレクトロニクスの常務から渡されたものだ。データを見てすぐに感じたのは、もしこれを武装させ、地雷のように世界中に散りばめた場合最悪の事態をもたらすだろう、ということだった。

(M・R・エレクトロニクスの裏には反女尊男卑主義組織がある。やつら、世界を相手にゲリラ戦をするつもりか)

弱者の兵法として正当過ぎるために疑わざるをえない。そして、

(轡木氏は、小耳にはさんだ、と言ったな)

IS学園の生徒会長、楯無と呼ばれる者は、日本が持つ対暗部用暗部だという。そこからもたらされた情報なのかもしれない。

もしくは、まさかとは思うが、

(彼も反女尊男卑主義組織と繋がっているのだろうか)

反女尊男卑主義組織の重役と目される、国連の某機関長であり10年前にはIS条約締結に尽力した、通称『閣下』は轡木氏と同年代で親交もあつたと聞く。気脈を通じていたとしてもおかしくはない。

だが、反女尊男卑主義組織はこれまで過激思想は主張しても過激行動はしてこなかった。それに閣下も轡木氏も人物としては大器だ。卑怯千万なゲリラ戦に賛同するだろうか。

アルベールは悩んだ。『ファールブル』のことも、反女尊男卑主義組織のことも、シャルロットのことも。

「社長、またシワが増えるよ」

アルベールは真横間近からいきなり声をかけられた。間抜けな声を上げ大いにのけ反って落つこととした空き缶を、声の主は拾い上げる。

焦茶の髪をサイドテールに束ね、深緑の瞳を半目にする褐色肌の女性だった。

「……シヨコロータ。気配を消して近づくないつも言っていたらうが」

「社長が考え事してただけで消してないよ。あんまり」

デュノア社の専属試験操縦士は悪びれない。

何か言い返そうとする社長をよそに後ろの老人に目が止まった。

「あれ、そつちのじいちゃん、十蔵さんじゃん。おひさ」

「んん、おお！ ショコラちゃんじゃないか。大人になったねえ」

「なってないよ。服が学生服からスーツに変わっただけ。でも嬉しい」

ショコラは社長を押しつけて十蔵に駆け寄った。握手するようして十蔵を立ち上げさせる。

「おいショコラター！」

社長の声でもシカトする。

「十蔵さん、社長あついのダメ。イライラしてる。でもどこも空いてない。どっか知らない？」

「それは困っているだろう。この券のところに行くといい」

十蔵は2枚のチケットを取り出した。ショコラは記載されているお店を一瞥すると、

「3枚ない？ 待ち合わせしたいの。商談相手」

「あるとも。遠慮せずに行っておいで」

「さすが太っ腹。就活困っている子がいたら言っ。ウチで雇う」

「勝手に話を進めるな！」

割って入るアルベールからショコラはひらりと身をかわした。

「社長、コツチ。案内する」

「お、おい待て！ ……まったく、申し訳ありません、社員教育がなっていないばかりに」

「いや、母校に帰ってきて楽しんでいるのでしよう。そうさせたいために連れてきたのではないですか？」

「いつもあんな感じですよ」

「それは良かった。ショコラちゃんは人見知りで、しよっちゆう気配を消していますからな。自然体で振る舞えるのは信用できる相手と場所だけです」

アルベールはバツが悪そうな顔で口をぐもらせた。

十蔵は、頭を下げて見せる。

「デュノア社長、教え子をよろしくお願いします。シャルロットちゃ

んは、我が身にかけてお守りいたしますゆえ」
「そ、そこまでなさらなくとも結構です。では、これにて」
アルベールは逃げるようにシヨコラのあとを追っていった。



学園祭ではクラスごとに出し物が催されており、部活動や研究室のそれと違ってカジュアルに照らした装いをしていた。

1年1組のイベントは『ご奉仕喫茶』。うら若き乙女たちがメイドに扮し、来客へ心づくしのおもてなしをしている。席はほとんど空きがなく大盛況。しかし客のお目当てはメイドさんに対してではなく、「お待たせいたしました、お嬢様」

燕尾服姿でしなやかにおもてなしをする織斑一夏の姿にあった。

「あ……、あり、ありがとうございます……」

コーヒートショートケーキセットを運ばれ、そのまま傍に侍られてしどろもどろになっている更識簪は、ことばをつつかえながらも勇気を振り絞った。

「あの！……この執事サービスオプションの、『あくん』を、してほしい、です」

「かしこまりました」

一夏はフォークでケーキを丁寧に掬い取り、

「これくらいいいかな？」

小声でナチユラルな確認を入れてお嬢様にお伺いを立てる。

返事は、

「ひゃい!!」

というオクターブの高い大同意。

一夏はくすりとほほ笑むと、簪と目線を同じ高さに身かがめ、手を添えて差し出した。

「さあ、お嬢様、あくん」

「あ、あ……」

「うあゝあゝ あああー！ー！！」

「おゝおゝ おあああー！ー！！」

客席から離れた厨房で、の太い声がこだました。

ズダアンツ！ とホールケーキをケーキナイフでたたき切る音まで荒い。

「静かにしてくださいまし！ お外のお客様に聞こえてしまひましてよー！」

オーダーをチェックしていたセシリアがたまらず注意する。

だあつて、とうらめしそうにするのはメイド服姿で調理をしている箒とシャルロットだった。

「もう見ておれん！ 一夏のやつ、あんなに鼻の下をのばして、あんなにふしだらなことまでするとは！」

「一夏つてば、さすがにひどいんじゃないかな！ 僕が何度も疲れているから休みなよ、って言っているのに、全然戻ってこないんだもん！ せっかく特別なご奉仕をしてあげようと思っっているのにさー！」

箒は再びケーキをぶった切り、シャルロットは生クリームをボウルの中でぐわんぐわんとかきむしっていた。

「まあ、お気持ちはわからなくもないですが。シャルロットさん、次の『お迎え』の出番ですわよ」

「え、もうそんな時間？」

「入り口でジブリルさんがスタンバイしていますので、行ってくださいまし」

は、はい、シャルロットが気のない返事を残して厨房から出て行った。

『お迎え』とは、ドアを開け来店するお客様に向かって

「おいでなさいまし、旦那様！」

と満面の笑顔で出迎えるサービスだ。提案者はラウラ・ボーデヴィッツヒ。

「日本では来客へのあいさつといえればそれだと聞いたぞ」

という発議に、どこで聞いたんだそれは、と日本人の一夏と箒は微妙なニュアンスの違いにツッコんだが、

「他と差別化を図れるかもしれないね」

というシャルロットの同意に、そのまま了承の運びとなった。ちなみに、ジブリルは主人のアイリス王女を護衛する任務も兼ねて1年1組の催しに参加しているのだが、目ざとく知った同級生の山田真名によつて、キッツキツのパンツパンなメイド姿に見事にコーディネートされた。

「くっ…、くっ…！…！ 屈辱だっ…！…！」

はずかしめをうけたように涙目で震える女騎士がいたそうなの。

ともあれ、シャルロットは入り口の前につくと、すでに到着して身を縮こませているジブリルに声をかけた。

「お待たせしました。ひらきなおつていきましよう！」

「う、うむ。そうでもなければやつてられんしな」

なかば投げやりな調子で合わせる二人の前で、ちようど来客を知らベルが鳴った。ドアがゆっくりと開きだす。

「おいでなさいまし、旦那さま…！」

出迎えの声が、止まった。

「何やってんの？ ジブリル」

入店してきた褐色肌のサイドポニーが半目でツッコむ。

「なっ…！…！ しよ、シヨコラ!? なんでココに??」

シヨコラはジブリルの上から下まで一瞥すると、

「胸開きすぎ。スカート短すぎ。サイズ合わなすぎ。キモイよ」

「うぼあっ」

ジブリルを一撃でノックダウンさせた。

その隣では、お互いの顔を見つめあいながら、表情を固めた二人が彫刻のように立ちつくしている。

「おとうさん…！」

かろうじて、零れ落ちるようなつぶやきがシャルロットから漏れた。

予期せぬタイミングで、二人は何時いついらいかぶりの再開をした。

六十八話 ケンカ相手はたいい身近

IS学園警備本部。

生徒会室に直結する窓のないその一室には、壁一面にディスプレイが広がっていた。

表示されているのは学園内のそこかしこ。デュノア社から提供された甲虫型警備用ドローン『ファールブル』からもたらされる映像だ。

どの画面を見ても人が映らない場所はなく、
「盛況だねえ」

という感想が、タスクデスクで作業をしているトミーの口から自然とこぼれた。彼の左に設置されているモニターでは来客者一覧が滝のように流れ、片眼鏡に反射し映している。

ちなみに格好は、クラス仲間と同じ燕尾服。

「まるで陰謀執事か何かのような格好とセリフですな」

となりのデスクで同じく作業をしている、警備仲間の四十院神楽が視線を画面にとどめたままつぶやいた。

その格好もまた給仕服。しかしメイド服のそれではなく、

「和装でデスク仕事はちよつと映えないと思うよ、四十院さん」

「大正ロマンあふれる割烹着というのですよ、これは」

紺の袴に緋の矢絣柄やすがりを模した着物、その上にフリルのついたエプロンという、大和撫子の侍女仕様、という出で立ちだった。

「なにげに四十院さんもクラスの出し物に混ざりたかつたんでしょ」

「否定はいたしません。あなたがそうであるようにです」

「やっぱりシンパシーは感じたいよね。服装だけでも同じにしたら、気持ちも近づけないかと思ってさ」

「せっかくの学園祭ですもの。織斑先生の依頼が嫌という訳ではありませんが」

「頼りにされているのはうれしいけれど、それはそれだよな」

トミーはマグカップのコーヒースプーンをすすりながら言った。

トミーと神楽の二人は、織斑千冬せんせい直々に学園祭の警備担当を任されていた。トミーは特殊技能の偽・越界ヴォーダン・オージエの瞳によって不審者をあぶり

だすのに適しているし、神楽は早期警戒管制機仕様のISを任せられるほど視野が広い。

最近何かとトラブルが続くIS学園としては、セキュリティを強化しているとはいはいえ、念には念をしておきたかったのである。

神楽は緑茶を入れた湯飲みを傾け、一息いれた。

「今のところ、入学時に提示される学祭案内状と個人証明に不備はありません」

「案内状は基本学園関係者に配られるというし、部外者が紛れ込みにくくはなっているから、イレギュラーが来るとしたらそこをどう掻い潜ってくるかだよな」

「学園には織斑先生だけでなく、アリーシャさんのような強者が控えていることは周知のとおり。不埒者が現れるとしたらよほどの間抜けか、暴かれない自信のあるものか」

「このドローンによって目を光らせる範囲が増えるのは助かるよね。それに僕らのクラスの出し物も見れたり……」

ふと、トミーの目が1年1組を映すモニターに止めたまま、言葉が途切れた。

不審に思った神楽の目がデスクの上から離れる。

「どういたしました?」

「四十院さん、ラウラを呼んで」

「お客様に無礼でも働いていましたか?」

「悪い予感がする」

神楽はそれ以上茶々をいれなかった。

「どこに待機させましょう」

「ひとまず外。まだ確証がないけど」

トミーの半信半疑な物言いも、神楽の動きは素早かった。

そのわずか10数秒後、ラウラはひそかに出し物の給仕役から離れ、クラスを後にすることになる。



IS学園1年1組が学園祭で開催しているご奉仕喫茶にて、こうした場に来るような癒しや萌えを享受する客としては、最も遠い顔が並んでいた。

一人は渋面の伊達男、大企業デユノア社長アルベール。眉間にしわを深くよせてコーヒーカップを傾けている様はじつに苦々しげ。その隣に相席しているぼんやり顔の女性は、アルベールの部下のシヨクラデ・シヨクラータ。テーブルにはケーキをチョコ・抹茶・生クリームの3種類を用意させ、マイペースにつまんでいる。

そして二人の向かいに座っているのは、
「えくと、なんでこんな場所にしたんでしょうか？」

ふわりとした金色のロングヘアと、スーツの上からでもそれとわかるボンキュッボンな妙齡の美人さんだった。セクシーに空いた襟元には記章バッジを付けており、所属を『みつるぎ』と記している。「今回この場で会合を開きたいと言ったのはそちらではないか、巻紙女史」

不愉快さを隠さずアルベールは言った。

ビジネスマンらしからぬ態度だった。昨今の女尊男卑のちまたにおいて、ほぼ例外的に社長職に座り、かつ経営を持続せしめる手腕をもつアルベールは対外的な仮面をいくつも持ち合わせている。にもかかわらず、無遠慮な素の不満づらは、目の前の相手を値踏したうえでの当てつけと言っている。

わざわざフランスから社長直々にIS学園にまで赴いたわけ、それは目の前の美女、巻紙礼子が渉外担当として所属している、IS装備開発企業『みつるぎ』とのセッションのためというのが表向きな理由だ。分野が装備開発というデユノア社の強みと同ジャンルであるため、『みつるぎ』とは昔から懇意にしている。

しかし、アルベールは巻紙礼子に面識がない。通常であれば渉外担当などという『外交的』な相手でなく、デユノア社専属担当という『内政的』な者が来るはずだ。それだけの企業間関係は作れていると彼は思っていた。それがこのザマなのだから、

(『みつるぎ』社との関りも考え直す必要があるかもしれない)

馴染みの顔役が連絡もなしに変わり、指定された日時、場所がこのようなものだから、アルベールの不信心は募ることこの上ないものだった。

そんなイライラオーラを、巻上はどこ吹く風と受け流す。

「まさかメイド喫茶をひらいている学生の催しで会合をされるだなんて、想像だにしていなかったものでして」

片手で髪をすくいあげ、表情に妖艶さを醸し出し美人をまきちらしながら困惑を示すも、

「少しくらい想像力があれば、この混雑時に空いている店がないことなど察しがつきそうなものだろうが」

愛妻家のアルベールには通じなかった。

「手厳しいですね」

「お互い忙しい身だ。さっさと終わらせよう。さしずめ、キミの目的はわが社の警備用ドローン『ファアブル』だろう?」

「お察しの通りです。さすがはデユノア社長様!」

「つまらないおべっかはやめてもらいたい。『ファアブル』の運用はIS学園が初であることを踏まえればすぐに見当が付く。で、なぜ『ファアブル』なのだ? また、なにを材料に話そうというのだ?」

「そうですね。まず『ファアブル』に関しては、わが社の取引先が殊ことの外興味ほかを引いておりまして。ぜひ仲介してほしいとご依頼を」

「断る。初対面の渉外役に新商品をゆだねるわけにはいかないのにな」

「もちろん、相応の品をご用意しました。それこそ」

巻上は、なにが可笑しいのか含み笑いをたたえた流し目で、給仕の一人に目をやった。

その視線の先に、アルベールは片眉を吊り上げる。

「シャルロットあが、なにか?」

シャルロットにも聞こえたのか、先刻から無表情をきめている顔に不快感がよぎった。

「お嬢様にうってつけの装備なのです」

「と、うと?」

「お嬢様の特殊技能、戦闘状態に合わせて一瞬で装備の呼び出しと展開ができる『ラピッド・スイッチ』。それに合致した装備だということですよ」

「……言うほどではあるのだろうか」

「まだどこにも出していない秘蔵品で」

「用途は？」

「IS装備の展開に妨害をかける障害発生装置というものです」
「ほう」

アルベールをして初耳なものだった。

巻紙は説明とともにタブレット端末を差し出してみせる。画面には詳細なデータが網羅されていた。

曰く、IS装備展開妨害装置、通称『ノイズ』

形状は腕部を覆い隠す大柄なプロテクターのようなようだ。エルボー部分が開閉し、蓄音機のスピーカーのような大口を開け、対象の装備展開をクラツシュさせて一時的に使用不能にするという。

なるほど仰々しい見た目だ、とアルベールは思った。これでは通常使用の場合取りまわしが難しいし、相手に妨害を警戒させるだけで終わってしまう。だが、シャルロットの腕であれば効果的に運用できるだろう。それこそ、用途が用途だけに、格上相手にも出し抜ける大番狂わせとなりえるかもしれない。

説明を熟読すると、手で覆い隠しているアルベールの口角がゆがんだ。

「すぐにテストしたいな」

「すでにインストールのご用意はできています」

巻上は承知とばかりに装備が収納されている記録装置を手にし
て見せた。

なかなかどうして手腕は確からしい、とアルベールは巻紙への評価が変わりつつあるのを自覚した。

「結構。ではさっそく取り掛かるとしよう。シヨコラータ、学園にアリーナの使用許可を取れ。シャルロット、聞こえたな。今から実用試験をする。くだらない恰好を脱いでついてこい」

アルベールは返事も聞かず、席を立ってドアに歩き出した。彼の頭の中ではすでに様々なシミュレートが展開され、どの結末に落ち着くともまんざらではない気分でした。

その前に、立ちはだかる者がいた。男である。

織斑一夏が立ち塞がったのだ。

「お客様、いまのはあんまりではないでしょうか」

「なんだね？ 会計は秘書がする」

不意な登場にもアルベールは動じず対外的な仮面を被る。

「そうじゃねえよ」

一夏の給仕役の顔が剥がれた。

「お前、シャルのことを何だと思ってるんだ。急に顔を出して、会話も交わさず、くだらないだのついてこいだの、勝手なことをほざくじゃねえ！」

一夏の罵声が、周囲を静めた。満員御礼のご奉仕喫茶が二人の男を中心に沈黙が広がる。

(一夏……！)

一人、シャルロットの胸だけが高鳴った。

アルベール 親に對し言いたいことはある。否定したいことなどたくさんある。その言葉を口に出せないのが彼女の置かれた生い立ちだった。

それを、想い人は解き放ってくれた。ぞんざいな口調がいつそう気持ちいをゆだねられた。鼓動はリズムに乗るように早まりテンポを高めていく。

その音も、アルベールの声が一瞬で縮こませた。

「小僧、勝手な真似をしているのは貴様だろうが」

「なに？」

血相を変える一夏の胸倉へアルベールはおもむろにつかみかかる。シャルロットの表情が悲鳴を帯び、周囲の沈黙が、わ、とぎわつくが止まらない。

親たるものはその立場にふさわしい言葉をあからさまな感情にのせて目の前の小僧に叩きつけた。

「人の娘の名を気安く略称で呼ぶなど言っているのだッ!!」

そっち!?

と傍観していた巻紙礼子が仰天した。

「なっ、仲間を親しみやすく呼ぶのは普通だろ!」

「仲間だど!? 誰の許しを得て親しくなったというのだこの青二才の若造が! 私はお前のようなサラブレッドの弟なぞニユースでしか知らんわ!」

知ってはいますのね、と厨房から見ていたセシリアがつぶやき、サラブレッドと認めてはいるのだな、と同じく箒が応じた。

隣のシャルロットはいたたまれない。

一夏は男の子よろしく反抗する。

「だったら教えてやるよ、俺とシャルとの仲を! 俺たちがタツグマッチトーナメントで敵対した後も嫌な顔一つせず練習に付き合ってくれたし、夏祭りに行った時には山の上の境内で一緒に写真を」

「黙れ黙れ黙れ!! そんな話を聞きたいんじゃないっ!」

「いや、これだけは言っておく! シャルのおかげで俺も仲間たちも救われたことが何度もあるし、一緒に暮らせて本当に良かったと思っている! シャルはいいやつだ。もつと優しくしてあげたっていいんじゃないのか!」

「人の家族の話に首を突っ込むな! 私だってそうできればそうして……、ゲフンゲフンツ、んん”ッ! 空気がよどんでいるなここは!」
クラー快適だよ社長、というシヨコラータの呟きは「黙れ!」という上司の一喝でへし折られた。

「ええい、鬱陶しい! ならば小僧、貴様もアリーナに付いてこいッ。その威勢が虚仮威こけおどしでないことを証明して見せろ!」

「望むところだ!」

熱のこもる男児のとなり、

「……あれ、これ私が相手しなきゃいけないやつ?」

シヨコラータは最後のチョコレートケーキを頬張りながらぼやいた。

当然だ！ と社長はパワハラをふるう。

「シャルロットも、いいな！ つまらない仲良しごっこなぞ捨ててシヨコラータと一緒に叩きのめしてやれ！」

「え？ いやです」

アルベールはこれまで娘にも見せたことのないような間の抜けた顔でシャルロットを見た。

娘の返事はまずため息から。

「はあ、いいですか？ いまクラスの出し物の最中なんですよ？ それに一夏はウチの看板役なんです。学祭をほっぽりだして行かせるわけないじゃないですか。あと会社のお仕事はよそでやってください」

「な……！ お前、まさかこの小僧とすでに」

「そそそつ、そんなわけじゃないでしょう！ ……残念だけど」

小声になった後半部分の発言に、先ほどまで一夏におもてなしを受けていた簪はひそかに安堵の息をついた。

一方、お父さんと化したアルベールは止まらない。

「いかん、いかんぞシャルロット！ 私はともかく、お前のお母さんはそんなふしだらな娘に育てた覚えはないぞ！」

「お母さんを持ち出すことと断定形が非つ常に嫌ですけれど誤解ですつてば！」

「ならばこの小僧を叩きのめして見せろ！」

「なんで僕がしなきゃいけないんですか!？」

ギャースカ！ ピースカ！

と不意に始まった親子喧嘩。

喧騒の間隣で紅茶を楽しむシヨコラータは、しかし少し笑っていた。

この社長親子が喧嘩をしたことなど今までなかったことを知って

いるからだ。

やれやれ、と苦笑を漏らして、シヨコラータは名残惜しい場所を緩慢な動きで離席する。

行き先はお会計のアイリスのもとへ。

「とりあえずお値段3倍掛けにしといて。迷惑代」

「う、うむ。結構な心づけよの」

「お姫様も、似合ってるよ、メイド服」

「そうか！ そうであろうそうであろう」

「でも言い方が偉そう」

「ぐぬう」

「で、アリーナとれそう？ 奥で連絡しているの」

シヨコラータが目ざとく見つけた、レジ奥で誰かと通話してる布仏本音に尋ねた。

「おねーちゃんがおっけーだってー」

アイリスの後ろから現れた布仏本音が、携帯端末をぶんぶんかざしながらOKサインをして見せる。姉とは生徒会会計で実務全般を引き受ける布仏虚だ。

「よくも通ったものじゃな？」

「にやははく、ごり押ししたのだけ」

「それは不憫をかけたものよの。して、よろしいな、シヨコラータ殿？」

「ん、ありがとう」

支払いのサインをするシヨコラータに、アイリスは、ふむ、と思いつ出したように口にした。

「前にジブリルから聞いたとおりじゃな。同期との模擬戦で負けたことは無いが、唯一、状況判断で後れを取った相手がお主じゃと」

「ジブリルが無鉄砲なだけだよ」

「それは知っておる」

「あは。ずいぶん信頼してるんだね」

「当然じゃ。IS^{モンドグロックスヴァアルキリ}世界大会部門優勝者としての見分は間違いない、と思っておる。それに」

「なに？」

「そんなジブリルが信頼するお主もまた同様じゃ」

「……ふうん」

シヨコロータは普段の半目そのまま、口元だけ弧の字にして笑った。

「同期の期待には応えるよ」

踵を返すと、騒々の巷に強引に割って入った。

「社長、巻紙さんが持ってきた装備のテストは私がする。模擬戦相手は、お嬢様と一夏くんで」

「んなつ？ シャルロットも相手にするというのはのか？」

「ぼ、僕もですか？」

「そう。ここまでこじれたらしよーがないでしょう。それに、『ノイズ』の試用ならお嬢様相手のほうが都合がいい。一夏くんの機体は装備展開しないっぼいし」

「そーいやあ、そうだな」

話題を振られた一夏は【白式】の装備を思い浮かべた。二次移行してから搭載された『月穿』という荷電粒子砲も練習してはいるが、ほとんど近接ブレードと左腕部多用途武装しか模擬戦では使っていない。

「しかしだな、小僧と一緒にシャルロットを組ませるなど……」

「社長が家族問題にパツパラパーなのは知ってる。けど冷静になつて」

シヨコロータは視線を巻紙礼子に向けて、

「こんな初対面のやつが持ち出すような代物、ホントに安全だと言える？」

アルベールは、ハツと我に返ったように目を瞬いた。

巻上はさすがにムツとする。

「ちよつと、その言い方はあんまりじゃありませんか？」

「巻紙さん、私、あなたのこと知らない。『みつるぎ』にはよく行ってるんだけど、あなたは知らない」

アルベールと巻紙の表情が変わった。

「確かめる。いろいろと、全部。行く、みんな」
率先と進むシヨコラータに引きずられるように、騒ぎを起こした張本人たちは1組のクラスを後にした。

六十九話 フランスの雪風

「あら、シヨコちゃん、もう行っちゃったんですか」

お昼休み、1年1組の休憩室に差し入れを持ってきた山田真耶が残念そうに言った。

用意してきたのは二組で開催されている中華喫茶のテイクアウトメニューだ。アイリスは品書きの中から中華まんを選ぶと美味そうに頬張り、セットの飲茶で流し込んだ。

「うむ。アリーナでな、『みつるぎ』社が提供した新装備のテストをするらしい」

「忙しいですねえ。わざわざIS学園いすがくえんでしなくとも良かったのに」

「上司どのがご執心のようでの」

「デュノア社長がですか？」

「なんでもシャルロットにうってつけの装備らしい」

「そういうことでしたか。でもシャルロットさんはともかく、一夏くんもいないのはどういう経緯いきわづらひなんですか？」

「無理くり連れ出されそうになったシャルロットを庇いだてして社長の逆鱗さかきりに触れたのだ」

「あー……」

「シヨコラータを使って叩きのめすと息巻いておったわ。シャルロットも巻き込もうとしておったが、あやつは一夏にぞっこんじやろう？」

「それも不満の種らしく、やいのやいのと騒いでおつての。今ごろ一夏とシャルロットを相手に折檻試合せきげんしあひでもさせておるのじやろう」

「はあ、お父さんですねえ」

「アルベール氏といえは」

アイリスと同じく飲茶を飲み干したセシリアも、事情を知っているふうに話に加わる。

「業界内でもやり手の経営者と伺っておいりましたのに、身内事に関しては脇があまりよゆうでしたわね」

「そうですねえ、傾きかけた会社も最近は持ち直したってシヨコちゃん言ってたんですけど」

「親類関係はまだまだ予断を許さぬということか」

「なればこそ、シャルロットさんの気持ちによりそってあげられたらよろしかったのですわ」

「そこはほら、お父さんとしてはまだ認めたくないんじゃないでしょうか」

「ふん。健在に過ごしておるのに贅沢な悩みよ」

「ですわね」

「お、お二人とも手厳しいですね」

「シャルロットもシャルロットじゃ。親の無体など撥ね退ければいいじゃろうに」

「学年別トーナメントの実績もおありですし、あとはお気持ちしだいですものね」

「し、しかし、そうもいかないと思いますよ。シャルロットさんってご親族からけっこう大変な目にあって……」

と、真耶の言いかけた言葉が途切れた。シャルロットの事情に口を滑らせたからではない。

目の前の二人とも、両親がすでに故人であり、セシリアに至っては親族から財産の無心をされそうになったことを失念していたのだ。

出しかかった話題を飲みこむべく下手な咳ばらいをする。

「んんっ……。と、ところで、シヨコちゃんは何か言っていますんでしたか？ ジブちゃんも居合わせていたんでしよう？」

「前から気になっていたんですが山田先生の付けるニックネームってラブリー過ぎじゃありませんこと？」

「それはその、学生時代のノリといますか」

「であればシヨコラータは同期と違ってしっかりしておるの」

「遠回しにわたしデイスられてませんか？」

「気のせいですわ」

「なんにせよ、騒動の詫びに定価の三倍で飲食代を払っておったり、同期の期待には応える、などと言っておったな」

「同期の期待、ですか」

「ジブ ril もあやつを認めておったでな」

ふうん、とセシリアは口元に手を当てて思い返した。彼女が親しくしているイギリスの実力者『女伯爵』カウンテスの口からもシヨコラータの名前は聞いたことがある。内外に知れた実力者二人の口に上るだけの腕はあるのだろうか。

しかし期待に応えるとはどういう意味だろう。

「新装備のテストやシャルロットさんの事情を含めてのことでしょうか。山田先生、シヨコラータさんの意図が分かりますか？」

「うん。シヨコちゃん、ボケーっとしていて実は周りが見えているタイプですからね。セシリアさんが挙げた他にも、一夏くんのこととか、いろいろ見極めようとしているのかも」

「実際のところ、どうなのじゃ？ シヨコラータの実力というのは」

「わたくしも気になりますわ。なんでも『フランスの雪風』という異名をお持ちだと聞き及んでおりますが」

「そうですねえ……」

山田はほっぺに人差し指を置いて、可愛らしいしぐさで、んん、と考えをまとめると、

「白くて古くてあんまり強そうな感じはしないんですけど、ぜんぜん勝てる気がしない相手でしたね」

「教師としてその説明はどうなのじゃ」

「もう少し具体的におっしゃっていただけませんか？」

「あつ、すみません……。えと、白いっていうのはシヨコちゃんの機体のカラーリングで、古いっていうのは第一世代機をまだ現役で使っていて、だから初見だと見劣りしちゃうってことなんです」

「わざわざ第一世代ロートルを使っているのに強いというのか？」

「特別機ではないんですけど、相性がいいのかシヨコちゃんぴったりフォーム、ソフトに形態移行しすぎているんです。だから普通のパイロットにはできない芸当もできちゃうんです」

「なるほど、白くて様々な動きを見せるから雪風と呼ばれるんですね」
「あ、それだとちよつと足りないですね」

セシリアとアイリスが同時に首をかしげた。

ほら、と真耶は、

「雪風って、幸運と不敗の代名詞じゃないですか。そこがシヨコちゃんズバリなんですよ」

さも自然な口調で訂正を入れる。が、アイリスとセシリアには雪風にそんな意味があるとはまったく思えない。

「スノー・ウインドにそんなニュアンスはございませんよ?」

確認までに尋ねたセシリアの当然の疑問にも、

「ノー、ですよセシリアさん。雪風は雪風なんです」

訳の分からない返答に、日本人でない二人の疑問は一層膨らむのだった。



「でやあああ!!」

一夏の気合が空を駆けた。

振り下ろされる『雪片式型』の白刃。それをシヨコラータの純白のISが鉛色の得物でもって受け止める。

攻め手は一夏の【白式】、その第二形態の【雪羅】だ。鋭角な切込みから怒涛の追撃の剣が閃き、息もつかせぬ攻勢をしいている。

それを捌くのは、【白式】よりもさらに白い機体を駆るシヨコラータだった。ひよいひよいと受け、躲し、間合いを取って、

「そこだつー!」

スキを突いたのシャルロットの直接火砲支援ダイレクトカノンサポートによる追い打ち、すらも風を相手にしているように捉えどころなくよけられてしまった。

「クソツ、なんなんだコイツ!?! 見た目はただのラファールみたいなのにー!」

「見た目に惑わされないで一夏!」

攻略の糸具が見いだせずいったん間合いを取る一夏に、シャルロットが側によって声をかけた。

「たしかにシヨコラータさんの機体は最初期のラファールだけど、中身はまるで別物なんだ」

「初期型!?! それに、違うって?」

「ラファールは、リヴァイヴ、カスタム、カスタムⅡと改良してきているでしょう。それだけ基本設計が優れているんだよ。あれはその中でもアーリータイプ、まだ何色にも染まっていない真つまっさくら新なラファールなのさ」

「お嬢様の解説中にどーん」

固まっている二人に向けシヨコロータが発砲してきた。剣と銃がハイブリットしたような鉛色の武器だ。その形状とカラーリングに一夏は見覚えがある。

「トミーの剣、銃じゃないか!?!」

「そだよ。もともとウチの試供品だもん」

勝手知ったると言わんばかりの射撃が正確無比に二人を襲う。

シャルロットは左腕に装備しているシールドをかざし一夏をかばいながら防御に徹した。

「シャル!」

「大丈夫。いいかい一夏、あれはただの旧式ロトルじゃない。一夏の【白式】と同じ、二次移行セカンドシフトを果たしているんだ」

「それって、操縦者に合わせて機体に変化するっていう」

「そう。名前を【ラファール・ド・ネージュ】、日本語で言うなら【雪風】って意味だけど」
「!」

ゾク、と一夏の背中に悪寒が生じた。

その名前を聞いたのは昔、友人とのたわいのない会話のなかだったろうか。最強だなんだと男の子らしい話題の中で浮かび上がった、伝説と言っても過言ではないその勇名。

自分はいま、その【雪風】を相手にしているのだ。

「なじみ深いんだってね? 日本人にはさ」

シヨコロータが射撃をきりやめて突撃してきた。

特段、機動性が高いわけではない。少なくとも一夏がこれまで対戦してきたISと比べれば普通の部類だ。

ならば名前に気圧されてたまるかと、一夏が思い切って前に出る。
「シャル、援護を頼む!」

「正面からじゃダメだよ一夏!」

「任せろっ、この『雪羅』なら!」

一夏は左腕の多用途武装をクローモードにし、掌をいっぱい広げ盾代わりにかざして迎え撃った。

『雪片式型』と同じビームブレードとなるこの『雪羅』であれば相手の攻撃を防ぎつつ逆襲できる。

「わお、それ無理」

あっけなくシヨコラータの軌道が変わった。

元のコースにミサイルを残したまま。

「背部バインダーの『小型ミサイル』だ!」

その威力を知るシャルロットがアサルトライフル『ヴェント』で弾幕を張り、弾を撃ち尽くすと同時にあわやというところで撃墜する。

と、予想外の爆煙が広がり二人を覆いつくした。

「煙幕!? 視界が!」

「一夏、いったん下がろう!」

「判断遅いよ」

再びの爆発が黒煙もろとも二人を吹き飛ばした。

「うわああああ!」

悲鳴とともに散り散りになる一夏を左視界の端に、シャルロットは何が起きたのかを判断した。

(二発目の『小型ミサイル』? フルド・ネージュ 一発目の後ろに遅れて? こっちが本命だったのか!)

見れば、シヨコラータが一夏に狙いを定めている。『グロリー・シーカー 剣銃』を左手に振り上げ今にも切りかからんばかりだ。

「させないっ、……!?!」

牽制にとシャルロット得意の『ラビッド・スイッチ 高速切替』によって呼び出しされたアサルトカノン『オーブン ガルム』が、展開のさなかに雲散霧消する。

「しまった!」

シヨコラータの右腕に不格好に搭載された『ノ 装備展開妨害装置』がこちらを向いていた。シャルロットの動きが読まれていたのだ。

「意外。ちゃんと動くんだ、コレ」

心底予想外なりアクションを眩くと、これ幸いと雪が舞うように機体を回転させ、遠心力を唸らせた一刀を一夏にお見舞いした。

「がふっ……い！」

直撃。

一夏の身体をくの字にへし曲げ、深々と斬撃が決まる。

が、

「墜ちないか」

一夏が何とか持ち上げた『雪片式型』が、押し負けながらも致命傷を救った。学園アリーナのグラウンドに斬り落とされ、ダメージですぐには動けない状態だが、いまだ健在だ。

やるじゃん、とシヨコラータは素直に感心する。

「もう一撃かな？」

手ごたえはあるが流石に二次移行機【白式・雪羅】だ。一発KOとまではいかない。それに、なかなかどうして操縦者も根性があるらしい。『小型ミサイル』を受けたショック状態でなおあがくとは。

ならばと銃撃で削り切ろうと銃口を向ける。

しかしそうもいくまい、と思った通りのことが起こった。

横合いからシャルロットが突貫してきたのだ。

「ご執心だね、お嬢さま」

「……っ！」

シヨコラータの深^{ダーク・グリーン}緑の瞳がシャルロットを射すくめる。

だが歯を食いしばり気をはいて恐れを振り払ったシャルロットは、

シールドをかざしたまま体当たりを決行。

それを、シヨコラータは、『装備展開妨害装置』をシャルロットに向けた姿勢で、シャルロットの速度に合わせて後退した。

「こ、これじゃあ……い！」

「シールドで隠した裏で『高速切替』かな」

「——だ、からってええええ！」

たいせつな人を救うために、敢えてシャルロットは誘いに乗った。

『高速切替』を使ってショットガン『レイン・オブ・サタデイ』を呼び出し。

案の定『装備展開妨害装置』がブレイク。

されてもなお、近接ブレード『ブレット・スライサー』を呼び出し、再びブレイク。

「連射もきくんだ。使えるね、癪だけど」

「ラファール・リヴァイヴ・カスタムⅡ」が手を変え品を変え、タイミングも変えて生み出す装備を、「ラファール・ド・ネージュ」は『装備展開妨害装置』の有用性に舌打ちしながら事もなげに打ち消していく。

重ねる数が10を超え、15を超え、それでもシャルロットはあきらめない。

そして最後のとおき、パイルバンカー『灰色の鱗殻』が呼び出された瞬間、ついに『装備展開妨害装置』が止んだ。

「やばっ」

都合、19回目。シャルロットの機体が基本装備いくつか外してまで増やした拡張領域でなければとつくに打ち止めとなっていたはずである。

「いまだ!」

シャルロットは自機の四基の高出力マルチウイングスラスタと二基の小型推進翼が、悲鳴を上げるほどの出力を噴かせて突貫した。

「だああああ!!」

「ち」

シヨコラータが振り下ろす『剣銃』。それをシャルロットはシールドで防ぎ、がら空きの横っ腹めがけて『灰色の鱗殻』をぶちかます。

決まった!

と思わせる打ち込みの衝撃が、無い。

「ウソ、でしょ……?」

『灰色の鱗殻』の放つ杭を、シヨコラータは素手でつかみ取ったのだ。

「——強くなったね、お嬢様」

半ば放心状態のシャルロットに、シヨコラータは称賛を送る。

感情がのっぺりした顔にはあらわれないが、本心だった。

『**装備展開妨害装置**』による妨害をいくら続けてもくじけなかったこと。機体の機動力を限界まで引き出せていること。

そして、自分に一撃を入れられるほど、フランスにいた頃より見違えていること。

「彼の、おかげかな?」

シヨコラータのいじわるそうな笑み。

その背中から、風雪が広がるように『**小型ミサイル**』が幾筋も広がった。

狙いはシャルロットへではなく、

「まさかっ!?!」

「私からの激励ってことで」

グラウンドでなんとか立ち上がった一夏に向けられていた。

「こ……のっ!」

一夏は荷電粒子砲『**月穿**』を呼び出し撃ち落とそうと連射する。

「ちくしょう、もつと練習しとくんだったぜ!」

射撃武器になじめず、おぎなりにしていた腕では迫りくる吹雪に太刀打ちできなかった。

あれだけの攻撃を受けては完全にオーバーキルだ。

だがもはや迎撃も間に合わない、一夏は肩部のウイングスラスターで身をかばい両腕をクロスし伏せて防御の体制をとった。

「一夏ッ!!」

シャルロットの悲鳴。

と同時に、彼の名を呼ぶ声が重なった。

誰だ? と顔をあげる一夏の目の前で、『**小型ミサイル**』に立ち向かうミサイル群が彼の後ろ頭上から広がった。

「な、なに!?!」

次々と相殺される爆発のさなか、後方を振り返ると、

「簪、さん……?」

透き通った水色のISに身をつつんだ、同じ水色の髪をした眼鏡の少女。先ほどまで喫茶店で執事一夏のお客様対応をされていた、引つ

込み思案な更識簪が、そこにいた。

彼女の目の前には空中投影型の球状スフィアキーボードが浮かんでいる。先ほどのミサイルをマニュアル誘導で迎撃させたのだ。

そんな稀代の英才は、

「き、来ちゃった」

その辣腕にそぐわぬ戸惑いをみせて、一夏の困惑の色を深めさせた。

70. 口に出せない者たちと、口から嘖き出たモノ

(うわ、コイツこんな顔もしやがんだ)

笑顔の仮面の下で、巻紙礼子は情味豊かにデュノア社長をこき下ろした。

彼、アルベール・デュノアは、女尊男卑の世において例外的に男前である。

敏腕経営者、ナイスミドル、現代社会の輝ける漢。

そんな評判の当人が、

「んふ、むふふ、ふぬふフフ……」

などと鼻をひくつかせて、押し殺せないこみ上げる笑みをボトボトと漏らしている顔は若干どころではなく異様だった。

理由は眼前の試合。

IS学園第3アリーナを貸しきっての新装備運用試験、という名目の、単なる娘シャルロットへの折檻と織斑一夏への当てこすりだった。

お父さんの気持ちを代行させられているのは、自社の専属試験操縦者シヨコラデ・シヨコラータ。

実力者の無駄遣いと言っても過言でない試合内容は、しかしながら社長バにとって嬉しい誤算が含まれていた。

一夏を蹴散らしたことで、新装備ノイズが意外に使えることでもない。シャルロットが見違えるほど上達していることである。

適当なところであしらわれていればよかったものが、まさかシヨコラータの攻撃をしのぎ切り反撃を撃てるとは思ってもよらなかった。

仕事柄、感情を表にあらわさないアルベールとしても、こらえきれない感慨だったのだ。

(まあ、コッチは新装備ノイズの実用性を示せたからいいけどよ)

礼子は一息つき、内心安堵する。

デュノア社の新商品フェアブルの商談を取り付けてこい、などと上からお達しがあったときは「顔なじみでもない自分に何やらすんだ、ふざけんな！」と思ったが、見せ札に配られた装備展開妨害イズがうまくハマったらしい。

「いかがですか、社長。お宅の娘さんとあの装備であれば、きっとさらなる高みを目指せると思います」

「ここぞとプツシュ。」

アルベールは、フン、と喜色まじりに鼻をならした。

「……後ほど、『みつるぎ』社から正式な依頼を送るがいい」

「フィツシュ！」

と礼子の笑みが深くなる。

「それはもちろんですわ。今回は私のような不束者ふつつかもものがでしゃばる格好になってしまいました。弊社としては変わらず貴社とのつながりを大事としておりますので、ご納得いただけようなりクエスト・フォームの作成を約束いたします。つきましては、私どものお気持ちを添える形で、現有の装備をそのままお使い頂いて……」

ズドドン！

と重く響く轟音が礼子のクロージング・トークをかき消した。

「なんだ!?!」

アルベールにつられて試合会場を見れば、一夏の前で爆光の花が咲き乱れている。シヨコロータが投じたミサイル群が、何者かが放った迎撃ミサイルに相殺されているのだ。

「誰だヤツは！……どこの差し金だ!?!」

せつかくいい気分だったアルベールの顔に青筋が立った。あと少しで織斑憎たらしいあんちくしょう一夏をドカーン！できたのだからなおさらだ。

いいところだったのに……！と巻紙礼子も舌打ちしつつ乱入者を確認する。

「あれは……、【打鉄・式式】？　ということは、日本のIS代表候補性、更識簪あきしですね」

「更識だど？　あの更識だというのか？」

「ええ。本校の現生徒会長、更識楯無。の、妹さんですね。噂によれば、彼女も織斑一夏にこだわりのある様子だとか」

「アレもか！　なんなのだあの小僧は、いったいどんなフェロモンを分泌しておるのだ！　ええい、シヨコローター！」

アルベールはインカムでシヨコロータに怒鳴りかける。

「なにうるさいな。インカムじゃなくても聞こえるよ、社長」

「新装備のテストはもういい！ あのイレギュラーを織斑一夏ともどもたたきつぶせ！」

「えー。だいたい確認取れたんだから、もーいーじゃない。一夏くんも、馬の骨にしてはわりと骨太みたいだし」

「良くない！ 社長命令だ、やれ！」

「その『やれ』って言いかた、殺意まんまんだよー。まったく大人気な——」

ブツン、とアルベルは一方的に通話を切った。

言われんでもわかっとなるわ！ と出かかった言葉を、ハツと歯を食いしばって喉に押し込む。

——わかっとなる、というのは何に對してなのか。

殺意まんまんなんだということだ。そうに違いない。間違っても、どこの馬の骨織斑一夏を認めんでもない、などということは決して無い。

（そうだ。そんなことはない。シャルロットの相手は、もつと相応しい男がいるはずだ）

そう自分を説得するように語りかける。

例えば、そうだな、脳裏に相応しい男の候補を浮かび上がらせて……、浮かばない。

浮かぶはずがない。

女尊男卑のこの世の中で、音に聞こえるような男の名前など、そういういるはずが……、

「……クソッ」

よりにもよって出てきた名前が、織斑一夏ぐらいしかあがらない自分が、よりいっそう腹立たしかった。



シヨコラータはため息をついた。

「と、言われたけど、どうしよっかな」

目の前で苦々し気な顔をしているシャルロットにふっしてみる。

「社長命令ならば、従うのが社員ではないですか？」

「理屈はね。お嬢様はどーする？ 一夏くんの肩をもつ？」

「もちろんです。子どもには、反抗期という特権があります」

「自立の証明か。おとーさんは悲しむよ」

「あのひとは——」

「悲しまない？ そうかな。わざわざフランスからやってきて、あやしい新装備を試してみたり、一夏くんが大嫌いなのは誰のためかな？」

「ぼ、僕はそんなこと一言も頼んでいません！」

「そーだね。社長、大事なことは口にしないもんね。でも、一夏くんを助けたあの子だって、頼まれてもないのに飛び入り参加」

見れば、更識簪がかいがいしく一夏の様子を確認していた。

直に機体に触れて状態を調べたり、変に近い距離感で彼と言葉を交わしたり。

大丈夫？ ごめんなさい、見ていられなくて

いいんだ、俺のほうこそ、みつともない姿を見せちゃって

一緒に戦わせてほしいの、あなたの隣で。ダメかな？

もちろん歓迎だよ。キミが側にいてくるなんて、心強い。

一夏君……！

簪さん……

などという言葉が交わされて、いないにも関わらず、脚本・演出シヨコラータの声真似が無駄に快演した。

のせられたシャルロットはボルテージがレッドゾーンに急上昇。

「なーんてね。いー雰囲気じゃん？」

「あ、あいつ……！ 急にあらわれて一夏になれなれしく……！」

「一夏くんのが心配みたいだね」

「僕だつてそうです！」

「そう言った？」

急な切りかえしに、シャルロットが詰まる。

「一夏くんに気持ちを伝えた？」

「それは……」

「行動でほのめかしただけでしょ」

「う……」

「お父さんソツクリ」

シャルロットは閉口する。

「私はわかるよ。お嬢様の気持ち。デュノアさんちとは付き合い長いからね。でも、他の人たちは口にしないとわかんないの。察してつて、それはわがまま」

「……素直に、なれってことですか？」

「なれないなら、別の手段しかないね」

「それは？」

「んー、わかんない？」

シヨコラータは更識簪を見つめてみせる。押しかけ女房がごとく一夏を介抱する彼女の姿を。

「わかりません、どうすればいいんですか!?! 教えてください!」

「わかんないかー」

そっかー、とシヨコラータは盛大に苦笑した。

目の前に良い見本があるというのに、この娘ったら気がつかないのかー。

（社長といい、お嬢様といい、デュノア一族はどうしてこう、めっちゃできるしモテるクセに大事なところがパツパツパーなんだろうね）

シヨコラータは純情ちゃんから距離を離れた。行くはアリーナの上天。眼下に睥睨するその位置で、

「うりゃ」

一夏たちに向けて発砲する。

「うおっ!?! この、まだやる気なのか!」

「大丈夫、私がサポートする。一緒に頑張ろう、一夏!」

「ツ……!?! ど、どういうことですか、シヨコラータさん!」

三者三様、一つに向けられた敵意を、シヨコラータは不敵に受け止める。

「ゲーム・コンティニューだよ、後輩諸君。お嬢様には特別に景品トロフィーを付けよう。その中身は」

シヨコラータのIS【ラファール・ド・ネージュ】が、得物の剣銃『グローリー・シーカー』を掲げて宣言した。
「私に勝てば教えてあげるよ！」

◇

たった一機の純白のISが、三機を相手に大立ち回りをしている最中。

アリーナの観客入場口付近で会場をみる影があつた。
ダリル・ケイシーだ。

(あんの……い… なにしにきやがった、オータムの姉御！)

眼下の観客席にいる巻紙礼子をにらみつけ、歯噛みするダリルに普段の高慢な余裕はない。

学祭とかかかったりーぜ、とサボりにアリーナへ寄ってみれば、何者たちかの試合が行われている。しかもあるうことかダリルの苦手な知り合いがいるのだ。

アレが動くからには何かがある。だが、彼女の仲間の元・同輩からは何の連絡も入っていない。

(アイツの独走か？ 連絡ミスか？ ……まさか)

ダリル自身が、組織から軽視されてしまったのだろうか。

わからなくはない。【銀の福音】シルバリオ・ゴスベル暴走事件の際、組織がとった行動にダリルは不満をぶつけていた。

なにが気に入らなかつたのか今の自分でもわからないが、ともかく面白くなくてダリルの叔母であるスコール・ミューゼルにも噛みついた。

そのせいで信用を傷つけてしまったのかもしれない。IS学園関連のメンバーなら二人も補充されているから、自分の替わりはいると考えられたというのもありえる。

確かなことは、今この事態に際して、ダリルにできることは何も無いということだ。

「チツ、いけ好かねえぜ」

「——なにがいけ好かないんですか、ダリル先輩？」

ダリルの胸が跳ね上がった。

後ろをとられた？ このオレが？ こんなところ IS学園で!?

身構えながら振り返る先には、

「……なんつう恰好してんだよ、ジャーマンコンビ」

トミーとラウラが、燕尾服とメイド服という場違いファッションで連れ立っていた。ついでにトミーは片眼鏡という執事風味だ。

「1年1組の出し物だ。あまり接客に携われなかつたがな」

「ドイツ国籍ではないですけどね、僕」

訓練はさせてもらいましたが、と注釈を入れるトミーと、籍を入れてもいいのだがな、というラウラに、ダリルは内心腑に落ちた。

オールド・ファッション 反女尊男卑主義組織の秘蔵つ子と、シュヴァルト・ツェ・ハーゼ ドイツ軍特殊部隊の少佐であれば、気配を消して近づかれたのにも納得がいく。

……いや、いくか？

「おう、なに忍び足でやってきやがった。このオレになにか用か？」

「いえ。ダリル先輩にはなくて」

「アリーナにいる巻紙礼子という女に、だ」

ラウラの返答に、ダリルはどうリアクションすればいいのか戸惑った。

「へえ、そりゃあ、どうかしたのか？」

「気になるのか？」

「まあ、な」

「なぜだ」

ラウラの喰いつきにわずらわしさを覚え、

「ひよつとして、お知り合いなんですか？」

トミーの問いかけに、ぐ、と口ごもった。

我ながらへたくソめ、とダリルは自嘲しつつ、半ばやけっぱちに口答える。

「だったとしたらどうするよっ」

「うーん、どうしましょうっ？」

「なんだよそりやあ!？」

「いえ、こちらはまだ疑惑段階で見えておりました」

「疑惑? なんの」

「学年別タッグトーナメントの裏で現れた襲撃者ではないか、とな」

「——ハッ」

ダリルは乾いた笑いを浮かべた。

なんだよコイツら、そこまで嗅ぎつけてやがったのか。と両手を上げてサレンダーなバンザイ気分だ。

——ああ、そういえばこの一年坊主は特殊な眼をもつていやがったな。

片眼鏡をしてオッドアイ風になっているトミーの目を見て思い至った。

これではもう言い逃れもできまい。

(オータムの姉御め、ざまあみやがれ)

ダリルは豊満な胸の内が悪態をつく。

テメエの落ち度なのだからテメエで落とし前をつけやがれ。

もはや底い立てをする気も起らず、この事情をぶん投げた。

「うくん、でも考え過ぎでしょうか?」

「あん?」

「ダリル先輩は嘘をついているようには見えませんし……」

「確かにな」

「ちよっ、おい、お前らオレの何をみて言ってんだよ!」

「知り合いかと尋ねられて露骨にうろたえているうえに、学園襲撃者ではないかという疑惑にそうまで一笑に付されては、な」

「んあ」

ダリルの口がポカンと開いた。

あれ、これ乗り切れんじやね?

イヤイヤ、でもいいのかそれで! 結局オレと姉御のリンクは疑い

晴れて無えじゃねえか。

「マテや、なんでオレがその巻紙礼子の知り合いに落ち着いてやがる。だいたいソイツがテロリストだったらどうすんだ。オレもグルって

ことになるんだぜ？」

「違くないが……、そんな間抜けを晒すのか？ 先輩」

「うお、ボーデヴィツヒから先輩呼ばわりは鳥肌立つな」

「どういう意味だ」

「まあまあ。僕もダリル先輩がテロリストになるとは思えませんよ。少なくとも今はまだ」

「勝手に頭っから信用すんじゃないやねえっ。どんな理屈でモノ言ってやがる」

「だってダリル先輩、負けっぱなしで終われるタイプじゃないでしょう？」

「そりゃあそうだが？」

「だからテロリストだったとしても、僕とアリスにリベンジするまでは行動に起こさないと思うんですよ」

「――」

今度はダリルの目が真ん丸に開いた。

よくわからない心の靄もやの正体が、分かった気がした。

トミーとアリスのペアを相手に舐めプして、返り討ちにあったあのブザマな試合。

思えばモヤモヤはあの後からおきていた。

「アーリーから聞いていますよ。ダリル先輩とフォルテ先輩、僕とアリスに負けてからチョー練習してるのサ、って」

トミーが肩をすくめて楽しそうに言う。

あーあー、なるほど。オレがマジになって特訓してんの、この一年坊に漏らしてやがったか。

「……あのイタコウババアめ」

ハ、

とダリル・ケイシーは笑った。

レイン・ミューゼルという、彼女が属する亡国機業のコードネームも含めて笑った。

最近の組織の方向性。

性に合わないやり方のズレ。

軽視されているのではないかという疑惑。

奥底に秘めている世界への悲嘆。

にもかかわらず、

近ごろ変に殊勝な自分。

アリーシャ・ジョゼスターフ
現・世界最強との練習で得た確かな手ごたえ。

前より深まった恋人との仲。フォルテ

それらはすべて、ようするに、

(なんてこった。オレ、すつげえ負けず嫌いなだけじゃねえか)

「ハハハハハハハハハハ……!!」

ダリルは大声で大笑いした。

会場中に響き渡るほど大笑いした。

後輩たちが戸惑いを見せるが、知ったことか。

アリーナのやつらも、試合を止めてオレを見てくるが、知ったことか。

オータムの姉御がアホらしい仰天顔ツラをかましてくるが、知ったことか!

だってよ、つまりはだ、このダリル・ケイシーの抱いた悩みは、一つの敗北の雪辱を晴らすためならば、一切合切まるつとまとめて棚に上げられちまう程度の、そんなモノでしかないというのだから……!

「ハ——ッ、はあー!」

ひとしきり笑い終えると、ダリルはアリーナのやつらに向けて宣言した。

「おうおうおうっ、せつかくの学園祭に模擬戦なんぞをやってるお前からアツ!!」

周囲の視線がダリルに集まる。

「オレらも混ぜろや」

え、

という間の抜けた面々に、ダリルはもうひと笑い喉を鳴らした。